漱石全集
第一巻
吾輩は猫である

明治三十九年三月撮影（於千駄木書齋）

吾輩は猫である

三八、一、一――三九、八、一

一

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

どこで生れたか頓と見當がつかぬ。何でも薄暗いじめ〳〵した所でニャー〳〵泣いて居た事丈は記憶して居る。吾輩はこゝで始めて人間といふものを見た。然もあとで聞くと、それは書生といふ人間で一番獰惡な種族であつたさうだ。此書生といふのは時々我々を捕まへて煮て食ふといふ話である。然し其當時は何といふ考へもなかつたから別段恐ろしいとも思はなかつた。但彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフハ〳〵した感じが有つた許りである。掌の上で少し落ち附いて書生の顏を見たのが所謂人間といふものの見始めであらう。此時妙なものだと思つた感じが今でも殘つて居る。第一毛を以て裝飾されべき筈の顏がつる〳〵して丸で藥罐だ。其後猫にも大分逢つたがこんな片輪には一度も出會した事がない。加之顏の眞中が餘りに突起して居る。さうして其穴の中から時々ぷう〳〵と烟を吹く。どうも咽つぽくて實に弱つた。是が人間の呑む煙草といふものである事は漸く此頃知つた。

此書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つて居つたが、暫らくすると非常な速力で運轉し始めた。書生が動くのか自分丈が動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が惡くなる。到底助からないと思つて居ると、どさりと音がして眼から火が出た。夫迄は記憶して居るが、あとは何の事やらいくら考へ出さうとしても分らない。

ふと氣が付いて見ると書生は居ない。澤山居つた兄弟が一疋も見えぬ。肝心の母親さへ姿を隠して仕舞つた。其上今迄の所とは違つて無暗に明るい。眼を明いて居られぬ位だ。はてな、何でも容子が可笑しいと、のそ〳〵這ひ出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

漸くの思ひで笹原を這ひ出すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つて、どうしたらよからうと考へて見た。別に是といふ分別も出ない。暫らくして泣いたら書生が又迎ひに來てくれるかと考へ附いた。ニャー、ニャーと試みにやつて見たが誰も來ない。其内池の上をさら〳〵と風が渡つて日が暮れかゝる。腹が非常に減つて來た。泣き度くても聲が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所迄あるかうと決心をして、そろり〳〵と池を左に廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに這つて行くと、漸くの事で何となく人間臭い所へ出た。此所へ這入つたらどうにかなると思つて、竹垣の崩れた穴からとある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もし此竹垣が破れて居なかつたなら、吾輩は遂に路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭とはよくいつたものだ。此垣根の穴は今日に至る迄吾輩が隣家の三毛を訪問する時の通路になつて居る。偖邸へは忍び込んだものゝ、是から先どうして善いか分らない。其内に暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降つて來るといふ始末で、もう一刻も猶豫が出來なくなつた。仕方がないから兎に角明るくて暖かさうな方へ方へとあるいて行く。今から考へると其時は既に家の内に這入つてたのだ。こゝで吾輩は彼の書生以外の人間を再び見るべき機會に遭遇したのである。第一に逢つたのがおさんである。是は前の書生より一層亂暴な方で、吾輩を見るや否や、いきなり頸筋をつかんで表へ抛り出した。いや是は駄目だと思つたから、眼をねぶつて、運を天に任せて居た。然し

ひもじいのと寒いのにはどうしても我慢が出來ん。吾輩は再びおさんの隙を見て臺所へ這ひ上がつた。すると間もなく又投げ出された。吾輩は投げ出されては這ひ上がり、這ひ上がつては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶して居る。其時におさんと云ふ者はつくづくいやになつた。此間おさんの三馬を偸んで此返報をしてやつてから、やつと胸の痞が下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、此家の主人が騷々しい何だといひながら出て來た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けて、此宿なしの小猫がいくら出しても出してもお臺所へ上がつて來て困りますといふ。主人は鼻の下の黑い毛を撚りながら吾輩の顏を暫らく眺めて居つたが、やがてそんなら内へ置いてやれといつたまゝ奥へ這入つて仕舞つた。主人は餘り口を利かぬ人と見えた。下女は口惜しさうに吾輩を臺所へ抛り出した。かくして吾輩は遂に此家を自分の住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は滅多に吾輩と顏を合はせる事がない。職業は教師ださうだ。學校から歸ると終日書齋に這入つたぎり殆ど出て來る事がない。家のものは大變な勉强家だと思つて居る。當人も勉强家であるかの如く見せて居る。然し實際はうちのものがいふ樣な勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を覗いて見るが、彼はよく晝寢をして居る事がある。時々讀みかけてある本の上に涎をたらして居る。彼は胃弱で皮膚の色が淡黄色を帶びて彈力のない不活潑な徴候をあらはして居る。其癖に大飯を食ふ。大飯を食つた後でタカヂヤスターゼを飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ讀むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。是が彼の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々考へる事がある。教師といふものは實に樂なものだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんなに寢て居て勤まるものなら猫にでも出來ぬ事はない

と。夫でも主人に云はせると教師程つらいものはないさうで、彼は友達が來る度に何とかかんとか不平を鳴らして居る。

吾輩が此家へ住み込んだ當時は、主人以外のものには甚だ不人望であつた。どこへ行つても撥ね附けられて相手にしてくれ手がなかつた。如何に珍重されなかつたかは、今日に至る迄名前さへつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出來得る限り吾輩を入れてくれた主人の傍に居る事をつとめた。朝主人が新聞を讀むときは必ず彼の膝の上に乘る。彼が晝寢をするときは必ず其背中に乘る。是はあながち主人が好きといふ譯ではないが、別に構ひ手がなかつたから已むを得んのである。其後色々經驗の上、朝は飯櫃の上、夜は炬燵の上、天氣のよい晝は縁側へ寢る事とした。然し一番心持ちの好いのは夜に入つてこゝのうちの子供の寢床へもぐり込んで一所にねる事である。此子供といふのは五つと三つで、夜になると二人が一つ床へ入つて一間へ寢る。吾輩はいつでも彼等の中間に己を容るべき餘地を見出してどうにか、かうにか割り込むのであるが、運惡く子供の一人が眼を醒ますが最後大變な事になる。子供は――殊に小さい方が質がわるい――猫が來た〱といつて夜中でも何でも大きな聲で泣き出すのである。すると例の神經胃弱性の主人は必ず眼をさまして次の部屋から飛び出してくる。現に先達て抔は物差で尻ぺたをひどく叩かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を觀察すればする程、彼等は我儘なものだと斷言せざるを得ない樣になつた。殊に吾輩が時々同衾する子供の如きに至つては言語道斷である。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋をかぶせたり、抛り出したり、へつゝいの中へ押し込んだりする。而も吾輩の方で少しでも手出しを

しようものなら家内總がゝりで追ひ廻して迫害を加へる。此間も一寸疊で爪を磨いだら、細君が非常に怒つてそれから容易に座敷へ入れない。臺所の板の間で他が顫へて居ても一向平氣なものである。吾輩の尊敬する筋向うの白君抔は逢ふ度毎に人間程不人情なものはないと言つて居らるゝ。白君は先日玉の様な子猫を四疋産まれたのである。所がそこの家の書生が三日目にそいつを裏の池へ持つて行つて四疋ながら棄てゝ來たさうだ。白君は涙を流して其一部始終を話した上、どうしても我等猫族が親子の愛を完くして美しい家族的生活をするには人間と戰つて之を剿滅せねばならぬといはれた。一々尤もの議論と思ふ。又隣の三毛君抔は人間が所有權といふ事を解して居ないといつて大いに憤慨して居る。元來我々同族間では目刺の頭でも鰡の臍でも一番先に見附けたものが之を食ふ權利があるものとなつて居る。もし相手が此規約を守らなければ腕力に訴へてよい位のものだ。然るに彼等人間は毫も此觀念がないと見えて、我等が見附けた御馳走は必ず彼等の爲に掠奪せらるゝのである。彼等は其強力を頼んで正當に吾人が食ひ得べきものを奪つて澄まして居る。白君は軍人の家に居り、三毛君は代言の主人を持つて居る。吾輩は教師の家に住んで居る丈、こんな事に關すると兩君よりも寧ろ樂天である。唯其日々々が何うにか斯うにか送られゝばよい。いくら人間だつて、さういつ迄も榮える事もあるまい。まあ氣を永く猫の時節を待つがよからう。

我儘で思ひ出したから一寸吾輩の家の主人が此我儘で失敗した話をしよう。元來此主人は何といつて人に勝れて出來る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやつて「ほとゝぎす」へ投書をしたり、新體詩を「明星」へ出したり、間違ひだらけの英文をかいたり、時によると弓に凝つたり、謠を習つたり、又あるときはヴイオリン抔をブー〱鳴らしたりするが、氣の毒な事には、どれもこれも物になつて居ら

ん。其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。後架の中で謠をうたつて、近所で後架先生と渾名をつけられて居るにも關せず一向平氣なもので、矢張り是は平の宗盛にて候を繰り返して居る。皆がそら宗盛だと吹き出す位である。此主人がどういふ考へになつたものか、吾輩の住み込んでから一月許り後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわたゞしく歸つて來た。何を買つて來たのかと思ふと、水彩繪具と毛筆とワットマンといふ紙で、今日から謠や俳句をやめて繪をかく決心と見えた。果して翌日から當分の間といふものは毎日々々書齋で晝寢もしないで繪許りかいて居る。然し其のかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。當人もあまり甘くないと思つたものか、ある日其友人で美學とかをやつて居る人が來た時に、下の樣な話をして居るのを聞いた。

「どうも旨くかけないものだね。人のを見ると何でもない樣だが、自ら筆をとつて見ると今更の樣に六づかしく感ずる」是は主人の述懷である。成程詐りのない處だ。彼の友は金緣の眼鏡越しに主人の顏を見ながら、「さう初めから上手にはかけないさ。第一室内の想像許りで畫がかける譯のものではない。昔以太利の大家アンドレア・デル・サルトが言つた事がある。畫をかくなら何でも自然其物を寫せ。天に星辰あり。地に露華あり。飛ぶに禽あり。走るに獸あり。池に金魚あり。枯木に寒鴉あり。自然は是一幅の大活畫なりと。どうだ君も畫らしい畫をかかうと思ふなら、ちと寫生をしたら」「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をいつた事があるかい。ちつとも知らなかつた。成程こりや尤もだ。實に其通りだ」と主人は無暗に感心して居る。金緣の裏には嘲る樣な笑ひが見えた。

其翌日吾輩は例の如く緣側に出て心持善く晝寢をして居たら、主人が例になく書齋から出て來て、吾

輩の後で何かしきりにやつて居る。不圖眼が覺めて何をして居るかと一分許り細目に眼をあけて見ると、彼は餘念もなくアンドレア・デル・サルトを極め込んで居る。吾輩は此有様を見て覺えず失笑するのを禁じ得なかつた。彼は彼の友に揶揄せられたる結果として先づ手始めに吾輩を寫生しつゝあるのである。吾輩は既に十分寢た。欠伸がしたくて堪らない。然し折角主人が熱心に筆を執つて居るのを動いては氣の毒だと思うてぢつと辛抱して居つた。彼は今吾輩の輪廓をかき上げて顔のあたりを色彩つて居る。吾輩は自白する。吾輩は猫として決して上乘の出來ではない。脊といひ毛並といひ顔の造作といひ敢て他の猫に勝るとは決して思つて居らん。然しいくら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に描き出されつゝある樣な妙な姿とは、どうしても思はれない。第一色が違ふ。吾輩は波斯産の猫の如く黄を含める淡灰色に漆の如き斑入の皮膚を有して居る。是丈は誰が見ても疑ふべからざる事實と思ふ。然るに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黑でもない、灰色でもなければ褐色でもない、さればとて是等を交ぜた色でもない。只一種の色であるといふより外に評し方のない色である。其上不思議な事は眼がない。尤も是は寢て居る所を寫生したのだから無理もないが、眼らしい所さへ見えないから盲猫だか寢て居る猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンドレア・デル・サルトでも是では仕様がないと思つた。然し其熱心には感服せざるを得ない。可成なら動かずに居つてやり度いと思つたが、さつきから小便が催して居る。身内の筋肉はむづ／＼する。最早一分も猶豫が出來ぬ仕儀となつたから、不得已失敬して兩足を前へ存分のして、首を低く押し出してあーあと大なる欠伸をした。さてかうなつて見ると、もう大人しくして居ても仕方がない。どうせ主人の豫定は打ち壞したのだから、序に裏へ行つて用をたさうと思つてのそ／＼這ひ

出した。すると主人は失望と怒りを掻き交ぜた樣な聲をして、座敷の中から「此馬鹿野郎」と怒鳴つた。此主人は人を罵るときは必ず馬鹿野郎といふのが癖である。外に惡口の言ひ樣を知らないのだから仕方がないが、今迄辛抱した人の氣も知らないで、無暗に馬鹿野郎呼ばはりは失敬だと思ふ。それも平生吾輩が彼の背中へ乘る時に少しは好い顏でもするなら此漫罵も甘んじて受けるが、こつちの便利になる事は何一つ快くしてくれた事もないのに、小便に立つたのを馬鹿野郎とは酷い。元來人間といふものは自己の力量に慢じてみんな增長して居る。少し人間より強いものが出て來て窘めてやらなくては此先どこ迄增長するか分らない。

我儘も此位なら我慢するが、吾輩は人間の不德について是よりも數倍悲しむべき報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪許りの茶園がある。廣くはないが瀟洒とした心持ち好く日の當たる所だ。うちの子供があまり騷いで樂々晝寢の出來ない時や、餘り退屈で腹加減のよくない折抔は、吾輩はいつでも此所へ出て浩然の氣を養ふのが例である。ある小春の穩やかな日の二時頃であつたが、吾輩は晝飯後快く一睡した後、運動かた〳〵この茶園へと歩を運ばした。茶の木の根を一本々々嗅ぎながら、西側の杉垣のそばまでくると、枯菊を押し倒して其上に大きな猫が前後不覺に寢て居る。彼は吾輩の近附くのも一向心附かざる如く、又心附くも無頓着なる如く、大きな鼾をして長々と體を橫たへて眠つて居る。他の庭內に忍び入りたるものが斯く迄平氣に睡られるものかと、吾輩は竊かに其の大膽なる度胸に驚かざるを得なかつた。彼は純粹の黑猫である。僅かに午を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上に抛げかけて、きらき

らする柔毛の間より眼に見えぬ炎でも燃え出づる様に思はれた。彼は猫中の大王とも云ふべき程の偉大なる體格を有して居る。吾輩の倍は慥かにある。吾輩は嘆賞の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に佇立して餘念もなく眺めて居ると、靜かなる小春の風が杉垣の上から出たる梧桐の枝を輕く誘つて、ばら〱と二三枚の葉が枯菊の茂みに落ちた。大王はくわつと其眞丸の眼を開いた。今でも記憶して居る。其眼は人間の珍重する琥珀といふものよりも遙かに美しく輝いて居た。彼は身動きもしない。双眸の奥から射る如き光を吾輩の矮小なる額の上にあつめて、おめえは一體何だと云つた。大王にしては少々言葉が卑しいと思つたが、何しろ其聲の底に犬をも挫ぐべき力が籠つて居るので、吾輩は少からず恐れを抱いた。然し挨拶をしないと險呑だと思つたから「吾輩は猫である。名前はまだない」と可成平氣を裝つて冷然と答へた。然し此時吾輩の心臓は慥かに平時よりも烈しく鼓動して居つた。彼は大いに輕蔑せる調子で「何、猫だ？猫が聞いてあきれらあ。全てえ何處に住んでるんだ」隨分傍若無人である。「吾輩はこゝの教師の家に居るのだ」「どうせそんな事だらうと思つた。いやに瘠せてるぢやねえか」と大王丈に氣焔を吹きかける。言葉附から察すると、どうも良家の猫とも思はれない。然し其膏ぎつて肥滿して居る所を見ると、御馳走を食つてるらしい、豐かに暮らして居るらしい。吾輩は「さう云ふ君は一體誰だい」と聞かざるを得なかつた。「己れや車屋の黒よ」昂然たるものだ。車屋の黒は此近邊で知らぬ者なき亂暴猫である。然し車屋丈に強い計りでちつとも教育がないから、あまり誰も交際しない。同盟敬遠主義の的になつて居る奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起こすと同時に、一方では少々輕侮の念も生じたのである。吾輩は先づ彼がどの位無學であるかを試して見ようと思つて、左の問答をして見た。

「一體車屋と教師とはどつちがえらいだらう」
「車屋の方が強いに極まつて居らあな、おめえのうちの主人を見ねえ、丸で骨と皮ばかりだぜ」
「君も車屋の猫丈に大分強さうだ。車屋に居ると御馳走が食へると見えるね」
「何おれなんざ、どこの國へ行つたつて食ひ物に不自由はしねえ積りだ。おめえなんかも茶畠ばかりぐるぐる廻つて居ねえで、ちつと己の後へくつ附いて來て見ねえ。一と月たたねえうちに見違へる様に太れるぜ」
「追つてさう願ふ事にしよう。然し家は教師の方が車屋より大きいのに住んで居る様に思はれる」
「箆棒め、うちなんかいくら大きくたつて腹の足しになるもんか」
彼は大いに肝癪に障つた様子で、寒竹をそいだ様な耳を頻りとぴく附かせてあらゝかに立ち去つた。吾輩が車屋の黒と知己になつたのはこれからである。
其後吾輩は度々黒と邂逅する。邂逅する毎に彼は車屋相當の氣焔を吐く。先に吾輩が耳にしたといふ不徳事件も實は黒から聞いたのである。
或日、例の如く吾輩と黒は暖かい茶畠の中で寢轉びながら色々雜談をして居ると、彼はいつもの自慢話を左も新しさうに繰り返したあとで、吾輩に向つて下の如く質問した。「おめえは今迄に鼠を何匹とつた事がある」知識は黒よりも餘程發達して居る積りだが、腕力と勇氣とに至つては到底黒の比較にはならないと覺悟はして居たものゝ、此問に接した時は、さすがに極りが善くはなかつた。けれども事實は事實で詐る譯には行かないから、吾輩は「實はとらう〳〵と思つてまだ捕らない」と答へた。黒は彼の鼻の先

からぴんと突張つて居る長い髭をびり〳〵と震はせて非常に笑つた。元來黒は自慢する丈にどこか足りない所があつて、彼の氣燄を感心した樣に咽喉をころ〳〵鳴らして謹聽して居れば甚だ御し易い猫である。吾輩は彼と近附になつてから直に此呼吸を飲み込んだから、此場合にもなまじひ己れを辯護して益形勢をわるくするのも愚である。いつその事、彼に自分の手柄話をしやべらして御茶を濁すに若くはないと思案を定めた。そこで大人しく「君抔は年が年であるから大分とつたらう」とそゝのかして見た。果然彼は墻壁の缺所に吶喊して來た。「たんとでもねえが三、四十はとつたらう」とは得意氣なる彼の答であつた。彼は猶語をつゞけて「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるが、いたちつてえ奴は手に合はねえ。一度いたちに向つて酷い目に逢つた」「へえ成程」と相槌を打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云ふ。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が石灰の袋を持つて椽の下へ這ひ込んだらおめえ、大きないたちの野郎が面喰つて飛び出したと思ひねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちつてけども、何、鼠の少し大きいぐれえのものだ。此畜生つて氣で追つかけてとう〳〵泥溝の中へ追ひ込んだと思ひねえ」「うまく遣つたね」と喝采してやる。「所がおめえ、いざつてえ段になると奴め、最後つ屁をこきやがつた。臭えの臭くねえのつて、夫からつてえものは、いたちを見ると胸が惡くならあ」彼は是に至つて恰も去年の臭氣を今猶感ずる如く前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻した。吾輩も少々氣の毒な感じがする。ちつと景氣を附けてやらうと思つて「然し鼠なら君に睨まれては百年目だらう。君は餘り鼠を捕るのが名人で、鼠計り食ふものだからそんなに肥つて色つやが善いのだらう」黒の御機嫌をとる爲めの此質問は不思議にも反對の結果を呈出した。彼は喟然として大息していふ。「考げえると詰らねえ。いくら稼いで鼠をとつたつて――一て

え人間程ふてえ奴は世の中に居ねえぜ。人のとつた鼠をみんな取り上げやがつて交番へ持つて行きやあがる。交番ぢや誰が捕つたか分らねえから其たんびに五錢宛くれるぢやねえか。うちの亭主なんか己の御蔭でもう壹圓五十錢位儲けて居やがる癖に、碌なものを食はせた事もありやしねえ。おい、人間てもなあ體の善い泥棒だぜ」さすが無學の黑も此位の理窟はわかると見えて、頗る怒つた容子で背中の毛を逆立てゝ居る。吾輩は少々氣味が惡くなつたから善い加減に其場を胡魔化して家へ歸つた。此時から吾輩は決して鼠をとるまいと決心した。然し黑の子分になつて鼠以外の御馳走を獵つてあるく事もしなかつた。御馳走を食ふよりも寢て居た方が氣樂でいゝ。教師の家に居ると猫も教師の樣な性質になると見える。用心しないと今に胃弱になるかも知れない。

教師といへば吾輩の主人も近頃に至つては到底水彩畫に於て望みのない事を悟つたものと見えて、十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

○○と云ふ人に今日の會で始めて出逢つた。あの人は大分放蕩をした人だと云ふが、成程通人らしい風采をして居る。かう云ふ質の人は女に好かれるものだから○○が放蕩をしたと云ふよりも放蕩をする可く餘儀なくせられたと云ふのが適當であらう。あの人の細君は藝者ださうだ、羨ましい事である。元來放蕩家を惡くいふ人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。又放蕩家を以て自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。是等は餘儀なくされないのに無理に進んでやるのである。恰も吾輩の水彩畫に於けるが如きもので、到底卒業する氣づかひはない。然るにも關せず、自分丈は通人だと思つて澄まして居る。料理屋の酒を飲んだり待合へ這入るから通人となり得るとい

ふ論が立つなら、吾輩も一廉の水彩畫家になり得る理窟だ。吾輩の水彩畫の如きはかゝない方がまし
であると同じ樣に、愚昧なる通人よりも山出しの大野暮の方が遙かに上等だ。

通人論は一寸首肯しかねる。又藝者の細君を羨ましい抔といふ所は敎師としては口にすべからざる愚劣の考へであるが、自己の水彩畫に於ける批評眼丈は慥かなものだ。主人は斯くの如く自知の明あるにも關せず、其自惚心は中々拔けない。中二日置いて十二月四日の日記にこんな事を書いて居る。

昨夜は僕が水彩畫をかいて到底物にならんと思つて、そこに抛つて置いたのを誰かが立派な額にして欄間に懸けて吳れた夢を見た。偖て額になつた所を見ると、我ながら急に上手になつた。非常に嬉しい。是なら立派なものだと獨りで眺め暮らして居ると、夜が明けて眼が覺めて、矢張り元の通り下手である事が朝日と共に明瞭になつて仕舞つた。

主人は夢の裡迄水彩畫の未練を背負つてあるいて居ると見える。是では水彩畫家は無論夫子の所謂通人にもなれない質だ。

主人が水彩畫を夢に見た翌日、例の金緣眼鏡の美學者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと、劈頭第一に「畫はどうかね」と口を切つた。主人は平氣な顏をして「君の忠告に從つて寫生を力めて居るが、成程寫生をすると今迄氣のつかなかつた物の形や、色の精細な變化抔がよく分る樣だ。西洋では昔から寫生を主張した結果今日の樣に發達したものと思はれる。さすがアンドレア・デル・サルトだ」と日記の事はおくびにも出さないで、又アンドレア・デル・サルトに感心する。美學者は笑ひながら「實は君、あれは出鱈目だよ」と頭を掻く。「何が」と主人はまだ翻弄された事に氣がつかない。「何がつて君の頻

りに感服して居るアンドレア・デル・サルトさ。あれは僕の一寸捏造した話だ。君がそんなに眞面目に信じようとは思はなかつた、ハヽヽヽ」と大喜悦の體である。吾輩は縁側で此對話を聞いて、彼の今日の日記には如何なる事が記さるゝであらうかと豫め想像せざるを得なかつた。此美學者はこんな好い加減な事を吹き散らして人を擔ぐのを唯一の樂しみにして居る男である。彼はアンドレア・デル・サルト事件が主人の情線に如何なる響を傳へたかを毫も顧慮せざるものの如く、得意になつて下の樣な事を饒舌つた。

「いや時々冗談を言ふと人が眞に受けるので、大いに滑稽的美感を挑撥するのは面白い。先達てある學生にニコラス・ニックルビーがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる佛國革命史を佛語で書くのをやめにして英文で出版させたと言つたら、其學生が又馬鹿に記憶のよい男で、日本文學會の演說會で眞面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑稽であつた。所が其時の傍聽者は約二百名許りであつたが、皆熱心にそれを傾聽して居つた。夫からまだ面白い話がある。先達て或文學者の居る席でハリソンの歴史小說セオファーノの話が出たから、僕はあれは歴史小說の中で白眉である。ことに女主人公が死ぬ所は鬼氣人を襲ふ樣だと評したら、僕の向うに坐つて居る知らんと云つた事のない先生が、さう〳〵あすこは實に名文だといつた。それで僕は此男も矢張り僕同樣此小說を讀んで居らないといふ事を知つた」神經胃弱性の主人は眼を丸くして問ひかけた。「そんな出鱈目をいつて若し相手が讀んで居たらどうする積りだ」恰も人を欺くのは差し支へない、只化の皮があらはれた時は困るぢやないかと感じたものの如くである。美學者は少しも動じない。「なに其時や別の本と間違へたとか何とか云ふ計りさ」と云つてげら〳〵笑つて居る。此美學者は金縁の眼鏡は掛けて居るが、其性質が車屋の黒に似た所がある。主人は默つて「日の出」を輪に

吹いて、吾輩にはそんな勇氣はないと云はん許りの顔をして居る、美學者はそれだから畫をかいても駄目だといふ目附で「然し冗談は冗談だが、畫といふものは實際六つかしいものだよ。レオナルド・ダ・ヰンチは門下生に寺院の壁のしみを寫せと敎へた事があるさうだ。なる程雪隱抔に這入つて雨の漏る壁を餘念なく眺めて居ると、中々うまい模樣畫が自然に出來て居るぜ。君注意して寫生して見給へ、屹度面白いものが出來るから」「又欺すのだらう」「いえ是丈は慥かだよ。實際奇警な語ぢやないか、ダ・ヰンチでもいひさうな事だあね」「成程奇警には相違ないな」と主人は半分降參をした。然し彼はまだ雪隱で寫生はせぬ樣だ。

車屋の黑は其後跛になつた。彼の光澤ある毛は漸々色が褪めて拔けて來る。吾輩が琥珀よりも美しいと評した彼の眼には眼脂が一杯たまつて居る。殊に著しく吾輩の注意を惹いたのは彼の元氣の消沈と其體格の惡くなつた事である。吾輩が例の茶園で彼に逢つた最後の日、どうだと云つて尋ねたら「いたちの最後屁と肴屋の天秤棒には懲り〳〵だ」といつた。

赤松の間に二三段の紅を綴つた紅葉は昔の夢の如く散つて、つくばひに近く代る〲花瓣をこぼした紅白の山茶花も殘りなく落ち盡した。三間半の南向の緣側に冬の日脚が傾いて木枯の吹かない日は殆ど稀になつてから、吾輩の晝寢の時間も狹められた樣な氣がする。

主人は每日學校へ行く。歸ると書齋へ立て籠る。人が來ると、敎師が厭だ〳〵といふ。水彩畫も滅多にかかない。タカヂヤスターゼも功能がないといつてやめて仕舞つた。小供は感心に休まないで幼稚園へかよふ。歸ると唱歌を歌つて、毬をついて、時々吾輩を尻尾でぶら下げる。

吾輩は御馳走も食はないから別段肥りもしないが、先づ／＼健康で跛にもならずに其日々々を暮らして居る。鼠は決して取らない。おさんは未だに嫌ひである。名前はまだつけて呉れないが、慾をいつても際限がないから生涯此教師の家で無名の猫で終る積りだ。

吾輩は新年來多少有名になつたので、猫ながら一寸鼻が高く感ぜらるゝのは難有い。

元朝早々主人の許へ一枚の繪端書が來た。是は彼の交友某畫家からの年始狀であるが、上部を赤、下部を深綠で塗つて、其の眞中に一の動物が蹲踞つて居る所をパステルでかいてある。主人は例の書齋で此繪を、横から見たり、竪から眺めたりして、うまい色だなといふ。既に一應感服したものだから、もうやめにするかと思ふと、矢張り横から見たり、竪から見たりして居る。からだを拗ぢ向けたり、手を伸ばして年寄が三世相を見る樣にしたり、又は窓の方へむいて鼻の先迄持つて來たりして見て居る。早くやめて呉れないと膝が搖れて險呑でたまらない。漸くの事で動搖が餘り劇しくなくなつたと思つたら、小さな聲で一體何をかいたのだらうと云ふ。主人は繪端書の色には感服したが、かいてある動物の正體が分らぬので、さつきから苦心をしたものと見える。そんな分らぬ繪端書かと思ひながら、寢て居た眼を上品に半ば開いて、落ち付き拂つて見ると紛れもない自分の肖像だ。主人の樣にアンドレア・デル・サルトを極め込んだものでもあるまいが、畫家丈に形體も色彩もちやんと整つて出來て居る。誰が見たつて猫に相違ない。少し眼識のあるものなら、猫の中でも他の猫ぢやない、吾輩である事が判然と分る樣に立派に描いてある。此の位明瞭な事を分らずにかく迄苦心するかと思ふと、少し人間が氣の毒になる。出來る事なら其繪が吾輩であると云ふ事を知らしてやりたい。吾輩であると云ふ事は好し分らないにしても、せめて猫であると

いふ事丈は分らして遣りたい。然し人間といふものは到底吾輩猫族の言語を解し得る位に天の惠に浴して居らん動物であるから、殘念ながら其儘にして置いた。

一寸讀者に斷つて置きたいが、元來人間が何ぞといふと猫々と、事もなげに輕侮の口調を以て吾輩を評價する癖があるは甚だよくない。人間の糟から牛と馬が出來て、牛と馬の糞から猫が製造された如く考へるのは、自分の無智に心附かんで高慢な顏をする敎師抔には有り勝ちの事でもあらうが、はたから見て餘り見つともいゝものぢやない。いくら猫だつて、さう粗末簡便には出來ぬ。よそ目には一列一體、平等無差別、どの猫も自家固有の特色抔はない樣であるが、猫の社會に這入つて見ると中々複雜なもので、十人十色といふ人間界の語は其儘こゝにも應用が出來るのである。目付でも、鼻付でも、毛並でも、足並でも、みんな違ふ。髭の張り具合から耳の立ち按排、尻尾の垂れ加減に至る迄同じものは一つもない。器量、不器量、好き嫌ひ、粹無粹の數を盡して千差萬別と云つても差し支へない位である。其樣に判然たる區別が存して居るにも關はらず、人間の眼は只向上とか何とかいつて、空ばかり見て居るものだから、吾等の性質は無論、相貌の末を識別する事すら到底出來ぬのは氣の毒だ。同類相求むとは昔からある語ださうだが、其通り、餅屋は餅屋、猫は猫で、猫の事なら矢張り猫でなくては分らぬ。いくら人間が發達したつて是計りは駄目である。況んや實際をいふと彼等が自ら信じて居る如くえらくも何ともないのだから猶更六づかしい。又況んや同情に乏しい吾輩の主人の如きは、相互を殘りなく解するといふが愛の第一義であるといふことすら分らない男なのだから仕方がない。彼は性の惡い牡蠣の如く書齋に吸ひ附いて、嘗て外界に向つて口を開いた事がない。それで自分丈は頗る達觀した樣な面構へをして居るのは一寸可笑しい。達觀し

ない證據には、現に吾輩の肖像が眼の前にあるのに少しも悟つた樣子もなく、今年は征露の第二年目だから大方熊の畫だらうと氣の知れぬことをいつて澄まして居るのでもわかる。

吾輩が主人の膝の上で眼をねむりながら斯く考へて居ると、やがて下女が第二の繪端書を持つて來た。見ると活版で、舶來の猫が四五疋ずらりと行列してペンを握つたり書物を開いたり勉强をして居る。その内の一疋は席を離れて机の角で西洋の猫ぢや猫ぢやを踊つて居る。其上に日本の墨で「吾輩は猫である」と黑々とかいて、右の側に、書を讀むや踊るや猫の春一日といふ俳句さへ認められてある。是は主人の舊門下生より來たので、誰が見たつて一見して意味がわかる筈であるのに、迂濶な主人はまだ悟らないと見えて不思議さうに首を捻つて、はてな、今年は猫の年かなと獨り言をいつた。吾輩が是程有名になつたのを未だ氣が着かずに居ると見える。

所へ下女が又第三の端書を持つてくる。今度は繪端書ではない。恭賀新年とかいて、傍に乍恐縮かの猫へも宜しく御傳聲奉願上候とある。如何に迂遠な主人でも、かう明らさまに書いてあれば分るものと見えて、漸く氣が附いた樣にフンと云ひながら吾輩の顏を見た。其眼附が今迄とは違つて多少尊敬の意を含んで居る樣に思はれた。今迄世間から存在を認められなかつた主人が急に一個の新面目を施したのも、全く吾輩の御蔭だと思へば、此位の眼附は至當だらうと考へる。

折柄門の格子がチリン、チリン、チリ、、、、ンと鳴る。大方來客であらう。來客なら下女が取次に出る。吾輩は肴屋の梅公がくる時の外は出ない事に極めて居るのだから、平氣で、もとの如く主人の膝に坐つて居つた。すると主人は高利貸にでも飛び込まれた樣に不安な顏附をして玄關の方を見る。何でも年賀の客

を受けて酒の相手をするのが厭らしい。人間も此位偏屈になれば申し分はない。そんなら早くから外出でもすればよいのに、夫程の勇氣も無い。愈牡蠣的根性をあらはして居る。しばらくすると下女が來て、今寒月さんが御出でになりましたといふ。此寒月といふ男は矢張り主人の舊門下生であつたさうだが、今では學校を卒業して、何でも主人より立派になつて居るといふ話である。此男がどういふ譯か、よく主人の所へ遊びに來る。來ると自分を戀つて居る女が有りさうな、無さうな、世の中が面白さうな、詰まらなさうな、凄い樣な、艶つぽい樣な文句許り並べては歸る。主人の樣なしなびかけた人間を求めて、態々こんな話をしに來るからして合點が行かぬが、あの牡蠣的主人がそんな談話を聞いて時々相槌を打つのは猶面白い。

「暫らく御無沙汰をしました。實は去年の暮から大いに活動して居るものですから、出よう〳〵と思つても、つい此方角へ足が向かないので」と羽織の紐をひねくりながら謎見た樣な事をいふ。「どつちの方角へ足が向くかね」と主人は眞面目な顔をして、黒木綿の紋附羽織の袖口を引つ張る。此羽織は木綿でゆきが短かい、下からべんべら物が左右へ五分位宛はみ出して居る。「エヘヽヽ、少し違つた方角で」と寒月君が笑ふ。見ると今日は前齒が一枚缺けて居る。「君齒をどうかしたかね」と主人は問題を轉じた。「ええ實はある所で椎茸を食ひましてね」「何を食つたつて?」「其の、少し椎茸を食つたんで。椎茸の傘を前齒で嚙み切らうとしたらぼろりと齒が缺けましたよ」「椎茸で前齒がかけるなんざ、何だか爺臭いね。俳句にはなるかも知れないが、戀にはならん樣だな」と平手で吾輩の頭を輕く叩く。「あゝ其猫が例のですか、中々肥つてるぢやありませんか、夫なら車屋の黒にだつて負けさうもありませんね、立派なものだ」

と寒月君は大いに吾輩を賞める。「近頃大分大きくなつたのさ」と自慢さうに頭をぽか〳〵なぐる。賞められたのは得意であるが頭が少々痛い。「一昨夜もちよいと合奏會をやりましてね」と寒月君は又話をもとへ戻す。「どこで？」「どこでも、そりや御聞きにならんでもよいでせう。ヴイオリンが三挺とピヤノの伴奏で中々面白かつたです。ヴイオリンも三挺位になると下手でも聞かれるものですね。二人は女で、私がその中へまじりましたが、自分でもよく弾けたと思ひました」「ふん、そして其女といふのは何者かね」と主人は羨ましさうに問ひかける。元來主人は平常枯木寒巌の様な顔附はして居るものゝ、實の所は決して婦人に冷淡な方ではない。嘗て西洋の或小説を讀んだら、其中にある一人物が出て來て、其が大抵の婦人には必ずちよつと惚れる。勘定をして見ると往來を通る婦人の七割弱には戀着するといふ事が諷刺的に書いてあつたのを見て、これは眞理だと感心した位な男である。そんな浮氣な男が何故牡蠣的生涯を送つて居るかと云ふのは吾輩猫抔には到底分らない。或人は失戀の爲だとも云ふし、或人は胃弱のせゐだとも云ふし、又或人は金がなくて臆病な性質だからだと云ふ。どつちにしたつて明治の歴史に關係する程な人物でもないのだから構はない。然し寒月君の女連れを羨まし氣に尋ねた事丈は事實である。寒月君は面白さうに口取の蒲鉾を箸で挟んで半分前歯で食ひ切つた。吾輩は又缺けはせぬかと心配したが、今度は大丈夫であつた。「なに二人とも去る所の令嬢ですよ、御存じの方ぢやありません」と餘所々々しい返事をする。「ナール」と主人は引つ張つたが「程」を略して考へて居る。寒月君はもう善い加減な時分だと思つたものか「どうも好い天氣ですな、御閑なら御一所に散歩でもしませうか、旅順が落ちたので市中は大變な景氣ですよ」と促して見る。主人は旅順の陥落より女連れの身元を聞きたいと云ふ顔で、しばらく考へ込ん

で居たが、漸く決心をしたものと見えて、「それぢや出るとしよう」と思ひ切つて立つ。矢張り黒木綿の紋附羽織に、兄の記念とかいふ二十年来着古した結城紬の綿入を着たまゝである。いくら結城紬が丈夫だつて、かう着つゞけではたまらない。所々が薄くなつて、日に透かして見ると裏からつぎを當てた針の目が見える。主人の服裝には師走も正月もない。ふだん着も餘所ゆきもない。出るときは懐手をしてぶらりと出る。外に着る物がないからか、有つても面倒だから着換へないのか、吾輩には分らぬ。但し此丈は失戀の爲とも思はれない。

　兩人が出て行つたあとで、吾輩は一寸失敬して寒月君の食ひ切つた蒲鉾の殘りを頂戴した。吾輩も此頃では普通一般の猫ではない。先づ桃川如燕以後の猫か、グレーの金魚を偸んだ猫位の資格は充分あると思ふ。車屋の黒抔は固より眼中にない。蒲鉾の一切位頂戴したつて人から彼此云はれる事もなからう。それに此の人目を忍んで間食するといふ癖は、何も吾輩猫族に限つた事ではない。うちのお三抔はよく細君の留守中に餅菓子抔を失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬して居る。お三計りぢやない。現に上品な仕附を受けつゝあると細君から吹聴せられて居る小兒ですら此傾向がある。四五日前のことであつたが、二人の子供が馬鹿に早くから眼を覺まして、まだ主人夫婦の寢て居る間に、對ひ合うて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食ふ麵麭の幾分に、砂糖をつけて食ふのが例であるが、此日は丁度砂糖壺が卓の上に置かれて匙さへ添へてあつた。いつもの樣に砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中から一匙の砂糖をすくひ出して自分の皿の上へあけた。すると小さいのが姉のした通り同分量の砂糖を同方法で自分の皿の上にあけた。暫らく兩人は睨み合つて居たが、大きいのが又匙をとつて一杯をわが皿の上に

加へた。小さいのもすぐ匙をとつてわが分量を姉と同一にした。すると姉が又一杯すくつた。妹も負けずに一杯を附加した。姉が又壺へ手を懸ける、妹が又匙をとる。見てる間に一杯一杯一杯と重なつて、遂には兩人の皿には山盛の砂糖が堆くなつて、壺の中には一匙の砂糖も餘つて居らん樣になつたとき、主人が寢ぼけ眼を擦りながら寢室を出て、切角しやくひ出した砂糖を元の如く壺の中へ入れて仕舞つた。こんな所を見ると、人間は利己主義から割り出した公平といふ念は猫より優つて居るかも知れぬが、智慧は却つて猫より劣つて居る樣だ。そんなに山盛にしないうちに早く甞めて仕舞へばいゝにと思つたが、例の如く、吾輩の言ふ事抔は通じないのだから、氣の毒ながら御櫃の上から默つて見物して居た。

寒月君と出掛けた主人はどこをどう歩いたものか、其晩遲く歸つて來て、翌日食卓についたのは九時頃であつた。例の御櫃の上から拜見して居ると、主人はだまつて雜煮を食つて居る。代へては食ひ、代へては食ふ。餅の切は小さいが、何でも六切か七切食つて、最後の一切を椀の中へ殘して、もうよさうと箸を置いた。他人がそんな我儘をすると、中々承知しないのであるが、主人の威光を振り廻して得意なる彼は、濁つた汁の中に焦け爛れた餅の死骸を見て平氣で澄まして居る。細君が袋戸の奥からタカヂヤスターゼを出して卓の上に置くと、主人は「それは利かないから飲まん」といふ。「でもあなた、澱粉質のものには大變功能があるさうですから、召し上がつたらいゝでせう」と飲ませたがる。「澱粉だらうが何だらうが駄目だよ」と頑固に出る。「あなたはほんとに厭きつぽい」と細君が獨り言の樣にいふ。「厭きつぽいのぢやない、藥が利かんのだ」「それだつて先達て中は大變によく利く〳〵と仰しやつて毎日々々上がつたぢやありませんか」「此間うちは利いたのだよ、此頃は利かないのだよ」と對句の樣な返事をする。「そ

んなに飲んだり止めたりしちや、いくら功能のある藥でも利く氣遣ひはありません。もう少し辛抱が能くなくつちやあ胃弱なんぞは外の病氣たあ違つて直らないわねえ」と御盆を持つて控へたお三を顧る。「それは本當の所で御座いますよ。もう少し召し上がつて御覽にならないと、とても善い藥か惡い藥かわかりますまい」とお三は一も二もなく細君の肩を持つ。「何でもいゝ、飲まんのだから飲まんのだ。女なんかに何がわかるものか、默つて居ろ」「どうせ女ですわ」と細君がタカヂヤスターゼを主人の前へ突き附けて、是非詰腹を切らせようとする。主人は何も云はず立つて書齋へ這入る。細君とお三は顔を見合はせてにや／＼と笑ふ。こんなときに後からくつ附いて行つて膝の上へ乘ると、大變な目に逢はされるから、そつと庭から廻つて書齋の椽側へ上つて障子の隙から覗いて見ると、主人はエピクテタスとか云ふ人の本を披いて見て居つた。もしそれが平常の通りわかるなら一寸えらい所がある。五六分すると其本を叩き付ける樣に机の上へ抛り出す。大方そんな事だらうと思ひながら猶注意して居ると、今度は日記帳を出して下の樣な事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、池の端、神田邊を散歩。池の端の待合の前で藝者が裾模樣の春着をきて羽根をついて居た。衣裝は美しいが顔は頗るまづい。何となくうちの猫に似て居た。

何も顔のまづい例に特に吾輩を出さなくつても、よささうなものだ。吾輩だつて喜多床へ行つて顔さへ剃つて貰やあ、そんなに人間と異つた所はありやしない。人間はかう自惚れて居るから困る。

寶丹の角を曲がると、又一人藝者が來た。是は脊のすらりとした撫肩の恰好よく出來上がつた女で、着て居る薄紫の衣服も素直に着こなされて上品に見えた。白い齒を出して笑ひながら「源ちやん昨夕

は――つい忙しかつたもんだから」と云つた。但し其聲は旅鴉の如く嗄れて居つたので、折角の風采も大いに下落した樣に感ぜられたから、所謂源ちやんなるものの如何なる人なるかを振り向いて見るも面倒になつて、懷手の儘御成道へ出た。寒月は何となくそはそはして居る如く見えた。

人間の心理程解し難いものはない。此主人の今の心は怒つて居るのだか、浮かれて居るのだか、又は哲人の遺書に一道の慰安を求めつゝあるのか、ちつとも分らない。世の中を冷笑して居るのか、世の中へ交りたいのだか、くだらぬ事に肝癪を起こして居るのか、物外に超然として居るのだか、薩張り見當が附かぬ。猫抔はそこへ行くと單純なものだ。食ひ度ければ食ひ、寐たければ寐る、怒るときは一生懸命に怒り、泣くときは絕體絕命に泣く。第一日記抔といふ無用のものは決してつけない。つける必要がないからである。主人の樣に裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室內に發揮する必要があるかも知れないが、我等猫屬に至ると行住坐臥、行屎送尿、悉く眞正の日記であるから、別段そんな面倒な手數をして、己れの眞面目を保存するには及ばぬと思ふ。日記をつけるひまがあるなら椽側に寐て居る迄の事さ。

神田の某亭で晩餐を食ふ。久し振りで正宗を二三杯飮んだら、今朝は胃の具合が大變いゝ。胃弱には晩酌が一番だと思ふ。タカヂヤスターゼは無論いかん。誰が何と云つても駄目だ。どうしたつて利かないものは利かないのだ。

無暗にタカヂヤスターゼを攻擊する。獨りで喧嘩をして居る樣だ。今朝の肝癪がちよつと此所へ尾を出す。人間の日記の本色は斯ういふ邊に存するのかも知れない。

先達て〇〇は朝飯を廢すると胃がよくなると云うたから二三日朝飯をやめて見たが、腹がぐう〳〵鳴る許りで功能はない。△△は是非香の物を斷てと忠告した。彼の說によると凡て胃病の原因は漬物にある。漬物さへ斷てば胃病の源を涸らす譯だから本復は疑ひなしといふ論法であつた。夫から一週間許り香の物に箸を觸れなかつたが、別段の驗も見えなかつたから、近頃は又食ひ出した。××に聞くとそれは按腹揉療治に限る。但し普通のではゆかぬ。皆川流といふ古流な揉み方で一二度やらせれば大抵の胃病は根治出來る。安井息軒も大變此按摩術を愛して居た。坂本龍馬の樣な豪傑でも時々は治療をうけたと云ふから、早速上根岸迄出掛けて揉まして見た。所が骨を揉まなければ癒らぬとか、臟腑の位置を一度顚倒しなければ根治がしにくいとかいつて、それは〳〵殘酷な揉み方をやる。後で身體が綿の樣になつて昏睡病にかゝつた樣な心持ちがしたので、一度で閉口してやめにした。A君は是非固形體を食ふなといふ。夫から、一日牛乳計り飲んで暮らして見たが、此時は腸の中でどぼりどぼり音がして大水でも出た樣に思はれて終夜眠れなかつた。B氏は橫膈膜で呼吸して內臟を運動させれば自然と胃の働きが健全になる譯だから試しにやつて御覽といふ。是も多少やつたが何となく腹中が不安で困る。夫に時々思ひ出した樣に一心不亂にかゝりはするものゝ五六分立つと忘れて仕舞ふ。忘れまいとすると橫膈膜が氣になつて本を讀む事も文章をかく事も出來ぬ。美學者の迷亭が此體を見て、産氣のついた男ぢやあるまいし、止すがいゝと冷かしたから、此頃は廢してしまつた。C先生は蕎麥を食つたらよからうと云ふから、早速かけともりをかはる〴〵食つたが、此は腹が下る計りで何等の功能もなかつた。余は年來の胃弱を直す爲に出來得る限りの方法を講じて見たが凡て駄目である。

只昨夜寒月と傾けた三杯の正宗は慥かに利目がある。是からは毎晩二三杯宛飲む事にしよう。

これも決して長く續く事はあるまい。主人の心は吾輩の眼球の樣に間斷なく變化して居る。何をやつても永持ちのしない男である。其上日記の上で胃病をこんなに心配して居る癖に、表向は大いに痩我慢をするから可笑しい。先達て其友人で某といふ學者が尋ねて來て、一種の見地から凡ての病氣は父祖の罪惡と自己の罪惡の結果に外ならないと云ふ議論をした。大分研究したものと見えて、條理が明晰で秩序が整然として立派な說であつた。氣の毒ながらうちの主人抔は到底之を反駁する程の頭腦も學問もないのである。然し自分が胃病で苦しんで居る際だから、何とかかんとか辯解をして自己の面目を保たうと思つた者と見えて、「君の說は面白いが、あのカーライルは胃弱だつたぜ」と恰もカーライルが胃弱だから自分の胃弱も名譽であると云つた樣な、見當違ひの挨拶をした。すると友人は「カーライルが胃弱だつて、胃弱の病人が必ずカーライルにはなれないさ」と極め附けたので主人は默然として居た。かくの如く虛榮心に富んで居るもの丶實際はやはり胃弱でない方がいゝと見えて、今夜から晩酌を始める抔といふのは一寸滑稽だ。考へて見ると今朝雜煮をあんなに澤山食つたのも昨夜寒月君と正宗を引つくり返した影響かも知れない。吾輩も一寸雜煮が食つて見たくなつた。

吾輩は猫であるが大抵のものは食ふ。車屋の黑の樣に横丁の肴屋迄遠征をする氣力はないし、新道の二絃琴の師匠の所の三毛の樣に贅澤は無論云へる身分でない。從つて存外嫌ひは少い方だ。子供の食ひこぼした麵麭も食ふし、餅菓子の餡もなめる。香の物は頗るまづいが經驗の爲澤庵を二切許りやつた事がある。食つて見ると妙なもので大抵の物は食へる。あれは厭だ、是は厭だと云ふのは贅澤な我儘で、到底教師の

家に居る猫抔の口にすべき所でない。主人の話しによると佛蘭西にバルザックといふ小説家があつたさうだ。此男が大の贅沢屋で——尤も是は口の贅沢屋ではない、小説家丈に文章の贅沢を盡したといふ事である。バルザックが或日自分の書いて居る小説中の人間の名をつけようと思つて色々つけて見たが、どうしても氣に入らない。所へ友人が遊びに來たので一所に散歩に出掛けた。友人は固より何も知らずに連れ出されたのであるが、バルザックは兼ねて自分の苦心して居る名を目付けようといふ考へだから、往來へ出ると何もしないで店先の看板ばかり見て歩行いて居る。所が矢張り氣に入つた名がない。友人を連れて無暗にあるく。友人は譯がわからずにくつ付いて行く。彼等は遂に朝から晩迄巴理を探険した。其歸りがけにバルザックは不圖ある裁縫屋の看板が目についた。見ると其看板にマーカスといふ名がかいてある。バルザックは手を拍つて是だ／＼是に限る。マーカスは好い名ぢやないか。マーカスの上へZといふ頭文字をつける、すると申し分のない名が出來る。Zでなくてはいかん。Z. Marcus は實にうまい。どうも自分で作つた名はうまくつけた積りでも何となく故意とらしい所があつて面白くない。漸くの事で氣に入つた名が出來たと、友人の迷惑は丸で忘れて、一人嬉しがつたといふが、小説中の人間の名前をつけるに一日巴理を探険しなくてはならぬ様では隨分手數のかゝる話だ。贅沢も此位出來れば結構なものだが、吾輩の様に牡蠣的主人を持つ身の上ではとてもそんな氣は出ない。何でもいゝ、食へさへすれば、といふ氣になるのも境遇の然らしむる所であらう。だから今雜煮が食ひ度くなつたのも決して贅沢の結果ではない。何でも食へる時に食つて置かうといふ考へから、主人の食ひ剩した雜煮がもしや臺所に殘つて居はすまいかと思ひ出したからである。……臺所へ廻つて見る。

今朝見た通りの餅だ、今朝見た通りの色で椀の底に膠着して居る。白状するが餅といふものは今迄一遍も口に入れた事がない。見るとうまさうにもあるし、又少し気味がわるくもある。前足で上にかゝつて居る菜つ葉を掻き寄せる。爪を見ると餅の上皮が引き掛かつてねば／＼する。嗅いで見ると釜の底の飯を御櫃へ移す時の様な香がする。食はうかな、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か誰も居ない。おさんは暮も春も同じ様な顔をして羽根をついて居る。子供は奥座敷で「何んと仰しやる兎さん」を歌つて居る。食ふとすれば今だ。もし此機をはづすと来年迄は餅といふものの味を知らずに暮らして仕舞はねばならぬ。吾輩は此刹那に猫ながら一の真理を感得した。「得難き機会は凡ての動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」吾輩は實を云ふとそんなに雑煮を食ひたくはないのである。否、椀底の様子を熟視すればする程気味が悪くなつて、食ふのが厭になつたのである。此時もしおさんでも勝手口を開けたなら、奥の子供の足音がこちらへ近付くのを聞き得たなら、吾輩は惜し気もなく椀を見棄てたらう。しかも雑煮の事には来年迄念頭に浮ばなかつたらう。所が誰も来ない、いくら躊躇して居ても誰も来ない。早く食はぬか食はぬかと催促される様な心持がする。吾輩は椀の中を覗き込み乍ら、早く誰か来てくれゝばいゝと念じた。矢張り誰も来てくれない。吾輩はとう／＼雑煮を食はなければならぬ。最後にからだ全体の重量を椀の底へ落とす様にして、あぐりと餅の角を一寸許り食ひ込んだ。此位力を込めて食ひ付いたのだから、大抵なものなら噛み切れる訳だが、驚いた！もうよからうと思つて歯を引かうとすると引けない。もう一返噛み直さうとすると動きがとれない。餅は魔物だなと疳づいた時は既に遅かつた。沼へでも落ちた人が足を抜かうと焦慮る度にぶく／＼深く沈む様に、噛めば噛む程口が重くなる。歯が動かなくなる。歯答へはある

が、齒答へがある丈でどうしても始末をつける事が出來ない。美學者迷亭先生が嘗て吾輩の主人を評して君は割り切れない男だといつた事があるが、成程うまい事をいつたものだ。此餅も主人と同じ樣にどうしても割り切れない。嚙んでも嚙んでも、三で十を割る如く盡未來際片のつく期はあるまいと思はれた。此煩悶の際吾輩は覺えず第二の眞理に逢着した。「凡ての動物は直覺的に事物の適不適を豫知す。」眞理は既に二つ迄發明したが、餅がくつ附いて居るので毫も愉快を感じない。齒が餅の肉に吸收されて、脫ける樣に痛い。早く食ひ切つて逃げないとお三が來る。子供の唱歌もやんだ樣だ。屹度臺所へ馳け出して來るに相違ない。煩悶の極尻尾をぐる／＼振つて見たが何等の功能もない。耳を立てたり寐かしたりしたが駄目である。考へて見ると耳と尻尾は餅と何等の關係もない。要するに振り損の、立て損の、寐かし損であると氣が附いたからやめにした。漸くの事是は前足の助けを借りて餅を拂ひ落とすに限ると考へ附いた。先づ右の方をあげて口の周圍を撫で廻す。撫でた位で割り切れる譯のものではない。今度は左の方を伸ばして口を中心として急劇に圓を劃して見る。そんな呪で魔は落ちない。辛抱が肝心だと思つて左右交る交るに動かしたが、矢張り依然として齒は餅の中にぶら下がつて居る。えゝ面倒だと兩足を一度に使ふ。すると不思議な事に此時丈は後足二本で立つ事が出來た。何だか猫でない樣な感じがする。猫であらうが、あるまいが、斯うなつた日にやあ構ふものか、何でも餅の魔が落ちる迄やるべしといふ意氣込みで無茶苦茶に顏中引つ搔き廻す。前足の運動が猛烈なので動ともすると中心を失つて倒れかゝる。倒れかゝる度に後足で調子をとらなくてはならぬから、一つ所に居る譯にも行かんので、臺所中あちら、こちらと飛んで廻る。我ながらよくこんなに器用に起つて居られたものだと思ふ。第三の眞理が驀地に現前する。「危き

に臨めば平常なし能はざる所のものを爲し能ふ。之を天祐といふ。」幸ひに天祐を享けたる吾輩が一生懸命餅の魔と戰つて居ると、何だか足音がして奧より人が來る樣な氣合である。こゝで人に來られては大變だと思つて、愈躍起となつて臺所をかけ廻る。足音は段々近附いてくる。あゝ殘念だが天祐が少し足りない。とう／＼子供に見附けられた。「あら猫が御雜煮を食べて踊を踊つて居る」と大きな聲をする。此聲を第一に聞きつけたのがお三である。羽根も羽子板も打ち遣つて勝手から「あらまあ」と飛び込んで來る。細君は縮緬の紋附で「いやな猫ねえ」と仰せられる。主人さへ書齋から出て來て「此馬鹿野郎」といつた。面白い／＼といふのは子供計りである。さうしてみんな申し合はせた樣にげら／＼笑つて居る。腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる譯にゆかぬ、弱つた。漸く笑ひがやみさうになつたら、五つになる女の子が「おかあ樣、猫も隨分ね」といつたので狂瀾を既倒に何とかするといふ勢で又大變笑はれた。人間の同情に乏しい實例も大分見聞したが、此時程恨めしく感じた事はなかつた。遂に天祐もどつかへ消え失せて、在來の通り四つ這ひになつて、眼を白黑くするの醜態を演ずる迄に閉口した。さすが見殺しにするのも氣の毒と見えて「まあ餅をとつて遣れ」と主人がお三に命ずる。お三はもつと踊らせようぢやありませんかといふ眼附で細君を見る。細君は踊は見たいが、殺して迄見る氣はないのでだまつて居る。「取つてやらんと死んで仕舞ふ、早くとつて遣れ」と主人は再び下女を顧る。お三は御馳走を半分食べかけて夢から起こされた時の樣に、氣のない顏をして餅をつかんでぐいと引く。寒月君ぢやないが前齒がみんな折れるかと思つた。どうも痛いの痛くないのつて、餅の中へ堅く食ひ込んで居る齒を情容赦もなく引つ張るのだから堪らない。吾輩が「凡ての安樂は困苦を通過せざるべからず」と云ふ第四の眞理を經驗して、け

ろけろとあたりを見廻した時には、家人は既に奧座敷へ這入つて仕舞つて居つた。

こんな失敗をした時には内に居てお三なんぞに顏を見られるのも何となくばつが惡い。いつその事氣を易へて新道の二絃琴の御師匠さんの所の三毛子でも訪問しようと臺所から裏へ出た。三毛子は此近邊で有名な美貌家である。吾輩は猫には相違ないが物の情は一通り心得て居る。うちで主人の苦い顏を見たり、お三の劍突を食つて氣分が勝れん時は必ず此異性の朋友の許を訪問して色々な話しをする。すると、いつの間にか心が晴々して今迄の心配も苦勞も何もかも忘れて、生れ變つた樣な心持ちになる。女性の影響といふものは實に莫大なものだ。杉垣の隙から、居るかなと思つて見渡すと、三毛子は正月だから、首輪の新しいのをして行儀よく緣側に坐つて居る。其背中の丸さ加減が言ふに言はれん程美しい。曲線の美を盡して居る。尻尾の曲り加減、足の折り具合、物憂げに耳をちよい〳〵振る氣色も到底形容が出來ん。ことによく日の當たる所に暖かさうに、品よく控へて居るものだから、身體は靜肅端正の態度を有するにも關はらず、天鵞絨を欺く程の滑らかな滿身の毛は春の光を反射して風なきにむら〳〵と微動する如く思はれる。吾輩はしばらく恍惚として眺めて居たが、やがて我に歸ると同時に、低い聲で「三毛子さん〳〵」といひながら前足で招いた。三毛子は「あら先生」と緣を下りる。赤い首輪につけた鈴がちやら〳〵と鳴る。おや正月になつたら鈴迄つけたな、どうもいゝ音だと感心して居る間に、吾輩の傍に來て「あら先生、御目出度う」と尾を左へ振る。吾等猫屬間で御互に挨拶をするときには尾を棒の如く立てて、それを左へぐるりと廻すのである。町内で吾輩を先生と呼んで呉れるのは此三毛子許りである。吾輩は前回斷つた通りまだ名はないのであるが、教師の家に居るものだから三毛子丈は尊敬して先生々々といつて呉れる。吾

輩も先生と云はれて滿更悪い心持ちもしないから、はい〳〵と返事をして居る。「やあ御目出度う、大層立派に御化粧が出來ましたね」「えゝ去年の暮御師匠さんに買つて頂いたの、宜いでせう」とちやら〳〵鳴らして見せる。「成程善い音ですな、吾輩抔は生れてから、そんな立派なものは見た事がないですよ」「あらいやだ、みんなぶら下げるのよ」と又ちやら〳〵鳴らす。「いゝ音でせう、あたし嬉しいわ」とちやら〳〵ちやら〳〵續け樣に鳴らす。「あなたのうちの御師匠さんは大變あなたを可愛がつて居ると見えますね」と吾身に引きくらべて暗に欣羨の意を洩らす。三毛子は無邪氣なものである。「ほんとよ、丸で自分の子供の樣よ」とあどけなく笑ふ。猫だつて笑はないとは限らない。人間は自分より外に笑へるものが無い樣に思つて居るのは間違ひである。吾輩が笑ふのは鼻の孔を三角にして咽喉佛を震動させて笑ふのだから人間にはわからぬ筈である。「一體あなたの所の御主人は何ですか」「あら御主人だつて、妙なのね。御師匠さんだわ。二絃琴の御師匠さんよ」「それは吾輩も知つて居ますがね。その御身分は何なんです。何れ昔は立派な方なんでせう」「えゝ」

　君を待つ間の姬小松……

障子の内で御師匠さんが二絃琴を彈き出す。「宜い聲でせう」と三毛子は自慢する。「宜い樣だが、吾輩にはよくわからん。全體何といふものですか」「あれ？あれは何とかつてものよ。御師匠さんはあれが大好きなの。……御師匠さんはあれで六十二よ。隨分丈夫だわね」六十二で生きて居る位だから丈夫と云はねばなるまい。吾輩は「はあ」と返事をした。少し間が拔けた樣だが別に名答も出て來なかつたから仕方がない。「あれでも、もとは身分が大變よかつたんだつて。いつでも左樣仰しやるの」「へえ元は何だ

つたんです」「何でも天璋院樣の御祐筆の妹の御嫁に行つた先の御つかさんの甥の娘なんだつて」「何ですつて？」「あの天璋院樣の御祐筆の妹の御嫁にいつた……」「成程」少し待つて下さい。天璋院樣の妹の御祐筆の……」「あらさうぢやないの、天璋院樣の御祐筆の妹の……」「よろしい分りました、天璋院樣のでせう」「えゝ」「御祐筆のでせう」「さうよ」「御嫁に行つた」「妹の御嫁に行つたですよ」「さうさう間違つた。妹の御嫁に入つた先の」「御つかさんの甥の娘なんですとさ」「御つかさんの甥の娘なんですか」「えゝ。分つたでせう」「いゝえ。何だか混雜して要領を得ないですよ。詰る所天璋院樣の何になるんですか」「あなたも餘つ程分らないのね。だから天璋院樣の御祐筆の妹の御嫁に行つた先の御つかさんの甥の娘なんだつて、さつきから言つてるんぢやありませんか」「それはすつかり分つて居るんですがね」「夫が分りさへすればいゝでせう」「えゝ」と仕方がないから降參をした。吾々は時とすると理詰めの虛言を吐かねばならぬ事がある。

障子の中で二絃琴の音がぱつたりやむと、御師匠さんの聲で「三毛や三毛や、御飯だよ」と呼ぶ。三毛子は嬉しさうに「あら御師匠さんが呼んで入らつしやるから、私歸るわ、よくつて？」わるいと云つたつて仕方がない。「それぢや又遊びに入らつしやい」と鈴をちやら／＼鳴らして庭先迄かけて行つたが、急に戻つて來て「あなた大變色が惡くつてよ、どうかしやしなくつて」と心配さうに問ひかける。まさか雜煮を食つて踊を踊つたとも云はれないから「何、別段の事もありませんが、少し考へ事をしたら頭痛がしてね。あなたと話しでもしたら直るだらうと思つて實は出掛けて來たのですよ」「さう、御大事になさいまし。左樣なら」少しは名殘惜し氣に見えた。是で雜煮の元氣も薩張りと回復した。いゝ心持ちになつた。

歸りに例の茶園を通り拔けようと思つて霜柱の融けかゝつたのを踏みつけながら建仁寺の崩れから顏を出すと、又車屋の黑が枯菊の上に脊を山にして欠伸をして居る。近頃は黑を見て恐怖する樣な吾輩ではないが、話しをされると面倒だから知らぬ顏をして行き過ぎようとした。黑の性質として他が己を輕侮したと認むるや否や決して默つて居ない。「おい、名なしの權兵衞、近頃ぢや乙う高く留まつてるぢやあねえか。いくら敎師の飯を食つたつて、そんな高慢ちきな面あするねえ。人つけ面白くもねえ」黑は吾輩の有名になつたのを、まだ知らんと見える。說明して遣りたいが到底分る奴ではないから、先づ一應の挨拶をして出來得る限り早く御免蒙るに若くはないと決心した。「いや黑君、御目出度う。不相變元氣がいゝね」と尻尾を立てて左へくるりと廻はす。黑は尻尾を立てたぎり挨拶もしない。「何、御目出てえ？正月で御目出たけりや、御めえなんざあ年が年中御目出てえ方だらう。氣をつけろい、此吹子の向う面め」吹子の向うづらといふ句は罵詈の言語である樣だが、吾輩には了解が出來なかつた。「一寸伺ふが吹子の向うづらと云ふのはどう云ふ意味かね」「へん、手めえが惡體をつかれてる癖に、其譯を聞きや世話あねえ。だから正月野郞だつて事よ」正月野郞は詩的であるが、其意味に至ると吹子の何とかよりも一層不明瞭な文句である。參考の爲一寸聞いて置きたいが、聞いたつて明瞭な答辯は得られぬに極まつてるから、面と對つた儘無言で立つて居つた。聊か手持無沙汰の體である。すると突然黑のうちの神さんが大きな聲を張り揚げて、「おや棚へ上げて置いた鮭がない。大變だ。又あの黑の畜生が取つたんだよ。ほんとに憎らしい猫だつちやありやしない。今に歸つて來たら、どうするか見て居やがれ」と怒鳴る。初春の長閑な空氣を無遠慮に震動させて、枝を鳴らさぬ君が御代を大いに俗了して仕舞ふ。黑は怒鳴るなら、怒鳴りたい丈怒鳴

つて居ると云はぬ許りに横着な顔をして、四角な顋を前へ出しながら、あれを聞いたかと合圖をする。今迄は黒との應對で氣がつかなかつたが、見ると彼の足の下には一切二錢三厘に相當する鮭の骨が泥だらけになつて轉がつて居る。「君不相變やつてるな」と今迄の行き掛りは忘れて、つい感投詞を奉呈した。黒は其位な事では中々機嫌を直さない。「何がやつてるでえ、此野郎。しやけの一切や二切で相變らずたあ何だ。人を見縊つた事をいふねえ。憚りながら車屋の黒だあ」と腕まくりの代りに右の前足を逆に肩の邊迄掻き上げた。「君が黒君だと云ふ事は、始めから知つてるさ」「知つてるのに、相變らずやつてるたあ何だ。何だてえ事よ」と熱いのを頻りに吹き懸ける。人間なら胸倉をとられて小突き廻される所である。少々辟易して、内心困つた事になつたと思つて居ると、再び例の神さんの大聲が聞こえる。「ちよいと西川さん、おい西川さんてば、用があるんだよ此人あ。牛肉を一斤すぐ持つて來るんだよ。いゝかい、分つたかい、牛肉の堅くない所を一斤だよ」と牛肉注文の聲が四隣の寂寞を破る。「へん年に一遍牛肉を誂へると思つて、いやに大きな聲を出しやあがらあ。牛肉一斤が隣近所へ自慢なんだから始末に終へねえ阿魔だ」と黒は嘲りながら四つ足を踏ん張る。吾輩は挨拶の仕樣もないから默つて見て居る。「一斤位ぢやあ承知が出來ねえんだが、仕方がねえ、いゝから取つときや、今に食つてやらあ」と自分の爲に誂へたものの如くいふ。「今度は本當の御馳走だ。結構々々」と吾輩は可成彼を歸さうとする。「おめつちの知つた事ぢやねえ。默つてゐろ。うるせえや」と云ひ乍ら突然後足で霜柱の崩れた奴を吾輩の頭へばさりと浴びせ掛ける。吾輩が驚いて、からだの泥を拂つて居る間に黒は垣根を潜つて、どこかへ姿を隱した。大方西川の牛を覘ひに行つたものであらう。

家へ歸ると座敷の中がいつになく春めいて、主人の笑ひ聲さへ陽氣に聞こえる。はてなと明け放した椽側から上がつて主人の傍へ寄つて見ると、見馴れぬ客が來て居る。頭を綺麗に分けて、木綿の紋附の羽織に小倉の袴を着けて、至極眞面目さうな書生體の男である。主人の手あぶりの角を見ると春慶塗の卷煙草入と竝んで、越智東風君を紹介致候水島寒月といふ名刺があるので、此客の名前も、寒月君の友人であるといふ事も知れた。主客の對話は途中からであるから前後がよく分らんが、何でも吾輩が前回に紹介した美學者迷亭君の事に關して居るらしい。

「それで面白い趣向があるから是非一所に來いと仰しやるので」と客は落ち附いて云ふ。「何ですか、其西洋料理へ行つて午飯を食ふのに就いて趣向があるといふのですか」と主人は茶を注ぎ足して客の前へ押しやる。「さあ其趣向といふのが、其時は私にも分らなかつたんですが、何れあの方の事ですから、何か面白い種があるのだらうと思ひまして……」「一所に行きましたか、なる程」「所が驚いたのです」主人はそれ見たかと云はぬ許りに、膝の上に乘つた吾輩の頭をぽかと叩く。少し痛い。「又馬鹿な茶番見た樣な事なんでせう。あの男はあれが癖でね」と急にアンドレア・デル・サルト事件を思ひ出す。「へゝー。君、何か變つたものを食はうぢやないかと仰しやるので」「何を食ひました」「先づ獻立を見ながら色々料理に就いての御話しがありました」「誂へない前にですか」「えゝ」「夫から」「夫から首を捻つてボイの方を御覽になつて、どうも變つたものもない樣だなと仰しやると、ボイは負けぬ氣で鴨のロースか小牛のチャップ抔は如何ですと云ふと、先生は、そんな月竝を食ひにわざ〳〵こゝ迄來やしないと仰しやるんで、ボイは月竝といふ意味が分らんものですから妙な顏をして默つて居ましたよ」「さうでせう」「夫

から私の方を御向きになつて、君佛蘭西や英吉利へ行くと隨分天明調や萬葉調が食へるんだが、日本ぢやどこへ行つたつて版で押した様で、どうも西洋料理へ這入る氣がしないと云ふ様な大氣燄で――全體あの方は洋行なすつた事があるのですかな」「何、迷亭が洋行なんかするもんですか、そりや金もあり、時もあり、行かうと思へば何時でも行かれるんですがね。大方是から行く積りの所を、過去に見立てた洒落なんでせう」と主人は自分ながらうまい事を言つた積りで誘ひ出し笑ひをする。客は左迄感服した様子もない。「さうですか、私は又いつの間に洋行なさつたかと思つて、つい眞面目に拜聽して居ました。それに見て來た様になめくぢのソップの御話しや蛙のシチュの形容をなさるものですから」「そりや誰かに聞いたんでせう、うそをつく事は中々名人ですからね」「どうも左様のやうで」と花瓶の水仙を眺める。少しく殘念の氣色にも取られる。「ぢや趣向といふのは、それなんですね」と主人が念を押す。「いえ、夫はほんの冒頭なので、本論は是からなのです」「ふーん」と主人は好奇的な感投詞を插む。「夫から、とてもなめくぢや蛙は食はうつても食へやしないから、まあトチメンボー位な所で負けとく事にしようぢやないか君、と御相談なさるものですから、私はつい何の氣なしに、それがいゝでせう、といつて仕舞つたので」「へー、とちめんぼうは妙ですな」「えゝ全く妙なのですが、先生が餘り眞面目だものですから、つい氣がつきませんでした」と恰も主人に向つて麁忽を詫びて居る様に見える。「夫からどうしました」と主人は無頓着に聞く。客の謝罪には一向同情を表して居らん。「それからボイに、おいトチメンボーを二人前持つて來いといふと、ボイがメンチボーですかと聞き直しましたが、先生は益眞面目な貌でメンチボーぢやない、トチメンボーだと訂正されました」「なある。其トチメンボーといふ料理は一體あるんで

すかし「さあ私も少し可笑しいとは思ひましたが、如何にも先生が沈着であるし、其上あの通りの西洋通で入らつしやるし、ことに其時は洋行なすつたものと信じ切つて居たものですから、私も口を添へてトチメンボーだトチメンボーだとボイに教へてやりました」「ボイはどうしました」「ボイがね、今考へると實に滑稽なんですがね、暫らく思案して居ましてね、甚だ御氣の毒様ですが今日はトチメンボーは御生憎様で、メンチボーなら御二人前すぐに出來ますと云ふと、先生は非常に殘念な樣子で、夫ぢや折角こゝ迄來た甲斐がない。どうかトチメンボーを都合して食はせてもらふ譯には行くまいかと、ボイに二十錢銀貨をやられると、ボイはそれでは兎も角も料理番と相談して參りませうと奥へ行きましたよ」「大變トチメンボーが食ひたかつたと見えますね」「しばらくしてボイが出て來て、眞に御生憎で、御誂へならこしらへますが少々時間がかゝります、と云ふと迷亭先生は落ち附いたもので、どうせ我々は正月でひまなんだから、少し待つて食つて行かうぢやないかと云ひ乍ら、ポッケットから葉卷を出してぷかり／＼吹かし始められたので、私も仕方がないから、懐から日本新聞を出して讀み出しました。するとボイは又奥へ相談に行きましたよ」「いやに手數が掛りますな」と主人は戰爭の通信を讀む位の意氣込みで席を前める。「するとボイが又出て來て、近頃はトチメンボーの材料が拂底で龜屋へ行つても横濱の十五番へ行つても買はれませんから、當分の間は御生憎様でと氣の毒さうに云ふと、先生はそりや困つたな、折角來たのになあと、私の方を御覽になつて頻りに繰り返さるゝので、私も默つて居る譯にも參りませんから、どうも遺憾ですな、遺憾極まるですなと調子を合はせたのです」「御尤もで」と主人が賛成する。「何が御尤もだか吾輩にはわからん。「するとボイも氣の毒だと見えて、其内材料が參りましたら、どうか願ひますつて

んでせう。先生が材料は何を使ふかねと問はれると、ボイはへ、、、と笑つて返事をしないんです。材料は日本派の俳人だらうと先生が押し返して聞くと、ボイはへえ左樣で、それだものだから近頃は橫濱へ行つても買はれませんので、まことに御氣の毒樣と云ひましたよ」「アハ、、、夫が落ちなんですか、こりや面白い」と主人はいつになく大きな聲で笑ふ。膝が搖れて吾輩は落ちかゝる。主人は夫にも頓着なく笑ふ。アンドレア・デル・サルトに罹つたのは自分一人でないと云ふ事を知つたので、急に愉快になつたものと見える。「夫から二人で表へ出ると、どうだ君うまく行つたらう、橡麵坊を種に使つた所が面白からうと大得意なんです。敬服の至りですと云つて御別れした樣なものゝ、實は午飯の時刻が延びたので大變空腹になつて弱りましたよ」「夫は御迷惑でしたらう」と主人は始めて同情を表する。是には吾輩も異存はない。しばらく話しが途切れて吾輩の咽喉を鳴らす音が主客の耳に入る。

東風君は冷たくなつた茶をぐつと飲み干して、「實は今日參りましたのは、少々先生に御願ひがあつて參つたので」と改まる。「はあ、何か御用で」と主人も負けずに澄ます。「御承知の通り、文學美術が好きなものですから……」「結構で」と油を注す。「同志丈がよりまして先達てから朗讀會といふのを組織しまして、每月一回會合して此方面の研究を是から續け度い積りで、既に第一回は去年の暮に開いた位であります」「一寸伺つて置きますが、朗讀會と云ふと何か節奏でも附けて、詩歌文章の類を讀む樣に聞こえますが、一體どんな風にやるんです」「まあ初めは古人の作からはじめて、追々は同人の創作なんかもやる積りです」「古人の作といふと白樂天の琵琶行の樣なものででもあるんですか」「いゝえ」「蕪村の春風馬堤曲の種類ですか」「いゝえ」「それぢや、どんなものをやつたんです」「先達ては近松の心中物を

やりました」「近松？あの淨瑠璃の近松ですか」近松に二人はない。近松といへば戯曲家の近松に極まつてゐる。夫を聞き直す主人は餘程愚だと思つて居ると、主人は何も分らずに吾輩の頭を丁寧に撫でて居る。藪睨みから惚れられたと自認して居る人間もある世の中だから、此位の誤謬は決して驚くに足らんと撫でらるゝが儘に澄まして居た。「えゝ」と答へて東風子は主人の顔色を窺ふ。「それぢや一人で朗讀するのですか、又は役割を極めてやるんですか」「役を極めて懸合でやつて見ました。其主意は可成作中の人物に同情を持つて其性格を發揮するのを第一として、夫に手眞似や身振りを添へます。白は可成其時代の人を寫し出すのが主で、御孃さんでも丁稚でも、其人物が出てきた様にやるんです」「ぢや、まあ芝居見た様なものぢやありませんか」「えゝ衣裳と書割がない位なものですな」「失禮ながらうまく行きましたか」「まあ第一回としては成功した方だと思ひます」「それで此前やつたと仰しやる心中物といふと」「其の、船頭が御客を乘せて芳原へ行く所なんで」「大變な幕をやりましたな」と教師丈に一寸首を傾ける。鼻から吹き出した日の出の烟が耳を掠めて顔の横手へ廻る。「なあに、そんなに大變な事もないんです、登場の人物は御客と、船頭と、花魁と仲居と遣手と見番丈ですから」と東風子は平氣なものである。主人は花魁といふ名をきいて一寸苦い顔をしたが、仲居、遣手、見番といふ術語に就いて明瞭の知識がなかつたと見えて先づ質問を呈出した。「仲居といふのは娼家の下婢にあたるものですかな」「まだよく研究はして見ませんが、仲居は茶屋の下女で、遣手といふのが女部屋の助役見た様なものだらうと思ひます」東風子はさつき其人物が出て來る様に假色を使ふと云つた癖に、遣手や仲居の性格をよく解して居らんらしい。「成程仲居は茶屋に隷屬するもので、遣手は娼家に起臥する者ですね。次に見番と云ふのは人間ですか、

又は一定の場所を指すのですか、もし人間とすれば男ですか女ですか」「見番は何でも男の人間だと思ひますし」「何を司どつて居るんですかな」「さあ、そこ迄はまだ調べが屆いて居りません。其内調べて見ませう」これで懸合をやつた日にや頓珍漢なものが出來るだらうと、吾輩は主人の顏を一寸見上げた。主人は存外眞面目である。「それで朗讀家は君の外にどんな人が加はつたんですか」「色々居りました。花魁が法學士のK君でしたが、口髭を生やして、女の甘つたるいせりふを使ふのですから一寸妙でした。それに其花魁が癪を起こす所があるので……」「朗讀でも癪を起こさなくつちやいけないんですか」と主人は心配さうに尋ねる。「えゝ兎に角表情が大事ですから」と東風子はどこ迄も文藝家の氣で居る。「うまく癪が起こりましたか」と主人は警句を吐く。「癪丈は第一回には、些と無理でした」と東風子も警句を吐く。「所で君は何の役割でした」と主人が聞く。「私は船頭」「へー、君が船頭」君にして船頭が務まるものなら僕にも見番位はやれると云つた樣な語氣を洩らす。やがて「船頭は無理でしたか」と御世辭のない所を打ち明ける。東風子は別段癪に障つた樣子もない。矢張り沈着な口調で「其船頭で折角の催しも龍頭蛇尾に終りました。實は會場の隣に女學生が四五人下宿して居ましてね、それがどうして聞いたものか、其日は朗讀會があるといふ事をどこかで探知して會場の窓下へ來て傍聽して居たものと見えます。私が船頭の假色を使つて、漸く調子づいて是なら大丈夫と思つて得意にやつて居ると、……つまり身振りがあまり過ぎたのでせう、今迄耐へて居た女學生が一度にわつと笑ひだしたものですから、驚いた事も驚いたし、極りが悪い事も悪いし、それで腰を折られてから、どうしても後がつゞけられないので、とう〳〵其限りで散會しました」第一回としては成功だと稱する朗讀會がこれでは、失敗はどんなものだらうと想像する

と笑はずには居られない。覺えず咽喉佛がごろ／＼鳴る。主人は愈柔らかに頭を撫でて吳れる。人を笑つて可愛がられるのは難有いが、聊か無氣味な所もある。「夫は飛んだ事で」と主人は正月早々弔詞を述べて居る。「第二回からは、もつと奮發して盛大にやる積りなので、今日出ましたのも全く其爲で、實は先生にも一つ御入會の上御盡力を仰ぎたいので」「僕にはとても癪なんか起こせませんよ」と消極的の主人はすぐに斷りかける。「いえ、癪抔は起こして頂かんでもよろしいので、こゝに贊助員の名簿が」と云ひながら紫の風呂敷から大事さうに小菊版の帳面を出す。「是へどうか御署名の上御捺印を願ひたいので」と帳面を主人の膝の前へ開いたまゝ置く。見ると現今知名な文學博士、文學士連中の名が行儀よく勢揃ひをして居る。「はあ、贊成員にならん事もありませんが、どんな義務があるのですか」と牡蠣先生は掛念の體に見える。「義務と申して別段是非願ふ事もない位で、只御名前丈を御記入下さつて贊成の意さへ御表し下されば其で結構です」「そんなら這入ります」と義務のかゝらぬ事を知るや否や主人は急に氣輕になる。責任さへないと云ふ事が分つて居れば謀叛の連判狀へでも名を書き入れますと云ふ顔附をする。加之から知名の學者が名前を列ねて居る中に姓名丈でも入籍させるのは、今迄こんな事に出合つた事のない主人に取つては無上の光榮であるから返事の勢のあるのも無理はない。「一寸失敬」と主人は書齋へ印をとりに這入る。吾輩はぼたりと疊の上へ落ちる。東風子は菓子皿の中のカステラをつまんで一口に頰張る。モゴ／＼しばらくは苦しさうである。吾輩は今朝の雜煮事件を一寸思ひ出す。主人が書齋から印形を持つて出て來た時は、東風子の胃の中にカステラが落ち附いた時であつた。主人は菓子皿のカステラが一切足りなくなつた事には氣が附かぬらしい。もし氣がつくとすれば第一に疑はれるものは吾輩であらう。

東風子が歸つてから、主人が書齋に入つて机の上を見ると、いつの間にか迷亭先生の手紙が來て居る。

「新年の御慶目出度申納候。……」

いつになく出が眞面目だと主人が思ふ。迷亭先生の手紙に眞面目なのは殆どないので、此間抔は「其後別に戀着せる婦人も無之、いづ方より艶書も參らず、先づ〳〵無事に消光罷り在り候間、乍憚御休心可被下候」と云ふのが來た位である。それに較べると此年始狀は例外にも世間的である。

「一寸參堂仕り度候へども、大兄の消極主義に反して、出來得る限り積極的方針を以て、此千古未曾有の新年を迎ふる計畫故、毎日々々目の廻る程の多忙、御推察願上候。……」

成程あの男の事だから正月は遊び廻るのに忙しいに違ひないと、主人は腹の中で迷亭君に同意する。

「昨日は一刻のひまを偸み、東風子にトチメンボーの御馳走を致さんと存じ候處、生憎材料拂底の爲其意を果さず、遺憾千萬に存候。……」

そろ〳〵例の通りになつて來たと主人は無言で微笑する。

「明日は某男爵の歌留多會、明後日は審美學協會の新年宴會、其明日は鳥部教授歡迎會、其又明日は……」

うるさいなと、主人は讀みとばす。

「右の如く、謠曲會、俳句會、短歌會、新體詩會等、會の連發にて當分の間は、のべつ幕無しに出勤致し候爲、不得已賀狀を以て拜趨の禮に易へ候段不悪御宥恕被下度候。……」

別段くるにも及ばんさと、主人は手紙に返事をする。

「今度御光來の節は久し振りにて晩餐でも供し度心得に御座候。寒厨何の珍味も無之候へども、せめてはトチメンボーでもと只今より心掛居候。……」

まだトチメンボーと振り廻して居る。失敬なと主人は一寸むつとする。

「然しトチメンボーは近頃材料拂底の爲め、ことに依ると間に合ひ兼候も計りがたきにつき、其節は孔雀の舌でも御風味に入れ可申候。……」

兩天秤をかけたなと主人は、あとが讀みたくなる。

「御承知の通り孔雀一羽につき、舌肉の分量は小指の半ばにも足らぬ程故健啖なる大兄の胃嚢を充たす爲には……」

うそをつけと主人は打ち遣つた樣にいふ。

「是非共二三十羽の孔雀を捕獲致さゞる可からずと存候。然る所孔雀は動物園、淺草花屋敷等にはちらほら見受け候へども、普通の鳥屋抔には一向見當り不申、苦心此事に御座候。……」

獨りで勝手に苦心して居るのぢやないかと主人は毫も感謝の意を表しない。

「此孔雀の舌の料理は往昔羅馬全盛の砌、一時非常に流行致し候ものにて、豪奢風流の極度と平生よりひそかに食指を動かし居候次第、御諒察可被下候。……」

何が御諒察だ、馬鹿なと主人は頗る冷淡である。

「降つて十六七世紀の頃迄は全歐を通じて孔雀は宴席に缺くべからざる好味と相成居候。レスター伯がエリザベス女皇をケニルウォースに招待致し候節も慥か孔雀を使用致し候樣記憶致候。有名なるレ

ンブラントが畫き候饗宴の圖にも孔雀が尾を廣げたる儘卓上に横たはり居候。……」
孔雀の料理史をかく位なら、そんなに多忙でもなささうだと不平をこぼす。
「とにかく近頃の如く御馳走の食べ續けにてはさすがの小生も遠からぬうちに大兄の如く胃弱と相成るは必定……」
大兄の如くは餘計だ。何も僕を胃弱の標準にしなくても濟むと主人はつぶやいた。
「歴史家の説によれば羅馬人は日に二度三度も宴會を開き候由、日に二度も三度も方丈の食饌に就き候へば如何なる健胃の人にても消化機能に不調を醸すべく、從つて自然は大兄の如く……」
又大兄の如くか、失敬な。
「然るに贅澤と衛生とを兩立せしめんと研究を盡したる彼等は不相當に多量の滋味を貪ると同時に胃腸を常態に保持するの必要を認め、こゝに一の祕法を案出致し候。……」
はてねと主人は急に熱心になる。
「彼等は食後必ず入浴致候。入浴後一種の方法によりて浴前に嚥下せるものを悉く嘔吐し、胃内を掃除致し候。胃内廓清の功を奏したる後又食卓に就き、飽く迄珍味を風好し、風好し了れば又湯に入りて之を吐出致候。かくの如くすれば好物は貪り次第貪り候も毫も内臓の諸機關に障害を生ぜず、一擧兩得とは此等の事を可申かと愚考致候……」
成程一擧兩得に相違ない。主人は羨ましさうな顔をする。
「廿世紀の今日交通の頻繁、宴會の増加は申す迄もなく、軍國多事征露の第二年とも相成候折柄、吾

入戰勝國の國民は、是非共羅馬人に傚つて此入浴嘔吐の術を研究せざるべからざる機會に到着致し候事と自信致候。左もなくば折角の大國民も近き將來に於て悉く大兒の如く胃病患者と相成る事と竊かに心痛罷りあり候。……」

又大兒の如くか、頻に障る男だと主人が思ふ。

「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史傳説を考究し、既に廢絕せる祕法を發見し、之を明治の社會に應用致し候はゞ所謂禍を未萠に防ぐの功德にも相成り平素逸樂を擅に致し候御恩返しも相立ち可申と存候。……」

何だか妙だなと首を捻る。

「依て此間中よりギボン、モンセン、スミス等諸家の著述を渉獵致し居候へども未だに發見の端緒をも見出し得ざるは殘念の至に存候。然し御存じの如く小生は一度思ひ立ち候事は成功するまでは決して中絕仕らざる性質に候へば嘔吐方を再興致し候も遠からぬうちと信じ居り候次第。右發見次第御報道可仕候につき、左樣御承知可被下候。就てはさきに申上候トチメンボー及び孔雀の舌の御馳走も可相成は右發見後に致し度、左すれば小生の都合は勿論、既に胃弱に惱み居らるゝ大兒の爲にも御便宜かと存候。草々不備」

何だとう〳〵擔がれたのか、あまり書方が眞面目だものだからつい仕舞ひ迄本氣にして讀んで居た。新年匆々こんな惡戲をやる迷亭は餘つ程ひま人だなあと主人は笑ひながら云つた。

夫から四五日は別段の事もなく過ぎ去つた。白磁の水仙がだん〳〵凋んで、青軸の梅が瓶ながら漸々開

きかゝるのを眺め暮らして詰り居てもつまらんと思つて、一兩度三毛子を訪問して見たが逢はれない。最初は留守だと思つたが、二返目には病氣で寐て居るといふ事が知れた。障子の中で例の御師匠さんと下女が話しをして居るのを手水鉢の葉蘭の蔭に隠れて聞いて居るとかうであつた。

「三毛は御飯をたべるかい」「いゝえ今朝からまだ何も食べません、あつたかにして御炬燵に寐かして置きました」

何だか猫らしくない。丸で人間の取扱ひを受けて居る。一方では自分の境遇と比べて見て羨ましくもあるが、一方では己が愛して居る猫がかく迄厚遇を受けて居ると思へば嬉しくもある。

「どうも困るね、御飯をたべないと、身體が疲れる許りだからね」「さうで御座いますとも、私共でさへ一日御膳を頂かないと、明くる日はとても働けませんもの」

下女は自分より猫の方が上等な動物である様な返事をする。實際此家では下女よりも猫の方が大切かも知れない。

「御醫者樣へ連れて行つたのかい」「えゝ、あの御醫者は餘程妙で御座いますよ。私が三毛をだいて診察場へ行くと、風邪でも引いたのかつて私の脈をとらうとするんでせう。いえ病人は私では御座いません。これですつて三毛を膝の上へ直したら、にや／＼笑ひながら、猫の病氣はわしにも分らん、抛つて置いたら今に癒るだらうつてんですもの、あんまり苛いぢや御座いませんか。腹が立つたから、それぢや見て戴かなくつてもよう御座います。是でも大事の猫なんですつて、三毛を懐へ入れてさつさと歸つて參りました」「ほんにねえ」

「ほんにねえ」は到底吾輩のうち抔で聞かれる言葉ではない。矢張り天璋院樣の何とかの何とかでなくては使へない、甚だ雅であると感心した。

「何だかしく〳〵云ふ樣だが……」「えゝきつと風邪を引いて咽喉が痛むんで御座いますよ。風邪を引くと、どなたでも御咳が出ますからね……」

天璋院樣の何とかの何とかの下女丈に馬鹿丁寧な言葉を使ふ。「それに近頃は肺病とか云ふものが出來てなう」「ほんとに此頃の樣に肺病だのペストだのつて新しい病氣許り殖えた日にや油斷も隙もなりやしませんので御座いますよ」「舊幕時代に無い者に碌な者はないから御前も氣をつけないといかんよ」「さうで御座いませうかねえ」

下女は大いに感動して居る。

「風邪を引くといつても餘り出あるきもしない樣だつたに……」「いえね、あなた、それが近頃は惡い友達が出來ましてね」

下女は國事の祕密でも語る時の樣に大得意である。

「惡い友達？」「えゝあの表通りの敎師の所に居る薄ぎたない雄猫で御座いますよ」「敎師と云ふのは、あの每朝無作法な聲を出す人かえ」「えゝ顏を洗ふたんびに鵞鳥が絞め殺される樣な聲を出す人で御座んす」

鵞鳥が絞め殺される樣な聲はうまい形容である。吾輩の主人は每朝風呂場で含嗽をやる時、楊枝で咽喉をつゝ突いて妙な聲を無遠慮に出す癖がある。機嫌の惡い時はやけにがあ〳〵やる。機嫌の好い時は元氣

づいて難があ〳〵やる。つまり機嫌のいゝ時も悪い時も休みなく勢よくがあ〳〵やる。細君の話しではここへ引き越す前迄はこんな癖はなかつたさうだが、ある時不圖やり出してから今日迄一日もやめた事がないといふ。一寸厄介な癖であるが、なぜこんな事を根氣よく續けて居るのか、吾等猫抔には到底想像もつかん。それも先づよいとして「薄ぎたない猫」とは隨分酷評をやるものだと猶耳を立ててあとを聞く。

「あんな聲を出して何の呪になるか知らん。御維新前は中間でも草履取りでも相應の作法は心得たもので、屋敷町抔で、あんな顔の洗ひ方をするものは一人も居らなかつたよ」「さうで御座いませうともねえ」

下女は無暗に感服しては、無暗にねえを使用する。

「あんな主人を持つて居る猫だから、どうせ野良猫さ。今度來たら少し叩いて御遣り」「叩いて遣りますとも、三毛の病氣になつたのも全くあいつの御蔭に相違御座いませんもの、屹度讐をとつてやります」

飛んだ冤罪を蒙つたものだ。こいつは滅多に近寄れないと三毛子にはとう〳〵逢はずに歸つた。

歸つて見ると主人は書齋の中で何か沈吟の體で筆を執つて居る。二絃琴の御師匠さんの所で聞いた評判を話したら、さぞ怒るだらうが、知らぬが佛とやらで、うん〳〵云ひながら神聖な詩人になり済まして居る。

所へ當分多忙で行かれないと云つて、態々年始状をよこした迷亭君が飄然とやつて來る。「何か新體詩でも作つて居るのかね。面白いのが出來たら見せ給へ」と云ふ。「うん、一寸うまい文章だと思つたから今飜譯して見ようと思つてね」と主人は重たさうに口を開く。「文章？誰の文章だい」「誰のか分らんよ」

「無名氏か、無名氏の作にも隨分いゝのがあるから中々馬鹿に出來ない。全體どこにあつたのか」と問ふ。「第二讀本」と主人は落ち附き拂つて答へる。「第二讀本の、第二讀本かどうしたんだ」「僕の解譯して居る名文と云ふのは第二讀本の中にあると云ふ事さ」「冗談ぢやない。孔雀の舌の讐を際どい所で討たうと云ふ寸法なんだらう」「僕は君の樣な法螺吹きとは違ふさ」と口髭を捻る。泰然たるものだ。「昔ある人が山陽に、先生近頃名文は御座らぬかといつたら、山陽が馬子の書いた借金の催促狀を示して近來の名文は先づ是でせうと云つたといふ話があるから、君の審美眼も存外慥かかも知れん。どれ讀んで見給へ、僕が批評してやるから」と迷亭先生は審美眼の本家の樣な事を云ふ。主人は禪坊主が大燈國師の遺誡を讀む樣な聲を出して讀み始める。「巨人引力」「何だい巨人引力と云ふのは」「巨人引力と云ふ題さ」「妙な題だな、僕には意味がわからんね」「引力と云ふ名を持つて居る巨人といふ積りさ」「少し無理な積りだが表題だから先づ負けて置くとしよう。夫から早々本文を讀むさ、君は聲がいゝから中々面白い」「雜ぜかへしてはいかんよ」と豫め念を押して又讀み始める。

ケートは窓から外面を眺める。小兒が球を投げて遊んで居る。彼等は高く球を空中に擲つ。球は上へ上へとのぼる。暫らくすると落ちて來る。彼等は又球を高く擲つ。再び、三度。擲つ度に球は落ちてくる。何故落ちるのか、何故上へとのみのぼらぬかとケートが聞く。「巨人が地中に住む故に」と母が答へる。「彼は巨人引力である。彼は强い。彼は萬物を己の方へと引く。彼は家屋を地上に引く、引かねば飛んで仕舞ふ。小兒も飛んで仕舞ふ。葉が落ちるのを見たらう。あれは巨人引力が呼ぶのである。本を落とす事があらう。巨人引力が來いといふからである。球が空にあがる。

巨人引力は呼ぶ、呼ぶと落ちてくる」

「それぎりかい」「むゝ、甘いぢやないか」「いや是には恐れ入つた。飛んだ所でトチメンボーの御返禮に預かつた」「御返禮でもなんでもないさ。實際うまいから譯して見たのさ。君はさう思はんかね」と金縁の眼鏡の奥を見る。「どうも驚いたね。君にして此技倆あらんとは、全く今度といふ今度は擔がれたよ、降參々々」と一人で承知して一人で喋舌る。主人には一向通じない。「何も君を降參させる考へはないさ。只面白い文章だと思つたから譯して見た計りさ」「いや實に面白い。さう來なくつちや本ものでない。凄いものだ。恐縮だ」「そんなに恐縮するには及ばん。僕も近頃は水彩畫をやめたから、其代りに文章でもやらうと思つてね」「どうして、遠近無差別黑白平等の水彩畫の比ぢやない。感服の至りだよ」「さうほめてくれると僕も乘り氣になる」と主人は飽く迄も疳違ひをして居る。

所へ寒月君が先日は失禮しましたと這入つて來る。「いや失敬。今大變な名文を拜聽してトチメンボーの亡魂を退治られた所で」と迷亭先生は譯のわからぬ事をほのめかす。「はあ、さうですか」と是も譯の分らぬ挨拶をする。主人丈は左のみ浮かれた氣色もない。「先日は君の紹介で越智東風と云ふ人が來たよ」「あゝ上がりましたか、あの越智東風と云ふ男は至つて正直な男ですが、少し變つて居る所があるので、或は御迷惑かと思ひましたが、是非紹介して呉れといふものですから……」「別に迷惑の事もないがね……」「こちらへ上がつても自分の姓名のことについて何か辯じて行きやしませんか」「いゝえ、そんな話しもなかつた樣だ」「さうですか、どこへ行つても初對面の人には自分の名前の講釋をするのが癖でしてね」「どんな講釋をするんだい」と事あれかしと待ち構へた迷亭君は口を入れる。「あの東風と云ふのを

音で讀まれると大變氣にするので」「はてね」と迷亭先生は金唐皮の煙草入から煙草をつまみ出す。「私の名は越智東風ではありません、越智こちですと必ず斷りますよ」「妙だね」と雲井を腹の底迄呑み込む。「それが全く文學熱から來たので、こちと讀むと遠近と云ふ成語になる、のみならず其姓名が韻を踏んで居ると云ふのが得意なんです。それだから東風を音で讀むと僕が折角の苦心を人が買つて呉れないといつて不平を云ふのです」「こりや成程變つてる」と迷亭先生は圖に乘つて腹の底から雲井を鼻の孔迄吐き返す。途中で烟が戸惑ひをして咽喉の出口へ引きかゝる。先生は煙管を握つてごほん／＼と咽び返る。「先日來た時は朗讀會で船頭になつて女學生に笑はれたといつて居たよ」と主人は笑ひながら云ふ。「うむそれそれ」と迷亭先生が煙管で膝頭を叩く。吾輩は險呑になつたから少し傍を離れる。「其朗讀會さ。先達てトチメンボーを御馳走した時にね。其話が出たよ。何でも第二回には知名の文士を招待して大會をやる積りだから、先生にも是非御臨席を願ひ度いつて。夫から僕が今度も近松の世話物をやる積りかいと聞くと、いえ此次はずつと新しいものを選んで金色夜叉にしましたと云ふから、君にや何の役が當たつてるかと聞いたら、私はお宮ですといつたのさ。東風のお宮は面白からう。僕は是非出席して喝采しようと思つてるよ」「面白いでせう」と寒月君が妙な笑ひ方をする。「然し、あの男はどこ迄も誠實で輕薄な所がないから好い。迷亭抔とは大違ひだ」と主人はアンドレア・デル・サルトと孔雀の舌とトチメンボーの復讐を一度にとる。迷亭君は氣にも留めない樣子で「どうせ僕抔は行德の俎と云ふ格だからなあ」と笑ふ。「まづそんな所だらう」と主人が云ふ。實は行德の俎と云ふ語を主人は解さないのであるが、さすが永年敎師をして胡魔化しつけて居るものだから、こんな時には敎場の經驗を社交上にも應用するのである。

「行徳の俎といふのは何の事ですか」と寒月が眞率に聞く。主人は床の方を見て「あの水仙は暮に僕が風呂の歸りがけに買つて來て插したのだが、よく持つぢやないか」と行徳の俎を無理にねぢ伏せる。「暮といへば、去年の暮に僕は實に不思議な經驗をしたよ」と迷亭が煙管を大神樂の如く指の先で廻す。「どんな經驗か、聞かし給へ」と主人は行徳の俎を遠く後に見捨てた氣で ほつと息をつく。迷亭先生の不思議な經驗といふのを聞くと左の如くである。

「慥か暮の二十七日と記憶して居るがね。例の東風から參堂の上是非文藝上の御高話を伺ひたいから御在宿を願ふと云ふ先觸れがあつたので、朝から心待ちに待つて居ると先生中々來ないやね。晝飯を食つてストーヴの前でパリー・ペーンの滑稽物を讀んで居る所へ靜岡の母から手紙が來たから見ると、年寄丈にいつ迄も僕を子供の樣に思つてね。寒中は夜間外出をするなとか、冷水浴もいゝがストーヴを焚いて室を煖かにしてやらないと風邪を引くとか、色々の注意があるのさ。成程親は難有いものだ、他人ではとてもかうはいかないと、呑氣な僕も其時丈は大いに感動した。それにつけても、こんなにのらくらして居ては勿體ない。何か大著述でもして家名を揚げなくてはならん。母の生きて居るうちに天下をして明治の文壇に迷亭先生あるを知らしめたいと云ふ氣になつた。それから猶讀んで行くと御前なんぞは實に仕合せ者だ。露西亞と戰爭が始まつて若い人達は大變な辛苦をして御國の爲に働いて居るのに、節季師走でもお正月の樣に氣樂に遊んで居ると書いてある。――僕はこれでも母の思つてる樣に遊んぢや居ないやね――其後へ持つて來て、僕の小學校時代の朋友で今度の戰爭に出て死んだり負傷したものの名前が列擧してあるのさ、其名前を一々讀んだ時には何だか世の中が味氣なくなつて、人間もつまらないと云ふ氣が起こつたよ。一

番仕舞ひにね。私も取る年に候へば初春の御雜煮を祝ひ候も今度限りかと……何だか心細い事が書いてあるんで、猶の事氣がくさ／＼して仕舞つて、早く東風が來れば好いと思つたが、先生どうしても來ない。其中とう／＼晩飯になつたから、母へ返事でも書かうと思つて一寸十二三行かいた。母の手紙は六尺以上もあるのだが、僕にはとてもそんな藝は出來んから、何時でも十行内外で御免蒙る事に極めてあるのさ。すると一日動かずに居つたものだから、胃の具合が妙に苦しい。東風が來たら待たせて置けと云ふ氣になつて、郵便を入れながら散歩に出掛けたと思ひ給へ。いつになく富士見町の方へは足が向かないで土手三番町の方へ我知らず出て仕舞つた。丁度其晩は少し曇つて、から風が御濠の向うから吹き附ける、非常に寒い。神樂坂の方から汽車がヒューと鳴つて土手下を通り過ぎる。大變淋しい感じがする。暮、戰死、老衰、無常迅速抔と云ふ奴が頭の中をぐる／＼馳け廻る。よく人が首を縊ると云ふが斯んな時に不圖誘はれて死ぬ氣になるのぢやないかと思ひ出す。ひよいと首を上げて土手の上を見ると、何時の間にか例の松の眞下に來て居るのさ」

「例の松た何だい」と主人が斷句を投げ入れる。

「首懸の松さ」と迷亭は領を縮める。

「首懸の松は鴻の臺でせう」寒月が波紋をひろげる。

「鴻の臺のは鐘懸の松で、土手三番町のは首懸の松さ。なぜ斯う云ふ名が附いたかと云ふと、昔からの言ひ傳へで誰でも此松の下へ來ると首が縊り度くなる。土手の上に松は何十本となくあるが、そら首縊りだと來て見ると必ず此松へぶら下がつて居る。年に二三返は屹度ぶら下がつて居る。どうしても他の松で

は死ぬ氣にならん。見ると、うまい具合に枝が往來の方へ横に出て居る。あゝ好い枝振りだ。あの儘にして置くのは惜しいものだ。どうかしてあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か來ないかしらと、四邊を見渡すと生憎誰も來ない。仕方がない、自分で下がらうか知らん。いや〳〵自分が下がつては命がない、危いからよさう。然し昔の希臘人は宴會の席で首縊りの眞似をして餘興を添へたと云ふ話がある。一人が臺の上へ登つて繩の結び目へ首を入れる途端に、他のものが臺を蹴返す。首を入れた當人は臺を引かれると同時に繩をゆるめて飛び下りるといふ趣向である。果してそれが事實なら別段恐るゝにも及ばん、僕も一つ試みようと枝へ手を懸けて見ると好い具合に撓る。撓り按排が實に美的である。首がかゝつてふは〳〵する所を想像して見ると嬉しくて堪らん。是非やる事にしようと思つたが、もし東風が來て待つて居ると氣の毒だと考へ出した。それでは先づ東風に逢つて約束通り話しをして、それから出直さうと云ふ氣になつて遂にうちへ歸つたのさ」

「それで市が榮えたのかい」と主人が聞く。

「面白いですな」と寒月がにや〳〵しながら云ふ。

「うちへ歸つて見ると東風は來て居ない。然し今日は無據處差支へがあつて出られぬ。何れ永日御面晤を期すといふ端書があつたので、やつと安心して、これなら心置きなく首が縊れる、嬉しいと思つた。で早速下駄を引き懸けて、急ぎ足で元の所へ引き返して見る……」と云つて主人と寒月の顔を見て澄まして居る。

「見るとどうしたんだい」と主人は少し焦れる。

「愈〻佳境に入りますね」と寒月は羽織の紐をひねくる。
「見ると、もう誰か來て先へぶら下がつて居る。たつた一足違ひでねえ君、殘念な事をしたよ。今考へると何でも其時は死神に取りつかれたんだね。ゼームス抔に云はせると副意識下の幽冥界と、僕が存在して居る現實界が、一種の因果法によつて互に感應したんだらう。實に不思議な事があるものぢやないか」
迷亭は澄まし返つて居る。
主人はまたやられたと思ひ乍ら何も云はずに空也餅を頰張つて口をもご〳〵云はして居る。
寒月は火鉢の灰を丁寧に掻き馴らして、俯向いてにや〳〵笑つて居たが、やがて口を開く。極めて靜かな調子である。
「成程伺つて見ると不思議な事で一寸有りさうにも思はれませんが、私抔は自分で矢張り似た樣な經驗をつい近頃したものですから、少しも疑ふ氣になりません」
「おや君も首を縊り度くなつたのかい」
「いえ私のは首ぢやないんで。是も丁度明ければ昨年の暮の事で、しかも先生と同日同刻位に起こつた出來事ですから、猶更不思議に思はれます」
「こりや面白い」と迷亭も空也餅を頰張る。
「其日は向島の知人の家で忘年會兼合奏會がありまして、私もそれへヴイオリンを携へて行きました。十五六人令孃やら令夫人が集まつて中々盛會で、近來の快事と思ふ位に萬事が整つて居ました。晩餐も濟み合奏も濟んで、四方山の話が出て時刻も大分遲くなつたから、もう暇乞ひをして歸らうかと思つて居ま

すと、某博士の夫人が私のそばへ來て、あなたは〇〇子さんの御病氣を御承知ですかと小聲で聞きますので、實は其兩三日前に逢つた時は平生の通り何所も悪い樣には見受けませんでしたから、私も驚いて詳しく樣子を聞いて見ますと、私の逢つた其晩から急に發熱して色々な囈語を絶間なく口走るさうで、其丈なら宜いですが、其囈語のうちに私の名が時々出て來るといふのです。

主人は無論、迷亭先生も「御安くないね」抔といふ月並は云はず。靜粛に謹聽して居る。

「醫者を呼んで見てもらふと、何だか病名はわからんが、何しろ熱が劇しいので腦を侵して居るから、もし睡眠劑が思ふ樣に功を奏しないと危險であると云ふ診斷だそうで、私はそれを聞くや否や一種いやな感じが起こつたのです。丁度夢でうなされる時の樣な重くるしい感じで、周圍の空氣が急に固形體になつて四方から吾身をしめつける如く思はれました。歸り道にも其事ばかりが頭の中にあつて苦しくて堪らない。あの綺麗な、あの快活な、あの健康な〇〇子さんが……」

「一寸失敬だが待つて呉れ給へ。さつきから伺つて居ると〇〇子さんと云ふのが二遍ばかり聞こえる樣だが、もし差支へがなければ承はりたいね、君」と主人を顧ると、主人も「うむ」と生返事をする。

「いやそれ丈は當人の迷惑になるかも知れませんから廢しませう」

「凡て曖々然として昧々然たるかたで行く積りかね」

「冷笑なさつてはいけません、極眞面目な話なんですから……兎に角あの婦人が急にそんな病氣になつた事を考へると、實に飛花落葉の感慨で胸が一杯になつて、總身の活氣が一度にストライキを起こした樣に元氣がにはかに滅入つて仕舞ひまして、只蹌々として踉々といふ形で吾妻橋へきかゝつたのです。欄干

に待つて下を見ると滿潮か干潮か分りませんが、黑い水がかたまつて只動いて居る樣に見えます。花川戸の方から人力車が一臺馳けて來て橋の上を通りました。其提灯の火を見送つて居ると、段々小さくなつて札幌ビールの處で消えました。私は又水を見る。すると遙かの川上の方で私の名を呼ぶ聲が聞こえるのです。はてな、今時分人に呼ばれる譯はないが誰だらうと水の面をすかして見ましたが、暗くて何も分りません。氣のせゐに違ひない、早々歸らうと思つて、一足二足あるき出すと、又微かな聲で遠くから私の名を呼ぶのです。私は又立ち留まつて耳を立てて聞きました。三度目に呼ばれた時には欄干に捕まつて居ながら膝頭ががく／＼慄へ出したのです。其聲は遠くの方か、川の底から出る樣ですが、紛れもない〇〇子の聲なんでせう。私は覺えず『はーい』と返事をしたのです。其返事が大きかつたものですから靜かな水に響いて自分で、自分の聲に驚かされて、はつと周圍を見渡しました。人も犬も月も何も見えません。其時に私は此『夜』の中に卷き込まれて、あの聲の出る所へ行きたいと云ふ氣がむら／＼と起こつたのです。〇〇子の聲が又苦しさうに、訴へる樣に、救ひを求める樣に私の耳を刺し通したので、今度は『今直ぐに行きます』と答へて欄干から半身を出して黑い水を眺めました。どうも私を呼ぶ聲が浪の下から無理に洩れて來る樣に思はれましてね。此水の下だなと思ひながら私はとう／＼欄干の上に乘りましたよ。今度呼んだら飛び込まうと決心して流を見詰めて居ると又憐れな聲が絲の樣に浮いて來る。こゝだと思つて力を込めて一旦飛び上がつて置いて、そして小石か何ぞの樣に未練なく落ちて仕舞ひました」

「とう／＼飛び込んだのかい」と主人が眼をぱちつかせて問ふ。

「其所迄行かうとは思はなかつた」と迷亭が自分の鼻の頭を一寸つまむ。

「飛び込んだ後は氣が遠くなつて、しばらくは夢中でした。やがて眼がさめて見ると寒くはあるが、どこも濡れた所も何もない、水を飲んだ樣な感じもしない。慥かに飛び込んだ筈だが實に不思議だ。こりや變だと氣が附いて其所いらを見渡すと驚きましたね。水の中へ飛び込んだ積りで居た所が、つい間違つて橋の眞中へ飛び下りたので、其時は實に殘念でした。前と後の間違ひ丈であの聲の出る所へ行く事が出來なかつたのです」寒月はにや／＼笑ひながら例の如く羽織の紐を荷厄介にして居る。

「ハヽヽ是は面白い。僕の經驗とよく似て居る所が奇だ。矢張りゼームス教授の材料になるね。人間の感應と云ふ題で寫生文にしたら屹度文壇を驚かすよ。……そして其〇〇子さんの病氣はどうなつたかね」と迷亭先生が追窮する。

「二三日前年始に行きましたら、門の内で下女と羽根を突いて居ましたから病氣は全快したものと見えます」

主人は最前から沈思の體であつたが、此時漸く口を開いて、「僕にもある」と負けぬ氣を出す。

「あるつて、何があるんだい」迷亭の眼中に主人抔は無論ない。

「僕のも去年の暮の事だ」

「みんな去年の暮は暗合で妙ですな」と寒月が笑ふ。缺けた前齒のふちに空也餅が着いて居る。

「矢張り同日同刻ぢやないか」と迷亭がまぜ返す。

「いや日は違ふ樣だ。何でも二十日頃だよ。細君が御歳暮の代りに攝津大掾を聞かして呉れろと云ふから、連れて行つてやらん事もないが今日の語り物は何だと聞いたら、細君が新聞を參考して鰻谷だと云ふ

のさ。鰻谷は嫌ひだから今日はよさうと其日はやめにした。翌日になると細君がまた新聞を持つて來て、今日は堀川だからいゝでせうと云ふ。堀川は三味線もので賑やかな計りで實がないからよさうと云ふと、細君は不平な顔をして引き下がつた。其翌日になると細君が云ふには今日は三十三間堂です。私は是非攝津の三十三間堂が聞きたい。あなたは三十三間堂も御嫌ひか知らないが、私に聞かせるのだから一所に行つて下すつても宜いでせうと手詰めの談判をする。御前がそんなに行きたいなら行つても宜しい、然し一世一代と云ふので大變な大入だから到底突懸けに行つたつて這入れる氣遣ひはない。元來あゝ云ふ場所へ行くには茶屋と云ふものがあつて、それと交渉して相當の席を豫約するのが正當の手續きだから、それを踏まないで常規を脱した事をするのはよくない、殘念だが今日はやめようと云ふと、細君は凄い眼付をして、私は女ですからそんな六づかしい手續きなんか知りませんが、大原のお母さんも、鈴木の君代さんも正當の手續きを踏まないで立派に聞いて來たんですから、いくらあなたが教師だからつて、さう手數のかかる見物をしないでも濟みませう、あなたはあんまりだと泣く樣な聲を出す。それぢや駄目でもまあ行く事にしよう。晩飯をくつて電車で行かうと降參をすると、行くなら四時迄に向うへ着く樣にしなくつちや行けません、そんなぐづ〳〵しては居られませんと急に勢がいゝ。何故四時迄に行かなくては駄目なんだと聞き返すと、其位早く行つて場所をとらなくちや這入れないからですと鈴木の君代さんから教へられた通りを述べる。それぢや四時を過ぎればもう駄目なんだねと念を押して見たら、えゝ駄目ですともと答へる。すると君、不思議な事には其時から急に惡寒がし出してね」

「奥さんがですか」と寒月が聞く。

「なに細君はぴん／＼して居らあね。僕がさ。何だか穴の開いた風船玉の樣に一度に萎縮する感じが起こると思ふと、もう眼がぐら／＼して動けなくなつた」

「急病だね」と迷亭が註釋を加へる。

「あゝ困つた事になつた。細君が年に一度の願ひだから是非叶へてやりたい。平生叱り附けたり、口を利かなかつたり、身上の苦勞をさせたり、子供の世話をさせたりする計りで、何一つ洒掃薪水の勞に酬いた事はない。今日は幸ひ時間もある、嚢中には四五枚の堵物もある。連れて行けば行かれる。細君も行きたいだらう、僕も連れて行つてやりたい。是非連れて行つてやり度いが、かう惡寒がして眼がくらんでは電車へ乘る所か、靴脫へ降りる事も出來ない。あゝ氣の毒だ氣の毒だと思ふと猶惡寒がして猶眼がくらんでくる。早く醫者に見てもらつて服藥でもしたら四時前には全快するだらうと、それから細君と相談をして甘木醫學士を迎ひにやると生憎昨夜が當番でまだ大學から歸らない。二時頃にはお歸りになりますから、歸り次第すぐ上げますと云ふ返事である。困つたなあ、今杏仁水でも飮めば四時前には屹度癒るに極まつて居るんだが、運の惡い時には何事も思ふ樣に行かんもので、たまさか細君の喜ぶ笑顏を見て樂しまうと云ふ豫算も、がらりと外れさうになつて來る。細君は恨めしい顏付をして、到底入らつしやれませんかと聞く。行くよ、必ず行くよ。四時迄には屹度直つて見せるから安心して居るがいゝ。早く顏でも洗つて着物でも着換へて待つて居るがいゝ、と口では云つた樣なもの、胸中は無限の感慨である。惡寒は益劇しくなる、眼は愈ぐら／＼する。もしや四時迄に全快して約束を履行する事が出來なかつたら、氣の狹い女の事だから何をするかも知れない。情ない仕儀になつて來た。どうしたらよからう。萬一の事を考へると

今の内に有爲轉變の理、生者必滅の道を說き聞かして、もしもの變が起つた時取り亂さない位の覺悟をさせるのも、夫の妻に對する義務ではあるまいかと考へ出した。僕は速かに細君を書齋へ呼んだよ。呼んでお前は女だけれども many a slip 'twixt the cup and the lip と云ふ西洋の諺位は心得て居るだらうと聞くと、そんな横文字なんか誰が知るもんですか、あなたは人が英語を知らないのを御存じの癖にわざと英語を使つて人にからかふのだから、宜しう御座います、どうせ英語なんかは出來ないんですから。そんなに英語が御好きなら、何故耶蘇學校の卒業生かなんかをお貰ひなさらなかつたんです。あなた位冷酷な人はありはしない、と非常な權幕なんで、僕も折角の計畫の腰を折られて仕舞つた。君等にも辯解するが僕の英語は決して惡意で使つた譯ぢやない。全く妻を愛する至情から出たので、それを妻の樣に解釋されては僕も立つ瀨がない。それにさつきからの惡寒と眩暈で少し腦が亂れて居る所へもつて來て、早く有爲轉變、生者必滅の理を呑み込ませようと少し急き込んだものだから、つい細君の英語を知らないと云ふ事を忘れて、何の氣も附かずに使つて仕舞つた譯さ。考へると是は僕が惡い、全く手落ちであつた。此失敗で惡寒は益強くなる、眼は愈ぐら〳〵する。細君は命ぜられた通り風呂場へ行つて兩肌を脫いで御化粧をして、簞笥から着物を出して着換へる。もう何時でも出掛けられますと云ふ風情で待ち構へて居る。僕は氣が氣でない。早く甘木君が來て吳れゝば善いがと思つて時計を見るともう三時だ。四時にはもう一時間しかない。「そろ〳〵出掛けませうか」と細君が書齋の開き戶を開けて顏を出す。自分の妻を褒めるのは可笑しい樣であるが、僕は此時程細君を美しいと思つた事はなかつた。もろ肌を脫いで石鹼で磨き上げた皮膚がぴかついて黑縮緬の羽織と反映して居る。其顏が石鹼と攝津大掾を聞かうと云ふ希望との

二つで、有形無形の兩方面から輝いて見える。どうしても其希望を滿足させて出掛けてやらうと云ふ氣になる。それぢや一寸散步して行かうかな、と一ぷくふかして居ると漸く甘木先生が來た。うまい、注文通りに行つた。が容態をはなすと、甘木先生は僕の舌を眺めて、手を握つて、胸を敲いて背を撫でて、目縁を引つ繰り返して、頭蓋骨をさすつて、しばらく考へ込んで居る。『どうも少し險呑な樣な氣がしまして』と僕が云ふと、先生は落ち附いて『いえ格別の事も御座いますまい』と云ふ。『あの一寸位外出致しても差支へは御座いますまいね』と細君が聞く。『左樣』と先生は又考へ込む。『御氣分さへ御惡くなければ……』『氣分は惡いですよ』と僕が云ふ。『では兎も角も頓服と水藥を上げますから』『へえどうか、何だか、危い樣になりさうですな』『いや決して御心配になる程の事ぢや御座いません、神經を御起しになるといけませんよ』と先生が歸る。三時は三十分過ぎた。下女を藥取りにやる。細君の嚴命で馳け出して行つて、馳け出して歸つてくる。四時十五分前である。四時にはまだ十五分ある。すると四時十五分前頃から、今迄何とも無かつたのに急に嘔氣を催して來た。細君は水藥を茶碗へ注いで僕の前へ置いてくれたから、茶碗を取り上げて飲まうとすると、胃の中からゲーと云ふ物が吶喊して出てくる。不得已茶碗を下へ置く。細君は『早く御飲みになつたら宜いでせう』と逼る。早く飲んで早く出掛けなくては義理が惡い。思ひ切つて飲んで仕舞はうと又茶碗へ唇をつけると、又ゲーが執念深く妨害をする。飲まうとしては茶碗を置き、飲まうとしては茶碗を置いて居ると、茶の間の時計がチン／＼チン／＼と四時を打つた。さあ四時だ、愚圖々々しては居られんと茶碗を又取り上げると、不思議だねえ君、實に不思議とは此事だらう、四時の音と共に吐き氣がすつかり留まつて、水藥が何の苦なしに飲めたよ。それから四時十分

頃になると、甘木先生の名醫と云ふ事も始めて理解する事が出來たんだが、背中がぞく／＼するのも、眼がぐら／＼するのも夢の樣に消えて、當分立つ事も出來まいと思つた病氣が忽ち全快したのは嬉しかつた」

「それから歌舞伎座へ一所に行つたのかい」と迷亭が要領を得んと云ふ顏附をして聞く。

「行きたかつたが、四時を過ぎちや這入れないと云ふ細君の意見なんだから仕方がない、やめにしたさ。もう十五分許り早く甘木先生が來て呉れたら僕の義理も立つし、妻も滿足したらうに、僅か十五分の差でね、實に殘念な事をした。考へ出すとあぶない所であつたと今でも思ふのさ」

語り了つた主人は漸く自分の義務を濟ました樣な風をする。是で兩人に對して顏が立つと云ふ氣かも知れん。

寒月は例の如く缺けた齒を出して笑ひながら「それは殘念でしたな」と云ふ。迷亭はとほけた顏をして「君の樣な親切な夫を持つた細君は實に仕合せだなあ」と獨り言の樣にいふ。障子の蔭でエヘンと云ふ細君の咳拂ひが聞こえる。

吾輩は大人しく三人の話しを順番に聞いて居たが、可笑しくも悲しくもなかつた。人間といふものは時間を潰す爲に強ひて口を運動させて、可笑しくもない事を笑つたり、面白くもない事を嬉しがつたりする外に能もない者だと思つた。吾輩の主人の我儘で偏狹な事は前から承知して居たが、平常は言葉數を使はないので何だか了解しかねる點がある樣に思はれて居た。その了解しかねる點に少しは恐ろしいと云ふ感じもあつたが、今の話しを聞いてから急に輕蔑したくなつた。彼はなぜ兩人の話しを沈默して聞いて居られないのだらう。負けぬ氣になつて愚にもつかぬ駄辯を弄すれば何の所得があるだらう。エピクテタスに

そんな事を爲ろと書いてあるのか知らん。要するに主人も寒月も迷亭も太平の逸民で、彼等は絲瓜の如く風に吹かれて超然と澄まし切つて居る樣なものゝ、其實は矢張り娑婆氣もあり慾氣もある。競爭の念、勝たう勝たうの心は彼等が日常の談笑中にもちら〳〵とほのめいて、一歩進めば彼等が平常罵倒して居る俗骨共と一つ穴の動物になるのは猫より見て氣の毒の至りである。只其言語動作が普通の半可通の如く、紋切形の厭味を帶びてないのは聊かの取得でもあらう。

かう考へると急に三人の談話が面白くなくなつたので、三毛子の樣子でも見て來ようかと二絃琴の御師匠さんの庭口へ廻る。門松注目飾りは既に取り拂はれて正月も早十日となつたが、うらゝかな春日は一流れの雲も見えぬ深き空より四海天下を一度に照らして、十坪に足らぬ庭の面も元日の曙光を受けた時より鮮やかな活氣を呈して居る。椽側に座蒲團が一つあつて人影も見えず、障子も立て切つてあるのは御師匠さんは湯にでも行つたのか知らん。御師匠さんは留守でも構はんが、三毛子は少しは宜い方か、それが氣掛りである。ひつそりして人の氣合もしないから、泥足の儘椽側へ上がつて座蒲團の眞中へ寐轉んで見るといゝ心持ちだ。ついうと〳〵として、三毛子の事も忘れてうたゝ寐をして居ると、急に障子のうちで人聲がする。

「御苦勞だつた。出來たかえ」御師匠さんは矢張り留守ではなかつたのだ。「はい遲くなりまして、佛師屋へ參りましたら丁度出來上がつた所だと申しまして」「どれお見せなさい。あゝ綺麗に出來た。是で三毛も浮ばれませう。金は剝げる事はあるまいね」「えゝ念を押しましたら上等を使つたから是なら人間の位牌よりも持つと申して居りました。……夫から猫譽信女の譽の字は崩した方が恰好がいゝから少し劃

を變へたと申しました」「どれ〳〵早速御佛壇へ上げて御線香でも上げませう」
三毛子はどうかしたのかな、何だか樣子が變だと蒲團の上へ立ち上がる。チーン、南無猫譽信女、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と御師匠さんの聲がする。
「御前も囘向をしてお遣りなさい」
チーン、南無猫譽信女、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛と今度は下女の聲がする。吾輩は急に動悸がして來た。座蒲團の上に立つた儘、木彫の猫の樣に眼も動かさない。
「ほんとに殘念な事を致しましたね。始めはちよつと風邪を引いたんで御座いませうがねえ」「甘木さんが藥でも下さると、よかつたかも知れないよ」「一體あの甘木さんが惡う御座いますよ、あんまり三毛を馬鹿にし過ぎまさあね」「さう人樣の事を惡く云ふものではない。是も壽命だから」
三毛子も甘木先生に診察して貰つたものと見える。
「つまる所表通の教師のうちの野良猫が無暗に誘ひ出したからだと、わたしは思ふよ」「えゝあの畜生が三毛のかたきで御座いますよ」
少し辯解したかつたが、こゝが我慢のし所と唾を呑んで聞いて居る。話しはしばし途切れる。
「世の中は自由にならんものでなう。三毛の樣な器量よしは早死をするし。不器量な野良猫は達者でいたづらをして居るし……」「其通りで御座いますよ。三毛の樣な可愛らしい猫は鉦と太鼓で探してあるいたつて、二人とは居りませんからね」二匹と云ふ代りに二人といつた。下女の考へでは猫と人間とは同種族のものと思つて居るらしい。さう云へば此下女の顏は吾等猫屬と甚だ類似して居る。

「出來るものなら三毛の代りに……」「あの教師の所の野良が死ぬと御誂へ通りに參つたんで御座いますがねえ」

御誂へ通りになつては、ちと困る。死ぬと云ふ事はどんなものか、まだ經驗した事がないから好きとも嫌ひとも云へないが、先日餘り寒いので火消壺の中へもぐり込んで居たら、下女が吾輩の居るのも知らんで上から蓋をした事があつた。其時の苦しさは考へても恐ろしくなる程であつた。白君の說明によるとあの苦しみが今少し續くと死ぬのであるさうだ。三毛子の身代りになるのなら苦情もないが、あの苦しみを受けなくては死ぬ事が出來ないのなら、誰の爲でも死にたくはない。

「然し猫でも坊さんの御經を讀んでもらつたり、戒名をこしらへてもらつたのだから心殘りはあるまい」「さうで御座いますとも、全く果報者で御座いますよ。たゞ慾を云ふとあの坊さんの御經があまり輕少だつた樣で御座いますね」「少し短か過ぎた樣だつたから、大變御早う御座いますねと御尋ねをしたら、月桂寺さんは、えゝ利目のある所をちよいとやつて置きました、なに猫だからあの位で充分淨土へ行かれますと御仰しやつたよ」

「あらまあ……然しあの野良なんかは……」

吾輩は名前はないと屢〻斷つて置くのに、此下女は野良々々と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「罪が深いんですから、いくら難有い御經だつて浮ばれる事は御座いませんよ」

吾輩は其後野良が何百遍繰り返されたかを知らぬ。吾輩は此の際限なき談話を中途で聞き棄てゝ、布團をすべり落ちて椽側から飛び下りた時、八萬八千八百八十本の毛髮を一度にたてゝ身震ひをした。其後二

絃琴の御師匠さんの近所へは寄り附いた事がない。今頃は御師匠さん自身が月桂寺さんから輕少な御回向を受けて居るだらう。

近頃は外出する勇氣もない。何だか世間が慵く感ぜらるゝ。主人に劣らぬ程の無性猫となつた。主人が書齋にのみ閉ぢ籠つて居るのを人が失戀だ失戀だと評するのも無理はないと思ふ樣になつた。

鼠はまだ取つた事がないので、一時はお三から放逐論さへ呈出された事もあつたが、主人は吾輩の普通一般の猫でないと云ふ事を知つて居るものだから、吾輩は矢張りのらくらして此家に起臥して居る。此點に就いては、深く主人の恩を感謝すると同時に其活眼に對して敬服の意を表するに躊躇しない積りである。お三が吾輩を知らずして虐待するのは別に腹も立たない。今に左甚五郎が出て來て、吾輩の肖像を樓門の柱に刻み、日本のスタンランが好んで吾輩の似顏をカンヴスの上に描く樣になつたら、彼等鈍瞎漢は始めて自己の不明を恥づるであらう。

三

三毛子は死ぬ、黒は相手にならず、聊か寂寞の感はあるが、幸ひ人間に知己が出來たので左程退屈とも思はぬ。先達ては主人の許へ吾輩の寫眞を送つて呉れと手紙で依頼した男がある。此間は岡山の名産吉備團子を態々吾輩の名宛で屆けて呉れた人がある。段々人間から同情を寄せらるゝに從つて、己が猫である事は漸く忘却してくる。猫よりはいつの間にか人間の方へ接近して來た樣な心持ちになつて、同族を糾合して二本足の先生と雌雄を決しよう抔と云ふ料簡は昨今の所毛頭ない。夫のみか折々は吾輩も亦人間界の一人だと思ふ折さへある位に進化したのは頼母しい。敢て同族を輕蔑する次第ではない、只性情の近き所に向つて一身の安きを置くは勢の然らしむる所で、之を變心とか、輕薄とか、裏切りとか評せられては些と迷惑する。斯樣な言語を弄して人を罵詈するものに限つて融通の利かぬ貧乏性の男が多い樣だ。かう猫の習癖を脱化して見ると三毛子や黒の事計り荷厄介にして居る譯には行かん、矢張り人間同等の氣位で彼等の思想言行を評隲したくなる。是も無理はあるまい。只其位な見識を有して居る吾輩を矢張り一般猫兒の毛の生えたもの位に思つて、主人が吾輩に一言の挨拶もなく、吉備團子をわが物顔に喰ひ盡したのは殘念の次第である。寫眞もまだ撮つて送らぬ容子だ。是も不平と云へば不平だが、主人は主人、吾輩は吾輩で、相互の見解が自然異なるのは致し方もあるまい。吾輩はどこ迄も人間になり濟まして居るのだから、交際をせぬ猫の動作は、どうしても一寸筆に上りにくい。迷亭、寒月諸先生の評判丈で御免蒙る事に致さ

う。
今日は上天氣の日曜なので、主人はのそ〳〵書齋から出て來て、吾輩の傍へ筆硯と原稿用紙を並べて腹這ひになつて、しきりに何か唸つて居る。大方草稿を書き卸す序開きとして妙な聲を發するのだらうと注目して居ると、稍暫らくして筆太に「香一炷」とかいた。果てな、詩になるか、俳句になるか、香一炷とは、主人にしては少し洒落過ぎて居るがと思ふ間もなく、彼は香一炷を書き放しにして、新たに行を改めて「さつきから天然居士の事をかかうと考へて居る」と筆を走らせた。筆は夫丈ではたと止まつたぎり動かない。主人は筆を持つて首を捻つたが別段名案もないものと見えて筆の穗を嘗めだした。唇が眞黑になつたと見て居ると、今度は其下へ一寸丸をかいた。丸の中へ點を二つうつて眼をつける。眞中へ小鼻の開いた鼻をかいて、眞一文字に口を横へ引つ張つた、是では文章でも俳句でもない。主人も自分で愛想が盡きたと見えて、そこ〳〵に顏を塗り消して仕舞つた。主人は又行を改める。彼の考へによると行さへ改めれば詩か贊か語か錄か何かになるだらうと、只宛もなく考へて居るらしい。やがて「天然居士は空間を研究し、論語を讀み、燒芋を食ひ、鼻汁を垂らす人である」と言文一致體で一氣呵成に書き流した。何となくごた〳〵した文章である。夫から主人は之を遠慮なく朗讀して、いつになく「ハヽヽ面白い」と笑つたが、「鼻汁を垂らすのは、ちと酷だから消さう」と其句丈へ棒を引く。一本で濟む所を二本引き、三本引き、綺麗な併行線を描く。線がほかの行迄食み出しても構はず引いて居る。線が八本並んでもあとの句が出來ないと見えて、今度は筆を捨てて髭を捻つて見る。文章を髭から捻り出して御覽に入れますと云ふ見幕で猛烈に捻つてはねぢ上げ、ねぢ下ろして居る所へ、茶の間から細君が出て來てぴたりと主人の鼻の先

へ坐る。「あなた一寸」と呼ぶ。「なんだ」と主人は水中で銅鑼を叩く樣な聲を出す。返事が氣に入らないと見えて、細君は又「あなた一寸」と出直す。「なんだよ」と今度は鼻の穴へ親指と人さし指を入れて鼻毛をぐつと拔く。「今月はちつと足りませんが……」「足りん筈はない、醫者へも藥禮は濟ましたし、本屋へも先月拂つたぢやないか。今月は餘らなければならん」と澄まして拔き取つた鼻毛を天下の奇觀の如く眺めて居る。「夫でもあなたが御飯を召し上がらんで麵麭を御食べになつたり、ジャムを御舐めになるものですから」「元來ジャムを幾罐舐めたのかい」「今月は八つ入りましたよ」「八つ？そんなに舐めた覺えはない」「あなた計りぢやありません、子供も舐めます」「いくら舐めたつて五六圓位なものだ」と主人は平氣な顔で鼻毛を一本々々丁寧に原稿紙の上へ植ゑ附ける。肉が附いて居るのでぴんと針を立てた如くに立つ。主人は思はぬ發見をして感じ入つた體で、ふつと吹いて見る。粘着力が強いので決して飛ばない。「いやに頑固だな」と主人は一生懸命に吹く。「ジャム計りぢやないんです、外に買はなけりやならない物もあります」と細君は大いに不平な氣色を兩頰に漲らす。「あるかも知れないさ」と主人は又指を突き込んでぐいと鼻毛を拔く。赤いのや、黑いのや、種々の色が交る中に一本眞白なのがある。大いに驚いた樣子で穴の開く程眺めて居た主人は指の股へ挾んだ儘、其鼻毛を細君の顏の前へ出す。「あら、いやだ」と細君は顏をしかめて、主人の手を突き戻す。「一寸見ろ、鼻毛の白髮だ」と主人は大いに感動した樣子である。さすがの細君も笑ひながら茶の間へ這入る。經濟問題は斷念したらしい。主人は又天然居士に取り懸かる。

鼻毛で細君を追ひ拂つた主人は、先づ是で安心と云はぬ許りに鼻毛を拔いては原稿をかゝうと焦る體で

あるが、中々筆は動かない。「焼芋を食ふも蛇足だ、割愛しよう」と遂に此句も抹殺する。「香一炷もあまり唐突だから已めろ」と惜し氣もなく筆誅する。餘す所は「天然居士は空間を研究し、論語を讀む人である」と云ふ一句になつて仕舞つた。主人は是では何だか簡單すぎる樣だなと考へて居たが、えゝ面倒臭い、文章は御廢しにして、銘丈にしろと、筆を十文字に揮つて原稿紙の上へ下手な文人畫の蘭を勢よくかく。折角の苦心も一字殘らず落第となつた。夫から裏を返して「空間に生れ、空間を究め、空間に死す。空たり間たり天然居士、噫」と意味不明な語を連ねて居る所へ例の如く迷亭が這入つて來る。迷亭は人の家も自分の家も同じものと心得て居るのか案内も乞はず、づかづか上がつてくる、のみならず時には勝手口から飄然と舞ひ込む事もある。心配、遠慮、氣兼、苦勞を生れる時どこかへ振り落とした男である。

「又巨人引力かね」と立つた儘主人に聞く。「さう何時でも巨人引力計り書いては居らんさ。天然居士の墓銘を撰して居る所なんだ」と大袈裟な事を云ふ。「天然居士と云ふなあ矢張り偶然童子の樣な戒名かね」と迷亭は相變らず出鱈目を云ふ。「偶然童子と云ふのもあるのかい」「なに有りやしないが、先づ其見當だらうと思つて居らあね」「偶然童子と云ふのは僕の知つたものぢやない樣だが、天然居士と云ふのは君の知つてる男だぜ」「一體だれが天然居士なんて名を附けて澄まして居るんだい」「例の曾呂崎の事だ。卒業して大學院へ這入つて空間論と云ふ題目で研究して居たが、餘り勉強し過ぎて腹膜炎で死んで仕舞つた。曾呂崎はあれでも僕の親友なんだからな」「親友でもいゝさ、決して惡いとは云やしない。然し其曾呂崎を天然居士に變化させたのは一體誰の所作だい」「僕さ、僕がつけてやつたんだ。元來坊主のつける戒名程俗なものは無いからな」と天然居士は餘程雅な名の樣に自慢する。迷亭は笑ひながら「まあ其

墓碑銘と云ふ奴を見せ給へ」と原稿を取り上げて「何だ……空間に生れ、空間を究め、空間に死す、空たり間たり天然居士、噫」と大きな聲で讀み上げる。「成程是あ善い、天然居士相當の所だ」主人は嬉しさうに「善いだらう」と云ふ。「此墓銘を澤庵石へ彫り附けて本堂の裏手へ力石の樣に抛り出して置くんだね。雅でいゝや、天然居士も浮ばれる譯だ」「僕もさうしようと思つて居るのさ」と主人は至極眞面目に答へたが「僕あ一寸失敬するよ、ぢき歸るから、猫にでもからかつて居て吳れ給へ」と迷亭の返事も待たず風然と出て行く。

計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて無愛想な顏もして居られないから、ニャー〳〵と愛嬌を振り蒔いて膝の上へ這ひ上がつて見た。すると迷亭は「イヨー大分肥つたな、どれ」と無作法にも吾輩の襟髪を攫んで宙へ釣るす。「あと足を斯うぶら下げては、鼠は捕れさうもない、……どうです奥さん、此猫は鼠を捕りますかね」と吾輩許りでは不足だと見えて、隣の室の細君に話しかける。「鼠所ぢや御座いません。御雜煮を食べて踊りををどるんですもの」と細君は飛んだ所で舊惡を訐く。吾輩は宙乘りをしながらも少々極りが惡かつた。迷亭はまだ吾輩を卸して吳れない。「成程踊りでもをどりさうな顏だ。奥さん此猫は油斷のならない相好ですぜ。昔の草雙紙にある猫又に似て居ますよ」と勝手な事を言ひ乍ら、頻りに細君に話しかける。細君は迷惑さうに針仕事の手をやめて座敷へ出てくる。

「どうも御退屈樣、もう歸りませう」と茶を注ぎ易へて迷亭の前へ出す。「どこへ行つたんですかね」「どこへ參るにも斷つて行つた事の無い男ですから分りかねますが、大方御醫者へでも行つたんでせう」「甘木さんですか、甘木さんもあんな病人に捕まつちや災難ですな」「へえ」と細君は挨拶の仕樣もない

と見えて簡單な答へをする。迷亭は一向頓着しない。「近頃はどうです、少しは胃の加減がいゝんですか」「いゝか惡いか頓と分りません、いくら甘木さんにかゝつたつて、あんなにジャム計り嘗めては胃病の直る譯がないと思ひます」と細君は先刻の不平を暗に迷亭に洩らす。「そんなにジャムを嘗めるんですか、丸で子供の樣ですね」「ジャム計りぢやないんで、此頃は胃病の藥だとか云つて大根卸しを無暗に嘗めますので……」「驚いたな」と迷亭は感嘆する。「何でも大根卸しの中にはヂヤスターゼが有るとか云ふ話を新聞で讀んでからです」「成程、それでジャムの損害を償はうと云ふ趣向ですな。中々考へて居らあ、ハヽヽヽ」と迷亭は細君の訴へを聞いて大いに愉快な氣色である。「此間抔は赤ん坊に迄嘗めさせまして……」「ジャムをですか」「いゝえ大根卸しを……あなた。坊や御父樣がうまいものをやるから御出でつて、――たまに子供を可愛がつて吳れるかと思ふと、そんな馬鹿な事計りをするんです。二三日前には中の娘を抱いて簞笥の上へ上げましてね……」「どう云ふ趣向がありました」と迷亭は何を聞いても趣向づくめに解釋する。「なに趣向も何も有りやしません。只其上から飛び下りて見ろと云ふんですわ。三つや四つの女の子ですもの、そんな御轉婆な事が出來る筈がないです」「成程こりや趣向が無さ過ぎましたね。然しあれで腹の中は毒のない善人ですよ」「あの上腹の中に毒があつちや、辛抱は出來ませんわ」と細君は大いに氣燄を揚げる。「まあそんなに不平を云はんでも善いでさあ。斯うやつて不足なく其日々々が暮らして行かれゝば上の分ですよ。苦沙彌君抔は道樂はせず、服裝にも構はず、地味に世帶向きに出來上がつた人でさあ」と迷亭は柄にない說敎を陽氣な調子でやつて居る。「所があなた大違ひで……」「何か內々でやりますかね。油斷のならない世の中だからね」と飄然とふは〳〵した返事をする。「ほかの道

樂はないですが、無暗に讀みもしない本計り買ひましてね。それも善い加減に見計らつて買つて呉れると善いんですけれど、勝手に丸善へ行つちや何冊でも取つて來て、月末になると知らん顏をして居るんですもの、去年の暮なんか、月々のが溜つて大變困りました」「なあに書物なんか取つて來る丈取つて來て構はんですよ。拂ひをとりに來たら、今にやる／＼と云つて居りや歸つて仕舞ひまさあ」「それでも、さう何時迄も引つ張る譯には參りませんから」と細君は憮然として居る。「それぢや譯を話して書籍費を削減させるさ」「どうして、そんな事を云つたつて、中々聞くものですか。此間抔は、貴樣は學者の妻にも似合はん、毫も書籍の價値を解して居らん。昔羅馬に斯う云ふ話がある、後學の爲聞いて置けと云ふんです」

「そいつは面白い、どんな話ですか」迷亭は乘り氣になる。細君に同情を表して居るといふより寧ろ好奇心に驅られて居る。「何でも昔羅馬に樽金とか云ふ王樣があつて……」「樽金？樽金はちと妙ですぜ」「私は唐人の名なんか六づかしくて覺えられませんわ。何でも七代目なんださうです」「成程七代目樽金は妙ですな。ふん其七代目樽金がどうかしましたかい」「あら、あなた迄冷かしては立つ瀬がありませんわ。知つていらつしやるなら敎へて下さればいゝぢやありませんか、人の惡い」と細君は迷亭へ食つて掛かる。

「何、冷かすなんて、そんな人の惡い事をする僕ぢやない。只七代目樽金は振つてると思つてね……えゝお待ちなさいよ、羅馬の七代目の王樣ですね。かうつと、慥かには覺えて居ないがタークヰン・ゼ・プラウドの事でせう。まあ誰でもいゝ、その王樣がどうしました」「その王樣の所へ一人の女が本を九冊持つて來て買つて呉れないかと云つたんださうです」「成程」「王樣がいくらなら賣るといつて聞いたら大變な高い事を云ふんですつて。餘り高いもんだから少し負けないかと云ふと其女がいきなり九冊の内の三冊

を火にくべて焚いて仕舞つたさうです」「惜しい事をしましたな」「其本の内には豫言か何か外で見られない事が書いてあるんですつて」「へえー」「王樣は九冊が六冊になつたから少しは價も減つたらうと思つて六冊でいくらだと聞くと、矢張り元の通り一文も引かないさうです。それは亂暴だと云ふと、其女は又三冊をとつて火にくべたさうです。王樣はまだ未練があつたと見えて、餘つた三冊をいくらで賣ると聞くと、矢張り九冊分のねだんを呉れと云ふさうです。九冊が六冊になり、六冊が三冊になつても、代價は元の通り一厘も引かない、それを引かせようとすると、殘つてる三冊も火にくべるかも知れないので、王樣はとう／＼高い御金を出して焚け餘りの三冊を買つたんですつて……どうだ此話で少しは書物の難有味が分つたか、どうだと力むのですけれど、私にや何が難有いんだか、まあ分りませんね」と細君は一家の見識を立てて迷亭の返答を促す。さすがの迷亭も少し窮したと見えて、袂からハンケチを出して吾輩をじやらして居たが「然し奧さん」と急に何か考へ附いた樣に大きな聲を出す。「あんなに本を買つて矢鱈に詰め込むものだから人から少しは學者だとか何とか云はれるんですよ。此間ある文學雜誌を見たら苦沙彌君の評が出て居りましたよ」「ほんとに？」と細君は向き直る。主人の評判が氣にかゝるのは、矢張り夫婦と見える。「何とかいてあつたんです」「なあに二三行許りですがね。苦沙彌君の文は行雲流水の如しとありましたよ」細君は少しにこ／＼して「それぎりですか」「其次にね……出づるかと思へば忽ち消え、逝いては長しなへに歸るを忘るとありましたよ」細君は妙な顏をして「賞めたんでせうか」と心元ない調子である。「まあ賞めた方でせうな」と迷亭は濟ましてハンケチを吾輩の眼の前にぶら下げる。「書物は商賣道具で仕方も御座んすまいが、餘つ程偏屈でしてねえ」迷亭は又別途の方面から來たなと思つて「偏

屁は少々偏屈ですね、學問をするものはどうせあんなですよ」と調子を合はせる樣な、辯護をする樣な、不卽不離の妙答をする。「先達て杯は學校から歸つてすぐわきへ出るのに着物を着換へるのが面倒だものですから、あなた、外套も脫がないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。御膳を炬燵櫓の上へ乘せまして――私は御櫃を抱へて坐つて見て居りましたが可笑しくつて……」「何だかハイカラ首實檢の樣ですな。然しそんな所が苦沙彌君の苦沙彌君たる所で――兎に角月並でない」と切ない褒め方をする。「月並か月並でないか女には分りませんが、なんぼ何でも、餘り亂暴ですわ」「然し月並より好いですよ」と無暗に加勢すると、細君は不滿な樣子で、「一體月並々々と皆さんが、よく仰しやいますが、どんなのが月並なんです」と開き直つて月並の定義を質問する。「月並ですか、月並と云ふと――左樣、ちと說明し惡いのですが……」「そんな曖昧なものなら月並だつて好ささうなものぢやありませんか」と細君は女人一流の論理法で詰め寄せる。「曖昧ぢやありませんよ、ちやんと分つて居ます、只說明し惡い丈の事でさあ」「何でも自分の嫌ひな事を月並と云ふんでせう」と細君は我知らず穿つた事を云ふ。迷亭もかうなると何とか月並の處置を附けなければならぬ仕儀となる。「奧さん、月並と云ふのはね、先づ年は二八か二九からぬと言はず語らず物思ひの間に寐轉んで居て、此日や天氣晴朗とくると必ず一瓢を携へて墨堤に遊ぶ連中を云ふんです」「そんな連中があるでせうか」と細君は分らんものだから好い加減な挨拶をする。「何だかごた〳〵して私には分りませんわ」と遂に我を折る。「それぢや馬琴の胴へメジョオ・ペンデニスの首をつけて、一二年歐洲の空氣で包んで置くんですね」「さうすると月並が出來るでせうか」迷亭は返事をしないで笑つて居る。「何、そんな手數のかゝる事をしないでも出來ます。中學校の生徒に白木屋の番

頭を加へて二で割ると立派な月並が出來上がります」「さうでせうか」と細君は首を捻つた儘納得し兼ねたと云ふ風情に見える。

「君まだ居るのか」と主人はいつの間にやら歸つて來て、迷亭の傍へ坐る。「まだ居るのかは些と酷だな、すぐ歸るから待つて居給へと言つたぢやないか」「萬事あれなんですもの」と細君は迷亭を顧る。「今君の留守中に君の逸話を殘らず聞いて仕舞つたぜ」「女は兎角多辯でいかん、人間も此猫位沈默を守るといゝがな」と主人は吾輩の頭を撫でて呉れる。「君は赤ん坊に大根卸しを嘗めさしたさうだな」「ふむ」と主人は笑つたが、「赤ん坊でも近頃の赤ん坊は中々利口だぜ。其れ以來、坊や辛いのはどこと聞くと屹度舌を出すから妙だ」「丸で犬に藝を仕込む氣で居るから殘酷だ。時に寒月はもう來さうなものだな」「寒月が來るのかい」と主人は不審な顏をする。「來るんだ。午後一時迄に苦沙彌の家へ來いと端書を出して置いたから」「人の都合も聞かんで勝手な事をする男だ。寒月を呼んで何をするんだい」「なあに、今日のはこつちの趣向ぢやない、寒月先生自身の要求さ。先生何でも理學協會で演說をするとか云ふのでね。其稽古をやるから、僕に聽いてくれと云ふから、そりや丁度いゝ、苦沙彌にも聞かしてやらうと云ふのでね。そこで君の家へ呼ぶ事にして置いたのさ――なあに、君はひま人だから丁度いゝやね――差支へなんぞある男ぢやない、聞くがいゝさ」と迷亭は獨りで呑み込んで居る。「物理學の演說なんか僕にや分らん」と主人は少々迷亭の專斷を憤つたものの如くに云ふ。「所が其問題がマグネ附けられたノッヅルに就いて抔と云ふ乾燥無味なものぢやないんだ。首縊りの力學と云ふ脫俗超凡な演題なのだから傾聽する價値があるさ」「君は首を縊り損なつた男だから傾聽するが好いが、僕なんざあ……」「歌舞伎座で惡寒が

する位の人間だから聞かれないと云ふ結論は出さうもないぜ」と例の如く軽口を叩く。細君はホヽと笑つて主人を顧みながら次の間へ退く。主人は無言の儘吾輩の頭を撫でる。此時のみは非常に丁寧な撫で方であつた。

それから約七分位すると注文通り寒月君が来る。今日は晩に演説をするといふので例になく立派なフロックを着て、洗濯し立ての白襟を聳かして、男振りを二割方上げて「少し後れまして」と落ち付き払つて挨拶をする。「さつきから二人で大待ちに待つた所なんだ。早速願はう、なあ君」と主人を見る。主人も已むを得ず「うむ」と生返事をする。寒月君はいそがない。「コップへ水を一杯頂戴しませう」と云ふ。「いよー本式にやるのか、次には拍手の請求と御出でなさるだらう」と迷亭は獨りで騒ぎ立てる。寒月君は内隠しから草稿を取り出して、徐ろに「稽古ですから、御遠慮なく御批評を願ひます」と前置をして、愈演説の御浚ひを始める。

「罪人を絞罪の刑に處すると云ふ事は重にアングロサクソン民族間に行はれた方法でありまして、夫より古代に溯つて考へますと、首縊りは重に自殺の方法として行はれた者であります。猶太人中に在つては罪人を石を抛げ附けて殺す習慣であつたさうで御座います。舊約全書を研究して見ますと所謂ハンギングなる語は罪人の死體を釣るして野獸又は肉食鳥の餌食とする意義と認められます。ヘロドタスの說に從つて見ますと、猶太人はエジプトを去る以前から夜中死骸を曝されることを痛く忌み嫌つた樣に思はれます。エジプト人は罪人の首を斬つて胴丈を十字架に釘附けにして夜中曝し物にしたさうで御座います。波斯人は……」「寒月君首縊りと縁が段々遠くなる樣だが大丈夫かい」と迷亭が口を入れる。「是から本論に這

入る所ですから、少々御辛抱を願ひます。……偖て波斯人はどうかと申しますと是も矢張り處刑には磔を用ひた樣で御座います。但し生きて居るうちに張附けに致したものか、死んでから釘を打つたものか、其邊はちと分りかねます……」「そんな事は分らんでもいゝさ」と主人は退屈さうに欠伸をする。「まだ色色御話し致したい事も御座いますが、御迷惑であらつしやいませうから……」「あらつしやいませうより、入らしやいませうの方が聞きいゝよ、ねえ苦沙彌君」と又迷亭が咎め立てをすると、主人は「どつちでも同じ事だ」と氣のない返事をする。「偖て愈本題に入りまして辯じます」「辯じますなんて講釋師の云ひ草だ。演舌家はもつと上品な詞を使つて貰ひ度いね」と迷亭先生又交ぜ返す。「辯じますが下品なら何と云つたらいゝでせう」と寒月君は少々むつとした調子で問ひかける。「迷亭のは聽いて居るのか、交ぜ返して居るのか判然しない。寒月君そんな彌次馬に構はず、さつさと遣るが好い」と主人は可成早く難關を切り拔けようとする。「むつとして辯じましたる柳かな、かね」と迷亭は不相變飄然たる事を云ふ。寒月は思はず吹き出す。「眞に處刑として絞殺を用ひましたのは、私の調べました結果によりますると、オデセーの二十二卷目に出て居ります。即ち彼のテレマカスがペネロピーの十二人の侍女を絞殺するといふ條で御座います。希臘語で本文を朗讀しても宜しう御座いますが、ちと衒ふ樣な氣味にもなりますから已めに致します。四百六十五行から、四百七十三行を御覽になると分ります」「希臘語云々はよした方がいい、さも希臘語が出來ますと言はん許りだ、ねえ苦沙彌君」「それは僕も贊成だ。そんな物欲しさうな事は言はん方が奧床しくて好い」と主人はいつになく直ちに迷亭に加擔する。兩人は毫も希臘語が讀めないのである。「それでは此兩三句は今晩拔く事に致しまして次を辯じ――えゝ申し上げます」

「此絞殺を今から想像して見ますと、之を執行するに二つの方法があります。第一は、彼のテレマカスがユーミアス及びフィリーシャスの援けを藉りて縄の一端を柱へ括りつけます。そして其縄の所々へ結び目を穴に開けて此穴へ女の頭を一つ宛入れて置いて、片方の端をぐいと引つ張つて釣るし上げたものと見るのです」「つまり西洋洗濯屋のシャツの様に女がぶら下がつたと見れば好いんだらう」「其通りで、それから第二は縄の一端を前の如く柱へ括り附けて、他の一端も始めから天井へ高く釣るのです。そして其の高い縄から何本か別の縄を下げて、夫に結び目の輪になつたのを附けて女の頸を入れて置いて、いざと云ふ時に女の足臺を取りはづすと云ふ趣向なのです」「たとへて云ふと縄暖簾の先へ提灯玉を釣るした様な景色と思へば間違ひはあるまい」「提灯玉と云ふ玉は見た事がないから何とも申されませんが、もしあるとすれば其邊の所かと思ひます。――夫で是から力學的に第一の場合は到底成立すべきものでないと云ふ事を證據立てて御覧に入れます」「面白いな」と迷亭が云ふと「うん面白い」と主人も一致する。

「先づ女が同距離に釣られると假定します。又一番地面に近い二人の女の首と首を繋いで居る縄はホリゾンタルと假定します。そこでα_1 α_2……α_6を縄が地平線と形づくる角度とし、T_1 T_2……T_6を縄の各部が受ける力と見做し、T_7 X は縄の尤も低い部分の受ける力とします。Wは勿論女の體量と御承知下さい。どうです御解りになりましたか」

迷亭と主人は顔を見合せて「大抵分つた」と云ふ。但し此大抵と云ふ度合は兩人が勝手に作つたのだから他人の場合には應用が出來ないかも知れない。「偖て多角形に關する御存じの平均性理論によりますと、下の如く十二の方程式が立ちます。$T_1\cos\alpha_1 = T_2\cos\alpha_2$……(1) $T_2\cos\alpha_2 = T_3\cos\alpha_3$……(2)……」「方程式は

其位で澤山だらう」と主人は亂暴な事を言ふ。「實は此式が演說の首腦なんですが」と寒月君は甚だ殘り惜し氣に見える。「夫ぢや首腦丈は遂つて伺ふ事にしようぢやないか」と迷亭も少々恐縮の體に見受けられる。「この式を略して仕舞ふと折角の力學的研究が丸で駄目になるのですが……」「何、そんな遠慮は入らんから、ずん〳〵略すさ」と主人は平氣で云ふ。「それでは仰せに從つて、無理ですが略しませう」

「それがよからう」と迷亭が妙な所で手をぱち〳〵と叩く。

「夫から英國へ移つて論じますと、ベオウルフの中に絞首架即ちガルガと申す字が見えますから絞罪の刑は此時代から行はれたものに違ひないと思はれます。ブラクストーンの說に依ると、若し絞罪に處せられる罪人が、萬一繩の具合で死に切れぬ時は再度同樣の刑罰を受くべきものだとしてありますが、妙な事にはピヤース・プローマンの中には假令兇漢でも二度絞める法はないと云ふ句があるのです。まあどつちが本當か知りませんが、惡くすると一度で死ねない事が往々實例にあるので。千七百八十六年に有名なフィツゼラルドと云ふ惡漢を絞めた事がありました。所が妙なはずみで一度目には臺から飛び降りるときに繩が切れて仕舞つたのです。又やり直すと今度は繩が長過ぎて足が地面へ着いたので矢張り死ねなかつたのです。とう〳〵三返目に見物人が手傳つて往生さしたと云ふ話です」「やれ〳〵」と迷亭はこんな所へくると急に元氣が出る。「本當に死損ひだな」と主人迄浮かれ出す。「まだ面白い事があります、首を縊ると脊が一寸許り延びるさうです。是は慥かに醫者が計つて見たのだから間違ひはありません」「それは新工夫だね。どうだい、苦沙彌抔はちと釣つて貰つちや、一寸延びたら人間並になるかも知れないぜ」と迷亭が主人の方を向くと、主人は案外眞面目で「寒月君、一寸位脊が延びて生き返る事があるだらうか」

と聞く。「それは駄目に極まつて居ます。釣られて脊髄が延びるからなんで、早く云ふと脊が延びると云ふより壞れるんですからね」「それぢや、まあ止めよう」と主人は斷念する。

演說の續きは、まだ中々長くあつて寒月君は首縊りの生理作用にまで論及する筈で居たが、迷亭が無暗に風來坊の樣な珍語を挾むのと、主人が時々遠慮なく欠伸をするので、遂に中途でやめて歸つて仕舞つた。其晩は寒月君が如何なる態度で如何なる雄辯を振つたか、遠方で起こつた出來事の事だから吾輩には知れよう譯がない。

二三日は事もなく過ぎたが、或日の午後二時頃又迷亭先生は例の如く空々として偶然童子の如く舞ひ込んで來た。座に着くと、いきなり「君越智東風の高輪事件を聞いたかい」と旅順陷落の號外を知らせに來た程の勢を示す。「知らん、近頃は合はんから」と主人は平生の通り陰氣である。「けふは其の東風子の失策物語を御報道に及ばうと思つて忙しい所を態々來たんだよ」「またそんな仰山な事を云ふ、君は全體不埒な男だ」「ハヽヽヽ不埒と云はんより寧ろ無埒の方だらう。それ丈は鳥渡區別して置いて貰はんと名譽に關係するからな」「おんなし事だ」と主人は嘯いて居る。純然たる天然居士の再來だ。「此前の日曜に東風子が高輪泉岳寺に行つたんださうだ。此の寒いのによせばいゝのに。——第一今時泉岳寺抔へ參るのはさも東京を知らない、田舍者の樣ぢやないか」「それは東風の勝手さ。君がそれを留める權利はない」「成程權利は正にない。權利はどうでもいゝが、あの寺內に義士遺物保存會と云ふ見世物があるだらう。君知つてるか」「うんにや」「知らない？だつて泉岳寺へ行つた事はあるだらう」「いゝや」「ない？こりや驚いた。道理で大變東風を辯護すると思つた。江戶つ子が泉岳寺を知らないのは情ない」「知

らなくても教師は務まるからな」と主人は愈天然居士になる。「そりや好いが、其展覽場へ東風が這入つて見物して居ると、そこへ獨逸人が夫婦連れで來たんだつて。それが最初は日本語で東風に何か質問したさうだ。所が先生例の通り獨逸語が使つて見度くて溜らん男だらう。そら二口三口べら〳〵遣つて見たとさ。すると存外うまく出來たんだ――後で考へるとそれが災の本さね」「それからどうした」と主人は遂に釣り込まれる。「獨逸人が大高源吾の蒔繪の印籠を見て、『之を買ひ度いが賣つてくれるだらうか』と聞くんださうだ。其時東風の返事が面白いぢやないか、日本人は淸廉の君子計りだから到底駄目だと云つたんだとさ。其邊は大分景氣がよかつたが、夫から獨逸人の方では恰好な通辯を得た積りで頻りに聞くさうだ」「何を?」「それがさ、何だか分る位なら心配はないんだが、早口で無暗に問ひ掛けるものだから少しも要領を得ないのさ。たまに分るかと思ふと鳶口や掛矢の事を聞かれる。西洋の鳶口や掛矢は先生何と翻譯して善いのか習つた事が無いんだから弱らあね」「尤もだ」と主人は教師の身の上に引き較べて同情を表する。「所へ閑人が物珍しさうにぽつ〳〵集まつてくる。仕舞ひには東風と獨逸人を四方から取り卷いて見物する。東風は顏を赤くしてへどもどする。初めの勢に引き易へて先生大弱りの體さ」「結局どうなつたんだい」「仕舞ひに東風が我慢出來なくなつたと見えてさいならと日本語で云つてぐん〳〵歸つて來たさうだ。さいならは少し變だ、君の國ではさよならをさいならと云ふかつて聞いて見たら、何、矢つ張りさよならですが相手が西洋人だから調和を計るために、さいならにしたんだつて、東風子は苦しい時でも調和を忘れない男だと感心した」「さいならはいゝが西洋人はどうした」「西洋人はあつけに取られて茫然と見て居たさうだ、ハヽヽヽ面白いぢやないか」「別段面白い事もない樣だ、それを態々報

知に來る君の方が餘つ程面白いぜ」と主人は卷煙草の灰を火桶の中へはたき落とす。折柄格子戸のベルが飛び上がる程鳴つて、「御免なさい」と鋭い女の聲がする。迷亭と主人は思はず顏を見合はせて沈默する。

主人のうちへ女客は稀有だなと見て居ると、かの鋭い聲の所有主は縮緬の二枚襲を疊へ擦り附けながら這入つて來る。年は四十の上を少し越した位だらう。拔け上がつた生え際から前髮が堤防工事の樣に高く聳えて、少くとも顏の長さの二分の一丈天に向つてせり出して居る。眼が切通の坂位な勾配で、直線に釣るし上げられて左右に對立する。直線とは鯨より細いといふ形容である。鼻丈は無暗に大きい。人の鼻を盜んで來て顏の眞中へ据ゑ附けた樣に見える。三坪程の小庭へ招魂社の石燈籠を移した時の如く、獨りで幅を利かして居るが、何となく落ち附かない。其鼻は所謂鍵鼻で、ひと度は精一杯高くなつて見たが、是では餘りだと中途から謙遜して、先の方へ行くと、初めの勢に似ず垂れかゝつて、下にある唇を覗き込んで居る。かく著しい鼻だから、此女が物を云ふときは口が物を言ふと云はんより、鼻が口をきいて居るとしか思はれない。吾輩は此の偉大なる鼻に敬意を表する爲、以來は此女を稱して鼻子々々と呼ぶ積りである。鼻子は先づ初對面の挨拶を終つて「どうも結構な御住居ですこと」と座敷中を睨め廻す。主人は「嘘をつけ」と腹の中で言つた儘、ぷか〳〵烟草をふかす。迷亭は天井を見ながら「君、ありや雨洩りか、板の木目か、妙な模樣が出て居るぜ」と暗に主人を促す。「無論雨の洩りさ」と主人が答へると「結構だなあ」と迷亭が澄まして云ふ。鼻子は社交を知らぬ人達だと腹の中で憤る。しばらくは三人鼎坐の儘無言である。

「ちと伺ひたい事があつて、參つたんですが」と鼻子は再び話しの口を切る。「はあ」と主人が極めて

冷淡に受ける。これではならぬと鼻子は「實は私はつい御近所で――あの向う横丁の角屋敷なんですが」
「あの大きな西洋館の倉のあるうちですか、道理であすこには金田と云ふ標札が出て居ますな」と主人は漸く金田の西洋館と金田の倉を認識した樣だが、金田夫人に對する尊敬の度合は前と同樣である。「實は宿が出まして御話しを伺ふんですが、會社の方が大變忙しいもんですから」と今度は少し利いたらうといふ眼附をする。主人は一向動じない。鼻子の先刻からの言葉遣ひが、初對面の女としては餘り存在過ぎるので既に不平なのである。「會社でも一つぢや無いんです。二つも三つも兼ねて居るんです。夫にどの會社でも重役なんで――多分御存知でせうが」是でも恐れ入らぬかと云ふ顏附をする。元來こゝの主人は博士とか大學教授とかいふと非常に恐縮する男であるが、妙な事には實業家に對する尊敬の度は極めて低い。實業家よりも、中學校の先生の方がえらいと信じて居る。よし信じて居らんでも融通の利かぬ性質として、到底實業家、金滿家の恩顧を蒙る事は覺束ないと諦めて居る。いくら先方が勢力家でも、財產家でも、自分が世話になる見込のないと思ひ切つた人の利害には極めて無頓着である。夫だから學者社會を除いて他の方面の事には極めて迂濶で、ことに實業界杯では、どこに、だれが何をして居るか一向知らん。知つても尊敬畏服の念は毫も起らんのである。鼻子の方では天が下の一隅にこんな變人が矢張り日光に照らされて生活して居ようとは夢にも知らない。今迄世の中の人間にも大分接して見たが、金田の妻ですと名乘つて、急に取扱ひの變らない場合はない。どこの會へ出ても、どんな身分の高い人の前でも立派に金田夫人で通して行かれる。況んやこんな燻り返つた老書生に於てをやで、私の家は向う横丁の角屋敷ですとさへ云へば、職業杯は聞かぬ先から驚くだらうと豫期して居たのである。

「知つてるとも、金田さんは僕の伯父の友達だ。此間なんざ園遊會へ御出でになつた」と迷亭は眞面目な返事をする。「へえ君の伯父さんてえな誰だい」「牧山男爵さ」と迷亭は愈眞面目である。主人が何か云はうとして云はぬ先に、鼻子は急に向き直つて迷亭の方を見る。迷亭は大島紬に古渡更紗か何か重ねて澄まして居る。「おや、あなたが牧山樣の――何でいらつしやいますか、些とも存じませんで、甚だ失禮を致しました。牧山樣には始終御世話になると、宿で毎々御噂を致して居ります」と急に丁寧な言葉使ひをして、御まけに御辭儀迄する。迷亭は「へえゝ何、ハヽヽヽ」と笑つて居る。主人はあつ氣に取られて無言で二人を見て居る。「慥か娘の縁邊の事に就きましても色々牧山さまへ御心配を願ひましたさうで……」「へえー、さうですか」と是計りは迷亭にも些と唐突過ぎたと見えて、一寸魂消た樣な聲を出す。「實は方々から貰ひ〳〵と申し込みは御座いますが、こちらの身分もあるもので滅多な所へも片付けられませんので……」「御尤もで」と迷亭は漸く安心する。「それに就いて、あなたに伺はうと思つて上がつたんですがね」と鼻子は主人の方を見て急に存在な言葉に返る。「あなたの所へ水島寒月といふ男が度々上がるさうですが、あの人は全體どんな風な人でせう」「寒月の事を聞いて、何にするんです」と主人は苦々敷く云ふ。「やはり御令孃の御婚儀上の關係で、寒月君の性行の一斑を御承知になりたいといふ譯でせう」と迷亭が氣轉を利かす。「それが伺へれば大變都合が宜しいので御座いますが……」「それぢや、御令孃を寒月に御遣りになりたいと仰しやるんで」「遣りたいなんてえんぢや無いんです」と鼻子は急に主人を參らせる。「外にも段々口が有るんですから、無理に貰つて頂かないだつて困りやしません」「それぢや寒月の事なんか聞

かんでも好いでせう」と主人も躍起となる。「然し御隱しなさる譯もないでせう」と鼻子も少々喧嘩腰になる。迷亭は雙方の間に坐つて、銀煙管を軍配團扇の樣に持つて、心の裡で八卦よいやよいやと怒鳴つて居る。「ぢやあ寒月の方で是非貰ひたいとでも云つたのですか」と主人が正面から鐵砲を喰はせる。「貰ひたいと云つたんぢやないんですけれども……」「貰ひたいだらうと思つていらつしやるんですか」と主人は此婦人鐵砲に限ると覺つたらしい。「話しはそんなに運んでるんぢやありませんが――寒月さんだつて滿更嬉しくない事もないでせう」と土俵際で持ち直す。「寒月が何かその御令孃に戀着したといふ樣な事でもありますか」あるなら云つて見ろと云ふ權幕で主人は反り返る。「まあ、そんな見當でせうね」今度は主人の鐵砲が少しも功を奏しない。今迄面白氣に行司氣取りで見物して居た迷亭も鼻子の一言に好奇心を挑撥されたものと見えて、煙管を置いて前へ乘り出す。「寒月が御孃さんに附け文でもしたんですか、是や愉快だ、新年になつて逸話が又一つ殖えて話しの好材料になる」と一人で喜んで居る。「附け文ぢやないんです、もつと烈しいんでさあ、御二人とも御承知ぢやありませんか」と鼻子は乙にからまつて來る。「君知つてるか」と主人は狐附きの樣な顏をして迷亭に聞く。迷亭も馬鹿氣た調子で「僕は知らん、知つて居りや君だ」と詰まらん所で謙遜する。「いえ御兩人共御存じの事ですよ」と鼻子丈大得意である。「へえー」と御兩人は一度に感じ入る。「御忘れになつたら私から御話しをしませう。去年の暮向島の阿部さんの御屋敷で演奏會があつて、寒月さんも出掛けたぢやありませんか。其晩歸りに吾妻橋で何かあつたでせう――詳しい事は言ひますまい、當人の御迷惑になるかも知れませんから――あれ丈の證據がありや充分だと思ひますが、どんなものでせう」と金剛石入りの指環の嵌まつた指を、膝の上へ並べてつんと

居ずまひを直す。偉大なる鼻が益々異彩を放つて、迷亭も主人も有れども無きが如き有樣である。

主人は無論、さすがの迷亭も此不意撃には膽を拔かれたものと見えて、しばらくは呆然として瘧の落ちた病人の樣に坐つて居たが、驚愕の箍がゆるんで漸々持前の本態に復すると共に、滑稽と云ふ感じが一度に吶喊してくる、兩人は申し合はせた如く「ハヽヽヽヽ」と笑ひ崩れる。鼻子計りは少し當てが外れて、此際笑ふのは甚だ失禮だと兩人を睨みつける。「あれが御孃さんですか。成程こりやいゝ、仰しやる通りだ、ねえ苦沙彌君、全く寒月は御孃さんを戀つてるに相違ないね……もう隱したつて仕樣がないから白狀しようぢやないか」「ウフン」と主人は言つた儘である。「本當に御隱しなさつても不可ませんよ、ちやんと種は上がつてるんですからね」と鼻子は又得意になる。「かうなりや仕方がない。何でも寒月君に關する事實は御參考の爲に陳述するさ。おい苦沙彌君、君が主人だのに、さう、にや〳〵笑つて居ては埒があかんぢやないか。實に秘密といふものは恐ろしいものだねえ。いくら隱しても、どこからか露見するからな。――然し不思議と云へば不思議ですねえ、金田の奧さん、どうして此秘密を御探知になつたんです、實に驚きますな」と迷亭は一人で喋舌る。「私の方だつて、ぬかりはありませんやね」と鼻子はしたり顏をする。「あんまり、ぬかりが無さ過ぎる樣ですぜ。一體誰に御聞きになつたんです」「ぢき此裏に居る車屋の神さんからです」「あの黑猫の居る車屋ですか」と主人は眼を丸くする。「えゝ、寒月さんの事ぢや、餘つ程使ひましたよ。寒月さんが、こゝへ來る度に、どんな話しをするかと思つて車屋の神さんを頼んで一々知らせて貰ふんです」「そりや苛い」と主人は大きな聲を出す。「なあに、あなたが何をなさらうと仰しやらうと、夫に構つてるんぢやないんです。寒月さんの事丈ですよ」「寒月の事だつて、誰の事、

だつて——全體あの車屋の神さんは氣に食はん奴だ」と主人は一人怒り出す。「然しあなたの垣根のそとへ來て立つて居るのは向うの勝手ぢやありませんか。話しが聞こえてわるけりや、もつと小さい聲でなさるか、もつと大きなうちへ御這入んなさるがいゝでせう」と鼻子は少しも赤面した樣子がない。「車屋計りぢやありません。新道の二絃琴の師匠からも大分色々な事を聞いて居ます」「寒月の事をですか」「寒月さん計りの事ぢやありません」と少し凄い事を云ふ。主人は恐れ入るかと思ふと「あの師匠はいやに上品ぶつて自分丈人間らしい顔をして居る、馬鹿野郎です」「憚り樣、女ですよ。野郎は御門違ひです」と鼻子の言葉使ひは益々御里をあらはして來る。是では丸で喧嘩をしに來た樣なものであるが、そこへ行くと迷亭は矢張り迷亭で、此談判を面白さうに聞いて居る。鐵枴仙人が軍鷄の蹴合ひを見る樣な顔をして平氣で聞いて居る。

惡口の交換では到底鼻子の敵でないと自覺した主人は、暫らく沈默を守るの已むを得ざるに至らしめられて居たが、漸く思ひ附いたか、「あなたは寒月の方から御孃さんに戀着した樣にばかり仰しやるが、私の聞いたんぢや、少し違ひますぜ、ねえ迷亭君」と迷亭の救ひを求める。「うん、あの時の話しぢや、御孃さんの方が、始め病氣になつて——何だか譫語をいつた樣に聞いたね」「なに、そんな事はありません」と金田夫人は判然たる直線流の言葉使ひをする。「それでも、寒月は慥かに○○博士の夫人から聞いたと云つて居ましたぜ」「それがこつちの手なんでさあ、○○博士の奥さんを頼んで寒月さんの氣を引いて見たんでさあね」「○○の奥さんは、夫を承知で引き受けたんですか」「えゝ、引き受けて貰ふたつて、只ぢや出來ませんやね、それやこれやで色々物を使つて居るんですから」「是非寒月君の事を根掘り葉掘り

御聞きにならなくつちや御歸りにならないと云ふ決心ですかね」と迷亭も少し氣持ちを惡くしたと見えていつになく手障りのあらい言葉を使ふ。「いゝや君、話したつて損の行く事ぢやなし、話さうぢやないか、苦沙彌君。――奥さん、私でも苦沙彌でも寒月君に關する事實で差支へのない事は、みんな話しますからね、――さう、順を立てて段々聞いて下さると都合がいゝですね」

鼻子は漸く納得してそろ〳〵質問を呈出する。一時荒立てた言葉遣ひも迷亭に對しては又もとの如く丁寧になる。「寒月さんも理學士ださうですが、全體どんな事を專門にして居るので御座います」「大學院では地球の磁氣の研究をやつて居ます」と主人が眞面目に答へる。不幸にして其意味が鼻子に分らんものだから「へえー」とは云つたが、怪訝な顏をして居る。「それを勉強すると博士になれませうか」と聞く。「博士にならなければ遣れないと仰しやるんですか」と主人は不愉快さうに尋ねる。「えゝ。只の學士ぢやね、いくらでもありますからね」と鼻子は平氣で答へる。主人は迷亭を見て愈いやな顏をする。「博士になるかならんかは僕等も保證する事が出來んから、ほかの事を聞いて頂く事にしよう」と迷亭もあまり好い機嫌ではない。「近頃でも其地球の――何かを勉強して居るんで御座いませうか」「二三日前は首縊りの力學と云ふ研究の結果を理學協會で演説しました」と主人は何の氣も附かずに云ふ。「おやいやだ、首縊りだなんて餘つ程變人ですねえ。そんな首縊りや何かやつてたんぢや、とても博士にはなれますまいね」「本人が首を縊つちやあ六づ箇敷いですが、首縊りの力學なら成れないとも限らんです」「さうでせうか」と今度は主人の方を見て顏色を窺ふ。悲しい事に力學と云ふ意味がわからんので落ち付き兼ねて居る。然し是しきの事を尋ねては金田夫人の面目に關すると思つてか、只相手の顏色で八卦を立てゝ見る。

た人の顏は澁い。「其外になにか、分り易いものを勉强して居りますまいか」「さうですな、先達て團栗のスタビリチーを論じて併せて天體の運行に及ぶと云ふ論文を書いた事があります」「團栗なんぞでも大學校で勉强するものでせうか」「さあ僕も素人だからよく分らんが、何しろ、寒月君がやる位なんだから、研究する價値があると見えますな」と迷亭は澄まして冷かす。鼻子は學問上の質問は手に合はんと斷念したものと見えて、今度は話頭を轉ずる。「御話しは違ひますが——此御正月に椎茸を食べて前齒を二枚折つたさうぢや御座いませんか」「えゝ其の缺けた所に空也餠がくつ附いて居ましてね」と迷亭は此質問こそ繩張り内だと急に浮かれ出す。「色氣のない人ぢや御座いませんか。何だつて楊子を使はないんでせう」「今度逢つたら注意して置きませう」と主人がくす〳〵笑ふ。「椎茸で齒がかける位ぢや、餘程齒の性が惡いと思はれますが、如何なものでせう」「善いとは言はれますまいな——ねえ迷亭」「善い事はないが一寸愛嬌があるよ。あれぎり、まだ塡めない所が妙だ。今だに空也餠引掛所になつてるなあ奇觀だぜ」「齒を塡める小遣がないので缺けなりにして置くんですか、又は物好きで缺けなりにして置くんでせうか」「何も永く前齒缺成を名乘る譯でもないでせうから御安心なさいよ」と迷亭の機嫌は段々回復してくる。鼻子は又問題を改める。「何か御宅に手紙かなんぞ當人の書いたものでも御座いますなら一寸拝見したいもんで御座いますが」「端書なら澤山あります、御覽なさい」と主人は書齋から三四十枚持つて來る。「そんなに澤山拝見しないでも——其内の二三枚丈……」「どれ〳〵僕が好いのを選つてやらう」と迷亭先生は「是なざあ面白いでせう」と一枚の繪端書を出す。「おや繪もかくんで御座いますか、中々器用ですね、どれ拝見しませう」と眺めて居たが「あらいやだ、狸だよ。何だつて選りに選つて狸なんぞかくん

でせうね——夫でも狸と見えるから不思議だよ」と少し感心する。「其文句を讀んで御覽なさい」と主人が笑ひながら云ふ。鼻子は下女が新聞を讀む樣に讀み出す。「舊暦の歳の夜、山の狸が園遊會をやつて盛に舞踏します。其歌に曰く、來いさ、としの夜で、御山婦美も來まいぞ。スッポコポンノポン。何ですこりや、人を馬鹿にして居るぢや御座いませんか」と鼻子は不平の體である。「此天女は御氣に入りませんか」と迷亭が又一枚出す。見ると天女が羽衣を着て、琵琶を彈いて居る。「此天女の鼻が少し小さ過ぎる樣ですが」「何、それが人並ですよ、鼻より文句を讀んで御覽なさい」文句にはかうある。「昔ある所に一人の天文學者がありました。ある夜いつもの樣に高い臺に登つて、一心に星を見て居ますと、空に美しい天女が現はれ、此世では聞かれぬ程の微妙な音樂を奏し出したので、天文學者は身に沁む寒さも忘れて聞き惚れて仕舞ひました。朝見ると其天文學者の死骸に霜が眞白に降つて居ました。是は本當の噺だと、あのうそつきの爺やが申しました」「何の事ですこりや、意味も何もないぢやありませんか、是でも理學士で通るんですかね。ちつと文藝倶樂部でも讀んだらよささうなものですがねえ」寒月君散々にやられる。迷亭は面白半分に「是やどうです」と三枚目を出す。今度は活版で帆懸舟が印刷してあつて、例の如く其下に何か書き散らしてある。「よべの泊りの十六小女郎、親がないとて、荒磯の千鳥、さよの寢覺の千鳥に泣いた、親は船乘り波の底」「うまいのねえ、感心だ事、話せるぢやありませんか」「話せますかな」「えゝ是なら三味線に乘りますよ」「三味線に乘りや本物だ。是や如何です」と迷亭は無暗に出す。「いえ、もう是丈拜見すれば、ほかのは澤山で、そんなに野暮でないんだと云ふ事は分りましたから」と一人で合點して居る。鼻子は是で寒月に關する大抵の質問を卒へたものと見えて、「是は甚だ失禮を致しました。

どうか私の參つた事は寒月さんへは内々に願ひます」と得手勝手な要求をする。寒月の事は何でも聞かなければならないが、自分の方の事は一切寒月へ知らしてはならないと云ふ方針と見える。迷亭も主人も「はあ」と氣のない返事をすると「いづれ其内御禮は致しますから」と念を入れて言ひながら立つ。見送りに出た兩人が席へ返るや否や、迷亭が「ありや何だい」と云ふと、主人も「ありや何だい」と雙方から同じ問ひをかける。奥の部屋で細君が怺へ切れなかつたと見えてクツ〳〵笑ふ聲が聞こえる。迷亭は大きな聲を出して「奥さん〳〵、月並の標本が來ましたぜ。月並もあの位になると中々振つて居ますなあ。さあ遠慮はいらんから、存分御笑ひなさい」

主人は不滿な口氣で「第一氣に喰はん顔だ」と憎らしさうに云ふと、迷亭はすぐ引きうけて「鼻が顔の中央に陣取つて乙に構へて居るなあ」とあとを附ける。「然も曲がつて居らあ」「少し猫背だね。猫背の鼻は、ちと奇拔過ぎる」と面白さうに笑ふ。「夫を剋する顔だ」と主人は猶口惜しさうである。「十九世紀で賣れ殘つて、二十世紀で店曝しに逢ふと云ふ相だ」と迷亭は妙な事ばかり云ふ。所へ細君が奥の間から出て來て、女丈に「あんまり惡口を仰しやると、又車屋の神さんにいゝつけられますよ」と注意する。「少しいゝつける方が藥ですよ、奥さん」「然し顔の讒訴抔をなさるのは、あまり下等ですわ、誰だつて好んであんな鼻を持つてる譯でもありませんから――夫に相手が婦人ですからね、あんまり苛いわ」と鼻子の鼻を辯護すると、同時に自分の容貌も間接に辯護して置く。「何ひどいものか。あんなのは婦人ぢやない、愚人だ、ねえ迷亭君」「愚人かも知れんが、中々えら者だ。大分引き搔かれたぢやないか」「全體教師を何と心得て居るんだらう」「裏の車屋位に心得て居るのさ。あゝ云ふ人物に尊敬されるには博士に成るに

眠るよ。「博士になつて置かんのが君の不了簡さ、ねえ奥さん、さうでせう」と迷亭は笑ひ乍ら細君を顧みる。「博士なんて到底駄目ですよ」と主人は細君に迄見離される。「是でも今になるかも知れん、軽蔑するな。貴様なぞは知るまいが昔アイソクラチスと云ふ人は九十四歳で大著述をした。ソフォクリスが傑作を出して天下を驚かしたのは、殆ど百歳の高齢だつた。シモニヂスは八十で妙詩を作つた。おれだつて……」「馬鹿々々しいわ、あなたの様な胃病でそんなに永く生きられるものですか」と細君はちやんと主人の寿命を豫算して居る。「失敬な、――甘木さんへ行つて聞いて見ろ――元来御前がこんな皺苦茶な黒木綿の羽織や、つぎだらけの着物を着せて置くから、あんな女に馬鹿にされるんだ。あしたから迷亭の着て居るやうな奴を着るから出して置け」「出して置けつて、あんな立派な御召は御座んせんわ。金田の奥さんが迷亭さんに丁寧になつたのは、伯父さんの名前を聞いてからですよ。着物の咎ぢや御座いませんわ」と細君うまく責任を逃れる。

主人は伯父さんと云ふ言葉を聞いて急に思ひ出した様に「君に伯父があると云ふ事は、今日始めて聞いた。今迄ついに噂をした事がないぢやないか。本當にあるのかい」と迷亭に聞く。迷亭は待つてたと云はぬ許りに「うん、其伯父さ、其伯父が馬鹿に頑物でねえ――矢張りその十九世紀から連綿と今日迄生き延びて居るんだがね」と主人夫婦を半々に見る。「オホヽヽヽ面白い事計り仰しやつて、どこに生きていらつしやるんです」「静岡に生きてますがね、それが只生きてるんぢや無いです。頭にちよん髷を頂いて生きてるんだから恐縮しまさあ。帽子を被れつてえと、おれは此年になるが、まだ帽子を被る程寒さを感じた事がないと威張つてるんです――寒いからもつと寝て入らつしやいと云ふと、人間は四時間寝れば充

分だ、四時間以上寐るのは贅澤の沙汰だつて朝暗いうちから起きてくるんです。それでね、おれも睡眠時間を四時間に縮めるには永年修業をしたもんだ、若いうちは何うしても眠たくて行かなんだが、近頃に至つて始めて隨處任意の庶境に入つて甚だ嬉しいと自慢するんです。六十七になつて寐られなくなるなあ當り前でさあ。修業も絲瓜も入つたものぢやないのに當人は全く克己の力で成功したと思つてるんですからね。それで外出する時には、乾度鐵扇をもつて出るんですがね」「なににするんだい」「何にするんだか分らない、只持つて出るんだね。まあステッキの代り位に考へてるかも知れんよ。所が先達て妙な事がありましてね」と今度は細君の方へ話しかける。「へえー」と細君が差し合ひのない返事をする。「此年の春突然手紙を寄こして山高帽子とフロックコートを至急送れと云ふんです。一寸驚いたから、郵便で問ひ返した所が老人自身が着ると云ふ返事が來ました。二十三日に靜岡で祝捷會があるから夫迄に間に合ふ樣に、至急調達しろと云ふ命令なんです。所が可笑しいのは命令中にかうあるんです。帽子は好い加減な大きさのを買つて呉れ、洋服も寸法を見計らつて大丸へ注文して呉れ……」「近頃は大丸でも洋服を仕立てるのかい」「なあに、先生、白木屋と間違へたんだあね」「寸法を見計らつて呉れたつて無理ぢやないか」「そこが伯父の伯父たる所さ」「どうした？」「仕方がないから見計らつて送つてやつた」「君も亂暴だな。夫で間に合つたのかい」「まあ、どうにか、かうにか落ち付いたんだらう。國の新聞を見たら、當日牧山翁は珍しくフロックコートにて、例の鐵扇を持ち……」「鐵扇丈は離さなかつたと見えるね」「うん死んだら棺の中へ鐵扇丈は入れてやらうと思つて居るよ」「それでも帽子も洋服も、うまい具合に着られて善かつた」「所が大間違ひさ。僕も無事に行つて難有いと思つてると、暫らくして國から小包が屆い

たから、何か御禮でも呉れた事と思つて開けて見たら、例の山高帽子さ。手紙が添へてあつてね、折角御求め被下候へども少々大きく候間、帽子屋へ御遣はしの上、御縮め被下度候。縮め賃は小爲替にて此方より御送可申上候とあるのさ」「成程、迂濶だな」と主人は己より迂濶なものの天下にある事を發見して大いに滿足の體に見える。やがて「それからどうした」と聞く。「どうするつたつて仕方がないから僕が頂戴して被つて居らあ」「あの帽子かあ」と主人がにや／＼笑ふ。「其方が男爵でいらつしやるんですか」と細君が不思議さうに尋ねる。「誰がです」「其鐵扇の伯父さまが」「なあに漢學者でさあ、若い時聖堂で朱子學か何かに凝り固まつたものだから、電氣燈の下で恭しくちよん髷を頂いて居るんです、仕方がありませんや」とやたらに顋を撫で廻す。「それでも君は、さつきの女に牧山男爵と云つた樣だぜ」「さう御云ひやいましたよ、私も茶の間で聞いて居りました」と細君も是丈は主人の意見に同意する。「さうでしたかなアハヽヽヽ」と迷亭は譯もなく笑ふ。「そりや嘘ですよ。僕に男爵の伯父がありや、今頃は局長位になつて居まさあ」と平氣なものである。「何だか變だと思つた」と主人は嬉しさうな、心配さうな顏附をする。「あらまあ、能く眞面目であんな嘘が付けますねえ。あなたも餘つ程法螺が御上手でいらつしやる事」と細君は非常に感心する。「僕より、あの女の方が上手でさあ」「あなただつて御負けなさる氣遣ひはありません」「然し奥さん、僕の法螺は單なる法螺ですよ。あの女のは、みんな魂膽があつて、曰く附きの嘘ですぜ。たちが惡いです。猿智慧から割り出した術數と、天來の滑稽趣味と混同されちや、コメヂーの神樣も活眼の士なきを嘆ぜざるを得ざる譯に立ち至りますからな」主人は俯目になつて「どうだか」と云ふ。細君は笑ひながら「同じ事ですわ」と云ふ。

吾輩は今迄向う横丁へ足を踏み込んだ事はない。角屋敷の金田とは、どんな構へか見た事は無論ない。聞いた事さへ今が始めてである。主人の家で實業家が話頭に上つた事は一返もないので、主人の飯を食ふ吾輩迄が此方面には單に無關係なるのみならず、甚だ冷淡であつた。然るに先刻圖らずも鼻子の訪問を受けて、餘所ながら其談話を拜聽し、其令孃の艶美を想像し、又其富貴、權勢を思ひ浮べて見ると、猫ながら安閑として縁側に寐轉んで居られなくなつた。しかのみならず吾輩は寒月君に對して甚だ同情の至りに堪へん。先方では博士の奧さんやら、車屋の神さんやら、二絃琴の天璋院迄買收して知らぬ間に、前齒の缺けたのさへ探偵して居るのに、寒月君の方では只ニヤ／＼して羽織の紐許り氣にして居るのは、如何に卒業したての理學士にせよ、あまり能がなさ過ぎる。と言つて、あゝ云ふ偉大な鼻を顏の中に安置して居る女の事だから、滅多な者では寄り附ける譯の者ではない。かう云ふ事件に關しては主人は寧ろ無頓着で且餘りに錢がなさ過ぎる。迷亭は錢に不自由はしないが、あんな偶然童子だから、寒月に援けを與へる便宜は尠からう。して見ると可哀相なのは首縊りの力學を演説する先生許りとなる。吾輩でも奮發して、敵城へ乘り込んで其動靜を偵察してやらなくては、あまりに不公平である。吾輩は猫だけれど、エピクテタスを讀んで机の上へ叩きつける位な學者の家に寄寓する猫で、世間一般の癡猫、愚猫とは少しく撰を異にして居る。此冒險を敢てする位の義俠心は固より尻尾の先に疊み込んである。何も寒月君に恩になつたと云ふ譯もないが、是はたゞに個人の爲にする血氣躁狂の沙汰ではない。大きく云へば公平を好み中庸を愛する天意を現實にする天晴な美擧だ。人の許諾を經ずして吾妻橋事件抔を到る處に振り廻す以上は、人の軒下に犬を忍ばして、其報道を得々として逢ふ人に吹聽する以上は、車夫、馬丁、無賴漢、ごろつき書生、

日雇婆、産婆、妖婆、按摩、頓馬に至る迄を使用して、國家有用の材に煩を及ほして顧さる以上は――猫にも覺悟がある。幸ひ天氣も好い、霜解けは少々閉口するが道の爲には一命もすてる。足の裏へ泥が着いて、椽側へ梅の花の印を押す位な事は、只お三の迷惑にはなるか知れんが、吾輩の苦痛とは申されない。翌日とも云はず是から出掛けようと勇猛精進の大決心を起して臺所迄飛んで出たが「待てよ」と考へた。吾輩は猫として進化の極度に達して居るのみならず、腦力の發達に於ては敢て中學の三年生に劣らざる積りであるが、悲しいかな咽喉の構造丈はどこ迄も猫なので人間の言語は饒舌れない。よし首尾よく金田邸へ忍び込んで、充分敵の情勢を見屆けた所で、肝心の寒月君に教へてやる譯に行かない。主人にも迷亭先生にも話せない。話せないとすれば土中にある金剛石の日を受けて光らぬと同じ事で、折角の知識も無用の長物となる。是は愚だ、やめようか知らんと上り口で佇んで見た。

然し一度思ひ立つた事を中途で已めるのは、白雨が來るかと待つて居る時黒雲共隣國へ通り過ぎた樣に、何となく殘り惜しい。それも非がこつちにあれば格別だが、所謂正義の爲、人道の爲なら、たとひ無駄死をやる迄も進むのが、義務を知る男兒の本懐であらう。無駄骨を折り、無駄足を汚す位は猫として適當の所である。猫と生れた因果で寒月、迷亭、苦沙彌諸先生と三寸の舌頭に相互の思想を交換する技倆はないが、猫丈に忍びの術は諸先生より達者である。他人の出來ぬ事を成就するのは夫自身に於て愉快である。吾一箇でも、金田の内幕を知るのは、誰も知らぬより愉快である。人に告げられんでも人に知られて居るなと云ふ自覺を彼等に與ふる丈が愉快である。こんなに愉快が續々出て來ては行かずには居られない。矢張り行く事に致さう。

向う横町へ來て見ると、聞いた通りの西洋館が角地面を吾物顔に占領して居る。この主人も此西洋館の如く傲慢に構へて居るんだらうと、門を這入つて其建築を眺めて居たが、只人を威壓しようと、二階造りが無意味に突つ立つて居る外に何等の能もない構造であつた。迷亭の所謂月並とは是であらうか。玄關を右に見て、植込の中を通り拔けて、勝手口へ廻る。さすがに勝手は廣い。苦沙彌先生の臺所の十倍は慥かにある。先達て「日本新聞」に詳しく書いてあつた大隈伯の勝手にも劣るまいと思ふ位整然とぴか〳〵して居る。「模範勝手だな」と這入り込む。見ると漆喰で叩き上げた二坪程の土間に、例の車屋の神さんが立ち乍ら、御飯焚と車夫を相手に頻りに何か辯じて居る。こいつは劒呑だと水桶の裏へかくれる。「あの教師あ、うちの旦那の名を知らないのかね」と飯焚が云ふ。「知らねえ事があるもんか、此界隈で金田さんの御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪だあな」是は抱へ車夫の聲である。「なんとも云へないよ。あの教師と來たら、本より外に何も知らない變人なんだからねえ。旦那の事を少しでも知つてりや恐れるかも知れないが、駄目だよ、自分の子供の歳さへ知らないんだもの」と神さんが云ふ。「金田さんでも恐れねえかな、厄介な唐變木だ。構あ事あねえ、みんなで威嚇かしてやらうぢやねえか」「それが好いよ。奥樣の鼻が大き過ぎるの、顏が氣に喰はないのつて――そりやあ酷い事を云ふんだよ。自分の面あ今戸燒の狸見た樣な癖に――あれで一人前だと思つて居るんだから遣り切れないぢやないか」「顏ばかりぢやない、手拭を提げて湯に行く所からして、いやに高慢ちきぢやないか。自分位えらい者は無い積りで居るんだよ」と苦沙彌先生は飯焚にも大いに不人望である。「何でも大勢であいつの垣根の傍へ行つて惡口を散散いつてやるんだね」「さうしたら屹度恐れ入るよ」「然し、こつちの姿を見せちやあ面白くねえから、

聲丈聞かして、勉強の邪魔をした上に、出來る丈じらして遣れつて、さつき奥樣が言ひ附けて御出でなすつたぜ」「そりや分つて居るよ」と神さんは惡口の三分の一を引き受けると云ふ意氣を示す。成程この手合が苦沙彌先生を冷かしに來るなと三人の横を、そつと通り拔けて奥へ這入る。

猫の足はあれども無きが如し、どこを歩いても不器用な音のした試しがない。空を踏むが如く、雲を行くが如く、水中に磬を打つが如く、洞裏に瑟を鼓するが如く、醍醐の妙味を嘗めて言詮の外に冷暖を自知するが如し。月並な西洋館もなく、模範勝手もなく、車屋の神さんも、權助も、飯焚も、御孃さまも、仲働も、鼻子夫人も、夫人の旦那樣もない。行きたい所へ行つて聞き度い話しを聞いて、舌を出し尻尾を掉つて、髭をぴんと立てて悠々と歸るのみである。殊に吾輩は此道に掛けては日本一の堪能である。草雙紙にある猫又の血脈を受けて居りはせぬかと自ら疑ふ位である。蝦蟇の額には夜光の明珠があると云ふが、吾輩の尻尾には神祇釋教戀無常は無論の事、滿天下の人間を馬鹿にする一家相傳の妙藥が詰め込んである。金田家の廊下を人の知らぬ間に横行する位は、仁王樣が心太を踏み潰すよりも容易である。此時吾輩は我ながら、わが力量に感服して、是も不斷大事にする尻尾の御蔭だなと氣が附いて見ると只置かれない。吾輩の尊敬する尻尾大明神を禮拜してニャン運長久を祈らばやと、一寸低頭して見たが、どうも少し見當が違ふ樣である。可成尻尾の方を見て三拜しなければならん。尻尾の方を見ようと身體を廻すと尻尾も自然と廻る。追ひ附かうと思つて首をねぢると尻尾も同じ間隔をとつて、先へ馳け出す。成程天地玄黄を三寸裏に收める程の靈物だけあつて、到底吾輩の手に合はない。尻尾を環る事七度半にして草臥れたからやめにした。少々眼がくらむ。どこに居るのだか一寸方角が分らなくなる。構ふものかと滅茶苦茶にあるき廻

る。障子の裏で鼻子の聲がする。こゝだと立ち留まつて、左右の耳をはすに切つて、息を凝らす。「貧乏教師の癖に生意氣ぢやありませんか」と例の金切り聲を振りたてる。「うん、生意氣な奴だ。ちと懲らしめの爲にいぢめてやらう。あの學校にや國のものも居るからな」「誰が居るの？」「津木ピン助や福地キシャゴが居るから、頼んでからかはしてやらう」吾輩は金田君の生國は分らんが、妙な名前の人間計り揃つた所だと少々驚いた。金田君は猶語をついで、「あいつは英語の教師かい」と聞く。「はあ、車屋の神さんの話しでは英語のリードルか何か專門に教へるんだつて云ひます」「どうせ碌な教師ぢやあるめえ」あるめえにも尠からず感心した。「此間ピン助に遇つたら、私の學校にや妙な奴が居ります。生徒から先生番茶は英語で何と云ひますと聞かれて、番茶は savage tea であると眞面目に答へたんで、教員間の物笑ひとなつて居ます。どうもあんな教員があるから、ほかのものゝ迷惑になつて困りますと云つたが、大方あいつの事だぜ」「あいつに極まつて居ますわ、そんな事を云ひさうな面構へですよ、いやに髭なんか生やして」「怪しからん奴だ」髭を生やして怪しからなければ猫抔は一疋だつて怪しかり樣がない。「それにあの迷亭とか、へゞれけとか云ふ奴は、まあ何てえ頓狂な跳ねつ返りなんでせう。伯父の牧山男爵だなんて、あんな顔に男爵の伯父なんざ、有る筈がないと思つたんですもの」「御前がどこの馬の骨だか分らんものゝ言ふ事を眞に受けるのも惡い」「惡いつて、あんまり人を馬鹿にし過ぎるぢやありませんか」と大變殘念さうである。不思議な事には寒月君の事は一言半句も出ない。吾輩の忍んで來る前に評判記は濟んだものか、又は既に落第と事が極まつて念頭にないものか、其邊は懸念もあるが仕方がない。しばらく佇んで居ると廊下を隔てて向うの座敷でベルの音がする。そらあすこにも何か事がある。後れぬ先に、と

其方角へ歩を向ける。

來て見ると女が獨りで何か大聲で話して居る。其聲が鼻子とよく似て居る所を以て推すと、是が即ち當家の令嬢、寒月君をして未遂入水を敢てせしめたる代物だらう。惜哉障子越しで玉の御姿を拜する事が出來ない。從つて顏の眞中に大きな鼻を祭り込んで居るか、どうだか受け合へない。然し談話の模樣から鼻息の荒い所抔を綜合して考へて見ると、滿更人の注意を惹かぬ獅子鼻とも思はれない。女はしきりに喋舌つて居るが相手の聲が少しも聞こえないのは、噂にきく電話といふものであらう。「御前は大和かい。明日ね、行くんだからね、鶉の三を取つて置いて御呉れ、いゝかえ――分つたかい。――なに分らない?おやいやだ。鶉の三を取るんだよ。――なんだつて。――取れない?取れない筈はない、とるんだよ――へゝゝゝ御冗談をだつて――何が御冗談なんだよ――いやに人を御ひやらかすよ。全體御前は誰だい。長吉だ?長吉なんぞぢや譯が分らない。お神さんに電話口へ出ろつて御云ひな――なに?私で何でも辨じます?――お前は失敬だよ。妾を誰だか知つてるのかい。金田だよ。――へゝゝゝ善く存じて居ります。だつて。ほんとに馬鹿だよ此人あ。――金田だつてえばさ。――なに?――毎度御贔屓にあづかりまして難有う御座います?――何が難有いんだね。御禮なんか聞きたかあないやね――おや又笑つてるよ。御前は餘つ程愚物だね。――仰せの通りだつて?――あんまり人を馬鹿にすると電話を切つて仕舞ふよ。いゝのかい。困らないのかよ――默つてちや分らないぢやないか、何とか御云ひなさいな」電話は長吉の方から切つたものか何の返事もないらしい。令嬢は癇癪を起こしてやけにベルをジャラ〳〵と廻す。足元で狆が驚いて急に吠え出す。是は迂濶に出來ないと、急に飛び下りて緣の下へもぐり込む。

折椽廊下を近づく足音がして障子を開ける音がする。誰か來たなと一生懸命に聞いて居ると、「御孃樣、旦那樣と奥樣が呼んで入らつしやいます」と小間使らしい聲がする。「知らないよ」と令孃は劒突を食はせる。「一寸用があるから孃を呼んで來いと仰しやいました」「うるさいね、知らないつてば」と令孃は第二の劒突を食はせる。「……水島寒月さんの事で御用があるんださうで御座います」と小間使は氣を利かして機嫌を直さうとする。「寒月でも、水月でも知らないんだよ――大嫌ひだわ、絲瓜が戸惑ひをした樣な顏をして」第三の劒突は、憐れなる寒月君が留守中に頂戴する。「おや御前いつ束髪に結つたの」小間使はほつと一息ついて「今日」と可成單簡な挨拶をする。「生意氣だねえ、小間使の癖に」と第四の劒突を別方面から食はす。「さうして新しい半襟を掛けたぢやないか」「へえ、先達て御孃樣から頂きましたので、結構過ぎて勿體ないと思つて行李の中へ仕舞つて置きましたが、今迄のが餘り汚れましたから掛け易へました」「いつ、そんなものを上げた事があるの」「此御正月、白木屋へ入らつしやいまして、御求め遊ばしたので――鶯茶へ相撲の番附を染め出したので御座います。妾には地味過ぎていやだから御前に上げようと仰しやつた、あれで御座います」「あらいやだ。善く似合ふのね。にくらしいわ」「恐れ入ります」「褒めたんぢやない。にくらしいんだよ」「へえ」「そんなによく似合ふものを、何故だまつて貰つたんだい」「へえ」「御前にさへ、其位似合ふなら、妾にだつて可笑しい事あないだらうぢやないか」「屹度よく御似合ひ遊ばします」「似合ふのが分つてる癖に何故默つてゐるんだい。さうして澄まして掛けて居るんだよ、人の惡い」劒突は留めどもなく連發される。此さき、事局はどう發展するかと謹聽して居る時、向うの座敷で「富子や、富子や」と大きな聲で金田君が令孃を呼ぶ。令孃は已むを得ず「はい」

と電話室を出て行く。吾輩より少し大きな猫が顔の中心に眼と口を引き集めた樣な面をして附いて行く。
吾輩は例の忍び足で再び勝手から往來へ出て、急いで主人の家に歸る。探檢は先づ十二分の成績である。
歸つて見ると、綺麗な家から汚い所へ移つたので、何だか日當りの善い山の上から薄暗い洞窟の中へ入り込んだ樣な心持ちがする。探檢中には、ほかの事に氣を奪はれて部屋の裝飾、襖、障子の具合抔には眼も留まらなかつたが、わが住居の下等なるを感ずると同時に彼の所謂月並が戀しくなる。教師よりも矢張り實業家がえらい樣に思はれる。吾輩も少し變だと思つて、例の尻尾に伺ひを立てゝ見たら、其通り其通りと尻尾の先から御託宣があつた。座敷へ這入つて見ると驚いたのは迷亭先生まだ歸らない、卷煙草の吸殼を蜂の巢の如く火鉢の中へ突き立てゝ、大胡坐で何か話し立てゝ居る。いつの間にか寒月君さへ來て居る。主人は手枕をして天井の雨洩りを餘念もなく眺めて居る。不相變太平の逸民の會合である。
「寒月君、君の事を譫語にまで言つた婦人の名は、當時祕密であつた樣だが、もう話しても善からう」と迷亭がからかひ出す。「御話しをしても、私丈に關する事なら差し支へないんですが、先方の迷惑になる事ですから」「まだ駄目かなあ」「それに○○博士夫人に約束をして仕舞つたもんですから」「他言をしないと云ふ約束かね」「えゝ」と寒月君は例の如く羽織の紐をひねくる。其紐は賣品にあるまじき紫色である。「其紐の色は、ちと天保調だな」と主人が寐ながら云ふ。主人は金田事件抔には無頓着である。「さうさ、到底日露戰爭時代のものではないな。陣笠に立葵の紋の附いたぶつ割き羽織でも着なくつちや納まりの附かない紐だ。織田信長が聟入をするとき頭の髮を茶筅に結つたと云ふが其節用ひたのは、慥かそんな紐だよ」と迷亭の文句は不相變長い。「實際是は爺が長州征伐の時に用ひたのです」と寒月君は眞

面目である。「もういゝ加減に博物館へでも獻納してはどうだ。首縊りの力學の演者、理學士水島寒月君ともあらうものが、賣れ殘りの旗本の樣な出立をするのはちと體面に關する譯だから」「御忠告の通りに致してもいゝのですが、此紐が大變よく似合ふと云つて吳れる人もありますので――」「誰だい、そんな趣味のない事を云ふのは」と主人は寐返りを打ちながら大きな聲を出す。「それは御存じの方なんぢやないんで――」「御存じでなくてもいゝや、一體誰だい」「去る女性なんです」「ハヽヽヽ餘程茶人だなあ、當てゝ見ようか、矢張り隅田川の底から君の名を呼んだ女なんだらう、其羽織を着てもう一返御陀佛を極め込んだらどうだい」と迷亭が横合から飛び出す。「へヽヽヽもう水底から呼んでは居りません、こゝから乾の方角にあたる清淨な世界で……」「あんまり清淨でもなさゝうだ、毒々しい鼻だぜ」「へえ?」と寒月は不審な顔をする。「向う横丁の鼻がさつき押しかけて來たんだよ、こゝへ。實に僕等二人は驚いたよ、ねえ苦沙彌君」「うむ」と主人は寐ながら茶を飲む。「鼻つて誰の事です」「君の親愛なる久遠の女性の御母堂樣だ」「へえー」「金田の妻といふ女が君の事を聞きに來たよ」と主人が眞面目に說明してやる。驚くか、嬉しがるか、恥かしがるかと寒月君の樣子を窺つて見ると、別段の事もない。例の通り靜かな調子で「どうか私に、あの娘を貰つて吳れと云ふ依賴なんでせう」と、又紫の紐をひねくる。「所が大違ひさ、其御母堂なるものが偉大なる鼻の所有主でね……」迷亭が半ば言ひ懸けると、主人が「おい君、僕はさつきから、あの鼻に就いて俳體詩を考へて居るんだがね」と木に竹を接いだ樣な事を云ふ。隣の室で細君がくす／＼笑ひ出す。「隨分君も呑氣だなあ、出來たのかい」「少し出來た。第一句が此顔に鼻祭りと云ふのだ」「夫から?」「次が此鼻に神酒供へといふのさ」「次の句は?」「まだそれぎ

りしか出來て居らん」「面白いですな」と寒月君がにや／＼笑ふ。「次へ穴二つ幽かなりと附けちやどうだ」と迷亭はすぐ出來る。すると寒月が「奧深く毛も見えずはいけますまいか」と各出鱈目を並べて居ると、垣根に近く、往來で「今戸焼の狸狸」と四五人わい／＼云ふ聲がする。主人も迷亭も一寸驚いて表の方を、垣の隙からすかして見ると「ワハヽヽヽヽ」と笑ふ聲がして遠くへ散る足の音がする。「今戸焼の狸といふな何だい」と迷亭が不思議さうに主人に聞く。「何だか分らん」と主人が答へる。「中々振つて居ますな」と寒月君が批評を加へる。迷亭は何を思ひ出したか急に立ち上がつて「吾輩は年來美學上の見地から此鼻に就いて研究した事が御座いますから、其一斑を披瀝して、御兩君の淸聽を煩はし度いと思ひます」と演舌の眞似をやる。主人は餘りの突然にぼんやりして、無言の儘迷亭を見て居る。寒月は「是非承はりたいものです」と小聲で云ふ。「色々調べて見ましたが鼻の起源はどうも確と分りません。第一の不審は、もし之を實用上の道具と假定すれば穴が二つで澤山である。何もこんなに横風に眞中から突き出して見る必要がないのである。所がどうして段々御覽の如く斯樣にせり出して參つたか」と自分の鼻を抓んで見せる。「あんまりせり出しても居らんぢやないか」と主人は御世辭のない所を云ふ。「兎に角引つ込んでは居りませんからな。只二個の孔が竝んで居る狀態と混同なすつては誤解を生ずるに至るかも計られませんから、豫め御注意をして置きます。――で愚見によりますと、鼻の發達は吾々人間が鼻汁をかむと申す微細なる行爲の結果が自然と蓄積してかく著明なる現象を呈出したもので御座います」「佯りのない愚見だ」と又主人が寸評を插入する。「御承知の通り鼻汁をかむ時は、是非鼻を抓みます、鼻を抓んで、ことに此局部丈に刺激を與へますと、進化論の大原則によつて、此局部は此刺激に應ずるが爲め他に

比例して不相當な發達を致します。皮も自然堅くなります、肉も次第に硬くなります。遂に凝つて骨となります」「それは少し――」さう自由に肉が骨に一足飛びに變化は出來ますまい」と理學士丈あつて寒月君が抗議を申し込む。迷亭は何喰はぬ顏で陳べ續ける。「いや御不審は御尤もですが、論より證據、此通り骨があるから仕方がありません。既に骨が出來る。骨は出來ても鼻汁は出ますな。出ればかまずには居られません。此作用で骨の左右が削り取られて細い高い隆起と變化して參ります　實に恐ろしい作用です。點滴の石を穿つが如く、賓頭盧の頭が自ら光明を放つが如く、不思議薫不思議臭の喩の如く、斯樣に鼻筋が通つて堅くなります」「それでも君のなんざ、ぶく／＼だぜ」「演者自身の局部は回護の恐れがありますから、態と論じません。かの金田の御母堂の持たせらるゝ鼻の如きは、尤も發達せる尤も偉大なる天下の珍品として御兩君に紹介して置きたいと思ひます」寒月君は思はず「ヒヤ／＼」と云ふ。「然し物も極度に達しますと、偉觀には相違御座いませんが、何となく怖ろしくて近づき難いものであります。あの鼻梁抔は素晴らしいには違ひ御座いませんが、少々峻嶮過ぎるかと思はれます。古人のうちにてもソクラテス、ゴールドスミス若しくはサッカレーの鼻抔は構造の上から云ふと隨分申し分は御座いませうが、其の申し分のある所に愛嬌が御座います。鼻高きが故に貴からず、奇なるが爲に貴しとは此故でも御座いませうか。下世話にも鼻より團子と申しますれば、美的價値から申しますと、先づ迷亭位の所が適當かと存じます」寒月と主人は「フ、、、」と笑ひ出す。迷亭自身も愉快さうに笑ふ。「偖て只今陳辨じましたのは――」「先生辨じましたは少し講釋師の樣で下品ですから、よして頂きませう」と寒月君は先日の復讎をやる。「左樣、然らば顏を洗つて出直しませうかな。――えゝ――是から鼻と顏の權衡に一言論及した

いと思ひます。他に關係なく、單獨に鼻論をやりますと、かの御母堂杯はどこへ出しても恥かしからぬ鼻――鞍馬山で展覽會があつても恐らく一等賞だらうと思はれる位な鼻を所有して入らせられますが、悲しいかなあはれ眼、口、其他の諸先生と何等の相談もなく出來上がつた鼻であります。ジュリアス・シーザーの鼻は大したものに相違御座いません。然しシーザーの鼻を鋏でちょん切つて、當家の猫の顏へ安置したらどんな者で御座いませうか。喩にも猫の額と云ふ位な地面へ、英雄の鼻柱が突兀として聳えたら、碁盤の上へ奈良の大佛を据ゑ附けた樣なもので、少しく比例を失するの極、其美的價値を落とす事だらうと思ひます。御母堂の鼻はシーザーのそれの如く、正しく英姿颯爽たる隆起に相違御座いません。然し其周圍を圍繞する顏面的條件は如何な者でありませう。無論當家の猫の如く劣等ではない。然し癲癇病みのおかめの如く眉の根に八字を刻んで、細い眼を釣るし上げらるゝのは事實であります。諸君、此顏にして此鼻ありと歎ぜざるを得んではありませんか」迷亭の言葉が少し途切れる途端、裏の方で「まだ鼻の話しをして居るんだよ。何てえ業突く張りだらう」と云ふ聲が聞こえる。「車屋の神さんだ」と主人が迷亭へ敎へてやる。迷亭は又やり始める。「計らざる裏手にあたつて、新たに異性の傍聽者のある事を發見したのは演者の深く名譽と思ふ所であります。殊に宛轉たる嬌音を以て、乾燥なる講筵に一點の艷味を添へられたのは實に望外の幸福であります。可成通俗的に引き直して佳人淑女の眷顧に背かざらん事を期する譯でありますが、是からは少々力學上の問題に立ち入りますので、勢ひ御婦人方には御分りにくいかも知れません、どうか御辛防を願ひます」寒月君は力學と云ふ語を聞いて又にや〳〵する。「私の證據立てようとするのは、此鼻と此顏は到底調和しない、ツァイシングの黃金律を失して居ると云ふ事なんで、夫を嚴格

に力學上の公式から演繹して御覽に入れようと云ふのであります。先づHを鼻の高さとします。αは鼻と顏の平面の交叉より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。……」「分るものか」と主人が云ふ。「寒月君はどうだい」「私にもちと分りかねますな」「そりや困つたな。苦沙彌はとにかく、君は理學士だから分るだらうと思つたのに。此式が演說の首腦なんだから之を略しては今迄やつた甲斐がないのだが――まあ仕方がない。公式は略して結論丈話さう」「結論があるか」と主人が不思議さうに聞く。「當り前さ、結論のない演說は、デザートのない西洋料理の樣なものだ。――いゝか、兩君よく聞き給へ、是からが結論だぜ。――偖て以上の公式にウィルヒョウ、ワイスマン諸家の說を參酌して考へて見ますと、先天的形體の遺傳は無論の事許さねばなりません。又此形體に追隨して起る心意的狀況は、たとひ後天性は遺傳するものにあらずとの有力なる說あるにも關せず、ある程度迄は必然の結果と認めねばなりません。從つて斯くの如く身分に不似合なる鼻の持主の生んだ子には、其鼻にも何か異狀がある事と察せられます。寒月君抔は、まだ年が御若いから金田令孃の鼻の構造に於て特別の異狀を認められんかも知れませんが、かゝる遺傳は潛伏期の長いものでありますから、いつ何時氣候の劇變と共に、急に發達して御母堂のそれの如く、咄嗟の間に膨脹するかも知れません。それ故に此御婚儀は、迷亭の學理的論證によりますと、今の內御斷念になつた方が安全かと思はれます。是には當家の御主人は無論の事、そこに寢て居らるゝ猫又殿にも御異存は無からうと存じます」主人は漸う起き返つて「そりや無論さ。あんなものの娘を誰が貰ふものか。寒月君もらつちやいかんよ」と大變熱心に主張する。吾輩も聊か賛成の意を表する爲に、にやーにやーと二聲許り鳴いて見せる。寒月君は別段騷

いだ樣子もなく「先生方の御意向がさうなら、私は斷念してもいゝんですが、もし常人がそれを氣にして病氣にでもなつたら罪ですから――」「ハ、、、、艶罪と云ふ譯だ」主人丈は大いにむきになつて「そんな馬鹿があるものか、あいつの娘なら碌な者でないに極まつてらあ、初めて人のうちへ來ておれを遣り込めに掛かつた奴だ。傲慢な奴だ」と獨りでぷん／＼する。すると又垣根のそばで三四人が「ワハ、、、、」と云ふ聲がする。一人が「高慢ちきな唐變木だ」と云ふと、一人が「もつと大きな家へ這入りてえだらう」と云ふ。又一人が「御氣の毒だがいくら威張つたつて蔭辨慶だ」と大きな聲をする。主人は椽側へ出て負けない樣な聲で「八釜しい、何だわざ／＼そんな塀の下へ來て」と怒鳴る。「ワハ、、、、サヹジ・チーだ、サヹジ・チーだ」と口々に罵る。主人は大いに逆鱗の體で突然起つてステッキを持つて、往來へ飛び出す。迷亭は手を拍つて「面白い、やれ／＼」と云ふ。寒月は羽織の紐を撚つてにや／＼する。吾輩は主人のあとを附けて垣の崩れから往來へ出て見たら、眞中に主人が手持無沙汰にステッキを突いて立つて居る。人通りは一人もない。一寸狐に抓まれた體である。

四

例によつて金田邸へ忍び込む。

例によつてとは今更解釋する必要もない、度々を自乘した程の度合を示す語である。一度遣つた事は二度遣りたいもので、二度こゝろみた事は三度試みたいのは人間にのみ限らるゝ好奇心ではない。猫と雖も此心理的特權を有して此世界に生れ出でたものと認定して頂かねばならぬ。三度以上繰り返す時始めて習慣なる語を冠せられて、此行爲が生活上の必要と進化するのも亦人間と相違はない。何の爲に、かく迄足繁く金田邸へ通ふのかと不審を起こすなら其前に一寸人間に反問し度い事がある。なぜ人間は口から烟を吸ひ込んで鼻から吐き出すのであるか。腹の足しにも血の道の藥にもならないものを、恥かし氣もなく吐呑して憚らざる以上は、吾輩が金田に出入するのを、あまり大きな聲で咎め立てをして貰ひたくない。金田邸は吾輩の煙草である。

忍び込むと云ふと語弊がある、何だか泥棒か間男の樣で聞き苦しい。吾輩が金田邸へ行くのは招待こそ受けないが、決して鰹の切身をちよろまかしたり、眼鼻が顏の中心に痙攣的に密着して居る狆君杯と密談する爲ではない。――何、探偵？――以ての外の事である。凡そ世の中に何が賤しい家業だと云つて探偵と高利貸程下等な職はないと思つて居る。成程寒月君の爲に猫にあるまじき程の義俠心を起こして、一度は金田家の動靜を餘所ながら窺つた事はあるが、それは只の一遍で、其後は決して猫の良心に恥づる樣な

陋劣な振舞ひを致した事はない。――そんなら、何故忍び込むと云ふ樣な胡亂な文字を使用した？――さあ、それが頗る意味のある事だて。元來吾輩の考へによると大空は萬物を覆ふ爲、大地は萬物を載せる爲に出來て居る――如何に執拗な議論を好む人間でも此事實を否定する譯には行くまい。偖て此大空大地を製造する爲に彼等人類はどの位の勞力を費やして居るかと云ふと尺寸の手傳ひもして居らぬではないか。自分が製造して居らぬものを自分の所有と極める法はなからう。自分の所有と極めても差し支へないが他の出入を禁ずる理由はあるまい。此の茫々たる大地を、小賢しくも垣を圍らし棒杭を立てて某々所有地抔と劃し限るのは、恰もかの蒼天に繩張りして、この部分は我の天、あの部分は彼の天と屆け出る樣な者だ。もし土地を切り刻んで一坪いくらの所有權を賣買するなら我等が呼吸する空氣を一尺立方に割つて切賣りをしても善い譯である。空氣の切賣りが出來ず、空の繩張りが不當なら地面の私有も不合理ではないか。如是觀によりて如是法を信じて居る吾輩はそれだからどこへでも這入つて行く。尤も行き度くない處へは行かぬが、志す方角へは東西南北の差別は入らぬ。平氣な顏をして、のそ〳〵と參る。金田如きものに遠慮をする譯がない。――然し猫の悲しさは力づくでは到底人間には叶はない。强勢は權利なりとの格言さへある此浮世に存在する以上は、如何に此方に道理があつても、猫の議論は通らない。無理に通さうとすると車屋の黑の如く不意に肴屋の天秤棒を喰らふ恐れがある。理は此方にあるが權力は向うにあると云ふ場合に、理を曲げて一も二もなく屈從するか、又は權力の目を掠めて我理を貫くかと云へば、吾輩は無論後者を擇ぶのである。天秤棒は避けざる可からざるが故に、忍ばざるべからず。人の邸内へは這入り込んで差し支へなき故込まざるを得ず。此故に吾輩は金田邸へ忍び込むのである。

忍び込む度が重なるにつけ、探偵をする氣はないが自然金田君一家の事情が見度くもない吾輩の眼に映じて、覺え度くもない吾輩の腦裏に印象を留むるに至るのは已むを得ない。鼻子夫人が顏を洗ふたんびに念を入れて鼻丈拭く事や、富子令孃が阿倍川餅を無暗に召し上がるゝ事や、夫から金田君自身が——金田君は細君に似合はず鼻の低い男である。單に鼻のみではない、顏全體が低い。子供の時分喧嘩をして、餓鬼大將の爲に頸筋を捉まへられて、うんと精一杯に土塀へ壓し附けられた時の顏が四十年後の今日迄、因果をなして居りはせぬかと怪しまるゝ位平坦な顏である。至極穩やかで危險のない顏には相違ないが、何となく變化に乏しい。いくら怒つても平かな顏である。——其金田君が鮪の刺身を食つて自分で自分の禿頭をぴちや／＼叩く事や、それから顏が低い計りでなく脊が低いので、無暗に高い帽子と高い下駄を穿く事や、夫を車夫が可笑しがつて書生に話す事や、書生が成程君の觀察は機敏だと感心する事や——一々數へ切れない。

近頃は勝手口の横を庭へ通り拔けて、築山の陰から向うを見渡して、障子が立て切つて物靜かであるなと見極めがつくと徐々上がり込む。もし人聲が賑やかであるか、座敷から見透かさるゝ恐れがあると思へば、池を東へ廻つて雪隱の横から知らぬ間に緣の下へ出る。惡い事をした覺えはないから何も隱れる事も、恐れる事もないのだが、そこが人間と云ふ無法者に逢つては不運と諦めるより仕方がないので、若し世間が熊坂長範計りになつたら如何なる盛德の君子も矢張り吾輩の樣な態度に出づるであらう。金田君は堂々たる實業家であるから固より熊坂長範の樣に五尺三寸を振り廻す氣遣ひはあるまいが、承はる處によれば人を人と思はぬ病氣があるさうである。人を人と思はない位なら、猫を猫とも思ふまい。して見れば猫た

るものは如何なる盛德の猫でも彼の邸内で決して油斷は出來ぬ譯である。然し其油斷の出來ぬ所が吾輩には一寸面白いので、吾輩がかく迄に金田家の門を出入するのも、只此危險を冒して見たい計りかも知れぬ。それは追つて篤と考へた上、猫の腦裏を殘りなく解剖し得た時改めて御吹聽仕らう。

今日はどんな模樣だなと、例の築山の芝生の上に顎を押しつけて前面を見渡すと、十五疊の客間を彌生の春に明け放つて、中には金田夫婦と一人の來客との御話し最中である。生憎鼻子夫人の鼻が此方を向いて池越しに吾輩の額の上を正面から睨め附けて居る。鼻に睨まれたのは生れて今日が始めてである。金田君は幸ひ横顏を向けて客と相對して居るから例の平坦な部分は半分かくれて見えぬが、其代り鼻の在所が判然しない。只胡麻鹽色の口髯が好い加減な所から亂雜に茂生して居るので、あの上に孔が二つある筈だと結論丈は苦もなく出來る。春風もあゝ云ふ滑らかな顏を計り吹いて居たら定めて樂だらうと、序ながら想像を逞しうして見た。御客さんは三人の中で一番普通な容貌を有して居る。但し普通な丈に、是ぞと取り立てて紹介するに足る樣な造作は一つもない。普通と云ふと結構な樣だが、普通の極平凡の堂に上り、庸俗の室に入つたのは寧ろ憫然の至りだ。かゝる無意味な面構へを有す可き宿命を帶びて明治の昭代に生れて來たのは誰だらう。例の如く緣の下迄行つて其談話を承はらなくては分らぬ。

「……それで妻が態々あの男の所迄出掛けて行つて容子を聞いたんだがね……」と金田君は例の如く横風な言葉遣ひである。横風ではあるが毫も峻嶮な所がない。言語も彼の顏面の如く平板尨大である。

「成程あの男が水島さんを教へた事が御座いますので――成程、よい御思ひ附きで――成程」と成程づくめのは御客さんである。

「所が何だか要領を得んので」
「えゝ苦沙彌ぢや要領を得ない譯で――あの男は私が一所に下宿をして居る時分から實に煮え切らない
――そりや御困りで御座いましたらう」と御客さんは鼻子夫人の方を向く。
「困るの、困らないのつてあなた、私や此年になる迄人のうちへ行つて、あんな不取扱ひを受けた事は
ありやしません」と鼻子は例によつて鼻嵐を吹く。
「何か無禮な事でも申しましたか、昔から頑固な性分で――何しろ十年一日の如くリードル專門の教師
をして居るのでも大體御分りになりませう」と御客さんは體よく調子を合はせて居る。
「いや御話しにもならん位で、妻が何か聞くと丸で劍もほろゝの挨拶ださうで……」
「それは怪しからん譯で――一體少し學問をして居ると兎角慢心が萌すもので、其上貧乏をすると負け
惜しみが出ますから――いえ世の中には隨分無法な奴が居りますよ。自分の働きのないのにや氣が附かな
いで、無暗に財産のあるものに喰つて掛かるなんてえのが――丸で彼等の財産でも捲き上げた樣な氣分で
すから驚きますよ、アハヽヽ」と御客さんは大恐悅の體である。
「いや、まことに言語道斷で、あゝ云ふのは、畢竟世間見ずの我儘から起るのだから、些と懲らしめの
爲にいぢめて遣るが好からうと思つて、少し當たつてやつたよ」
「成程、夫では大分答へましたらう、全く本人の爲にもなる事ですから」と御客さんは如何なる當りか
か承はらぬ先から既に金田君に同意して居る。
「所が鈴木さん、まあなんて頑固な男なんでせう。學校へ出ても福地さんや、津木さんには口も利かな

いんださうです。恐れ入つて默つて居るのかと思つたら、此間は罪もない宅の書生をステッキを持つて追つ懸けたつてんです――三十面さげて、よく、まあ、そんな馬鹿な眞似が出來たもんぢやありませんか、全くやけで少し氣が變になつてるんですよ」

「へえ、どうして又そんな亂暴な事をやつたんで……」と是には、さすがの御客さんも少し不審を起こしたと見える。

「なあに、只あの男の前を何とか云つて通つたんださうです。すると、いきなり、ステッキを持つて跣足で飛び出して來たんださうです。よしんば、些とやそつと、何か云つたつて子供ぢやありませんか、髯面の大僧の癖に、しかも敎師ぢやありませんか」

「左樣、敎師ですからな」と御客さんが云ふと、金田君も「敎師だからな」と云ふ。敎師たる以上は如何なる侮辱を受けても木像の樣に大人しくして居らねばならぬとは此三人の期せずして一致した論點と見える。

「それに、あの迷亭つて男は餘つ程な醉興人ですね。役にも立たない嘘八百を並べ立てて。私やあんな變梃な人にや初めて逢ひましたよ」

「あゝ迷亭ですか、不相變法螺を吹くと見えますね。矢張り苦沙彌の所で御逢ひになつたんですか。あれに掛かつちやたまりません。あれも昔自炊の仲間でしたが、あんまり人を馬鹿にするものですから好く喧嘩をしましたよ」

「誰だつて怒りまさあね、あんなぢや。そりや嘘をつくのも宜う御座んせうさ、ね、義理が惡いとか、

ばつを合はせなくつちやならないとか――そんな時には誰しも心にない事を云ふもんでさあ。然しあの男のは吐かなくつて濟むのに矢鱈に吐くんだから始末に了へないぢやありませんか。何が欲しくつて、あんな出鱈目を――よくまあ、しら／＼しく云へると思ひますよ」

「御尤もで、全く道樂からくる嘘だから困ります」

「折角あなた、眞面目に聞きに行つた水島の事も滅茶々々になつて仕舞ひました。私や業腹で忌々敷くつて――夫でも義理は義理でさあ、人のうちへ物を聞きに行つて知らん顔の半兵衛もあんまりですから、後で車夫にビールを一ダース持たせてやつたんです。所があなたどうでせう。こんなものを受け取る理由がない、持つて歸れつて云ふんださうで。いえ御禮だから、どうか御取り下さいつて車夫が云つたら。――憎いぢやありませんか、俺はジャムは毎日舐めるがビールの樣な苦い物は飲んだ事がないつて、ふいと奥へ這入つて仕舞つたつて――言ひ草に事を缺いて、まあどうでせう、失禮ぢやありませんか」

「そりや、ひどい」と御客さんも今度は本氣に酷いと感じたらしい。

「そこで今日態々君を招いたのだがね」と少時途切れて金田君の聲が聞こえる。「そんな馬鹿者は陰から、からかつてさへ居れば濟む樣なもの丶、少々夫でも困る事があるぢやて……」と鮪の刺身を食ふ時の如く禿頭をぴちや／＼叩く。尤も吾輩は縁の下に居るから、實際叩いたか叩かないか見えよう筈がないが、此禿頭の音は近來大分聞き馴れて居る。比丘尼が木魚の音を聞き分ける如く、縁の下からでも音さへ慥かであればすぐ禿頭だなと出所を鑑定する事が出來る。「そこで一寸君を煩はしたいと思つてな……」

「私に出來ます事なら何でも御遠慮なくどうか――今度東京勤務と云ふ事になりましたのも全く色々御

心配を掛けた結果に外ならん譯でありますから」と御客さんは快く金田君の依頼を承諾する。此口調で見ると此御客さんは矢張り金田君の世話になる人と見える。いや段々事件が面白く發展してくるな、今日はあまり天氣が宜いので、來る氣もなしに來たのであるが、かう云ふ好材料を得ようとは全く思ひ掛けなんだ。御彼岸に御寺詣りをして偶然方丈で牡丹餅の御馳走になる樣な者だ。金田君はどんな事を客人に依頼するかなと、緣の下から耳を澄まして聞いて居る。

「あの苦沙彌と云ふ變物が、どう云ふ譯か水島に入れ智慧をするので、あの金田の娘を貰つては行かん抔とほのめかすさうだ――なあ鼻子、さうだな」

「ほのめかす所ぢやないんです。あんな奴の娘を貰ふ馬鹿がどこの國にあるものか、寒月君決して貰つちやいかんよつて云ふんです」

「あんな奴とは何だ失敬な、そんな亂暴な事を云つたのか」

「云つた所ぢやありません、ちやんと車屋の神さんが知らせに來てくれたんです」

「鈴木君どうだい、御聞きの通りの次第さ、隨分厄介だらうが?」

「困りますね、外の事と違つて、かう云ふ事には他人が妄りに容喙するべき筈の者ではありませんからな。その位な事は如何な苦沙彌でも心得て居る筈ですが。一體どうした譯なんでせう」

「それでの、君は學生時代から苦沙彌と同宿をして居て、今は兎に角、昔は親密な間柄であつたさうだから御依頼するのだが、君當人に逢つてな、よく利害を諭して見てくれんか。何か怒つて居るかも知れんが、怒るのは向うが惡いからで、先方が大人しくしてさへ居れば一身上の便宜も充分計つてやるし、氣に

障る樣な事もやめてやる。然し向うが向うなら此方も此方と云ふ氣になるからな──つまりそんな我を張るのは當人の損だからな」

「えゝ全く仰しやる通り愚な抵抗をするのは本人の損になる計りで何の益もない事ですから、善く申し聞けませう」

「それから娘は色々と申し込みもある事だから、必ず水島にやると極める譯にも行かんが、段々聞いて見ると學問も人物も惡くもない樣だから、若し當人が勉強して近い内に博士にでもなつたら或はもらふ事が出來るかも知れん位は夫となくほのめかしても構はん」

「さう云つて遣つたら當人も勵みになつて勉強する事でせう。宜しう御座います」

「それから、あの妙な事だが──水島にも似合はん事だと思ふが、あの變物の苦沙彌を先生々々と云つて苦沙彌の云ふ事は大抵聞く樣子だから困る。なにそりや、何も水島に限る譯では無論ないのだから、苦沙彌が何と云つて邪魔をしようとわしの方は別に差し支へもせんが……」

「水島さんが可哀さうですからね」と鼻子夫人が口を出す。

「水島と云ふ人には逢つた事も御座いませんが、兎に角こちらと御縁組が出來れば生涯の幸福で、本人は無論異存はないのでせう」

「えゝ水島さんは貰ひたがつて居るんですが、苦沙彌だの迷亭だのつて變り者が何だとか、かんだとか云ふものですから」

「そりや、善くない事で、相當の教育のあるものにも似合はん所作ですな。よく私が苦沙彌の所へ參つ

て談じませう」

「あゝ、どうか、御面倒でも、一つ願ひたい。夫から實は水島の事も苦沙彌が一番詳しいのだが、先達て妻が行つた時は今の始末で碌々聞く事も出來なかつた譯だから、君から今一應本人の性行學才等をよく聞いて貰ひたいて」

「かしこまりました。今日は土曜ですから是から廻つたら、もう歸つて居りませう。近頃はどこに住んで居りますか知らん」

「こゝの前を右へ突き當たつて、左へ一丁許り行くと崩れかゝつた黑塀のあるうちです」と鼻子が教へる。

「それぢや、つい近所ですな。譯はありません。歸りに一寸寄つて見ませう。なあに、大體分りませう。標札を見れば」

「標札はあるときと、ないときとありますよ。名刺を御飯粒で門へ貼り附けるのでせう。雨がふると剝がれて仕舞ひませう。すると御天氣の日に又貼り附けるのです。だから標札は當にやなりませんよ。あんな面倒臭い事をするよりせめて木札でも懸けたらよささうなもんですがねえ。ほんたうにどこ迄も氣の知れない人ですよ」

「どうも驚きますな。然し崩れた黑塀のうちと聞いたら大概分るでせう」

「えゝ、あんな汚いうちは町内に一軒しかないから、すぐ分りますよ。あ、さう〳〵それで分らなければ、好い事がある。何でも屋根に草が生えたうちを探して行けば間違ひつこありませんよ」

「餘程特色のある家ですな、アハヽヽヽ」
鈴木君が御光來になる前に歸らないと、少し都合が惡い。談話も是丈聞けば大丈夫澤山である。椽の下を傳はつて雪隱を西へ廻つて築山の陰から往來へ出て、急ぎ足で屋根に草の生えて居るうちへ歸つて來て、何喰はぬ顏をして座敷の椽へ廻る。

主人は椽側へ白毛布を敷いて、腹這ひになつて麗らかな春日に甲羅を干して居る。太陽の光線は存外公平なもので屋根にペン〱草の目標のある陋屋でも、金田君の客間の如く陽氣に暖かさうであるが、氣の毒な事には毛布丈が春らしくない。製造元では白の積りで織り出して、唐物屋でも白の氣で賣り捌いたのみならず、主人も白と云ふ注文で買つて來たのであるが――何しろ十二三年以前の事だから白の時代はとくに通り越して、只今は濃灰色なる變色の時期に遭遇しつゝある。此時期を經過して他の暗黑色に化ける迄毛布の命が續くかどうだかは、疑問である。今でも既に萬遍なく擦り切れて、竪横の筋は明らかに讀まれる位だから、毛布と稱するのはもはや僭上の沙汰であつて、毛の字は省いて單にツトとでも申すのが適當である。然し主人の考へでは一年持ち、五年持ち、十年持つた以上は生涯持たねばならぬと思つて居るらしい。隨分呑氣な事である。偖て其因緣のある毛布の上へ前申す通り腹這ひになつて何をして居るかと思ふと、兩手で出張つた顋を支へて、右手の指の股に卷煙草を挾んで居る。只夫丈である。尤も彼がフケだらけの頭の裏には宇宙の大眞理が火の車の如く廻轉しつゝあるかも知れないが、外部から拜見した所ではそんな事とは夢にも思へない。

煙草の火は漸々吸口の方へ逼つて、一寸許り燃え盡した灰の棒がぱたりと毛布の上に落つるのも構はず、

主人は一生懸命に煙草から立ち上る烟の行末を見詰めて居る。其烟は春風に浮きつ沈みつ、流れる輪を幾重にも描いて、紫深き細君の洗髪の根元へ吹き寄せつゝある。――おや、細君の事を話して置く筈だつた。忘れて居た。

細君は主人に尻を向けて――なに失禮な細君だ？別に失禮な事はないさ。禮も非禮も相互の解釋次第でどうでもなる事だ。主人は平氣で細君の尻の所へ頬杖を突き、細君は平氣で主人の顏の先へ莊嚴なる尻を据ゑた迄の事で、無禮も絲瓜もないのである。御兩人は結婚後一ヶ年も立たぬ間に禮儀作法抔と窮屈な境遇を脱却せられた超然的夫婦である。――偖て斯くの如く主人に尻を向けた細君はどう云ふ了簡か、今日の天氣に乘じて、尺に餘る綠の黑髮を、布海苔と生卵でゴシ／＼洗濯せられた者と見えて、癖のない奴を、見よがしに肩から脊へ振りかけて、無言の儘子供の袖なしを熱心に縫つて居る。實は其洗髮を乾かす爲に唐縮緬の布團と針箱を椽側へ出して、恭しく主人に尻を向けたのである。或は主人の方で尻のある見當へ顏を持つて來たのかも知れない。そこで先刻御話しをした煙草の烟が、豐かに靡く黑髮の間に流れ流れて、時ならぬ陽炎の燃える所を主人は餘念もなく眺めて居る。然しながら烟は固より一所に停まるものではない、其性質として上へ上へと立ち登るのだから、主人の眼も此烟の髮毛と縺れ合ふ奇觀を落ちなく見ようとすれば、是非共眼を動かさなければならない。主人は先づ腰の邊から觀察を始めて徐々と背中を傳つて、肩から頸筋に掛かつたが、それを通り過ぎて漸々腦天に達した時、覺えずあつと驚いた。――主人が偕老同穴を契つた夫人の腦天の眞中には眞丸な大きな禿がある。而も其禿が暖かい日光を反射して、今や時を得顏に輝いて居る。思はざる邊に此の不思議な大發見をなした時の主人の眼は眩い中に充分の驚きを示し

で、烈しい光線で瞳孔の開くのも構はず一心不亂に見詰めて居る。主人が此禿を見た時、第一彼の腦裏に浮んだのは、かの家傳來の佛壇に幾世となく飾り附けられたる御燈明皿である。彼の一家は眞宗で、眞宗では佛壇に身分不相應な金を掛けるのが古例である。主人は幼少の時其家の倉の中に、薄暗く飾り附けられたる金箔厚き厨子があつて、其厨子の中にはいつでも眞鍮の燈明皿がぶら下がつて、其燈明皿には晝でもぼんやりした灯がついて居た事を記憶して居る。周圍が暗い中に此燈明皿が比較的明瞭に輝いて居たので、子供心に此灯を何遍となく見た時の印象が細君の禿に喚び起こされて突然飛び出したものであらう。燈明皿は一分立たぬ間に消えた。此度は觀音樣の鳩の事を思ひ出す。觀音樣の鳩と細君の禿とは何等の關係もない樣であるが、主人の頭では二つの間に密接な聯想がある。同じく子供の時分に淺草へ行くと必ず鳩に豆を買つてやつた。豆は一皿が文久二つで、赤い土器へ這入つて居た。其土器が、色と云ひ大きさと云ひ此禿によく似て居る。

「成程似て居るな」と主人が、さも感心したらしく云ふと「何がです」と細君は見向きもしない。

「何だつて、御前の頭にや大きな禿があるぜ。知つてるか」

「えゝ」と細君は依然として仕事の手を已めずに答へる。別段露見を恐れた樣子もない。超然たる模範細君である。

「嫁にくるときからあるのか、結婚後新たに出來たのか」と主人が聞く。もし嫁にくる前から禿げて居るなら欺されたのであると口へは出さないが心の中で思ふ。

「いつ出來たんだか、覺えちや居ませんわ、禿なんざどうだつて宜いぢやありませんか」と大いに悟つ

たものである。

「どうだつて宜いつて、自分の頭ぢやないか」と主人は少々怒氣を帶びて居る。

「自分の頭だから、どうだつて宜いんだわ」と云つたが、さすが少しは氣になると見えて右の手を頭に乘せて、くる〳〵禿を撫でて見る。「おや大分大きくなつた事、こんなぢや無いと思つて居た」と言つた所を以て見ると、年に合はして禿が餘り大き過ぎると云ふ事を漸く自覺したらしい。

「女は髷に結ふと、こゝが釣れますから誰でも禿げるんですわ」と少しく辯護しだす。

「そんな速度で、みんな禿げたら、四十位になれば、から藥罐ばかり出來なければならん。そりや病氣に違ひない。傳染するかも知れん。今のうち早く甘木さんに見て貰へ」と主人は頻りに自分の頭を撫で廻して見る。

「そんなに人の事を仰しやるが、あなただつて鼻の孔へ白髮が生えてるぢやありませんか。禿が傳染するなら白髮だつて傳染しますわ」と細君少々ぷり〳〵する。

「鼻の中の白髮は見えんから害はないが、腦天が――ことに若い女の腦天がそんなに禿げちや見苦しい。不具だ」

「不具なら、なぜ御貰ひになつたのです。御自分が好きで貰つて置いて不具だなんて……」

「知らなかつたからさ。全く今日迄知らなかつたんだ。そんなに威張るなら、なぜ嫁に來る時頭を見せなかつたんだ」

「馬鹿な事を！どこの國に頭の試驗をして及第したら嫁にくるなんてものが在るもんですか」

「禿はまあ我慢もするが、御前は脊が人並外れて低い。甚だ見苦しくていかん」
「脊は見ればすぐ分るぢやありませんか、脊の低いのは最初から承知で御貰ひになつたんぢやありませんか」
「それは承知さ、承知には相違ないがまだ延びるかと思つたから貰つたのさ」
「二十にもなつて脊が延びるなんて――あなたも餘つ程人を馬鹿になさるのね」と細君は袖なしを抛り出して主人の方に捩ぢ向く。返答次第では其分には濟まさんと云ふ權幕である。
「二十になつたつて脊が延びてならんと云ふ法はあるまい。嫁に來てから滋養分でも食はしたら少しは延びる見込みがあると思つたんだ」と眞面目な顏をして妙な理窟を述べて居ると、門口のベルが勢よく鳴り立てて賴むと云ふ大きな聲がする。愈鈴木君がペン／＼草を目當に苦沙彌先生の臥龍窟を尋ねあてたと見える。
細君は喧嘩を後日に讓つて、倉皇針箱と袖なしを抱へて茶の間へ逃げ込む。主人は鼠色の毛布を丸めて書齋へ投げ込む。やがて下女が持つて來た名刺を見て、主人は一寸驚いた樣な顏附であつたが、こちらへ御通し申してと言ひ棄てて、名刺を握つた儘後架へ這入つた。何の爲に後架へ急に這入つたか一向要領を得ん。何の爲に鈴木藤十郎君の名刺を後架迄持つて行つたのか猶更說明に苦しむ。兎に角迷惑なのは臭い所へ隨行を命ぜられた名刺君である。
下女が更紗の座布團を床の前へ直して、どうぞ是へと引き下がつた跡で、鈴木君は一應室内を見廻す。床に掛けた花開萬國春とある木菴の贋物や、京製の安靑磁に活けた彼岸櫻抔を一々順番に點檢したあと

で、不圖下女の勸めた布團の上を見ると、いつの間にか一疋の猫が澄まして坐つて居る。申す迄もなく、それはかく申す吾輩である。此時鈴木君の胸のうちに一寸の間顏色にも出ぬ程の風波が起つた。此布團は疑ひもなく鈴木君の爲に敷かれたものである。自分の爲に敷かれた布團の上に自分が乘らぬ先から、斷りもなく妙な動物が平然と蹲踞して居る。是が鈴木君の心の平均を破る第一の條件である。もし此布團が勸められたまゝ、主なくして春風の吹くに任せてあつたなら、鈴木君はわざと謙遜の意を表して、主人がさあどうぞと云ふ迄は堅い疊の上で我慢して居たかも知れない。然し早晩自分の所有すべき布團の上に挨拶もなく乘つたものは誰であらう。人間なら讓る事もあらうが猫とは怪しからん。乘り手が猫であると云ふのが一段と不愉快な感ぜしめる。是が鈴木君の心の平均を破る第二の條件である。最後に其猫の態度が尤も癪に障る。少しは氣の毒さうにでもして居る事か、乘る權利もない布團の上に、傲然と構へて、丸い無愛嬌な眼をぱちつかせて、御前は誰だいと云はぬ許りに鈴木君の顏を見詰めて居る。是が平均を破壞する第三の條件である。是程不平があるなら、吾輩の頸根つこを捉へて引きずり卸したら宜ささうなものだが、鈴木君はだまつて見て居る。堂々たる人間が猫に恐れて手出しをせぬと云ふ事は有らう筈がないのに、なぜ早く吾輩を處分して自分の不平を洩らさないかと云ふと、是は全く鈴木君が一個の人間として自己の體面を維持する自重心の故であると察せらるゝ。もし腕力に訴へたら三尺の童子も吾輩を自由に上下し得るであらうが、體面を重んずる點より考へると、如何に金田君の股肱たる鈴木藤十郎其人も此二尺四方の眞中に鎭座まします猫大明神を如何ともする事が出來ぬのである。如何に人の見て居ぬ場所でも、猫と座席爭ひをしたとあつては聊か人間の威嚴に關する。眞面目に猫を相手にして曲直を爭ふのは如何にも大人氣

ない。滑稽である。此不名譽を避ける爲には多少の不便は忍ばねばならぬ。然し忍ばねばならぬ丈其丈猫に對する憎惡の念は增す譯であるから、鈴木君は時々吾輩の顏を見ては苦い顏をする。吾輩は鈴木君の不平な顏を拜見するのが面白いから、滑稽の念を抑へて可成何喰はぬ顏をして居る。

吾輩と鈴木君の間に、斯くの如き無言劇が行はれつゝある間に主人は衣紋をつくろつて後架から出て來て「やあ」と席に着いたが、手に持つて居た名刺の影さへ見えぬ所を以て見ると、鈴木藤十郎君の名前は臭い所へ無期徒刑に處せられたものと見える。名刺こそ飛んだ厄運に際會したものだと思ふ間もなく、主人は此野郎と吾輩の襟がみを攫んでえいと許りに緣側へ擲きつけた。

「さあ敷き玉へ。珍しいな。いつ東京へ出て來た」と主人は舊友に向つて布團を勸める。鈴木君は一寸之を裏返した上で、それへ坐る。

「ついまだ忙しいものだから報知もしなかつたが、實は此間から東京の本社の方へ歸る樣になつてね……

……」

「それは結構だ、大分長く逢はなかつたな。君が田舍へ行つてから、始めてぢやないか」

「うん、もう十年近くになるね。なに其後時々東京へは出て來る事もあるんだが、つい用事が多いもんだから、いつでも失敬する樣な譯さ。惡く思つて呉れ玉ふな。會社の方は君の職業とは違つて隨分忙しいんだから」

「十年立つうちには大分違ふもんだな」と主人は鈴木君を見上げたり見下ろしたりして居る。鈴木君は頭を美麗に分けて、英國仕立のトヰードを着て、派手な襟飾りをして、胸に金鎖さへピカつかせて居る

體裁、どうしても苦沙彌君の舊友とは思へない。

「うん、こんな物迄ぶら下げなくちやならん樣になつてね」と鈴木君は頻りに金鎖を氣にして見せる。

「そりや本ものかい」と主人は無作法な質問をかける。

「十八金だよ」と鈴木君は笑ひながら答へたが、「君も大分年を取つたね。慥か子供がある筈だつたが一人かい」

「いゝや」

「二人？」

「いゝや」

「まだあるのか、ぢや三人か」

「うん三人ある。此先幾人出來るか分らん」

「相變らず氣樂な事を云つてるぜ。一番大きいのはいくつになるかね、もう餘つ程だらう」

「うん、いくつか能く知らんが、大方六つか七つかだらう」

「ハヽ、教師は呑氣でいゝな。僕も教員にでもなれば善かつた」

「なつて見ろ、三日で嫌になるから」

「さうかな、何だか上品で、氣樂で、閑暇があつて、すきな勉强が出來て、よささうぢやないか。實業家も惡くもないが我々のうちは駄目だ。實業家になるならずつと上にならなくつちやいかん。下の方になると矢張り詰まらん御世辭を振り撒いたり、好かん猪口を頂きに出たり、隨分愚なもんだよ」

「僕は實業家は學校時代から大嫌ひだ。金さへ取れゝば何でもする、昔で云へば素町人だからな」と實業家を前に控へて太平樂を並べる。

「まさか――さう計りも云へんがね、少しは下品な所もあるのさ、兎に角金と情死をする覺悟でなければ遣り通せないから――所が其金と云ふ奴が曲者で、――今もある實業家の所へ行つて聞いて來たんだが、金を作るにも三角術を使はなくちやいけないと云ふのさ――義理をかく、人情をかく、恥をかく、是で三角になるさうだ。面白いぢやないか。アハヽヽ」

「誰だそんな馬鹿は」

「馬鹿ぢやない、中々利口な男なんだよ、實業界で一寸有名だがね、君知らんかしら、つい此先の横丁に居るんだが」

「金田か？何だあんな奴」

「大變怒つてるね。なあに、そりや、ほんの冗談だらうがね、その位にせんと金は溜らんと云ふ喩さ。君の樣にさう眞面目に解釋しちや困る」

「三角術は冗談でもいゝが、あすこの女房の鼻はなんだ。君行つたんなら見て來たらう、あの鼻を」

「細君か、細君は中々さばけた人だ」

「鼻だよ、大きな鼻の事を云つてるんだ。先達て僕はあの鼻に就いて俳體詩を作つたがね」

「何だい俳體詩と云ふのは」

「俳體詩を知らないのか、君も隨分時勢に暗いな」

「おゝ僕の樣に忙しいと文學抔は到底駄目さ。それに以前からあまり數寄でない方だから」
「君、シャーレマンの鼻の恰好を知つてるか」
「アハヽヽ隨分氣樂だな、知らんよ」
「ヱリントンは部下のものから鼻々と異名をつけられて居た。君知つてるか」
「鼻の事許り氣にして、どうしたんだい。好いぢやないか鼻なんか、丸くても尖つてても」
「決してさうでない。君パスカルの事を知つてるか」
「又知つてるかか、丸で試驗を受けに來た樣なものだ。パスカルがどうしたんだい」
「パスカルがこんな事を云つて居る」
「どんな事を」
「若しクレオパトラの鼻が少し短かかつたならば世界の表面に大變化を來したらうと」
「成程」
「夫だから君の樣にさう無雜作に鼻を馬鹿にしてはいかん」
「まあいゝさ、是から大事にするから。そりやさうとして、今日來たのは、少し君に用事があつて來たんだがね。――あの元君の教へたとか云ふ、水島――えゝ水島、えゝ一寸思ひ出せない。――そら君の所へ始終來ると云ふぢやないか」
「寒月か」
「さう〳〵寒月寒月、あの人の事に就いて一寸聞き度い事があつて來たんだがね」

「結婚事件ぢやないか」
「まあ多少夫に類似の事さ、今日金田へ行つたら……」
「此間鼻が自分で來た」
「さうか。さうだつて、細君もさう云つて居たよ。苦沙彌さんに、よく伺はうと思つて上がつたら、生憎迷亭が來て居て茶々を入れて何が何だか分らなくして仕舞つたつて」
「あんな鼻をつけて來るから惡いや」
「いゝえ、君の事を云ふんぢやないよ。あの迷亭君が居つたもんだから、さう立ち入つた事を聞く譯にも行かなかつたので殘念だつたから、もう一遍僕に行つてよく聞いて來てくれないかつて頼まれたものだからね。僕も今迄こんな世話はした事はないが、もし當人同志が嫌でないなら中へ立つて纏めるのも、決して惡い事はないからね——それでやつて來たのさ」
「御苦勞樣」と主人は冷淡に答へたが、腹の内では當人同志と云ふ語を聞いて、どう云ふ譯か分らんが、一寸心を動かしたのである。蒸し暑い夏の夜に一縷の冷風が袖口を潜つた樣な氣分になる。元來この主人はぶつ切ら棒の、頑固光澤消しを旨として製造された男であるが、去ればと云つて冷酷不人情な文明の産物とは自ら其撰を異にして居る。彼が何ぞと云ふと、むかつ腹をたててぷん〳〵するのでも這裏の消息は會得できる。先日鼻と喧嘩をしたのは鼻が氣に食はぬからで、鼻の娘には何の罪もない話である。實業家は嫌ひだから、實業家の片割れなる金田某も嫌ひに相違ないが、是も娘其人とは沒交渉の沙汰と云はねばならぬ。娘には恩も恨もなくて、寒月は自分が實の弟よりも愛して居る門下生である。もし鈴木君の云ふ

如く、當人同志が好いた仲なら、間接にも之を妨害するのは君子の爲すべき所作でない。――苦沙彌先生は是でも自分を君子と思つて居る。――もし當人同志が好いて居るなら――然しそれが問題である。此事件に對して自己の態度を改めるには、先づ其眞相から確めなければならん。

「君、其娘は寒月の所へ來たがつてるのか。金田や鼻はどうでも構はんが、娘自身の意向はどうなんだ」

「そりや、その――何だね――何でも――え、來たがつてるんだらうぢやないか」鈴木君の挨拶は少々曖昧である。實は寒月君の事丈聞いて復命さへすればいゝ積りで、御孃さんの意向迄は確めて來なかつたのである。從つて圓轉滑脱の鈴木君も一寸狼狽の氣味に見える。

「だらうた判然しない言葉だ」と主人は何事によらず、正面から、どやし附けないと氣が濟まない。

「いや、是や一寸僕の云ひ樣がわるかつた。令孃の方でも慥かに意があるんだよ。いえ全くだよ――え？――細君が僕にさう云つたよ。何でも時々は寒月君の惡口を云ふ事もあるさうだがね」

「あの娘がか」

「あゝ」

「怪しからん奴だ、惡口を云ふなんて。第一それぢや寒月に意がないんぢやないか」

「そこがさ、世の中は妙なもので、自分の好いて居る人の惡口抔は殊更云つて見る事もあるからね」

「そんな愚な奴がどこの國に居るものか」と主人は斯樣な人情の機微に立ち入つた事を云はれても頓と感じがない。

「その愚な奴が隨分世の中にやあるから仕方がない。現に金田の細君もさう解釋して居るのさ。戸惑ひ

をした絲瓜の樣だなんて、時々寒月さんの惡口を云ひますから、餘つ程心の中では思つてるに相違ありませんと」

主人は此の不可思議な解釋を聞いて、餘り思ひ掛けないものだから、眼を丸くして、返答もせず、鈴木君の顏を、大道易者の樣に眤と見詰めて居る。鈴木君はこいつ、此樣子ではことに依ると遣り損なふなと感づいたと見えて、主人にも判斷の出來さうな方面へと話頭を移す。

「君、考へても分るぢやないか、あれ丈の財產があつてあれ丈の器量なら、どこへだつて相應の家へ遣れるだらうぢやないか。寒月君だつてえらいかも知れんが、身分から云や――いや身分と云つちや失禮かも知れない。――財產と云ふ點から云や、まあ、だれが見たつて釣り合はんのだからね。それを僕が態々出張する位兩親が氣を揉んでるのは、本人が寒月君に意があるからの事ぢやあないか」と鈴木君は中中うまい理窟をつけて說明を與へる。今度は主人にも納得が出來たらしいので漸く安心したが、こんな所にまご〳〵して居ると又吶喊を喰ふ危險があるから、早く話しの步を進めて、一刻も早く使命を完うする方が萬全の策と心附いた。

「それでね。今云ふ通りの譯であるから、先方で云ふには何も金錢や財產は入らんから其代り當人に附屬した資格が欲しい――資格と云ふと、まあ肩書だね、――博士になつたらば遣つてもいゝなんて威張つてる次第ぢやない――誤解しちやいかん、先達て細君の來た時は迷亭君が居て妙な事ばかり云ふものだから――いえ君が惡いのぢやない。細君も君の事を御世辭のない正直ないゝ方だと賞めて居たよ。全く迷亭君がわるかつたんだらう。――それでさ、本人が博士にでもなつて吳れゝば先方でも世間へ對して肩身が

廣い、面目があると云ふんだがね、どうだらう、近々の内水島君は博士論文でも呈出して、博士の學位を受ける樣な運びには行くまいか。――なあに金田丈なら博士も學士も入らんのさ、唯世間と云ふ者があるとね、さう手輕にも行かんからな」

かう云はれて見ると、先方で博士を請求するのも、あながち無理でもない樣に思はれて來る。無理ではない樣に思はれて來れば、鈴木君の依賴通りにして遣りたくなる。主人を活かすのも殺すのも鈴木君の意の儘である。成程主人は單純で正直な男だ。

「それぢや、今度寒月が來たら、博士論文をかく樣に僕から勸めて見よう。然し當人が金田の娘を貰ふ積りか何うだか、それから先づ問ひ糺して見なくちやいかんからな」

「問ひ糺すなんて、君そんな角張つた事をして物が纏まるものぢやない。矢つ張り普通の談話の際に夫となく氣を引いて見るのが一番近道だよ」

「氣を引いて見る?」

「うん、氣を引くと云ふと語弊があるかも知れん。――なに氣を引かんでもね。話しをして居ると自然分るもんだよ」

「君にや分るかも知れんが、僕にや判然と聞かん事は分らん」

「分らなけりや、まあ好いさ。然し迷亭見た樣に餘計な茶々を入れて打ち壞すのは善くないと思ふ。假令勸めない迄も、こんな事は本人の隨意にすべき筈のものだからね。今度寒月君が來たら可成どうか邪魔をしない樣にして吳れ給へ。――いえ君の事ぢやない、あの迷亭君の事さ。あの男の口にかゝると到底助

かりつこないんだから」と主人の代理に迷亭の惡口をきいて居ると、噂をすれば影の喩に洩れず、迷亭先生例の如く勝手口から飄然と春風に乘じて舞ひ込んで來る。

「いや！珍客だね。僕の樣な狎客になると、苦沙彌は兎角粗略にしたがつていかん。何でも苦沙彌のうちへは十年に一遍位くるに限る。此菓子はいつもより上等ぢやないか」と藤村の羊羹を無雜作に頰張る。鈴木君はもぢ〳〵して居る。主人はにや〳〵して居る。迷亭は口をもが〳〵させて居る。吾輩は此瞬時の光景を椽側から拜見して無言劇と云ふものは優に成立し得ると思つた。禪家で無言の問答をやるのが以心傳心であるなら、此の無言の芝居も明らかに以心傳心の幕である。頗る短かいけれども頗る鋭い幕である。

「君は一生旅烏かと思つてたら、いつの間にか舞ひ戻つたね。長生はしたいもんだな。どんな僥倖に廻り合はんとも限らんからね」と迷亭は鈴木君に對しても主人に對する如く毫も遠慮と云ふ事を知らぬ。如何に自炊の仲間でも十年も逢はなければ何となく氣の置けるものだが、迷亭君に限つてそんな素振も見えぬのは、えらいのだか馬鹿なのか一寸見當がつかぬ。

「可哀さうに、そんなに馬鹿にしたものでもない」と鈴木君は當らず障らずの返事はしたが、何となく落ち付きかねて、例の金鎖を神經的にいぢつて居る。

「君、電氣鐵道へ乘つたか」と主人は突然鈴木君に對して奇問を發する。

「今日は諸君からひやかされに來た樣なものだ。なんぼ田舍者だつて——是でも街鐵を六十株持つてるよ」

「そりや馬鹿に出來ないな。僕は八百八十八株半持つて居るが、惜しい事に大方蟲が喰つて仕舞つて、

今ぢや半株ばかりしかない。もう少し早く君が東京へ出てくれば、蟲の喰はない所を十株ばかりやる所だつたが惜しい事をした」

「相變らず口が惡い。然し冗談は冗談として、あゝ云ふ株に持つてゝ損はないよ、年々高くなる計りだから」

「さうだ假令半株だつて千年も持つてるうちにや倉が三つ位建つからな。君も僕も其邊にぬかりはない當世の才子だが、そこへ行くと苦沙彌抔は憐れなものだ。株と云へば大根の兄弟分位に考へて居るんだから」と又羊羹をつまんで主人の方を見ると、主人も迷亭の食ひ氣が傳染して自ら菓子皿の方へ手が出る。世の中では萬事積極的のものが人から眞似らるゝ權利を有して居る。

「株抔はどうでも構はんが、僕は曾呂崎に一度でいゝから電車へ乘らしてやりたかつた」と主人は喰ひ掛けた羊羹の齒痕を憮然として眺める。

「曾呂崎が電車へ乘つたら、乘るたんびに品川迄行つて仕舞ふわ、それより矢つ張り天然居士で澤庵石へ彫り附けられてる方が無事でいゝ」

「曾呂崎と云へば死んださうだな。氣の毒だねえ、いゝ頭の男だつたが惜しい事をした」と鈴木君が云ふと、迷亭は直ちに引き受けて、

「頭は善かつたが、飯を焚く事は一番下手だつたぜ。曾呂崎の當番の時には僕あいつでも外出をして蕎麥で凌いで居た」

「ほんにと曾呂崎の焚いた飯は焦げくさくつて心があつて僕も弱つた。御負けに御菜に必ず豆腐をなま

で食はせるんだから、冷たくて食はれやせん」と鈴木君も十年前の不平を記憶の底から喚び起こす。

「苦沙彌はあの時代から曾呂崎の親友で毎晩一所に汁粉を食ひに出たが、其祟りで今ぢや慢性胃弱になつて苦しんで居るんだ。實を云ふと苦沙彌の方が汁粉の數を餘計食つてるから曾呂崎より先へ死んで宜い譯なんだ」

「そんな論理がどこの國にあるものか。俺の汁粉より君は運動と號して、毎晩竹刀を持つて裏の卵塔婆へ出て石塔を叩いてる所を坊主に見附かつて劍突を食つたぢやないか」と主人も負けぬ氣になつて迷亭の舊惡を曝く。

「アハヽヽ、さう〳〵坊主が佛樣の頭を叩いては安眠の妨害になるからよして呉れつて言つたつけ。然し僕のは竹刀だが、此鈴木將軍のは手暴だぜ。石塔と相撲をとつて大小三個許り轉がして仕舞つたんだから」

「あの時の坊主の怒り方は實に烈しかつた。是非元の樣に起こせと云ふから人足を傭ふ迄待つて呉れと云つたら、人足ぢやいかん、懺悔の意を表する爲にあなたが自身で起こさなくては佛の意に背くと云ふんだからね」

「其時の君の風采はなかつたぜ、金巾のシャツに越中褌で雨上りの水溜りの中でうん〳〵唸つて……」

「それを君が澄ました顏で寫生するんだから苛い。僕はあまり腹を立てた事のない男だが、あの時計りは失敬だと心から思つたよ。あの時の君の言草をまだ覺えて居るが君は知つてるか」

「十年前の言草なんか誰が覺えて居るものか、然しあの石塔に歸泉院殿黃鶴大居士安永五年辰正月と彫

つてあつたの丈は未だに記憶して居る。あの石塔は古雅に出來て居たよ。引き越す時に盜んで行きたかつた位だ。實に美學上の原理に叶つて、ゴシック趣味な石塔だつた」と迷亭は又好い加減な美學を振り廻す。

「そりやいゝが、君の言草がさ。かうだぜ――吾輩は美學を專攻する積りだから天地間の面白い事は可成寫生して置いて將來の參考に供さなければならん、氣の毒だの、可哀相だのと云ふ私情は學問に忠實なる吾輩如きものの口にすべき所でないと平氣で云ふのだらう。僕もあんまりな不人情な男だと思つたから泥だらけの手で君の寫生帖を引き裂いて仕舞つた」

「僕の有望な畫才が頓挫して一向振はなくなつたのも全くあの時からだ。君に機鋒を折られたのだね。僕は君に恨がある」

「馬鹿にしちやいけない。こつちが恨めしい位だ」

「迷亭はあの時分から法螺吹だつたな」と主人は羊羹を食ひ了つて再び二人の話しの中に割り込んで來る。「約束なんか履行した事がない。夫で詰問を受けると決して詫びた事がない、何とか蚊とか云ふ。あの寺の境內に百日紅が咲いて居た時分、此百日紅が散る迄に美學原論と云ふ著述をすると云ふから、駄目だ、到底出來る氣遣ひはないと云つたのさ。すると迷亭の答へに僕はかう見えても見掛けに寄らぬ意志の強い男である。そんなに疑ふなら賭をしようと云ふから、僕は眞面目に受けて、何でも神田の西洋料理を奢りつこかなにかに極めた。屹度書物なんか書く氣遣ひはないと思つたから賭をした樣なものゝ內心は少少恐ろしかつた。僕に西洋料理なんか奢る金はないんだからな。所が先生一向稿を起こす氣色がない。七日立つても二十日立つても一枚も書かない。愈百日紅が散つて一輪の花もなくなつても當人平氣で居る

から、愈西洋料理に有り附いたなと思つて契約履行を逼ると迷亭澄まして取り合はない。
「又何とか理窟をつけたのかね」と鈴木君が相の手を入れる。
「うん、實にずう〳〵しい男だ。吾輩は外に能はないが意志丈は決して君方に負けはせんと強情を張る
のさ」
「一枚も書かんのにか」と今度は迷亭君自身が質問をする。
「無論さ、其時君はかう云つたぜ。吾輩は意志の一點に於ては敢て何人にも一歩も讓らん。然し殘念な
事には記憶が人一倍無い。美學原論を著はさうとする意志は充分あつたのだが、其意志を君に發表した翌
日から忘れて仕舞つた。夫だから百日紅の散る迄に著書が出來なかつたのは記憶の罪で意志の罪ではない。
意志の罪でない以上は西洋料理抔を奢る理由がないと威張つて居るのさ」
「成程迷亭君一流の特色を發揮して面白い」と鈴木君は何故だか面白がつて居る。迷亭の居らぬ時の語
氣とは餘程違つて居る。是が利口な人の特色かも知れない。
「何が面白いものか」と主人は今でも怒つて居る樣子である。
「夫は御氣の毒樣、夫だから其埋合せをする爲に孔雀の舌なんかを鉦と太鼓で探して居るぢやないか。
まあさう怒らずに待つて居るさ。然し著書と云へば君、今日は一大珍報を齎して來たんだよ」
「君はくるたびに珍報を齎す男だから油斷が出來ん」
「所が今日の珍報は眞の珍報さ。正札附一厘も引けなしの珍報さ。君、寒月が博士論文の稿を起こした
のを知つて居るか。寒月はあんな妙に見識張つた男だから博士論文なんて無趣味な勞力はやるまいと思つ

たら、あれで矢つ張り色氣があるから可笑しいぢやないか。君、あの鼻に是非通知してやるがいゝ、此頃は團栗博士の夢でも見て居るかも知れない」

鈴木君は寒月の名を聞いて、話しては行けぬ〳〵と顋と眼で主人に合圖する。主人には一向意味が通じない。さつき鈴木君に逢つて說法を受けた時は金田の娘の事計りが氣の毒になつたが、今迷亭から鼻々と云はれると又先日喧嘩をした事を思ひ出す。思ひ出すと滑稽でもあり、又少々は憎らしくもなる。然し寒月が博士論文を草しかけたのは何よりの御みやげで、是計りは迷亭先生自讃の如く先づ〳〵近來の珍報である。啻に珍報のみならず、嬉しい快い珍報である。金田の娘を貰はうが貰ふまいがそんな事は先づどうでもよい。兎に角寒月の博士になるのは結構である。自分の樣に出來損ひの木像は佛師屋の隅で蟲が喰ふ迄白木の儘燻つて居ても遺憾はないが、是は旨く仕上がつたと思ふ彫刻には一日も早く箔を塗つてやりたい。

「本當に論文を書きかけたのか」と鈴木君の合圖はそつち除けにして、熱心に聞く。

「よく人の云ふ事を疑ぐる男だ。――尤も問題は團栗だか首縊りの力學だか確と分らんがね。兎に角寒月の事だから鼻の恐縮する樣なものに違ひない」

さつきから迷亭が鼻々と無遠慮に云ふのを聞くたんびに鈴木君は不安の樣子をする。迷亭は少しも氣が附かないから平氣なものである。

「其後鼻に就いて又硏究をしたが、此頃トリストラム・シャンデーの中に鼻論があるのを發見した。金田の鼻抔もスターンに見せたら善い材料になつたらうに殘念な事だ。鼻名を千載に垂れる資格は充分あり

ながら、あのまゝで朽ち果つるとは不憫千萬だ。今度こゝへ來たら美學上の參考の爲に寫生してやらう」
と相變らず口から出任せに喋舌り立てる。
「然しあの娘は寒月の所へ來たいのださうだ」と主人が今鈴木君から聞いた通りを述べると、鈴木君は是は迷惑だと云ふ顏附をして頻りに主人に目くばせをするが、主人は不導體の如く一向電氣に感染しない。
「一寸乙だな、あんな者の子でも戀をする所が。然し大した戀ぢやなからう。大方鼻戀位な所だぜ」
「鼻戀でも寒月が貰へばいゝが」
「貰へばいゝがつて、君は先日大反對だつたぢやないか。今日はいやに軟化して居るぜ」
「軟化はせん、僕は決して軟化はせん、然し……」
「然しどうかしたんだらう。ねえ鈴木、君も實業家の末席を汚す一人だから參考の爲に言つて聞かせるがね。あの金田某なる者さ。あの某なるものの息女抔を天下の秀才水島寒月の令夫人と崇め奉るのは、少少提灯と釣鐘と云ふ次第で、我々朋友たる者が冷々默過する譯に行かん事だと思ふんだが、たとひ實業家の君でも是には異存はあるまい」
「相變らず元氣がいゝね。結構だ。君は十年前と容子が少しも變つて居ないからえらい」と鈴木君は柳に受けて、胡魔化さうとする。
「えらいと褒めるなら、もう少し博學な所を御目にかけるがね。昔の希臘人は非常に體育を重んじたもので、あらゆる競技に貴重なる懸賞を出して百方奬勵の策を講じたものだ。然るに不思議な事には學者の知識に對してのみは何等の褒美も與へたと云ふ記録がなかつたので、今日迄實は大いに怪しんで居た所さ」

「成程少し妙だね」と鈴木君はどこ迄も調子を合はせる。

「然るについ兩三日前に至つて、美學研究の際不圖其理由を發見したので多年の疑團は一度に氷解。漆桶を拔くが如く痛快なる悟りを得て歡天喜地の至境に達したのさ」

あまり迷亭の言葉が仰山なので、さすが御上手者の鈴木君も、こりや手に合はないと云ふ顏附をする。主人は又始まつたなと云はぬ許りに、象牙の箸で菓子皿の緣をかん〳〵叩いて俯向いて居る。迷亭丈は大得意で辯じつゞける。

「そこで此の矛盾なる現象の說明を明記して、暗黑の淵から吾人の疑ひを千載の下に救ひ出してくれた者は誰だと思ふ。學問あつて以來の學者と稱せらるゝ彼の希臘の哲人、逍遙派の元祖アリストートル其人である。彼の說明に曰くさ――おい、菓子皿抔を叩かんで謹聽して居なくちやいかん。――彼等希臘人が競技に於て得る所の賞與は彼等が演ずる技藝其物より貴重なものである。それ故に褒美にもなり、奬勵の具ともなる。然し知識其物に至つてはどうである。もし知識に對する報酬として何物をか與へんとするならば知識以上の價値あるものを與へざるべからず。然し知識以上の珍寶が世の中にあらうか。無論ある筈がない。下手なものを遣れば知識の威嚴を損する譯になる計りだ。彼等は知識に對して千兩箱をオリムパスの山程積み、クリーサスの富を傾け盡しても相當の報酬を與へんとしたのであるが、如何に考へても到底釣り合ふ筈がないと云ふ事を觀破して、それより以來と云ふものは綺麗さつぱり何も遣らない事にして仕舞つた。黃白青錢が知識の匹敵でない事は是で十分理解出來るだらう。偖て此原理を服膺した上で時事問題に臨んで見るがいゝ。金田某は何だい、紙幣に眼鼻をつけた丈の人間ぢやないか。奇警なる語を以て

形容するならば彼は一個の活動紙幣に過ぎんのである。活動紙幣の娘なら活動切手位な所だらう。翻つて寒月君は如何と見ればどうだ。辱くも學問最高の府を第一位に卒業して毫も倦怠の念なく、長州征伐時代の羽織の紐をぶら下げて、日夜團栗のスタビリチーを研究し、夫でも猶滿足する樣子もなく、近々の中ロード・ケルギンを壓倒する程な大論文を發表しようとしつゝあるではないか。會吾妻橋を通り掛かつて身投げの藝を仕損じた事はあるが、これも熱誠なる青年に有り勝ちの發作的所爲で毫も彼が知識の問屋たるに煩ひを及ぼす程の出來事ではない。迷亭一流の喩を以て寒月君を評すれば、彼は活動圖書館である。知識を以て捏ね上げたる二十八珊の彈丸である。此彈丸が一たび時機を得て學界に爆發するなら、――もし爆發して見給へ――爆發するだらう――」迷亭はこゝに至つて迷亭一流と自稱する形容詞が思ふ樣に出て來ないので俗に云ふ龍頭蛇尾の感に多少ひるんで見えたが、忽ち「活動切手抔は何千萬枚あつたつて粉徽塵になつて仕舞ふさ。それだから寒月には、あんな釣り合はない女性は駄目だ。僕が不承知だ、百獸の中で尤も聰明なる大象と、尤も貪婪なる小豚と結婚する樣なものだ。さうだらう苦沙彌君」と云つて退けると、主人は又默つて菓子皿を叩き出す。鈴木君は少し凹んだ氣味で、

「そんな事も無からう」と術なげに答へる。さつき迄迷亭の惡口を隨分ついた揚句こゝで無暗な事を云ふと、主人の樣な無法者はどんな事を素つ破拔くか知れない。可成こゝは好い加減に迷亭の鋭鋒をあしらつて無事に切り拔けるのが上分別なのである。鈴木君は利口者である。入らざる抵抗は避けらるゝ丈避けるのが當世で、無用の口論は封建時代の遺物と心得て居る。人生の目的は口舌ではない實行にある。自己の思ひ通りに着々事件が進捗すれば、それで人生の目的は達せられたのである。苦勞と心配と爭論とがな

くて事件が進捗すれば人生の目的は極樂流に達せられるのである。鈴木君は卒業後此極樂主義によつて成功し、此極樂主義によつて金時計をぶら下け、此極樂主義で金田夫婦の依頼をうけ、同じく此極樂主義でまんまと首尾よく苦沙彌君を說き落として當該事件が十中八九迄成就した所へ、迷亭なる常規を以て律すべからざる、普通の人間以外の心理作用を有するかと怪しまるゝ風來坊が飛び込んで來たので、少々其突然なるに面喰らつて居る所である。極樂主義を發明したものは明治の紳士で、極樂主義を實行するものは鈴木藤十郎君で、今此極樂主義で困却しつゝあるものも亦鈴木藤十郎君である。

「君は何も知らんからさうでもなからう抔と澄まし返つて、例になく言葉寡なに上品に控へ込むが、先達てあの鼻の主が來た時の容子を見たら如何に實業家贔屓の尊公でも辟易するに極まつてるよ、ねえ苦沙彌君。君、大いに奮鬪したぢやないか」

「それでも君より僕の方が評判がいゝさうだ」

「アハヽヽ中々自信が強い男だ。夫でなくてはサヹジ・チーなんて生徒や教師にからかはれて澄まして學校へ出ちや居られん譯だ。僕も意志は決して人に劣らん積りだが、そんなに圖太くは出來ん。敬服の至りだ」

「生徒や教師が少々愚圖々々言つたつて何が恐ろしいものか、サント・ブーヴは古今獨歩の評論家であるが巴里大學で講義をした時は非常に不評判で、彼は學生の攻擊に應ずる爲め外出の際必ず匕首を袖の下に持つて防禦の具となした事がある。ブルヌチェルが矢張り巴里の大學でゾラの小說を攻擊した時は……」

「だつて君や大學の教師でも何でもないぢやないか。高がリードルの先生でそんな大家を例に引くのは

雜魚が鯨を以て自ら喩へる樣なもんだ、そんな事を云ふと猶からかはれるぜ」
「默つて居ろ。サント・ブーヴだつて俺だつて同じ位な學者だ」
「大變な見識だな。然し懷劍を持つて步行く丈はあぶないから眞似ない方がいゝよ。大學の教師が懷劍ならリードルの教師はまあ小刀位な所だな。然し夫にしても刃物は劍呑だから仲見世へ行つておもちやの空氣銃を買つて來て背負つてあるくがよからう。愛嬌があつていゝ。ねえ鈴木君」と云ふと鈴木君は漸く話しが金田事件を離れたので、ほつと一息つきながら、
「相變らず無邪氣で愉快だ。十年振りで始めて君等に逢つたんで、何だか窮屈な路次から廣い野原へ出た樣な氣持ちがする。どうも我々仲間の談話は少しも油斷がならなくてね。何を云ふにも氣を置かなくちやならんから心配で窮屈で實に苦しいよ。話しは罪がないのがいゝね。そして昔の書生時代の友達と話すのが一番遠慮がなくつていゝ。あゝ今日は圖らず迷亭君に遇つて愉快だつた。僕はちと用事があるから是で失敬する」と鈴木君が立ち懸けると、迷亭も「僕もいかう、僕は是から日本橋の演藝矯風會に行かなくつちやならんから、そこ迄一所に行かう」「そりや丁度いゝ、久し振りで一所に散步しよう」と兩君は手を携へて歸る。

五

二十四時間の出來事を洩れなく書いて、洩れなく讀むには少くとも二十四時間かゝるだらう。いくら寫生文を鼓吹する吾輩でも是は到底猫の企て及ぶべからざる藝當と自白せざるを得ない。從つて如何に吾輩の主人が、二六時中精細なる描寫に價する奇言奇行を弄するにも關はらず、逐一之を讀者に報知するの能力と根氣のないのは甚だ遺憾である。遺憾ではあるが已むを得ない。休養は猫と雖も必要である。鈴木君と迷亭君の歸つたあとは木枯しのはたと吹き息んで、しん〳〵と降る雪の夜の如く靜かになつた。主人は例の如く書齋へ引き籠る。子供は六疊の間へ枕をならべて寢る。一間半の襖を隔てて南向の室には細君が數へ年三つになる、めん子さんと添乳して横になる。花曇りに暮を急いだ日は疾く落ちて、表を通る駒下駄の音さへ手に取る樣に茶の間へ響く。隣町の下宿で明笛を吹くのが絶えたり續いたりして眠い耳底に折折鈍い刺激を與へる。外面は大方朧であらう。晩餐に半ぺんの煮汁で鮑貝をからにした腹では、どうしても休養が必要である。

ほのかに承はれば世間には猫の戀とか稱する俳諧趣味の現象があつて、春さきは町内の同族共の夢安からぬ迄浮かれ歩く夜もあるとか云ふが、吾輩はまだかゝる心的變化に遭逢した事はない。抑も戀は宇宙的の活力である。上は在天の神ジュピターより下は土中に鳴く蚯蚓、おけらに至る迄此道にかけて浮身を窶すのが萬物の習ひであるから、吾輩猫どもが朧うれしと、物騷な風流氣を出すのも無理のない話である。

回顧すればかく云ふ吾輩も三毛子に思ひ焦がれた事もある。三角主義の張本金田君の令嬢阿倍川の富子さへ寒月君に戀慕したと云ふ噂である。それだから千金の春宵を心も空に滿天下の雌猫雄猫が狂ひ廻るのを煩惱の迷のと輕蔑する念は毛頭ないのであるが、如何せん誘はれてもそんな心が出ないから仕方がない。吾輩目下の狀態は只休養を欲するのみである。かう眠くては戀も出來ぬ。のそ〳〵と子供の布團の裾へ廻つて心地快く眠る。……

不圖眼を開いて見ると主人はいつの間にか書齋から寢室へ來て細君の隣に延べてある布團の中にいつの間にか潛り込んで居る。主人の癖として寢る時は必ず横文字の小本を書齋から携へて來る。然し横になつて此本を二頁と續けて讀んだ事はない。ある時は持つて來て枕元へ置いたなり、丸で手を觸れぬ事さへある。一行も讀まぬ位なら、態々提げてくる必要もなささうなものだが、そこが主人の主人たる所で、いくら細君が笑つても、止せと云つても、決して承知しない。毎夜讀まない本を御苦勞千萬にも寢室迄運んでくる。ある時は慾張つて三、四冊も抱へて來る。先達て中は毎晩ウェブスターの大字典さへ抱へて來た位である。思ふに是は主人の病氣で、贅澤な人が龍文堂に鳴る松風の音を聞かないと寢つかれない如く、主人も書物を枕元に置かないと眠れないのであらう。して見ると主人に取つては書物は讀む物ではない、眠りを誘ふ器械である。活版の睡眠劑である。

今夜も何か有るだらうと覗いて見ると、赤い薄い本が主人の口髯の先につかへる位な地位に半分開かれて轉がつて居る。主人の左の手の拇指が本の間に挾まつた儘である處から推すと、奇特にも今夜は五六行讀んだものらしい。赤い本と竝んで例の如くニッケルの袂時計が春に似合はぬ寒き色を放つて居る。

細君は乳呑兒を一尺許り先へ放り出して口を開いていびきをかいて枕を外して居る。凡そ人間に於て何が見苦しいと云つて口を開けて寢る程の不體裁はあるまいと思ふ。猫抔には生涯こんな恥をかいた事がない。元來口は音を出す爲、鼻は空氣を吐吞する爲の道具である。尤も北の方へ行くと人間が無精になつて可成口をあくまいと儉約をする結果鼻で言語を使ふ樣なズー〳〵もあるが、鼻を閉塞して口許りで呼吸の用を辨じて居るのはズー〳〵よりも見ともないと思ふ。第一天井から鼠の糞でも落ちた時危險である。

子供の方はと見ると是も親に劣らぬ體たらくで寢そべつて居る。姉のとん子は、姉の權利はこんなものだと云はぬ許りにうんと右の手を延ばして妹の耳の上へのせて居る。妹のすん子は其復讎に姉の腹の上に片足をあげて踏ん反り返つて居る。雙方共寢た時の姿勢より九十度は慥かに廻轉して居る。しかも此の不自然なる姿勢を維持しつゝ兩人とも不平も云はず大人しく熟睡して居る。

さすがに春の燈火は格別である。天眞爛漫ながら無風流極まる此光景の裏に良夜を惜しめと許り床しげに輝いて見える。もう何時だらうと室の中を見廻すと四隣はしんとして只聞こえるものは柱時計と細君のいびきと遠方で下女の齒軋りをする音のみである。此下女は人から齒軋りをすると云はれるといつでも之を否定する女である。私は生れてから今日に至る迄齒軋りをした覺えは御座いませんと強情を張つて、決して直しませうとも御氣の毒で御座いますとも云はず、只そんな覺えは御座いませんと主張する。成程寢て居てする藝だから覺えはないに違ひない。然し事實は覺えがなくても存在する事があるから困る。世の中には惡い事をして居りながら、自分はどこ迄も善人だと考へて居るものがある。是は自分が罪がないと自信して居るのだから無邪氣で結構ではあるが、人の困る事實は如何に無邪氣でも滅却する譯には行かぬ。

かう云ふ紳士淑女は此下女の系統に屬するのだと思ふ。――夜は大分更けた樣だ。

臺所の雨戸にトン／＼と二返許り輕く中たつた者がある。はてな、今頃人の來る筈がない。大方例の鼠だらう、鼠なら捕らん事に極めて居るから勝手にあばれるが宜しい。――又トン／＼と中たる。どうも鼠らしくない。鼠としても大變用心深い鼠である。主人のうちの鼠は、主人の出る學校の生徒の如く、日中でも夜中でも亂暴狼藉の練習に餘念なく、憫然なる主人の夢を驚破するのを天職の如く心得て居る連中だから、斯くの如く遠慮する譯がない。今のは慥かに鼠ではない。先達て抔は主人の寢室に迄闖入して高からぬ主人の鼻の頭を囓んで凱歌を奏して引き上げた位の鼠にしては餘り臆病すぎる。決して鼠ではない。今度はギーと雨戸を下から上へ持ち上げる音がする、同時に腰障子を出來る丈緩やかに、溝に添うて滑らせる。愈鼠ではない。人間だ。此深夜に人間が案内も乞はず戸締りを外して御光來になるとすれば迷亭先生や鈴木君ではないに極まつて居る。御高名丈はかねて承はつて居る泥棒陰士ではないか知らん。愈陰士とすれば早く尊顏を拜したいものだ。陰士は今や勝手の上に大いなる泥足を上げて二足許り進んだ模樣である。三足目と思ふ頃揚板に蹶いてか、ガタリと夜に響く樣な音を立てた。吾輩の背中の毛が靴刷毛で逆に擦られた樣な心持ちがする。しばらくは足音もしない。細君を見ると未だ口をあいて太平の空氣を夢中に吐呑して居る。主人は赤い本に拇指を挾まれた夢でも見て居るのだらう。やがて臺所でマチを擦る音が聞こえる。陰士でも吾輩程夜陰に眼は利かぬと見える。勝手がわるくて定めし不都合だらう。

此時吾輩は蹲踞りながら考へた。陰士は勝手から茶の間の方面へ向けて出現するのであらうか、又は左へ折れ玄關を通過して書齋へと拔けるであらうか。――足音は襖の音と共に椽側へ出た。陰士は愈書齋

へ這入つた。それぎり音も沙汰もない。

吾輩は此間に早く主人夫婦を起こして遣りたいものだと漸く氣が附いたが、偖てどうしたら起きるやら、一向要領を得ん考へのみが頭の中に火の車の勢で廻轉するのみで、何等の分別も出ない。布團の裾を啣へて振つて見たらと思つて、二三度遣つて見たが少しも效用がない。冷たい鼻を頰に擦り附けたらと思つて、主人の顏の先へ持つて行つたら、主人は眠つた儘、手をうんと延ばして、吾輩の鼻づらを否と云ふ程突き飛ばした。鼻は猫にとつても急所である。痛む事夥しい。此度は仕方がないからニャー〳〵と二返許り鳴いて起こさうとしたが、どう云ふものか此時許りは咽喉に物が痞へて思ふ樣な聲が出ない。やつとの思ひで澁りながら低い奴を少々出すと驚いた。肝心の主人は覺める氣色もないのに突然隱士の足音がし出した。ミチリ〳〵と緣側を傳つて近づいて來る。愈來たな、かうなつてはもう駄目だと諦めて、襖と柳行李の間にしばしの間身を忍ばせて動靜を窺ふ。

隱士の足音は寢室の障子の前へ來てぴたりと已む。吾輩は息を凝らして、此次は何をするだらうと一生懸命になる。あとで考へたが鼠を捕る時はこんな氣分になれば譯はないのだ。魂が兩方の眼から飛び出しさうな勢である。隱士の御蔭で二度とない悟を開いたのは實に難有い。忽ち障子の棧の三つ目が雨に濡れた樣に眞中丈色が變る。それを透かして薄紅なものが漸々濃く寫つたと思ふと、紙はいつか破れて、赤い舌がぺろりと見えた。舌はしばしの間に暗い中に消える。入れ代つて何だか恐ろしく光るものが一つ、破れた孔の向う側にあらはれる。疑ひもなく隱士の眼である。妙な事には其眼が、部屋の中にある何物をも見ないで、只柳行李の後に隱れて居た吾輩のみを見詰めて居る樣に感ぜられた。一分にも足らぬ間では

あつたが、かう睨まれては壽命が縮まると思つた位である。もう我慢出來んから行李の陰から飛び出さうと決心した時、寢室の障子がスーと明いて待ち兼ねた隱士がつひに眼前にあらはれた。

吾輩は敍述の順序として、不時の珍客なる泥棒隱士其人をこの際諸君に御紹介するの榮譽を有する譯であるが、其前一寸卑見を開陳して御高慮を煩はしたい事がある。古代の神は全智全能と崇められて居る。ことに耶蘇教の神は二十世紀の今日迄も此の全智全能の面を被つて居る。然し俗人の考ふる全智全能は、時によると無智無能とも解釋が出來る。かう云ふのは明らかにパラドックスである。然るに此パラドックスを道破した者は天地開闢以來吾輩のみであらうと考へると、自分ながら滿更な猫でもないと云ふ虛榮心も出るから、是非共こゝに其理由を申し上げて、猫も馬鹿に出來ないと云ふ事を、高慢なる人間諸君の腦裏に叩き込みたいと考へる。天地萬有は神が造つたさうな。して見れば人間も神の御製作であらう。現に聖書とか云ふものには其通りと明記してあるさうだ。偖て此人間に就いて、人間自身が數千年來の觀察を積んで、大いに玄妙不思議がると同時に、益神の全智全能を承認する樣に傾いた事實がある。それは外でもない、人間も斯樣にうぢや／＼居るが同じ顏をして居る者は世界中に一人も居ない。顏の道具は無論極まつて居る。大きさも大概は似たり寄つたりである。換言すれば彼等は同じ材料から作り上げられて居る。同じ材料で出來て居るにも關はらず一人も同じ結果に出來上がつて居らん。よくまあれ丈の簡單な材料でかく迄異樣な顏を思ひ附いたものだと思ふと、製造家の技倆に感服せざるを得ない。餘程獨創的な想像力がないとこんな變化は出來んのである。一代の畫工が精力を消耗して變化を求めた顏でも十二三種以外に出る事が出來んのを以て推せば、人間の製造を一手で受け負つた神の手際は格別な者だと驚嘆せざ

るを得ない。到底人間社會に於て目撃し得ざる底の技倆であるから、是を全能的技倆と云つても差し支へないだらう。人間は此點に於て大いに神に恐れ入つて居る樣である。成程人間の觀察點から云へば尤もな恐れ入り方である。然し猫の立場から云ふと同一の事實が却て神の無能力を證明して居るとも解釋が出來る。もし全然無能でなく共人間以上の能力は決してない者であると斷定が出來るだらうと思ふ。神が人間の數だけ夫丈多くの顔を製造したと云ふが、當初から胸中に成算があつて斯種の變化を示したものか、又は猫も杓子も同じ顔に造らうと思つてやりかけて見たが、到底旨く行かなくて出來るのも出來るのも造り損ねて此の亂雜な狀態に陷つたものか分らんではないか。彼等顔面の構造は神の成功の記念と見らるゝと同時に失敗の痕迹とも判ぜらるゝではないか。全能とも云へようが、無能と評したつて差し支へはない。彼等人間の眼は平面の上に二つ並んで居るので左右を一時に見る事が出來んから事物の半面丈しか視線内に這入らんのは氣の毒な次第である。立場を換へて見れば此位單純な事實は彼等の社會に日夜間斷なく起りつゝあるのだが、本人逆せ上がつて、神に吞まれて居るから悟り樣がない。製作の上に變化をあらはすのが困難であるならば、其上に徹頭徹尾の摸倣を示すのも同樣に困難である。ラファエルに寸分違はぬ聖母の像を二枚かけと注文するのは、全然似寄らぬマドンナを雙幅見せろと逼ると同じく、ラファエルに取つては迷惑であらう、否同じ物を二枚かく方が却て困難かも知れぬ。弘法大師に向つて昨日書いた通りの筆法で空海と願ひますと云ふ方が、丸で書體を換へてと注文されるよりも苦しいかも分らん。人間の用ふる國語は全然摸倣主義で傳習するものである。彼等人間が母から、乳母から、他人から實用上の言語を習ふ時には、只聞いた通りを繰り返すより外に毛頭の野心はないのである。出來る丈の能力で人眞似をする

のである。斯様に人眞似から成立する國語が十年二十年と立つうち、發音に自然と變化を生じてくるのは、彼等に完全なる摸倣の能力がないと云ふ事を證明して居る。純粹の摸倣は斯くの如く至難なものである。從つて神が彼等人間を區別の出來ぬ樣、悉皆燒印の御かめの如く作り得たならば益神の全能を表明し得るもので、同時に今日の如く勝手次第な顏を天日に曝さして、目まぐるしき迄に變化を生ぜしめたのは却つて其無能力を推知し得る具ともなり得るのである。

吾輩は何の必要があつてこんな議論をしたか忘れて仕舞つた。本を忘却するのは人間にさへ有り勝ちの事であるから猫には當然の事さと大目に見て貰ひたい。兎に角吾輩は寢室の障子をあけて敷居の上にぬつと現はれた泥棒陰士を瞥見した時、以上の感想が自然と胸中に湧き出でたのである。何故湧いた？——何故と云ふ質問が出れば、今一應考へ直して見なければならん。——えゝと其譯はかうである。

吾輩の眼前に悠然とあらはれた陰士の顏を見ると其顏が——平常神の製作に就いて其出來榮を或は無能の結果ではあるまいかと疑つて居たのに、それを一時に打ち消すに足る程な特徴を有して居たからである。特徴とは外ではない。彼の眉目がわが親愛なる好男子水島寒月君に瓜二つであると云ふ事實である。吾輩は無論泥棒に多くの知己は持たぬが、其行爲の亂暴な所から平常想像して私かに胸中に描いて居た顏はないでもない。小鼻の左右に展開した、一錢銅貨位の眼をつけた毬栗頭にきまつて居ると自分で勝手に極めたのであるが、見ると考へるとは天地の相違、想像は決して逞しくするものではない。此陰士は脊のすらりとした、色の淺黑い、一の字眉の、意氣で立派な泥棒である。年は二十六七歲でもあらう、夫すら寒月君の寫生である。神もこんな似た顏を二個製造し得る手際があるとすれば、決して無能を以て目する譯に

は行かぬ。いや實際の事を云ふと寒月君自身が氣が變になつて深夜に飛び出して來たのではあるまいかと、はつと思つた位よく似て居る。只鼻の下に薄黑く髭の芽生が植ゑ附けてないので、偖ては別人だと氣が附いた。寒月君は苦味ばしつた好男子で、活動小切手と迷亭から稱せられたる金田富子孃を優に吸收するに足る程な念入れの製作物である。然し此隱士も人相から觀察すると其の婦人に對する引力上の作用に於て決して寒月君に一歩も讓らない。若し金田の令孃が寒月君の眼附や口先に迷つたのなら、同等の熱度を以て此泥棒君にも惚れ込まなくては義理が惡い。義理は兎に角、論理に合はない。あゝ云ふ才氣のある、何でも早分りのする性質だから此位の事は人から聞かんでも乾度分るであらう。して見ると寒月君の代りに此泥棒を差し出しても必ず滿身の愛を捧げて琴瑟調和の實を擧げらるゝに相違ない。萬一寒月君が迷亭抔の說法に動かされて、此の千古の良緣が破れるとしても、此隱士が健在であるうちは大丈夫である。吾輩は未來の事件の發展をこゝ迄豫想して、富子孃の爲に、やつと安心した。此泥棒君が天地の間に存在するのは富子孃の生活を幸福ならしむる一大要件である。

隱士は小脇になにか抱へて居る。見ると先刻主人が書齋へ放り込んだ古毛布である。唐棧の半纏に、御納戸の博多の帶を尻の上にむすんで、生白い脛は膝から下むき出しの儘今や片足を擧げて疊の上へ入れる。先刻から赤い本に指を嚙まれた夢を見て居た主人は、此時寐返りを堂と打ちながら「寒月だ」と大きな聲を出す。隱士は毛布を落として、出した足を急に引き込ます。障子の陰に細長い向脛が二本立つた儘微かに動くのが見える。主人はうーん、むにや／＼と云ひながら例の赤本を突き飛ばして、黑い腕を皮癬病みの樣にぼり／＼搔く。其後は靜まり返つて、枕をはづしたなり寐て仕舞ふ。寒月だと云つたのは全く我知

らずの寐言と見える。隱士はしばらく緣側に立つた儘室内の動靜をうかゞつて居たが、主人夫婦の熟睡して居るのを見澄まして亦片足を疊の上に入れる。今度は寒月だと云ふ聲も聞こえぬ。やがて殘る片足も踏み込む。一穗の春燈で豐かに照らされて居た六疊の間は、隱士の影に鋭く二分せられて柳行李の邊から吾輩の頭の上を越えて壁の半ばが眞黑になる。振り向いて見ると隱士の顏の影が丁度壁の高さの三分の二の所に漠然と動いて居る。好男子も影丈見ると、八つ頭の化け物の如くまことに妙な恰好である。隱士は細君の寐顏を上から覗き込んで見たが何の爲かにや〳〵と笑つた。笑ひ方迄が寒月君の摸寫であるには吾輩も驚いた。

細君の枕元には四寸角の一尺五六寸許りの釘附けにした箱が大事さうに置いてある。是は肥前の國は唐津の住人多々良三平君が先日歸省した時御土產に持つて來た山の芋である。山の芋を枕元へ飾つて寐るのは餘り例のない話ではあるが、此細君は煮物に使ふ三盆を用簞笥へ入れる位場所の適不適と云ふ觀念に乏しい女であるから、細君に取れば、山の芋は愚か、澤庵が寢室に在つても平氣かも知れん。然し神ならぬ隱士はそんな女と知らう筈がない。かく迄鄭重に肌身に近く置いてある以上は大切な品物であらうと鑑定するのも無理はない。隱士は一寸山の芋の箱を上げて見たが其重さが隱士の豫期と合して大分目方が懸かりさうなので頗る滿足の體である。愈山の芋を盜むなと思つたら、而も此好男子にして山の芋を盜むなと思つたら急に可笑しくなつた。然し滅多に聲を立てると危險であるから凝と怺へて居る。

やがて隱士は山の芋の箱を恭しく古毛布にくるみ始めた。なにかからげるものはないかとあたりを見廻す。と、幸ひ主人が寐る時に解きすてた縮緬の兵古帶がある。隱士は山の芋の箱を此帶でしつかり括つて、

苦もなく背中へしよふ。あまり女が好く體裁ではない。それから子供のちやん〱を二枚、主人のめり安の股引の中へ押し込むと、股のあたりが丸く膨れて青大將が蛙を飮んだ樣な——或は青大將の臨月と云ふ方がよく形容し得るかも知れん。兎に角變な恰好になつた。嘘だと思ふなら試しにやつて見るが宜しい。隱士はめり安をぐる〱首つ玉へ捲きつけた。其次はどうするかと思ふと主人の紬の上着を大風呂敷の樣に擴げて之に細君の帶と主人の羽織と襦袢と其他あらゆる雜物を綺麗に疊んでくるみ込む。其熟練と器用なやり口にも一寸感心した。夫から細君の帶上としごきとを續ぎ合はせて此包みを括つて片手にさげる。まだ頂戴するものは無いかなと、あたりを見廻して居たが、主人の頭の先に「朝日」の袋があるのを見附けて、ちよつと袂へ投げ込む。又其袋の中から一本出してランプに翳して火を點ける。旨さうに深く吸つて吐き出した烟が、乳色の火屋を繞つてまだ消えぬ間に、隱士の足音は緣側を次第に遠のいて聞こえなくなつた。主人夫婦は依然として熟睡して居る。人間も存外迂濶なものである。

吾輩は又暫時の休養を要する。のべつに喋舌つて居ては身體が續かない。ぐつと寐込んで眼が覺めた時は彌生の空が朗らかに晴れ渡つて勝手口に主人夫婦が巡査と對談をして居る時であつた。

「それではこゝから這入つて寢室の方へ廻つたんですな。あなた方は睡眠中で一向氣がつかなかつたのですな」

「えゝ」と主人は少し極りがわるさうである。

「夫で盜難に罹つたのは何時頃ですか」と巡査は無理な事を聞く。時間が分る位なら何も盜まれる必要はないのである。それに氣が附かぬ主人夫婦はしきりに此質問に對して相談をして居る。

「何時頃かな」
「さうですね」と細君は考へる。考へれば分ると思つて居るらしい。
「あなたは昨夕何時に御休みになつたんですか」
「俺の寐たのは御前よりあとだ」
「えゝ私の伏せつたのは、あなたより前です」
「眼が覺めたのは何時だつたかな」
「七時半でしたらう」
「すると盜賊の這入つたのは、何時頃になるかな」
「なんでも夜なかでせう」
「夜中は分りきつて居るが、何時頃かと云ふんだ」
「慥かな所はよく考へて見ないと分りませんわ」と細君はまだ考へる積りで居る。巡査は只形式的に聞いたのであるから、いつ這入つた所が一向痛痒を感じないのである。噓でも何でも、いゝ加減な事を答へてくれゝば宜いと思つて居るのに、主人夫婦が要領を得ない問答をして居るものだから、少々焦れ度くなつたと見えて、
「それぢや盜難の時刻は不明なんですな」と云ふと、主人は例の如き調子で
「まあ、さうですな」と答へる。巡査は笑ひもせずに
「ぢやあね、明治三十八年何月何日戸締りをして寐た處が盜賊が、どこそこの雨戸を外してどこそこに

忍び込んで品物を何點盜んで行つたから右及告訴候也といふ書面を御出しなさい。屆ではない告訴です。名宛はない方がいゝ」

「品物は一々かくんですか」

「えゝ羽織何點代價いくらと云ふ風に表にして出すんです。――いや這入つて見たつて仕方がない。盜られたあとなんだから」と平氣な事を云つて歸つて行く。

主人は筆硯を座敷の眞中へ持ち出して、細君を前に呼びつけて「是から盜難告訴をかくから、盜られたものを一々云へ。さあ云へ」と恰も喧嘩でもする樣な口調で云ふ。

「あら厭だ、さあ云へだなんて、そんな權柄づくで誰が云ふもんですか」と細帶を巻き附けた儘どつかと腰を据ゑる。

「その風はなんだ、宿場女郎の出來損ひ見た樣だ。なぜ帶をしめて出て來ん」

「これで惡ければ買つて下さい、宿場女郎でも何でも盜られりや仕方がないぢやありませんか」

「帶迄とつて行つたのか、苛い奴だ。それぢや帶から書き附けてやらう。帶はどんな帶だ」

「どんな帶つて、そんなに何本もあるもんですか。黑繻子と縮緬の腹合せの帶です」

「黑繻子と縮緬の腹合せの帶一筋――價はいくら位だ」

「六圓位でせう」

「生意氣に高い帶をしめてるな。今度から一圓五十錢位のにして置け」

「そんな帶があるものですか。それだからあなたは不人情だと云ふんです。女房なんぞは、どんな汚い

風をして居ても、自分さへ宜けりや構はないんでせう」
「まあいゝや、夫から何だ」
「絲織の羽織です、あれは河野の叔母さんの形見にもらつたんで、同じ絲織でも今の絲織とはたちが違ひます」
「そんな講釋は聞かんでもいゝ、値段はいくらだ」
「十五圓」
「十五圓の羽織を着るなんて身分不相當だ」
「いゝぢやありませんか、あなたに買つて頂きやしまいし」
「其次は何だ」
「黑足袋が一足」
「御前のか」
「あなたんでさあね、代價が二十七錢」
「それから？」
「山の芋が一箱」
「山の芋迄持つて行つたのか。煮て食ふ積りか、とろゝ汁にする積りか」
「どうする積りか知りません。泥棒の所へ行つて聞いて入らつしやい」
「いくらするか」

「山の芋のねだん迄は知りません」

「そんなら十二圓五十錢位にして置かう」

「馬鹿々々しいぢやありませんか、いくら唐津から擔つて來たつて山の芋が十二圓五十錢して堪るもんですか」

「然し御前は知らんと云ふぢやないか」

「知りませんわ、知りませんが十二圓五十錢なんて法外ですもの」

「知らんけれども十二圓五十錢は法外だとは何だ。まるで論理に合はん。夫だから貴樣はオタンチン・パレオロガスだと云ふんだ」

「何ですつて」

「オタンチン・パレオロガスだよ」

「何です其オタンチン・パレオロガスつて云ふのは」

「何でもいゝ。夫からあとは――俺の着物は一向出て來んぢやないか」

「あとは何でも宜う御座んす。オタンチン・パレオロガスの意味を聞かして頂戴」

「意味も何もあるもんか」

「敎へて下すつてもいゝぢやありませんか、あなたは餘つ程私を馬鹿にして入らつしやるのね。屹度人が英語を知らないと思つて惡口を仰しやつたんだよ」

「愚な事を言はんで、早くあとを云ふが好い。早く告訴をせんと品物が返らんぞ」

「どうせ今から告訴をしたつて間に合やしません、夫よりかオタンチン・パレオロガスを教へて頂戴」

「うるさい女だな。意味も何も無いと云ふに」

「そんなら、品物の方もあとはありません」

「頑愚だな、それでは勝手にするがいゝ。俺はもう盜難告訴を書いてやらんから」

「私も品數を教へて上げません。告訴はあなたが御自分でなさるんですから、私は書いて頂かないでも困りません」

「それぢや廢さう」と主人は例の如くふいと立つて書齋へ這入る。細君は茶の間へ引き下がつて針箱の前へ坐る。兩人共十分間許りは何もせずに默つて障子を睨め付けて居る。

所へ威勢よく玄關をあけて、山の芋の寄贈者多々良三平君が上がつてくる。多々良三平君はもと此家の書生であつたが今では法科大學を卒業してある會社の鑛山部に雇はれて居る。是も實業家の芽生で、鈴木藤十郎君の後進生である。三平君は以前の關係から時々舊先生の草廬を訪問して日曜抔には一日遊んで歸る位、此家族とは遠慮のない間柄である。

「奥さん。よか天氣で御座ります」と唐津訛りか何かで細君の前にずぼんの儘立て膝をつく。

「おや多々良さん」

「先生はどこぞ出なすつたか」

「いゝえ書齋に居ます」

「奥さん、先生のごと勉强しなさると毒ですばい。たまの日曜だもの。あなた」

「わたしに言つても駄目だから、あなたが先生にさう仰しやい」
「そればつてんが……」と言ひ掛けた三平君は座敷中を見廻して、「今日は御孃さんも見えんな」と半分細君に聞いて居るや否や　次の間からとん子とすん子が駈け出して來る。
「多々良さん、今日は御壽司を持つて來て？」と姉のとん子は先日の約束を覺えて居て、三平君の顔を見るや否や催促する。多々良君は頭を掻きながら、
「よう覺えて居るなう、此次は乾度持つて來ます。今日は忘れた」と白狀する。
「いやーだ」と姉が云ふと、妹もすぐ眞似をして「いやーだ」とつける。細君は漸く御機嫌が直つて少少笑顔になる。
「壽司は持つて來んが、山の芋は上げたらう、御孃さん喰べなさつたか」
「山の芋つてなあに？」と姉がきくと、妹が今度も亦眞似をして「山の芋つてなあに？」と三平君に尋ねる。
「まだ食ひなさらんか、早く御母さんに煮て御貰ひ。唐津の山の芋は東京のと違うてうまかあ」と三平君が國自慢をすると、細君は漸く氣が附いて、
「多々良さん、先達ては御親切に澤山難有う」
「どうです、喰べて見なすつたか。折れん樣に箱を誂へて堅くつめて來たから、長い儘でありましたらう」
「所が折角下すつた山の芋を昨夜泥棒に取られて仕舞つて」

「盗人が？馬鹿な奴ですなあ、そげん山の芋の好きな男が居りますか？」と三平君大いに感心して居る。

「御母さま、昨夕泥棒が這入つたの？」と姉が尋ねる。

「えゝ」と細君は輕く答へる。

「泥棒が這入つて――さうして――泥棒が這入つて――どんな顔をして這入つたの？」と今度は妹が聞く。この奇問には細君も何と答へてよいか分らんので、

「恐い顔をして這入りました」と返事して多々良君の方を見る。

「恐い顔つて多々良さん見た樣な顔なの」と姉が氣の毒さうにもなく、押し返して聞く。

「何ですね。そんな失禮な事を」

「ハヽヽ私の顔はそんなに恐いですか。困つたな」と頭を掻く。多々良君の頭の後部には直徑一寸許りの禿がある。一ヶ月前から出來出して醫者に見て貰つたが、まだ容易に癒りさうもない。此禿を第一番に見附けたのは姉のとん子である。

「あら多々良さんの頭は御母さまの樣に光つてゝよ」

「だまつて入らつしやいと云ふのに」

「御母さま　昨夕の泥棒の頭も光つてて」と是は妹の質問である。細君と多々良君とは思はず吹き出したが、あまり煩はしくて話しも何も出來ぬので「さあ／＼御前さん達は少し御庭へ出て御遊びなさい。今に御母さまが好い御菓子を上げるから」と細君は漸く子供を追ひ遣つて、

「多々良さんの頭はどうしたの」と眞面目に聞いて見る。
「蟲が食ひました。中々癒りません。奥さんも有んなさるか」
「やだわ、蟲が食ふなんて、そりや髷で釣る所は女だから少しは禿げますさ」
「禿はみんなバクテリヤですばい」
「わたしのはバクテリヤぢやありません」
「そりや奥さん意地張りたい」
「何でもバクテリヤぢやありません。然し英語で禿の事を何とか云ふでせう」
「禿はボールドとか云ひます」
「いゝえ、それぢやないの、もつと長い名があるでせう」
「先生に聞いたら、すぐわかりませう」
「先生はどうしても教へて下さらないから、あなたに聞くんです」
「私はボールドより知りませんが。長かつて、どげんですか」
「オタンチン　パレオロガスと云ふんです。オタンチンと云ふのが禿と云ふ字で、パレオロガスが頭なんでせう」
「さうかも知れませんたい。今に先生の書齋へ行つてウェブスターを引いて調べて上げませう。然し先生も餘程變つて居なさいますな。此の天氣の好いのに、うちに凝として――奥さん、あれぢや胃病は癒りませんな。ちと上野へでも花見に出掛けなさるごと勸めなさい」

「あなたが連れ出して下さい。先生は女の云ふ事は決して聞かない人ですから」
「此頃でもジャムを舐めなさるか」
「えゝ相變らずです」
「先達て、先生こぼして居なさいました。どうも妻が俺のジャムの舐め方が烈しいと云つて困るが、俺はそんなに舐める積りはない。何か勘定違ひだらうと云ひなさるから、そりや御孃さんや奧さんが一所に舐めなさるに違ひない――」
「いやな多々良さんだ、何だつてそんな事を云ふんです」
「然し奧さんだつて舐めさうな顏をして居なさるばい」
「顏でそんな事がどうして分ります」
「分らんばつてんが――夫ぢや奧さん少しも舐めなさらんか」
「そりや少しは舐めますさ。舐めたつて好いぢやありませんか。うちのものだもの」
「ハヽヽさうだらうと思つた――然し本の事、泥棒は飛んだ災難でしたな。山の芋計り持つて行たのですか」
「山の芋計りなら困りやしませんが、不斷着をみんな取つて行きました」
「早速困りますか。又借金をしなければならんですか。此猫が犬ならよかつたに――惜しい事をしたなあ。奧さん、犬の大か奴を是非一丁飼ひなさい。――猫は駄目ですばい、飯を食ふ計りで――ちつと鼠でも捕りますか」

「一匹もとつた事はありません。本當に横着な圖々敷い猫ですよ」
「いやそりや、どうもかうもならん。早々棄てなさい。私が貰つて行つて煮て食はうか知らん」
「あら、多々良さんは猫を食べるの」
「食ひました。猫は旨う御座ります」
「隨分豪傑ね」
下等な書生のうちには猫を食ふ樣な野蠻人がある由はかねて傳聞したが、吾輩が平生眷顧を辱うする多々良君其人も亦此同類ならんとは今が今迄夢にも知らなかつた。況んや同君は既に書生ではない。卒業の日は淺きにも係はらず堂々たる一個の法學士で、六井物産會社の役員であるのだから吾輩の驚愕も亦一通りではない。人を見たら泥棒と思へと云ふ格言は寒月第二世の行爲によつて既に證據立てられたが、人を見たら猫食ひと思へとは吾輩も多々良君の御蔭によつて始めて感得した眞理である。世に住めば事を知る、事を知るは嬉しいが日に日に危險が多くて、日に日に油斷がならなくなる。狡猾になるのも卑劣になるのも表裏二枚合せの護身服を着けるのも皆事を知るの結果であつて、事を知るのは年を取るの罪である。老人に碌なものが居ないのは此理だな。吾輩抔も或は今のうちに多々良君の鍋の中で玉葱と共に成佛する方が得策かも知れんと考へて隅の方に小さくなつて居ると、最前細君と喧嘩をして一旦書齋へ引き上げた主人は、多々良君の聲を聞きつけて、のそ／＼茶の間へ出てくる。
「先生、泥棒に逢ひなさつたさうですな。なんちゆ愚な事です」と劈頭一番に遣り込める。
「這入る奴が愚なんだ」と主人はどこ迄も賢人を以て自任して居る。

「這入る方も愚だばつてんが、取られた方もあまり賢くはなかごたる」
「何も取られるものの無い多々良さんの樣なのが一番賢いんでせう」と細君が此度は良人の肩を持つ。
「然し一番愚なのは此猫ですばい。ほんにまあ、どう云ふ了簡ぢやらう。鼠は捕らず、泥棒が來ても知らん顔をして居る。——先生、此猫を私に呉んなさらんか。かうして置いたつちや何の役にも立ちませんばい」
「やつても好い。何にするんだ」
「煮て喰べます」
主人は猛烈なる此一言を聞いて、うふと氣味の惡い胃弱性の笑ひを洩らしたが、別段の返事もしないので、多々良君も是非食ひ度いとも云はなかつたのは吾輩に取つて望外の幸福である。主人はやがて話頭を轉じて、
「猫はどうでも好いが、着物をとられたので寒くていかん」と大いに銷沈の體である。成程寒い筈である。昨日迄は綿入を二枚重ねて居たのに今日は袷に半袖のシャツ丈で、朝から運動もせず枯坐したぎりであるから、不充分な血液は悉く胃の爲に働いて、手足の方へは少しも巡回して來ない。
「先生、教師杯をして居つたちや到底あかんですばい。ちよつと泥棒に逢つても、すぐ困る——一丁今から考へを換へて實業家にでもなんなさらんか」
「先生は實業家は嫌ひだから、そんな事を言つたつて駄目よ」と細君が傍から多々良君に返事をする。細君は無論實業家になつて貰ひたいのである。

「先生學校を卒業して何年になんなさるか」
「今年で九年目でせう」と細君は主人を顧る。主人はさうだとも、さうで無いとも云はない。
「九年立つても月給は上がらず。いくら勉強しても人は褒めちやくれず、郎君獨寂寞ですたい」と中學時代で覺えた詩の句を細君の爲に朗吟すると、細君は一寸分りかねたものだから返事をしない。
「教師は無論嫌ひだが、實業家は猶嫌ひだ」と主人は何が好きだか心の裏で考へて居るらしい。
「先生は何でも嫌ひなんだから……」
「嫌ひでないのは奧さん丈ですか」と多々良君柄に似合はぬ冗談を云ふ。
「一番嫌ひだ」主人の返事は尤も簡明である。細君は横を向いて一寸澄ましたが、再び主人の方を見て、
「生きて入らつしやるのも御嫌ひなんでせう」と充分主人を凹ました積りで云ふ。
「餘り好いては居らん」と存外呑氣な返事をする。是では手のつけ様がない。
「先生、ちつと活潑に散歩でもしなさらんと、からだを壞して仕舞ひますばい。――さうして實業家になんなさい。金なんか儲けるのは、ほんに造作もない事で御座ります」
「少しも儲けもせん癖に」
「まだあなた、去年やつと會社へ這入つた許りですもの、それでも先生より貯蓄があります」
「どの位貯蓄したの？」と細君は熱心に聞く。
「もう五十圓になります」
「一體あなたの月給はどの位なの」是も細君の質問である。

「三十圓ですたい。其内を毎月五圓宛會社の方で預かつて積んで置いて、いざと云ふ時に遣ります。――奥さん小遣錢で外濠線の株を少し買ひなさらんか、今から三四個月すると倍になります。ほんに少し金さへあれば、すぐ二倍にでも三倍にでもなります」

「そんな御金があれば泥棒に逢つたつて困りやしないわ」

「それだから實業家に限ると云ふんです。先生も法科でも遣つて會社か銀行へでも出なされば、今頃は月に三四百圓の收入はありますのに、惜しい事で御座んしたな。――先生、あの鈴木藤十郎と云ふ工學士を知つてなさるか」

「うん昨日來た」

「さうで御座んすか、先達てある宴會で逢ひました時先生の御話をしたら、さうか君は苦沙彌君の所の書生をして居たのか、僕も苦沙彌君とは昔小石川の寺で一所に自炊をして居つた事がある。今度行つたら宜しく云うて吳れ、僕も其内尋ねるからと云つて居ました」

「近頃東京へ來たさうだな」

「えゝ今迄九州の炭坑に居りましたが、此間東京詰めになりました。中々旨いです。私なぞにでも朋友の樣に話します。――先生、あの男がいくら貰つてると思ひなさる」

「知らん」

「月給が二百五十圓で盆暮に配當がつきますから、何でも平均四五百圓になりますばい。あげな男が、よかしこ取つて居るのに、先生はリーダー專門で十年一狐裘ぢや馬鹿氣て居りますなあ」

「實際馬鹿氣て居るな」と主人の樣な超然主義の人でも金錢の觀念は普通の人間と異なる所はない。否困窮する丈に人一倍金が欲しいのかも知れない。多々良君は充分實業家の利益を吹聽して、もう云ふ事が無くなつたものだから、

「奥さん、先生の所へ水島寒月と云ふ人が來ますか」

「えゝ、よく入らつしやいます」

「どげんな人物ですか」

「大變學問の出來る方ださうです」

「好男子ですか」

「ホヽヽ、多々良さん位なものでせう」

「さうですか、私位なものですか」と多々良君眞面目である。

「どうして寒月の名を知つて居るのかい」と主人が聞く。

「先達て或人から頼まれました。そんな事を聞く丈の價値のある人物でせうか」多々良君は聞かぬ先から既に寒月以上に構へて居る。

「君より餘程えらい男だ」

「さうで御座いますか、私よりえらいですか」と笑ひもせず怒りもせぬ。是が多々良君の特色である。

「近々博士になりますか」

「今論文を書いてるさうだ」

「矢つ張り馬鹿ですな。博士論文をかくなんて、もう少し話せる人物かと思つたら」
「相變らず、えらい見識ですね」と細君が笑ひながら云ふ。
「博士になつたら、だれとかの娘をやるとか遣らんとか云うて居ましたから、そんな馬鹿があらうか、娘を貰ふ爲に博士になるなんて、そんな人物にくれるより僕にくれる方が餘程ましだと云つて遣りました」
「だれに」
「私に水島の事を聞いて呉れと頼んだ男です」
「鈴木ぢやないか」
「いゝえ、あの人にや、まだそんな事は言ひ切りません。向うは大頭ですから」
「多々良さんは蔭辨慶ね。うちへなんぞ來ちや大變威張つても、鈴木さん抔の前へ出ると小さくなつてるんでせう」
「えゝ。さうせんと、あぶないです」
「多々良、散歩をしようか」と突然主人が云ふ。先刻から袷一枚であまり寒いので少し運動でもしたら暖かになるだらうと云ふ考へから主人は此の先例のない動議を呈出したのである。行き當りばつたりの多多良君は無論逡巡する譯がない。
「行きませう。上野にしますか。芋坂へ行つて團子を食ひませうか。先生、あすこの團子を食つた事がありますか。奥さん、一返行つて食つて御覧。柔らかくて安いです。酒も飲ませます」と例によつて秩序のない駄辨を揮つてるうちに、主人はもう帽子を被つて沓脱へ下りる。

吾輩は又少々休養を要する。主人と多々良君が上野公園でどんな眞似をして芋坂で團子を幾皿食つたか、其邊の逸事は探偵の必要もなし、又尾行する勇氣もないからずつと略して其間休養せんければならん。休養は萬物の旻天から要求して然るべき權利である。此世に生息すべき義務を有して蠢動する者は、生息の義務を果たす爲に休養を得ねばならぬ。もし神ありて汝は働く爲に生れたり寢る爲に生れたるに非ずと云はゞ、吾輩は之に答へて云はん、吾輩は仰せの如く働く爲に生れたり、故に働く爲に休養を乞ふと。主人の如く器械に不平を吹き込んだ迄の木強漢ですら、時々は日曜以外に自辨休養をやるではないか。多感多恨にして日夜心神を勞する吾輩如き者は、假令猫と雖も主人以上に休養を要するは勿論の事である。只先刻多々良君が吾輩を目して休養以外に何等の能もない贅物の如くに罵つたのは少々氣掛りである。兎角物象にのみ使役せらるゝ俗人は、五感の刺激以外に何等の活動もないので、他を評價するのでも形骸以外に渉らんのは厄介である。何でも尻でも端折つて、汗でも出さないと働いて居ない樣に考へてゐる。達磨と云ふ坊さんは足の腐る迄坐禪をして澄まして居たと云ふが、假令壁の隙から蔦が這ひ込んで大師の眼口を塞ぐ迄動かないにしろ、寐て居るんでも死んで居るんでもない。頭の中は常に活動して、廓然無聖などと乙な理窟を考へ込んで居る。儒家にも靜坐の工夫と云ふのがある相だ。是だつて一室の中に閑居して安閑と躄の修行をするのではない。腦中の活力は人一倍熾に燃えて居る。只外見上は至極沈靜端肅の態であるから、天下の凡眼は是等の知識巨匠を以て昏睡假死の庸人と見做して無用の長物とか穀潰しとか入らざる誹謗の聲を立てるのである。是等の凡眼は皆形を見て心を見ざる不具なる視覺を有して生れ附いた者で、――然も彼の多々良三平君の如きは形を見て心を見ざる第一流の人物であるから、此三平君が吾輩を目し

て乾屎橛同等に心得るのも尤もだが、恨むらくは少しも古今の書籍を讀んで、稍事物の眞相を解し得たる主人迄が、淺薄なる三平君に一も二もなく同意して、猫鍋に故障を挾む氣色のない事である。然し一歩退いて考へて見ると、かく迄に彼等が吾輩を輕蔑するのも、あながち無理ではない。大聲は俚耳に入らず、陽春白雪の詩には和するもの少しの喩も古い昔からある事だ。形體以外の活動を見る能はざる者に向つて己靈の光輝を見よと強ふるは、坊主に髮を結へと逼るが如く、鮪に演說をして見ろと云ふが如く、電鐵に脫線を要求するが如く、主人に辭職を勸告するが如く、三平に金の事を考へるなと云ふが如きものである。畢竟無理な注文に過ぎん。然しながら猫と雖も社會的動物である。社會的動物である以上は如何に高く自ら標置するとも、或程度迄は社會と調和して行かねばならん。主人や細君や乃至おさん、三平連が吾輩を吾輩相當に評價して吳れんのは殘念ながら致し方がないとして、不明の結果皮を剝いで三味線屋に賣り飛ばし、肉を刻んで多々良君の膳に上す樣な無分別をやられては由々敷き大事である。吾輩は頭を以て活動すべき天命を受けて此娑婆に出現した程の古今來の猫であれば、非常に大事な身體である。千金の子は堂陲に坐せずとの諺もある事なれば、好んで超邁を宗として、徒らに吾身の危險を求むるのは單に自己の災なるのみならず、又大いに天意に背く譯である。猛虎も動物園に入れば糞豚の隣に居を占め、鴻雁も鳥屋に生擒らるれば雛鷄と俎を同じうす。庸人と相伍する以上は下つて庸猫と化せざるべからず。庸猫たらんとすれば鼠を捕らざるべからず。——吾輩はとう〳〵鼠をとる事に極めた。

先達て中から日本は露西亞と大戰爭をして居るさうだ。吾輩は日本の猫だから無論日本贔屓である。出來得べくんば混成猫旅團を組織して露西亞兵を引つ搔いてやりたいと思ふ位である。かく迄に元氣旺盛な

吾輩の事であるから、鼠の一疋や二疋はとらうとする意志さへあれば、寢て居ても譯なく捕れる。昔ある人當時有名な禪師に向つて、どうしたら悟れませうと聞いたら、猫が鼠を覘ふ樣にさしやれと答へたさうだ。猫が鼠をとる樣にとは、かくさへすれば外れつこは御座らぬと云ふ意味である。女賢しうしてと云ふ諺はあるが猫賢しうして鼠捕り損なふと云ふ格言はまだ無い筈だ。して見れば如何に賢い吾輩の如きものでも鼠の捕れん筈はあるまい。とれん筈はあるまい所か捕り損なふ筈はあるまい。今迄捕らんのは、捕り度くないからの事さ。春の日はきのふの如く暮れて、折々の風に誘はるゝ花吹雪が臺所の腰障子の破れから飛び込んで手桶の中に浮ぶ影が、薄暗き勝手用のランプの光に白く見える。今夜こそ大手柄をして、うち中驚かしてやらうと決心した吾輩は、あらかじめ戰場を見廻つて地形を飲み込んで置く必要がある。戰鬪線は勿論餘り廣からう筈がない。疊數にしたら四疊敷もあらうか、その一疊を仕切つて半分は流し半分は酒屋八百屋の御用を聞く土間である。へつつひは貧乏勝手に似合はぬ立派な物で、赤の銅壺がぴかぴかして、後は羽目板の間を二尺遺して吾輩の鮑貝の所在地である。茶の間に近き六尺は膳椀皿小鉢を入れる戸棚となつて、狹き臺所をいとゞ狹く仕切つて、横に差し出すむき出しの棚とすれ／＼の高さになつて居る。其下に摺鉢が仰向けに置かれて、摺鉢の中には小桶の尻が吾輩の方を向いて居る。大根卸し、摺小木が並んで懸けてある傍に火消壺丈が悄然と控へて居る。眞黒になつた樽木の交叉した眞中から一本の自在を下ろして、先へは平たい大きな籠をかける。其籠が時々風に搖れて鷹揚に動いて居る。此籠は何の爲に釣るすのか、此家へ來たてには一向要領を得なかつたが、猫の手の屆かぬ爲わざと食物をこゝへ入れると云ふ事を知つてから、人間の意地の惡い事をしみ／＼感じた。

是から作戰計畫だ。どこで鼠と戰爭するかと云へば無論鼠の出る所でなければならぬ。如何に此方に便宜な地形だからと云つて一人で待ち構へて居てはてんで戰爭にならん。是に於てか鼠の出口を研究する必要が生ずる。どの方面から來るかなと臺所の眞中に立つて四方を見廻す。何だか東郷大將の樣な心持ちがする。下女はさつき湯に行つて戾つて來ん。子供はとくに寢て居る。主人は芋坂の團子を喰つて歸つて來て相變らず書齋に引き籠つてゐる。細君は――細君は何をして居るか知らない。大方居眠りをして山芋の夢でも見て居るのだらう。時々門前を人力が通るが通り過ぎた後は一段と淋しい。わが決心と云ひ、わが意氣と云ひ、臺所の光景と云ひ、四邊の寂寞と云ひ、全體の感じが悉く悲壯である。どうしても猫中の東郷大將としか思はれない。かう云ふ境界に入ると物凄い内に一種の愉快を覺えるのは誰しも同じ事であるが、吾輩は此愉快の底に一大心配が横たはつて居るのを發見した。鼠と戰爭をするのは覺悟の前だから何疋來ても恐くはないが、出てくる方面が明瞭でないのは不都合である。周密なる觀察から得た材料を綜合して見ると、鼠賊の逸出するのには三つの行路がある。彼らが若しどぶ鼠であるならば土管を沿うて流しからへつついの裏手へ廻るに相違ない。其時は火消壺の蔭に隱れて、歸り道を絕つてやる。或は溝へ湯を拔く漆喰の穴より風呂場を迂回して勝手へ不意に飛び出すかも知れない。さうしたら釜の蓋の上に陣取つて眼の下に來た時上から飛び下りて一攫みにする。夫からと又あたりを見廻すと戶棚の戶の右の下隅が半月形に喰ひ破られて、彼等の出入に便なるかの疑ひがある。鼻を附けて嗅いで見ると少々鼠臭い。若しこから吶喊して出たら、柱を楯に遣り過ごして置いて、横合からあつと爪をかける。もし天井から來たらと上を仰ぐと眞黑な煤がランプの光で輝いて、地獄を裏返しに釣るした如く一寸吾輩の手際では上る事も、

下る事も出來ん。まさかあんな高い處から落ちてくる事もなからうからと、此方面丈は警戒を解く事にする。夫にしても三方から攻撃される懸念がある。一口なら片眼でも退治して見せる。二口ならどうにか、かうにか遣つて退ける自信がある。然し三口となると如何に本能的に鼠を捕るべく豫期せらるゝ吾輩も手の附け樣がない。さればと云つて車屋の黒如きものを助勢に頼んでくるのも吾輩の威嚴に關する。どうしたら好からう。どうしたら好からうと考へて好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣ひはないと決めるのが一番安心を得る近道である。又法のつかない者は起らないと考へたくなるものである。まづ世間を見渡して見給へ。きのふ貰つた花嫁も今日死なんとも限らんではないか。然し聟殿は玉椿千代も八千代もなど、御目出度い事を並べて心配らしい顏もせんではないか。心配せんのは、心配する價値がないからではない。いくら心配したつて法が附かんからである。吾輩の場合でも三面攻撃は必ず起らぬと斷言すべき相當の論據はないのであるが、起らぬとする方が安心を得るに便利である。安心は萬物に必要である。吾輩も安心を欲する。因つて三面攻撃は起らぬと極める。

夫でもまだ心配が取れぬから、どう云ふものかと段々考へて見ると漸く分つた。三個の計略のうち何れを選んだのが尤も得策であるかの問題に對して、自ら明瞭なる答辯を得るに苦しむからの煩悶である。戸棚から出るときには吾輩之に應ずる策がある、風呂場から現はれる時は之に對する計がある、又流しから這ひ上がるときは之を迎ふる成算もあるが、其うちどれか一つに極めねばならぬとなると大いに當惑する。東郷大將はバルチック艦隊が對馬海峽を通るか、津輕海峽へ出るか、或は遠く宗谷海峽を廻るかに就いて大いに心配されたさうだが、今吾輩が吾輩自身の境遇から想像して見て、御困却の段實に御察し申す。

吾輩は全體の狀況に於て東郷閣下に似て居るのみならず、此の格段なる地位に於ても亦東郷閣下とよく苦心を同じうする者である。

吾輩がかく夢中になつて智謀をめぐらして居ると、突然破れた腰障子が開いてお三の顏がぬうと出る。顏丈出ると云ふのは、手足がないと云ふ譯ではない。ほかの部分は夜目でよく見えんのに、顏丈が著しく強い色をして判然眸底に落つるからである。お三は其の平常より赤き頰を益赤くして洗湯から歸つた序に、昨夜に懲りてか、早くから勝手の戸締をする。書齋で主人が俺のステッキを枕元へ出して置けと云ふ聲が聞こえる。何の爲に枕頭にステッキを飾るのか吾輩には分らなかつた。まさか易水の壯士を氣取つて、龍鳴を聞かうと云ふ醉狂でもあるまい。きのふは山の芋、今日はステッキ、明日は何になるだらう。

夜はまだ淺い。鼠は中々出さうにない。吾輩は大戰の前に一休養を要する。

主人の勝手には引窓がない。座敷なら欄間と云ふ樣な所が幅一尺程切り拔かれて夏冬吹き通しに引窓の代理を勤めて居る。惜し氣もなく散る彼岸櫻を誘うて、颯と吹き込む風に驚いて眼を覺ますと、朧月さへいつの間に差してか、竈の影は斜に揚板の上にかゝる。寢過ごしはせぬかと二三度耳を振つて家内の容子を窺ふと、しんとして昨夜の如く柱時計の音のみ聞こえる。もう鼠の出る時分だ、どこから出るだらう。

戸棚の中でこと〳〵と音がし出す。小皿の縁を足で抑へて、中をあらして居るらしい。こゝから出る哩と穴の横へすくんで待つて居る。なか〳〵出て來る氣色はない。皿の音はやがてやんだが、今度はどんぶりか何かに掛かつたらしい、重い音が時々ごと〳〵とする。而も戸を隔ててすぐ向う側でやつて居る。吾輩の鼻づらと距離にしたら三寸も離れて居らん。時々はちよろ〳〵と穴の口迄足音が近寄るが、又遠のい

て一匹も顔を出すものはない。戸一枚向うに現在敵が暴行を逞しくしてるのに、吾輩は凝と穴の出口で待つて居らねばならん。隨分氣の長い話だ。鼠は旅順椀の中で盛に舞踏會を催して居る。せめて吾輩の這入れる丈お三が此戸を開けて置けば善いのに、氣の利かぬ山出しだ。

今度はへつつひの蔭で吾輩の鮑貝がことりと鳴る。敵は此方面へも來たなと、そーつと忍び足で近寄ると手桶の間から尻尾がちらと見えたぎり流しの下へ隱れて仕舞つた。しばらくすると風呂場でうがひ茶碗が金盥にかちりと當たる。今度は後方だと振りむく途端に、五寸近くある大きな奴がひらりと齒磨の袋を落として緣の下へ馳け込む。逃がすものかと續いて飛び下りたら、もう影も姿も見えぬ。鼠を捕るのは思つたより六づかしい者である。吾輩は先天的鼠を捕る能力がないのか知らん。

吾輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から馳け出し、戸棚を警戒すると流しから飛び上がり、臺所の眞中に頑張つて居ると三方面共少々宛騷ぎ立てる。小癪と云はうか、卑怯と云はうか、到底彼等は君子の敵でない。吾輩は十五六回はあちら、こちらと氣を疲らし心を勞らして奔走努力して見たが遂に一度も成功しない。殘念ではあるがかゝる小人を敵にしては如何なる東鄕大將も施すべき策がない。始めは勇氣もあり敵愾心もあり、悲壯と、云ふ、崇高な、美感さへあつたが、遂には面倒と馬鹿氣て居るのと眠いのと疲れたので臺所の眞中へ坐つたなり動かない事になつた。然し動かんでも八方睨みを極め込んで居れば、敵は小人だから大した事は出來んのである。目ざす敵と思つた奴が存外けちな野郎だと、戰爭が名譽だと云ふ感じが消えて憎いと云ふ念丈殘る。憎いと云ふ念を通り過ごすと、張り合ひが拔けてぼーとする。ぼーとしたあとは勝手にしろ、どうせ氣の利いた事は出來ないのだからと輕蔑の極眠たくなる。吾輩は以上の徑路

つなたどて、遂に眠くなつた。吾輩は眠る。休養は敵中に在つても必要である。

横向に庇を向いて開いた引窓から、又花吹雪を一塊りなげ込んで、烈しき風の吾を遶ると思へば、戸棚の口から弾丸の如く飛び出した者が、避くる間もあらばこそ、風を切つて吾輩の左の耳へ喰ひつく。之に續く黒い影は後に廻るかと思ふ間もなく吾輩の尻尾へぶら下がる。瞬く間の出來事である。吾輩は何の目的もなく器械的に跳ね上がる。滿身の力を毛穴に込めて此怪物を振り落とさうとする。耳に喰ひ下がつたのは中心を失つてだらりと吾が横顔に懸かる。護謨管の如き柔らかき尻尾の先が思ひ掛けなく吾輩の口に這入る。屈竟の手懸りに、碎けよと許り尾を啣へながら左右にふると、尾のみは前歯の間に殘つて胴體は古新聞で張つた壁に當たつて、揚板の上に跳ね返る。起き上がる所を隙間なく乘し掛かれば、毬を蹴たる如く、吾輩の鼻づらを掠めて釣り段の縁に足を縮めて立つ。彼は棚の上から吾輩を見卸す、吾輩は板の間から彼を見上ぐる。距離は五尺。其中に月の光が、大幅の帯を空に張る如く横に差し込む。吾輩は前足に力を込めて、やつと許り棚の上に飛び上がらうとした。前足丈は首尾よく棚の縁にかゝつたが後足は宙にもがいて居る。尻尾には最前の黒いものが、死ぬとも離るまじき勢で喰ひ下がつて居る。吾輩は危い。前足を懸け易へて足懸りを深くしようとする。懸け易へる度に尻尾の重みで淺くなる。二三分滑れば落ちねばならぬ。吾輩は愈危い。棚板を爪で搔きむしる音がり〳〵と聞こえる。是ではならぬと左の前足を抜き易へる拍子に、爪を見事に懸け損じたので吾輩は右の爪一本で棚からぶら下がつた。自分と尻尾に喰ひつくものの重みで吾輩のからだがぎり〳〵と廻る。此時迄身動きもせずに覘ひをつけて居た棚の上の怪物は、こゝぞと吾輩の額を目懸けて棚の上から石を投ぐるが如く飛び下りる。吾輩の爪は一縷のかゝりを

失ふ。三つの塊りが一つとなつて月の光を竪に切つて下へ落ちる。次の段に乘せてあつた擂鉢と、擂鉢の中の小桶とジャムの空罐が同じく一塊りとなつて、下にある火消壺を誘つて、半分は水甕の中、半分は板の間の上へ轉がり出す。凡てが深夜に只ならぬ物音を立てて死物狂ひの吾輩の魂をさへ寒からしめた。

「泥棒！」と主人は胴間聲を張り上げて寢室から飛び出して來る。見ると片手にはランプを提げ、片手にはステッキを持つて、寢ぼけ眼よりは身分相應の炯々たる光を放つて居る。吾輩は鮑貝の傍に大人しくして蹲踞る。二疋の怪物は戸棚の中へ姿をかくす。主人は手持無沙汰に「何だ誰だ、大きな音をさせたのは」と怒氣を帶びて相手も居ないのに聞いて居る。月が西に傾いたので、白い光の一帶は半切程に細くなつた。

から暑くては猫と雖も遣り切れない。皮を脱いで、肉を脱いで、骨丈で涼みたいものだと英吉利のシドニー・スミスとか云ふ人が苦しがつたと云ふ話があるが、たとひ骨丈にならなくとも好いから、責めて此淡灰色の斑入の毛衣丈は一寸洗ひ張りでもするか、もしくは當分の中質にでも入れたい樣な氣がする。人間から見たら猫抔は年が年中同じ顏をして、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至つて單純な、無事な、錢のかゝらない生涯を送つて居る樣に思はれるかも知れないが、いくら猫だつて相應に暑さ寒さの感じはある。たまには行水の一度位あびたくない事もないが、何しろ此毛衣の上から湯を使つた日には乾かすのが容易な事でないから汗臭いのを我慢して、此年になる迄洗湯の暖簾を潜つた事はない。折々は團扇でも使つて見ようと云ふ氣も起らんではないが、兎に角握る事が出來ないのだから仕方がない。夫を思ふと人間は贅澤なものだ。なまで食つて然る可きものを態々煮て見たり、燒いて見たり、酢に漬けて見たり、味噌をつけて見たり好んで餘計な手數を懸けて御互に恐悅して居る。着物だつてさうだ。猫の樣に一年中同じ物を着通せと云ふのは、不完全に生れ附いた彼等にとつて、ちと無理かも知れんが、なにもあんなに雜多なものを皮膚の上へ載せて暮らさなくてもの事だ。羊の御厄介になつたり、蠶の御世話になつたり、綿畠の御情さへ受けるに至つては贅澤は無能の結果だと斷言しても好い位だ。衣食は先づ大目に見て勘辨するとした所で、生存上直接の利害もない所迄此調子で押して行くのは毫も合點が行かぬ。第一頭の毛などと云

ふものは自然に生えるものだから、放つて置く方が尤も簡便で當人の爲になるだらうと思ふのに、彼等は入らぬ算段をして種々雜多な恰好をこしらへて得意である。坊主とか自稱するものはいつ見ても頭を青くして居る。暑いと其上へ日傘をかぶる。寒いと頭巾で包む。是では何の爲に青い物を出して居るのか主意が立たんではないか。さうかと思ふと櫛とか稱する無意味な鋸樣の道具を用ひて頭の毛を左右に等分して嬉しがつてるのもある。等分にしないと七分三分の割合で頭蓋骨の上へ人爲的の區劃を立てる。中には此仕切りがつむじを通り過ごして後迄食み出して居るのがある。丸で贋造の芭蕉葉の樣だ。其次には腦天を平に刈つて左右は眞直に切り落とす。丸い頭へ四角な枠をはめて居るから、植木屋を入れた杉垣根の寫生としか受け取れない。此外五分刈、三分刈、一分刈さへあると云ふ話だから、仕舞ひには頭の裏迄刈り込んでマイナス一分刈、マイナス三分刈などと云ふ新奇な奴が流行するかも知れない。兎に角そんなに憂身を窶してどうする積りか分らん。第一、足が四本あるのに二本しか使はないと云ふのから贅澤だ。四本であるけば夫丈はかも行く譯だのに、いつでも二本で濟まして、殘る二本は到來の棒鱈の樣に手持無沙汰にぶら下げて居るのは馬鹿々々しい。是で見ると人間は餘程猫より閑なもので退屈のあまり斯樣ないたづらを考案して樂しんで居るものと察せられる。但可笑しいのは此閑人がよると障ると多忙だ多忙だと觸れ廻るのみならず、其顏色が如何にも多忙らしい、わるくすると多忙に食ひ殺されはしまいかと思はれる程こせついて居る。彼等のあるものは吾輩を見て時々あんなになつたら氣樂でよからう抔と云ふが、氣樂でよければなるが好い。そんなにこせ／＼して呉れと誰も頼んだ譯でもなからう。自分で勝手な用事を手に負へぬ程製造して苦しい苦しいと云ふのは、自分で火をかん／＼起こして暑い暑いと云ふ樣なものだ。猫

たつて頭の刈り方を二十通りも考へ出す日には、かう氣樂にしては居られんさ。氣樂になりたければ吾輩の樣に夏でも毛衣を着て通される丈の修業をするがよろしい。――とは云ふものゝ少々暑い。毛衣では全く暑過ぎる。

是では一手專賣の晝寐も出來ない。何かないかな、永らく人間社會の觀察を怠つたから、今日は久し振りで彼等が酔興に齷齪する樣子を拜見しようかと考へて見たが、生憎主人は此點に關して頗る猫に近い性分である。晝寐は吾輩に劣らぬ位やるし、殊に暑中休暇後になつてからは何一つ人間らしい仕事をせんので、いくら觀察をしても一向觀察する張合がない。こんな時に迷亭でも來ると胃弱性の皮膚も幾分か反應を呈して、暫らくでも猫に遠ざかるだらうに、先生もう來ても好い時だと思つて居ると、誰とも知らず風呂場でざあ／＼水を浴びるものがある。水を浴びる音ばかりではない、折々大きな聲で相の手を入れて居る。「いや結構」「どうも良い心持ちだ」「もう一杯」などと家中に響き渡る樣な聲を出す。主人のうちへ來てこんな大きな聲と、こんな無作法な眞似をやるものは外にはない、迷亭に極まつて居る。

愈來たな、是で今日半日は潰せると思つて居ると、先生汗を拭いて肩を入れて、例の如く座敷迄つか／＼上がつて來て「奥さん、苦沙彌君はどうしました」と呼ばはりながら帽子を疊の上へ抛り出す。細君は隣座敷で針箱の側へ突つ伏して好い心持ちに寐て居る最中にワンワンと何だか鼓膜へ答へる程の響がしたので、はつと驚いて、醒めぬ眼をわざと睜つて座敷へ出て來ると、迷亭が薩摩上布を着て勝手な所へ陣取つて頻りに扇使ひをして居る。

「おや入らしやいまし」と云つたが少々狼狽の氣味で「ちつとも存じませんでした」と鼻の頭へ汗をか

いた儘御辭儀をする。「いゝえ、今來た計りなんですよ。今風呂場でお三に水を掛けて貰つてね。漸く生き歸つた所で――どうも暑いぢやありませんか」「此兩三日は、たゞ凝として居りましても汗が出る位で、大變御暑う御座います。――でも御變りも御座いませんで」と細君は依然として鼻の汗をとらない。「えゝ、難有う。なに暑い位でそんなに變りやしませんや。然し此暑さは別物ですよ。どうも體がだるくつてね」「私抔も、つひに晝寢抔を致した事がないんで御座いますが、かう暑いとつい――」「やりますかね。好いですよ。晝寢られて、夜寢られりや、こんな結構な事はないでさあ」と不相變呑氣な事を並べて見たが夫丈では不足と見えて「私なんざ寢たくない質でね。苦沙彌君抔の樣に來るたんびに寢て居る人を見ると羨ましいですよ。尤も胃弱に此暑さは答へるからね。丈夫な人でも今日なんかは首を肩の上に載せてるのが大儀でさあ、さればと云つて載つてる以上はもぎとる譯には行かずね」と迷亭君いつになく首の處置に窮して居る。「奥さんなんざ首の上へまだ載つけて置くものがあるんだから、坐つちや居られない筈だ。髷の重み丈でも横になり度くなりますよ」と云ふと、細君は今迄寢て居たのが髷の恰好から露見したと思つて「ホヽ、口の惡い」と云ひながら頭をいぢつて見る。

迷亭はそんな事には頓着なく「奥さん、昨日はね、屋根の上で玉子のフライをして見ましたよ」と妙な事を云ふ。「フライをどうなさつたんで御座います」「屋根の瓦が餘り見事に燒けて居ましたから、只置くのも勿體ないと思つてね。バタを溶かして玉子を落としたんでさあ」「あらまあ」「所が矢つ張り天日は思ふ樣に行きませんや。中々半熟にならないから、下へおりて新聞を讀んで居ると客が來たもんだからつい忘れて仕舞つて、今朝になつて急に思ひ出して、もう大丈夫だらうと上がつて見たらね」「どうなつ

て居りました」「半熟どころか、すつかり流れて仕舞ひました」「おや〳〵」と細君は八の字を寄せながら感嘆した。

「然し土用中あんなに涼しくつて、今頃から暑くなるのは不思議ですね」「ほんとで御座いますよ。先達て中は單衣では寒い位で御座いましたのに、一昨日から急に暑くなりましてね」「蟹なら横に這ふ所だが今年の氣候はあとびさりをするんですよ。倒行して逆施す、又可ならずやと云ふ様な事を言つてゐるかも知れない」「なんで御座んす、それは」「いえ何でもないのです、どうも此氣候の逆戻りをする所は丸でハーキュリスの牛ですよ」と圖に乘つて愈變ちきりんな事を言ふと、果せるかな細君は分らない。然し最前の倒行して逆施すで少々懲りて居るから、今度は只「へえー」と云つたのみで問ひ返さなかつた。之を問ひ返されないと迷亭は折角持ち出した甲斐がない。「奥さん、ハーキュリスの牛を御存じですか」「そんな牛は存じませんわ」「御存じないですか、一寸講釋をしませうか」と云ふと、細君も夫には及びませんとも言ひ兼ねたものだから「えゝ」と云つた。「昔ハーキュリスが牛を引つ張つて來たんです」「そのハーキュリスと云ふのは牛飼ででも御座んすか」「牛飼ぢやありませんよ。牛飼やいろはの亭主ぢやありません。其節は希臘にまだ牛肉屋が一軒もない時分の事ですからね」「あら希臘の御話なの？そんなら、さう仰しやればいゝのに」と細君は希臘と云ふ國名丈は心得て居る。「だつてハーキュリスぢやありませんか」「ハーキュリスなら希臘なんですか」「えゝハーキュリスは希臘の英雄でさあ」「だうりで、知らないと思ひました。それで其男がどうしたんで――」「其男がね、奥さん見た様に眠くなつてぐう〳〵寢て居る――」「あらいやだ」「寢て居る間に、ヴルカンの子が來ましてね」「ヴルカンて何です」「ヴル

カンは鍛冶屋ですよ。此の鍛冶屋のせがれが其牛を盗んだんでさあ。所がね、牛の尻尾を持つてぐい〳〵引いて行つたもんだからハーキュリスが眼を覺まして牛やーい牛やーいと尋ねてあるいても分らないんです。分らない筈でさあ。牛の足跡をつけたつて前の方へあるかして連れて行つたんぢやありませんもの、後へ後へと引きずつて行つたんですからね。鍛冶屋のせがれにしては大出來ですよ」と迷亭先生は既に天氣の話しは忘れて居る。

「時に御主人はどうしました。相變らず午睡ですかね。午睡も支那人の詩に出てくると風流だが、苦沙彌君の樣に日課としてやるのは少々俗氣がありますね。何の事あない、毎日少し宛死んで見る樣なものですぜ、奥さん御手數だが一寸起こして入らつしやい」と催促すると、細君は同感と見えて「えゝ、ほんとにあれでは困ります。第一あなた、からだが惡くなる計りですから。今御飯を頂いた計りだのに」と立ちかけると、迷亭先生は「奥さん、御飯と云やあ、僕はまだ御飯を頂かないんですがね」と平氣な顔をして聞きもせぬ事を吹聽する。「おやまあ、時分どきだのにちつとも氣が附きませんで――夫ぢや何も御座いませんが御茶漬でも」「いえ御茶漬なんか頂戴しなくつても好いですよ」「夫でも、あなた、どうせ御口に合ふ樣なものは御座いませんが」と細君少々厭味を竝べる。迷亭は悟つたもので「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免蒙るんです。今途中で御馳走を誂へて來ましたから、そいつを一つこゝで頂きますよ」と到底素人には出來さうもない事を述べる。細君はたつた一言「まあ？」と云つたが其まあの中には驚いたまあと、氣を惡くしたまあと、手數が省けて難有いと云ふまあが合併して居る。

所へ主人が、いつになく餘り八釜敷いので、寢つき掛かつた眠りをさかに扱かれた樣な心持ちでふらふ

らと書齋から出て來る。「相變らず八釜敷い男だ。折角好い心持ちに寢ようとした所を」と欠伸交りに佛頂面をする。「いや御目覺めかね。鳳眠を驚かし奉つて甚だ相濟まん。然したまには好からう。さあ坐り玉へ」とどつちが客だか分らぬ挨拶をする。主人は無言の儘座に着いて、寄木細工の卷煙草入から「朝日」を一本出してすぱ〳〵吸ひ始めたが、不圖向うの隅に轉がつて居る迷亭の帽子に眼をつけて「君帽子を買つたね」と云つた。迷亭はすぐさま「どうだい」と自慢らしく主人と細君の前に差し出す。「まあ綺麗だ事。大變目が細かくつて柔らかいんですね」と細君は頻りに撫で廻す。「奧さん、此帽子は重寶ですよ。どうでも言ふ事を聞きますからね」と拳骨をかためてパナマの横つ腹をぽかりと張り附けると、成程意の如く拳程な穴があいた。細君が「へえ」と驚く間もなく、此度は拳骨を裏側へ入れてうんと突つ張ると釜の頭がぽかりと尖がる。次には帽子を取つて鍔と鍔とを兩側から壓し潰して見せる。潰れた帽子は麺棒で延した蕎麥の樣に平たくなる。夫を片端から蓆でも卷く如くぐる〳〵疊む。「どうです此通り」と丸めた帽子を懷中へ入れて見せる。「不思議です事ねえ」と細君は歸天齋正一の手品でも見物して居る樣に感嘆すると、迷亭も其氣になつたものと見えて、右から懷中に收めた帽子をわざと左の袖口から引つ張り出して「どこにも傷はありません」と元の如くに直して、人さし指の先へ釜の底を載せてくる〳〵と廻す。もう休めるかと思つたら最後にぽんと後へ投げて其上へ堂つさりと尻餅を突いた。「君、大丈夫かい」と主人さへ懸念らしい顏をする。細君は無論の事心配さうに「折角見事な帽子を若し壞しでもしちやあ大變ですから、もう好い加減になすつたら宜う御座んせう」と注意をする。得意なのは持主丈で「所が壞れないから妙でせう」と、くちや〳〵になつたのを尻の下から取り出して其儘頭へ載せると、不思議な事には、

頭の恰好に忽ち回復する。「實に丈夫な帽子です事ねえ、どうしたんでせう」と細君が愈感心すると「なに、どうもしたんぢやありません。元から斯う云ふ帽子なんです」と迷亭は帽子を被つた儘細君に返事をして居る。

「あなたも、あんな帽子を御買ひになつたら、いゝでせう」と暫らくして細君は主人に勸めかけた。「だつて苦沙彌君は立派な麥藁の奴を持つてるぢやありませんか」「所があなた、先達て子供があれを踏み潰して仕舞ひまして」「おや／＼そりや惜しい事をしましたね」「だから今度はあなたの樣な丈夫で綺麗なのを買つたら善からうと思ひますんで」と細君はパナマの値段を知らないものだから「是になさいよ、ねえ、あなた」と頻りに主人に勸告して居る。

迷亭君は今度は右の袂の中から赤いケース入りの鋏を取り出して細君に見せる。「奥さん、帽子はその位にして此鋏を御覽なさい。是が又頗る重寶な奴で、是で十四通りに使へるんです」此鋏が出ないと主人は細君の爲にパナマ責めになる所であつたが、幸ひに細君が女として持つて生れた好奇心の爲に、此厄運を免れたのは迷亭の機轉と云はんより寧ろ僥倖の仕合せだと吾輩は看破した。「其鋏がどうして十四通りに使へます」と聞くや否や迷亭君は大得意な調子で「今一々説明しますから聞いて入らしやい。いゝですか。こゝに三日月形の缺け目がありませう。こゝへ葉卷を入れてぷつりと口を切るんです。夫から此根にちよと細工がありませう、これで針金をぽつ／＼やりますね。次には平たくして紙の上へ横に置くと定規の用をする。又刃の裏には度盛りがしてあるから物指の代用も出來る。こちらの表にはヤスリが附いて居る、是で爪を磨りまさあ。ようがすか。此先を螺旋鋲の頭へ刺し込んでぎり／＼廻すと金槌にも使へる。う

んと突き込んでこぢ開けると大抵の釘附けの箱なんざあ苦もなく蓋がとれる。まつた、こちらの刃の先は錐に出來て居る。こゝん所は書き損ひの字を削る場所で、ばら〳〵に離すと、ナイフとなる。一番仕舞ひに――さあ奥さん、此一番仕舞ひが大變面白いんです。こゝに蠅の眼玉位な大きさの球がありませう、ちよつと、覗いて御覧なさい」「いやですわ、又屹度馬鹿になさるんだから」「さう信用がなくつちや困つたね。だが欺されたと思つて、ちよいと覗いて御覧なさいな。え？厭ですか、一寸でいゝから」と鋏を細君に渡す。細君は覺束なげに鋏を取りあげて、例の蠅の眼玉の所へ自分の眼玉を附けて、頻りに覘ひをつけて居る。「どうです」「何だか眞黑ですわ」「眞黑ぢやいけませんね。も少し障子の方へ向いて、さう鋏を寢かさずに――さう〳〵夫なら見えるでせう」「おやまあ寫眞ですねえ。どうしてこんな小さな寫眞を張り附けたんでせう」「そこが面白い所でさあ」と細君と迷亭はしきりに問答をして居る。最前から默つて居た主人は此時急に寫眞が見たくなつたものと見えて「おい俺にも一寸覧せろ」と云ふと細君は鋏を顔へ押し附けた儘「實に綺麗です事、裸體の美人ですね」と云つて中々離さない。「おい一寸御見せと云ふのに」「まあ待つて入らつしやいよ。美しい髪ですね。腰迄ありますよ。少し仰向いて、恐ろしい脊の高い女だ事、然し美人ですね」「おい御見せと云つたら、大抵にして見せるがいゝ」と主人は大いに急き込んで細君に食つて掛かる。「へえ御待遠さま、たんと御覧遊ばせ」と細君が鋏を主人に渡す時に、勝手からお三が御客さまの御誂へが參りましたと、二個の笊蕎麥を座敷へ持つて來る。

「奥さん、是が僕の自辨の御馳走ですよ。一寸御免蒙つて、こゝでぱくつく事に致しますから」と丁寧に御辭儀をする。眞面目な樣な巫山戯た樣な動作だから、細君も應對に窮したと見えて、「さあどうぞ」と

輕く返事をしたぎり拜見して居る。主人は漸く寫眞から眼を放して「君、此の暑いのに蕎麥は毒だぜ」と云つた。「なあに大丈夫、好きなものは滅多に中たるもんぢやない」と蒸籠の蓋をとる。「打ち立ては難有いな。蕎麥の延びたのと、人間の間が拔けたのは由來賴母しくないもんだよ」と藥味をツユの中へ入れて無茶苦茶に掻き廻す。「君そんなに山葵を入れると辛いぜ」と主人は心配さうに注意した。「蕎麥はツユと山葵で食ふもんだあね。君は蕎麥が嫌ひなんだらう」「僕は饂飩が好きだ」「饂飩は馬子が食ふもんだ。蕎麥の味を解しない人程氣の毒な事はない」と云ひ乍ら杉箸をむざと突き込んで出來る丈多くの分量を二寸許りの高さにしやくひ上げた。「奥さん、蕎麥を食ふにも色々流義がありますがね。初心の者に限つて、無暗にツユを着けて、さうして口の内でくちや〳〵遣つて居ますね。あれぢや蕎麥の味はないですよ。何でも、かう、一しやくひに引つ掛けてね」と云ひつゝ箸を上げると、長い奴が勢揃ひをして一尺許り空中に釣るし上げられる。迷亭先生もう善からうと思つて下を見ると、未だ十二三本の尾が蒸籠の底を離れないで簀垂れの上に纏綿して居る。「こいつは長いな、どうです奥さん、此長さ加減は」と又奥さんに相の手を要求する。奥さんは「長いもので御座いますね」とさも感心したらしい返事をする。「此の長い奴へツユを三分一つけて、一口に飲んで仕舞ふんだね。嚙んぢやいけない。嚙んぢや蕎麥の味がなくなる。つる〳〵と咽喉を滑り込む所がねうちだよ」と思ひ切つて箸を高く上げると蕎麥は漸くの事で地を離れた。左手に受ける茶碗の中へ、箸を少し宛落として、尻尾の先から段々に浸すと、アーキミヂスの理論に因つて、蕎麥の浸つた分量丈ツユの嵩が增してくる。所が茶碗の中には元からツユが八分目這入つてるから、迷亭の箸にかゝつた蕎麥の四半分も浸らない先に茶碗はツユで一杯になつて仕舞つた。迷亭の箸は茶碗を

去る五寸の上に至つてぴたりと留まつたきり暫らく動かない。動かないのも無理はない。少しでも卸せばツユが溢れる計りである。迷亭も玆に至つて少し躊躇の體であつたが、忽ち脫兎の勢を以て、口を箸の方へ持つて行つたなと思ふ間もなく、つる〳〵ちゆうと音がして咽喉笛が一二度上下へ無理に動いたら箸の先の蕎麥は消えてなくなつて居つた。見ると迷亭君の兩眼から淚の樣なものが一二滴眼尻から頰へ流れ出した。山葵が利いたものか、飮み込むのに骨が折れたものか是は未だに判然しない。「感心だなあ。よくそんなに一どきに飮み込めたものだ」と主人が敬服すると「御見事です事ねえ」と細君も迷亭の手際を激賞した。迷亭は何も云はないで箸を置いて胸を二三度敲いたが「奧さん、笊は大抵三口半か四口で食ふんですね。夫より手數を掛けちや旨く食へませんよ」とハンケチで口を拭いて一寸一息入れて居る。

所へ寒月君が、どう云ふ了見か此の暑いのに御苦勞にも冬帽を被つて兩足を埃だらけにしてやつてくる。

「いや好男子の御入來だが、喰ひ掛けたものだから一寸失敬しますよ」と迷亭君は衆人環座の裏にあつて臆面もなく殘つた蒸籠を平げる。今度は先刻の樣に目覺ましい食方もしなかつた代りに、ハンケチを使つて、中途で息を入れると云ふ不體裁もなく、蒸籠二つを安々と遣つて除けたのは結構だつた。

「寒月君、博士論文はもう脫稿するのかね」と主人が聞くと迷亭も其後から「金田令孃が御待ちかねだから早々呈出し玉へ」と云ふ。寒月君は例の如く薄氣味の惡い笑ひを洩らして「罪ですから可成早く出して安心させてやりたいのですが、何しろ問題が問題で、餘程勞力の入る研究を要するのですから」と本氣の沙汰とも思はれない事を本氣の沙汰らしく云ふ。「さうさ、問題が問題だから、さう鼻の言ふ通りにもならないね。尤もあの鼻なら充分鼻息をうかゞふ丈の價値はあるがね」と迷亭も寒月流な挨拶をする。比

較的に眞面目なのは主人である。「君の論文の問題は何とか云つたつけな」「蛙の眼球の電動作用に對する紫外光線の影響と云ふのです」「そりや奇だね。流石は寒月先生だ、蛙の眼球は振つてるよ。どうだらう苦沙彌君、論文脱稿前に其問題丈でも金田家へ報知して置いては」主人は迷亭の云ふ事には取り合はないで「君、そんな事が骨の折れる研究かね」と寒月君に聞く。「えゝ、中々複雜な問題です、第一蛙の眼球のレンズの構造がそんな單簡なものでありませんからね。それで色々實驗もしなくちやなりませんが、先づ丸い硝子の球をこしらへて夫からやらうと思つて居ます」「硝子の球なんかガラス屋へ行けば譯ないぢやないか」「どうして――どうして」と寒月先生少々反身になる。「元來圓とか直線とか云ふのは幾何學的のもので、あの定義に合つた樣な理想的な圓や直線は現實世界にはないもんです」「ないもんなら、廢したらよからう」と迷亭が口を出す。「夫で先づ實驗上差し支へない位な球を作つて見ようと思ひましてね、先達てからやり始めたのです」「出來たかい」と主人が譯のない樣にきく。「出來るものですか」と寒月君が云つたが、是では少々矛盾だと氣が附いたと見えて「どうも六づかしいです。段々磨つて少しこつち側の半徑が長過ぎるからと思つて其方を心持ち落とすと、さあ大變今度は向う側が長くなる。そいつを骨を折つて漸く磨り潰したかと思ふと、全體の形がいびつになるんです。やつとの思ひで此いびつを取ると又直徑に狂ひが出來ます。始めは林檎程な大きさのものが段々小さくなつて苺程になります。それでも根氣よくやつて居ると大豆程になります。大豆程になつてもまだ完全な圓は出來ませんよ。私も隨分熱心に磨りましたが――此正月からガラス玉を大小六個磨り潰しましたよ」と噓だか本當だか見當のつかぬ所を喋々と述べる。「どこでそんなに磨つてるんだい」「矢つ張り學校の實驗室です、朝磨り始め

て實驗のとき一寸休んで夫から暗くなる迄磨るんですが、中々樂ぢやありません」「夫ぢや君が近頃忙しい忙しいと云つて毎日日曜でも學校へ行くのは其珠を磨りに行くんだね」「全く目下の所は朝から晩迄珠計り磨つて居ます」「球作りの博士となつて入り込みしは——と云ふ所だね。然し其熱心を聞かせたら、如何な鼻でも少しは難有がるだらう。實は先日僕がある用事があつて圖書館へ行つて歸りに門を出ようとしたら偶然老梅君に出逢つたのさ。あの男が卒業後圖書館に足が向くとは餘程不思議な事だと思つて感心に勉強するねと云つたら先生妙な顏をして、なに本を讀みに來たんぢやない、今門前を通り掛かつたら一寸小用がしたくなつたから拜借に立ち寄つたんだと云つたんで大笑ひをしたが、老梅君と君とは反對の好例として新撰蒙求に是非入れたいよ」と迷亭君例の如く長たらしい註釋をつける。主人は少し眞面目になつて「君さう毎日々々球計り磨つてるのもよからうが、元來いつ頃出來上がる積りかね」と聞く。「まあ此容子ぢや十年位かゝりさうです」と寒月君は主人より呑氣に見受けられる。「十年ぢや——もう少し早く磨り上げたらよからう」「十年ぢや早い方です、事に因ると二十年位かゝります」「そいつは大變だ、それぢや容易に博士にやなれないぢやないか」「えゝ一日も早くなつて安心さして遣りたいのですが兎に角球を磨り上げなくつちや肝心の實驗が出來ませんから……」

寒月君はちよつと句を切つて「何、そんなに御心配には及びませんよ。金田でも私の球計り磨つてる事はよく承知してゐます。實は二三日前行つた時にもよく事情を話して來ました」としたり顏に述べ立てる。すると今迄三人の談話を分らぬ乍ら傾聽して居た細君が「それでも金田さんは家族中殘らず、先月から大礒へ行つて入らつしやるぢやありませんか」と不審さうに尋ねる。寒月君も是には少し辟易の體であつた

が「そりや妙ですな、どうしたんだらう」ととぼけて居る。かう云ふ時に重寳なのは迷亭君で、話しの途切れた時、極りの悪い時、眠くなつた時、困つた時、どんな時でも必ず横合から飛び出してくる。「先月大磯へ行つたものに兩三日前東京で逢ふ抔は神秘的でいゝ。所謂靈の交換だね。相思の情の切な時にはよくさう云ふ現象が起るものだ。一寸聞くと夢の樣だが、夢にしても現實より慥かな夢だ。奧さんの樣に別に思ひも思はれもしない苦沙彌君の所へ片附いて生涯戀の何物たるを御解しにならん方には、御不審も尤もだが……」「あら何を證據にそんな事を仰しやるの。隨分輕蔑なさるのね」と細君は中途から不意に迷亭に切り附ける。「君だつて戀煩ひなんかした事はなさゝうぢやないか」と主人も正面から細君に助太刀をする。「そりや僕の艶聞などは、いくら有つてもみんな七十五日以上經過して居るから、君方の記憶には殘つて居ないかも知れないが――實は是でも失戀の結果、此歳になる迄獨身で暮らして居るんだよ」と一順列座の顏を公平に見廻す。「ホ、、、面白い事」と云つたのは細君で、「馬鹿にして居らあ」と庭の方を向いたのは主人である。只寒月君丈は「どうか其懷舊談を後學の爲に伺ひたいもので」と相變らずにやにやする。

「僕のも大分神秘的で、故小泉八雲先生に話したら非常に受けるのだが、惜しい事に先生は永眠されたから、實の所話す張合もないんだが、折角だから打ち開けるよ。其代り仕舞ひ迄謹聽しなくつちやいけないよ」と念を押して愈本文に取り掛かる。「回顧すると今を去る事――えゝと――何年前だつたかな――面倒だから略十五六年前として置かう」「冗談ぢやない」と主人は鼻からフンと息をした。「大變物覺えが御惡いのね」と細君がひやかした。寒月君丈は約束を守つて一言も云はずに、早くあとが聽きたいと

云ふ風をする。「何でもある年の冬の事だが、僕が越後の國は蒲原郡筍谷を通つて、蛸壺峠へかゝつて、是から愈會津領へ出ようとする所だ」「妙な所だな」と主人が又邪魔をする。「だまつて聽いて入らつしやいよ。面白いから」と細君が制する。「所が日は暮れる、路は分らず、腹は減る、仕方がないから峠の眞中にある一軒屋を敲いて、これ〳〵斯樣々々しか〴〵の次第だから、どうか留めて呉れと云ふと、御安い御用です。さあ御上がんなさいと裸蠟燭を僕の顏に差しつけた娘の顏を見て僕はぶる〳〵と慄へたがね。僕は其時から戀と云ふ曲者の魔力を切實に自覺したね」「おやいやだ。そんな山の中にも美しい人があるんでせうか」「山だつて海だつて、奧さん、其娘を一目あなたに見せたいと思ふ位ですよ、文金の高島田に髮を結ひましてね」「へえー」と細君はあつけに取られて居る。「這入つて見ると八疊の眞中に大きな圍爐裏が切つてあつて、其周りに娘と娘の爺さんと婆さんと僕と四人坐つたんですがね。嘸御腹が御減りでせうと云ひますから、何でも善いから早く食はせ給へと請求したんです。すると爺さんが折角の御客さまだから蛇飯でも炊いて上げようと云ふんです。さあ是からが愈失戀に取り掛かる所だから確かりして聽き玉へ」「先生確かりして聽く事は聽きますが、なんぼ越後の國だつて冬、蛇が居やしますまい」「うん、そりや一應尤もな質問だよ。然しこんな詩的な話しになるとさう理窟にばかり拘泥しては居られないからね。鏡花の小說にや雪の中から蟹が出てくるぢやないか」と云つたら、寒月君は「成程」と云つたきり又謹聽の態度に復した。

「其時分の僕は隨分惡もの食ひの隊長で、蝗、なめくじ、赤蛙抔は食ひ厭きて居た位な所だから、蛇飯は乙だ。早速御馳走にならうと爺さんに返事をした。そこで爺さんは圍爐裏の上へ鍋をかけて、其中へ米を

入れてぐつ〳〵煮出したものだね。不思議な事には其鍋の蓋を見ると大小十個ばかりの穴があいて居る。其穴から湯氣がぷう〳〵吹くから、旨い工夫をしたものだ、田舎にしては感心と見て居ると、爺さんふと立つて、どこかへ出て行つたが暫らくすると大きな笊を小脇に掻い込んで歸つて來た。何氣なく之を圍爐裏の傍へ置いたから、其中を覗いて見ると――居たね。長い奴が、寒いもんだから御互にとぐろの捲きくらをやつて塊まつて居ましたね」「もうそんな御話しは廢しになさいよ。厭らしい」と細君は眉に八の字を寄せる。「どうして、これが失戀の大原因になるんだから中々廢せませんや。爺さんはやがて左手に鍋の蓋をとつて、右手に例の塊まつた長い奴を無雜作につかまへて、いきなり鍋の中へ放り込んで、すぐ上から蓋をしたが、流石の僕も其時計りははつと息の穴が塞がつたかと思つたよ」「もう御やめになさいよ。氣味の惡い」と細君頻りに怖がつて居る。「もう少しで失戀になるから暫らく辛防して入らつしやい。すると一分立つか立たないうちに蓋の穴から鎌首がひよいと一つ出ましたのには驚きましたよ。やあ出たなと思ふと、隣の穴からも亦ひよいと顔を出した。又出たよと云ふうち、あちらからも出る。こちらからも出る。とう〳〵鍋中蛇の面だらけになつて仕舞つた」「なんで、そんなに首を出すんだい」「鍋の中が熱いから、苦しまぎれに這ひ出さうとするのさ。やがて爺さんは、もうよからう、引つ張らつしとか何とか云ふと、婆さんははあーと答へる、娘はあいと挨拶をして、名々に蛇の頭を持つてぐいと引く。肉は鍋の中に殘るが、骨丈は綺麗に離れて、頭を引くと共に長いのが面白い樣に拔け出してくる」「蛇の骨拔きですね」と寒月君が笑ひながら聞くと「全くの事骨拔だ、器用な事をやるぢやないか。夫から蓋を取つて、杓子で以て飯と肉を矢鱈に掻き交ぜて、さあ召し上がれと來た」「食つたのかい」と主人が冷淡に尋ねる

と、細君は苦い顔をして「もう廢しになさいよ、胸が惡くつて御飯も何もたべられやしない」と愚痴をこぼす。「奥さんは蛇飯を召し上がらんから、そんな事を仰しやるが、まあ一遍たべて御覧なさい。あの味計りは生涯忘れられませんぜ」「おゝ、いやだ、誰が食べるもんですか」「そこで充分御饌も頂戴し、寒さも忘れるし、娘の顔も遠慮なく見るし、もう思ひ置く事はないと考へて居ると、御休みなさいましと云ふので、旅の勞れもある事だから、仰せに從つて、ごろりと横になると、濟まん譯だが前後を忘却して寐て仕舞つた」「夫からどうなさいました」と今度は細君の方から催促する。「夫から明朝になつて眼を覺ましてからが失戀でさあ」「どうかなさつたんですか」「いえ別にどうもしやしませんがね。朝起きて巻煙草をふかし乍ら裏の窓から見て居ると、向うの筧の傍で、藥罐頭が顔を洗つて居るんでさあ」「爺さんか婆さんか」と主人が聞く。「夫がさ、僕にも識別しにくかつたから、暫らく拜見して居て、其藥罐がこちらを向く段になつて驚いたね。それが僕の初戀をした昨夜の娘なんだもの」「だつて娘は島田に結つて居るとさつき云つたぢやないか」「前夜は島田さ、然も見事な島田さ。所が翌朝は丸藥罐さ」「人を馬鹿にして居らあ」と主人は例に因つて天井の方へ視線をそらす。「僕も不思議の極内心少々怖くなつたから、猶餘所ながら容子を窺つて居ると、藥罐は漸く顔を洗ひ了つて、傍への石の上に置いてあつた高島田の鬘を無雜作に被つて、澄ましてうちへ這入つたんで成程と思つた。成程とは思つた樣なものゝ其時から、とうとう失戀の果敢なき運命をかこつ身となつて仕舞つた」「くだらない失戀もあつたもんだ。ねえ、寒月君、それだから、失戀でも、こんなに陽氣で元氣がいゝんだよ」と主人が寒月君に向つて迷亭君の失戀を評すると、寒月君は「然し其娘が丸藥罐でなくつて目出度東京へでも連れて御歸りになつたら、先生は猶

元氣かも知れませんよ。とに角折角の娘が禿であつたのは千秋の恨事ですねえ。夫にしても、そんな若い女がどうして、毛が脱けて仕舞つたんでせう」「僕も夫に就いては段々考へたんだが全く蛇飯を食ひ過ぎたせゐに相違ないと思ふ。蛇飯てえ奴はのぼせるからね」「然しあなたは、どこも何ともなくて結構で御座いましたね」「僕は禿にはならずに濟んだが、其代りに此通り其時から近眼になりました」と金縁の眼鏡をとつてハンケチで丁寧に拭いて居る。暫らくして主人は思ひ出した樣に「全體どこが神祕的なんだい」と念の爲に聞いて見る。「あの鬘はどこで買つたのか、拾つたのかどう考へても未だに分らないからそこが神祕さ」と迷亭君は又眼鏡を元の如く鼻の上へかける。「丸で噺家の話しを聞く樣で御座んすね」とは細君の批評であつた。

迷亭の駄辯も是で一段落を告げたから、もうやめるかと思ひの外、先生は猿轡でも嵌められないうちは到底默つて居る事が出來ぬ性と見えて、又次の樣な事をしやべり出した。

「僕の失戀も苦い經驗だが、あの時あの藥罐を知らずに貰つたが最期生涯の目障りになるんだから、よく考へないと險呑だよ。結婚なんかは、いざと云ふ間際になつて飛んだ所に傷口が隱れて居るのを見出だす事がある者だから。寒月君抔もそんなに憧憬したり惝怳したり獨りで六づかしがらないで、篤と氣を落ち附けて球を磨るがいゝよ」といやに異見めいた事を述べると、寒月君は「えゝ可成球計り磨つて居たいんですが、向うでさうさせないんだから弱り切ります」とわざと辟易した樣な顏附をする。「さうさ、君などは先方が騷ぎ立てるんだが、中には滑稽なのがあるよ。あの圖書館へ小便をしに來た老梅君抔になると頗る奇だからね」「どんな事をしたんだい」と主人が調子づいて承はる。「なあに、かう云ふ譯さ。先

生其昔靜岡の東西館へ泊まつた事があるのさ。――たつた一晩だぜ――夫で其晩すぐにそこの下女に結婚を申し込んだのさ。僕も隨分呑氣だが、まだあれ程には進化しない。尤も其時分には、あの宿屋にお夏さんと云ふ有名な別嬪が居て老梅君の座敷へ出たのが丁度其お夏さんなのだから無理はないがね」「無理がない所か、君の何とか峠と丸で同じぢやないか」「少し似て居るね、實を云ふと僕と老梅とはそんなに差異はないからな。とにかくそのお夏さんに結婚を申し込んで、まだ返事を聞かないうちに水瓜が食ひ度くなつたんだがね」「何だつて？」と主人が不思議な顔をする。主人計りではない、細君も寒月も申し合はせた樣に首をひねつて一寸考へて見る。迷亭は構はずどん〳〵話しを進行させる。「お夏さんを呼んで靜岡に水瓜はあるまいかと聞くと、お夏さんが、なんぼ靜岡だつて水瓜位はありますよと、御盆に水瓜を山盛りにして持つてくる。そこで老梅君食つたさうだ。山盛りの水瓜を悉く平げて、お夏さんの返事を待つて居ると、返事の來ないうちに腹が痛み出してね、うーんうーんと唸つたが少しも利目がないから又お夏さんを呼んで今度は靜岡に醫者はあるまいかと聞いたら、お夏さんが又、なんぼ靜岡だつて醫者位はありますよと云つて、天地玄黃とかいふ千字文を盜んだ樣な名前のドクトルを連れて來た。翌朝になつて腹の痛みも御蔭でとれて難有いと、出立する十五分前にお夏さんを呼んで、昨日申し込んだ結婚事件の諾否を尋ねると、お夏さんは笑ひながら靜岡には水瓜もあります、御醫者もありますが一夜作りの御嫁はありませんよと出て行つたきり顏を見せなかつたさうだ。夫から老梅君も僕同樣失戀になつて、圖書館へは小便をする外來なくなつたんだつて、考へると女は罪な者だよ」と云ふと主人がいつになく引き受けて「本當にさうだ。先達てミユッセの脚本を讀んだら、其うちの人物が羅馬の詩人を引用してこんな事を云つて居

た。――灰より輕い者は塵である。塵より輕いものは風である。風より輕い者は女である。女より輕いものは無である。――よく穿つてるだらう。女なんか仕方がない」と妙な所で力んで見せる。之を承はつた細君は承知しない。「女の輕いのがいけないと仰しやるけれども、男の重いんだつて好い事はないでせう」「重いた、どんな事だ」「重いと云ふな重い事ですわ、あなたの樣なのです」「俺がなんで重い」「重いぢやありませんか」と妙な議論が始まる。迷亭は面白さうに聞いて居たが、やがて口を開いて「さう赤くなつて互に辯難攻撃をする所が夫婦の眞相と云ふものかな。どうも昔の夫婦なんてものは丸で無意味なものだつたに違ひない」とひやかすのだか賞めるのだか曖昧な事を言つたが、それでやめて置いても好い事を又例の調子で布衍して、下の如く述べられた。

「昔は亭主に口返答なんかした女は、一人もなかつたんだつて云ふが、夫なら啞を女房にして居ると同じ事で僕などは一向難有くない。矢つ張り奥さんの樣にあなたは重いぢやありませんかとか何とか云はれて見たいね。同じ女房を持つ位なら、たまには喧嘩の一つ二つしなくつちや退屈で仕樣がないからな。僕の母抔と來たら、おやぢの前へ出てはいとへいで持ち切つて居たものだ。さうして二十年も一所になつて居るうちに寺參りより外に外へ出た事がないと云ふんだから情ないぢやないか。尤も御蔭で先祖代々の戒名は悉く暗記して居る。男女間の交際だつてさうさ。僕の子供の時分抔は寒月君の樣に意中の人と合奏をしたり、靈の交換をやつて朦朧體で出合つて見たりする事は到底出來なかつた」「御氣の毒樣で」と寒月君が頭を下げる。「實に御氣の毒さ。而も其時分の女が必ずしも今の女より品行がいゝと限らんからね。奥さん、近頃は女學生が墮落したの何だのと八釜敷く云ひますがね。なに昔はこれより烈しかつたんですよ」

「さうでせうか」と細君は眞面目である。「さうですとも、出鱈目ぢやないちやんと證據があるから仕方がありませんや。苦沙彌君、君も覺えて居るかも知れんが僕等の五六歳の時迄は女の子を唐茄子の樣に籠へ入れて天秤棒で擔いで賣つてあるいたもんだ、ねえ君」「僕はそんな事は覺えて居らん」「君の國ぢやどうだか知らないが、靜岡ぢや慥かにさうだつた」「まさか」と細君が小さい聲を出すと、「本當ですか」と寒月君が本當らしからぬ樣子で聞く。

「本當さ。現に僕のおやぢが價を附けた事がある。其時僕は何でも六つ位だつたらう。おやぢと一所に油町から通町へ散歩に出ると、向うから大きな聲をして女の子はよしかな。女の子はよしかなと怒鳴つてくる。僕等が丁度二丁目の角へ來ると、伊勢源と云ふ呉服屋の前で其男に出つ食はした。伊勢源と云ふのは間口が十間で藏が五戸前あつて靜岡第一の呉服屋だ。今度行つたら見て來給へ。今でも歴然と殘つて居る。立派なうちだ。其番頭が甚兵衛と云つてね、いつでも御袋が三日前に亡くなりましたと云ふ樣な顏をして帳場の所へ控へて居る。甚兵衛君の隣には初さんといふ二十四五の若い衆が坐つて居るが、此初さんが又雲照律師に歸依して三七二十一日の間蕎麥湯丈で通したと云ふ樣な青い顏をして居る。初さんの隣が長どんで、是は昨日火事で焚け出されたかの如く愁然と算盤に身を凭して居る。長どんと併んで……」「君は呉服屋の話をするのか、人賣りの話をするのか」「さう〱人賣りの話をやつて居たんだつけ。實は此伊勢源に就いても頗る奇譚があるんだが、それは割愛して今日は人賣り丈にして置かう」「人賣りも序にやめるがいゝ」「どうして、是が二十世紀の今日と明治初年頃の女子の品性の比較に就いて大なる參考になる材料だから、そんなに容易くやめられるものか――夫で僕がおやぢと伊勢源の前迄くると、例の

人賣りがおやぢを見て旦那女の子の仕舞物はどうです、安く負けて置くから買つて御呉んなさいなと云ひながら天秤棒を卸して汗を拭いて居るのさ。見ると籠の中には前に一人後に一人、兩方とも二歳許りの女の子が入れてある。おやぢは此男に向つて安ければ買つてもいゝが、もう是ぎりかいと聞くと、へえ生憎今日はみんな賣り盡してたつた二つになつちまひました。どつちでも好いから取つとくんなさいなと女の子を兩手で持つて唐茄子か何ぞの樣におやぢの鼻の先へ出すと、おやぢはぽん／＼と頭を叩いて見て、ははあ可なりな音だと云つた。夫から愈談判が始まつて、散々價切つた末おやぢが、買つても好いが品は慥かだらうなと聞くと、えゝ前の奴は始終見て居るから間違ひはありませんがね、後に擔いでる方は、何しろ眼がないんですから、ことによるとひゞが入つてるかも知れません。こいつの方なら受け合へない代りに價段を引いて置きますと云つた。僕は此問答を未だに記憶して居るんだが、其時子供心に女と云ふものは成程油斷のならないものだと思つたよ。――然し明治三十八年の今日こんな馬鹿な眞似をして女の子を賣つてあるくものもなし、眼を放して後へ擔いだ方は險呑だ抔と云ふ事も聞かない樣だ。だから僕の考へでは矢張り泰西文明の御蔭で女の品行も餘程進歩したものだらうと斷定するのだが、どうだらう寒月君」

寒月君は返事をする前に先づ鷹揚な咳拂ひを一つして見せたが、夫からわざと落ち附いた低い聲で、こんな觀察を述べられた。「此頃の女は學校の行き歸りや、合奏會や、慈善會や、園遊會で、ちよいと買つて頂戴な、あらおいや？抔と自分で自分を賣りにあるいて居ますから、そんな八百屋の御餘りを雇つて、女の子はよしか、なんて下品な依託販賣をやる必要はないですよ。人間に獨立心が發達してくると自然こんな風になるものです。老人なんぞは入らぬ取越苦勞をして何とか蚊とか云ひますが、實際を云ふと是が

文明の趨勢ですから、私抔は大いに喜ばしい現象だと、ひそかに慶賀の意を表して居るのです。買ふ方だつて頭を敲いて品物は確かかなんて聞く様な野暮は一人も居ないですから、其邊は安心なものでさあ。又此の複雑な世の中に、そんな手數をする日にや際限がありませんからね。五十になつたつて六十になつたつて、亭主を持つ事も嫁に行く事も出來やしません」寒月君は二十世紀の青年丈あつて、大いに當世流の考へを開陳して置いて、敷島の烟をふうーと迷亭先生の顔の方へ吹き附けた。迷亭は敷島の烟位で辟易する男ではない。「仰せの通り方今の女生徒、令孃抔は自尊自信の念から骨も肉も皮まで出來て居て、何でも男子に負けない所が敬服の至りだ。僕の近所の女學校の生徒抔と來たらえらいものだぜ。筒袖を穿いて鐵棒へぶら下がるから感心だ。僕は二階の窓から彼等の體操を目撃するたんびに古代希臘の婦人を追懐するよ」「又希臘か」と主人が冷笑する樣に云ひ放つと「どうも美な感じのするものは大抵希臘から源を發して居るから仕方がない。美學者と希臘とは到底離れられないやね。――ことにあの色の黒い女學生が一心不亂に體操をして居る所を拜見すると、僕はいつでもAgnodiceの逸話を思ひ出すのさ」と物知り顔にしやべり立てる。「又六づかしい名前が出て來ましたね」と寒月君は依然としてにや〳〵する。「Agnodiceはえらい女だよ、僕は實に感心したね。當時亞典の法律で女が産婆を營業する事を禁じてあつた。不便な事さ。Agnodiceだつて其不便を感ずるだらうぢやないか」「何だい、その――何とか云ふのは」「女さ、女の名前だよ。此女がつら〳〵考へるには、どうも女が産婆になれないのは情ない、不便極まる。どうかして産婆になりたいもんだ、産婆になる工夫はあるまいかと三日三晩手を拱いて考へ込んだね。丁度三日目の曉方に隣の家で赤ん坊がおぎやあと泣いた聲を聞いて、うんさうだと豁然大悟して、夫から早速長い

髪を切つて男の着物をきてHierophilusの講義をきゝに行つた。首尾よく講義をきゝ終せて、もう大丈夫と云ふ所で以て、愈産婆を開業した。所が奥さん流行りましたね。あちらでもおぎやあと生れる、こちらでもおぎやあと生れる。夫がみんなAgnodiceの世話なんだから大變儲かつた。所が人間萬事塞翁の馬、七轉び八起き、弱り目に祟り目で、つい此秘密が露見に及んで遂に御上の御法度を破つたと云ふ所で、重き御仕置に仰せつけられさうになりました」「丸で講釋見た樣です事」「中々旨いでせう。所が亞典の女連が一同連署して嘆願に及んだから、時の御奉行もさう木で鼻を括つた樣な挨拶も出來ず。遂に當人は無罪放免、是からはたとひ女たりとも産婆營業勝手たるべき事と云ふ御布令さへ出て目出度落着を告げました」「よく色々な事を知つて入らつしやるのね、感心ねえ」「えゝ大概の事は知つて居ますよ。知らないのは自分の馬鹿な事位なものです。しかしそれも薄々は知つてます」「ホヽヽヽ面白い事計り……」と細君相好を崩して笑つて居ると、格子戸のベルが相變らず着けた時と同じ樣な音を出して鳴る。「おや又御客樣だ」と細君は茶の間へ引き下がる。細君と入れ違ひに座敷へ這入つて來たものは誰かと思つたら御存じの越智東風君であつた。

茲へ東風君さへくれば、主人の家へ出入りする變人は悉く網羅し盡したと迄行かずとも、少くとも吾輩の無聊を慰むるに足る程の頭數は御揃ひになつたと云はねばならぬ。此で不足を云つては勿體ない。運惡くほかの家へ飼はれたが最後、生涯人間中にかゝる先生方が一人でもあらうとさへ氣が附かずに死んで仕舞ふかも知れない。幸ひにして苦沙彌先生門下の猫兒となつて朝夕虎皮の前に侍るので先生は無論の事、迷亭、寒月乃至東風抔と云ふ廣い東京にさへ餘り例のない一騎當千の豪傑連の擧止動作を寝ながら拜見す

るものは吾輩にとつて千載一遇の光榮である。御蔭樣で此の暑いのに毛袋でつゝまれて居ると云ふ難儀も忘れて、面白く半日を消光する事が出來るのは感謝の至りである。どうせ是丈集まれば只事では濟まない。何か持ち上がるだらうと襖の陰から謹んで拜見する。

「どうも御無沙汰を致しました。暫らく」とお辭儀をする東風君の頭を見ると、先日の如く矢張り綺麗に光つて居る。頭丈で評すると何か緞帳役者の樣にも見えるが、白い小倉の袴のゴワ／＼するのを御苦勞にも鹿爪らしく穿いて居る所は榊原健吉の內弟子としか思へない。從つて東風君の身體で普通の人間らしい所は肩から腰迄の間丈である。「いや暑いのに、よく御出掛けだね。さあずつと、こつちへ通り玉へ」と迷亭先生は自分の家らしい挨拶をする。「先生には大分久しく御目にかゝりません」「さうさ、慥か此春の朗讀會ぎりだつたね。朗讀會と云へば近頃は矢張り御盛かね。其後お宮にやなりませんか。あれは旨かつたよ。僕は大いに拍手したぜ、君氣が附いてたかい」「えゝ御蔭で大きに勇氣が出まして、とう／＼仕舞ひ迄漕ぎつけました」「今度はいつ御催しがありますか」と主人が口を出す。「七八兩月は休んで九月には何か賑やかにやりたいと思つて居ります。何か面白い趣向は御座いますまいか」「左樣」と主人が氣のない返事をする。「東風君、僕の創作を一つやらないか」と今度は寒月君が相手になる。「君の創作なら面白いものだらうが、一體何かね」「脚本さ」と寒月君が成る可く押しを強く出ると、案の如く三人は一寸毒氣をぬかれて、申し合せた樣に本人の顏を見る。「脚本はえらい。喜劇かい悲劇かい」と東風君が歩を進めると、寒月先生猶澄まし返つて「なに喜劇でも悲劇でもないさ。近頃は舊劇とか新劇とか大分やかましいから、僕も一つ新機軸を出して俳劇と云ふのを作つて見たのさ」「俳劇たどんなものだい」

「俳句趣味の劇と云ふのを詰めて俳劇の二字にしたのさ」と云ふと主人も迷亭も多少烟に捲かれて控へて居る。「それで其趣向と云ふのは？」と聞き出したのは矢張り東風君である。「根が俳句趣味からくるのだから、餘り長たらしくつて、毒惡なのはよくないと思つて一幕物にして置いた」「成程」「先づ道具立てから話すが、是も極簡單なのがいゝ。舞臺の眞中へ大きな柳を一本植ゑ附けてね。夫から其柳の幹から一本の枝を右の方へヌッと出させて、其枝へ烏を一羽とまらせる」「烏がぢつとして居ればいゝが」と主人が獨り言の樣に心配した。「何わけはありません、烏の足を絲で枝へ縛り附けて置くんです。で其下へ行水盥を出しましてね。美人が横向きになつて手拭を使つて居るんです」「そいつは少しデカダンだね。第一誰が其女になるんだい」と迷亭が聞く。「何是もすぐ出來ます。美術學校のモデルを雇つてくるんです」「そりや警視廳が八釜敷く云ひさうだな」と主人は又心配して居る。「だつて興行さへしなければ構はんぢやありませんか、そんな事を兎や角云つた日にや學校で裸體畫の寫生なんざ出來つこありません」「然しあれは稽古の爲だから、只見て居るのとは少し違ふよ」「先生方がそんな事を云つた日には日本もまだ駄目です。繪畫だつて、演劇だつて、おんなじ藝術です」と寒月君大いに氣燄を吹く。「まあ議論はいゝが、夫からどうするのだい」と東風君、ことに依ると遣る了見と見えて筋を聞きたがる。「所へ花道から俳人高濱虚子がステッキを持つて、白い燈心入りの帽子を被つて、透綾の羽織に、薩摩飛白の尻端折りの半靴と云ふこしらへで出てくる。着附けは陸軍の御用達見た樣だけれども俳人だから可成悠々として腹の中では句案に餘念のない體であるかなくつちやいけない。夫で虚子が花道を行き切つて愈本舞臺に懸かつた時、不圖句案の眼をあげて前面を見ると、大きな柳があつて、柳の影で白い女が湯を浴びて居る、

はつと思つて上を見ると長い柳の枝に烏が一羽とまつて女の行水を見下ろして居る。そこで虚子先生大いに俳味に感動したと云ふ思ひ入れが五十秒ばかりあつて、行水の女に惚れる烏かなと大きな聲で一句朗吟するのを合圖に、拍子木を入れて幕を引く。――どうだらう、かう云ふ趣向は。御氣に入りませんかね。君、お宮になるより虚子になる方が餘程いゝぜ」東風君は何だか物足らぬと云ふ顔附で「あんまり、あつけない樣だ。もう少し人情を加味した事件が欲しい樣だ」と眞面目に答へる。今迄比較的大人しくして居た迷亭はさう何時迄だまつて居る樣な男ではない。「たつたそれ丈で俳劇はすさまじいね。上田敏君の説によると俳味とか滑稽とか云ふものは消極的で亡國の音ださうだが、敏君丈あつてうまい事を云つたよ。そんな詰まらない物をやつて見給へ、夫こそ上田君から笑はれる計りだ。第一劇だか茶番だか何だかあまり消極的で分らないぢやないか。失禮だが寒月君は矢張り實驗室で球を磨いてる方がいゝ。俳劇なんぞ百作つたつて二百作つたつて亡國の音ぢや駄目だ」寒月君は少々憤として「そんなに消極的でせうか。私は中々積極的な積りなんですが」どつちでも構はん事を辯解しかける。「虚子がですね。虚子先生が女に惚れる烏かなと烏を捕へて女に惚れさした所が大いに積極的だらうと思ひます」「こりや新説だね。是非御講釋を伺ひませう」「理學士として考へて見ると烏が女に惚れるなどと云ふのは不合理でせう」「御尤も」「其の不合理な事を無雜作に言ひ放つて少しも無理に聞こえません」「さうかしら」と主人が疑つた調子で割り込んだが、寒月は一向頓着しない。「何故無理に聞こえないかと云ふと、是は心理的に説明するとよく分ります。實を云ふと惚れるとか惚れないとか云ふのは俳人其人に存する感情で烏とは沒交渉の沙汰であります。然る所あの烏は惚れてるなと感じるのはつまり烏がどうのかうのと云ふ譯ぢやない、畢竟自

分が惚れて居るんでさあ。虚子自身が美しい女の行水をして居る所を見てはつと思ふ途端にずつと惚れ込んだに相違ないです。さあ自分が惚れた眼で烏が枝の上で動きもしないで下を見つめて居るのを見たものだから、はゝあ、あいつも俺と同じく參つてるなと癇違ひをしたのです。癇違ひには相違ないですがそこが文學的で且積極的な所なんです。自分丈感じた事を、斷りもなく烏の上に擴張して知らん顏をして澄まして居る所なんぞは餘程積極主義ぢやありませんか。どうです先生」「なる程御名論だね、虚子に聞かしたら驚くに違ひない。說明丈は積極だが、實際あの劇をやられた日には、見物人は慥かに消極になるよ。ねえ東風君」「へえどうも消極過ぎる樣に思ひます」と眞面目な顏をして答へた。

主人は少々談話の局面を展開して見たくなつたと見えて、「どうです、東風さん、近頃は傑作もありませんか」と聞くと、東風君は「いえ、別段是と云つて御目にかける程のものも出來ませんが、近日詩集を出して見ようと思ひまして――稿本を幸ひ持つて參りましたから御批評を願ひませう」と懷から紫の袱紗包を出して、其中から五六十枚程の原稿紙の帳面を取り出して、主人の前に置く。主人は尤もらしい顏をして拜見と云つて見ると、第一頁に

世の人に似ずあえかに見え給ふ
富子孃に捧ぐ

と二行にかいてある。主人は一寸神祕的な顏をして暫らく一頁を無言の儘眺めて居るので、迷亭は横合から「何だい新體詩かね」と云ひながら覗き込んで「やあ、捧げたね。東風君、思ひ切つて富子孃に捧げたのはえらい」としきりに賞める。主人は猶不思議さうに「東風さん、此富子と云ふのは、本當に存在して

居る婦人なのですか」と聞く。「へえ、此前迷亭先生と御一所に朗讀會へ招待した婦人の一人です。つい此御近所に住んで居ります。實は只今詩集を見せようと思つて一寸寄つて參りましたが、生憎先月から大磯へ避暑に行つて留守でした」と眞面目くさつて述べる。「苦沙彌君、是が二十世紀なんだよ。そんな顏をしないで、早く傑作でも朗讀するさ。然し東風君此捧げ方は少しまづかつたね。此あえかにと云ふ雅言は全體何と云ふ意味だと思つてるかね」「蚊弱いとかたよわくと云ふ字だと思ひます」「成程さうも取れん事はないが本來の字義を云ふと危氣にと云ふ事だぜ。だから僕ならかうは書かないね」「どう書いたらもつと詩的になりませう」「僕ならかうさ。世の人に似ずあえかに見え給ふ富子孃の鼻の下に捧ぐとするね、僅かに三字のゆきさつだが鼻の下があるのとないのとでは大變感じに相違があるよ」「成程」と東風君は解しかねた所を無理に納得した體にもてなす。

主人は無言の儘漸く一頁をはぐつて、愈卷頭第一章を讀み出す。

倦んじて薫ずる香裏に君の
靈か相思の烟のたなびき
おゝ我、あゝ我、辛き此世に
あまく得てしか熱き口づけ

「これは少々僕には解しかねる」と主人は歎息しながら迷亭に渡す。「是は少々振ひ過ぎてる」と迷亭は寒月に渡す。寒月は「なある程」と云つて東風君に返す。

「先生御分りにならんのは御尤もで、十年前の詩界と今日の詩界とは見違へる程發達して居りますから、

此頃の詩は寐轉んで讀んだり、停車場で讀んでは到底分り樣がないので、作つた本人ですら質問を受けると返答に窮する事がよくあります。全くインスピレーションで書くので詩人は其他には何等の責任もないのです。註釋や訓義は學究のやる事で私共の方では頓と構ひません。先達ても私の友人で送籍と云ふ男が『一夜』といふ短篇をかきましたが、誰が讀んでも朦朧として取り留めがつかないので、當人に逢つて篤と主意のある所を糺して見たのですが、當人もそんな事は知らないよと云つて取り合はないのです。全く其邊が詩人の特色かと思ひます」「詩人かも知れないが隨分妙な男ですね」と主人が云ふと、迷亭が「馬鹿だよ」と單簡に送籍君を打ち留めた。東風君は是丈ではまだ辯じ足りない。「送籍は吾々仲間のうちでも取除けですが、私の詩もどうか心持ち其氣で讀んで頂きたいので。ことに御注意を願ひ度いのはからき此世とあまき口づけと對をとつた所が私の苦心です」「餘程苦心をなすつた痕迹が見えます」「あまいとからいと反照する所なんか十七味調唐辛子調で面白い。全く東風君獨特の伎倆で敬々服々の至りだ」と頻りに正直な人をまぜ返して喜んで居る。

主人は何と思つたか、ふいと立つて書齋の方へ行つたが、やがて一枚の半紙を持つて出てくる。「東風君の御作も拜見したから、今度は僕が短文を讀んで諸君の御批評を願はう」と聊か本氣の沙汰である。「天然居士の墓碑銘ならもう二三遍拜聽したよ」「まあ、だまつて居なさい。東風さん、是は決して得意のものではありませんが、ほんの座興ですから聽いて下さい」「是非伺ひませう」「寒月君も序に聞き給へ」「序でなくても聽きますよ。長い物ぢやないでせう」「僅々六十餘字さ」と苦沙彌先生愈手製の名文を讀み始める。

「大和魂！と叫んで日本人が肺病やみの様な咳をした」
「起こし得て突兀ですね」と寒月君がほめる。
「大和魂！と新聞屋が云ふ。大和魂！と掏摸が云ふ。大和魂が一躍して海を渡つた。英國で大和魂の演說をする。獨逸で大和魂の芝居をする」
「成程、こりや天然居士以上の作だ」と今度は迷亭先生がそり返つて見せる。
「東郷大將が大和魂を有つて居る。肴屋の銀さんも大和魂を有つて居る。詐僞師、山師、人殺しも大和魂を有つて居る」
「先生、そこへ寒月も有つて居るとつけて下さい」
「大和魂はどんなものかと聞いたら、大和魂さと答へて行き過ぎた。五六間行つてからエヘンと云ふ聲が聞こえた」
「その一句は大出來だ。君は中々文才があるね。それから次の句は」
「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示す如く魂である。魂であるから常にふら〳〵して居る」
「先生、大分面白う御座いますが、ちと大和魂が多過ぎはしませんか」と東風君が注意する。「贊成」と云つたのは無論迷亭である。
「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。誰も聞いた事はあるが、誰も遇つた者がない。大和魂はそれ天狗の類か」

主人は一結杳然と云ふ積りで讀み終つたが、流石の名文もあまり短か過ぎるのと、主意がどこにあるのか分りかねるので、三人はまだあとがある事と思つて待つて居る。いくら待つて居ても、うんとも、すんとも、云はないので、最後に寒月が「それぎりですか」と聞くと主人は輕く「うん」と答へた。うんは少し氣樂過ぎる。

不思議な事に迷亭は此名文に對して、いつもの樣にあまり駄辯を振はなかつたが、やがて向き直つて「君も短篇を集めて一卷として、さうして誰かに捧げてはどうだ」と聞いた。主人は事もなげに「君に捧げてやらうか」と聽くと迷亭は「眞平だ」と答へたぎり、先刻細君に見せびらかした鋏をちよき〳〵云はして爪をとつて居る。寒月君は東風君に向つて「君はあの金田の令孃を知つてるのかい」と尋ねる。「此春朗讀會へ招待してから懇意になつて、夫からは始終交際をして居る。僕はあの令孃の前へ出ると、何となく一種の感に打たれて、當分のうちは詩を作つても歌を詠んでも愉快に興が乘つて出て來る。此集中にも戀の詩が多いのは全くあゝ云ふ異性の朋友からインスピレーションを受けるからだらうと思ふ。夫で僕はあの令孃に對しては切實に感謝の意を表しなければならんから此機を利用して、わが集を捧げる事にしたのさ。昔から婦人に親友のないもので立派な詩をかいたものはないさうだ」「さうかなあ」と寒月君は顏の奥で笑ひながら答へた。いくら、駄辯家の寄合でもさう長くは續かんものと見えて、談話の火の手は大分下火になつた。吾輩も彼等の變化なき雜談を終日聞かねばならぬ義務もないから、失敬して庭へ蟷螂を探しに出た。梧桐の緑を綴る間から西に傾く日が斑に洩れて、幹にはつく〳〵法師が懸命にないて居る。晩はことによると一雨かゝるかも知れない。

七

吾輩は近頃運動を始めた。猫の癖に運動なんて利いた風だと一概に冷罵し去る手合に一寸申し聞けるが、さう云ふ人間だつてつい近年迄は運動の何者たるを解せずに、食つて寢るのを天職の様に心得て居たではないか。無事是貴人とか稱へて、懷手をして座布團から腐れかゝつた尻を離さざるを以て旦那の名譽と脂下がつて暮らしたのは覺えて居る筈だ。運動をしろの、牛乳を飮めの冷水を浴びろの、海の中へ飛び込めの、夏になつたら山の中へ籠つて當分霞を食へのと、くだらぬ注文を連發する樣になつたのは、西洋から神國へ傳染した輓近の病氣で、矢張りペスト、肺病、神經衰弱の一族と心得ていゝ位だ。尤も吾輩は去年生れた計りで、當年とつて一歳だから人間がこんな病氣に罹り出した當時の有樣は記憶に存して居らん、のみならず其砌は浮世の風中にふはついて居らなかつたに相違ないが、猫の一年は人間の十年に懸け合ふと云つてもよろしい。吾等の壽命は人間より二倍も三倍も短かいに係はらず、其短日月の間に猫一疋の發達は十分仕る所を以て推論すると、人間の年月と猫の星霜を同じ割合に打算するのは甚しき誤謬である。第一、一歳何ヶ月に足らぬ吾輩が此位の見識を有して居るのでも分るだらう。主人の第三女抔は數へ年で三つださうだが、知識の發達から云ふと、いやはや鈍いものだ。泣く事と寢小便をする事と、おつぱいを飮む事より外に何も知らない。世を憂ひ時を憤る吾輩抔に較べると、からたわいのない者だ。夫だから吾輩が運動、海水浴、轉地療養の歷史を方寸のうちに疊み込んで居たつて毫も驚くに足りない。是しき

の事をもし驚く者があつたなら、それは人間と云ふ足の二本足りない野呂間に極まつて居る。人間は昔から野呂間である。であるから近頃に至つて漸々運動の功能を吹聽したり、海水浴の利益を喋々して大發明の樣に考へるのである。吾輩抔は生れない前から其位な事はちやんと心得て居る。第一海水が何故藥になるかと云へば一寸海岸へ行けばすぐ分る事ぢやないか。あんな廣い所に魚が何疋居るか分らないが、あの魚が一疋も病氣をして醫者にかゝつた試しがない。みんな健全に泳いで居る。病氣をすれば、からだが利かなくなる。死ねば必ず浮く。それだから魚の往生をあがると云つて、鳥の薨去を落ちると唱へ、人間の寂滅をごねると號して居る。洋行をして印度洋を横斷した人に、君、魚の死ぬ所を見た事がありますかと聞いて見るがいゝ、誰でもいゝえと答へるに極まつて居る。それはさう答へる譯だ。いくら往復したつて一匹も波の上に今呼吸を引き取つた――呼吸ではいかん、魚の事だから潮を引き取つたと云はなければならん――潮を引き取つて浮いて居るのを見た者はないからだ。あの渺々たる、あの漫々たる大海を日となく夜となく續け樣に石炭を焚いて探してあるいても古往今來一匹も魚が上がつて居らん所を以て推論すれば、魚は餘程丈夫なものに違ひないと云ふ斷案はすぐに下す事が出來る。それなら何故魚がそんなに丈夫なのかと云へば、是亦人間を待つてしかる後に知らざるなりで、譯はない。すぐ分る。全く潮水を呑んで始終海水浴をやつて居るからだ。海水浴の功能はしかく魚に取つて顯著である。魚に取つて顯著である以上は人間に取つても顯著でなくてはならん。一七五〇年にドクトル・リチャード・ラッセルがブライトンの海水に飛び込めば四百四病即席全快と大袈裟な廣告を出したのは遲い遲いと笑つてもよろしい。猫と雖も相當の時機が到着すればみんな鎌倉あたりへ出掛ける積りで居る。但し今はいけない。物には時機があ

る。御維新前の日本人が海水浴の功能を味はふ事が出来ずに死んだ如く、今日の猫は未だ裸體で海の中へ飛び込むべき機會に遭遇して居らん。せいては事を仕損ずる。今日の樣に築地へ打つちやられに行つた猫が無事に歸宅せん間は無暗に飛び込む譯には行かん。進化の法則で吾等猫輩の機能が狂瀾怒濤に對して適當の抵抗力を生ずるに至る迄は――換言すれば猫が死んだと云ふ代りに猫が上がつたと云ふ語が一般に使用せらるゝ迄は――容易に海水浴は出来ん。

海水浴は追つて實行する事にして、運動丈は取り敢ずやる事に取り極めた。どうも二十世紀の今日運動せんのは如何にも貧民の樣で人聞きがわるい。運動をせんと、運動せんのではない、運動が出来んのである、運動をする時間がないのである、餘裕がないのだと鑑定される。昔は運動したものが折助と笑はれた如く、今では運動せぬ者が下等と見做されて居る。吾人の評價は時と場合に應じ吾輩の眼玉の如く變化する。吾輩の眼玉は只小さくなつたり大きくなつたりする計りだが、人間の品隲とくると眞逆さまにひつくり返る。ひつくり返つても差し支へはない。物には兩面がある。兩端がある。兩端を叩いて黑白の變化を同一物の上に起こす所が人間の融通のきく所である。方寸を逆さまにして見ると寸方となる所に愛嬌がある。天の橋立を股倉から覗いて見ると又格別な趣が出る。セクスピヤも千古萬古セクスピヤではつまらない。偶には股倉からハムレットを見て、君、こりや駄目だよ位に云ふ者がないと、文界も進歩しないだらう。だから運動をわるく云つた連中が急に運動がしたくなつて、女迄がラケットを持つて往来をあるき廻つたつて一向不思議はない。只猫が運動するのを利いた風だ抔と笑ひさへしなければよい。さて吾輩の運動は如何なる種類の運動かと不審を抱く者があるかも知れんから一應說明しようと思ふ。御承知の如く、

不幸にして器械を持つ事が出來ん。だからボールもバットも取り扱ひ方に困窮する。次には金がないから買ふ譯に行かない。此の二つの原因からして吾輩の選んだ運動は一文入らず器械なしと名づくべき種類に屬する者と思ふ。そんならのそ〳〵歩くか、或は鮪の切身を啣へて馳け出す事と考へるかも知れんが、只四本の足を力學的に運動させて、地球の引力に順つて、大地を横行するのは、あまり單簡で興味がない。いくら運動と名がついても、主人の時々實行する樣な、讀んで字の如き運動はどうも運動の神聖を汚す者だらうと思ふ。勿論只の運動でもある刺戟の下にはやらんとは限らん。鰹節競爭、鮭探し抔は結構だが、是は肝心の對象物があつての上の事で、此刺激を取り去ると索然として沒趣味なものになつて仕舞ふ。懸賞的興奮劑がないとすれば何か藝のある運動がして見たい。吾輩は色々考へた。臺所の廂から家根に飛び上がる方、家根の天邊にある梅花形の瓦の上に四本足で立つ術、物干竿を渡る事、――是は到底成功しない、竹がつる〳〵滑つて爪が立たない。後から不意に子供に飛びつく事、――是は頗る興味のある運動の一つだが滅多にやるとひどい目に逢ふから、高々月に三度位しか試みない。紙袋を頭へかぶせらるゝ事――是は苦しい計りで甚だ興味の乏しい方法である。殊に人間の相手が居らんと成功しないから駄目。次には書物の表紙を爪で引き搔く事、――是は主人に見附かると必ずどやされる危險があるのみならず、割合に手先の器用ばかりで總身の筋肉が働かない。是等は吾輩の所謂舊式運動なる者である。新式のうちには中々趣味の深いのがある。第一に蟷螂狩り。――蟷螂狩りは鼠狩り程の大運動でない代りに、それ程の危險がない。夏の半ばから秋の始めへかけてやる遊戲としては尤も上乘のものだ。其方法を云ふと先づ庭へ出て、一匹の蟷螂をさがし出す。時候がいゝと一匹や二匹見附け出すのは雜作もない。偖て見附け出し

た蟷螂君の傍へはつと風を切つて馳けて行く。すると、すはこそと云ふ身構をして鎌首をふり上げる。蟷螂でも中々健氣なもので、相手の力量を知らんうちは抵抗する積りで居るから面白い。振り上げた鎌首を右の前足で一寸參る。振り上げた首は軟らかいからぐにやり横へ曲がる。此時の蟷螂君の表情が頗る興味を添へる。おやと云ふ思ひ入れが充分ある。所を一足飛びに君の後へ廻つて、今度は背面から君の羽根を輕く引き掻く。あの羽根は平生大事に疊んであるが、引き掻き方が烈しいと、ぱつと亂れて中から吉野紙の樣な薄色の下着があらはれる。君は夏でも御苦勞千萬に二枚重ねで乙に極まつて居る。此時君の長い首は必ず後に向き直る。ある時は向つてくるが、大概の場合には首丈ぬつと立てて立つて居る。此方から手出しをするのを待ち構へて見える。先方がいつ迄もこの態度で居ては運動にならんから、あまり長くなると又ちよいと一本參る。これ丈參ると眼識のある蟷螂なら必ず逃げ出す。それを我無洒落に向つてくるのは餘程無教育な野蠻的蟷螂である。もし相手が此の野蠻な振舞ひをやると、向つて來た所を覘ひすまして、いやと云ふ程張り附けてやる。大概は二三尺飛ばされる者である。然し敵が大人しく背面に前進すると、こつちは氣の毒だから庭の立木を二三度飛鳥の如く廻つてくる。蟷螂君はまだ五六寸しか逃げ延びて居らん。もう吾輩の力量を知つたから手向ひする勇氣はない。只右往左往へ逃げ惑ふのみである。然し吾輩も右往左往へ追つかけるから、君は仕舞ひには苦しがつて羽根を振つて一大活躍を試みる事がある。元來蟷螂の羽根は彼の首と調和して、頗る細長く出來上がつたものだが、聞いて見ると全く裝飾用ださうで、人間の英語、佛語、獨逸語の如く毫も實用にはならん。だから無用の長物を利用して一大活躍を試みた所が吾輩に對して餘り功能のありよう譯がない。名前は活躍だが事實は地面の上を引きずつてあるくと云ふに

過ぎん。かうなると少々氣の毒な感はあるが運動の爲だから仕方がない。御免蒙つて忽ち前面へ驅け拔ける。君は惰性で急廻轉が出來ないから矢張り已むを得ず前進してくる、其鼻をなぐりつける。此時蟷螂君は必ず羽根を廣げた儘仆れる。其上をうんと前足で抑へて少しく休息する。それから又放す、放して置いて又抑へる。七擒七縱孔明の軍略で攻めつける。約三十分此順序を繰り返して、身動きも出來なくなつた所を見濟まして一寸口へ啣へて振つて見る。それから又吐き出す。今度は地面の上へ寢たぎり動かないから、此方の手で突つ附いて、其勢で飛び上がる所を又抑へつける。これもいやになつてから、最後の手段としてむしや〳〵食つて仕舞ふ。序だから蟷螂を食つた事のない人に話して置くが、蟷螂はあまり旨い物ではない。さうして滋養分も存外少い樣である。蟷螂狩りに次いで蟬取りと云ふ運動をやる。單に蟬と云つた所が同じ物計りではない。人間にも油野郎、みん〳〵野郎、おしいつく〳〵野郎がある如く、蟬にも油蟬、みん〳〵、おしいつく〳〵がある。油蟬はしつこくて行かん。みん〳〵は橫風で困る。只取つて面白いのはおしいつく〳〵である。是は夏の末にならないと出て來ない。八つ口の綻びから秋風が斷りなしに膚を撫でて、はつくしよ風邪を引いたと云ふ頃熾に尾を掉り立てて鳴く。善く鳴く奴で、吾輩から見ると鳴くのと猫にとられるより外に天職がないと思はれる位だ。秋の初めはこいつを取る。是を稱して蟬取り運動と云ふ。一寸諸君に話して置くが、苟も蟬と名のつく以上は、地面の上に轉がつては居らん。地面の上に落ちて居るものには必ず蟻がついて居る。吾輩の取るのは此蟻の領分に寢轉んで居る奴ではない。高い木の枝にとまつて、おしいつく〳〵と鳴いて居る連中を捕へるのである。是も序だから博學なる人間に聞きたいが、あれはおしいつく〳〵と鳴くのか、つく〳〵おしいと鳴くのか、其解釋次第に

よつては蟬の研究上少からざる關係があると思ふ。人間の猫に優る所はこんな所に存するので、人間の自ら誇る點も亦斯樣な點にあるのだから、今卽答が出來ないならよく考へて置いたらよからう。尤も蟬取り運動上はどつちにしても差し支へはない。只聲をしるべに木を上つて行つて、先方が夢中になつて鳴いて居る所をうんと捕へる計りだ。是は尤も簡略な運動に見えて中々骨の折れる運動である。吾輩は四本の足を有してゐるから大地を行く事に於ては敢て他の動物には劣るとは思はない。少くとも二本と四本の數學的知識から判斷して見て人間には負けない積りである。然し木登りに至つては大分吾輩より巧者な奴が居る。本職の猿は別物として、猿の末孫たる人間にも中々侮るべからざる手合が居る。元來が引力に逆らつての無理な事業だから出來なくても別段の恥辱とは思はんけれども、蟬取り運動上には少からざる不便を與へる。幸ひに爪と云ふ利器があるので、どうかかうか登りはするものゝ、はたで見る程樂では御座らん。のみならず蟬は飛ぶものである。蟷螂君と違つて一たび飛んで仕舞つたが最後、折角の木登りも、木登らずと何の擇む所なしと云ふ悲運に際會する事がないとも限らん。最後に時々蟬から小便をかけられる危險がある。あの小便が動ともすると眼を覘つてしよぐつてくる樣だ。逃げるのは仕方がないから、どうか小便計りは垂れん樣に致したい。飛ぶ間際に溺を仕るのは一體どう云ふ心理的狀態の生理的器械に及ほす影響だらう。矢張りせつなさの餘りかしらん。或は敵の不意に出でて一寸逃げ出す餘裕を作る爲の方便か知らん。さうすると烏賊の墨を吐き、ベランメーの刺物を見せ、主人が羅甸語を弄する類と同じ綱目に入るべき事項となる。是も蟬學上忽にすべからざる問題である。充分研究すれば是丈で慥かに博士論文の價値はある。夫は餘事だから、其位にして又本題に歸る。蟬の尤も集注するのは――集注が可笑しけ

れば集合だが、集合は陳腐だから矢張り集注にする。——蟬の尤も集注するのは青桐である。漢名を梧桐と號するさうだ。所が此青桐は葉が非常に多い、而も其葉は皆團扇位な大きさであるから彼等が生ひ重なると枝が丸で見えない位茂つて居る。是が甚だ蟬取り運動の妨害になる。聲はすれども姿は見えずと云ふ俗謠はとくに吾輩の爲に作つた者ではなからうかと怪しまれる位である。吾輩は仕方がないから只聲を知るべに行く。下から一間許りの所で梧桐は注文通り二叉になつて居るから、こゝで一休息して葉裏から蟬の所在地を探偵する。尤もこゝ迄來るうちに、がさ〳〵と音を立てて、飛び出す氣早な連中が居る。一羽飛ぶともういけない。眞似をする點に於て蟬は人間に劣らぬ位馬鹿である。あとから續々飛び出す。漸々二叉に到着する時分には滿樹寂として片聲をとゞめざる事がある。嘗てこゝ迄登つて來て、どこをどう見廻しても、耳をどう振つても蟬氣がないので、出直すのも面倒だから暫らく休息しようと、叉の上に陣取つて第二の機會を待ち合はせて居たら、いつの間にか眠くなつて、つい黑甜鄕裡に遊んだ。おやと思つて眼が醒めたら、二叉の黑甜鄕裡から庭の敷石の上へどたりと落ちて居た。然し大概は登る度に一つは取つて來る。只興味の薄い事には樹の上で口に啣へて仕舞はなくてはならん。だから下へ持つて來て吐き出す時は大方死んで居る。幾らじやらしても引つ掻いても確然たる手答へがない。蟬取りの妙味はぢつと忍んで行つておしい君が一生懸命に尻尾を延ばしたり縮ましたりして居る所をわつと前足で抑へる時にある。此時つく〳〵君は悲鳴を揚げて、薄い透明な羽根を縱橫無盡に振ふ。其の早い事、見事なる事は言語道斷、實に蟬世界の一偉觀である。余はつく〳〵君を抑へる度にいつでも、つく〳〵君に請求して此美術的演藝を見せてもらふ。夫がいやになると御免を蒙つて口の內へ頰張つて仕舞ふ。蟬によると口の內へ這入つて

迄演藝をつゞけて居るのがある。蟬取りの次にやる運動は松滑りである。是は長くかく必要もないから、一寸述べて置く。松滑りと云ふと松を滑る樣に思ふかも知れんが、さうではない、矢張り木登りの一種である。只蟬取りは蟬を取る爲に登り、松滑りは、登る事を目的として登る。此が兩者の差である。元來松は常磐にて最明寺の御馳走をしてから以來今日に至る迄、いやにごつ〳〵して居る。從つて松の幹程滑らないものはない。手懸りのいゝものはない。足懸りのいゝものはない。——換言すれば爪懸りのいゝものはない。その爪懸りのいゝ幹へ一氣呵成に馳け上がる。馳け上がつて置いて馳け下がる、馳け下がるには二法ある。一はさかさになつて頭を地面へ向けて下りてくる。一は上つた儘の姿勢をくづさずに尾を下にして降りる。人間に問ふがどつちが六づかしいか知つてるか。人間の淺墓な了見では、どうせ降りるのだから下向きに馳け下りる方が樂だと思ふだらう。夫が間違つてる。君等は義經が鵯越を落としたこと丈を心得て、義經でさへ下を向いて下りるのだから猫なんぞは無論下向きで澤山だと思ふのだらう。さう輕蔑するものではない。猫の爪はどつちへ向いて生えて居ると思ふ。みんな後へ折れて居る。夫だから鳶口のやうに物をかけて引き寄せる事は出來るが、逆に押し出す力はない。今吾輩が松の木を勢よく馳け登つたとする。すると吾輩は元來地上の者であるから、自然の傾向から云へば吾輩が長く松樹の巓に留まるを許さんに相違ない。只置けば必ず落ちる。然し手放しで落ちては、あまり早過ぎる。だから何等かの手段を以て此の自然の傾向を幾分かゆるめなければならん。是即ち降りるのである。落ちるのと降りるのは大變な違ひの樣だが、其實思つた程の事ではない。落ちるのを遲くすると降りるので、降りるのを早くすると落ちる事になる。落ちると降りるのは、ちとりの差である。吾輩は松の木の上から落ちるのはいやだか

ら、落ちるのを緩めて降りなければならない。即ちあるものを以て落ちる速度に抵抗しなければならん。吾輩の爪は前申す通り皆後向きであるから、もし頭を上にして爪を立てれば此爪の力は悉く、落ちる勢に逆らつて利用出來る譯である。從つて落ちるが變じて降りるになる。實に見易き道理である。然るに又身を逆にして義經流に松の木越をやつて見給へ。爪はあつても役には立たん。ずる〱滑つて、どこにも自分の體量を持ち答へる事は出來なくなる。是に於てか折角降りようと企てた者が變化して落ちる事になる。此通り鵯越は六づかしい。猫のうちで此藝が出來る者は恐らく吾輩のみであらう。それだから吾輩は此運動を稱して松滑りと云ふのである。最後に垣巡りに就いて一言する。主人の庭は竹垣を以て四角にしきられて居る。椽側と平行して居る一邊は八九間もあらう。左右は雙方共四間に過ぎん。今吾輩の云つた垣巡りと云ふ運動は此垣の上を落ちない樣に一周するのである。是はやり損なふ事もまゝあるが、首尾よく行くと御慰みになる。ことに所々に根を燒いた丸太が立つて居るから、一寸休息に便宜がある。今日は出來がよかつたので朝から晝迄に三返やつて見たが、やるたびにうまくなる。うまくなる度に面白くなる。とうとう四返繰り返したが、四返目に半分程巡りかけたら、隣の屋根から烏が三羽飛んで來て、一間許り向うに列を正してとまつた。是は推參な奴だ、人の運動の妨げをする。ことにどこの烏だか籍もない分在で、人の塀へとまるといふ法があるもんかと思つたから、通るんだ、おい退き玉へと聲をかけた。眞先の烏は此方を見てにや〱笑つて居る。次のは主人の庭を眺めて居る。三羽目は嘴を垣根の竹で拭いて居る。何か食つて來たに違ひない。吾輩は返答を待つ爲に、彼等に三分間の猶豫を與へて、垣の上に立つて居た。烏は通稱を勘左衛門と云ふさうだが、成程勘左衛門だ。吾輩がいくら待つても挨拶もしなければ、飛び

もしない。吾輩は仕方がないから、そろ〳〵歩き出した。すると眞先の勘左衛門がちよいと羽を廣げた。やつと吾輩の威光に恐れて逃げるなと思つたら、右向きから左向きに姿勢をかへた丈である。此野郎！地面の上なら其分に捨て置くのではないが、如何せん、只さへ骨の折れる道中に、勘左衛門抔を相手にして居る餘裕がない。といつて又立ち留まつて三羽が立ち退くのを待つのもいやだ。第一さう待つて居ては足がつゞかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな所へはとまりつけて居る。從つて氣に入ればいつ迄も逗留するだらう。こつちは是で四返目だ。只さへ大分勞れて居る。況や繩渡りにも劣らざる藝當兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさへ落ちんとは保證が出來んのに、こんな黑裝束が、三個も前途を遮つては容易ならざる不都合だ。愈となれば自ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。面倒だから、いつそ左樣仕らうか、敵は大勢の事ではあるし、ことにはあまり此邊には見馴れぬ人體である。口嘴が乙に尖つて何だか天狗の啓し子の樣だ。どうせ質のいゝ奴でないには極まつて居る。退却が安全だらう、あまり深入りをして萬一落ちでもしたら猶更恥辱だ。と思つて居ると、左向けをした烏が阿呆と云つた。次のも眞似をして阿呆と云つた。最後の奴は御丁寧にも阿呆々々と二聲叫んだ。如何に溫厚なる吾輩でも是は看過出來ない。第一自己の邸內で烏輩に侮辱されたとあつては、吾輩の名前にかゝはる。名前はまだないから係はり樣がなからうと云ふなら體面に係はる。決して退却は出來ない。諺にも烏合の衆と云ふから三羽だつて存外弱いかも知れない。進める丈進めと度胸を据ゑて、のそ〳〵歩き出す。烏は知らん顏をして何か御互に話しをして居る樣子だ。愈肝癪に障る、垣根の幅がもう五六寸もあつたらひどい目に合はせてやるんだが、殘念な事にはいくら怒つても、のそ〳〵としかあるかれない。漸くの事先鋒を去る

事約五六寸の距離迄來てもう一息だと思ふと、勘左衞門は申し合はせた樣に、いきなり羽搏きをして一二尺飛び上がつた。其風が突然余の顏を吹いた時、はつと思つたら、つい踏み外して、すとんと落ちた。これはしくじつたと垣根の下から見上げると、三羽共元の所にとまつて上から嘴を揃へて吾輩の顏を見下ろして居る。圖太い奴だ。睨めつけてやつたが一向利かない。脊を丸くして、少々唸つたが、益々駄目だ。俗人に靈妙なる象徴詩がわからぬ如く、吾輩が彼等に向つて示す怒りの記號も何等の反應を呈出しない。考へて見ると無理のない所だ。吾輩は今迄彼等を猫として取り扱つて居た。それが惡い。猫なら此位やれば慥かに應へるのだが生憎相手は烏だ。烏の勘公とあつて見れば致し方がない。實業家が主人苦沙彌先生を壓倒しようとあせる如く、西行に銀製の猫を進呈するが如く、西鄕隆盛君の銅像に勘公が糞をひる樣なものである。機を見るに敏なる吾輩は到底駄目と見て取つたから、綺麗さつぱりと緣側へ引き上げた。もう晚飯の時刻だ。運動もいゝが度を過ごすと行かぬ者で、からだ全體が何となく緊りがない、ぐた〳〵の感がある。のみならずまだ秋の取り附きで運動中に照り附けられた毛ごろもは、西日を思ふ存分吸收したと見えて、ほてつて堪らない。毛穴から染み出す汗が、流れゝばと思ふのに、毛の根に膏の樣にねばり附く。背中がむづ〳〵する。汗でむづ〳〵するのと蚤が這つてむづ〳〵するのは判然と區別が出來る。口の屆く所なら嚙む事も出來る、足の達する領分は引き搔く事も心得にあるが、脊髓の縱に通ふ眞中と來たら自力の及ぶ限りでない。かう云ふ時には人間を見懸けて矢鱈にこすり附けるか、松の木の皮で充分摩擦術を行ふか、二者其一を擇ばんと不愉快で安眠も出來兼ねる。人間は愚なものであるから、猫なで聲で――猫なで聲は人間の吾輩に對して出す聲だ。吾輩を目安にして考へれば猫なで聲ではない、なでられ聲である―

ーよろしい、兎に角人間は愚なものであるから撫でられ聲で膝の傍へ寄つて行くと、大抵の場合に於て彼若しくは彼女を愛するものと誤解して、わが爲す儘に任せるのみか折々は頭さへ撫でてくれるものだ。然るに近來吾輩の毛中にのみと號する一種の寄生蟲が繁殖したので滅多に寄り添ふと、必ず頸筋を持つて向うへ抛り出される。纔かに眼に入るか入らぬか、取るにも足らぬ蟲の爲に愛想をつかしたと見える。手を飜へせば雨、手を覆せば雲とはこの事だ。高がのみの千疋や二千疋でよくまあこんなに現金な眞似が出來たものだ。人間世界を通じて行はれる愛の法則の第一條にはかうあるさうだ。――自己の利益になる間は、須らく人を愛すべし。――人間の取り扱ひが俄然豹變したので、いくら痒くても人力を利用する事は出來ん。だから第二の方法によつて松皮摩擦法をやるより外に分別はない。然らば一寸こすつて參らうかと又緣側から降りかけたが、いや是も利害相償はぬ愚策だと心附いた。と云ふのは外でもない。松には脂がある。此脂たる頗る執着心の強い者で、もし一たび、毛の先へくつ附けようものなら、雷が鳴つてもバルチック艦隊が全滅しても決して離れない。しかのみならず五本の毛へこびりつくが早いか、十本に蔓延する。十本やられたなと氣が附くと、もう三十本引つ懸かつて居る。吾輩は淡泊を愛する茶人的猫である。こんなしつこい、毒惡な、ねち／＼した、執念深い奴は大嫌ひだ。たとひ天下の美猫と雖も御免蒙る。況や松脂に於てをやだ。車屋の黒の兩眼から北風に乘じて流れる目糞と擇ぶ所なき身分を以て、此淡灰色の毛衣を臺なしにするとは怪しからん。少しは考へて見るがいゝ。といつた所できやつ中々考へる氣遣ひはない。あの皮のあたりへ行つて背中をつけるが早いか必ずべたりと御出でになるに極まつて居る。こんな無分別な頓痴奇を相手にしては吾輩の顏に係はるのみならず、引いて吾輩の毛並に關する譯だ。いくら、む

づむづしたつて我慢するより外に致し方はあるまい。然し此二方法共實行出來んとなると甚だ心細い。今に於て一工夫して置かんと仕舞ひにはむづ／＼、ねち／＼の結果病氣に罹るかも知れない。何か分別はあるまいかなと、後足を折つて思案したが、不圖思ひ出した事がある。うちの主人は時々手拭と石鹸を以て飄然といづれへか出て行く事がある。三四十分して歸つた所を見ると彼の朦朧たる顔色が少しは活氣を帶びて、晴れやかに見える。主人の樣な汚苦しい男に此位な影響を與へるなら吾輩にはもう少し利目があるに相違ない。吾輩は只でさへ此位な器量だから、是より色男になる必要はない樣なものゝ、萬一病氣に罹つて一歳何ヶ月で夭折する樣な事があつては天下の蒼生に對して申し譯がない。聞いて見ると是も人間のひま潰しに案出した洗湯なるものださうだ。どうせ人間の作つたものだから碌なものでないには極まつて居るが此際の事だから試しに這入つて見るのもよからう。やつて見て效驗がなければよす迄の事だ。然し人間が自己の爲に設備した浴場へ異類の猫を入れる丈の洪量があるだらうか、是が疑問である。主人が澄まして這入る位の所だから、よもや吾輩を斷る事もなからうけれども萬一御氣の毒樣を食ふ樣な事があつては外聞がわるい。是は一先づ容子を見に行くに越した事はない。見た上で是ならよいと當りが附いたら、手拭を啣へて飛び込んで見よう。とこゝ迄思案を定めた上でのそ／＼と洗湯へ出掛けた。

横町を左へ折れると向うに高いとよ竹の樣なものが屹立して先から薄い烟を吐いて居る。是即ち洗湯である。吾輩はそつと裏口から忍び込んだ。裏口から忍び込むのを卑怯とか未練とか云ふが、あれは表からでなくては訪問する事が出來ぬものが嫉妬半分に囃し立てる繰り言である。昔から利口な人は裏口から不意を襲ふ事にきまつて居る。紳士養成方の第二卷第一章の五ページにさう出て居るさうだ。其次のページ

にに裏口は紳士の遺書にして自身徳を得るの門なりとある位だ。吾輩は二十世紀の猫だから此位の教育はある。あんまり輕蔑してはいけない。偖て忍び込んで見ると左の方に松を割つて八寸位にしたのが山の樣に積んであつて、其隣には石炭が岡の樣に盛つてある。なぜ松薪が山の樣で、石炭が岡の樣かと聞く人があるかも知れないが、別に意味も何もない、只一寸山と岡を使ひ分けた丈である。人間も米も食つたり、鳥を食つたり、肴を食つたり、獸を食つたり、色々の惡もの食ひをしつくした揚句遂に石炭迄食ふ樣に墮落したのは不憫である。行き當りを見ると一間程の入口が明け放しになつて、中を覗くとがんがらがんのがあんと物靜かである。其向う側で何か頻りに人間の聲がする。所謂洗湯は此聲の發する邊に相違ないと斷定したから、松薪と石炭の間に出來てる谷あひを通り拔けて左へ廻つて、前進すると右手に硝子窓があつて、其そとに丸い小桶が三角形即ちピラミッドの如く積みかさねてある。丸いものが三角に積まれるのは不本意千萬だらうと、竊かに小桶諸君の意を諒とした。小桶の南側は四五尺の間板が餘つて、恰も吾輩を迎ふるものの如く見える。板の高さは地面を去る約一メートルだから飛び上がるには御誂への上等である。よろしいと云ひながらひらりと身を躍らすと所謂洗湯は鼻の先、眼の下、顏の前にぶらついて居る。天下に何が面白いと云つて、未だ食はざるものを食ひ、未だ見ざるものを見る程の愉快はない。諸君もうちの主人の如く一週三度位、この洗湯界に三十分乃至四十分を暮らすならいゝが、もし吾輩の如く風呂と云ふものを見た事がないなら、早く見るがいゝ。親の死目に逢はなくてもいゝから、是丈は是非見物するがいゝ。世界廣しと雖もこんな奇觀は又とあるまい。

何が奇觀だ？何が奇觀だつて吾輩は之を口にするを憚る程の奇觀だ。此硝子窓の中にうぢや〱、があ

く騒いで居る人間は悉く裸體である。臺灣の生蕃である。二十世紀のアダムである。抑も衣裳の歴史を繙けば——長い事だから是はトイフェルスドレック君に讓つて、繙く丈はやめてやるが、——人間は全く服裝で持つてるのだ。十八世紀の頃大英國バスの溫泉場に於てボー・ナッシが嚴重な規則を制定した時抔は浴場内で男女共肩から足迄着物でかくした位である。今を去る事六十年前是も英國の去る都で圖案學校を設立した事がある。圖案學校の事であるから、裸體畫、裸體像の摸寫、摸型を買ひ込んで、こゝ、かしこに陳列したのはよかつたが、いざ開校式を擧行する一段になつて當局者を初め學校の職員が大困却をした事がある。開校式をやるとすれば、市の淑女を招待しなければならん。所が當時の貴婦人方の考へによると人間は服裝の動物である。皮を着た猿の子分ではないと思つて居た。人間として着物をつけないのは象の鼻なきが如く、學校の生徒なきが如く、兵隊の勇氣なきが如く全く其本體を失して居る。苟も本體を失して居る以上は人間としては通用しない。獸類である。假令摸寫摸型にせよ獸類の人間と伍するのは貴女の品位を害する譯である。でありますから妾等は出席御斷り申すと云はれた。そこで職員共は話せない連中だとは思つたが、何しろ女は東西兩國を通じて一種の裝飾品である。米舂にもなれん、志願兵にもなれないが、開校式には缺くべからざる化粧道具である。と云ふ所から仕方がない、呉服屋へ行つて黑布を三十五反八分七買つて來て例の獸類の人間に悉く着物をきせた。失禮があつてはならんと念に念を入れて顏迄着物をきせた。斯樣にして漸くの事滯りなく式を濟ましたと云ふ話がある。其位衣服は人間にとつて大切なものである。近頃は裸體畫裸體畫と云つて頻りに裸體を主張する先生もあるが、あれはあやまつて居る。生れてから今日に至る迄一日も裸體になつた事がない吾輩から見ると、どうしても間違つて居る。

裸體は希臘、羅馬の遺風が文藝復興時代の淫靡の風に誘はれてから流行りだしたもので、希臘人や、羅馬人は平常から裸體を見做れて居たのだから、之を以て風教上の利害の關係がある抔とは毫も思ひ及ばなかつたのだらうが、北歐は寒い所だ。日本でさへ裸で道中がなるものかと云ふ位だから獨逸や英吉利で裸になつて居れば死んで仕舞ふ。死んで仕舞つては詰まらないから着物をきる。みんなが着物をきれば人間は服裝の動物になる。一たび服裝の動物となつた後に、突然裸體動物に出逢へば人間とは認めない、獸と思ふ。夫だから歐洲人ことに北方の歐洲人は裸體畫、裸體像を以て獸として取り扱つていゝのである。猫に劣る獸と認定していゝのである。美しい？美しくても構はんから、美しい獸と見做せばいゝのである。かう云ふと西洋婦人の禮服を見たかと云ふものもあるかも知れないが、猫の事だから西洋婦人の禮服を拜見した事はない。聞く所によると彼等は胸をあらはし、肩をあらはし、腕をあらはして之を禮服と稱して居るさうだ。怪しからん事だ。十四世紀頃迄は彼等の出で立ちはしかく滑稽ではなかつた、矢張り普通の人間の着るものを着て居つた。それが何故こんな下等な輕業師流に轉化してきたかは面倒だから述べない。知る人ぞ知る、知らぬものは知らん顏をして居ればよろしからう。歴史は兎に角、彼等はかゝる異樣な風態をして夜間丈は得々たるにも係はらず、内心は少々人間らしい所もあると見えて、日が出ると、肩をすぼめる、胸をかくす、腕を包む、どこもかしこも悉く見えなくして仕舞ふのみならず、足の爪一本でも人に見せるのを非常に恥辱と考へて居る。是で考へても彼等の禮服なるものは一種の頓珍漢的作用によつて、馬鹿と馬鹿の相談から成立したものだと云ふ事が分る。それが口惜しければ日中でも肩と胸と腕を出して居て見ろがいゝ。裸體信者だつてその通りだ。それ程裸體がいゝものなら娘を裸體にして、序に自分も裸

になつて上野公園を散歩でもするがいゝ、できない？出來ないのではない、西洋人がやらないから、自分もやらないのだらう。現に此の不合理極まる禮服を着て威張つて帝國ホテル杯へ出懸けるではないか。其因縁を尋ねると何もない。只西洋人がきるから、着ると云ふ迄の事だらう。西洋人は強いから無理でも馬鹿氣て居ても眞似なければ遣り切れないのだらう。長いものには捲かれろ、強いものには折れろ、重いものには壓されろと、さうれろ盡しでは氣が利かんではないか。氣が利かんでも仕方がないと云ふなら勘辨するから、餘り日本人をえらい者と思つてはいけない。學問と雖も其通りだが、是は服裝に關係がない事だから以下略とする。

　衣服は斯くの如く人間にも大事なものである。人間が衣服か、衣服が人間かと云ふ位重要な條件である。人間の歴史は肉の歴史にあらず、骨の歴史にあらず、血の歴史にあらず、單に衣服の歴史であると申したい位だ。だから衣服を着けない人間を見ると人間らしい感じがしない。丸で化物に邂逅した樣だ。化物でも全體が申し合せて化物になれば、所謂化物は消えてなくなる譯だから構はんが、夫では人間自身が大いに困却する事になる計りだ。其昔自然は人間を平等なるものに製造して世の中に拋り出した。だからどんな人間でも生れるときは必ず赤裸である。もし人間の本性が平等に安んずるものならば、よろしく此赤裸の儘で生長して然るべきだらう。然るに赤裸の一人が云ふには、かう誰も彼も同じでは勉強する甲斐がない。骨を折つた結果が見えぬ。どうかしておれはおれだ、誰が見てもおれだと云ふ所が目につく樣にしたい。夫については何か人が見てあつと魂消る物をからだにつけて見たい。何か工夫はあるまいかと十年間考へて漸く猿股を發明して、すぐさま之を穿いて、どうだ恐れ入つたらうと威張つてそこいらを歩いた。

是が今日の車夫の先祖である。單簡なる猿股を發明するのに十年の長日月を費やしたのは聊か異な感もあるが、夫は今日から古代に溯つて身を蒙昧の世界に置いて斷定した結論と云ふもので、其當時に此位な大發明はなかつたのである。デカルトは「余は思考す、故に余は存在す」といふ三つ子にでも分る樣な眞理を考へ出すのに十何年か懸かつたさうだ。凡て考へ出す時には骨の折れるものであるから猿股の發明に十年を費やしたつて車夫の智慧には出來過ぎると云はねばなるまい。さあ猿股が出來ると世の中で幅のきくのは車夫許りである。餘り車夫が猿股をつけて天下の大道を我物顔に横行濶歩するのを憎らしいと思つて、負けん氣の化物が六年間工夫して羽織と云ふ無用の長物を發明した。すると猿股の勢力は頓に衰へて、羽織全盛の時代となつた。八百屋、生藥屋、呉服屋は皆此大發明家の末流である。猿股期、羽織期の後に來るのが袴期である。是は何だ羽織の癖にと癇癪を起こした化物の考案になつたもので、昔の武士今の官員抔は皆此種屬である。かやうに化物共がわれも〳〵と異を衒ひ新を競つて、遂には燕の尾にかたどつた畸形迄出現したが、退いて其由來を案ずると、何も無理矢理に、出鱈目に、偶然に、漫然に持ち上がつた事實では決してない。皆勝ちたい勝ちたいの勇猛心の凝つて樣々の新形となつたもので、おれは手前ぢやないぞと觸れてあるく代りに被つて居るのである。して見るとこの心理からして一大發見が出來る。夫は外でもない。自然は眞空を忌む如く、人間は平等を嫌ふと云ふ事だ。既に平等を嫌つて已むを得ず衣服を骨肉の如く斯樣につけ纏ふ今日に於て、此本質の一部分たる、これ等を打ち遣つて、元の杢阿彌の公平時代に歸るのは狂人の沙汰である。よし狂人の名稱を甘んじても歸る事は到底出來ない。歸つた連中を開明人の目から見れば化物である。假令世界何億萬の人口を擧げて化物の域に引きずり卸して是なら平等だらう、

みんなが化物だから恥づかしい事はないと安心しても矢つ張り駄目である。世界が化物になつた翌日から又化物の競爭が始まる。着物をつけて競爭が出來なければ化物なりで競爭をやる。赤裸は赤裸でどこ迄も差別を立ててくる。此點から見ても衣服は到底脱ぐ事は出來ないものになつて居る。

然るに今吾輩が眼下に見下ろした人間の一團體は、この脱ぐべからざる猿股も羽織も乃至袴も悉く棚の上に上げて、無遠慮にも本來の狂態を衆目環視の裡に露出して平々然と談笑を縱にして居る。吾輩が先刻一大奇觀と云つたのは此事である。吾輩は文明の諸君子の爲にこゝに謹んで其一般を紹介するの榮を有する。

何だかごちや／＼して居て何から記述していゝか分らない。化物のやる事には規律がないから秩序立つた證明をするのに骨が折れる。先づ湯槽から述べよう。湯槽だか何だか分らないが、大方湯槽といふものだらうと思ふ計りである。幅が三尺位、長さは一間半もあるが、夫を二つに仕切つて一つには白い湯が這入つて居る。何でも藥湯とか號するのださうで、石灰を溶かし込んだ樣な色に濁つて居る。尤も只濁つて居るのではない、膏ぎつて重た氣に濁つて居る。よく聞くと腐つて見えるのも不思議はない、一週間に一度しか水を易へないのださうだ。其隣りは普通一般の湯の由だが、是亦以て透明、瑩徹抔とは誓つて申されない。天水桶を攪き混ぜた位の價値は其色の上に於て充分あらはれて居る。是からが化物の記述だ。大分骨が折れる。天水桶の方に、突つ立つて居る若造が二人居る。立つた儘、向ひ合つて湯をざぶ／＼腹の上へかけて居る。いゝ慰みだ。雙方共色の黑い點に於て間然する所なき迄に發達して居る。この化物は大分逞しいなと見て居ると、やがて一人が手拭で胸のあたりを撫で廻しながら「金さん、どうも、こゝが痛ん

でいけねえが何だらう」と聞くと金さんは「そりや胃さ、胃て云ふ奴は命をとるからね。用心しねえとあぶないよ」と熱心に忠告を加へる。「だつて此の左の方だぜ」と左肺の方を指す。「そこが胃だあな。左が胃で、右が肺だよ」「さうかな、おらあ又胃はこゝいらかと思つた」と今度は腰の邊を叩いて見せると、金さんは「そりや疝氣だあね」と云つた。所へ二十五六の薄い髯を生やした男がどぶんと飛び込んだ。すると、からだに附いて居た石鹸が垢と共に浮きあがる。鐵氣のある水を透かして見た時の樣にきら／＼と光る。其隣に頭の禿げた爺さんが五分刈を捕へて何か辯じて居る。雙方共頭丈浮かして居るのみだ。「いやかう年をとつては駄目さね。人間もやきが廻つちや若い者には叶はないよ。然し湯丈は今でも熱いのでないと心持ちが惡くてね」「旦那なんか丈夫なものですぜ。その位元氣がありや結構だ」「元氣もないのさ。只病氣をしない丈さ。人間は惡い事さへしなけりやあ百二十迄は生きるもんだからね」「へえ、そんなに生きるもんですか」「生きるとも百二十迄は受け合ふ。御維新前牛込に曲淵と云ふ旗本があつて、そこに居た下男は百三十だつたよ」「そいつは、よく生きたもんですね」「あゝあんまり生き過ぎてつい自分の年を忘れてね。百迄は覺えて居ましたが夫から忘れて仕舞ひましたと云つてたよ。夫でわしの知つて居たのが百三十の時だつたが、それで死んだんぢやない。夫からどうなつたか分らない。事によるとまだ生きてるかも知れない」と云ひながら槽から上がる。髯を生やして居る男は雲母の樣なものを自分の廻りに蒔き散らしながら獨りでにや／＼笑つて居た。入れ代つて飛び込んで來たのは普通一般の化物とは違つて背中に模樣畫をほり附けて居る。岩見重太郎が大刀を振り翳して蟒を退治る所の樣だが、惜しい事に未だ竣功の期に達せんので、蟒はどこにも見えない。從つて重太郎先生聊か拍子拔けの氣味に見える。飛び

込みながら「箆棒に温いや」と云つた。するとまた一人續いて乘り込んだのが「こりやどうも……もう少し熱くなくつちやあ」と顏をしかめながら熱いのを我慢する氣色とも見えたが、重太郎先生と顏を見合はせて「やあ親方」と挨拶をする。重太郎は「やあ」と云つたが、やがて「民さんはどうしたね」と聞く。「どうしたか、ぢやん〳〵が好きだからね」「ぢやん〳〵計りぢやねえ……」「さうかい、あの男も腹のよくねえ男だからね。――どう云ふもんか人に好かれねえ、――どう云ふものだか、――どうも人が信用しねえ。職人てえものはあんなもんぢやねえが」「さうよ。民さんなんざあ腰が低いんぢやねえ、頭が高えんだ。夫だからどうも信用されねえんだね」「本當によ。あれで一ぱし腕がある積りだから、――つまり自分の損だあな」「白銀町にゃ古い人が亡くなつてね、今ぢや桶屋の元さんと煉瓦屋の大將と親方ぐれえな者だあな。こちとらあ斯うして玆で生れたもんだが、民さんなんざあ、どこから來たんだか分りやしねえ」「さうよ。然しよくあれ丈になつたよ」「うん。どう云ふもんか人に好かれねえ。人が交際はねえからね」と徹頭徹尾民さんを攻撃する。

天水桶は此位にして、白い湯の方を見ると是は又非常な大入で、湯の中に人が這入つてると云はんより人の中に湯が這入つてると云ふ方が適當である。しかも彼等は頗る悠々閑々たる者で、先刻から這入るものはあるが出る者は一人もない。かう這入つた上に、一週間もとめて置いたら湯もよごれる筈だと感心して猶よく槽の中を見渡すと、左の隅に壓しつけられて苦沙彌先生が眞赤になつてすくんで居る。可哀さうに誰か路をあけて出してやればいゝのにと思ふのに、誰も動きさうにもしなければ、主人も出ようとする氣色も見せない。只ぢつとして赤くなつて居る計りである。是は御苦勞な事だ。可成二錢五厘の湯錢を活

用しようと云ふ精神からして、かやうに赤くなるのだらうが、早く上がらんと湯氣にあがるがと主思ひの吾輩は窓の棚から少からず心配した。すると主人の一軒置いて隣に浮いてる男が八の字を寄せながら「是はちと利き過ぎる樣だ、どうも背中の方から熱い奴がじり〳〵湧いてくる」と暗に列席の化物に同情を求めた。「なあに是が丁度いゝ加減です。藥湯は此位でないと利きません。わたしの國なぞでは此倍も熱い湯へ這入ります」と自慢らしく說き立てるものがある。「一體此湯は何に利くんでせう」と手拭を疊んで凸凹頭をかくした男が一同に聞いて見る。「色々なものに利きますよ。何でもいゝてえんだから、豪氣だあね」と云つたのは瘦せた黄瓜の樣な色と形とを兼ね得たる顏の所有者である。そんなに利く湯なら、もう少しは丈夫さうになれさうなものだ。「藥を入れ立てより、三日目か四日目が丁度いゝ樣です。今日等は這入り頃ですよ」と物知り顏に述べたのを見ると、膨れ返つた男である。是は多分垢肥りだらう。「飲んでも利きませうか」とどこからか知らないが黄色い聲を出す者がある。「冷えた後抔は一杯飲んで寐ると、奇體に小便に起きないから、まあやつて御覽なさい」と答へたのは、どの顏から出た聲か分らない。

湯槽の方は此位にして板の間を見渡すと、居るわ居るわ、繪にもならないアダムがずらりと並んで各々勝手次第な姿勢で勝手次第な所を洗つて居る。其中に尤も驚くべきものは仰向けに寐て、高い明り取りを眺めて居るのと、腹這ひになつて、溝の中を覗き込んで居る兩アダムである。是は餘程閑なアダムと見える。坊主が石壁を向いてしやがんで居ると後から、小坊主がしきりに肩を叩いて居る。是は師弟の關係上三介の代理を務めるのであらう。本當の三介も居る。風邪を引いたと見えて此のあついのにちやん〳〵を

着て小判形の桶からざあと旦那の肩へ湯をあびせる。右の足を見ると親指の股に呉絽の垢擦りを挟んで居る。こちらの方では小桶を慾張つて三つ抱へ込んだ男が、隣の人に石鹸を使へ使へと云ひながらしきりに長談義をして居る。何だらうと聞いて見るとこんな事を言つて居た。「鐵砲は外國から渡つたもんだね。昔は斬り合ひ許りさ。外國は卑怯だからね、それであんなものが出來たんだ。どうも支那ぢやねえ樣だ、矢つ張り外國の樣だ、和唐内の時にや無かつたね。和唐内は矢つ張り清和源氏さ。なんでも義經が蝦夷から滿洲へ渡つた時に、蝦夷の男で大變學のできる人がくつ附いて行つたてえ話だね。それで其義經のむすこが大明を攻めたんだが大明ぢや困るから、三代將軍へ使をよこして三千人の兵隊を借してくれろと云ふと、三代樣がそいつを留めて置いて歸さねえ。――何とか云つたつけ。――何でも何とか云ふ使だ。――夫で其使を二年とめて置いて仕舞ひに長崎で女郎を見せたんだがね。其女郎に出來た子が和唐内さ。それから國へ歸つて見ると大明は國賊に亡ぼされて居た。……」何を云ふのか薩張り分らない。其後に二十五六の陰氣な顔をした男が、ぼんやりして股の所を白い湯でしきりにたでて居る。腫物か何かで苦しんで居ると見える。其横に年の頃は十七八で君とか僕とか生意氣な事をべら〳〵喋舌つてるのは此近所の書生だらう。其又次に妙な背中が見える。尻の中から寒竹を押し込んだ樣に脊骨の節が歴々と出て居る。而して其左右に十六むさしに似たる形が四個宛行儀よく並んで居る。其十六むさしが赤く爛れて周圍に膿をもつて居るのもある。かう順々に書いてくると、書く事が多過ぎて到底吾輩の手際には其一斑さへ形容する事が出來ん。是は厄介な事をやり始めた者だと少々辟易して居ると、入口の方に淺黄木綿の着物をきた七十許りの坊主がぬつと見はれた。坊主は恭しく此等の裸體の化物に一禮して「へい、どなた樣も、毎日相變

らず難有う存じます。今日は少々御寒う御座いますから、どうぞ御緩くり——どうぞ白い湯へ出たり這入つたりしてゆるりと御あつたまり下さい。——番頭さんや、どうか湯加減をよく見て上げてな」とよどみなく述べ立てた。番頭さんは「おーい」と答へた。和唐内は「愛嬌ものだね。あれでなくては商賣は出來ないよ」と大いに爺さんを激賞した。吾輩は突然この異な爺さんに逢つて一寸驚いたから此方の記述は其儘にして、しばらく爺さんを專門に觀察する事にした。爺さんはやがて今上り立ての四つ許りの男の子を見て「坊ちやん、こちらへ御出で」と手を出す。子供は大福を踏み潰した樣な爺さんを見て大變だと思つたか、わーつと悲鳴を揚げてなき出す。爺さんは少しく不本意の氣味で「いや、御泣きか、なに？爺さんが恐いか？いや、これはこれは」と感歎した。仕方がないものだから忽ち機鋒を轉じて、子供の親に向つた。「や、これは源さん。今日は少し寒いな。ゆうべ、近江屋へ這入つた泥棒は何と云ふ馬鹿な奴だの。あの戸の潜りの所を四角に切り破つての。さうして御前の。何も取らずに行んだげな。御巡りさんか夜番でも見えたものであらう」と大いに泥棒の無謀を嘲笑したが又一人を捉まへて「はい／＼御寒う。あなた方は御若いから、あまり御感じにならんかの」と老人丈に只一人寒がつて居る。

しばらくは爺さんの方へ氣を取られて他の化物の事は全く忘れて居たのみならず、苦しさうにすくんで居た主人さへ記憶の中から消え去つた時、突然流しと板の間の中間で大きな聲を出すものがある。見ると紛れもなき苦沙彌先生である。主人の聲の圖拔けて大いなるのと、其濁つて聽き苦しいのは今日に始まつた事ではないが、場所が場所丈に吾輩は少からず驚いた。是は正しく熱湯の中に長時間のあひだ我慢をして浸つて居つた爲逆上したに相違ないと咄嗟の際に吾輩は鑑定をつけた。夫も單に病氣の所爲なら咎む

る事もないが、彼は逆上しながらも充分本心を有して居るに相違ない事は何の爲に此の法外の胴間聲を出したかを話せばすぐわかる。彼は取るにも足らぬ生意氣書生を相手に大人氣もない喧嘩を始めたのである。「もつと下がれ、おれの小桶に湯が這入つていかん」と怒鳴るのは無論主人である。物は見樣でどうでもなるものだから、此怒號をたゞ逆上の結果と許り判斷する必要はない。萬人のうちに一人位は高山彦九郎が山賊を叱した樣だ位に解釋してくれるかも知れん。當人自身も其積りでやつた芝居かも分らんが、相手が山賊を以て自ら居らん以上は豫期する結果は出て來ないに極まつて居る。書生は後を振り返つて「僕はもとからこゝに居たのです」と大人しく答へた。是は尋常の答へで、只其地を去らぬ事を示した丈が主人の思ひ通りにならんので、其態度と云ひ言語と云ひ、山賊として罵り返すべき程の事でもないのは、如何に逆上の氣味の主人でも分つて居る筈だ。然し主人の怒號は書生の席其ものが不平なのではない、先刻から此兩人は少年に似合はず、いやに高慢ちきな、利いた風の事ばかり併べて居たので、始終それを聞かされた主人は、全くこの點に立腹したものと見える。だから先方で大人しい挨拶をしても默つて板の間へ上がりはせん。今度は「何だ馬鹿野郎、人の桶へ汚い水をぴちや〳〵跳ねかす奴があるか」と喝し去つた。吾輩も此小僧を少々心憎く思つて居たから、此時心中には一寸快哉を呼んだが、學校教員たる主人の言動としては穩やかならぬ事と思うた。元來主人はあまり堅過ぎていかん。石炭のたき殼見た樣にかさ〳〵して然もいやに硬い。むかしハンニバルがアルプス山を超える時に、路の眞中に當つて大きな岩があつて、どうしても軍隊が通行上の不便邪魔をする。そこでハンニバルは此の大きな岩へ醋をかけて火を焚いて、柔らかにして置いて、夫から鋸で此大岩を蒲鉾の樣に切つて滯りなく通行をしたさうだ。主人の如く、こ

んな利目のある藥湯へ煮だる程這入つても功能のない男は矢張り醋をかけて火炙りにするに限ると思ふ。然らずんば、こんな書生が何百人出て來て何十年かゝつたつて主人の頑固は癒りつこない。此湯槽に浮いて居るもの、此流しにごろ／＼して居るものは文明の人間に必要な服裝を脫ぎ棄てる化物の團體であるから、無論常規常道を以て律する譯にはいかん。何をしたつて構はない。肺の所に胃が陣取つて、和唐内が清和源氏になつて、民さんが不信用でもよからう。然し一たび流しを出て板の間に上がれば、もう化物ではない、普通の人類の生息する娑婆へ出たのだ、文明に必要なる着物をきるのだ。從つて人間らしい行動をとらなければならん筈である。今主人が踏んで居る所は敷居である。流しと板の間の境にある敷居の上であつて、當人は是から歡言愉色、圓轉滑脫の世界に逆戻りをしようと云ふ間際である。其間際ですら斯くの如く頑固であるなら、此頑固は本人に取つて牢として抜くべからざる病氣に相違ない。病氣なら容易に矯正する事は出來まい。此病氣を癒す方法は愚考によると只一つある。校長に依賴して免職して貰ふ事即ち是なり。免職になれば融通の利かぬ主人の事だから屹度路頭に迷ふに極まつてる。路頭に迷ふ結果はのたれ死にをしなければならない。換言すると免職は主人にとつて死の遠因になるのである。主人は好んで病氣をして喜んで居るけれど、死ぬのは大嫌ひである。死なない程度に於て病氣と云ふ一種の贅澤がして居たいのである。夫だからそんなに病氣をして居ると殺すぞと嚇かせば、臆病なる主人の事だからびり／＼と慄へ上がるに相違ない。此の慄へ上がる時に病氣は綺麗に落ちるだらうと思ふ。それでも落ちなければ夫迄の事さ。

如何に馬鹿でも病氣でも主人に變りはない。一飯君恩を重んずと云ふ詩人もある事だから猫だつて主人

の身の上を思はない事にあるまい。氣の毒だと云ふ念が胸一杯になつた爲、ついそちらに氣を取られて、流しの方の觀察を怠つて居ると、突然白い湯槽の方面に向つて口々に罵る聲が聞こえる。こゝにも喧嘩が起つたのかと振り向くと、狹い柘榴口に一寸の餘地もない位に化物が取りついて、毛のある脛と、毛のない股と入り亂れて動いて居る。折から初秋の日は暮るゝになんなんとして流しの上は天井迄一面の湯氣が立て籠める。かの化物の犇く樣が其間から朦朧と見える。熱い熱いと云ふ聲が吾輩の耳を貫いて左右へ拔ける樣に頭の中で亂れ合ふ。其聲には黄なのも、青いのも、赤いのも、黑いのもあるが、互に疊なりかゝつて一種名狀すべからざる音響を浴場内に漲らす。只混雜と迷亂とを形容するに適した聲と云ふのみで、外には何の役にも立たない聲である。吾輩は茫然として此光景に魅入られた許り立ちすくんで居た。やがてわー〱と云ふ聲が混亂の極度に達して、是よりはもう一歩も進めぬと云ふ點迄張り詰められた時、突然無茶苦茶に押し寄せ押し返して居る群の中から一大長漢がぬつと立ち上がつた。彼の身の丈を見ると他の先生方よりは慥かに三寸位は高い。のみならず顏から髯が生えて居るのか髯の中に顏が同居して居るのか分らない赤つらを反り返して、日盛りに破れ鐘をつく樣な聲を出して「うめろうめろ、熱い熱い」と叫ぶ。此聲と此顏ばかりは、かの紛々と縺れ合ふ群衆の上に高く傑出して、其瞬間には浴場全體が此男一人になつたと思はるゝ程である。超人だ。ニーチェの所謂超人だ。魔中の大王だ。化物の棟梁だ。と思つて見て居ると湯槽の後で「おーい」と答へたものがある。おやと又も其方に眸をそらすと、暗憺として物色も出來ぬ中に、例のちやん〱姿の三介が碎けよと一塊りの石炭を竈の中に投げ入れるのが見えた。竈の蓋をくゞつて、此塊りがぱち〱と鳴るときに、三介の半面がぱつと明るくなる。同時に三介の後にある

煉瓦の壁が暗を通して燃える如く光つた。吾輩は少々物凄くなつたから早々窓から飛び下りて家に歸る。歸りながらも考へた。羽織を脱ぎ、猿股を脱ぎ、袴を脱いで平等にならうと力める赤裸々の中には、又赤裸々の豪傑が出て來て他の群小を壓倒して仕舞ふ。平等はいくらはだかになつたつて得られるものではない。

歸つて見ると天下は太平なもので、主人は湯上りの顏をテラ〳〵光らして晩餐を食つて居る。吾輩が椽側から上がるのを見て、のんきな猫だなあ、今頃どこをあるいてるるんだらうと云つた。膳の上を見ると錢のない癖に二三品御菜をならべて居る。其うちに肴の燒いたのが一疋ある。是は何と稱する肴か知らんが、何でも昨日あたり御臺場近邊でやられたに相違ない。肴は丈夫なものだと說明して置いたが、いくら丈夫でもかう燒かれたり煮られたりしてはたまらん。多病にして殘喘を保つ方が餘程結構だ。かう考へて膳の傍に坐つて隙があつたら何か頂戴しようと、見る如く見ざる如く裝つて居た。こんな裝ひ方を知らないものは到底うまい肴は食へないと諦めなければいけない。主人は肴を一寸突つついたが、うまくないと云ふ顏附をして箸を置いた。正面に控へたる細君は是亦無言の儘箸の上下に運動する樣子、主人の兩顎の離合開闔の具合を熱心に研究して居る。

「おい、その猫の頭を一寸撲つて見ろ」と主人は突然細君に請求した。

「撲てば、どうするんですか」

「どうしてもいゝから一寸撲つて見ろ」

かうですかと細君は平手で吾輩の頭を一寸敲く。痛くも何ともない。

「鳴かんぢやないか」

「えゝ」

「もう一返やつて見ろ」

「何返やつたつて同じ事ぢやありませんか」と細君又平手でぽかと參る。矢張り何ともないから凝として居た。然し其の何の爲たるやは智慮深き吾輩には頓と了解し難い。是が了解出來ればどうかかうか方法もあらうが、只撲つて見ろだから、撲つ細君も困るし、撲たれる吾輩も困る。主人は二度迄思ひ通りにならんので、少々焦れ氣味で「おい、一寸鳴く樣にぶつて見ろ」と云つた。

細君は面倒な顔附で「鳴かして何になさるんですか」と問ひながら、又ぴしやりと御出でになつた。かう先方の目的がわかれば譯はない。鳴いてさへやれば主人を滿足させる事は出來るのだ。主人はかくの如く愚物だから厭になる。鳴かせる爲なら爲と早く云へば、二返も三返も餘計な手數はしなくても濟むし、吾輩も一度で放免になる事を二度も三度も繰り返される必要はないのだ。只打つて見ろと云ふ命令は、打つ事それ自身を目的とする場合の外に用ふべきものでない。打つのは向うの事、鳴くのは此方の事だ。鳴く事を始めから豫期して懸かつて、只打つと云ふ命令のうちに、此方の隨意たるべき鳴く事さへ含まつてる樣に考へるのは失敬千萬だ。他人の人格を重んぜんと云ふものだ。猫を馬鹿にして居る。主人の蛇蝎の如く嫌ふ金田君ならやりさうな事だが、赤裸々を以て誇る主人としては頗る卑劣である。然し實の所主人は是程けちな男ではないのである。だから主人の此命令は狡猾の極に出でたのではない。つまり智慧の足りない所から湧いた孑孑の樣なものと思惟する。飯を食へば腹が張るに極まつて居る。切れば血が出るに

極まつて居る。殺せば死ぬに極まつて居る。それだから打てば鳴くに極まつて居ると速斷をやつたんだらう。然しそれはお氣の毒だが少し論理に合はない。その格で行くと川へ落ちれば必ず死ぬ事になる。天麩羅を食へば必ず下痢する事になる。月給をもらへば必ず出勤する事になる。書物を讀めば必ずえらくなる事になる。必ずさうなつては少し困る人が出來てくる。打てば必ずなかなければならんとなると吾輩は迷惑である。目白の時の鐘と同一に見做されては猫と生れた甲斐がない。先づ腹の中で是丈主人を凹まして置いて、しかる後「にやー」と注文通り鳴いてやつた。

すると主人は細君に向つて「今鳴いたにやあと云ふ聲は感投詞か、副詞か何だか知つてるか」と聞いた。細君はあまり突然な問なので、何も云はない。實を云ふと吾輩も是は洗湯の逆上がまださめない爲だらうと思つた位だ。元來此主人は近所合壁有名な變人で現にある人は慥かに神經病だと迄斷言した位である。所が主人の自信はえらいもので、おれが神經病ぢやない、世の中の奴が神經病だと頑張つて居る。近邊のものが主人を犬々と呼ぶと、主人は公平を維持する爲必要だとか號して彼等を豚々と呼ぶ。實際主人はどこ迄も公平を維持する積りらしい。困つたものだ。かう云ふ男だからこんな奇問を細君に對つて呈出するのも、主人に取つては朝食前の小事件かも知れないが、聞く方から云はせると一寸神經病に近い人の云ひさうな事だ。だから細君は烟に捲かれた氣味で何とも云はない。吾輩は無論何とも答へ樣がない。すると主人は忽ち大きな聲で

「おい」と呼びかけた。

細君は吃驚して「はい」と答へた。

「そのはいは感投詞か副詞か、どつちだ」
「どつちですか、そんな馬鹿氣た事はどうでもいゝぢやありませんか」
「いゝものか、是が現に國語家の頭腦を支配して居る大問題だ」
「あらまあ、猫の鳴き聲がですか、いやな事ねえ。だつて、猫の鳴き聲は日本語ぢやあないぢやありませんか」
「夫だからさ。それが六づかしい問題なんだよ。比較研究と云ふんだ」
「さう」と細君は利口だから、こんな馬鹿な問題には關係しない。「それで、どつちだか分つたんですか」
「重要な問題だからさう急には分らんさ」と例の肴をむしや／＼食ふ。序に其隣にある豚と芋のにころばしを食ふ。「是は豚だな」「えゝ豚で御座んす」「ふん」と大輕蔑の調子を以て嚥み込んだ。「酒をもう一杯飲まう」と杯を出す。
「今夜は中々あがるのね。もう大分赤くなつて入らつしやいますよ」
「飲むとも、――御前世界で一番長い字を知つてるか」
「えゝ、前の關白太政大臣でせう」
「それは名前だ。長い字を知つてるか」
「字つて横文字ですか」
「うん」

「知らないわ、——御酒はもういゝでせう、是で御飯になさいな、ねえ」

「いや、まだ飲む。一番長い字を教へてやらうか」

「えゝ。さうしたら御飯ですよ」

「Archaiomelesidonophrunicherata と云ふ字だ」

「出鱈目でせう」

「出鱈目なものか、希臘語だ」

「何といふ字なの、日本語にすれば」

「意味はしらん。只綴り丈知つてるんだ。長く書くと六寸三分位にかける」

他人なら酒の上で云ふべき事を、正氣で云つて居る所が頗る奇觀である。尤も今夜に限つて酒を無暗にのむ。平生なら猪口に二杯ときめて居るのを、もう四杯飲んだ。二杯でも隨分赤くなる所を倍飲んだのだから顏が燒火箸の樣にほてつて、さも苦しさうだ。夫でもまだ已めない。「もう一杯」と出す。細君はあまりの事に

「もう御よしになつたら、いゝでせう。苦しい計りですわ」と苦々しい顏をする。

「なに苦しくつても是から少し稽古するんだ。大町桂月が飲めと云つた」

「桂月つて何です」さすがの桂月も細君に逢つては一文の價値もない。

「桂月は現今一流の批評家だ。夫が飲めと云ふのだからいゝに極まつて居るさ」

「馬鹿を仰しやい。桂月だつて、梅月だつて、苦しい思ひをして酒を飲めなんて、餘計な事ですわ」

「酒計りぢやない。交際をして、道樂をして、旅行をしろといつた」
「猶わるいぢやありませんか。そんな人が第一流の批評家なの。まああきれた。妻子のあるものに道樂をすゝめるなんて……」
「道樂もいゝさ。桂月が勧めなくつても金さへあればやるかも知れない」
「なくつて仕合せだわ。今から道樂なんぞ始められちやあ大變ですよ」
「大變だと云ふならよしてやるから、其代りもう少し夫を大事にして、さうして晩に、もつと御馳走を食はせろ」
「是が精一杯の所ですよ」
「さうかしらん。夫ぢや道樂は追つて金が這入り次第やる事にして、今夜は是でやめよう」と飯茶碗を出す。何でも茶漬を三ぜん食つた樣だ。吾輩は其夜豚肉三片と鹽燒の頭を頂戴した。

八

垣巡りと云ふ運動を説明した時に、主人の庭を結び繞らしてある竹垣の事を一寸述べた積りであるが、此竹垣の外がすぐ隣家、即ち南隣の次郎ちやんとこと思つては誤解である。家賃は安いが其處は苦沙彌先生である。與つちやんや次郎ちやん杯と號する、所謂ちやん附きの連中と、薄つ片な垣一重を隔てて御隣同志の親密なる交際は結んで居らぬ。此垣の外は五六間の空地であつて、其の盡くる所に檜が蓊然と五六本併んで居る。椽側から拜見すると、向うは茂つた森で、ここに住む先生は野中の一軒家に、無名の猫を友にして日月を送る江湖の處士であるかの如き感がある。但檜の枝は吹聽する如く密生して居らんので、其間から群鶴館といふ、名前丈立派な安下宿の安屋根が遠慮なく見えるから、しかく先生を想像するのには餘程骨の折れるのは無論である。然し此下宿が群鶴館なら先生の居は慥かに臥龍窟位な價値はある。名前に税はかゝらんから御互にえらさうな奴を勝手次第に附ける事として、此の幅五六間の空地が竹垣を添うて東西に走る事約十間、夫から忽ち鉤の手に屈曲して、臥龍窟の北面を取り圍んで居る。此北面が騷動の種である。本來ならあき地を行き盡して又あき地、とか何とか威張つてもいゝ位に家の二側を包んで居るのだが、臥龍窟の主人は無論窟内の靈猫たる吾輩すら此あき地には手こずつて居る。南側に檜が幅を利かして居るごとく、北側には桐の木が七八本行列して居る。もう周圍一尺位にのびて居るから下駄屋さへ連れてくればいゝ價になるんだが、借家の悲しさには、いくら氣が附いても實行は出來ん。主人に對して

も氣の毒である。先達て學校の小使が來て枝を一本切つて行つたが、其つぎに來た時は新しい桐の俎下駄を穿いて、此間の枝でこしらへましたと、聞きもせんのに吹聽して居た。ずるい奴だ。桐はあるが吾輩及び主人家族にとつては一文にもならない桐である。玉を抱いて罪ありと云ふ古語があるさうだが、是は桐を生やして錢なしと云つてもしかるべきもので、所謂寶の持ち腐れである。愚なるものは主人にあらず、吾輩にあらず、家主の傳兵衞である。居ないかな、居ないかな、下駄屋は居ないかなと桐の方で催促して居るのに知らん面をして屋賃計り取り立てにくる。吾輩は別に傳兵衞に恨もないから彼の惡口は此位にして、本題に戾つて此空地が騷動の種であると云ふ珍譚を紹介仕るが、決して主人にいつてはいけない。是限りの話しである。抑も此空地に關して第一の不都合なる事は垣根のない事である。吹き拂ひ、吹き通し、拔け裏、通行御免天下晴れての空地である。あると云ふと嘘をつく樣でよろしくない。實を云ふとあつたのである。然し話しは過去へ溯らんと原因が分らない。原因が分らないと醫者でも處方に迷惑する。だからこゝへ引き越して來た當時からゆつくりと話し始める。吹き通しも夏はせい〳〵して心持ちがいゝものだ、不用心だつて金のない所に盜難のある筈はない。だから主人の家に、あらゆる塀、垣、乃至は亂杭、逆茂木の類は全く不要である。然しながら是は空地の向うに住居する人間若しくは動物の種類如何に因つて決せらるゝ問題であらうと思ふ。從つて此問題を決する爲には勢ひ向う側に陣取つて居る君子の性質を明らかにせんければならん。人間だか動物だか分らない先に君子と稱するのは太だ早計の樣ではあるが大抵君子で間違ひはない。梁上の君子抔と云つて泥棒さへ君子と云ふ世の中である。但し此場合に於ける君子は決して警察の厄介になる樣な君子ではない。警察の厄介にならない代りに、數でこなした者と見

えて澤山居る。うぢや／＼居る。落雲館と稱する私立の中學校――八百の君子をいやが上に君子に養成する爲に毎月貳圓の月謝を徴集する學校である。名前が落雲館だから風流な君子計りかと思ふと、それがそもそもの間違ひになる。其の信用すべからざる事は群鶴館に鶴の下りざる如く、臥龍窟に猫が居る樣なものである。學士とか教師とか號するものに主人苦沙彌君の如き氣違ひのある事を知つた以上は落雲館の君子が風流漢計りでないと云ふ事がわかる譯だ。夫がわからんと主張するなら先づ三日許り主人のうちへ宿まりに來て見るがいゝ。

前申す如く、こゝへ引き越しの當時は、例の空地に垣がないので、落雲館の君子は車屋の黒の如く、のそのそと桐畠に這入り込んできて、話しをする、辨當を食ふ、笹の上に寢轉ぶ――色々の事をやつたものだ。それからは辨當の死骸即ち竹の皮、古新聞、或は古草履、古下駄、ふると云ふ名のつくものを大概こゝへ棄てた樣だ。無頓着なる主人は存外平氣に構へて、別段抗議も申し込まずに打ち過ぎたのは、知らなかつたのか、知つても咎めん積りであつたのか分らない。所が彼等諸君子は學校で教育を受くるに從つて漸々君子らしくなつたものと見えて、次第に北側から南側の方面へ向けて蠶食を企てて來た。蠶食と云ふ語が君子に不似合ならやめてもよろしい。但し外に言葉がないのである。彼等は水草を追うて居を變ずる沙漠の住民の如く、桐の木を去つて檜の方に進んで來た。檜のある所は座敷の正面である。餘程大膽なる君子でなければ此程の行動は取れん筈である。一兩日の後彼等の大膽は更に一層の大を加へて大々膽となつた。教育の結果程恐ろしいものはない。彼等は單に座敷の正面に逼るのみならず、此の正面に於て歌をうたひだした。何と云ふ歌か忘れて仕舞つたが、決して三十一文字の類ではない、もつと活潑で、もつと俗

耳に入り易い歌であつた。驚いたのは主人計りではない、吾輩迄も彼等君子の才藝に嘆服して覺えず耳を傾けた位である。然し讀者も御案内であらうが、嘆服と云ふ事と邪魔と云ふ事は時として兩立する場合がある。此兩者が此際圖らずも合して一となつたのは、今から考へて見ても返す〳〵殘念である。主人も殘念であつたらうが、已むを得ず書齋から飛び出して行つて、「こゝは君等の這入る所ではない、出給へ」と云つて、二三度追ひ出した樣だ、所が教育のある君子の事だから、こんな事で大人しく聞く譯がない。追ひ出されゝばすぐ這入る。這入れば活潑なる歌をうたふ。高聲に談話をする。而も君子の談話だから一風違つて、おいおめえだの知らねえのと云ふ。そんな言葉は御維新前は折助と雲助と三助の專門的知識に屬して居たさうだが、二十世紀になつてから教育ある君子の學ぶ唯一の言語であるさうだ。一般から輕蔑せられたる運動が、かくの如く今日歡迎せらるゝ樣になつたのと同一の現象だと說明した人がある。主人は又書齋から飛び出して此君子流の言葉に尤も堪能なる一人を捉まへて、何故こゝへ這入るかと詰問したら、君子は忽ち「おいおめえ」「知らねえ」の上品な言葉を忘れて「こゝは學校の植物園かと思ひました」と頗る下品な言葉で答へた。主人は將來を戒めて放してやつた。放してやるのは龜の子の樣で可笑しいが、實際彼は君子の袖を捉へて談判したのである。此位やかましく云つたらもうよからうと主人は思つて居たさうだ。所が實際は女媧氏の時代から豫期と違ふもので、主人は又失敗した。今度は北側から邸内を橫斷して表門から拔ける。表門をがらりとあけるから御客かと思ふと桐畠の方で笑ふ聲がする。形勢は益不穩である。教育の效果は愈顯著になつてくる。氣の毒な主人はこいつは手に合はんと、夫から書齋へ立籠つて恭しく一書を落雲館校長に奉つて、少々御取締をと哀願した。校長も鄭重なる返書を主人に送つて、垣をす

ゐから待つて呉れと云つた。しばらくすると二三人の職人が來て半日許りの間に主人の屋敷と落雲館の境に、高さ三尺許りの四つ目垣が出來上がつた。是で漸々安心だと主人は喜んだ。主人は愚物である。此位の事で君子の擧動の變化する譯がない。

全體人にからかふのは面白いものである。吾輩の樣な猫ですら、時々は當家の令孃にからかつて遊ぶ位だから、落雲館の君子が氣の利かない苦沙彌先生にからかふのは至極尤もな所で、之に不平なのは恐らく、からかはれる當人丈であらう。からかふと云ふ心理を解剖して見ると二つの要素がある。第一からかはれる當人が平氣で澄まして居てはならん。第二からかふ者が勢力に於て人數に於て相手より強くなくてはいかん。此間主人が動物園から歸つて來てしきりに感心して話した事がある。聞いて見ると駱駝と小犬の喧嘩を見たのださうだ。小犬が駱駝の周圍を疾風の如く廻轉して吠え立てると、駱駝は何の氣もつかずに、依然として脊中へ瘤をこしらへて突つ立つた儘である。いくら吠えても狂つても相手にせんので、仕舞ひには犬も愛想をつかしてやめる、實に駱駝は無神經だと笑つて居たが、それが此場合の適例である。いくらからかふものが上手でも相手が駱駝と來ては成立しない。さればと云つて獅子や虎の樣に先方が強過ぎても物にならん。からかひかけるや否や八つ裂きにされて仕舞ふ。からかふと齒をむき出して怒る、怒る事は怒るが、こつちをどうする事も出來ないと云ふ安心のある時に愉快は非常に多いものである。何故こんな事が面白いと云ふと其理由は色々ある。先づひまつぶしに適して居る。退屈な時には髭の數さへ勘定して見たくなる者だ。昔獄に投ぜられた囚人の一人は無聊のあまり、房の壁に三角形を重ねて畫いて其日をくらしたと云ふ話がある。世の中に退屈程我慢の出來にくいものはない、何か活氣を刺激する事件

がないと生きて居るのがつらいものだ。からかふと云ふのもつまり此刺激を作つて遊ぶ一種の娯樂である。但し多少先方を怒らせるか、じらせるか、弱らせるかしなくては刺激にならんから、昔からからかふと云ふ娯樂に耽るものは人の氣を知らない馬鹿大名の樣な退屈の多い者、若しくは自分のなぐさみ以外は考ふるに暇なき程頭の發達が幼稚で、しかも活氣の使ひ道に窮する少年に限つて居る。次には自己の優勢な事を實地に證明するものには尤も簡便な方法である。人を殺したり、人を傷つけたり、又は人を陥れたりしても自己の優勢な事は證明出來る譯であるが、是等は寧ろ殺したり、傷つけたり、陥れたりするのが目的のときによるべき手段で、自己の優勢なる事は此手段を遂行した後に必然の結果として起る現象に過ぎん。だから一方には自分の勢力が示したくつて、しかもそんなに人に害を與へたくないと云ふ場合には、からかふのが一番御恰好である。多少人を傷つけなければ自己のえらい事は事實の上に證據だてられない。事實になつて出て來ないと、頭のうちで安心して居ても存外快樂のうすいものである。人間は自己を恃むものである。否恃み難い場合でも恃みたいものである。夫だから自己は是丈恃める者だ、是なら安心だと云ふ事を、人に對して實地に應用して見ないと氣が濟まない。しかも理窟のわからない俗物や、あまり自己が恃みになりさうもなくて落ち附きのない者は、あらゆる機會を利用して、此證券を握らうとする。柔術使ひが時々人を投げて見たくなるのと同じ事である。柔術の怪しいものは、どうか自分より弱い奴に、只の一返でいゝから出逢つて見たい、素人でも構はないから抛げて見たいと至極危險な了見を抱いて町内をあるくのも是が爲である。其他にも理由は色々あるが、あまり長くなるから略する事に致す。聞きたければ鰹節の一折も持つて習ひにくるがいゝ。いつでも敎へてやる。以上に說く所を參考して推論して見ると、

吾輩の考へでは奥山の猿と、學校の教師がからかふには一番手頃である。學校の教師を以て、奥山の猿に比較しては勿體ない。――猿に對して勿體ないのではない、教師に對して勿體ないのである。然しよく似てゐるから仕方がない。御承知の通り奥山の猿は鎖で繋がれて居る。いくら歯をむき出しても、きやつ〳〵騒いでも引き掻かれる氣遣ひはない。教師は鎖で繋がれて居らない代りに月給で縛られて居る。いくらからかつたつて大丈夫、辭職して生徒をぶんなぐる事はない。辭職をする勇氣のある樣なものなら最初から教師抔をして生徒の御守は勤めない筈である。主人は教師である。落雲館の教師ではないが矢張り教師に相違ない。からかふには至極適當で、至極安直で、至極無事な男である。落雲館の生徒は少年である。からかふ事は自己の鼻を高くする所以で、教育の效果として至當に要求して然るべき權利と迄心得て居る。のみならずからかひでもしなければ、活氣に充ちた五體と頭腦をいかに使用して然るべきか十分の休暇中持て餘して困つて居る連中である。此等の條件が備はれば主人は自らからかはれ、生徒は自らからかふ、誰から云はしても毫も無理のない所である。それを怒る主人は野暮の極、間拔の骨頂でせう。これから落雲館の生徒が如何に主人にからかつたか、是に對して主人が如何に野暮を極めたかを逐一かいて御覽に入れる。

諸君は四つ目垣とは如何なる者であるか御承知であらう。風通しのいゝ、簡便な垣である。吾輩抔は目の間から自由自在に往來する事が出來る。こしらへたつて、こしらへなくたつて同じ事だ。然し落雲館の校長は猫の爲に四つ目垣を作つたのではない、自分が養成する君子が潛られん爲に、わざ〳〵職人を入れて結ひ繞らせたのである。成程いくら風通しがよく出來て居ても人間には潛れさうにない。此竹を以て組

み合はせたる四寸角の穴をぬける事は、淸國の奇術師張世尊其人と雖も六づかしい。だから人間に對しては充分垣の功能をつくして居るに相違ない。主人が其の出來上がつたのを見て、是ならよからうと喜んだのも無理はない。然し主人の論理には大いなる穴がある。此垣よりも大いなる穴がある。呑舟の魚をも洩らすべき大穴がある。彼は垣は踰ゆべきものにあらずとの假定から出立して居る。いやしくも學校の生徒たる以上は如何に粗末の垣でも、垣と云ふ名がついて、分界線の區域さへ判然すれば決して亂入される氣遣ひはないと假定したのである。次に彼は其假定をしばらく打ち崩して、よし亂入する者があつても大丈夫と論斷したのである。四つ目垣の穴を潛り得る事は、如何なる小僧と雖も到底出來る氣遣ひはないから亂入の虞は決してないと速定して仕舞つたのである。成程彼等が猫でない限りは此の四角の目をぬけてくる事はしまい、したくても出來まいが、乘り踰える事、飛び越える事は何の事もない。却て運動になつて面白い位である。

垣の出來た翌日から、垣の出來ぬ前と同樣に彼等は北側の空地へぽかり〱と飛び込む。但し座敷の正面迄は深入りをしない。若し追ひ懸けられたら逃げるのに、少々ひまが入るから、豫め逃げる時間を勘定に入れて、捕へらるゝ危險のない所で遊弋をして居る。彼等が何をして居るか東の離れに居る主人には無論目に入らない。北側の空地に彼等が遊弋して居る狀態は、木戸をあけて反對の方角から鉤の手に曲がつて見るか、又は後架の窓から垣根越しに眺めるより外に仕方がない。窓から眺める時はどこに何が居るか、一目明瞭に見渡す事が出來るが、よしや敵を幾人見出したからと云つて捕へる譯には行かぬ。只窓の格子の中から叱りつける計りである。もし木戸から迂回して敵地を突かうとすれば、足音を聞きつけて、ぽ

かりほかりと捉まる前に向う側へ下りて仕舞ふ。膃肭臍がひなたぼつこをして居る所へ密猟船が向かつた様な者だ。主人は無論後架で張り番をして居る訳ではない。と云つて木戸を開いて、音がしたら直ぐ飛び出す用意もない。もしそんな事をやる日には教師を辞職して、其方専門にならなければ追つ附かない。主人方の不利を云ふと書斎からは敵の声丈聞こえて姿が見えないのと、窓からは姿が見えるだけで手が出せない事である。此不利を看破したる敵はこんな軍略を講じた。主人が書斎に立て籠つて居ると探偵した時には、可成大きな声を出してわあく云ふ。其中には主人をひやかす様な事を聞こえよがしに述べる。而も其声の出所を極めて不分明にする。一寸聞くと垣の内で騒いで居るのか、或は向う側であばれて居るのか判定しにくい様にする。もし主人が出懸けて来たら、逃げ出すか、又は始めから向う側に居て知らん顔をする。又主人が後架へ――吾輩は最前からしきりに後架々々ときたない字を使用するのを別段の光栄とも思つて居らん、實は迷惑千萬であるが、此戰爭を記述する上に於て必要であるから已むを得ない。――即ち主人が後架へまかり越したと見て取るときは、必ず桐の木の附近を徘徊してわざと主人の眼につく様にする。主人がもし後架から四隣に響く大音を揚げて怒鳴りつければ敵は周章てる氣色もなく悠然と根據地へ引きあげる。此軍略を用ひられると主人は甚だ困却する。慥かに這入つてゐるなと思つてステツキを持つて出懸けると寂然として誰も居ない。居ないかと思つて窓からのぞくと、必ず一人二人這入つて居る。主人は裏へ廻つて見たり、後架から覗いて見たり、後架から覗いて見たり、裏へ廻つて見たり、何度云つても同じ事だが、何度云つても同じ事を繰り返して居る。奔命に疲れるとは此事である。教師が職業であるか、戰爭が本務であるか一寸分らない位逆上して來た。此逆上の頂點に達した時に下の事件が起つた。

のである。

事件は大概逆上から出る者だ。逆上とは讀んで字の如く逆さに上るのである。此點に關してはゲーレンもパラセルサスも舊弊なる扁鵲も異議を唱ふる者は一人もない。只どこへ逆さに上るかが問題である。又何が逆さに上るかが議論のある所である。古來歐洲人の傳説によると、吾人の體内には四種の液が循環して居つたさうだ。第一に怒液と云ふ奴がある。是が逆さに上ると怒り出す。第二に鈍液と名づくるのがある。是が逆さに上ると神經が鈍くなる。次には憂液、是は人間を陰氣にする。最後が血液、是は四肢を壯にする。其後人文が進むに從つて鈍液、怒液、憂液はいつの間にかなくなつて、現今に至つては血液丈が昔し樣に循環して居ると云ふ話だ。だから若し逆上する者があらば血液より外にはあるまいと思はれる。然るに此血液の分量は個人に依つてちやんと極まつて居る。性分によつて多少の增減はあるが、先づ大抵一人前に付五升五合の割合である。だに依つて、此五升五合が逆さに上ると、上つた所丈は熾に活動するが、其他の局部は缺乏を感じて冷たくなる。丁度交番燒打の當時巡査が悉く警察署へ集まつて、町内には一人もなくなつた樣なものだ。あれも醫學上から診斷をすると警察の逆上と云ふ者である。此逆上を癒やすには血液を從前の如く體内の各部へ平均に分配しなければならん。さうするには逆さに上つた奴を下へ降さなくてはならん。其方には色々ある。今は故人となられたが主人の先君抔は濡れ手拭を頭にあてて炬燵にあたつて居られたさうだ。頭寒足熱は延命息災の徵と傷寒論にも出て居る通り、濡れ手拭は長壽法に於て一日も缺く可からざる者である。夫でなければ坊主の慣用する手段を試みるがよい。一所不住の沙門、雲水行脚の衲僧は必ず樹下石上を宿とすとある。樹下石上とは難行苦行の爲ではない。全くのぼせ

を下げる爲に六祖が米を舂きながら考へ出した秘法である。試みに石の上に坐つて御覽、尻が冷えるのは當り前だらう。尻が冷える、のぼせが下がる、是亦自然の順序にして毫も疑ひを挾むべき餘地はない。斯樣に色々な方法を用ひてのぼせを下げる工夫は大分發明されたが、未だのぼせを引き起こす良方が案出されないのは殘念である。一概に考へると、のぼせは損あつて益なき現象であるが、さう許り速斷してならん場合がある。職業によると逆上は餘程大切な者で、逆上せんと何も出來ない事がある。其中で尤も逆上を重んずるのは詩人である。詩人に逆上が必要なる事は汽船に石炭が缺く可からざる樣な者で、此供給が一日でも途切れると彼等は手を拱いて飯を食ふより外に何等の能もない凡人になつて仕舞ふ。尤も逆上は氣違ひの異名で、氣違ひにならないと家業が立ち行かんとあつては世間體が惡いから、彼等の仲間では逆上を呼ぶに逆上の名を以てしない。申し合はせてインスピレーション、インスピレーションと左も勿體さうに稱へて居る。是は彼等が世間を瞞着する爲に製造した名で其實は正に逆上である。プレートーは彼等の肩を持つて此種の逆上を神聖なる狂氣と號したが、いくら神聖でも狂氣では人が相手にしない。矢張りインスピレーションと云ふ新發明の賣藥の樣な名を附けて置く方が彼等の爲によからうと思ふ。然し蒲鉾の種が山芋である如く、觀音の像が一寸八分の朽木である如く、鴨南蠻の材料が烏である如く、下宿屋の牛鍋が馬肉である如くインスピレーションも實は逆上である。逆上であつて見れば臨時の氣違ひである。巣鴨へ入院せずに濟むのは單に臨時氣違ひであるからだ。所が此の臨時の氣違ひを製造する事は困難なのである。一生涯の狂人は却て出來安いが、筆を執つて紙に向ふ間丈け氣違ひにするのは、如何に巧者な神樣でも餘程骨が折れると見えて、中々拵へて見せない。神が作つてくれん以上は自力で拵へなければならん。

そこで昔から今日迄逆上術も亦逆上とりのけ術と同じく大いに學者の頭腦を惱ました。ある人はインスピレーションを得る爲に毎日澁柿を十二個づゝ食つた。是は澁柿を食へば便祕する、便祕すれば逆上は必ず起るといふ理論から來たものだ。又ある人はかん德利を持つて鐵砲風呂へ飛び込んだ。湯の中で酒を飮んだら逆上するに極まつて居ると考へたのである。其人の說によると之で成功しなければ葡萄酒の湯をわかして這入れば一返で功能があると信じ切つて居る。然し金がないのでつひに實行する事が出來なくて死んで仕舞つたのは氣の毒である。最後に古人の眞似をしたらインスピレーションが起るだらうと思ひ附いた者がある。是はある人の態度動作を眞似ると心的狀態も其人に似てくると云ふ學說を應用したのである。醉つぱらひの樣に管を捲いて居ると、いつの間にか酒飮みの樣な心持ちになる。坐禪をして線香一本の間我慢して居るとどことなく坊主らしい氣分になれる。だから昔からインスピレーションを受けた有名の大家の所作を眞似れば必ず逆上するに相違ない。聞く所によればユーゴーは快走船の上へ寢轉んで文章の趣向を考へたさうだから、船へ乘つて青空を見詰めて居れば必ず逆上受け合ひである。スチーヴンソンは腹這ひに寢て小說を書いたさうだから、打つ伏しになつて筆を持てば屹度血が逆さに上つてくる。斯樣に色々な人が色々の事を考へ出したが、まだ誰も成功しない。先づ今日の所では人爲的逆上は不可能の事となつて居る。殘念だが致し方がない。早晚隨意にインスピレーションを起こし得る時機の到來するは疑ひもない事で、吾輩は人文の爲に此時機の一日も早く來らん事を切望するのである。

　逆上の說明は此位で充分だらうと思ふから、これより愈事件に取りかゝる。然し凡ての大事件の前には必ず小事件が起るものだ。大事件のみを述べて、小事件を逸するのは古來から歷史家の常に陷る弊竇で

ある。主人の逆上も小事件に逢ふ度に一層の劇甚を加へて、遂に大事件を引き起こしたのであるからして、幾分か其發達を順序立てて述べないと、主人が如何に逆上して居るか分りにくい。分りにくいと主人の逆上は空名に歸して、世間からはよもや夫程でもなからうと見くびられるかも知れない。折角逆上しても人から天晴な逆上と謠はれなくては張り合ひがないだらう。是から述べる事件は大小に係はらず主人に取つて名譽な者ではない。事件其物が不名譽であるならば、責めて逆上なりとも、正銘の逆上であつて、決して人に劣るものでないと云ふ事を明らかにして置きたい。主人は他に對して別に是と云つて誇るに足る性質を有して居らん。逆上でも自慢しなくてはほかに骨を折つて書き立ててやる種がない。

落雲館に群がる敵軍は近日に至つて一種のダムダム彈を發明して、十分の休暇、若しくは放課後に至つて盛に北側の空地に向つて砲火を浴びせかける。此ダムダム彈は通稱をボールと稱へて、擂粉木の大きな奴を以て任意之を敵中に發射する仕掛である。いくらダムダムだつて落雲館の運動場から發射するのだから、書齋に立籠つてる主人に中たる氣遣ひはない。敵と雖も彈道のあまり遠過ぎるのを自覺せん事はないのだけれど、そこが軍略である。旅順の戰爭にも海軍から間接射撃を行つて偉大な功を奏したと云ふ話であれば、空地へころがり落つるボールと雖も相當の效果を收め得ぬ事はない。況や一發を送る度に總軍力を合はせてわーと威嚇性大音聲を出だすに於てをやである。主人は恐縮の結果として手足に通ふ血管が收縮せざるを得ない。煩悶の極そこいらを迷付いて居る血が逆さに上る筈である。敵の計は中々巧妙と云うてよろしい。昔希臘にイスキラスと云ふ作家があつたさうだ。此男は學者作家に共通なる頭を有して居たと云ふ。吾輩の所謂學者作家に共通なる頭とは禿と云ふ意味である。何故頭が禿げるかと云へば頭の營

養不足で毛が生長する程活氣がないからに相違ない。學者作家は尤も多く頭を使ふものであつて大槪は貧乏に極まつて居る。だから學者作家の頭はみんな營養不足で、みんな禿げて居る。偖てイスキラスも作家であるから自然の勢禿げなくてはならん。彼はつる／＼然たる金柑頭を有して居つた。所がある日の事、先生例の頭——頭に外行も普段着もないから例の頭に極まつてるが——其例の頭を振り立て振り立て、太陽に照らしつけて往來をあるいて居た。これが間違ひのもとである。禿頭を日にあてて遠方から見ると、大變よく光るものだ。高い木には風があたる、光る頭にも何かあたらなくてはならん。此時イスキラスの頭の上に一羽の鷲が舞つて居たが、見るとどこかで生捕つた一疋の龜を爪の先に攫んだ儘である。龜、鼈抔は美味に相違ないが、希臘時代から堅い甲羅をつけて居る。いくら美味でも甲羅つきではどうする事も出來ん。海老の鬼殼燒はあるが龜の子の甲羅煮は今でさへない位だから、當時は無論なかつたに極まつて居る。さすがの鷲も少々持て餘した折柄、遙かの下界にぴかと光つた者がある。その時鷲はしめたと思つた。あの光つたものの上へ龜の子を落としたなら、甲羅は正しく碎けるに極まつた。碎けたあとから舞ひ下りて中味を頂戴すれば譯はない。さうださうだと覘ひを定めて、かの龜の子を高い所から挨拶も無く頭の上へ落とした。生憎作家の頭の方が龜の甲より軟らかであつたものだから、禿はめちや／＼に碎けて有名なるイスキラスはこゝに無慚の最期を遂げた。それはさうと、解しかねるのは鷲の了見である。例の頭を、作家の頭と知つて落としたのか、又は禿岩と間違へて落としたものか、解決し樣次第で、落雲舘の敵と此鷲とを比較する事も出來るし、又出來なくもなる。主人の頭はイスキラスのそれの如く、又御歷々の學者の如くぴか／＼光つては居らん。然し六疊敷にせよ、苟も書齋と號する一室を控へて、居眠りを

しながらも、六づかしい書物の上へ顏を翳す以上は、學者作家の同類と見做さなければならん。さうすると主人の頭の禿げて居らんのは、まだ禿げるべき資格がないからで、其内に禿げるだらうとは近々此頭の上に落ちかゝるべき運命であらう。して見れば落雲館の生徒が此頭を目懸けて例のダムダム丸を集注するのは策の尤も時宜に適したものと云はねばならん。もし敵が此行動を二週間繼續するならば、主人の頭は畏怖と煩悶の爲め必ず營養の不足を訴へて、金柑とも藥罐とも銅壺とも變化するだらう。猶二週間の砲撃を食らへば金柑は潰れるに相違ない。藥罐は洩るに相違ない。銅壺ならひゞが入るにきまつて居る。此の睹易き結果を豫想せんで、飽く迄も敵と戰鬪を繼續しようと苦心するのは、只本人たる苦沙彌先生のみである。

ある日の午後、吾輩は例の如く椽側へ出て午睡をして虎になつた夢を見た。主人に鷄肉を持つて來いと云ふと、主人がへえと恐る〳〵鷄肉を持つて出る。迷亭が來たから、迷亭に雁が食ひたい、雁鍋へ行つて誂へて來いと云ふと、蕪の香の物と、鹽煎餅と一所に召し上がりますと雁の味が致しますと例の如く茶羅つ鉾を云ふから、大きな口をあいて、うーと唸つて嚇かしてやつたら、迷亭は蒼くなつて山下の雁鍋は廢業致しましたが如何取り計らひませうかと云つた。夫なら牛肉で勘辨するから早く西川へ行つてロースを一斤取つて來い、早くせんと貴樣から食ひ殺すぞと云つたら、迷亭は尻を端折つて馳け出した。吾輩は急にからだが大きくなつたので、椽側一杯に寢そべつて、迷亭の歸るのを待ち受けて居ると、忽ち家中に響く大きな聲がして折角の牛も食はぬ間に夢がさめて吾に歸つた。すると今迄恐る〳〵吾輩の前に平伏して居たと思ひの外の主人が、いきなり後架から飛び出して來て、吾輩の横腹をいやと云ふ程蹴たから、おや

と思ふうち、忽ち庭下駄をつゝかけて木戸から廻つて、落雲館の方へかけて行く。吾輩は虎から急に猫と收縮したのだから何となく極りが惡くもあり、可笑しくもあつたが、主人の此權幕と横腹を蹴られた痛さとで、虎の事はすぐ忘れて仕舞つた。同時に主人が愈出馬して敵と交戰するな、面白いわいと痛いのを我慢して、後を慕つて裏口へ出た。同時に主人がぬすつとうと怒鳴る聲が聞こえる、見ると制帽をつけた十八九になる倔強な奴が一人、四つ目垣を向うへ乘り越えつゝある。やあ遲かつたと思ふうち、彼の制帽は馳け足の姿勢をとつて根據地の方へ韋駄天の如く逃げて行く。主人はぬすつとうが大いに成功したのだ、又もぬすつとうと高く叫びながら追ひかけて行く。然しかの敵に追ひ付く爲には主人の方で垣を越さなければならん。深入りをすれば主人自らが泥棒になる筈である。前申す通り主人は立派なる逆上家であるから勢に乘じてぬすつとうを追ひ懸ける以上は、夫子自身がぬすつとうに成つても追懸ける積りと見えて、引き返す氣色もなく垣の根元迄進んだ。今一歩で彼はぬすつとうの領分に入らなければならんと云ふ間際に、敵軍の中から、薄い髯を勢なく生やした將官がのこ〳〵と出馬して來た。兩人は垣を境に何か談判して居る。聞いて見るとこんな詰まらない議論である。

「あれは本校の生徒です」

「生徒たるべきものが、何で他の邸内へ侵入するのですか」

「いやボールがつい飛んだものですから」

「なぜ斷つて、取りに來ないのですか」

「是から善く注意します」

「そんなら、よろしい」

龍騰虎鬪の壯觀があるだらうと豫期した交渉はかくの如く散文的なる談判を以て無事に迅速に結了した。主人の壯なるは只意氣込み丈である。いざとなると、いつでも是で御仕舞ひだ。恰も吾輩が虎の夢から急に猫に返つた樣な觀がある。吾輩の小事件と云ふのは即ち是である。小事件を記述したあとには、順序として是非大事件を話さなければならん。

主人は座敷の障子を開いて腹這ひになつて、何か思案して居る。恐らく敵に對して防禦策を講じて居るのだらう。落雲館は授業中と見えて、運動場は存外靜かである。只校舍の一室で、倫理の講義をして居るのが手に取る樣に聞こえる。朗々たる音聲で中々うまく述べ立てて居るのを聽くと、全く昨日敵中から出馬して談判の衝に當たつた將軍である。

「……で公德と云ふものは大切な事で、あちらへ行つて見ると、佛蘭西でも獨逸でも英吉利でも、どこへ行つても、此公德の行はれて居らん國はない。又どんな下等な者でも此公德を重んぜぬ者はない。悲しいかな、我が日本に在つては、未だ此點に於て外國と拮抗する事が出來んのである。で公德と申すと何か新しく外國から輸入して來た樣に考へる諸君もあるかも知れんが、さう思ふのは大なる誤りで、昔人も夫子の道一以て之を貫く、忠恕のみ矣と云はれた事がある。此恕と申すのが取りも直さず公德の出所である。私も人間であるから時には大きな聲をして歌抔うたつて見たくなる事がある。然し私が勉強して居る時に隣室のものなどが放歌するのを聽くと、どうしても書物の讀めぬのが私の性分である。であるからして自分が唐詩選でも高聲に吟じたら氣分が晴々してよからうと思ふ時ですら、もし自分の樣に迷惑がる人が隣

家に住んで居つて、知らず／＼其人の邪魔をする様な事があつては濟まんと思うて、さう云ふ時はいつでも控へるのである。かう云ふ譯だから諸君も可成公德を守つて、苟も人の妨害になると思ふ事は決してやつてはならんのである。……」

主人は耳を傾けて、此講話を謹聽して居たが、茲に至つてにやりと笑つた。一寸此にやりの意味を說明する必要がある。皮肉家が此をよんだら此にやりの裏には冷評的分子が交つて居ると思ふだらう。然し主人は決して、そんな人の惡い男ではない。惡いと云ふより、そんなに智慧の發達した男ではない。主人は何故笑つたかと云ふと全く嬉しくつて笑つたのである。倫理の敎師たる者が斯樣に痛切なる訓戒を與へるからは此後は永久ダムダム彈の亂射を免れるに相違ない。當分のうち頭も禿げずに濟む、逆上は一時に直らんでも時機さへくれば漸次回復するだらう、濡れ手拭を頂いて炬燵にあたらなくとも、樹下石上を宿としなくとも大丈夫だらうと鑑定したから、にや／＼と笑つたのである。借金は必ず返す者と二十世紀の今日にも矢張り正直に考へる程の主人が此講話を眞面目に聞くのは當然であらう。

やがて時間が來たと見えて、講話はぱたりと已んだ。他の敎室の課業も皆一度に終つた。すると今迄室內に密封された八百の同勢は鬨の聲をあげて、建物を飛び出した。其勢と云ふものは、一尺程な蜂の巢を敲き落とした如くである。ぶん／＼、わん／＼云うて窓から、戶口から、開きから、苟も穴の開いて居る所なら何の容赦もなく我勝ちに飛び出した。是が大事件の發端である。

先づ蜂の陣立から說明する。こんな戰爭に陣立も何もあるものかと云ふのは間違つて居る。普通の人は戰爭とさへ云へば沙河とか奉天とか又旅順とか其外に戰爭はないものの如くに考へて居る。少し詩がゝつ

た野蠻人になると、アキリスがヘクトーの死骸を引きずつて、トロイの城壁を三匝したとか、燕人張飛が長坂橋に丈八の蛇矛を横たへて、曹操の軍百萬人を睨め返したとか、大袈裟な事計り連想する。連想は當人の隨意だが其以外の戰爭はないものと心得るのは不都合だ。太古蒙昧の時代に在つてこそ、そんな馬鹿氣た戰爭も行はれたかも知れん。然し太平の今日、大日本國帝都の中心に於て斯くの如き野蠻的行動はあり得べからざる奇蹟に屬して居る。如何に騷動が持ち上がつても交番の燒打以上に出る氣遣ひはない。して見ると臥龍窟主人の苦沙彌先生と落雲館裏八百の健兒との戰爭は、まづ東京市あつて以來の大戰爭の一として數へても然るべきものだ。左氏が鄢陵の戰を記するに當つても先づ敵の陣勢から述べて居る。古來から敍述に巧みなるものは皆此筆法を用ひるのが通則になつて居る。だによつて吾輩が蜂の陣立を話すのも仔細なからう。それで先づ蜂の陣立如何と見てあると、四つ目垣の外側に縱列を形づくつた一隊がある。是は主人を戰闘線内に誘致する職務を帶びた者と見える。「降參しねえか」「しねえ〳〵」「駄目だ〳〵」「出てこねえ」「落ちねえかな」「落ちねえ筈はねえ」「吠えて見ろ」「わん〳〵」「わん〳〵」「わん〳〵わん〳〵」是から先は縱隊總がゝりとなつて吶喊の聲を揚ける。縱隊を少し右へ離れて運動場の方面には砲隊が形勝の地を占めて陣地を布いて居る。臥龍窟に面して一人の將官が擂粉木の大きな奴を持つて控へる。之と相對して五六間の間隔をとつて又一人立つ、擂粉木のあとに又一人、是は臥龍窟に顏をむけて突つ立つて居る。かくの如く一直線にならんで向ひ合つて居るのが砲手である。ある人の說によると是はベースボールの練習であつて、決して戰闘準備ではないさうだ。吾輩はベースボールの何物たるを解せぬ文盲漢である。然し聞く所によれば是は米國から輸入された遊戲で、今日中學程度以上の學校に行はる

る運動のうちで尤も流行するものださうだ。米國は突飛な事計り考へ出す國柄であるから、砲隊と間違へても然るべき、近所迷惑の遊戲を日本人に敎ふべく丈其丈親切であつたかも知れない。又米國人は之を以て眞に一種の運動遊戲と心得て居るのだらう。然し純粹の遊戲でも斯樣に四隣を驚かすに足る能力を有して居る以上は使ひ樣で砲擊の用には充分立つ。吾輩の眼を以て觀察した所では、彼等は此運動術を利用して砲火の效を收めんと企てつゝあるとしか思はれない。物は云ひ樣でどうでもなるものだ。慈善の名を借りて詐僞を働き、インスピレーションと號して逆上をうれしがる者がある以上は、ベースボールなる遊戲の下に戰爭をなさんとも限らない。或人の說明は世間一般のベースボールの事であらう。今吾輩が記述するベースボールは此特別の場合に限らるゝベースボール即ち攻城的砲術である。是からダムダム彈を發射する方法を紹介する。直線に布かれたる砲列の中の一人が、ダムダム彈を右の手に握つて擂粉木の所有者に抛りつける。ダムダム彈は何で製造したか局外者には分らない。堅い丸い石の團子の樣なものを御丁寧に皮でくるんで縫ひ合はせたものである。前申す通り此彈丸が砲手の一人の手中を離れて、風を切つて飛んで行くと、向うに立つた一人が例の擂粉木をやつと振り上げて、之を敲き返す。たまには敲き損なつた彈丸が流れて仕舞ふ事もあるが、大概はボカンと大きな音を立てゝ彈ね返る。其勢は非常に猛烈なものである。神經性胃弱なる主人の頭を潰す位は容易に出來る。砲手は是丈で事足るのだが、其周圍附近には彌次馬兼援兵が雲霞の如く附き添うて居る。ボカーンと擂粉木が團子に中たるや否やわー、ぱち〳〵〳〵と、わめく、手を拍つ、やれ〳〵と云ふ。中たつたらうと云ふ。是でも利かねえかと云ふ。恐れ入らねえかと云ふ。降參かと云ふ。是丈ならまだしもであるが、敲き返された彈丸は三度に一度必ず臥龍窟邸內へ

ころがり込む。是がころがり込まなければ攻撃の目的は達せられんのである。ダムダム彈は近來諸所で製造するが隨分高價なものであるから、いかに戰爭でもさう充分な供給を仰ぐ譯に行かん。大抵一隊の砲手に一つ若しくは二つの割である。ポンと鳴る度に此の貴重な彈丸を消費する譯には行かん。そこで彼等はたま拾ひと稱する一部隊を設けて落彈を拾つてくる。落ち場所がよければ拾ふのに骨も折れないが、草原とか人の邸内へ飛び込むとさう容易くは戻つて來ない。だから平生なら成る可く勞力を避ける爲、拾ひ易い所へ打ち落とす筈であるが、此際は反對に出る。目的が遊戯にあるのではない、戰爭に存するのだから、わざとダムダム彈を主人の邸内に降らせる。邸内に降らせる以上は、邸内へ這入つて拾はなければならん。邸内に這入る尤も簡便な方法は四つ目垣を越えるにある。四つ目垣のうちで騷動すれば主人が怒り出さなければならん。然らずんば兜を脱いで降參しなければならん。苦心の餘り頭がだん／＼禿げて來なければならん。

今しも敵軍から打ち出した一彈は、照準誤たず四つ目垣を通り越して桐の下葉を振ひ落として、第二の城壁即ち竹垣に命中した。隨分大きな音である。ニュートンの運動律第一に曰く、もし他の力を加ふるにあらざれば、一度動き出したる物體は均一の速度を以て直線に動くものとす。もし此律のみに因つて物體の運動が支配せらるゝならば主人の頭は此時にイスキラスと運命を同じくしたであらう。幸ひにしてニュートンは第一則を定むると同時に第二則も製造してくれたので主人の頭は危うきうちに一命を取りとめた。運動の第二則に曰く、運動の變化は加へられたる力に比例す、而して其力の働く直線の方向に於て起るものとす。是は何の事だか少しくわかり兼ねるが、かのダムダム彈が竹垣を突き通して、障子を裂き破つて

主人の頭を破壞しなかつた所を以て見ると、ニュートンの御蔭に相違ない。しばらくすると案の如く敵は邸内に乘り込んで來たものと覺しく、「こゝか」「もつと左の方か」抔と棒で以て笹の葉を敲き廻る音がする。凡て敵が主人の邸内へ乘り込んでダムダム彈を拾ふ場合には必ず特別な大きな聲を出す。こつそり這入つて、こつそり拾つては肝心の目的が達せられん。ダムダム彈は貴重かも知れないが、主人にからかふのはダムダム彈以上に大事である。此時の如きは疾くから彈の所在地は判然して居る。竹垣に中たつた音も知つて居る、中たつた場所も分つて居る、而して其の落ちた地面も心得て居る。だから大人しくして拾へば、いくらでも大人しく拾へる。ライブニッツの定義によると空間は出來得べき同在現象の秩序である。いろはにほへとはいつでも同じ順にあらはれてくる。柳の下には必ず鰌が居る。蝙蝠に夕月はつきものである。垣根にボールは不似合かも知れぬ。然し每日々々ボールを人の邸内に拋り込む者の眼に映ずる空間は慥かに此排列に慣れて居る。一眼見ればすぐ分る譯だ。それを斯くの如く騷ぎ立てるのは畢竟するに主人に戰爭を挑む策略である。

かうなつては如何に消極的なる主人と雖も應戰しなければならん。さつき座敷のうちから倫理の講義をきいてにや〳〵して居た主人は奮然として立ち上がつた。猛然として馳け出した。驀然として敵の一人を生捕つた。主人にしては大出來である。大出來には相違ないが、見ると十四五の子供である。髯の生えて居る主人の敵として少し不似合だ。けれども主人はこれで澤山だと思つたのだらう。詫び入るのを無理に引つ張つて椽側の前迄連れて來た。こゝに一寸敵の策略に就いて一言する必要がある。敵は主人が昨日の權幕を見て此樣子では今日も必ず自身で出馬するに相違ないと察した。其時萬一逃げ損じて大僧がつらま

つては事面倒になる。こゝは一年生か二年生位な子供を玉拾ひにやつて危險を避けるに越した事はない。よし主人が子供をつらまへて愚圖々々理窟を捏ね廻したつて、落雲館の名譽には關係しない、こんなものを大人氣もなく相手にする主人の恥辱になる計りだ。敵の考へはかうであつた。是が普通の人間の考へで至極尤もな所である。但敵は相手が普通の人間でないと云ふ事を勘定のうちに入れるのを忘れた計りである。主人に此位の常識があれば昨日だつて飛び出しはしない。逆上は普通の人間を、普通の人間の程度以上に釣るし上げて、常識のあるものに、非常識を與へる者である。女だの、子供だの、車引きだの、馬子だのと、そんな見境のあるうちは、未だ逆上を以て人に誇るに足らん。主人の如く相手にならぬ中學一年生を生捕つて戰爭の人質とする程の了見でなくては逆上家の仲間入りは出來ないのである。可哀さうなのは捕虜である。單に上級生の命令によつて玉拾ひなる雜兵の役を勤めたる所、運わるく非常識の敵將、逆上の天才に追ひ詰められて、垣越える間もあらばこそ、庭前に引き据ゑられた。かうなると敵軍は安閑と味方の恥辱を見て居る譯に行かない。我も我もと四つ目垣を乘りこして木戸口から庭中に亂れ入る。其數は約一ダース許り、ずらりと主人の前に並んだ。大抵は上衣もちよつ着もつけて居らん。白シャツの腕をまくつて、腕組をしたのがある。綿ネルの洗ひざらしを申し譯に背中丈へ乘せて居るのがある。さうかと思ふと白の帆木綿に黑い縁をとつて胸の眞中に花文字を、同じ色に縫ひつけた洒落者もある。いづれも一騎當千の猛將と見えて、丹波の國は篠山から昨夜着し立てで御座ると云はぬ許りに、黑く逞しく筋肉が發達して居る。中學抔へ入れて學問をさせるのは惜しいものだ。漁師か船頭にしたら定めし國家の爲になるだらうと思はれる位である。彼等は申し合はせた如く、素足に股引を高くまくつて、近火の手傳ひにでも

行きさうな風體に見える。彼等は主人の前にならんだぎり黙然として一言も發しない。主人も口を開かない。少時の間雙方共睨めくらをして居るなかに一寸殺氣がある。

「貴樣等はぬすつとうか」と主人は尋問した。大氣焰である。奥歯で嚙み潰した癇癪玉が炎となつて鼻の穴から抜けるので、小鼻がいちじるしく怒つて見える。越後獅子の鼻は人間が怒つた時の恰好を形どつて作つたものであらう。それでなくてはあんなに恐ろしく出來るものではない。

「いえ泥棒ではありません。落雲館の生徒です」

「うそをつけ。落雲館の生徒が無斷で人の邸宅に侵入する奴があるか」

「然し此通りちやんと學校の徽章のついて居る帽子を被つて居ます」

「にせものだらう。落雲館の生徒なら何故むやみに侵入した」

「ボールが飛び込んだものですから」

「なぜボールを飛び込ました」

「つい飛び込んだんです」

「怪しからん奴だ」

「以後注意しますから、今度丈許して下さい」

「どこの何者かわからん奴が垣を越えて邸内に闖入するのを、さう容易く許されると思ふか」

「夫でも落雲館の生徒に違ひないんですから」

「落雲館の生徒なら何年生だ」

「三年生です」
「屹度さうか」
「えゝ」
主人は奥の方を顧みながら、「おいこら〳〵」と云ふ。
埼玉生れのお三が襖をあけて、「へえ」と顔を出す。
「落雲館へ行つて誰か連れてこい」
「誰を連れて参ります」
「誰でもいゝから連れてこい」
下女は「へえ」と答へたが、あまり庭前の光景が妙なのと、使の趣が判然しないのと、さつきからの事件の発展が馬鹿々々しいので、立ちもせず、坐りもせずにや〳〵笑つて居る。主人は是でも大戦争をして居る積りである。逆上的敏腕を大いに振つて居る積りである。然る所自分の召使たる当然此方の肩を持つべきものが、真面目な態度を以て事に臨まんのみか、用を言ひつけるのを聞きながらにや〳〵笑つて居る。益逆上せざるを得ない。
「誰でも構はんから呼んで来いと云ふのに、わからんか。校長でも幹事でも教頭でも……」
「あの校長さんを……」下女は校長と云ふ言葉丈しか知らないのである。
「校長でも、幹事でも教頭でもと云つて居るのにわからんか」
「誰も居りませんでしたら小使でもようしう御座いますか」

「馬鹿を云へ。小使杯に何が分るものか」

こゝに至つて下女も已むを得んと心得たものか「へえ」と云つて出て行つた。使の主意は矢張り飲み込めんのである。小使でも引つ張つて來はせんかと心配して居ると、豈計らんや例の倫理の先生が表門から乘り込んで來た。平然と座に就くを待ち受けた主人は直ちに談判にとりかゝる。

「只今邸内に此者共が亂入致して……」と忠臣藏の樣な古風な言葉を使つたが「本當に御校の生徒でせうか」と少々皮肉に語尾を切つた。

倫理の先生は別段驚いた樣子もなく、平氣で庭前にならんで居る勇士を一通り見廻した上、もとの如く瞳を主人の方にかへして、下の如く答へた。

「左樣、みんな學校の生徒であります。こんな事のない樣に始終訓戒を加へて置きますが……どうも困つたもので……何故君等は垣杯を乘り越すのか」

さすがに生徒は生徒である、倫理の先生に向つては一言もないと見えて何とも云ふものはない。大人しく庭の隅にかたまつて羊の群が雪に逢つた樣に控へて居る。

「丸が這入るのも仕方がないでせう。かうして學校の隣に住んで居る以上は、時々はボールも飛んで來ませう。然し……あまり亂暴ですからな。假令垣を乘り越えるにしても知れない樣に、そつと拾つて行くなら、まだ勘辨の仕樣もありますが……」

「御尤もで、よく注意は致しますが何分多人數の事で……よく是から注意をせんといかんぜ。もしボールが飛んだら表から廻つて、御斷りをして取らなければいかん。いゝか。――廣い學校の事ですからどう

も世話ばかりかけて仕方がないです。で運動は教育上必要なものでありますから、どうも之を禁ずる譯には參りかねるので。之を許すとつい御迷惑になる樣な事が出來ますが、是は是非御容赦を願ひたいと思ひます。其代り向後は屹度表門から廻つて御斷りを致した上で取らせますから」

「いや、さう事が分ればよろしいです。球はいくら御投げになつても差し支へはないです。表からきて一寸斷つて下されば構ひません。では此生徒はあなたに御引き渡し申しますから御連れ歸りを願ひます。いやわざ／＼御呼び立て申して恐縮です」と主人は例に因つて例の如く龍頭蛇尾の挨拶をする。倫理の先生は丹波の笹山を連れて表門から落雲館へ引き上げる。吾輩の所謂大事件は是で一先づ落着を告げた。何のそれが大事件かと笑ふなら、笑ふがいゝ。そんな人には大事件でない迄だ。吾輩は主人の大事件を寫したので、そんな人の大事件を記したのではない。尻が切れて強弩の末勢だ抔と惡口するものがあるなら、是が主人の特色である事を記憶して貰ひたい。主人が滑稽文の材料になるのも亦此特色に存する事を記憶して貰ひたい。十四五の子供を相手にするのは馬鹿だと云ふなら吾輩も馬鹿に相違ないと同意する。だから大町桂月は主人をつらまへて未だ稚氣を免れずと云うて居る。

吾輩は既に小事件を敍し了り、今又大事件を述べ了つたから、是より大事件の後に起る餘瀾を描き出だして、全篇の結びを附ける積りである。凡て吾輩のかく事は、口から出任せのいゝ加減と思ふ讀者もあるかも知れないが、決してそんな輕率な猫ではない。一字一句の裏に宇宙の一大哲理を包含するは無論の事、其一字一句が層々連續すると首尾相應じ前後相照らして、瑣談繊話と思つてうつかりと讀んで居たものが忽然豹變して容易ならざる法語となるんだから、決して寢ころんだり、足を出して五行ごと一度に讀むの

だなどと云ふ無禮を演じてはいけない。柳宗元は韓退之の文を讀むごとに薔薇の水で手を清めたと云ふ位だから、吾輩の文に對してもせめて自腹で雜誌を買つて來て、友人の御餘りを借りて間に合はすと云ふ不始末丈はない事に致したい。是から述べるのは、吾輩自ら餘瀾と號するのだけれど、餘瀾ならどうせつまらんに極まつてゐる。讀まんでもよからう抔と思ふと飛んだ後悔をする。是非仕舞ひ迄精讀しなくてはいかん。

大事件のあつた翌日、余は一寸散歩がしたくなつたから表へ出た。すると向う横町へ曲がらうと云ふ角で金田の旦那と鈴木の藤さんがしきりに立ちながら話しをして居る。金田君は車で自宅へ歸る所、鈴木君は金田君の留守を訪問して引き返す途中で兩人がばつたりと出逢つたのである。近來は金田の邸内も珍しくなくなつたから、滅多にあちらの方角へは足が向かなかつたが、かう御目に懸かつて見ると、何となく御懷かしい。鈴木にも久々だから餘所ながら拜顔の榮を得て置かう。かう決心してのそ〳〵御兩君の佇立して居らるゝ傍近く歩み寄つて見ると、自然兩君の談話が耳に入る。是は吾輩の罪ではない。先方が話して居るのがわるいのだ。金田君は探偵さへ附けて主人の動靜を窺ふ位の程度の良心を有して居る男だから、吾輩が偶然君の談話を拜聽したつて怒らるゝ氣遣ひはあるまい。もし怒られたら君は公平と云ふ意味を御承知ないのである。とにかく吾輩は兩君の談話を聞いたのである。聞きたくて聽いたのではない。聞きたくもないのに談話の方で吾輩の耳の中へ飛び込んで來たのである。

「只今御宅へ伺ひました所で、丁度よい所で御目にかゝりました」と藤さんは丁寧に頭をぴよこつかせる。

「うむ、さうかえ。實は此間から、君に一寸逢ひたいと思つて居たがね。それはよかつた」
「へえ、それは好都合で御座いました。何か御用で」
「いや何、大した事でもないのさ。どうでもいゝんだが、君でないと出來ない事なんだ」
「私に出來る事なら何でもやりませう。どんな事で」
「えゝさう……」と考へて居る。
「何なら、御都合のとき出直して伺ひませう、いつが宜しう御座いますか」
「なあに、そんな大した事ぢやあ無いのさ。――それぢや折角だから頼まうか」
「どうか御遠慮なく……」
「あの變人ね。そら君の舊友さ。苦沙彌とか何とか云ふぢやないか」
「えゝ苦沙彌がどうかしましたか」
「いえ、どうもせんがね。あの事件以來胸糞がわるくつてね」
「御尤もで、全く苦沙彌は傲慢ですから……少しは自分の社會上の地位を考へて居るといゝのですけれども、丸で一人天下ですから」
「そこさ。金に頭はさげん、實業家なんぞ――とか何とか色々小生意氣な事を云ふから、そんなら實業家の腕前を見せてやらう、と思つてね。此間から大分弱らして居るんだが、矢つ張り頑張つて居るんだ。どうも強情な奴だ。驚いたよ」
「どうも損得と云ふ觀念の乏しい奴ですから無暗に痩我慢を張るんでせう。昔からあゝ云ふ癖のある男

で、つまり自分の損になる事に氣が附かないんですから度し難いです」

「アハヽヽほんとに度し難い。色々手を易へ品を易へてやつて見るんだがね。とう〳〵仕舞ひに學校の生徒にやらした」

「そいつは妙案ですな。利目が御座いましたか」

「これにやあ、奴も大分困つた樣だ。もう遠からず落城するに極まつてゐる」

「そりや結構です。いくら威張つても多勢に無勢ですからな」

「さうさ、一人ぢやあ仕方がねえ。それで大分弱つた樣だが、まあどんな樣子か君に行つて見て來てもらはうと云ふのさ」

「はあ、さうですか。なに譯はありません。すぐ行つて見ませう。容子は歸りがけに御報知を致す事にして。面白いでせう、あの頑固なのが意氣銷沈して居る所は屹度見物ですよ」

「あゝ、それぢや歸りに御寄り、待つてゐるから」

「それでは御免蒙ります」

おや今度も亦魂膽だ。成程實業家の勢力はえらいものだ。石炭の燃殼の樣な主人を逆上させるのも、苦悶の結果主人の頭が蠅滑りの難所となるのも、其頭がイスキラスと同樣の運命に陷るのも皆實業家の勢力である。地球が地軸を廻轉するのは何の作用かわからないが、世の中を動かすものは慥かに金である。此金の功力を心得て、此金の威光を自由に發揮するものは實業家諸君を置いて外に一人もない。太陽が無事に東から出て、無事に西へ入るのも全く實業家の御蔭である。今迄はわからずやの窮措大の家に養はれて

實業家の御利益を知らなかつたのは、我ながら不覺である。それにしても頑冥不靈の主人も今度は少し悟らずばなるまい。是でも頑冥不靈で押し通す了見だと危い。主人の尤も貴重する命があぶない。彼は鈴木君に逢つてどんな挨拶をするのか知らん。其模樣で彼の悟り具合も自ら分明になる。愚圖々々しては居られん、猫だつて主人の事だから大いに心配になる。早々鈴木君をすり拔けて御先へ歸宅する。

鈴木君は不相變調子のいゝ男である。今日は金田の事などはおくびにも出さない、頻りに當り障りのない世間話を面白さうにして居る。

「君少し顏色が惡い樣だぜ、どうかしやせんか」

「別にどこも何ともないさ」

「でも蒼いぜ、用心せんといかんよ。時候がわるいからね。よるは安眠が出來るかね」

「うん」

「何か心配でもありやしないか、僕に出來る事なら何でもするぜ。遠慮なく云ひ給へ」

「心配つて、何を？」

「いえ、なければいゝが、もしあればと云ふ事さ。心配が一番毒だからな。世の中は笑つて面白く暮らすのが得だよ。どうも君はあまり陰氣過ぎる樣だ」

「笑ふのも毒だからな。無暗に笑ふと死ぬ事があるぜ」

「冗談云つちやいけない。笑ふ門には福來るさ」

「昔希臘にクリシッパスと云ふ哲學者があつたが、君は知るまい」

「知らない。それがどうしたのさ」
「其男が笑ひ過ぎて死んだんだ」
「へえー、そいつは不思議だね。然しそりや昔の事だから……」
「昔だつて今だつて變りがあるものか。驢馬が銀の丼から無花果を食ふのを見て、可笑しくつて堪らなくつて無暗に笑つたんだ。所がどうしても笑ひがとまらない。とう〱笑ひ死にに死んだんだあね」
「ハ、、然しそんなに留め度もなく笑はなくつてもいゝさ。少し笑ふ――適宜に、――さうするといゝ心持ちだ」
鈴木君がしきりに主人の動靜を研究して居ると、表の門ががら〱とあく。客來かと思ふとさうでない。
「一寸ボールが這入りましたから、取らして下さい」
下女は臺所から「はい」と答へる。書生は裏手へ廻る。鈴木は妙な顔をして何だいと聞く。
「裏の書生がボールを庭へ投げ込んだんだ」
「裏の書生？　裏に書生が居るのかい」
「落雲館と云ふ學校さ」
「あゝさうか、學校か。隨分騒々しいだらうね」
「騒々しいの何のつて。碌々勉強も出來やしない。僕が文部大臣なら早速閉鎖を命じてやる」
「ハ、、大分怒つたね。何か癪に障る事でも有るのかい」
「あるのないのつて、朝から晩迄癪に障り續けだ」

「そんなに癪に障るなら越せばいゝぢやないか」
「誰が越すもんか、失敬千萬な」
「僕に怒つたつて仕方がない。なあに子供だあね。打つちやつて置けばいゝさ」
「君はよからうが僕はよくない。昨日は教師を呼びつけて談判してやつた」
「それは面白かつたね。恐れ入つたらう」
「うん」
此時又門口をあけて、「一寸ボールが這入りましたから取らして下さい」と云ふ聲がする。
「いや大分來るぢやないか、又ボールだぜ君」
「うん、表から來る樣に契約したんだ」
「成程それであんなにくるんだね。さうーか、分つた」
「何が分つたんだい」
「なに、ボールを取りにくる原因がさ」
「今日は是で十六返目だ」
「君うるさくないか。來ない樣にしたらいゝぢやないか」
「來ない樣にするつたつて、來るから仕方がないさ」
「仕方がないと云へば夫迄だが、さう頑固にして居ないでもよからう。人間は角があると世の中を轉がつて行くのが骨が折れて損だよ。丸いものはごろ／＼どこへでも苦なしに行けるが四角なものはころがる

に骨が折れる計りぢやない、轉がるたびに角がすれて痛いものだ。どうせ自分一人の世の中ぢやなし、さう自分の思ふ様に人はならないさ。まあ何だね。どうしても金のあるものに、たてを突いちや損だね。只神經計り痛めて、からだは惡くなる、人は褒めてくれず、向うは平氣なものさ。坐つて人を使ひさへすれば濟むんだから。多勢に無勢、どうせ叶はないのは知れて居るさ。頑固もいゝが、立て通す積りで居るうちに、自分の勉強に障つたり、毎日の業務に煩を及ぼしたり、とゞの詰りが骨折り損の草臥儲けだからね」

「御免なさい。今一寸ボールが飛びましたから、裏口へ廻つて取つてもいゝですか」

「そら又來たぜ」と鈴木君は笑つて居る。

「失敬な」と主人は眞赤になつて居る。

鈴木君はもう大概訪問の意を果たしたと思つたから、それぢや失敬、ちと來給へと歸つて行く。

入れ代つてやつて來たのが甘木先生である。逆上家が自分で逆上家だと名乘る者は昔から例が少い。是は少々變だなと覺つた時は逆上の峠はもう越して居る。主人の逆上は昨日の大事件の際に最高度に達したのであるが、談判も龍頭蛇尾たるに係はらず、どうかかうか始末がついたので其晩書齋でつくづく考へて見ると少し變だと氣が附いた。尤も落雲館が變なのか、自分が變なのか疑ひを存する餘地は充分あるが、何しろ變に違ひない。いくら中學校の隣に居を構へたつて、斯くの如く年が年中肝癪を起こしつゞけはちと變だと氣が附いた。變であつて見ればどうかしなければならん。どうするつたつて仕方がない、矢張り醫者の藥でも飲んで肝癪の源に賄賂でも使つて慰撫するより外に道はない。かう覺つたから平生かかりつけの甘木先生を迎へて診察を受けて見ようと云ふ量見を起こしたのである。賢か愚か、其邊は別問

題として、兎に角自分の逆上に氣が附いた丈は殊勝の志、奇特の心得と云はなければならん。甘木先生は例の如くにこ〳〵と落ち附き拂つて、「如何です」と云ふ。醫者は大抵如何ですと云ふに極まつてる。吾輩は「如何です」と云はない醫者はどうも信用を置く氣にならん。

「先生どうも駄目ですよ」

「え、何そんな事があるものですか」

「一體醫者の藥は利くものでせうか」

甘木先生も驚いたが、そこは溫厚の長者だから、別段激した樣子もなく、

「利かん事もないです」と穩やかに答へた。

「私の胃病なんか、いくら藥を飲んでも同じ事ですぜ」

「決して、そんな事はない」

「ないですかな。少しは善くなりますかな」と自分の胃の事を人に聞いて見る。

「さう急には、癒りません、だん〳〵利きます。今でももとより大分よくなつて居ます」

「さうですかな」

「矢張り肝癪が起りますか」

「起りますとも、夢にも肝癪を起こします」

「運動でも少しなさつたらいゝでせう」

「運動すると猶肝癪が起ります」

甘木先生もあきれ返つたものと見えて、

「どれ一つ拜見しませうか」と診察を始める。診察を終るのを待ちかねた主人に、突然大きな聲を出して、

「先生、先達て催眠術のかいてある本を讀んだら、催眠術を應用して手癖のわるいんだの、色々な病氣だのを直す事が出來ると書いてあつたですが、本當でせうか」と聞く。

「えゝ、さう云ふ療法もあります」

「今でもやるんですか」

「えゝ」

「催眠術をかけるのは六づかしいものでせうか」

「なに譯はありません。私なぞもよく懸けます」

「先生もやるんですか」

「えゝ、一つやつて見ませうか。誰でも懸からなければならん理窟のものです。あなたさへ善ければ懸けて見ませう」

「そいつは面白い、一つ懸けて下さい。私もとうから懸かつて見たいと思つたんです。然し懸かりきりで眼が覺めないと困るな」

「なに大丈夫です。それぢや遣りませう」

相談は忽ち一決して、主人は愈催眠術を懸けられる事となつた。吾輩は今迄こんな事を見た事がない

から心ひそかに喜んで其結果を座敷の隅から拜見する。先生はまづ、主人の眼からかけ始めた。其方法を見て居ると、兩眼の上瞼を上から下へと撫でゝ、主人が既に眼を眠つて居るにも係はらず、しきりに同じ方向へくせを附けたがつて居る。しばらくすると先生は主人に向つて「かうやつて、瞼を撫でゝ居ると、だん／＼眼が重たくなるでせう」と聞いた。主人は「成程重くなりますな」と答へる。先生は猶同じ様に撫でおろし、撫でおろし「だん／＼重くなりますよ、ようござんすか」と云ふ。主人も其氣になつたものか、何とも云はずに默つて居る。同じ摩擦法は又三四分繰り返される。最後に甘木先生は「さあもう開きませんぜ」と云はれた。可哀相に主人の眼はとう／＼潰れて仕舞つた。「もう開かんのですか」「えゝもうあきません」主人は默然として目を眠つて居る。吾輩は主人がもう盲目になつたものと思ひ込んで仕舞つた。しばらくして先生は「あけるなら開いて御覽なさい。到底あけないから」と云はれる。「さうですか」と云ふが早いか主人は普通の通り兩眼を開いて居た。主人はにや／＼笑ひながら「懸かりませんな」と云ふと甘木先生も同じく笑ひながら「えゝ、懸かりません」と云ふ。催眠術は遂に不成功に了る。甘木先生も歸る。

其次に來たのが――主人のうちへ此位客の來た事はない。交際の少い主人の家にしては丸で嘘の樣である。然し來たに相違ない。しかも珍客が來た。吾輩が此珍客の事を一言でも記述するのは單に珍客であるが爲ではない。吾輩は先刻申す通り大事件の餘瀾を描きつゝある。而して此珍客は此餘瀾を描くに方つて逸すべからざる材料である。何と云ふ名前か知らん、只顏の長い上に、山羊の樣な髯を生やして居る四十前後の男と云へばよからう。迷亭の美學者たるに對して、吾輩は此男を哲學者と呼ぶ積りである。なぜ

哲學者と云ふと、何も迷亭の樣に自分で振り散らすからではない。只主人と對話する時の樣子を拜見して居ると如何にも哲學者らしく思はれるからである。是も昔の同窓と見えて兩人共應對振りは至極打ち解けた有樣だ。

「うん迷亭か、あれは池に浮いてる金魚麩の樣にふは〳〵してるね。先達て友人を連れて一面識もない華族の門前を通行した時、一寸寄つて茶でも飲んで行かうと云つて引つ張り込んださうだが隨分呑氣だね」

「夫でどうしたい」

「どうしたか聞いても見なかつたが、――さうさ、まあ天稟の奇人だらう、其代り考へも何もない全く金魚麩だ。鈴木か、――あれがくるのかい、へえー、あれは理窟はわからんが世間的には利口な男だ。金時計は下げられるたちだ。然し奧行きがないから落ちつきがなくつて駄目だ。圓滑圓滑と云ふが、圓滑の意味も何もわかりはせんよ。迷亭が金魚麩ならあれは藁で括つた蒟蒻だね。たゞわるく滑らかでぶるぶる顫へて居る計りだ」

主人は此の奇警な比喩を聞いて、大いに感心したものらしく、久し振りでハヽヽと笑つた。

「そんなら君は何だい」

「僕か、さうさな、僕なんかは――まあ自然薯位な所だらう。長くなつて泥の中に埋まつてるさ」

「君は始終泰然として氣樂な樣だが、羨ましいな」

「なに普通の人間と同じ樣にして居る計りさ。別に羨まれるに足る程の事もない。只難有い事に人を羨

お氣も起らんから、夫丈いゝね」

「會計は近頃豐かかね」

「なに同じ事さ。足るや足らずさ。然し食うて居るから大丈夫。驚かないよ」

「僕は不愉快で、肝癪が起つて堪らん。どつちを向いても不平計りだ」

「不平もいゝさ。不平が起つたら起こして仕舞へば當分はいゝ心持ちになれる。人間は色々だから、さう自分の樣に人にもなれと勸めたつて、なれるものではない。箸は人と同じ樣に持たんと飯が食ひにくいが、自分の麵麭は自分の勝手に切るのが一番都合がいゝ樣だ。上手な仕立屋で着物をこしらへれば、着てから、からだに合つたのを持つてくるが、下手の裁縫屋に誂へたら當分は我慢しないと駄目さ。然し世の中はうまくしたもので、着て居るうちには洋服の方で、こちらの骨格に合はしてくれるから。今の世に合ふ樣に上等な兩親が手際よく生んでくれゝば、それが幸福なのさ。然し出來損なつたら世の中に合はないで我慢するか、又は世の中で合はせる迄辛抱するより外に道はなからう」

「然し僕なんか、いつ迄立つても合ひさうにないぜ、心細いね」

「あまり合はない背廣を無理にきると綻びる。喧嘩をしたり、自殺をしたり騷動が起るんだね。然し君なんか只面白くないと云ふ丈で自殺は無論しやせず、喧嘩だつて遣つた事はあるまい。まあ〱いゝ方だよ」

「所が毎日喧嘩ばかりしてるさ。相手が出て來なくつても怒つて居れば喧嘩だらう」

「成程一人喧嘩だ。面白いや、いくらでもやるがいゝ」

「それがいやになつた」
「そんなよすさ」
「君の前だが、自分の心がそんなに自由になるものぢやない」
「まあ全體何がそんなに不平なんだい」
主人は是に於て落雲館事件を始めとして、今戸燒の狸から、ぴん助、きしやご、其ほかあらゆる不平を擧げて滔々と哲學者の前に述べ立てた。哲學者先生はだまつて聞いて居たが、漸く口を開いて、かやうに主人に説き出した。
「ぴん助やきしやごが何を云つたつて知らん顔をして居ればいゝぢやないか。どうせ下らんのだから。中學の生徒なんか構ふ價値があるものか。なに妨害になる。だつて談判しても、喧嘩をしても其妨害はとれんのぢやないか。僕はさう云ふ點になると西洋人より昔の日本人の方が餘程えらいと思ふ。西洋人のやり方は積極的積極的と云つて近頃大分流行るが、あれは大なる缺點を持つて居るよ。第一積極的と云つたつて際限がない話だ。いつ迄積極的にやり通したつて、滿足と云ふ域とか完全と云ふ境にいけるものぢやない。向うに檜があるだらう。あれが目障りになるから取り拂ふ。と其向うの下宿屋が又邪魔になる。下宿屋を退去させると、其次の家が癪に觸る。どこ迄行つても際限のない話さ。西洋人の遣り口はみんな是さ。ナポレオンでも、アレキサンダーでも勝つて滿足したものは一人もないんだよ。人が氣に喰はん、喧嘩をする、先方が閉口しない、法廷へ訴へる、法廷で勝つ、夫で落着と思ふのは間違ひさ。心の落着は死ぬまで焦つたつて片附く事があるものか。寡人政治がいかんから、代議政體にする。代議政體がいかん

から、又何かにしたくなる。川が生意氣だつて橋をかける、山が氣に喰はんと云つて隧道を掘る。交通が面倒だと云つて鐵道を布く。夫で永久滿足が出來るものぢやない。去ればと云つて人間だもの、どこ迄積極的に我意を通す事が出來るものか。西洋の文明は積極的、進取的かも知れないが、つまり不滿足で一生をくらす人の作つた文明さ。日本の文明は自分以外の狀態を變化させて滿足を求めるのぢやない。西洋と大いに違ふ所は根本的に周圍の境遇は動かすべからざるものと云ふ一大假定の下に發達して居るのだ。親子の關係が面白くないと云つて歐洲人の樣に此關係を改良して落ち附きをとらうとするのではない。親子の關係は在來の儘で到底動かす事が出來んものとして、其關係の下に安心を求むる手段を講ずるにある。夫婦君臣の間柄も其通り、武士町人の區別も其通り、自然其物を觀るのも其通り。——山があつて隣國へ行かれなければ、山を崩すと云ふ考へを起こす代りに隣國へ行かんでも困らないと云ふ工夫をする。山を越さなくとも滿足だと云ふ心持ちを養成するのだ。それだから君見給へ。禪家でも儒家でも屹度根本的に此問題をつらまへる。いくら自分がえらくても世の中は到底意の如くなるものではない、落日を廻らす事も、加茂川を逆に流す事も出來ない。只出來るものは自分の心丈だからね。心さへ自由にする修業をしたら、落雲館の生徒がいくら騷いでも平氣なものではないか。今戸燒の狸でも構はんで居られさうなものだ。ぴん助なんか愚な事を云つたら此馬鹿野郎と澄まして居れば仔細なからう。何でも昔の坊主は人に斬り附けられた時電光影裏に春風を斬るとか何とか洒落た事を云つたと云ふ話だぜ。心の修業がつんで消極の極に達するとこんな靈活な作用が出來るのぢやないかしらん。僕なんか、そんな六づかしい事は分らないが、とにかく西洋人風の積極主義計りがいゝと思ふのは少々誤つて居る樣だ。現に君がいくら積極主義に働い

たつて、生徒が君をひやかしにくるのをどうする事も出來ないぢやないか。君の權力であの學校を閉鎖するか、又は先方が警察に訴へる丈のわるい事をやれば格別だが、さもない以上は、どんなに積極的に出たつたて勝てつこないよ。もし積極的に出るとすれば金の問題になる。多勢に無勢の問題になる。換言すると君が金持に頭を下げなければならんと云ふ事になる。衆を恃む子供に恐れ入らなければならんと云ふ事になる。君の樣な貧乏人で、しかもたつた一人で積極的に喧嘩をしようと云ふのが抑も君の不平の種さ。どうだい分つたかい」

主人は分つたとも、分らないとも言はずに聞いて居た。珍客が歸つたあとで書齋へ這入つて書物も讀まずに何か考へて居た。

鈴木の藤さんは金と衆とに從へと主人に敎へたのである。甘木先生は催眠術で神經を鎭めろと助言したのである。最後の珍客は消極的の修養で安心を得ろと說法したのである。主人がいづれを擇ぶかは主人の隨意である。只此儘では通されないに極まつて居る。

九

主人は痘痕面である。御維新前はあばたも大分流行つたものださうだが、日英同盟の今日から見ると、斯んな顔は聊か時候後れの感がある。あばたの衰退は人口の増殖と反比例して近き將來には全く其迹を絶つに至るだらうとは醫學上の統計から精密に割り出されたる結論であつて、吾輩の如き猫と雖も毫も疑ひを挾む餘地のない程の名論である。現今地球上にあばたつ面を有して生息して居る人間は何人位あるか知らんが、吾輩が交際の區域内に於て打算して見ると、猫には一匹もない。人間にはたつた一人ある。而して其一人が卽ち主人である。甚だ氣の毒である。

吾輩は主人の顔を見る度に考へる。まあ何の因果でこんな妙な顔をして臆面なく二十世紀の空氣を呼吸して居るのだらう。昔なら少しは幅も利いたか知らんが、あらゆるあばたが二の腕へ立ち退きを命ぜられた昨今、依然として鼻の頭や頰の上へ陣取つて頑として動かないのは自慢にならんのみか、却てあばたの體面に關する譯だ。出來る事なら、今のうち取り拂つたらよささうなものだ。あばた自身だつて心細いに違ひない。夫とも黨勢不振の際、誓つて落日を中天に挽回せずんば已まずと云ふ意氣込みで、あんなに横風に顔一面を占領して居るのか知らん。さうするとこのあばたは決して輕蔑の意を以て觀るべきものでない。滔々たる流俗に抗する萬古不磨の穴の集合體であつて、大いに吾人の尊敬に値する凹凸と云つて宜しい。只きたならしいのが缺點である。

主人の子供のときに牛込の山伏町に淺田宗伯と云ふ漢法の名醫があつたが、此老人が病家を見舞ふときには必ずかごに乘つてそろり／＼と參られたさうだ。所が宗伯老が亡くなられて其養子の代になつたら、かごが忽ち人力車に變じた。だから養子が死んで其又養子が跡を繼いだら葛根湯がアンチピリンに化けるかも知れない。かごに乘つて東京市中を練りあるくのは宗伯老の當時ですら餘り見つともいゝものでは無かつた。こんな眞似をして濟まして居たものは舊弊な亡者と、汽車へ積み込まれる豚と、宗伯老とのみであつた。

主人のあばたも其の振はざる事に於ては宗伯老のかごと一般で、はたから見ると氣の毒な位だが、漢法醫にも劣らざる頑固な主人は依然として孤城落日のあばたを天下に曝露しつゝ毎日登校してリードルを教へて居る。

かくの如き前世紀の記念を滿面に刻して教壇に立つ彼は、其生徒に對して授業以外に大なる訓戒を垂れつゝあるに相違ない。彼は「猿が手を持つ」を反覆するよりも「あばたの顏面に及ぼす影響」と云ふ大問題を造作もなく解釋して、不言の間に其答案を生徒に與へつゝある。もし主人の樣な人間が教師として存在しなくなつた曉には、彼等生徒は、此問題を研究する爲に圖書館若しくは博物館へ馳けつけて、吾人がミイラに因つて埃及人を髣髴すると同程度の勞力を費やさねばならぬ。此點から見ると主人の痘痕も冥々の裡に妙に功德を施して居る。

尤も主人は此功德を施す爲に顏一面に疱瘡を種ゑ附けたのではない。是でも實は種ゑ疱瘡をしたのである。不幸にして腕に種ゑたと思つたのが、いつの間にか顏へ傳染して居たのである。其頃は子供の事で今

の様に色氣もなにもなかつたものだから、痒い〳〵と云ひながら無暗に顔中引き搔いたのださうだ。丁度噴火山が破裂してラヴが顔の上を流れた樣なもので、親が生んでくれた顔を臺なしにして仕舞つた。主人は折々細君に向つて疱瘡をせぬうちは玉の樣な男子であつたと云つて居る。淺草の觀音樣で西洋人が振り反つて見た位綺麗だつた抔と自慢する事さへある。成程さうかも知れない。たゞ誰も保證人の居ないのが殘念である。

　いくら功德になつても、訓戒になつても、きたない者は矢つ張りきたないものだから、物心がついて以來と云ふもの主人は大いにあばたに就いて心配し出して、あらゆる手段を盡して此醜態を揉み潰さうとした。所が宗伯老のかごと違つて、いやになつたからと云うてさう急に打ちやられるものではない。今だに歷然と殘つて居る。此歷然が多少氣にかゝると見えて、主人は往來をあるく度每にあばた面を勘定してあるくさうだ。今日何人あばたに出逢つて、其主は男か女か、其場所は小川町の勸工場であるか、上野の公園であるか、悉く彼の日記につけ込んである。彼はあばたに關する知識に於ては決して誰にも讓るまいと確信して居る。先達てある洋行歸りの友人が來た折なぞは「君、西洋人にもあばたがあるかな」と聞いた位だすると其友人が「さうだな」と首を曲げながら餘程考へたあとで「まあ滅多にないね」と云つたら、主人は「滅多になくつても、少しはあるかい」と念を入れて聞き返した。友人は氣のない顏で「あつても乞食か立ん坊だよ。敎育のある人にはない樣だ」と答へたら、主人は「さうかなあ、日本とは少し違ふね」と云つた。

　哲學者の意見によつて落雲館との喧嘩を思ひ留まつた主人は其後書齋に立て籠つてしきりに何か考へて居

る。彼の忠告を容れて靜坐の裡に靈活なる精神を消極的に修養する積りかも知れないが、元來が氣の小さな人間の癖に、あゝ陰氣な懷手計りして居ては碌な結果の出よう筈がない。夫より英書でも質に入れて藝者から喇叭節でも習つた方が遙かにましだと迄は氣が附いたが、あんな偏屈な男は到底猫の忠告抔を聽く氣遣ひはないから、まあ勝手にさせたらよからうと五六日は近寄りもせずに暮らした。

今日はあれから丁度七日目である。禪家抔では一七日を限つて大悟して見せる抔と凄じい勢で結跏する連中もある事だから、うちの主人もどうかなつたらう、死ぬか生きるか何とか片附いたらうと、のそ〳〵縁側から書齋の入口迄來て室内の動靜を偵察に及んだ。

書齋は南向の六疊で、日當りのいゝ所に大きな机が据ゑてある。只大きな机ではわかるまい。長さ六尺、幅三尺八寸、高さ之に叶ふと云ふ大きな机である。無論出來合のものではない。近所の建具屋に談判して寢臺兼机として製造せしめたる稀代の品物である。何の故にこんな大きな机を新調して、又何の故に其上に寢て見よう抔といふ了見を起こしたものか、本人に聞いて見ない事だから頓とわからない。ほんの一時の出來心で、かゝる難物を擔ぎ込んだのかも知れず、或はことによると一種の精神病者に於て吾人が屢々見出だす如く、縁もゆかりもない二個の觀念を連想して、机と寢臺を勝手に結び附けたものかも知れない。兎に角奇拔な考へである。只奇拔丈で役に立たないのが缺點である。吾輩は嘗て主人が此机の上へ晝寐をして寐返りをする拍子に縁側へ轉げ落ちたのを見た事がある。其以來此机は決して寢臺に轉用されない樣である。

机の前には薄つぺらなメリンスの座布團があつて、煙草の火で燒けた穴が三つ程かたまつてる。中から

見える綿は薄黒い。此座布團の上に後向きにかしこまつて居るのが主人である。鼠色によごれた兵兒帶をこま結びにむすんだ左右がだらりと足の裏へ垂れかゝつて居る。此帶へじやれ附いて、いきなり頭を張られたのは此間の事である。滅多に寄り附くべき帶ではない。

まだ考へて居るのか、下手の考へと云ふ喩もあるのにと後から覗き込んで見ると、机の上でいやにぴか〳〵と光つたものがある。吾輩は思はず、續け樣に二三度瞬きをしたが、こいつは變だとまぶしいのを我慢して眤と光るものを見詰めてやつた。すると此光は机の上で動いて居る鏡から出るものだと云ふ事が分つた。然し主人は何の爲に書齋で鏡抔を振り舞はして居るのであらう。鏡と云へば風呂場にあるに極まつてゐる。現に吾輩は今朝風呂場で此鏡を見たのだ。此鏡とくに云ふのは主人のうちには是より外に鏡はないからである。主人が毎朝顏を洗つたあとで髮を分けるときにも此鏡を用ひる。——主人の樣な男が髮を分けるのかと聞く人もあるかも知れぬが、實際彼は他の事に無精なる丈其丈頭を丁寧にする。吾輩が當家に參つてから今に至る迄主人は如何なる炎熱の日と雖も五分刈に刈り込んだ事はない。必ず二寸位の長さにして、それを御大さうに左の方で分けるのみか、右の端を一寸跳ね返して澄まして居る。是も精神病の徴候かも知れない。こんな氣取つた分け方は此机と一向調和しないと思ふが、敢て他人に害を及ぼす程の事でないから、誰も何とも云はない。本人も得意である。分け方のハイカラなのは偖て措いて、なぜあんなに髮を長くするのかと思つたら實はかう云ふ譯である。彼のあばたは單に彼の顏を侵蝕せるのみならず、とくの昔に腦天迄食ひ込んで居るのださうだ。だから若し普通の人の樣に五分刈や三分刈にすると、短かい毛の根元から何十となくあばたがあらはれてくる。いくら撫でても、さすつてもぽつ〳〵がとれな

い。枯野に螢を放つた樣なもので風流かも知れないが、細君の御意に入らんのは勿論の事である。髪さへ長くして置けば露見しないで濟む所を、好んで自己の非を曝くにも當たらぬ譯だ、ならう事なら顏迄毛を生やして、こつちのあばたも内濟にしたい位な所だから、只で生える毛を錢を出して刈り込ませて、私は頭蓋骨の上迄天然痘にやられましたよと吹聽する必要はあるまい。——是が主人の髪を長くする理由で、髪を長くするのが、彼の髪をわける原因で、其原因が鏡を見る譯で、其鏡が風呂場にある所以で、而して其鏡が一つしかないと云ふ事實である。

風呂場にあるべき鏡が、しかも一つしかない鏡が書齋に來て居る以上は、鏡が離魂病に罹つたのか、又は主人が風呂場から持つて來たに相違ない。持つて來たとすれば何の爲に持つて來たのだらう。或は例の消極的修養に必要な道具かも知れない。昔或學者が何とかいふ智識を訪うたら、和尚兩肌を拔いで甎を磨して居られた。何をこしらへなさると質問をしたら、なにさ今鏡を造らうと思うて一生懸命にやつて居る所ぢやと答へた。そこで學者は驚いて、なんぼ名僧でも甎を磨して鏡とする事は出來まいと云うたら、和尚から／＼と笑ひながら、左樣か、夫ぢややめよ、いくら書物を讀んでも道はわからぬのもそんなものぢやろと罵つたと云ふから、主人もそんな事を聞き嚙つて風呂場から鏡でも持つて來て、したり顏に振り廻してゐるのかも知れない。大分物騷になつて來たなと、そつと窺つて居る。

かくとも知らぬ主人は甚だ熱心なる容子を以て一張羅の鏡を見詰めて居る。元來鏡といふものは氣味の惡いものである。深夜蠟燭を立てて、廣い部屋のなかで一人鏡を覗き込むには餘程の勇氣が入るさうだ。吾輩抔は始めて當家の令孃から鏡を顏の前へ押し附けられた時に、はつと仰天して屋敷のまはりを三度馳

け廻つた位である。如何に白晝と雖も、主人の樣にかく一生懸命に見詰めてゐる以上は自分で自分の顔が怖くなるに相違ない。只見てさへあまり氣味のいゝ顔ぢやない。稍あつて主人は「成程きたない顔だ」と獨り言を云つた。自己の醜を自白するのは中々見上げたものだ。樣子から云ふと慥かに氣違ひの所作だが、言ふことは眞理である。是がもう一歩進むと、己れの醜惡な事が怖くなる。人間は吾身が怖ろしい惡黨であると云ふ事實を徹骨徹髓に感じた者でないと苦勞人とは云へない。苦勞人でないと到底解脱は出來ない。主人もこゝ迄來たら序に「おゝ怖い」とでも云ひさうなものであるが中々云はない。「成程きたない顔だ」と云つたあとで、何を考へ出したか、ぷうつと頬つぺたを膨らました。さうしてふくれた頬つぺたを平手で二三度叩いて見る。何のまじなひだか分らない。此時吾輩は何だか此顔に似たものがあるらしいと云ふ感じがした。よく〳〵考へて見ると夫はお三の顔である。序だからお三の顔を一寸紹介するが、それはそれはふくれたものである。此間さる人が穴守稻荷から河豚の提灯をみやげに持つて來てくれたが、丁度あの河豚提灯の樣にふくれて居る。あまりふくれ方が殘酷なので眼は兩方共紛失して居る。尤も河豚のふくれるのは萬遍なく眞丸にふくれるのだが、お三とくると、元來の骨格が多角性であつて、其骨格通りにふくれ上がるのだから、丸で水氣になやんで居る六角時計の樣なものだ。お三が聞いたら嘸怒るだらうから、お三は此位にして又主人の方に歸るが、かくの如くあらん限りの空氣を以て頬つぺたをふくらませたる彼は前申す通り手のひらで頬つぺたを叩きながら「此位皮膚が緊張するとあばたも眼につかん」と又獨語をいつた。

こんどは顔を横に向けて半面に光線を受けた所を鏡にうつして見る。「かうして見ると大變目立つ。矢

つ張りまともに日に向いてる方が平に見える。奇體な物だなあ」と大分感心した樣子であつた。それから右の手をうんと伸ばして、出來る丈鏡を遠距離に持つて行つて靜かに熟視してゐる。「此位離れるとそんなでもない。矢張り近過ぎるといかん。――顔計りぢやない何でもそんなものだ」と悟つた樣なことを云ふ。次に鏡を急に横にした。さうして鼻の根を中心にして眼や額や眉を一度に此中心に向つてくしや〳〵とあつめた。見るからに不愉快な容貌が出來上がつたと思つたら「いや是は駄目だ」と當人も氣がついたと見えて早々やめて仕舞つた。「なぜこんなに毒々しい顔だらう」と少々不審の體で鏡を眼を去る三寸許りの所へ引き寄せる。右の人指しゆびで小鼻を撫でて、撫でた指の頭を机の上にあつた吸取り紙の上へ、うんと押しつける。吸ひ取られた鼻の脂が丸く紙の上へ浮き出した。色々な藝をやるものだ。それから主人は鼻の脂を塗抹した指頭を轉じてぐいと右眼の下瞼を裏返して、俗に云ふべつかんこうを見事にやつて退けた。あばたを研究して居るのか、鏡と睨め競をして居るのか其邊は少々不明である。氣の多い主人の事だから見て居るうちに色々になると見える。それどころではない。若し善意を以て蒟蒻問答的に解釋してやれば、主人は見性自覺の方便として斯樣に鏡を相手に色々な仕草を演じて居るのかも知れない。凡て人間の研究と云ふものは自己を研究するのである。天地と云ひ山川と云ひ日月と云ひ星辰と云ふも皆自己の異名に過ぎぬ。自己を措いて他に研究すべき事項は誰人にも見出だし得ぬ譯だ。若し人間が自己以外に飛び出す事が出來たら、飛び出す途端に自己はなくなつて仕舞ふ。而も自己の研究は自己以外に誰もしてくれる者はない。いくら仕てやりたくても、貰ひたくても、出來ない相談である。夫だから古來の豪傑はみんな自力で豪傑になつた。人の御蔭で自己が分る位なら、自分の代理に牛肉を喰はして、堅いか柔かい

か判斷の出來る譯だ。朝に法を聽き、夕に道を聽き、梧前燈下に書卷を手にするのは皆此自讃を挑撥するの方便の具に過ぎぬ。人の說く法のうち、他の辯ずる道のうち、乃至は五車にあまる蠧紙堆裏に自己が存在する所以がない。あれば自己の幽靈である。尤もある場合に於て幽靈は無靈より優るかも知れない。影を追へば本體に逢着する時がないとも限らぬ。多くの影は大抵本體を離れぬものだ。此意味で主人が鏡をひねくつて居るなら大分話せる男だ。エピクテタス抔を鵜呑みにして學者ぶるよりも遙かにましだと思ふ。

鏡は己惚の釀造器である如く、同時に自慢の消毒器である。もし浮華虛榮の念を以て之に對する時は是程愚物を煽動する道具はない。昔から增上慢を以て己を害し他を戕うた事蹟の三分の二は慥かに鏡の所作である。佛國革命の當時物好きな御醫者さんが改良首きり器械を發明して飛んだ罪をつくつた樣に、始めて鏡をこしらへた人も定めし寐覺めのわるい事だらう。然し自分に愛想の盡きかけた時、自我の萎縮した折は鏡を見る程藥になる事はない。研醜瞭然だ。こんな顏でよくまあ人で候と反りかへつて今日迄暮らされたものだと氣がつくにきまつて居る。そこへ氣がついた時が人間の生涯中尤も難有い期節である。自分で自分の馬鹿を承知して居る程尊く見える事はない。此自覺性馬鹿の前にはあらゆるえらがり屋が悉く頭を下げて恐れ入らねばならぬ。當人は昂然として吾を輕侮嘲笑して居る積りでも、こちらから見ると其の昂然たる所が恐れ入つて頭を下げて居る事になる。主人は鏡を見て己の愚を悟る程の賢者ではあるまい。然し吾が顏に印せられたる痘痕の銘位は公平に讀み得る男である。顏の醜いのを自認するのは心の賤しきを會得する楷梯にもならう。賴母しい男だ。是も哲學者から遣り込められた結果かも知れぬ。

斯様に考へながら猶様子をうかゞつてゐると、夫とも知らぬ主人は思ふ存分あかんべいえをしたあとで「大分充血して居る様だ。矢つ張り慢性結膜炎だ」と言ひながら、人さし指の横つらでぐいぐい充血した瞼をこすり始めた。大方痒いのだらうけれども、只さへあんなに赤くなつて居るものを、かう擦つてはたまるまい。遠からぬうちに鹽鯖の眼玉の如く腐爛するにきまつてる。やがて眼を開いて鏡に向かつた所を見ると、果せるかなどんよりとして北國の冬空の様に曇つて居た。尤も平常からあまり晴れ晴れしい眼ではない。誇大な形容詞を用ひると混沌として黒眼と白眼が剖判しない位漠然として居る。彼の精神が朦朧として不得要領底に一貫して居る如く、彼の眼も曖々然昧々然として長しへに眼窩の奥に漂うて居る。是は胎毒の爲だとも云ふし、或は疱瘡の餘波だとも解釋されて、小さい時分はだいぶ柳の蟲や赤蛙の厄介になつた事もあるさうだが、折角母親の丹精も、あるに其甲斐あらばこそ、今日迄生れた當時の儘でぼんやりして居る。吾輩ひそかに思ふに、此狀態は決して胎毒や疱瘡の爲ではない。彼の眼玉が斯様に晦澁溷濁の悲境に彷徨して居るのは、とりも直さず彼の頭腦が不透不明の實質から構成されてゐて、其作用が暗憺溟濛の極に達して居るから、自然とこれが形體の上にあらはれて、知らぬ母親に入らぬ心配を掛けたんだらう。烟たつて火あるを知り、まなこ濁つて愚なるを證す。して見ると彼の眼は彼の心の象徴で、彼の心は天保錢の如く穴があいて居るから、彼の眼も亦天保錢と同じく、大きな割合に通用しないに違ひない。

今度は髯をねぢり始めた。元來から行儀のよくない髯でみんな思ひ思ひの姿勢をとつて生えて居る。いくら個人主義が流行する世の中だつて、かう町々に我儘を盡されては持主の迷惑は左こそと思ひやられる、主人もこゝに鑑みる所あつて、近頃は大いに訓練を與へて、出來得る限り系統的に按排する様に盡力して

居る。其熱心の效果は空しからずして昨今漸く步調が少しとゝのふ樣になつて來た。今迄は髯が生えて居つたのであるが、此頃は髯を生やして居るのだと自慢する位になつた。熱心は成功の度に應じて鼓舞せられるものであるから、吾が髯の前途有望なりと見てとつた主人は朝な夕な、手がすいて居れば必ず髯に向つて鞭撻を加へる。彼のアムビシヨンは獨逸皇帝陛下の樣に、向上の念の熾な髯を蓄へるにある。それだから毛孔が横向きであらうとも、下向きであらうとも聊か頓着なく十把一からげに握つては、上の方へ引つ張り上げる。髯も嘸かし難儀であらう、所有主たる主人すら時々は痛い事もある。がそこが訓練である否でも應でもさかに扱き上げる。門外漢から見ると氣の知れない道樂の樣であるが、當局者丈は至當の事と心得て居る。敎育者が徒らに生徒の本性を撓めて、僕の手柄を見給へと誇る樣なもので毫も非難すべき理由はない。

主人が滿腔の熱誠を以て髯を調練して居ると、臺所から多角性のお三が郵便が參りましたと、例の如く赤い手をぬつと書齋の中へ出した。右手に髯をつかみ、左手に鏡を持つた主人は、其儘入口の方を振りかへる。八の字の尾に逆立ちを命じた樣な髯を見るや否やお多角はいきなり臺所へ引き戻して、ハヽヽと御釜の蓋へ身をもたして笑つた。主人は平氣なものである。悠々と鏡を卸して郵便を取り上げた。第一信は活版摺りで何だかいかめしい文字が竝べてある。讀んで見ると、

拜啓愈御多祥奉賀候 回顧すれば日露の戰役は連戰連勝の勢に乘じて平和克復を告げ吾忠勇義烈なる將士は今や過半萬歲聲裡に凱歌を奏し國民の歡喜何ものか之に若かん曩に宣戰の大詔煥發せらるゝや義勇公に奉じたる將士は久しく萬里の異境に在りて克く寒暑の苦難を忍び一意戰鬪に從事し命

を國家に捧げたるの至誠は永く銘して忘るべからざる所なり而して軍隊の凱旋は本月を以て殆ど終了を告げんとす依つて本會は來る二十五日を期し本區内一千有餘の出征將校下士卒に對し本區民一般を代表し以て一大凱旋祝賀會を開催し兼て軍人遺族を慰藉せんが爲熱誠之を迎へ聊感謝の微衷を表し度就ては各位の御協賛を仰ぎ此盛典を擧行するの幸を得ば本會の面目不過之と存候間何卒御贊成奮つて義捐あらんことを只管希望の至に堪へず候敬具

とあつて差出人は華族樣である。主人は默讀一過の後直ちに封の中へ卷き納めて知らん顏をして居る。義捐抔は恐らくしさうにない。先達て東北凶作の義捐金を二圓とか三圓とか出してから、逢ふ人每に義捐をとられた、とられたと吹聽して居る位である。義捐とある以上は差し出すもので、とられるものでないには極まつて居る。泥棒にあつたのではあるまいし、とられたとは不穩當である。然るにも關せず、盗難にでも罹つたかの如くに思つてるらしい主人が、如何に軍隊の歡迎だと云つて、如何に華族樣の勸誘だと云つて、强談で持ちかけたらいざ知らず、活版の手紙位で金錢を出す樣な人間とは思はれない。主人から云へば軍隊を歡迎する前に先づ自分を歡迎したいのである。自分を歡迎した後なら大抵のものは歡迎しさうであるが、自分が朝夕に差し支へる間は、歡迎は華族樣に任せて置く了見らしい。主人は第二信を取り上げたが「や是も活版だ」と云つた。

時下秋冷の候に候處貴家益々御隆盛の段奉賀上候陳れば本校儀も御承知の通り一昨々年以來二三野心家の爲に妨げられ一時其極に達し候得共是皆不肖針作が足らざる所に起因すと存じ深く自ら警むる所あり臥薪嘗膽其の苦辛の結果漸く玆に獨力以て我が理想に適するだけの校舍新築費を得るの途を

講じ候其は別義にも御座なく別冊裁縫祕術綱要と命名せる書冊出版の義に御座候本書は不肖針作が多年苦心研究せる工藝上の原理原則に法り眞に肉を裂き血を絞るの思を爲して著述せるものに御座候因つて本書を普く一般の家庭へ製本實費に些少の利潤を附して御購求を願ひ一面斯道發達の一助となすと同時に又一面には僅少の利潤を蓄積して校舍建築費に當つる心算に御座候依つては近頃何共恐縮の至りに存じ候へども本校建築費中へ御寄附被成下と思召し茲に呈供仕候祕術綱要一部を御購求の上御侍女の方へなりとも御分與被成下候て御賛同の意を御表章被成下度伏して懇願仕候匆々敬具

大日本女子裁縫最高等大學院

校長　縫田針作　九拜

とある。主人は此の鄭重なる書面を、冷淡に丸めてほんと屑籠の中へ抛り込んだ。折角の針作君の九拜も臥薪嘗膽も何の役にも立たなかつたのは氣の毒である。第三信にかゝる。第三信は頗る風變りの光彩を放つて居る。狀袋が紅白のだんだらで、飴ん棒の看板の如くはなやかなる眞中に珍野苦沙彌先生虎皮下と八分體で肉太に認めてある。中からお太さんが出るかどうだか受け合はないが表丈は頗る立派なものだ。

若し我を以て天地を律すれば一口にして西江の水を吸ひつくすべく、若し天地を以て我を律すれば我は則ち陌上の塵のみ。すべからく道へ、天地と我と什麼の交渉かある。……始めて海鼠を食ひ出せる人は其膽力に於て敬すべく、始めて河豚を喫せる漢は其勇氣に於て重んずべし。海鼠を食へるものは親鸞の再來にして、河豚を喫せるものは日蓮の分身なり。苦沙彌先生の如きに至つては只干瓢の酢味噌を知るのみ。干瓢の酢味噌を食つて天下の士たるものは、われ未だ之を見ず。……

親友も汝を賣るべし。父母も汝に私かるべし。愛人も汝を棄つべし。富貴は固より頼みがたかるべし。爵祿は一朝にして失ふべし。汝の胸中に祕藏する學問には黴が生えるべし。汝何を恃まんとするか。天地の裡に何をたのまんとするか。神？

神は人間の苦しまぎれに捏造せる土偶のみ。人間のせつな糞の凝結せる臭骸のみ。恃むまじきを恃んで安しと云ふ。咄々、醉漢漫りに胡亂の言辭を弄して、蹣跚として墓に向ふ。油盡きて燈自ら滅す。業盡きて何物をか遺す。苦沙彌先生よろしく御茶でも上がれ。……

人を人と思はざれば畏るゝ所なし。人を人と思はざるものが、吾を吾と思はざる世を憤るは如何。權貴榮達の士は人を人と思はざるに於て得たるが如し。只他の吾を吾と思はぬ時に於て怫然として色を作す。任意に色を作し來れ。馬鹿野郎。……

吾の人を人と思ふとき、他の吾を吾と思はぬ時、不平家は發作的に天降る。此發作的活動を名づけて革命といふ。革命は不平家の所爲にあらず、權貴榮達の士が好んで産する所なり。朝鮮に人蔘多し、先生何が故に服せざる。

在巣鴨　天道公平　再拜

針作君は九拜であつたが、此男は單に再拜丈である。寄附金の依頼でない丈に七拜程横風に構へて居る。寄附金の依頼ではないが其代り頗る分りにくいものだ。どこの雜誌へ出しても沒書になる價値は充分あるのだから、頭腦の不透明を以て鳴る主人は必ず寸斷々々に引き裂いて仕舞ふだらうと思ひの外、打ち返し打ち返し讀み直して居る。こんな手紙に意味があると考へて、飽く迄其意味を究めようといふ決心かも知

れない。凡そ天地の間にわからんものは澤山あるが意味をつけてつかないものは一つもない。どんなむづかしい文章でも解釋しようとすれば容易に解釋の出來るものだ。人間は馬鹿であると云はうが、人間は利口であると云はうが手もなくわかる事だ。夫所ではない。人間は犬であると云つても豚であると云つても別に苦しむ程の命題ではない。山は低いと云つても構はん、宇宙は狹いと云つても差し支へはない。烏が白くて小町が醜婦で苦沙彌先生が君子でも通らん事はない。だからこんな無意味な手紙でも何とか蚊とか理窟さへつければどうとも意味はとれる。ことに主人の樣に知らぬ英語を無理矢理にこぢ附けて說明し通して來た男は猶更意味をつけたがるのである。天氣の惡いのに何故グード・モーニングですかと生徒に問はれて七日間考へたり、コロンバスと云ふ名は日本語で何と云ひますかと聞かれて三日三晩かゝつて答を工夫する位な男には、干瓢の酢味噌が天下の士であらうと、朝鮮の人參を食つて革命を起こさうと隨意な意味は隨處に湧き出る譯である。主人は暫らくしてグード・モーニング流に此の難解の言句を呑み込んだと見えて「中々意味深長だ。何でも余程哲理を研究した人に違ひない。天晴な見識だ」と大變賞賛した。此一言でも主人の愚な所はよく分るが、翻つて考へて見ると聊か尤もな點もある。主人は何に寄らずわからぬものを難有がる癖を有して居る。是はあながち主人に限つた事でもなからう。分らぬ所には馬鹿に出來ないものが潜伏して、測るべからざる邊には何だか氣高い心持ちが起るものだ。夫だから俗人はわからぬ事をわかつた樣に吹聽するにも係はらず、學者はわかつた事をわからぬ樣に講釋する。大學の講義でもわからん事を喋舌る人は評判がよくつて、わかる事を說明する者は人望がないのでもよく知れる。主人が此手紙に敬服したのも意義が明瞭であるからではない。其主旨が那邊に存するか殆ど捕へ難いからである。

急に消息が出て來たり、せつな糞が出てくるからである。だから主人が此文章を尊敬する唯一の理由は、道家で道德經を尊敬し、儒家で易經を尊敬し、禪家で臨濟錄を尊敬すると一般で全く分らんからである。但し全然分らんでは氣が濟まんから勝手な註釋をつけてわかつた顏丈はする。わからんものをわかつた積りで尊敬するのは昔から愉快なものである。――主人は恭しく八分體の名筆を卷き納めて、之を机上に置いた儘懷手をして冥想に沈んで居る。

所へ「頼む頼む」と玄關から大きな聲で案内を乞ふ者がある。聲は迷亭の樣だが、迷亭に似合はずしきりに案内を頼んで居る。主人は先から書齋のうちで其聲を聞いて居るのだが、懷手の儘毫も動かうとしない。取次に出るのは主人の役目でないといふ主義か、此主人は決して書齋から挨拶をした事がない。下女は先刻洗濯石鹸を買ひに出た。細君は憚りである。すると取次に出べきものは吾輩丈になる。吾輩だつて出るのはいやだ。すると客人は沓脱から敷臺へ飛び上がつて障子を開け放つてつか〳〵上がり込んで來た。主人も主人だが客も客だ。座敷の方へ行つたなと思ふと襖を二三度あけたり閉てたりして、今度は書齋の方へやつてくる。

「おい冗談ぢやない。何をして居るんだ、御客さんだよ」

「おや君か」

「おや君かもないもんだ。そこに居るなら何とか云へばいゝのに、丸で空家の樣ぢやないか」

「うん、ちと考へ事があるもんだから」

「考へて居たつて通れ位は云へるだらう」

「云はん事もないさ」
「相變らず度胸がいゝね」
「先達てから精神の修養を力めて居るんだもの」
「物好きだな。精神を修養して返事が出來なくなつた日には來客は御難だね。そんなに落ち附かれちや困るんだぜ。實は僕一人來たんぢやないよ。大變な御客さんを連れて來たんだよ。一寸出て逢つて呉れ給へ」
「誰を連れて來たんだい」
「誰でもいゝから一寸出て逢つてくれ玉へ。是非君に逢ひたいと云ふんだから」
「誰だい」
「誰でもいゝから立ち玉へ」
主人は懐手の儘ぬつと立ちながら「又人を擔ぐ積りだらう」と椽側へ出て何の氣もつかずに客間へ這入り込んだ。すると六尺の床を正面に一個の老人が肅然と端坐して控へて居る。主人は思はず懐から兩手を出してぺたりと唐紙の傍へ尻を片づけて仕舞つた。是では老人と同じく西向きであるから雙方共挨拶の仕様がない。昔堅氣の人は禮義はやかましいものだ。
「さあどうぞあれへ」と床の間の方を指して主人を促す。主人は兩三年前迄は座敷はどこへ坐つても構はんものと心得て居たのだが、其後ある人から床の間の講釋を聞いて、あれは上段の間の變化したもので、上使が坐る所だと悟つて以來決して床の間へは寄りつかない男である。ことに見ず知らずの年長者が頑と

構へて居るのだから上座所ではない。挨拶さへ碌には出來ない。一應頭をさげて、

「さあどうぞあれへ」と向うの云ふ通りを繰り返した。

「いや夫では御挨拶が出來かねますから、どうぞあれへ」

「いえ、夫では……どうぞあれへ」と主人はいゝ加減に先方の口上を眞似て居る。

「どうも、さう御謙遜では恐れ入る。却て手前が痛み入る。どうか御遠慮なく、さあどうぞ」

「御謙遜では……恐れますから……どうか」主人は眞赤になつて口をもごもご云はせて居る。精神修養もあまり效果がない樣である。迷亭君は襖の影から笑ひながら立見をして居たが、もういゝ時分だと思つて、後から主人の尻を押しやりながら、

「まあ出玉へ。さう唐紙へくつついては僕が坐る所がない。遠慮せずに前へ出たまへ」と無理に割り込んでくる。主人は已むを得ず前の方へすり出る。

「苦沙彌君是が每々君に噂をする靜岡の伯父だよ。伯父さん、是が苦沙彌君です」

「いや始めて御目にかゝります。每度迷亭が出て御邪魔を致すさうで、いつか參上の上御高話を拜聽致さうと存じて居りました所、幸ひ今日は御近所を通行致したもので、御禮旁伺つた譯で、どうぞ御見知り置かれまして今後共宜しく」と昔風な口上を淀みなく述べたてる。主人は交際の狹い、無口な人間である上に、こんな古風な爺さんとは殆ど出會つた事がないのだから、最初から多少場うての氣味で辟易して居た所へ、滔々と浴びせかけられたのだから、朝鮮人參も飴ん棒の狀袋もすつかり忘れて仕舞つて、只苦し紛れに妙な返事をする。

「私も……私も……一寸伺ふ筈でありました所……何分よろしく」と云ひ終つて頭を少々疊から上げて見ると老人は未だに平伏して居るので、はつと恐縮して又頭をぴたりと着けた。

老人は呼吸を計つて首をあげながら「私ももとはこちらに屋敷も在つて、永らく御膝元でくらしたものでがすが、瓦解の折にあちらへ參つてから頓と出てこんのでな。今來て見ると丸で方角も分らん位で、――迷亭にでも伴れてあるいてもらはんと、とても用達も出來ません。滄桑の變とは申しながら、御入國以來三百年も、あの通り將軍家の……」と云ひかけると迷亭先生面倒だと心得て、

「伯父さん、將軍家も難有いかも知れませんが、明治の代も結構ですぜ。昔は赤十字なんてものもなかつたでせう」

「それはない。赤十字抔と稱するものは全くない。ことに宮樣の御顏を拜むなどと云ふ事は明治の御代でなくては出來ぬ事だ。わしも長生をした御蔭で此通り今日の總會にも出席するし、宮殿下の御聲もきくし、もう是で死んでもいゝ」

「まあ久し振りで東京見物をする丈でも得ですよ。苦沙彌君、伯父はね、今度赤十字の總會があるのでわざ〳〵靜岡から出て來てね、今日一所に上野へ出掛けたんだが今其歸りがけなんだよ。夫だから此通り先日僕が白木屋へ注文したフロックコートを着て居るのさ」と注意する。成程フロックコートを着て居る。フロックコートは着て居るがすこしもからだに合はない。袖が長過ぎて、襟がおつ開いて、背中へ池が出來て、腋の下が釣るし上がつて居る。いくら不恰好に作らうと云つたつて、かう迄念を入れて形を崩す譯にはゆかないだらう。其上白シャツと白襟が離れ〴〵になつて、仰むくと間から咽喉佛が見える。第一黑

い襟飾りが襟に屬して居るのか、シャツに屬して居るのか判然しない。フロックはまだ我慢が出來るが白髮のチョン髷は甚だ奇觀である。評判の鐵扇はどうかと目を注けると膝の横にちやんと引きつけて居る。主人は此時漸く本心に立ち返つて、精神修養の結果を存分に老人の服裝に應用して少々驚いた。まさか迷亭の話し程ではなからうと思つて居たが、逢つて見ると話し以上である。もし自分のあばたが歷史的研究の材料になるならば、此老人のチョン髷や鐵扇は慥かにそれ以上の價値がある。主人はどうかして此鐵扇の由來を聞いて見たいと思つたが、まさか、打ちつけに質問する譯には行かず、と云つて話しを途切らすのも禮に缺けると思つて、

「大分人が出ましたらう」と極めて尋常な問をかけた。

「いや非常な人で、それで其人が皆わしをじろ〳〵見るので――どうも近來は人間が物見高くなつた樣でがすな。昔はあんなではなかつたが」

「えゝ、左樣、昔はそんなではなかつたですな」と老人らしい事を云ふ。是はあながち主人が知つたか振りをした譯ではない。但朦朧たる頭腦から好い加減に流れ出す言語と見れば差し支へない。

「それにな。皆此胄割へ目を着けるので」

「其鐵扇は大分重いもので御座いませう」

「苦沙彌君、一寸持つて見玉へ。中々重いよ。伯父さん持たして御覽なさい。」

老人は重たさうに取り上げて「失禮でがすが」と主人に渡す。京都の黑谷で參詣人が蓮生坊の太刀を戴く樣なかたで、苦沙彌先生しばらく持つて居たが「成程」と云つた儘老人に返却した。

「みんなが之を鐵扇鐵扇と云ふが、之は冑割と稱へて鐵扇とは丸で別物で……」
「へえ、何にしたもので御座いませう」
「兜を割るので、――敵の目がくらむ所を撃ちとつたものでがす。楠正成時代から用ひたやうで……」
「伯父さん、そりや正成の冑割ですかね」
「いえ、是は誰のかわからん。然し時代は古い。建武時代の作かも知れない」
「建武時代かも知れないが、寒月君は弱つてゐましたぜ。苦沙彌君、今日歸りに丁度いゝ機會だから大學を通り拔ける序に理科へ寄つて、物理の實驗室を見せて貰つた所がね。此冑割が鐵だものだから、磁力の器械が狂つて大騷ぎさ」
「いや、そんな筈はない。是は建武時代の鐵で、性のいゝ鐵だから決してそんな虞はない」
「いくら性のいゝ鐵だつてさうはいきませんよ。現に寒月がさう云つたから仕方がないです」
「寒月といふのは、あのガラス球を磨つて居る男かい。今の若さに氣の毒な事だ。もう少し何かやる事がありさうなものだ」
「可哀相に、あれだつて研究でさあ。あの球を磨り上げると立派な學者になれるんですからね」
「玉を磨りあげて立派な學者になれるなら、誰にでも出來る。わしにでも出來る。ビードロやの主人にでも出來る。あゝ云ふ事をする者を漢土では玉人と稱したもので至つて身分の輕いものだ」と云ひながら主人の方を向いて暗に贊成を求める。
「成程」と主人はかしこまつて居る。

「凡て今の世の學問は皆形而下の學で一寸結構な樣だが、いざとなるとすこしも役には立ちませんてな。昔はそれと違つて侍は皆命懸けの商賣だから、いざと云ふ時に狼狽せぬ樣に心の修業を致したもので、御承知でもあらつしやらうが中々玉を磨つたり針金を綯つたりする樣な容易いものではなかつたのでがすよ」

「成程」と矢張りかしこまつて居る。

「伯父さん、心の修業と云ふものは玉を磨る代りに懷手をして坐り込んでるんでせう」

「夫だから困る。決してそんな造作のないものではない。孟子は求放心と云はれた位だ。邵康節は心要放と說いた事もある。又佛家では中峰和尚と云ふのが具不退轉と云ふ事を敎へて居る。中々容易には分らん」

「到底分りつこありませんね。全體どうすればいゝんです」

「御前は澤菴禪師の不動智神妙錄といふものを讀んだ事があるかい」

「いゝえ、聞いた事もありません」

「心を何處に置かうぞ。敵の身の働きに心を置けば、敵の身の働きに心を取らるゝなり。敵の太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるゝなり。敵を切らんと思ふ所に心を置けば、敵を切らんと思ふ所に心を取らるゝなり。我太刀に心を置けば、我太刀に心を取らるゝなり。われ切られじと思ふ所に心を置けば、切られじと思ふ所に心を取らるゝなり。人の構へに心を置けば、人の構へに心を取らるゝなり。兎角心の置き所はないとある」

「よく忘れずに暗誦したものですね。伯父さんも中々記憶がいゝ。長いぢやありませんか。苦沙彌君分

つたかい」
「成程」と今度も成程で濟まして仕舞つた。
「なあ、あなた、さうで御座りませう。心を何處に置かうぞ、敵の身の働きに心を置けば、敵の働きに心を取らるゝなり。敵の太刀に心を置けば……」
「伯父さん、苦沙彌君にそんな事は、よく心得て居るんですよ。近頃は毎日書齋で精神の修養ばかりして居るんですから、客があつても取次に出ない位心を置き去りにして居るんだから大丈夫ですよ」
「や、それは御奇特な事で――御前抔もちと御一所にやつたらよからう」
「へゝゝそんな暇はありませんよ。伯父さんは自分が樂なからだだもんだから、人も遊んでると思つて入らつしやるんでせう」
「實際遊んでるぢやないかの」
「所が閑中自ら忙ありでね」
「さう粗忽だから修業をせんといかないと云ふのよ。忙中自ら閑ありと云ふ成句はあるが、閑中自ら忙ありと云ふのは聞いた事がない。なあ苦沙彌さん」
「えゝ、どうも聞きません樣で」
「ハヽヽさうなつちやあ敵はない。時に伯父さんどうです。久し振りで東京の鰻でも食つちやあ。竹葉でも奢りませう。是から電車で行くとすぐです」
「鰻も結構だが、今日は是からすい原へ行く約束があるから、わしは是で御免を蒙らう」

「あゝ杉原ですか、あの爺さんも達者ですね」
「杉原ではない、すい原さ。御前はよく間違ひばかり云つて困る。他人の姓名を取り違へるのは失禮だ。よく氣をつけんといけない」
「だつて杉原とかいてあるぢやありませんか」
「杉原と書いてすい原と讀むのさ」
「妙ですね」
「たゞ妙な事があるものか。名目讀みと云つて昔からある事さ。蚯蚓を和名でみゝずと云ふ。あれは目見ずの名目よみで、蝦蟇の事をかいると云ふのと同じ事さ」
「へゝ、驚いたな」
「蝦蟇を打ち殺すと仰向きにかへる。それを名目讀みにかいると云ふ。透垣をすい垣、蔀立をくゝ立、皆同じ事だ。杉原をすぎ原などと云ふのは田舍ものの言葉さ。少し氣を附けないと人に笑はれる」
「ぢや、その、すい原へ是から行くんですか。困つたな」
「なに厭なら御前は行かんでもいゝ。わし一人で行くから」
「一人で行けますかい」
「あるいては六づかしい。車を雇つて頂いて、こゝから乘つて行かう」
主人は畏まつて直ちにお三を車屋へ走らせる。老人は長々と挨拶をしてチョン髷頭へ山高帽をいたゞいて歸つて行く。迷亭はあとへ殘る。

「あれが君の伯父さんか」
「あれが僕の伯父さんさ」
「成程」と再び座蒲團の上に坐つたなり懐手をして考へ込んで居る。
「ハヽヽ豪傑だらう。僕もあゝ云ふ伯父さんを持つて仕合せなものさ。どこへ連れて行つてもあの通りなんだぜ。君驚いたらう」と迷亭君は主人を驚かした積りで大いに喜んで居る。
「なに、そんなに驚きやしない」
「あれで驚かなけりや、膽力の据わつたもんだ」
「然しあの伯父さんは中々えらい所がある樣だ。精神の修養を主張する所なぞは大いに敬服していゝ」
「敬服していゝかね。君も今に六十位になると矢つ張りあの伯父見た樣に、時候おくれになるかも知れないぜ。確かりして呉れ玉へ。時候おくれの廻り持ちなんか氣が利かないよ」
「君はしきりに時候おくれを氣にするが、時と場合によると、時候おくれの方がえらいんだぜ。第一今の學問と云ふものは先へ先へと云ふ丈で、どこ迄行つたつて際限はありやしない。到底滿足は得られやしない。そこへ行くと東洋流の學問は消極的で大いに味がある。心其ものの修業をするのだから」と先達て哲學者から承はつた通りを自說の樣に述べ立てる。
「えらい事になつて來たぜ。何だか八木獨仙君の樣な事を云つてるね」
八木獨仙と云ふ名を聞いて主人ははつと驚いた。實は先達て臥龍窟を訪問して主人を說服に及んで悠然と立ち歸つた哲學者と云ふのが取りも直さず此八木獨仙君であつて、今主人が鹿爪らしく述べ立てて居る

議論は全く此八木獨仙君の受賣なのであるから、知らんと思つた迷亭が此先生の名を間不容髮の際に持ち出したのは暗に主人の一夜作りの假鼻を挫いた譯になる。

「君、獨仙の說を聞いた事があるのかい」と主人は剣呑だから念を推して見る。

「聞いたの、聞かないのつて、あの男の說ときたら、十年前學校に居た時分と今日と少しも變りやしない」

「眞理はさう變るものぢやないから、變らない所が賴母しいかも知れない」

「まあそんな贔屓があるから獨仙もあれで立ち行くんだね。第一八木と云ふ名からして、よく出來てるよ。あの髯が君全く山羊だからね。さうしてあれも寄宿舍時代からあの通りの恰好で生えて居たんだ。名前の獨仙抔も振つたものさ。昔し僕の所へ泊りがけに來て例の通り消極的の修養と云ふ議論をしてね。いつ迄立つても同じ事を繰り返して已めないから、僕が君もう寐ようぢやないかと云ふと、先生氣樂なものさ、いや僕は眠くないと澄まし切つて矢つ張り消極論をやるには迷惑したね。仕方がないから君は眠くなかろうけれども、僕の方は大變眠いのだから、どうか寐て吳れ玉へと賴むやうにして寢かした迄はよかつたが——其晩鼠が出て獨仙君の鼻のあたまを囓つてね。夜なかに大騷ぎさ。先生悟つた樣な事を云ふけれども命は依然として惜しかつたと見えて、非常に心配するのさ。鼠の毒が總身にまはると大變だ、君どうかしてくれと責めるには閉口したね。夫から仕方がないから臺所へ行つて紙片へ飯粒を貼つて胡魔化してやつたあね」

「どうして」

「是は舶來の膏藥で、近來獨逸の名醫が發明したので、印度人抔の毒蛇に嚙まれた時に用ひると即效が

あるんだから、是さへ貼つて置けば大丈夫だと云つてね」
「君は其時分から胡魔化す事に妙を得て居たんだね」
「……すると獨仙君はあゝ云ふ好人物だから、全くだと思つて安心してぐう〳〵寝て仕舞つたのさ。あくる日起きて見ると膏藥の下から絲屑がぶらさがつて例の山羊髯に引つかゝつて居たのは滑稽だつたよ」
「然しあの時分より大分えらくなつた樣だよ」
「君近頃逢つたのかい」
「一週間許り前に來て、長い間話しをして行つた」
「だうりで獨仙流の消極説を振り舞はすと思つた」
「實は其時大いに感心して仕舞つたから、僕も大いに奮發して修養をやらうと思つてる所なんだ」
「奮發は結構だがね。あんまり人の云ふ事を眞に受けると馬鹿を見るぜ。一體君は人の言ふ事を何でも正直に受けるからいけない。獨仙も口丈は立派なものだがね、いざとなると御互と同じものだよ。君九年前の大地震を知つてるだらう。あの時寄宿の二階から飛び降りて怪我をしたものは獨仙君丈なんだからな」
「あれには當人大分説がある樣ぢやないか」
「さうさ、當人に云はせると頗る有難いものさ。禪の機鋒は峻峭なもので、所謂石火の機となると怖い位早く物に應ずる事が出來る。ほかのものが地震だと云つて狼狽へて居る所を自分丈は二階の窓から飛び下りた所に修業の效があらはれて嬉しいと云つて、跛を引きながらうれしがつて居た。負け惜しみの強い

男だ。一體禪とか佛とか云つて騷ぎ立てる連中程あやしいのはないぜ」
「さうかな」と苦沙彌先生少々腰が弱くなる。
「此間來た時禪宗坊主の寢言見た樣な事を何か云つてつたらう」
「うん電光影裏に春風をきるとか云ふ何かを教へて行つたよ」
「其電光さ。あれが十年前からの御箱なんだから可笑しいよ。無覺禪師の電光ときたら寄宿舍中誰も知らないものはない位だつた。夫に先生時々せき込むと間違へて電光影裏を逆さまに春風影裏に電光をきると云ふから面白い。今度ためして見玉へ。向うで落ち附き拂つて述べたてて居る所を、こつちで色々反對するんだね。するとすぐ顛倒して妙な事を云ふよ」
「君の樣ないたづらものに逢つちや叶はない」
「どつちがいたづら者だか分りやしない。僕は禪坊主だの、悟つたのは大嫌ひだ。僕の近所に南藏院と云ふ寺があるが、あすこに八十許りの隱居が居る。それで此間の白雨の時寺内へ雷が落ちて隱居の居る庭先の松の木を割いて仕舞つた。所が和尚泰然として平氣だと云ふから、よく聞き合はせて見るとから聾なんだね。それぢや泰然たる譯さ。大概そんなものさ。獨仙も一人で悟つて居ればいゝのだが、動ともすると人を誘ひ出すから惡い。現に獨仙の御蔭で二人ばかり氣狂にされてるからな」
「誰が」
「誰がつて、一人は理野陶然さ。獨仙の御蔭で大いに禪學に凝り固まつて鎌倉へ出掛けて行つて、とうとう出先で氣狂になつて仕舞つた。圓覺寺の前に汽車の踏切があるだらう、あの踏切内へ飛び込んでレー

ルの上で坐禪をするんだね。夫で向うから來る汽車をとめて見せると云ふ大氣焰さ。尤も汽車の方で留まつてくれたから一命丈はとりとめたが、其代り今度は火に入つて燒けず、水に入つて溺れぬ金剛不壞のからだだと號して寺内の蓮池へ這入つてぶく／＼あるき廻つたもんだ」

「死んだかい」

「其時も幸ひ道場の坊主が通りかゝつて助けてくれたが、其後東京へ歸つてからとう／＼腹膜炎で死んで仕舞つた。死んだのは腹膜炎だが、腹膜炎になつた原因は僧堂で麥飯や萬年漬を食つたせゐだから、詰る所は間接に獨仙が殺した樣なものさ」

「無暗に熱中するのも善し惡しだね」と主人は一寸氣味のわるいといふ顏附をする。

「本當にさ。獨仙にやられたものがもう一人同窓中にある」

「あぶないね。誰だい」

「立町老梅君さ。あの男も全く獨仙にそゝのかされて鰻が天上する樣な事ばかり言つて居たが、とうとう君本物になつて仕舞つた」

「本物たあ何だい」

「とう／＼鰻が天上して、豚が仙人になつたのさ」

「何の事だい、それは」

「八木が獨仙なら、立町は豚仙さ、あの位食ひ意地のきたない男はなかつたが、あの食ひ意地と禪坊主のわる意地が併發したのだから助からない。始めは僕等も氣がつかなかつたが、今から考へると妙な事ば

かり並べて居たよ。僕のうち揃へ來て、君はあの松の木へカツレツが飛んできやしませんかの、僕の國では蒲鉾が板へ乘つて泳いで居ますのつて、頻りに警句を吐いたものさ。只吐いて居るうちはよかつたが、君表のどぶへ金とんを掘りに行きませうと促すに至つては僕も降參したね。夫から二三日すると遂に豚仙になつて巣鴨へ收容されて仕舞つた。元來豚なんぞが氣狂になる資格はないんだが、全く獨仙の御蔭であすこ迄漕ぎ附けたんだね。獨仙の勢力も中々えらいよ」

「へえ、今でも巣鴨に居るのかい」

「居るだんぢやない。自大狂で大氣燄を吐いて居る。近頃は立町老梅なんて名はつまらないと云ふので、自ら天道公平と號して、天道の權化を以て任じて居る。すさまじいものだよ。まあ一寸行つて見給へ」

「天道公平？」

「天道公平だよ。氣狂の癖にうまい名をつけたものだね。時々は孔平とも書く事がある。夫で何でも世人が迷つてるから是非救つてやりたいと云ふので、無暗に友人や何かへ手紙を出すんだね。僕も四五通貰つたが、中には中々長い奴があつて不足税を二度許りとられたよ」

「夫ぢや僕の所へ來たのも老梅から來たんだ」

「君の所へも來たかい。そいつは妙だ。矢つ張り赤い状袋だらう」

「うん、眞中が赤くて左右が白い。一風變つた状袋だ」

「あれはね、わざ／＼支那から取り寄せるのださうだよ。天の道は白なり、地の道は白なり、人は中間に在つて赤しと云ふ豚仙の格言を示したんだつて……」

「中々因緣のある狀袋だね」

「氣狂に大いに凝つたものさ。さうして氣狂になつても食ひ意地丈は依然として存して居るものと見えて、每回必ず食物の事がかいてあるから奇妙だ。君の所へも何とか云つて來たらう」

「うん海鼠の事がかいてある」

「老梅は海鼠が好きだつたからね。尤もだ。夫から？」

「夫から河豚と朝鮮人蔘か何か書いてある」

「河豚と朝鮮人蔘の取り合せは旨いね。大方河豚を食つて中たつたら朝鮮人蔘を煎じて飲めとでも云ふ積りなんだらう」

「さうでもない樣だ」

「さうでなくても構はないさ。どうせ氣狂だもの。夫つきりかい」

「まだある。苦沙彌先生御茶でも上がれと云ふ句がある」

「アハヽヽ、御茶でも上がれはきびし過ぎる。夫で大いに君をやり込めた積りに違ひない。大出來だ。天道公平君萬歲だ」と迷亭先生は面白がつて、大いに笑ひ出す。主人は少からざる尊敬を以て反覆讀誦した書翰の差出人が金箔つきの狂人であると知つてから、最前の熱心と苦心が何だか無駄骨の樣な氣がして腹立たしくもあり、又瘋癲病者の文章を左程心勞して翫味したかと思ふと恥づかしくもあり、最後に狂人の作に是程感服する以上は自分も多少神經に異狀がありはせぬかとの疑念もあるので、立腹と、慚愧と、心配の合併した狀態で何だか落ち付かない顔附をして控へて居る。

折から表格子をあら〻かに開けて、重い靴の音が二足程沓脱に響いたと思つたら「一寸頼みます、一寸頼みます」と大きな聲がする。主人の尻の重いに反して迷亭は又頗る氣輕な男であるから、お三の取次に出るのも待たず、通れと云ひながら隔ての中の間を二足許りに飛び越えて玄關に躍り出した。人のうちへ案内も乞はずにつか〳〵這入り込む所は迷惑の樣だが、人のうちへ這入つた以上は書生同樣取次を務めるから甚だ便利である。いくら迷亭でも御客さんには相違ない、其御客さんが玄關へ出張するのに主人たる苦沙彌先生が座敷へ構へ込んで動かん法はない。普通の男ならあとから引き續いて出陣すべき筈であるが、そこが苦沙彌先生である。平氣に座布團の上へ尻を落ち附けて居る。但し落ち附けて居るのと、落ち附いて居るのとは、其趣は大分似て居るが、其實質は餘程違ふ。

玄關へ飛び出した迷亭は何かしきりに辯じて居たが、やがて奥の方を向いて「おい御主人一寸御足勞だが出てくれ玉へ。君でなくつちや、間に合はない」と大きな聲を出す。主人は已むを得ず懷手の儘のそり〳〵と出てくる。見ると迷亭君は一枚の名刺を握つた儘しやがんで挨拶をして居る。頗る威嚴のない腰つきである。其名刺には警視廳刑事巡査吉田虎藏とある。虎藏君と並んで立つて居るのは二十五六の背の高い、いなせな唐棧づくめの男である。妙な事に此男は主人と同じく懷手をした儘、無言で突つ立つてる。何だか見た樣な顏だと思つてよく〳〵觀察すると、見た樣な所ぢやない。此間深夜御來訪になつて山の芋を持つて行かれた泥棒君である。おや今度は白晝公然と玄關から御出でになつたな。

「おい、此方は刑事巡査で先達ての泥棒をつらまへたから、君に出頭しろと云ふんで、わざ〳〵御出でになつたんだよ」

主人は漸く刑事に踏み込んだ理由が分つたと見えて、頭をさげて泥棒の方を向いて丁寧に御辭儀をした。泥棒の方が虎蔵君より男振りがいゝので、こつちが刑事だと早合點をしたのだらう。泥棒も驚いたに相違ないが、まさか私が泥棒ですよと斷る譯にも行かなかつたと見えて、澄まして立つて居る。矢張り懐手の儘である。尤も手錠をはめて居るのだから、出さうと云つても出る氣遣ひはない。通例のものなら此樣子で大抵はわかる筈だが、この主人は當世の人間に似合はず、無暗に役人や警察を難有がる癖がある。御上の御威光となると非常に恐ろしいものと心得て居る。尤も理論上から云ふと巡査などは自分達が金を出して番人に雇つて置くのだ位の事は心得て居るのだが、實際に臨むといやにへえ／＼する。主人のおやぢは其昔場末の名主であつたから、上の者にぴよこ／＼頭を下げて暮らした習慣が因果となつて、斯樣に子に酬つたのかも知れない。まことに氣の毒な至りである。

巡査は可笑しかつたと見えて、にや／＼笑ひながら「あしたね、午前九時迄に日本堤の分署迄來て下さい。盗難品は何と何でしたかね」

「盗難品は……」と云ひかけたが、生憎先生大概忘れて居る。只覺えて居るのは多々良三平の山の芋丈である。山の芋抔はどうでも構はんと思つたが、盗難品は……と云ひかけてあとが出ないのは如何にも與太郎の樣で體裁がわるい。人が盗まれたのならいざ知らず、自分が盗まれて置きながら、明瞭の答の出來んのは一人前ではない證據だと、思ひ切つて「盗難品は……山の芋一箱」とつけた。

泥棒は此時餘程可笑しかつたと見えて、下を向いて着物の襟へあごを入れた。迷亭はアハヽヽと笑ひながら「山の芋が餘程惜しかつたと見えるね」と云つた。巡査丈は存外眞面目である。

「山の芋は出ない樣だが外の物件は大概戻つた樣です。――まあ來て見たら分るでせう。夫でね、下げ渡したら請書が入るから、印形を忘れずに持つて御出でなさい。――九時迄に來なくつてはいかん。日本堤分署です。――淺草警察署の管轄内の日本堤分署です。――それぢや左樣なら」と獨りで辨じて歸つて行く。泥棒君も續いて門を出る。手が出せないので、門をしめる事が出來ないから開け放しの儘行つて仕舞つた。恐れ入りながらも不平と見えて、主人は頰をふくらして、ぴしやりと立て切つた。

「アハヽヽ君は刑事を大變尊敬するね。つねにあゝ云ふ恭謙な態度を持つてるといゝ男だが、君は巡査丈に丁寧なんだから困る」

「だつて折角知らせて來てくれたんぢやないか」

「知らせに來るつたつて、先は商賣だよ。當り前にあしらつてりや澤山だ」

「然し只の商賣ぢやない」

「無論只の商賣ぢやない。探偵と云ふいけすかない商賣さ。あたり前の商賣より下等だね」

「君そんな事を云ふと、ひどい目に逢ふぜ」

「ハヽヽ、ぢや刑事の惡口はやめにしよう。然し君刑事を尊敬するのは、まだしもだが、泥棒を尊敬するに至つては、驚かざるを得んよ」

「誰が泥棒を尊敬したい」

「君がしたのさ」

「僕が泥棒に近附があるもんか」

「あるもんかつて君は泥棒に御辞儀をしたぢやないか」
「いつ?」
「たつた今平身低頭したぢやないか」
「馬鹿あ云つてら、あれは刑事だね」
「刑事があんななりをするものか」
「刑事だからあんななりをするんぢやないか」
「頑固だなあ」
「君こそ頑固だ」
「まあ第一、刑事が人の所へ来てあんなに懐手なんかして、突つ立つて居るものかね」
「刑事だつて懐手をしないとは限るまい」
「さう猛烈にやつて来ては恐れ入るがね。君が御辞儀をする間あいつは始終あの儘で立つて居たのだぜ」
「刑事だから其位の事はあるかも知れんさ」
「どうも自信家だな。いくら云つても聞かないね」
「聞かないさ。君は口先許りで泥棒だ泥棒だと云つてる丈で、其泥棒が這入る所を見届けた訳ぢやないんだから、たゞさう思つて独りで強情を張つてるんだ」
迷亭も是に於て到底済度すべからざる男と断念したものと見えて、例に似ず黙つて仕舞つた。主人は久

し損りで迷亭を凹ましたと思つて大得意である。迷亭から見ると主人の價値は強情を張つた丈下落した積りであるが、主人から云ふと強情を張つた丈迷亭よりえらくなつたのである。世の中にはこんな頓珍漢な事はまゝある。強情さへ張り通せば勝つた氣で居るうちに、當人の人物としての相場は遙かに下落して仕舞ふ。不思議な事に頑固の本人は死ぬ迄自分は面目を施した積りかなにかで、其時以後人が輕蔑して相手にしてくれないのだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こんな幸福を豚的幸福と名づけるのださうだ。

「兎も角もあした行く積りかい」

「行くとも、九時迄に來いと云ふから、八時から出て行く」

「學校はどうする」

「休むさ。學校なんか」と擲きつける樣に云つたのは壯なものだつた。

「えらい勢だね。休んでもいゝのかい」

「いゝとも僕の學校は月給だから、差し引かれる氣遣ひはない、大丈夫だ」と眞直に白狀して仕舞つた。ずるい事もずるいが、單純なことも單純なものだ。

「君、行くのはいゝが路を知つてるかい」

「知るものか。車に乘つて行けば譯はないだらう」とぷん〱して居る。

「靜岡の伯父に讓らざる東京通なるには恐れ入る」

「いくらでも恐れ入るがいゝ」

寄ると同系中に引き摺り込まれさうである。自分が文章の上に於て驚嘆の餘、是こそ大見識を有して居る偉人に相違ないと思ひ込んだ天道公平事實名立町老梅は純然たる狂人であつて、現に巣鴨の病院に起居してゐる。迷亭の記述が棒大のざれ言にもせよ、彼が瘋癲院中に盛名を擅にして天道の主宰を以て自ら任ずるは恐らく事實であらう。かう云ふ自分もことに因ると少々御座つて居るかも知れない。同氣相求め、同類相集まると云ふから、氣狂の說に感服する以上は――少くとも其文章言辭に同情を表する以上は――自分も亦氣狂に緣の近い者であるだらう。よし同型中に鑄化せられんでも軒を比べて狂人と隣り合せに居を卜するとすれば、境の壁を一重打ち拔いていつの間にか同室内に膝を突き合はせて談笑する事がないとも限らん。こいつは大變だ。成程考へて見ると此程中から自分の腦の作用は我ながら驚く位奇上に妙を點じ變傍に珍を添へて居る。腦漿一勺の化學的變化は兎に角意志の動いて行爲となる所、發して言辭と化する邊りには不思議にも中庸を失した點が多い。舌上に竜泉なく腋下に清風を生ぜざるも、齒根に狂臭あり筋頭に瘋味あるを奈何せん。愈大變だ。ことによるともう既に立派な患者になつて居るのではないかしらん。まだ幸ひに人を傷つけたり、世間の邪魔になる事をし出かさんから矢張り町内を追ひ拂はれずに、東京市民として存在して居るのではなからうか。こいつは消極の積極のと云ふ段ぢやない。先づ脈搏からして檢査しなくてはならん。然し脈には變りはない樣だ。頭は熱いかしらん。是も別に逆上の氣味でもない。然しどうも心配だ。

「かう自分と氣狂ばかりを比較して類似の點ばかり勘定して居ては、どうしても氣狂の領分を脫する事は出來さうにもない。是は方法がわるかつた。氣狂を標準にして自分を其方へ引きつけて解釋するからこ

んな結論か出るのである。もし健康な人を本位にして其傍へ自分を置いて考へて見たら或は反對の結果が出るかも知れない。夫には先づ手近から始めなくてはいかん。第一に今日來たフロックコートの伯父さんはどうだ。心をどこに置かうぞ……あれも少々怪しい樣だ。第二は寒月はどうだ。朝から晩迄辨當持參で球ばかり磨いて居る。これも棒組だ。第三にと……迷亭？あれはふざけ廻るのを天職の樣に心得て居る。全く陽性の氣狂に相違ない。第四はと……金田の細君。あの毒惡な根性は全く常識をはづれて居る。純然たる氣じるしに極まつてる。第五は金田君の番だ。金田君には御目に懸かつた事はないが、先づあの細君を恭しくおつ立てて、琴瑟調和して居る所を見ると非凡の人間と見立てて差し支へあるまい。非凡は氣狂の異名であるから、先づ是も同類にして置いて構はない。夫からと、――まだあるある。落雲館の諸君子だ。年齡から云ふとまだ芽生だが、躁狂の點に於ては一世を空しうするに足る天晴な豪のものである。から數へ立てて見ると大抵のものは同類の樣である。案外心丈夫になつて來た。ことによると社會はみんな氣狂の寄り合ひかも知れない。氣狂が集合して鎬を削つてつかみ合ひ、いがみ合ひ、罵り合ひ、奪ひ合つて、其全體が團體として細胞の樣に崩れたり、持ち上がつたり、持ち上がつたり、崩れたりして暮らして行くのを社會と云ふのではないか知らん。其中で多少理窟がわかつて、分別のある奴は却て邪魔になるから、瘋癲院といふものを作つて、こゝへ押し込めて出られない樣にするのではないかしらん。すると瘋癲院に幽閉されて居るものは普通の人で、院外にあばれて居るものは却て氣狂である。氣狂も孤立して居る間はどこ迄も氣狂にされて仕舞ふが、團體となつて勢力が出ると、健全の人間になつて仕舞ふのかも知れない。大きな氣狂が金力や威力を濫用して多くの小氣狂を使役して亂暴を働いて、人から立派な男だ

と云はれて居る者は少くない。何が何だか分らなくなつた」

以上は主人が當夜煢々たる孤燈の下で沈思熟慮した時の心的作用を有の儘に描き出したものである。彼の頭腦の不透明なる事はこゝにも著しくあらはれて居る。彼はカイゼルに似た八字髯を蓄ふるにも係らず狂人と常人の差別さへなし得ぬ位の凡倉である。のみならず彼は折角此問題を提供して自己の思索力に訴へながら、遂に何等の結論に達せずしてやめて仕舞つた。何事によらず彼は徹底的に考へる腦力のない男である。彼の結論の茫漠として、彼の鼻孔から迸出する「朝日」の烟の如く捕捉しがたきは、彼の議論に於ける唯一の特色として記憶すべき事實である。

吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑ふものがあるかも知れんが、此位な事は猫にとつて何でもない。吾輩は是で讀心術を心得て居る。いつ心得たなんて、そんな餘計な事は聞かんでもいゝ。ともかくも心得て居る。人間の膝の上へ乘つて眠つてゐるうちに、吾輩は吾輩の柔らかな毛衣をそつと人間の腹にこすり付ける。すると一道の電氣が起つて彼の腹の中の行きさつが手にとる樣に吾輩の心眼に映ずる。先達て抔は主人がやさしく吾輩の頭を撫で廻しながら、突然此猫の皮を剝いでちやん〳〵にしたら嘸あたゝかでよからうと飛んでもない了見をむら〳〵と起したのを即座に氣取つて覺えずひやつとした事さへある。怖い事だ。當夜主人の頭のなかに起つた以上の思想もそんな譯合で幸ひにも諸君に御報道する事が出來る樣に相成つたのは吾輩の大いに榮譽とする所である。但し主人は「何が何だか分らなくなつた」迄考へて其あとはぐう〳〵寢て仕舞つたのである、あすになれば何をどこ迄考へたか丸で忘れてしまふに違ひない。向後もし主人が氣狂に就いて考へる事があるとすれば、もう一

返出直して頭から考へ始めなければならぬ。さうすると果してこんな徑路を取つて、こんな風に「何が何だか分らなくなる」かどうだか保證出來ない。然し何返考へ直しても、何條の徑路をとつて進まうとも、遂に「何が何だか分らなくなる」丈は慥かである。

「あなた、もう七時ですよ」と襖越しに細君が聲を掛けた。主人は眼がさめて居るのだか、寐て居るのだか、向うむきになつたぎり返事もしない。返事をしないのは此男の癖である。是非何とか口を切らなければならない時はうんと云ふ。此うんも容易な事では出てこない。人間も返事がうるさくなる位無精になると、どことなく趣があるが、こんな人に限つて女に好かれた試しがない。現在連れ添ふ細君ですら、あまり珍重して居らん樣だから、其他は推して知るべしと云つても大した間違ひはなからう。親兄弟に見離され、あかの他人の傾城に可愛がらるゝ筈がない、とある以上は、細君にさへ持てない主人が、世間一般の淑女に氣に入る筈がない。何も異性間に不人望な主人を此際ことさらに暴露する必要もないのだが、本人に於て存外な考へ違ひをして、全く年廻りのせゐで細君に好かれないのだ杯と理窟をつけて居ると、迷ひの種であるから、自覺の一助にもならうかとの親切心から一寸申し添へる迄である。

言ひつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても、先方が其注意を無にする以上は、向うをむいてうんさへ發せざる以上は、其曲は夫にあつて、妻にあらずと論定したる細君は、遲くなつても知りませんよと云ふ姿勢で箒とはたきを擔いで書齋の方へ行つてしまつた。やがてぱた〱書齋中を叩き散らす音がするのは例によつて例の如き掃除を始めたのである。一體掃除の目的は運動の爲か、遊戯の爲か、掃除の役目を帶びぬ吾輩の關知する所でないから、知らん顏をして居れば差し支へないものゝ、こゝの細君の掃除法

の如きに至つては頗る無意義のものと云はざるを得ない。何が無意義であると云ふと、此細君は單に掃除の爲に掃除をして居るからである。はたきを一通り障子へかけて、箒を一應疊の上へ滑らせる。夫で掃除は完成した者と解釋して居る。掃除の原因及び結果に至つては微塵の責任だに背負つて居らん。かるが故に綺麗な所は毎日綺麗だが、ごみのある所、ほこりの積もつて居る所はいつでもごみが溜まつてほこりが積もつて居る。告朔の餼羊と云ふ故事もある事だから、是でもやらんよりはましかも知れない。然しやつても別段主人の爲にはならない。ならない所を毎日々々御苦勞にもやる所が細君のえらい所である。細君と掃除とは多年の習慣で、器械的の連想をかたちづくつて頑として結びつけられて居るにもかゝはらず、掃除の實に至つては、細君が未だ生れざる以前の如く、はたきと箒が發明せられざる昔の如く、毫も擧がつて居らん。思ふに此兩者の關係は形式論理學の命題に於ける名辭の如く其内容の如何にかゝはらず結合せられたものであらう。

吾輩は主人と違つて、元來が早起きの方だから、此時既に空腹になつて參つた。到底うちのものさへ膳に向かはぬさきから、猫の身分を以て朝めしに有りつける譯のものではないが、そこが猫の淺ましさで、もしや烟の立つた汁の香が鮑貝の中から、うまさうに立ち上がつて居りはすまいかと思ふと、ぢつとして居られなくなつた。はかない事を、果敢ないと知りながら頼みにするときは、只其頼み丈を頭の中に描いて、動かずに落ち附いて居る方が得策であるが、さてさうは行かぬ者で、心の願ひと實際が、合ふか合はぬか是非共試驗して見たくなる。試驗して見れば必ず失望するにきまつてる事ですら、最後の失望を自ら事實の上に受け取る迄は承知出來んものである。吾輩は堪らなくなつて臺所へ這ひ出した。先づへつゝひ

の陰にある鮑貝の中を覗いて見ると案に違はず、ゆうべ舐め盡した儘森然として、怪しき光が引窓を洩る初秋の日影にかゞやいて居る。お三は既に炊き立ての飯を御櫃に移して、今や七輪にかけた鍋の中をかきまぜつゝある。釜の周圍には沸き上がつて流れだした米の汁が、かさ／＼に幾條となくこびり附いて、あるものは吉野紙を貼りつけた如くに見える。もう飯も汁も出來て居るのだから食はせてもよささうなものだと思つた。こんな時に遠慮するのは詰まらない話だ、よしんば自分の望み通りにならなくつたつて元々で損は行かないのだから、思ひ切つて朝飯の催促をしてやらう、いくら居候の身分だつてひもじいに變りはない。と考へ定めた吾輩はにやあ／＼と甘へる如く訴ふるが如く、或は又怨ずるが如く鳴いて見た。お三は一向顧る氣色がない。生れ附いての御多角だから人情に疎いのはとうから承知の上だが、そこをうまく鳴き立てて同情を起こさせるのが、こつちの手際である。今度はにやご／＼とやつて見た。其鳴き聲は吾ながら悲壯の音を帶びて天涯の遊子をして斷腸の思ひあらしむるに足ると信ずる。お三は恬として顧みない。此女は聾なのかも知れない。聾では下女が勤まる譯がないが、ことによると猫の聲丈には聾なのだらう。世の中には色盲といふのがあつて、當人は完全な視力を具へて居る積りでも、醫者から云はせると片輪ださうだが、此お三は聲盲なのだらう。聲盲だつて片輪に違ひない。片輪のくせにいやに横風なものだ。夜中なぞでもいくら此方が用があるから開けてくれろと云つても決して開けてくれた事がない。たまに出してくれたと思ふと今度はどうしても入れて呉れない。夏だつて夜露は毒だ。況や霜に於てをやで、軒下に立ち明かして日の出を待つのは、どんなに辛いか到底想像が出來るものではない。此間しめ出しを食つた時などは野良犬の襲撃を蒙つて、既に危く見えた所を、漸くの事で物置の家根へかけ上がつて、

終夜顫へつゞけた事さへある。是等は皆お三の不人情から胚胎した不都合である。こんなものを相手にして鳴いて見せたつて、感應のある筈はないのだが、そこが、ひもじい時の神頼み、貧のぬすみに戀のふみと云ふ位だから、大抵の事ならやる氣になる。にやごおうにやごおうと三度目には、注意を喚起する爲にことさらに複雜なる鳴き方をして見た。自分ではベトヴエンのシンフォニーにも劣らざる美妙の音と確信して居るのだが、お三には何等の影響も生じない樣だ。お三は突然膝をついて、揚板を一枚はね除けて、中から堅炭の四寸許り長いのを一本つかみ出した。それから其の長い奴を七輪の角でぽん／＼と敲いたら、長いのが三つ程に碎けて近所は炭の粉で眞黒くなつた。少々は汁の中へも這入つたらしい。お三はそんな事に頓着する女ではない。直ちにくだけたる三個の炭を鍋の尻から七輪の中へ押し込んだ。到底吾輩のシンフォニーには耳を傾けさうにもない。仕方がないから悄然と茶の間の方へ引きかへさうとして風呂場の横を通り過ぎると、こゝは今女の子が三人で顔を洗つてる最中で、なか／＼繁昌して居る。

顔を洗ふと云つた所で、上の二人が幼稚園の生徒で、三番目は姉の尻について行かれない位小さいのだから、正式に顔が洗へて器用に御化粧が出來る筈がない。一番小さいのがバケツの中から濡れ雜巾を引きずり出して頻りに顔中撫で廻して居る。雜巾で顔を洗ふのは定めし心持ちがわるからうけれども、地震がゆる度におもちろいわと云ふ子だから此位の事はあつても驚くに足らん。ことによると八木獨仙君より悟つて居るかも知れない。さすがに長女は長女丈に、姉を以て自ら任じて居るから、うがひ茶碗をからからかんと抛り出して「坊やちやん、それは雜巾よ」と雜巾をとりにかゝる。坊やちやんも中々自信家だから容易に姉の云ふ事なんか聞きさうにもない。「いやーよ、ばぶ」と云ひながら雜巾を引つ張り返した。

此のばぶなる語は如何なる意義で、如何なる語源を有して居るか、誰も知つてるものがない。只此坊やちやんが癇癪を起こした時に折々御使用になる許りだ。雑巾は此時姉の手と坊やちやんの手で左右に引つ張られるから、水を含んだ眞中からほた〳〵雫が垂れて容赦なく坊やの足にかゝる、足丈なら我慢するが膝のあたりがしたゝか濡れる。坊やは是でも元祿を着て居るのである。元祿とは何の事だとだん〳〵聞いて見ると中形の模樣なら何でも元祿ださうだ。一體だれに教はつて來たものか分らない。「坊やちやん、元祿が濡れるから御よしなさい、ね」と姉が洒落れた事を云ふ。其癖此姉はつい此間迄元祿と雙六とを間違へて居た物識りである。

元祿で思ひ出したから序に喋舌つて仕舞ふが、この子供の言葉ちがひをやる事は夥しいもので、折々人を馬鹿にした樣な間違ひを云つてる。火事で茸が飛んで來たり、御茶の味噌の女學校へ行つたり、惠比壽臺所と並べたり、或時抔は「わたしや藁店の子ぢやないわ」と云ふから、よく〳〵聞き糺して見ると裏店と藁店を混同して居たりする。主人はこんな間違ひを聞く度に笑つて居るが、自分が學校へ出て英語を教へる時抔は、是よりも滑稽な誤謬を眞面目になつて、生徒に聞かせるのだらう。

坊やは——當人は坊やとは云はない、いつでも坊ばと云ふ——元祿が濡れたのを見て「元どこがべたいい」と云つて泣き出した。元祿が冷たくては大變だから、お三が臺所から飛び出して來て、雑巾を取り上げて着物を拭いてやる。此騷動中比較的靜かであつたのは、次女のすん子孃である。すん子孃は向うむきになつて、棚の上から轉がり落ちた御白粉の瓶をあけて、しきりに御化粧を施して居る。第一に突つ込んだ指を以て鼻の頭をキューと撫でたから竪に一本白い筋が通つて、鼻のありかが聊か分明になつて來た。

次に塗りつけた指を轉じて頰の上を摩擦したから、たこへもつてきて、是亦白いかたまりが出來上がつた。是丈裝飾が整つた所へ、下女が這入つて來て坊ばの着物を拭いた序に、すん子の顏もふいて仕舞つた。すん子は少々不滿の體に見えた。

吾輩は此光景を横に見て、茶の間から主人の寢室迄來てもう起きたかとひそかに樣子をうかゞつて見ると、主人の頭がどこにも見えない。其代り十文半の甲の高い足が、夜具の裾から一本食み出して居る。頭が出て居ては起こされる時に迷惑だと思つて、かくもぐり込んだのであらう。龜の子の樣な男である。所へ書齋の掃除をしてしまつた細君が又箒とはたきを擔いでやつてくる。最前の樣に襖の入口から

「まだ御起きにならないのですか」と聲をかけたまゝ、しばらく立つて、首の出ない夜具を見つめて居た。今度も返事がない。細君は入口から二歩ばかり進んで、箒をとんと突きながら「まだなんですか、あなた」と重ねて返事を承はる。此時主人は既に目が覺めて居る。覺めて居るから、細君の襲撃にそなふる爲、あらかじめ夜具の中に首諸共立籠つたのである。首さへ出さなければ、見逃してくれる事もあらうと、詰らない事を頼みにして寐て居た所、中々許しさうもない。然し第一回の聲は敷居の上で、少くとも一間の間隔があつたから、まづ安心と腹のうちで思つて居ると、とんと突いた箒が何でも三尺位の距離に迫つて居たには一寸驚いた。のみならず第二の「まだなんですか、あなた」が距離に於ても音量に於ても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなか迄聞こえたから、こいつは駄目だと覺悟をして小さな聲でうんと返事をした。

「九時迄に入らつしやるのでせう。早くなさらないと間に合ひませんよ」

「そんなに言はなくても今起きる」と夜着の袖口から答へたのは奇観である。細君はいつでも此手を食つて起きるかと思つて安心して居ると、又寝込まれつけて居るから、油断は出来ないと「さあ御起きなさい」とせめ立てる。起きると云ふのに、起きろと責めるのは気に食はん者だ。主人の如き我儘者には猶気に食はん。是に於てか主人は今迄頭から被つて寝た夜着を一度に跳ねのけた。見ると大きな眼を二つとも開いて居る。

「何だ騒々しい。起きると云へば起きるのだ」

「起きると仰しやつても御起きなさらんぢやありませんか」

「誰がいつ、そんな嘘をついた」

「いつでもですわ」

「馬鹿を云へ」

「どつちが馬鹿だか分りやしない」と細君ぷんとして膝を突いて枕元に立つて居る所は勇ましかつた。此時裏の車屋の子供、八ちやんが急に大きな声をしてワーと泣き出す。八ちやんは主人が怒り出しさへすれば必ず泣き出すべく、車屋のかみさんから命ぜられるのである。かみさんは主人が怒るたんびに八ちやんを泣かして小遣になるかも知れんが、八ちやんこそいゝ迷惑だ。こんな御袋を持つたが最後、朝から晩迄泣き通しに泣いて居なくてはならない。少しは此辺の事情を察して主人も少々怒るのを差し控へてやつたら、八ちやんの寿命が少しは延びるだらうに、いくら金田君から頼まれたつて、こんな愚な事をするのは、天道公平君よりもはげしく御出でになつて居る方だと鑑定してもよからう。怒るたんびに泣かせら

る日になると熱が早く綺麗に消え去つて、生れ附いての野猪的本領が直ちに全面を暴露し来るのと一般である。こんな乱暴な臓腑をもつて居る、こんな乱暴な男が、よくまあ今迄免職にもならずに教師が勤まつたものだと思ふと、始めて日本の広い事がわかる。広ければこそ金田君や金田君の犬が人間として通用して居るのでもあらう。彼等が人間として通用する間は主人も免職になる理由がないと確信して居るらしい。いざとなれば巣鴨へ端書を飛ばして天道公平君に聞き合はせて見ればすぐ分る事だ。

此時主人は、昨日紹介した混沌たる太古の眼を精一杯に見張つて、向うの戸棚を屹と見た。是は高さ一間を横に仕切つて上下共各二枚の袋戸をはめたものである。下の方の戸棚は、蒲団の裾とすれ／＼の距離にあるから、起き直つた主人が眼をあきさへすれば、天然自然こゝに視線がむく様に出来て居る。見ると模様を置いた紙が所々破れて妙な腸があからさまに見える。腸には色々なのがある。あるものは活版摺で、あるものは肉筆である。あるものは裏返しで、あるものは逆さまである。主人は此腸を見ると同時に、何がかいてあるか読みたくなつた。今迄は車屋のかみさんでも捕まへて、鼻づらを松の木へこすりつけてやらう位に怒つて居た主人が、突然此反古紙を読んで見たくなるのは不思議の様であるが、かう云ふ陽性の癇癪持ちには珍らしくない事だ。子供が泣くときに最中の一つもあてがへばすぐ笑ふと一般である。主人が昔去る所の御寺に下宿して居る時、襖一重を隔てて尼が五六人居た。尼抔と云ふものは元来意地のわるい女のうちで尤も意地のわるいものであるが、この尼が主人の性質を見抜いたものと見えて自炊の鍋をたゝきながら、今泣いた烏がもう笑つたと拍子を取つて歌つたさうだ。主人が尼が大嫌ひになつたのは此時からだと云ふが、尼は嫌ひにせよ全くそれに違ひない。主人は泣いたり、笑つたり、嬉しがつた

り、悲しがつたり人一倍もする代りに何れも長く續いた事がない。よく云へば執着がなくて、心掛けがなやみに轉ずるのだらうが、之を俗語に翻譯してやさしく云へば奥行のない、薄つ片の、鼻つ張丈強いだゞつ子である。既にだゞつ子である以上は、喧嘩をする勢で、むつくと刎ね起きた主人が急に氣を換へて袋戸の腸を讀みにかゝるのも尤もと云はねばなるまい。第一に眼にとまつたのが伊藤博文の逆立ちである。上を見ると明治十一年九月廿八日とある。韓國統監も此時代から御布令の尻尾を追つ懸けてあるいて居たと見える。大將此時分は何をして居たんだらうと、讀めさうにない所を無理によむと大藏卿とある。成程えらいものだ、いくら逆立ちをしても大藏卿である。少し左の方を見ると今度は大藏卿横になつて晝寐をして居る。尤もだ。逆立ちではさう長く續く氣遣ひはない。下の方に大きな木板で汝はと二字丈見える、あとが見たいが生憎露出して居らん。次の行には早くの二字丈出て居る。こいつも讀みたいがそれぎりで手掛りがない。もし主人が警視廳の探偵であつたら、人のものでも構はずに引つぺがすかも知れない。探偵と云ふものには高等な教育を受けたものがないから事實を擧げる爲には何でもする。あれは始末に行かないものだ。願はくばもう少し遠慮をしてもらひたい。遠慮をしなければ事實は決して擧げさせない事にしたらよからう。聞く所によると彼等は羅織虚構を以て良民を罪に陷れる事さへあるさうだ。良民が金を出して雇つて置く者が、雇主を罪にする抔と來ては是亦立派な氣狂である。次に眼を轉じて眞中を見ると眞中には大分縣が宙返りをしてゐる。伊藤博文でさへ逆立ちをする位だから大分縣が宙返りをするのは當然である。主人はこゝ迄讀んで來て、雙方へ握り拳をこしらへて之を高く天井に向けて突きあげた。あくびの用意である。

此あくびが大鯨の遠吠の樣に頗る變調を極めた者であつたが、それが一段落を告げると、主人はのそのそと着物をきかへて顏を洗ひに風呂場へ出掛けて行つた。待ちかねた細君はいきなり蒲團をまくつて夜着を疊んで、例の通り掃除を始める。掃除が例の通りである如く、主人の顏の洗ひ方も十年一日の如く例の通りである。先日紹介をした如く依然としてがー／＼、げー／＼を持續して居る。やがて頭を分け終つて、西洋手拭を肩へかけて、茶の間へ出御になると、超然として長火鉢の横に座を占めた。長火鉢と云ふと欅の如輪木か、銅の總落しで、洗髮の姉御が立膝で、長煙管を黑柿の縁へ叩きつける樣を想見する諸君もないとも限らないが、わが苦沙彌先生の長火鉢に至つては決してそんな意氣なものではない。何で造つたものか素人には見當のつかん位古雅なものである。長火鉢は拭き込んで、てら／＼光る所が身上なのだが、此代物は欅か櫻か桐か元來不明瞭な上に、殆ど布巾をかけた事がないのだから陰氣で引き立たざる事夥しい。こんなものを何處から買つて來たかと云ふと、決して買つた覺えはない。そんなら貰つたのかと聞くと、誰も呉れた人はないさうだ。然らば盜んだのかと糺して見ると、何だか其邊が曖昧である。昔親類に隱居が居つて、其隱居が死んだ時、當分留守番を頼まれた事がある。所が其後一戸を構へて、隱居所を引き拂ふ際に、そこで自分のものの樣に使つて居た火鉢を何の氣もなく、つい持つて來てしまつたのださうだ。少々たちが惡い樣だ。考へるとたちが惡い樣だがこんな事は世間に往々ある事だと思ふ。銀行家抔は毎日人の金をあつかひつけて居るうちに、人の金が自分の金の樣に見えてくるさうだ。役人は人民の召使である。用事を辨じさせる爲に、ある權限を委託した代理人の樣なものだ。所が委任された權力を笠に着て毎日事務を處理して居ると、是は自分が所有して居る權力で、人民抔は之に就いて何等の喙を容

る丶理由がないものだ抔と極つてくる。こんな人が世の中に充滿して居る以上は長火鉢事件を以て主人に泥棒根性があると斷定する譯には行かぬ。もし主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人にはみんな泥棒根性がある。

長火鉢の傍に陣取つて、食卓を前に控へたる主人の三面には、先刻雜巾で顏を洗つた坊ばと、御茶の味噌の學校へ行くとん子と、御白粉罎に指を突き込んだすん子が、旣に勢揃ひをして朝飯を食つて居る。主人は一應此三女子の顏を公平に見渡した。とん子の顏は南蠻鐵の刀の鍔の樣な輪廓を有して居る。すん子も妹丈に多少姉の面影を存して琉球塗の朱盆位な資格はある。只坊ばに至つては獨り異彩を放つて、面長に出來上つて居る。但し竪に長いのなら世間に其例も少くないが、此子のは横に長いのである。如何に流行が變化し易くつたつて、横に長い顏がはやる事はなからう。主人は自分の子ながらも、つく〲考へる事がある。これでも成長しなければならぬ。成長する所ではない、其成長の速かなる事は禪寺の筍が若竹に變化する勢で大きくなる。主人は又大きくなつたなと思ふたんびに、後ろから追手にせまられる樣な氣がしてひや〱する。如何に空漠なる主人でも此三令孃が女である位は心得て居る。女である以上はどうにか片附けなくてはならん位も承知して居る。承知して居る丈で片附ける手腕のない事も自覺して居る。そこで自分の子ながらも少しく持て餘して居る所である。持て餘す位なら製造しなければいゝのだが、そこが人間である。人間の定義を云ふと外に何にもない。只入らざる事を捏造して自ら苦しんで居る者だと云へば、夫で充分だ。

さすがに子供はえらい。是程おやぢが處置に窮してゐるとは夢にも知らず、樂しさうに御飯をたべる。

所が始末にをへないのは坊ばである。坊ばは當年とつて三歳であるから、細君が氣を利かして、食事のときには、三歳然たる小形の箸と茶碗をあてがふのだが、坊ばは決して承知しない。必ず姉の茶碗を奪ひ、姉の箸を引つたくつて、持ちあつかひ悪い奴を無理に持ちあつかつて居る。世の中を見渡すと無能無才の小人程、いやにのさばり出て柄にもない官職に登りたがるものだが、あの性質は全く此坊ば時代から萌芽して居るのである。其の因つて來る所はかくの如く深いのだから、決して教育や薫陶で癒せる者ではないと、早くあきらめてしまふのがいゝ。

坊ばは隣から分捕つた長大なる茶碗と、長大なる箸を専有して、しきりに暴威を擅にして居る。使ひこなせない者を無暗に使はうとするのだから、勢ひ暴威を逞しくせざるを得ない。坊ばは先づ箸の根元を二本一所に握つた儘うんと茶碗の底へ突き込んだ。茶碗の中は飯が八分通り盛り込まれて、其上に味噌汁が一面に漲つて居る。箸の力が茶碗へ傳はるや否や、今迄どうか、かうか平均を保つて居たのが、急に襲撃を受けたので三十度許り傾いた。同時に味噌汁は容赦なくだら／＼と胸のあたりへこぼれだす。坊ばは其位な事で辟易する譯がない。坊ばは暴君である。今度は突き込んだ箸を、うんと力一杯茶碗の底から刎ね上げた。同時に小さな口を緣迄持つて行つて、刎ね上げられた米粒を這入る丈口の中へ受納した。打ち洩らされた米粒は黄色な汁と相和して鼻のあたまと頰つぺたと顋とへ、やつと掛聲をして飛びついた。飛び附き損じて疊の上へこぼれたものは打算の限りでない。隨分無分別な飯の食ひ方である。吾輩は謹んで有名なる金田君及び天下の勢力家に忠告する。公等の他をあつかふ事、坊ばの茶碗と箸をあつかふが如くんば、公等の口へ飛び込む米粒は極めて僅少の者である。必然の勢を以て飛び込むにあらず、戸迷ひをし

て飛び込むのである。どうか御再考を煩はしたい。世故にたけた敏腕家にも似合はしからぬ事だ。
姉のとん子は、自分の箸と茶碗を坊ばに掠奪されて、不相應に小さな奴を以てさつきから我慢して居たが、もと〱小さ過ぎるのだから、一杯にもつた積りでも、あんとあけると三口程で食つて仕舞ふ。從つて頻繁に御はちの方へ手が出る。もう四膳かへて、今度は五杯目である。とん子は御はちの蓋をあけて大きなしやもじを取り上げて、しばらく眺めて居た。是は食はうか、よさうかと迷つてゐたものらしいが、終に決心したものと見えて、焦げのなささうな所を見計らつて一掬ひしやもじの上へ乘せた迄は無難であつたが、それを裏返して、ぐいと茶碗の上をこいたら、茶碗に入りきらん飯は塊まつた儘疊の上へ轉がり出した。とん子は驚く氣色もなく、こぼれた飯を丁寧に拾ひ始めた。拾つて何にするかと思つたら、みんな御はちの中へ入れてしまつた。少しきたない樣だ。
坊ばが一大活躍を試みて箸を刎ね上げた時は、丁度とん子が飯をよそひ了つた時である。さすがに姉は姉だけで、坊ばの顏の如何にも亂雜なのを見かねて「あら坊ばちやん、大變よ、顏が御ぜん粒だらけよ」と云ひながら、早速坊ばの顏の掃除にとりかゝる。第一に鼻のあたまに寄寓して居たのを取り拂ふ。取り拂つて捨てると思ひの外、すぐ自分の口のなかへ入れて仕舞つたのには驚いた。それから頰つぺたにかゝる。こゝには大分群をなして數にしたら、兩方を合せて約二十粒もあつたらう。姉は丹念に一粒づゝ取つては食ひ、取つては食ひ、とう〱妹の顏中にある奴を一つ殘らず食つてしまつた。此時只今迄は大人しく澤庵をかじつて居たすん子が、急に盛り立ての味噌汁の中から薩摩芋のくづれたのをしやくひ出して、勢よく口の内へ抛り込んだ。諸君も御承知であらうが、汁にした薩摩芋の熱したの程口の中に答へる者

はない。大人ですら注意しないと火傷をした樣な心持ちがする。ましてすん子の如き、薩摩芋に經驗の乏しい者は無論狼狽する譯である。すん子はワッと云ひながら口中の芋を食卓の上へ吐き出した。その二三片がどう云ふ拍子か、坊ばの前迄すべつて來て、丁度いゝ加減な距離でとまる。坊ばは固より薩摩芋が大好きである。大好きな薩摩芋が眼の前へ飛んで來たのだから、早速箸を抛り出して、手攫みにしてむしやむしや食つて仕舞つた。

先刻から此體たらくを目撃した主人は、一言も云はずに專心自分の飯を食ひ、自分の汁を飲んで此時は既に楊枝を使つて居る最中であつた。主人は娘の教育に關して絕對的放任主義を執る積りと見える。今に三人が海老茶式部か鼠式部かになつて、三人とも申し合はせた樣に情夫をこしらへて出奔しても、矢張り自分の飯を食つて、自分の汁を飲んで澄まして見て居るだらう。働きのない事だ。然し今の世の働きのあると云ふ人を拜見すると、嘘をついて人を釣る事と、先へ廻つて馬の眼玉を拔く事と、虛勢を張つて人をおどかす事と、鎌をかけて人を陷れる事より外に何も知らない樣だ。中學抔の少年輩迄が見樣見眞似に、かうしなくては幅が利かないと心得違ひをして、本來なら赤面して然るべきのを得々と履行して未來の紳士だと思つて居る。是は働き手と云ふのではない。ごろつき手と云ふのである。吾輩も日本の猫だから多少の愛國心はある。こんな働き手を見る度に擲つてやりたくなる。こんなものが一人でも殖えれば國家はそれ丈衰へる譯である。こんな生徒の居る學校は、學校の恥辱であつて、こんな人民の居る國家は國家の恥辱である。恥辱であるにも關らず、ごろごろ世間にごろついて居るのは心得がたいと思ふ。日本の人間は猫程の氣概もないと見える。情ない事だ。こんなごろつき手に比べると主人抔は遙かに上等な

人間と云はなくてはならん。意氣地のない所が上等なのである。無能な所が上等なのである。猪口才でない所が上等なのである。

かくの如く働きのない食ひ方を以て、無事に晩餐を濟ましたる主人は、やがて洋服を着て、車へ乘つて、日本堤分署へ出頭に及んだ。格子をあけた時、車夫に日本堤といふ所を知つてるかと聞いたら、車夫はへゝ、と笑つた、あの遊廓のある吉原の近邊の日本堤だぜと念を押したのは少々滑稽であつた。

主人が珍しく車で玄關から出掛けたあとで、細君は例の如く食事を濟ませて「さあ學校へ御いで。遲くなりますよ」と催促すると、子供は平氣なもので、「あら、でも今日は御休みよ」と支度をする氣色がない。「御休みなもんですか、早くなさい」と叱るやうに言つて聞かせると「それでも昨日、先生が御休みだつて仰しやつてよ」と姉は中々動じない。細君もこゝに至つて多少變に思つたものか、戸棚から暦を出して繰り返して見ると赤い字でちやんと御祭日と出て居る。主人は祭日とも知らず、學校へ缺勤屆を出したのだらう。細君も知らずに郵便箱へ抛り込んだのだらう。但し迷亭に至つては實際知らなかつたのか、知つて知らん顏をしたのか、そこは少々疑問である。此發明におやと驚いた細君は「夫ぢや、みんなで大人しく御遊びなさい」と平生の通り針箱を出して仕事に取りかゝる。

其後三十分間は家内平穩、別段吾輩の材料になる樣な事件も起らなかつたが、突然妙な人が御客に來た。十七八の女學生である。踵のまがつた靴を穿いて、紫色の袴を引きずつて、髮を算盤珠の樣にふくらまして勝手口から案内も乞はずに上がつて來た。是は主人の姪である。學校の生徒ださうだが、折々日曜にやつて來て、よく叔父さんと喧嘩をして歸つて行く、雪江とか云ふ綺麗な名の御孃さんである。尤も顏は

名前程でもない、一寸表へ出て一二町あるけば必ず逢へる人相である。「叔母さん今日は」と茶の間へつかつか這入つて來て、針箱の横へ尻を卸した。

「おや、早くから……」

「今日は大祭日ですから、朝のうちに一寸上がらうと思つて、八時半頃から家を出て急いで來たの」

「さう、何か用があるの？」

「いゝえ、たゞあんまり御無沙汰をしたから、一寸上がつたの」

「一寸でなくつていゝから、緩くり遊んで入らつしやい。今に叔父さんが歸つて來ますから」

「叔父さんは、もうどこかへ入らしつたの。珍しいのね」

「えゝ今日はね、妙な所へ行つたのよ。……警察へ行つたの、妙でせう」

「あら何で？」

「此間這入つた泥棒がつらまつたんだつて」

「夫で引き合ひに出されるの？いゝ迷惑ね」

「なあに品物が戻るのよ。取られたものが出たから取りに來いつて、昨日巡査がわざ〱來たもんですから」

「おや、さう。それでなくつちや、こんなに早く叔父さんが出掛ける事はないわね。いつもなら今時分はまだ寢て入らつしやるんだわ」

「叔父さん程、寢坊はないんですから……さうして起こすとぷん〱怒るのよ。今朝なんかも七時迄に

是非おこせと云ふから、起こしたんでせう。すると夜具の中へ潜つて返事もしないんですもの。こつちは心配だから二度目に又おこすと、夜着の袖から何か云ふのよ。本當にあきれ返つてしまふの」
「なぜそんなに眠いんでせう。屹度神經衰弱なんでせう」
「何ですか」
「本當にむやみに怒る方ね。あれでよく學校が勤まるのね」
「なに學校ぢや大人しいんですつて」
「ぢや猶惡いわ。まるで蒟蒻閻魔ね」
「なぜ？」
「なぜでも蒟蒻閻魔なの。だつて蒟蒻閻魔の樣ぢやありませんか」
「只怒るばかりぢやないのよ。人が右と云へば左、左と云へば右で、何でも人の言ふ通りにした事がない、——そりや強情ですよ」
「天探女でせう。叔父さんはあれが道樂なのよ。だから何かさせようと思つたら、うらを云ふと、此方の思ひ通りになるのよ。蝙蝠傘を買つてもらふ時にも、入らない、入らないつて、態と言つたら、入らない事があるものかつて、すぐ買つて下すつたの」
「ホヽ旨いのね。わたしも是からさうしよう」
「さうなさいよ。それでなくつちや損だわ」
「此間保險會社の人が來て、是非御這入んなさいつて、勸めて居るんでせう、——色々な譯を言つて、か

う云ふ利益があるの、あゝ云ふ利益があるのつて、何でも一時間も話しをしたんですが、どうしても這入らないの。うちだつて貯蓄はないし、かうして子供は三人もあるし、せめて保險へでも這入つてくれると餘つ程心丈夫なんですけれども、そんな事は少しも構はないんですもの」

「さうね、もしもの事があると不安心だわね」と十七八の娘に似合はしからん世帶染みた言を云ふ。

「その叔父樣を捉へて聞いて見ると、本當に面白いのよ。成程保險の必要を認めないでもない、必要のあるものだから會社も繁昌して居るのだらう。然し死なない以上に保險に這入る必要はないぢやないか、と、自信を張つて居るんですよ」

「叔父さんが？」

「えゝ、すると會社の男が、それは死なければ無論保險會社は要りません。然し人間の命と云ふものは丈夫な樣で脆いもので、知らないうちに、いつ危險が迫つて居るか分りませんと云ふとね、叔父さんは、大丈夫だ僕は死なない事に決心をして居るつて、まあ無法な事を云ふんですよ」

「決心したつて、死ぬわねえ。わたしなんか是非及第する積りだつたけれども、とう〳〵落第して仕舞つたわ」

「保險社員もさう云ふのよ。壽命は自分の自由にはなりません。決心で長生が出來るものなら、誰も死ぬものは御座いませんつて」

「保險會社の方が至當ですわ」

「至當でせう。夫がわからないの。いえ決して死なない、誓つて死なないつて威張るの」

「妙ね」
「妙ですとも、大妙ですわ。保険の掛金を出す位なら銀行へ貯金する方が遥かにましだつて澄まし切つて居るんですよ」
「貯金があるの？」
「あるもんですか。自分が死んだあとなんか、ちつとも構ふ考へなんかないんですよ」
「本當に心配ね。なぜあんななんでせう、こゝへ入らつしやる方だつて、叔父さんの樣なのは一人も居ないわね」
「居るものですか。無類ですよ」
「ちつと鈴木さんにでも賴んで意見でもして貰ふといゝんですよ。あゝ云ふ穩やかな人だと餘ッ程樂ですがねえ」
「所が鈴木さんは、うちぢや評判がわるいのよ」
「みんな逆なのね。それぢやあの方はいゝでせう――ほらあの落ち附いてる――」
「八木さん？」
「えゝ」
「八木さんには大分閉口して居るんですがね。昨日迷亭さんが來て惡口をいつたものだから、思つた程利かないかも知れない」
「だつていゝぢやありませんか。あんな風に鷹揚に落ち附いて居れば、――此間學校で演説をなすつた

わ」

「八木さんが？」

「えゝ」

「八木さんは雪江さんの學校の先生なの」

「いゝえ、先生ぢやないけども、淑徳婦人會のときに招待して演說をして頂いたの」

「面白かつて？」

「さうね、そんなに面白くもなかつたわ。だけども、あの先生が、あんな長い顔なんでせう。さうして天神様の様な髯を生やして居るもんだから、みんな感心して聞いて居てよ」

「御話しつて、どんな御話しなの」と細君が聞きかけて居ると縁側の方から、雪江さんの話し聲をきゝつけて、三人の子供がどたばた茶の間へ亂入して來た。今迄は竹垣の外の空地へ出て遊んで居たものであらう。

「あら雪江さんが來た」と二人の姉さんは嬉しさうに大きな聲を出す。細君は「そんなに騒がないで、みんな靜かにして御坐りなさい。雪江さんが今面白い話をなさる所だから」と仕事を隅へ片附ける。

「雪江さん何の御話し、わたし御話が大好き」と云つたのはとん子で「矢つ張りかち〱山の御話？」と聞いたのはすん子である。「坊ばも御はなち」と云ひ出した三女は姉と姉の間から膝を前の方に出す。但し是は御話しを承はると云ふのではない、坊ばも亦御話しを仕ると云ふ意味である。「あら、又坊ばちやんの話しだ」と姉さんが笑ふと、細君は「坊ばはあとでなさい。雪江さんの御話しがすんでから」と賺し

て見る。坊ばは中々聞きさうにない。「いやーよ、ばぶ」と大きな聲を出す。「おゝ、よし〳〵坊ばちやんからなさい。何と云ふの？」と雪江さんは謙遜した。

「あのね。坊たん、坊たん、どこ行くのつて」

「面白いのね。夫から？」

「わたちは田圃へ稲刈いに」

「さう、よく知つてる事」

「御前がくうと邪魔になる」

「あら、くうとぢやないわ、くゝるとだわね」ととん子が口を出す。坊ばは相變らず「ばぶ」と一喝して直ちに姉を辟易させる。然し中途で口を出されたものだから、續きを忘れて仕舞つて、あとが出て來ない。

「坊ばちやん、それぎりなの？」と雪江さんが聞く。

「あのね。あとでおならは御免だよ。ぶう、ぶう〳〵つて」

「ホヽヽ、いやだ事、誰にそんな事を教はつたの？」

「お三に」

「わるいお三ね、そんな事を教へて」と細君は苦笑をして居たが「さあ今度は雪江さんの番だ。坊やは大人しく聞いて居るのですよ」と云ふと、流石の暴君も納得したと見えて、それ限り當分の間は沈默した。

「八木先生の演説はこんなのよ」と雪江さんがとう〳〵口を切つた。「昔ある辻の眞中に大きな石地藏があつたんですつてね。所がそこが生憎馬や車が通る大變賑やかな場所だもんだから邪魔になつて仕樣が

ないんでね、町内のものが大勢寄つて、相談をして、どうして此石地藏を隅の方へ片附けたらよからうつて考へたんですつて」

「そりや本當にあつた話なの？」

「どうですか、そんな事は何とも仰しやらなくつてよ。――でみんなが色々相談をしたら、其町内で一番強い男が、こりや譯はありません、わたしが屹度片づけて見せますつて、一人で其辻へ行つて、兩肌を脫いで汗を流して引つ張つたけれども、どうしても動かないんですつて」

「餘つ程重い石地藏なのね」

「えゝ、夫で其男が疲れて仕舞つて、うちへ歸つて寢て仕舞つたから、町内のものは又相談をしたんですね。すると今度は町内で一番利口な男が、私に任せて御覽なさい、一番やつて見ますからつて、重箱のなかへ牡丹餅を一杯入れて地藏の前へ來て、こゝ迄御出でと云ひながら牡丹餅を見せびらかしたんだつて。地藏だつて食ひ意地が張つてるから牡丹餅で釣れるだらうと思つたら、少しも動かないんだつて。利口な男はこれではいけないと思つてね、今度は瓢簞へ御酒を入れて、其瓢簞を片手へぶら下げて、片手へ猪口を持つて又地藏さんの前へ來て、さあ飲みたくはないかね、飲みたければこゝ迄お出でと三時間ばかり、からかつて見たが矢張り動かないんですつて」

「雪江さん、地藏樣は御腹が減らないの」ととん子がきくと「牡丹餅が食べたいな」とすん子が云つた。

「利口な人は二度共しくじつたから、其次には贋札を澤山こしらへて、さあ欲しいだらう、欲しければ取りに御出でと札を出したり引つ込ましたりしたが是も丸で益に立たないんですつて。餘つ程頑固な地藏

様なのよ」
「さうね。すこし叔父さんに似て居るわ」
「えゝ丸で叔父さんよ。仕舞ひに利口な人も愛想をつかしてやめて仕舞つたんですとさ。夫で其あとから、大きな法螺を吹く人が出て、私なら屹度片づけて見せますから御安心なさいと左も容易い事の樣に受け合つたさうです」
「其の法螺を吹く人は何をしたんです」
「それが面白いのよ。最初にはね、巡査の服をきて、附け髯をして、地藏様の前へきて、こら〳〵動かんと其方の爲にならんぞ、警察で棄てゝ置かんぞと威張つて見せたんですとさ。今の世に警察の假聲なんか使つたつて誰も聞きやしないわね」
「本當ね、それで地藏様は動いたの？」
「動くもんですか、叔父さんですもの」
「でも叔父さんは警察には大變恐れ入つて居るのよ」
「あらさう、あんな顔をして？それぢや、そんなに怖い事はないわね。けれども地藏様は動かないんですつて、平氣で居るんですとさ。それで法螺吹きは大變怒つて、巡査の服を脱いで、附け髯を紙屑籠へ拋り込んで、今度は大金持ちの服裝をして出て來たさうです。今の世で云ふと岩崎男爵の樣な顔をするんですとさ。可笑しいわね」
「岩崎の樣な顔つてどんな顔なの？」

「只大きな顔をするんでせう。さうして何もしないで、又何も云はないで地藏の周りを、大きな卷煙草をふかしながら歩行いて居るんですとさ」
「それが何になるの？」
「地藏様が烟に捲くんです」
「丸で噺し家の酒落の様ね。首尾よく烟に捲いたの？」
「駄目ですわ、相手が石ですもの。胡魔化しも大抵にすればいゝのに、今度は殿下さまに化けて來たんだつて」
「馬鹿ね」
「ハヽ、其時分には殿下さまがあるの？」
「有るんでせう。八木先生はさう仰しやつてよ。慥かに殿下様に化けたんだつて、恐れ多い事だが化けて來たつて——第一、不敬ぢやありませんか、法螺吹きの分際で」
「殿下つて、どの殿下さまなの」
「どの殿下さまですか、どの殿下さまだつて不敬ですわ」
「さうね」
「殿下さまでも利かないでせう。法螺吹きも仕様がないから、とても私の手際では、あの地藏はどうする事も出來ませんと降參をしたさうです」
「いゝ氣味ね」
「えゝ、序に懲役にやればいゝのに。——でも町内のものは大層氣を揉んで、又相談を開いたんですが、

もう誰も引き受けるものがないんで弱つたさうです」
「それで御仕舞ひ？」
「まだあるのよ。一番仕舞ひに車屋とゴロツキを大勢雇つて、地藏樣の周りをわい〳〵騷いであるいたんです。只地藏樣をいぢめて、居たたまれない樣にすればいゝと云つて、夜晝交替で騷ぐんだつて」
「御苦勞ですこと」
「それでも取り合はないんですとさ。地藏樣の方も隨分強情ね」
「それから、どうして？」ととん子が熱心に聞く。
「それからね、いくら毎日々々騷いでも驗が見えないので、大分みんなが厭になつて來たんですが、車夫やゴロツキは幾日でも日當になる事だから喜んで騷いで居ましたとさ」
「雪江さん、日當つてなに？」とすん子が質問をする。
「日當と云ふのはね、御金の事なの」
「御金をもらつて何にするの？」
「御金を貰つてね。……ホヽヽ、いやなすん子さんだ。――それで叔母さん、毎日毎晩から騷ぎを爲て居ますとね。其時町内に馬鹿竹と云つて、何も知らない、誰も相手にしない馬鹿が居たんですつてね。其馬鹿が此騷ぎを見て御前方は何でそんなに騷ぐんだ、何年かゝつても地藏一つ動かす事が出來ないのか、可哀相なものだ、と云つたさうですつて――」
「馬鹿の癖にえらいのね」

「中々えらい馬鹿なのよ。みんなが馬鹿竹の云ふ事を聞いて、物はためしだ、どうせ駄目だらうが、よあ竹にやらして見ようぢやないかとそれから竹に頼むと、竹は一も二もなく引き受けたが、そんな邪魔な騒ぎをしないでまあ静かにしろと車引やトロッキを引き込まして瓢然と地蔵様の前へ出て来ました」

「雪江さん瓢然て、馬鹿竹の御友達？」ととん子が肝心な所で奇問を放つたので、細君と雪江さんはどつと笑ひ出した。

「いゝえ御友達ぢやないのよ」

「おやなに？」

「瓢然と云ふのはね。——云ひ様がないわ」

「瓢然て、云ひ様がないの？」

「さうぢやないのよ、瓢然と云ふのはね——」

「えゝ」

「そら多々良三平さんを知つてるでせう」

「えゝ、山の芋を呉れてよ」

「あの多々良さん見た様なを云ふのよ」

「多々良さんは瓢然なの？」

「えゝ、まあさうよ。——夫で馬鹿竹が地蔵様の前へ来て懐手をして、地蔵様、町内のものが、あなたに動いてくれと云ふから動いてやんなさいと云つたら、地蔵様は忽ちさうか、そんなら早くさう云へばい

いゝに、とのこ〳〵動き出したさうです」
「妙な地藏樣ね」
「夫からが演說よ」
「まだあるの?」
「えゝ、夫から八木先生がね、今日は御婦人の會でありますが、私が斯樣な御話をわざ〳〵致したのは少々考へがあるので、かう申すと失禮かも知れませんが、婦人といふものは兎角物をするのに正面から近道を通つて行かないで、却て遠方から廻りくどい手段をとる弊がある。尤も是は御婦人に限つた事でない。明治の代は男子と雖も、文明の弊を受けて多少女性的になつて居るから、よく入らざる手段と勞力を費やして、是が本筋である、紳士のやるべき方針であると誤解して居るものが多い樣だが、是等は開化の業に束縛された畸形兒である。別に論ずるに及ばん。只御婦人に在つては可成只今申した昔話を御記憶になつて、いざと云ふ場合にはどうか馬鹿竹の樣な正直な了見で物事を處理して戴きたい。あなた方が馬鹿竹になれば夫婦の間、嫁姑の間に起る忌まはしき葛藤の三分一は慥かに減ぜられるに相違ない。人間は魂膽があればある程、其魂膽が祟つて不幸の源をなすので、多くの婦人が平均男子より不幸なのは、全く此魂膽があり過ぎるからである。どうか馬鹿竹になつて下さい、と云ふ演說なの」
「へえ、それで雪江さんは馬鹿竹になる氣なの」
「やだわ、馬鹿竹だなんて。そんなものになり度くはないわ。金田の富子さんなんぞは失敬だつて大變怒つてよ」

「金田の富子さんて、あの向う横町の？」
「えゝ、あのハイカラさんよ」
「あの人も雪江さんの學校へ行くの？」
「いゝえ、只婦人會だから傍聽に來たの。本當にハイカラね。どうも驚いちまふわ」
「でも大變いゝ器量だつて云ふぢやありませんか」
「並ですわ。御自慢程ぢやありませんよ。あんなに御化粧をすれば大抵の人はよく見えるわ」
「それぢや雪江さんなんぞは其かたの樣に御化粧をすれば金田さんの倍位美しくなるでせう」
「あらいやだ。よくつてよ。知らないわ。だけど、あの方は全くつくり過ぎるのね。なんぼ御金があつたつて――」
「つくり過ぎても御金のある方がいゝぢやありませんか」
「それもさうだけれども――あの方こそ少し馬鹿竹になつた方がいゝでせう。無暗に威張るんですもの。此間もなんとかいふ詩人が新體詩集を捧げたつて、みんなに吹聽して居るんですもの」
「東風さんでせう」
「あら、あの方が捧げたの、餘つ程物數奇ね」
「でも東風さんは大變眞面目なんですよ。自分ぢや、あんな事をするのが當り前だと迄思つてるんですもの」
「そんな人があるから、いけないんですよ。――夫からまだ面白い事があるの。此間だれか、あの方の

所へ艶書を送つたものがあるんだつて」
「おや、いやらしい。誰なの、そんな事をしたのは」
「誰だかわからないんだつて」
「名前はないの？」
「名前はちやんと書いてあるんだけれども聞いた事もない人だつて、さうして夫が長い長い一間許りもある手紙でね。色々な妙な事がかいてあるんですとさ。私があなたを戀つて居るのは、丁度宗教家が神にあこがれて居る樣なものだの、あなたの爲ならば祭壇に供へる小羊となつて屠られるのが無上の名譽であるの、心臓の形が三角で、三角の中心にキューピッドの矢が立つて吹き矢なら大當りであるの……」
「そりや眞面目なの？」
「眞面目なんですとさ。現にわたしの御友達のうちで其手紙を見たものが三人あるんですもの」
「いやな人ね、そんなものを見せびらかして。あの方は寒月さんの所へ御嫁に行く積りなんだから、そんな事が世間へ知れちや困るでせうにね」
「困るどころですか大得意よ。こんだ寒月さんが來たら知らして上げたらいゝでせう。寒月さんも丸で御存じないんでせう」
「どうですか、あの方は學校へ行つて球ばかり磨いて入らつしやるから、大方知らないでせう」
「寒月さんは本當にあの方を御貰ひになる氣なんでせうかね。御氣の毒だわね」
「なぜ？御金があつて、いざつて時に力になつて、いゝぢやありませんか」

「叔母さんは、ぢきに金、金つて品がわるいのね。金より愛の方が大事ぢやありませんか。愛がなければ夫婦の關係は成立しやしないわ」

「さう、それぢや雪江さんは、どんな所へ御嫁に行くの？」

「そんな事知るもんですか、別に何もないんですもの」

雪江さんと叔母さんは結婚事件に就いて何か辯論を逞しくして居ると、さつきから、分らないなりに謹聽して居るとん子が突然口を開いて「わたしも御嫁に行きたいな」と云ひだした。此の無鐵砲な希望には、さすが青春の氣に滿ちて、大いに同情を寄すべき雪江さんも一寸毒氣を拔かれた體であつたが、細君の方は比較的平氣に構へて「どこへ行きたいの」と笑ひながら聞いて見た。

「わたしねえ、本當はね、招魂社へ御嫁に行きたいんだけれども、水道橋を渡るのがいやだから、どうしようかと思つてるの」

細君と雪江さんは此名答を得て、あまりの事に問ひ返す勇氣もなく、どつと笑ひ崩れた時に、次女のすん子が姉さんに向つて斯樣な相談を持ちかけた。

「御ねえ樣も招魂社がすき？わたしも大すき。一所に招魂社へ御嫁に行きませう。ね？いや？いやなら好いわ。わたし一人で車へ乘つてさつさと行つちまふわ」

「坊ばも行くの」と遂には坊ばさん迄が招魂社へ嫁に行く事になつた。斯樣に三人が顏を揃へて招魂社へ嫁に行けたら、主人も嘸樂であらう。

所へ車の音ががら〳〵と前に留まつたと思つたら、忽ち威勢のいゝ「御歸り」と云ふ聲がした。主人は

日本堤分署から戻つたと見える。車夫が差し出す大きな風呂敷包みを下女に受け取らして、主人は悠然と茶の間へ這入つて來る。「やあ、來たね」と雪江さんに挨拶しながら、例の有名な長火鉢の傍へぼかりと手に携へた德利樣のものを拋り出した。德利樣と云ふのは純然たる德利では無論ない、と云つて花活とも思はれない、只一種異樣の陶器であるから、已むを得ず暫らくかやうに申したのである。

「妙な德利ね、そんなものを警察から貰つて入らしつたの」と雪江さんが、倒れた奴を起こしながら叔父さんに聞いて見る。叔父さんは、雪江さんの顏を見ながら、「どうだ、いゝ恰好だらう」と自慢する。

「いゝ恰好なの？それが？あんまりよかあないわ。油壺なんか何で持つて入らしつたの？」

「油壺なものか。そんな趣味のない事を云ふから困る」

「ぢや、なあに？」

「花活さ」

「花活にしちや、口が小さ過ぎて、いやに胴が張つてるわ」

「そこが面白いんだ。御前も無風流だな。丸で叔母さんと選ぶ所なしだ。困つたものだな」と獨りで油壺を取り上げて、障子の方へ向けて眺めて居る。

「どうせ無風流ですわ。油壺を警察から貰つてくる樣な眞似は出來ないわ。ねえ叔母さん」叔母さんは夫所ではない、風呂敷包みを解いて血眼になつて、盜難品を檢べて居る。「おや驚いた泥棒も進步したのね。みんな、解いて洗ひ張りをしてあるわ。ねえちよいと、あなた」

「誰が警察から油壺を貰つてくるものか。待つてるのが退屈だから、あすこいらを散步してゐるうちに

掘り出して來たんだ。御前なんぞには分るまいが夫でも珍品だよ」
「珍品過ぎるわ。一體叔父さんはどこを散歩したの」
「どこつて日本堤界隈さ。吉原へも這入つて見た。中々盛な所だ。あの鐵の門を觀た事があるかい。ないだらう」
「だれが見るものですか。吉原なんて賤業婦の居る所へ行く因縁がありませんわ。叔父さんに教師の身で、よくまあ、あんな所へ行かれたものねえ。本當に驚いてしまふわ。ねえ叔母さん、叔母さん」
「えゝさうね。どうも品數が足りない樣だ事。是でみんな戻つたんでせうか」
「戻らんのは山の芋ばかりさ。元來九時に出頭しろと云ひながら十一時迄待たせる法があるものか、是だから日本の警察はいかん」
「日本の警察がいけないつて、吉原を散歩しちや猶いけないわ。そんな事が知れると免職になつてよ。ねえ叔母さん」
「えゝなるでせう。あなた、私の帶の片側がないんです。何だか足りないと思つたら」
「帶の片側位あきらめるさ。こつちは三時間も待たされて、大切の時間を半日潰してしまつた」と日本服に着替へて平氣に火鉢へもたれて油壺を眺めて居る。細君も仕方がないと諦めて、戻つた品を其儘戸棚へ仕舞ひ込んで座に歸る。
「叔母さん、此油壺が珍品ですとさ。きたないぢやありませんか」
「それを吉原で買つて入らしつたの？まあ」

「何がまあだ。分りもしない癖に」
「それでもそんな壺なら吉原へ行かなくつても、どこにだつて有るぢやありませんか」
「所がないんだよ。滅多に有る品ではないんだよ」
「叔父さんは隨分石地藏ね」
「又子供の癖に生意氣を云ふ。どうも此頃の女學生は口が惡くつていかん。ちと『女大學』でも讀むがいゝ」
「叔父さんは保險が嫌ひでせう。女學生と保險とどつちが嫌ひなの？」
「保險は嫌ひではない。あれは必要なものだ。未來の考へのあるものは、誰でも這入る。女學生は無用の長物だ」
「無用の長物でもいゝ事よ。保險へ這入つても居ない癖に」
「來月から這入る積りだ」
「屹度？」
「屹度だとも」
「およしなさいよ、保險なんか。それよりか其懸け金で何か買つた方がいゝわ。ねえ、叔母さん」叔母さんはにや〳〵笑つて居る。主人は眞面目になつて、
「お前抔は百も二百も生きる氣だから、そんな呑氣な事を云ふのだが、もう少し理性が發達して見ろ、保險の必要を感ずるに至るのは當然だ。是非來月から這入るんだ」

「さう、それぢや仕方がない。だけど此間の様に蝙蝠傘を買つて下さる御金があるなら、保険に這入る方がましかも知れないわ。ひとが入りません、入りませんと云ふのを無理に買つて下さるんですもの」
「そんなに入らなかつたのか？」
「えゝ蝙蝠傘なんか欲しかないわ」
「そんなら還すがいゝ。丁度とん子が欲しがつてるから、あれを此方へ廻してやらう。今日持つて来たか」
「あら、そりや、あんまりだわ。だつて苛いぢやありませんか、折角買つて下すつて置きながら還せなんて」
「入らないと云ふから、還せと云ふのさ。些とも苛くはない」
「入らない事は入らないんですけれども、苛いわ」
「分らん事を言ふ奴だな。入らないと云ふから還せと云ふのに苛い事があるものか」
「だつて」
「だつて、どうしたんだ」
「だつて苛いわ」
「愚だな、同じ事ばかり繰り返して居る」
「叔父さんだつて同じ事ばかり繰り返して居るぢやありませんか」
「お前が繰り返すから仕方がないさ。現に入らないと云つたぢやないか」

「そりや云ひましたわ。入らない事は入らないんですけれども、還すのは厭ですもの」
「驚いたな。没分曉で強情なんだから仕方がない。お前の學校ぢや論理學を教へないのか」
「よくつてよ、どうせ無教育なんですから、何とでも仰しやい。人のものを還さだなんて、他人だつてそんな不人情な事は云やしない。ちつと馬鹿竹の眞似でもなさい」
「何の眞似をしろ？」
「ちと正直に淡泊になさいと云ふんです」
「お前は愚物の癖に、やに強情だよ。夫だから落第するんだ」
「落第したつて叔父さんに學資は出して貰やしないわ」
雪江さんは言茲に至つて感に堪へざるものの如く、潸然として一掬の涙を紫の袴の上に落とした。主人は茫乎として、其涙が如何なる心理作用に起因するかを研究するものの如く、袴の上と、俯向いた雪江さんの顔を見詰めて居た。所へお三が臺所から赤い手を敷居越しに揃へて「お客さまが入らつしやいました」と云ふ。「誰が來たんだ」と主人が聞くと「學校の生徒さんで御座います」とお三は雪江さんの泣き顔を横目に睨めながら答へた。主人は客間へ出て行く。吾輩も種取り兼人間研究の爲、主人に尾して忍びやかに縁へ廻つた。人間を研究するには何か波瀾がある時を擇ばないと一向結果が出て來ない。平生は大方の人が大方の人であるから、見ても聞いても張合のない位平凡である。然しいざとなると此平凡が急に靈妙なる神祕的作用の爲にむく／＼と持ち合がつて奇な者、變なもの、妙な者、異な者、一口に云へば吾輩猫共から見て頗る後學になる様な事件が到る所に横風にあらはれてくる。雪江さんの紅涙の如きは正し

く其現象の一つである。かくの如く不可思議、不可測の心を有して居る雪江さんも、細君と話しをして居るうちは左程とも思はなかつたが、主人が歸つてきて油壺を擲り出すや否や、忽ち死龍に蒸汽喞筒を注ぎかけたる如く、勃然として其の深奥にして窺知すべからざる、巧妙なる、美妙なる、奇妙なる、靈妙なる麗質を、惜し氣もなく發揚し了つた。而して其麗質は天下の女性に共通なる麗質である。只惜しい事には容易にあらはれて來ない。否あらはれる事は二六時中間斷なくあらはれて居るが、斯くの如く顯著に灼然炳乎として遠慮なくはあらはれて來ない。幸ひにして主人の樣に吾輩の毛を動ともすると逆さに撫でたがる旋毛曲りの奇特家が居つたから、かゝる狂言も拜見が出來たのであらう。主人のあとさへ附いてあるけば、どこへ行つても舞臺の役者は吾知らず動くに相違ない。面白い男を旦那樣に戴いて、短かい猫の命のうちにも、大分多くの經驗が出來る。難有い事だ。今度のお客は何者であらう。

見ると年頃は十七八、雪江さんと追つつ、返つつの書生である。大きな頭を地の透いて見える程刈り込んで團子つ鼻を顏の眞中にかためて、座敷の隅の方に控へて居る。別に是と云ふ特徴もないが、頭蓋骨丈は頗る大きい。青坊主に刈つてさへ、あゝ大きく見えるのだから、主人の樣に長く延ばしたら定めし人目を惹く事だらう。こんな頭にかぎつて學問はあまり出來ない者だとは、かねてより主人の持説である。事實はさうかも知れないが一寸見るとナポレオンの樣で頗る偉觀である。着物は通例の書生の如く、薩摩絣か、久留米がすりか又伊豫絣か分らないが、ともかくも絣と名づけられたる袷を袖短かに着こなして、下には襯衣も襦袢もない樣だ。素袷や素足は意氣なものださうだが、此男のは甚だむさ苦しい感じを與へる。ことに疊の上に泥棒の樣な親指を歴然と三つ迄印して居るのは全く素足の責任に相違ない。彼は四つ目の足

跡の上へちやんと坐つて、さも窮屈さうに畏まつて居る。一體かしこまるべきものが大人しく控へるのは別段氣にするにも及ばんが、毬栗頭のつんつるてんの亂暴者が恐縮して居る所は何となく不調和なものだ。途中で先生に逢つてさへ禮をしないのを自慢にする位の連中が、たとひ三十分でも人並に坐るのは苦しいに違ひない。所を生れ得て恭謙の君子、盛德の長者であるかの如く構へるのだから、當人の苦しいにかゝはらず傍から見ると大分可笑しいのである。教場もしくは運動場であんなに騒々しいものが、どうして斯樣に自己を拘束する力を具へて居るかと思ふと、憐れにもある滑稽でもある。かうやつて一人宛相對になると、如何に愚騃なる主人と雖も、生徒に對して幾分かの重みがある樣に思はれる。主人も定めし得意であらう。塵積もつて山をなすと云ふから微々たる一生徒も多勢が聚合すると侮る可からざる團體となつて、排斥運動やストライキをし出かすかも知れない。是は丁度臆病者が酒を飲んで大膽になる樣な現象であらう。衆を頼んで騒ぎ出すのは、人の氣に醉つ拂つた結果、正氣を取り落としたものと認めて差し支へあるまい。夫でなければ斯樣に恐れ入ると云はんより寧ろ悄然として、自ら襖に押し附けられて居る位な薩摩絣が如何に老朽だと云つて、苟めにも先生と名のつく主人を輕蔑し樣がない。馬鹿に出來る譯がない。

主人は座布團を押しやりながら、「さあお敷き」と云つたが毬栗先生はかたくなつた儘「へえ」と云つて動かない。鼻の先に剝げかゝつた更紗の座布團が「御乘んなさい」とも何とも云はずに着席して居る後に生きた大頭がつくねんと着席して居るのは妙なものだ。布團は乘る爲の布團で見詰める爲に細君が勸工場から仕入れて來たのではない。布團にして敷かれずんば、布團は正しく其名譽を毀損せられたるもので、

之を勸めたる主人も亦幾分か顏が立たない事になる。主人の顏を潰して迄、布團と睨めくらをして居る毬栗君は決して布團其物が嫌ひなのではない。實を云ふと、正式に坐つた事は祖父さんの法事の時の外は生れてから滅多にないので、さつきから既にしびれが切れかゝつて少々足の先は困難を訴へて居るのである。夫にもかゝはらず敷かない。布團が手持無沙汰に控へて居るにもかゝはらず敷かない。主人がさあお敷きと云ふのに敷かない。厄介な毬栗坊主だ。此位遠慮するなら多人數集まつた時もう少し遠慮すればいゝのに、學校でもう少し遠慮すればいゝのに、下宿屋でもう少し遠慮すればいゝのに。すまじき所へ氣兼をして、すべき時には謙遜しない、否大いに狼藉を働く。たちの惡い毬栗坊主だ。

所へ後ろの襖をすうと開けて、雪江さんが一碗の茶を恭しく坊主に供した。平生ならそらサベヂ・チーが出たと冷やかすのだが、主人一人に對してすら痛み入つて居る上へ、妙齢の女性が學校で覺え立ての小笠原流で、乙に氣取つた手つきをして茶碗を突き附けたのだから、坊主は大いに苦悶の體に見える。雪江さんは襖をしめる時に後からにや〳〵と笑つた。して見ると女は同年輩でも中々えらいものだ。坊主に比すれば遙かに度胸が据わつて居る。ことに先刻の無念にはら〳〵と流した一滴の紅涙のあとだから、此にやにやが更に目立つて見えた。

雪江さんの引き込んだあとは、雙方無言の儘、しばらくの間は辛抱して居たが、是では行をする樣なものだと氣が附いた主人は漸く口を開いた。

「君は何とか云つたけな」

「古井……」

「古井、古井何とかだね。名は」

「古井武右衛門」

「古井武右衛門――なる程、大分長い名だな。今の名ぢやない、昔の名だ。四年生だつたね」

「いゝえ」

「三年生か？」

「いゝえ、二年生です」

「甲組かね」

「乙です」

「乙なら、わたしの監督だね。さうか」と主人は感心して居る。實は此大頭は入學の當時から主人の眼について居るんだから、決して忘れる所ではない。のみならず、時々は夢に見る位感銘した頭である。然し呑気な主人は此頭と此古風な姓名とを連結して、其連結したものを又二年乙組に連結する事が出來なかつたのである。だから此夢に見る程感心した頭が自分の監督組の生徒であると聞いて、思はずさうかと心の裏で手を拍つたのである。然し此の大きな頭の、古い名の、而も自分の監督する生徒が何の爲に今頃やつて來たのか頓と推諒出來ない。元來不人望な主人の事だから、學校の生徒抔は正月だらうが暮だらうが殆ど寄り附いた事がない。寄り附いたのは古井武右衛門君を以て嚆矢とする位な珍客であるが、其來訪の主意がわからんには主人も大いに閉口して居るらしい。こんな面白くない人の家へ只遊びにくる譯もなからうし、又辭職勸告ならもう少し昂然と構へ込みさうだし、と云つて武右衛門君抔が一身上の用事

相談がある筈がないし、どつちからどう考へても主人には分らない。武右衞門君の樣子を見ると或は本人自身にすら、何でこゝ迄參つたのか判然しないかも知れない。仕方がないから主人からとう〳〵表向に聞き出した。

「君遊びに來たのか」

「さうぢやないんです」

「それぢや用事かね」

「えゝ」

「學校の事かい」

「えゝ少し御話ししようと思つて……」

「うむ。どんな事かね。さあ話し玉へ」と云ふと武右衞門君下を向いたぎり何も言はない。元來武右衞門君は中學の二年生にしてはよく辯ずる方で、頭の大きい割に腦力は發達して居らんが、喋舌る事に於ては乙組中鏘々たるものである。現に先達てコロンバスの日本譯を教へろと云つて大いに主人を困らしたは正に此武右衞門君である。其の鏘々たる先生が、最前から吃の御姫樣の樣にもぢ〳〵して居るのは、何か云はくのある事でなくてはならん。單に遠慮のみとは到底受け取られない。主人も少々不審に思つた。

「話す事があるなら早く話したらいゝぢやないか」

「少し話しにくい事で……」

「話しにくい？」と云ひながら主人は武右衞門君の顏を見たが、先方は依然として俯向になつてるから、

何事とも鑑定が出來ない。已むを得ず、語勢を變へて「いゝさ。何でも話すがいゝ。外に誰も聞いて居やしない。わたしも他言はしないから」と穩やかにつけ加へた。「話してもいゝでせうか？」と武右衛門君はまだ迷つて居る。

「いゝだらう」と主人は勝手な判斷をする。

「では話しますが」と云ひかけて、毬栗頭をむくりと持ち上げて主人の方を一寸まぼしさうに見た。其眼は三角である。主人は頰をふくらまして「朝日」の煙を吹き出しながら一寸横を向いた。

「實はその……困つた事になつちまつて……」

「何が？」

「何がつて、甚だ困るもんですから、來たんです」

「だからさ、何が困るんだよ」

「そんな事をする考へはなかつたんですけれども、濱田が貸せ貸せと云ふもんですから……」

「濱田と云ふのは濱田平助かい」

「えゝ」

「濱田に下宿料でも貸したのかい」

「何そんなものを貸したんぢやありません」

「ぢや何を貸したんだい」

「名前を貸したんです」

「濱田が君の名前を借りて何をしたんだい」
「艶書を送つたんです」
「何を送つた？」
「だから名前は廢して、投函者になると云つたんです」
「何だか要領を得んぢやないか。一體誰が何をしたんだい」
「艶書を送つたんです」
「艶書を送つた？誰に？」
「だから、話しにくいと云ふんです」
「ぢや君が、どこかの女に艶書を送つたのだ」
「いゝえ、僕ぢやないんです」
「濱田が送つたのかい」
「濱田でもないんです」
「ぢや誰が送つたんだい」
「誰だか分らないんです」
「些とも要領を得ないな。では誰も送らんのかい」
「名前丈は僕の名なんです」
「名前丈は君の名だつて、何の事だか些とも分らんぢやないか。もつと條理を立てて話すがいゝ。元來

其艶書を受けた當人はだれか」
「金田つて向う横丁に居る女です」
「あの金田といふ實業家か」
「えゝ」
「で、名前丈貸したとは何の事だい」
「あすこの娘がハイカラで生意氣だから艶書を送つたんです。――濱田が名前がなくちやいけないつて云ひますから、君の名前をかけつて云つたら、僕のぢやつまらない。古井武右衛門の方がいゝつて――それでとう〳〵僕の名を貸して仕舞つたんです」
「で、君はあすこの娘を知つてるのか。交際でもあるのか」
「交際も何もありやしません。顔なんか見た事もありません」
「亂暴だな。顔も知らない人に艶書をやるなんて、まあどう云ふ了見で、そんな事をしたんだい」
「只みんながあいつは生意氣で威張つてるつて云ふから、からかつてやつたんです」
「益亂暴だな。ぢや君の名を公然とかいて送つたんだな」
「えゝ文章は濱田が書いたんです。僕が名前を貸して遠藤が夜あすこのうち迄行つて投函して來たんです」
「ぢや三人で共同してやつたんだね」
「えゝ、ですけれども、あとから考へると、もしあらはれて退學にでもなると大變だと思つて、非常に

心配して二三日は寐られないんで、何だか茫やりして仕舞ひました」
「そりや又飛んでもない馬鹿をしたもんだ。それで文明中學二年生古井武右衛門とでもかいたのかい」
「いゝえ學校の名なんか書きやしません」
「學校の名を書かない丈まあよかつた。是で學校の名が出て見るがいゝ。夫こそ文明中學の名譽に關する」
「どうでせう、退校になるでせうか」
「さうさな」
「先生、僕のおやぢさんは大變八釜しい人で、夫にお母さんが繼母ですから、もし退校にでもならうもんなら、僕あ困つちまふです。本當に退校になるでせうか」
「だから滅多な眞似をしないがいゝ」
「する氣でもなかつたんですが、ついやつて仕舞つたんです。退校にならない様に出來ないでせうか」と武右衛門君は泣き出しさうな聲をして頻りに哀願に及んで居る。襖の陰では最前から細君と雪江さんがくす／＼笑つて居る。主人は飽く迄も勿體ぶつて「さうさな」を繰り返して居る。中々面白い。

吾輩が面白いといふと何がそんなに面白いと聞く人があるかも知れない。聞くのは尤もだ。人間にせよ、動物にせよ、己を知るのは生涯の大事である。己を知る事が出來さへすれば人間も人間として猫より尊敬を受けてよろしい。其時は吾輩もこんないたづらを書くのは氣の毒だからすぐさま已めて仕舞ふ積りである。然し自分で自分の鼻の高さが分らないと同じ様に、自己の何物かは中々見當がつき惡いと見えて、平

生から輕蔑して居る猫に向つてさへ斯樣な質問をかけるのであらう。人間は生意氣な樣でも矢張りどこか拔けて居る。萬物の靈だ抔とどこへでも萬物の靈を擔いであるくかと思ふと、是しきの事實が理解出來ない。而も恬として平然たるに至つては些と一嚏を催したくなる。彼は萬物の靈を背中へ擔いで、おれの鼻はどこにあるか敎へてくれ、敎へてくれと騷ぎ立てゝ居る。それなら萬物の靈を辭職するかと思ふと、どう致して死んでも放しさうにしない。此位公然と矛盾をして平氣で居られゝば愛嬌になる。愛嬌になる代りには馬鹿を以て甘んじなくてはならん。

吾輩が此際武右衛門君と、主人と細君及雪江孃を面白がるのは、單に外部の事件が鉢合せをして、其鉢合せが波動を乙な所に傳へるからではない。實は其鉢合せの反響が人間の心に個々別々の音色を起すからである。第一、主人は此事件に對して寧ろ冷淡である。武右衛門君のおやぢさんが如何に八釜しくつて、おつかさんが如何に君を繼子あつかひにしようとも、あんまり驚かない。驚く筈がない。武右衛門君が退校になるのは、自分が免職になるのとは大いに趣が違ふ。千人近くの生徒がみんな退校になつたら、敎師も衣食の途に窮するかも知れないが、古井武右衛門君一人の運命がどう變化しようと、主人の朝夕には殆ど關係がない。關係の薄い所には同情も自ら薄い譯である。見ず知らずの人の爲に眉をひそめたり、鼻をかんだり、嘆息をするのは、決して自然の傾向ではない。人間がそんなに情深い、思ひやりのある動物であるとは甚だ受け取りにくい。只世の中に生れて來た賦稅として、時々交際の爲に涙を流して見たり、氣の毒な顏を作つて見せたりする許りである。云はゞ胡魔化し性表情で、實を云ふと大分骨が折れる藝術である。此胡魔化しをうまくやるものを藝術的良心の強い人と云つて、是は世間から大變珍重される。

だから人から珍重される人間程怪しいものはない。試して見ればすぐ分る。此點に於て主人は寧ろ拙な部類に屬すると云つてよろしい。拙だから、珍重されない。珍重されないから、内部の冷淡を存外隱す所もなく發表して居る。彼が武右衛門君に對して「さうさな」を繰り返して居るのでも這裏の消息はよく分る。諸君は冷淡だからと云つて、決して主人の樣な善人を嫌つてはいけない。冷淡は人間の本來の性質であつて、其性質をかくさうと力めないのは正直な人である。もし諸君がかゝる際に冷淡以上を望んだら、夫こそ人間を買ひ被つたと云はなければならない。正直ですら拂底な世に、それ以上を豫期するのは、馬琴の小說から志乃や小文吾が拔けだして、向う三軒兩隣へ八犬傳が引き越した時でなくては、あてにならない無理な注文である。主人はまづ此位にして次には茶の間で笑つてる女連に取りかゝるが、是は主人の冷淡を一步向うへ跨いで、滑稽の領分に躍り込んで嬉しがつて居る。此女達には武右衛門君が頭痛に病んで居る艶書事件が、佛陀の福音の如く難有く思はれる。理由はない只難有い。强ひて解剖すれば武右衛門君が困るのが難有いのである。諸君、女に向つて聞いて御覽「あなたは人が困るのを面白がつて笑ひますか」と。聞かれた人は此問を呈出した者を馬鹿と云ふだらう。馬鹿と云はなければ、わざとこんな問をかけて淑女の品性を侮辱したと云ふだらう。侮辱したと思ふのは事實かも知れないが、人の困るのを笑ふのも事實である。であるとすれば、是から私の品性を侮辱する樣な事を自分でして御目にかけますから、何とか云つちやいやよと斷るのと一般である。僕は泥棒をする、然し決して不道德と云つてはならん、若し不道德だ抔と云へば僕の顏へ泥を塗つたものである、僕を侮辱したものである、と主張する樣なものだ。女は中々利口だ、考へに筋道が立つて居る。苟も人間に生れる以上は踏んだり、蹴たり、どやされたりし

て、而も人が振りむきもせぬ時、平氣で居る覺悟が必要であるのみならず、唾を吐きかけられ、糞をたれかけられた上に、大きな聲で笑はれるのを快く思はなくてはならない。それでなくては斯樣に利口な、女と名のつくものと交際は出來ない。武右衛門先生も一寸したはずみから、飛んだ間違ひをして大いに恐れ入つては居る樣なもの丶、斯樣に恐れ入つてるものを陰で笑ふのは失敬だと位は思ふかも知れないが、それは年が行かない稚氣といふもので、人が失禮をした時に怒るのを氣が小さいと先方では名づけるさうだから、さう云はれるのがいやなら大人しくするがよろしい。最後に武右衛門君の心行きを一寸紹介する。君は心配の權化である。彼の偉大なる頭腦はナポレオンのそれが功名心を以て充滿せるが如く、正に心配を以てはちきれんとして居る。時々其團子つ鼻がぴく〳〵動くのは心配が顔面神經に傳はつて、反射作用の如く無意識に活動するのである。彼は大きな鐵砲丸を呑み下した如く、腹の中に奈何ともすべからざる塊りを抱いて、此兩三日處置に窮して居る。其切なさの餘り、別に分別の出所もないから監督と名のつく先生の所へ出向いたらどうか助けてくれるだらうと思つて、いやな人の家へ大きな頭を下げにまかり越したのである。彼は平生學校で主人にからかつたり、同級生を煽動して主人を困らしたりした事は丸で忘れて居る。如何にからかはうとも困らせようとも監督と名のつく以上は心配して呉れるに相違ないと信じて居るらしい。隨分單純なものだ。監督は主人が好んでなつた役ではない。校長の命によつて已むを得ず頂いて居る、云はば迷亭の叔父さんの山高帽子の種類である。只名前である。只名前丈ではどうする事も出來ない。名前がいざと云ふ場合に役に立つなら雪江さんは名前丈で見合が出來る譯だ。武右衛門君は啻に我儘なるのみならず、他人は己に向つて必ず親切でなくてはならんと云ふ、人間を買ひ被つた假定から出

立して居る。笑はれる抔とは思ひも寄らなかつたらう。武右衛門君は監督の家へ來て、屹度人間について、一の眞理を發明したに相違ない。彼は此眞理の爲に將來益〻本當の人間になるだらう、人の心配には冷淡になるだらう、人の困る時には大きな聲で笑ふだらう。かくの如くにして天下は未來の武右衛門君を以て充たされるであらう。金田君及び金田令夫人を以て充たされるであらう。吾輩は切に武右衛門君の爲に瞬時も早く自覺して眞人間になられん事を希望するのである。然らずんば如何に心配するとも、如何に後悔するとも、如何に善に移るの心が切實なりとも、到底金田君の如き成功は得られんのである。否社會は遠からずして君を人間の居住地以外に放逐するであらう。文明中學の退校どころではない。

斯樣に考へて面白いなと思つて居ると、格子ががら〳〵とあいて、玄關の障子の陰から顏が半分ぬうと出た。

「先生」

主人は武右衛門君に「さうさな」を繰り返して居た所へ、先生と玄關から呼ばれたので誰だらうと其方を見ると半分程筋違に障子から食み出して居る顏は正しく寒月君である。「おい、御這入り」と云つたぎり坐つて居る。

「御客ですか」と寒月君は矢張り顏半分で聞き返して居る。

「なに構はん、まあ御上がり」

「實は一寸先生を誘ひに來たんですがね」

「どこへ行くんだい。又赤坂かい。あの方面はもう御免だ。先達ては無闇にあるかせられて、足が棒の

樣になつた」
「今日は大丈夫です。久し振りに出ませんか」
「どこへ出るんだい。まあ御上がり」
「上野へ行つて虎の鳴き聲を聞かうと思ふんです」
「つまらんぢやないか、夫より一寸御上がり」
寒月君は到底遠方では談判不調と思つたものか、靴を脫いでのそ〳〵上がつて來た。例の如く鼠色の、尻につぎの當たつたずぼんを穿いて居るが、是は時代の爲、若しくは尻の重い爲に破れたのではない、本人の辯解によると近頃自轉車の稽古を始めて局部に比較的多くの摩擦を與へるからである。未來の細君を以て矚目された本人へ文をつけた戀の仇とは夢にも知らず「やあ」と云つて武右衛門君に輕く會釋をして緣側へ近い所へ座をしめた。
「虎の鳴き聲を聞いたつて詰まらないぢやないか」
「えゝ、今ぢやいけません、是から方々散步して夜十一時頃になつて、上野へ行くんです」
「へえ」
「すると公園內の老木は森々として物凄いでせう」
「さうさな、晝間より少しは淋しいだらう」
「夫で何でも成るべく樹の茂つた、晝でも人の通らない所を擇つてあるいて居ると、いつの間にか紅塵萬丈の都會に住んでる氣はなくなつて、山の中へ迷ひ込んだ樣な心持ちになるに相違ないです」

「そんな心持ちになつてどうするんだい」

「そんな心持ちになつて、しばらく佇んで居ると忽ち動物園のうちで、虎が鳴くんです」

「さう旨く鳴くかい」

「大丈夫鳴きます。あの鳴き聲は晝でも理科大學へ聞こえる位なんですから、深夜闃寂として、四望人なく、鬼氣肌に逼つて、魑魅鼻を衝く際に……」

「魑魅鼻を衝くとは何の事だい」

「そんな事を云ふぢやありませんか、怖い時に」

「さうかな、あんまり聞かない樣だが。夫で」

「夫で虎が上野の老杉の葉を悉く振ひ落とす樣な勢で鳴くでせう。物凄いでさあ」

「そりや物凄いだらう」

「どうです冒險に出掛けませんか。屹度愉快だらうと思ふんです。どうしても虎の鳴き聲は夜なかに聞かなくつちや聞いたとはいはれないだらうと思ふんです」

「さうさな」と主人は武右衛門君の哀願に冷淡である如く、寒月君の探檢にも冷淡である。

此時迄黙然として虎の話を羨ましさうに聞いて居た武右衛門君は主人の「さうさな」で再び自分の身の上を思ひ出したと見えて、「先生、僕は心配なんですが、どうしたらいゝでせう」と又聞き返す。寒月君は不審な顔をして此の大きな頭を見た。吾輩は思ふ仔細あつて一寸失敬して茶の間へ廻る。

茶の間では細君がくす〳〵笑ひながら、京燒の安茶碗に番茶を浪々と注いで、アンチモニーの茶託の上

へ載せて、
「雪江さん、憚りさま、之を出して來て下さい」
「わたし、いやよ」
「どうして」と細君は少々驚いた體で、笑ひをはたと留める。
「どうしても」と雪江さんはいやに澄ました顔を即席にこしらへて、傍にあつた讀賣新聞の上にのしかゝる樣に眼を落とした。細君はもう一應談判を始める。
「あら妙な人ね。寒月さんですよ、構やしないわ」
「でもわたし、いやなんですもの」と讀賣新聞の上から眼を放さない。こんな時に一字も讀めるものではないが、讀んで居ないなどとあばかれたら又泣き出すだらう。
「ちつとも恥づかしい事はないぢやありませんか」と今度は細君笑ひながら、わざと茶碗を讀賣新聞の上へ押しやる。雪江さんは「あら人の惡い」と新聞を茶碗の下から、拔かうとする拍子に茶托に引きかゝつて、番茶は遠慮なく新聞の上から疊の目へ流れ込む。「それ御覧なさい」と細君が云ふと、雪江さんは「あら大變だ」と臺所へ馳け出して行つた。雜巾でも持つてくる了見だらう。吾輩にはこの狂言が一寸面白かつた。
寒月君はそれとも知らずに座敷で妙な事を話して居る。
「先生障子を張り易へましたね。誰が張つたんです」
「女が張つたんだ。よく張れて居るだらう」

「えゝ、中々うまい。あの時々御出でになる御孃さんが御張りになつたんですか」
「うん、あれも手傳つたのさ。此位障子が張れゝば嫁に行く資格はあると云つて威張つてるぜ」
「へえ、成程」と云ひながら寒月君障子を見詰めて居る。
「こつちの方は平ですが、右の端は紙が餘つて波が出來て居ますね」
「あすこが張りたての所で、尤も經驗の乏しい時に出來上がつた所さ」
「なる程、少し御手際が落ちますね。あの表面は超絶的曲線で到底普通のファンクションではあらはせないです」と、理學者丈に六づかしい事を云ふと、主人は
「さうさね」と好い加減な挨拶をした。
此樣子ではいつ迄歎願をして居ても、到底見込みがないと思ひ切つた武右衛門君は突然彼の偉大なる頭蓋骨を疊の上に壓しつけて、無言の裡に暗に訣別の意を表した。主人は「歸るかい」と云つた。武右衛門君は悄然として薩摩下駄を引きずつて門を出た。可哀相に、打ちやつて置くと巖頭の吟でも書いて華嚴瀧から飛び込むかも知れない。元を糺せば金田令孃のハイカラと生意氣から起つた事だ。もし武右衛門君が死んだら、幽靈になつて令孃を取り殺してやるがいゝ。あんなものが世界から一人や二人消えてなくなつたつて、男子はすこしも困らない。寒月君はもつと令孃らしいのを貰ふがいゝ。
「先生ありや生徒ですか」
「うん」
「大變大きな頭ですね。學問は出來ますか」

「頭の割には出來ないがね、時々妙な質問をするよ。此間コロンバスを譯して下さいつて大いに弱つた」
「全く頭が大き過ぎますからそんな餘計な質問をするんでせう。先生何と仰しやいました」
「えゝ？なあに好い加減な事を云つて譯してやつた」
「夫でも譯す事は譯したんですか、こりやえらい」
「子供は何でも譯してやらないと信用せんからね」
「先生も中々政治家になりましたね。然し今の樣子では何だか非常に元氣がなくつて、先生を困らせる樣には見えないぢやありませんか」
「今日は少し弱つてるんだよ。馬鹿な奴だよ」
「どうしたんです。何だか一寸見た許りで非常に可哀相になりました。全體どうしたんです」
「なに愚な事さ。金田の娘に艶書を送つたんだ」
「え？あの大頭がですか。近頃の書生は中々えらいもんですね。どうも驚いた」
「君も心配だらうが……」
「何、些とも心配ぢやありません。却て面白いです。いくら艶書が降り込んだつて大丈夫です」
「さう君が安心して居れば構はないが……」
「構はんですとも、私は一向構ひません。然しあの大頭が艶書をかいたと云ふには、少し驚きますね」
「それがさ冗談にしたんだよ。あの娘がハイカラで生意氣だからからかつてやらうつて、三人が共同して……」

「三人が一本の手紙を金田の令嬢にやつたんですか。益奇談ですね。一人前の西洋料理を三人で食ふ様なものぢやありませんか」

「所が手分けがあるんだ。一人が文章をかく、一人が投函する、一人が名前を貸す。で今來たのが名前を貸した奴なんだがね。是が一番愚だね。しかも金田の娘の顔も見た事がないつて云ふんだぜ。どうしてそんな無茶な事が出來たものだらう」

「そりや、近來の大出來ですよ。傑作ですね。どうもあの大頭が、女に文をやるなんて面白いぢやありませんか」

「飛んだ間違ひにならあね」

「なに、なつたつて構やしません。相手が金田ですもの」

「だつて君が貰ふかも知れない人だぜ」

「貰ふかも知れないから構はないんです。なあに金田なんか構やしません」

「君は構はなくつても……」

「なに金田だつて構やしません、大丈夫です」

「それなら夫でいゝとして、當人があとに成つて、急に良心に責められて、恐ろしくなつたものだから、大いに恐縮して僕のうちへ相談に來たんだ」

「へえ、夫であんなに悄々として居るんですか、氣の小さい子と見えますね。先生何とか云つて御遣んなすつたんでせう」

「本人は退校になるでせうかつて。夫を一番心配して居るのさ」
「何で退校になるんです」
「そんな悪い、不道徳な事をしたから」
「何、不道徳と云ふ程でもありませんやね。構やしません。金田ぢや名誉に思つて乾度吹聴して居ます
よ」
「まさか」
「兎に角可哀相ですよ。そんな事をするのがわるいとしても、あんなに心配させちや、若い男を一人殺
してしまひますよ。ありや頭は大きいが人相はそんなにわるくありません。鼻なんかぴく／＼させて可愛
いです」
「君も大分迷亭見た様に呑氣な事を云ふね」
「何、是が時代思潮です。先生はあまり昔風だから、何でも六づかしく解釋なさるんです」
「然し愚ぢやないか、知りもしない所へ、いたづらに艶書を送るなんて、丸で常識をかいてるぢやない
か」
「いたづらは、大概常識をかいて居ますさあ。救つて御やんなさい。功徳になりますよ。あの容子ぢや華
嚴の瀧へ出掛けますよ」
「さうだな」
「さうなさい。もつと大きな、もつと分別のある大僧共がそれ所ぢやない。わるいたづらをして知らん

面をして居ますよ。あんな子を退校させる位なら。そんな奴等を片つ端から放逐でもしなくつちや不公平でさあ」

「それもさうだね」

「夫でどうです、上野へ虎の鳴き聲をきゝに行くのは」

「虎かい」

「えゝ、聞きに行きませう。實は二三日中に一寸歸國しなければならない事が出來ましたから、當分どこへも御伴は出來ませんから、今日は是非一所に散歩をしようと思つて來たんです」

「さうか歸るのかい、用事でもあるのかい」

「えゝ一寸用事が出來たんです。――ともかくも出ようぢやありませんか」

「さう、それぢや出ようか」

「さあ行きませう。今日は私が晩餐を奢りますから、――夫から運動をして上野へ行くと丁度好い刻限です」と頻りに促すものだから、主人も其氣になつて、一所に出掛けて行つた。あとでは細君と雪江さんが遠慮のない聲でけら〱けら〱から〱と笑つて居た。

十一

床の間の前に碁盤を中に据ゑて迷亭君と獨仙君が對坐して居る。
「たゞは遣らない。負けた方が何か奢るんだぜ。いゝかい」と迷亭君が念を押すと、獨仙君は例の如く山羊髯を引つ張りながら、かう云つた。
「そんな事をすると、折角の淸戲を俗了して仕舞ふ。かけ抔で勝負に心を奪はれては面白くない。成敗を度外に置いて、白雲の自然に岫を出でて冉々たる如き心持ちで一局を了してこそ、個中の味はわかるものだよ」
「また來たね。そんな仙骨を相手にしちや少々骨が折れ過ぎる。宛然たる列仙傳中の人物だね」
「無絃の素琴を彈じさ」
「無線電信をかけかね」
「とにかく、やらう」
「君が白を持つのかい」
「どつちでも構はない」
「流石に仙人丈あつて鷹揚だ。君が白なら自然の順序として僕は黑だね。さあ、來給へ。どこからでも來給へ」

「黑から打つのが法則だよ」

「成程、然らば謙遜して、定石にこゝいらから行かう」

「定石にそんなのはないよ」

「なくつても構はない。新奇發明の定石だ」

吾輩は世間が狹いから碁盤と云ふものは近來になつて始めて拜見したのだが、考へれば考へる程妙に出來て居る。廣くもない四角な板を狹苦しく四角に仕切つて、目が眩む程ごた／＼と黑白の石をならべる。さうして勝つたとか、負けたとか、死んだとか、生きたとか、あぶら汗を流して騷いで居る。高が一尺四方位の面積だ。猫の前足で掻き散らしても滅茶々々になる。引き寄せて結べば草の庵にて、解くればもとの野原なりけり。入らざるいたづらだ。懷手をして盤を眺めて居る方が遙かに氣樂である。夫も最初の三四十目は、石の並べ方では別段目障りにもならないが、いざ天下わけ目と云ふ間際に覗いて見ると、いやはや御氣の毒な有樣だ。白と黑が盤からこぼれ落ちる迄に押し合つて、御互にギュー／＼云つて居る。窮屈だからと云つて、隣りの奴にどいて貰ふ譯にも行かず、邪魔だと申して前の先生に退去を命ずる權利もなし、天命とあきらめて、ぢつとして身動きもせず、すくんで居るより外に、どうする事も出來ない。碁を發明したものは人間で、人間の嗜好が局面にあらはれるものとすれば、窮屈なる碁石の運命はせゝこましい人間の性質を代表して居ると云つても差し支へない。人間の性質が碁石の運命で推知する事が出來るものとすれば、人間とは天空海濶の世界を、我からと縮めて、己の立つ兩足以外には、どうあつても踏み出せぬ樣に、小刀細工で自分の領分に繩張りをするのが好きなんだと斷言せざるを得ない。人間とは强ひて

苦痛を求めるものであると一言に評してもよからう。

呑氣なる迷亭君と、禪機ある獨仙君とは、どう云ふ了見か、今日に限つて戸棚から古碁盤を引きずり出して、此の暑苦しいいたづらを始めたのである。さすがに御兩人御揃ひの事だから、最初のうちは各自任意の行動をとつて、盤の上を白石と黑石が自由自在に飛び交はして居たが、盤の廣さには限りがあつて、横竪の目盛りは一手毎に埋まつて行くのだから、いかに呑氣でも、いかに禪機があつても、苦しくなるのは當り前である。

「迷亭君、君の碁は亂暴だよ。そんな所へ這入つてくる法はない」

「禪坊主の碁にはこんな法はないかも知れないが、本因坊の流儀ぢや、あるんだから仕方がないさ」

「然し死ぬ許りだぜ」

「臣死をだも辭せず、況や彘肩をやと、一つ、かう行くかな」

「さう御出でになつたと、よろしい。薫風南より來つて、殿角微涼を生ず。かうついで置けば大丈夫なものだ」

「おや、ついだのはさすがにえらい。まさかつぐ氣遣ひはなからうと思つた。ついでくりやるな八幡鐘をと、かうやつたら、どうするかね」

「どうするも、かうするもないさ。一劍天に倚つて寒し――えゝ、面倒だ。思ひ切つて、切つて仕舞へ」

「やゝ大變々々。そこを切られちや死んで仕舞ふ。おい冗談ぢやない。一寸待つた」

「それだから、さつきから云はん事ぢやない。かうなつてる所へは這入れるものぢやないんだ」

「這入つて失敬仕り候。一寸此石をとつて呉れ玉へ」
「それも待つのかい」
「序に其隣のも引き揚げて見てくれ給へ」
「つう〳〵しいぜ、おい」
「Do you see the boy か。――なに君と僕の間柄ぢやないか。そんな水臭い事を言はずに、引き揚げてくれ給へな。死ぬか生きるかと云ふ場合だ。しばらく、しばらくつて花道から驅け出してくる所だよ」
「そんな事は僕は知らんよ」
「知らなくつてもいゝから一寸どけ給へ」
「君さつきから、六返待つたをしたぢやないか」
「記憶のいゝ男だな。向後は舊に倍し待つたを仕り候。だから一寸どけ給へと云ふのだあね。君も餘つ程強情だね。坐禪なんかしたら、もう少し捌けさうなものだ」
「然し此石でも殺さなければ、僕の方は少し負けになりさうだから……」
「君は最初から負けても構はない流ぢやないか」
「僕は負けても構はないが、君には勝たしたくない」
「飛んだ悟道だ、相變らず春風影裏に電光をきつてるね」
「春風影裏ぢやない、電光影裏だよ。君のは逆だ」
「ハヽヽもう大抵逆になつていゝ時分だと思つたら、矢張り慥かな所があるね。それぢや仕方がない、

あきらめるかな」
「生死事大、無常迅速、あきらめるさ」
「アーメン」と迷亭先生今度は丸で關係のない方面へぴしやりと一石を下した。
床の間の前で迷亭君と獨仙君が一生懸命に輸贏を爭つて居ると、座敷の入口には、寒月君と東風君が相ならんで其傍に主人が黄色い顏をして坐つてゐる。寒月君の前に鰹節が三本、裸の儘疊の上に行儀よく排列してあるのは奇觀である。
此鰹節の出處は寒月君の懷で、取り出した時は暖かく手のひらに感じた位、裸ながらぬくもつて居た。主人と東風君は妙な眼をして視線を鰹節の上に注いで居ると、寒月君はやがて口を開いた。
「實は四日許り前に國から歸つて來たのですが、色々用事があつて、方々馳けあるいてゐたものですから、つい上がられなかつたのです」
「さう急いでくるには及ばないさ」と主人は例の如く無愛嬌な事を云ふ。
「急いで來んでもいゝのですけれども、此おみやげを早く獻上しないと心配ですから」
「鰹節ぢやないか」
「えゝ、國の名産です」
「名産だつて東京にもそんなのは有りさうだぜ」と主人は一番大きな奴を一本取り上げて、鼻の先へ持つて行つて臭をかいで見る。
「かいだつて、鰹節の善惡はわかりませんよ」

「少し大きいのが名産たる所以かね」
「まあ食べて御覽なさい」
「食べる事はどうせ食べるが、こいつは何だか先が缺けてるぢやないか」
「それだから早く持つて來ないと心配だと云ふのです」
「なぜ？」
「なぜつて、そりや鼠が食つたのです」
「そいつは危險だ。滅多に食ふとペストになるぜ」
「なに大丈夫、その位かじつたつて害はありません」
「全體どこで噛つたんだい」
「船の中でです」
「船の中？どうして」
「入れる所がなかつたから、ヴイオリンと一所に袋のなかへ入れて、船へ乘つたら、其晩にやられました。鰹節だけなら、いゝのですけれども、大切なヴイオリンの胴を鰹節と間違へて矢張り少々噛りました」
「そゝつかしい鼠だね。船の中に住んでると、さう見境がなくなるものかな」と主人は誰にも分らん事を云つて依然として鰹節を眺めて居る。
「なに鼠だから、どこに住んでてもそゝつかしいのでせう。だから下宿へ持つて來ても又やられさうでね。劍呑だから夜は寐床の中へ入れて寐ました」

「少しきたない樣だぜ」
「だから食べる時には一寸御洗ひなさい」
「一寸位ぢや綺麗にやなりさうもない」
「それぢや灰汁でもつけて、ごしく磨いたらいゝでせう」
「ヴイオリンも抱いて寐たのかい」
「ヴイオリンは大き過ぎるから抱いて寐る譯には行かないんですが……」と云ひかけると、
「なんだつて？ヴイオリンを抱いて寐たつて？夫は風流だ。行く春や重たき琵琶のだき心と云ふ句もあるが、夫は遠きその上の事だ。明治の秀才はヴイオリンを抱いて寐なくつちや古人を凌ぐ譯には行かないよ。かい卷に長き夜守るやヴイオリンはどうだい。東風君、新體詩でそんな事が云へるかい」と向うの方から迷亭先生大きな聲でこつちの談話にも關係をつける。
東風君は眞面目で「新體詩は俳句と違つてさう急には出來ません。然し出來た曉にはもう少し生靈の機微に觸れた妙音が出ます」
「さうかね、生靈はおがらを焚いて迎へ奉るものと思つてたが、矢つ張り新體詩の力でも御來臨になるかい」と迷亭はまだ碁をそつちのけにして調戲つてゐる。
「そんな無駄口を叩くと又負けるぜ」と主人は迷亭に注意する。迷亭は平氣なもので、
「勝ちたくても、負けたくても、相手が釜中の章魚同然手も足も出せないのだから、僕も無聊で已むを得ずヴイオリンの御仲間を仕るのさ」と云ふと、相手の獨仙君は聊か激した調子で、

「今度は君の番だよ。こつちで待つてるんだ」と云ひ放つた。
「え？もう打つたのかい」
「打つたとも、とうに打つたさ」
「どこへ」
「此白をはすに延ばした」
「なある程。此白をはすに延ばして負けにけりか、そんなら此方はと――此方は――此方は此方はとて暮れにけりと、どうもいゝ手がないね。君もう一返打たしてやるから勝手な所へ一目打ち玉へ」
「そんな碁があるものか」
「そんな碁があるものかなら打ちませう。――それぢやこのかど地面へ一寸曲がつて置くかな。――寒月君、君のヴイオリンはあんまり安いから鼠が馬鹿にして嚙るんだよ、もう少しいゝのを奮發して買ふさ、僕が以太利亞から三百年前の古物を取り寄せてやらうか」
「どうか願ひます。序に御拂ひの方も願ひたいもので」
「そんな古いものが役に立つものか」と何も知らない主人は一喝にして迷亭君を極めつけた。
「君は人間の古物とヴイオリンの古物と同一視して居るんだらう。人間の古物でも金田某の如きものは今だに流行してる位だから、ヴイオリンに至つては古い程がいゝのさ。――さあ、獨仙君どうか御早く願はう。けいまさのせりふぢやないが秋の日は暮れ易いからね」
「君の樣なせはしない男と碁を打つのは苦痛だよ。考へる暇も何もありやしない。仕方がないから、こ

こへ一目入れて目にして置かう」
「おや〱、とう〱生かしてしまつた。惜しい事をしたね。まさかそこへは打つまいと思つて、聊か駄辯を振つて肝膽を碎いて居たが、矢つ張り駄目か」
「當り前さ。君のは打つのぢやない、胡魔化すのだ」
「夫が本因坊流、金田流、當世紳士流さ。――おい苦沙彌先生、さすがに獨仙君は鎌倉へ行つて萬年漬を食つた丈あつて、物に動じないね。どうも敬々服々だ。碁はまづいが、度胸は据わつてる」
「だから君の樣な度胸のない男は、少し眞似をするがいゝ」と主人が後向きのまゝで答へるや否や、迷亭君は大きな赤い舌をぺろりと出した。獨仙君は毫も關せざるものゝ如く、「さあ君の番だ」と又相手を促した。
「君はヴイオリンをいつ頃から始めたのかい。僕も少し習はうと思ふのだが、よつぽど六づかしいものださうだね」と東風君が寒月君に聞いて居る。
「うむ、一通りなら誰にでも出來るさ」
「同じ藝術だから詩歌の趣味のあるものは矢張り音樂の方でも上達が早いだらうと、ひそかに恃む所があるんだが、どうだらう」
「いゝだらう。君なら屹度上手になるよ」
「君はいつ頃から始めたのかね」
「高等學校時代さ。――先生、私のヴイオリンを習ひ出した顛末を御話しした事がありましたかね」

「いゝえ、まだ聞かない」
「高等學校時代に先生でもあつてやり出したのかい」
「なあに先生も何もありやしない。獨習さ」
「全く天才だね」
「獨習なら天才と限つた事もなからう」と寒月君はつんとする。天才と云はれてつんとするのは寒月君丈だらう。
「そりやどうでもいゝが、どう云ふ風に獨習したのか一寸聞かし玉へ。參考にしたいから」
「話してもいゝ。先生話しませうかね」
「あゝ話し玉へ」
「今では若い人がヴイオリンの箱をさげて、よく往來抔をあるいて居りますが、其時分は高等學校生で西洋の音樂抔をやつたものは殆どなかつたのです。ことに私の居つた學校は田舍の田舍で麻裏草履さへないと云ふ位な質朴な所でしたから、學校の生徒でヴイオリン抔を彈くものは勿論一人もありません。……」
「何だか面白い話が向うで始まつた樣だ。獨仙君いゝ加減に切り上げようぢやないか」
「まだ片付かない所が二三箇所ある」
「あつてもいゝ。大概な所なら、君に進上する」
「さう云つたつて、貰ふ譯にも行かない」
「禪學者にも似合はん几帳面な男だ。それぢや一氣呵成にやつちまはう。——寒月君、何だか餘つ程面

白さうだね。――あの高等學校だらう、生徒が裸足で登校するのは……」
「そんな事はありません」
「でも、皆はだしで兵式體操をして、廻れ右をやるんで足の皮が大變厚くなつてると云ふ話だぜ」
「まさか。だれがそんな事を云ひました」
「だれでもいゝよ。さうして辨當には偉大なる握り飯が一個、夏蜜柑の樣に腰へぶら下げて來て、夫を食ふんだつて云ふぢやないか。食ふと云ふより寧ろ食ひ附くんだね。すると中心から梅干が一個出て來るさうだ。此梅干が出るのを樂しみに鹽氣のない周圍を一心不亂に食ひ缺いて突進するんだと云ふが、成程元氣旺盛なものだね。獨仙君、君の氣に入りさうな話だぜ」
「質朴剛健でたのもしい氣風だ」
「まだたのもしい事がある。あすこには灰吹きがないさうだ。僕の友人があすこへ奉職をして居る頃吐月峰の印のある灰吹きを買ひに出た所が、吐月峰所か、灰吹きと名づくべきものが一個もない。不思議に思つて聞いて見たら、灰吹き抔は裏の藪へ行つて切つて來れば誰にでも出來るから、賣る必要はないと澄まして答へたさうだ。是も質朴剛健の氣風をあらはす美譚だらう、ねえ獨仙君」
「うむ、そりや夫でいゝが、こゝへ駄目を一つ入れなくちやいけない」
「よろしい。駄目、駄目、駄目と。夫で片附いた。――僕は其話を聞いて、實に驚いたね。そんな所で君がヴイオリンを獨習したのは見上げたものだ。惸獨にして不羣なりと楚辭にあるが、寒月君は全く明治の屈原だよ」

「屈原はいやですよ」
「それぢや今世紀のヱルテルさ。――なに石を上げて勘定しろ?やに物堅い性質だね。勘定しなくつても僕は負けてるから慥かだ」
「然し極りがつかないから……」
「それぢや君やつてくれ給へ。僕は勘定所ぢやない。一代の才人ヱルテル君がヴイオリンを習ひ出した逸話を聞かなくつちや、先祖へ濟まないから失敬する」と席をはづして、寒月君の方へすり出して來た。獨仙君は丹念に白石を取つては白の穴を埋め、黑石を取つては黑の穴を埋めて、しきりに口の內で計算をして居る。寒月君は話しをつゞける。
「土地柄が既に土地柄だのに、私の國のものが又非常に頑固なので、少しでも柔弱なものが居つては、他縣の生徒に外聞がわるいと云つて、無暗に制裁を嚴重にしましたから、隨分厄介でした」
「君の國の書生と來たら、本當に話せないね。元來何だつて、紺の無地の袴なんぞ穿くんだい。第一あれからして乙だね。さうして鹽風に吹かれ附けてるせゐか、どうも色が黑いね。男だからあれで濟むが女があれぢや嘸かし困るだらう」と迷亭君が一人這入ると肝心の話がどつかへ飛んで行つて仕舞ふ。
「女もあの通り黑いんです」
「それでよく貰ひ手があるね」
「だつて一國中悉く黑いのだから仕方がありません」
「因果だね。ねえ苦沙彌君」

「黒い方がいゝだらう。生じ白いと鏡を見るたんびに己惚が出ていけない。女と云ふものは始末にをへない物件だからなあ」と主人は喟然として大息を洩らした。
「だつて一國中悉く黒ければ、黒い方で己惚れはしませんか」と東風君が尤もな質問をかけた。
「とも角も女は全然不必要な者だ」と主人が云ふと、
「そんな事を云ふと細君が後で御機嫌がわるいぜ」と笑ひながら迷亭先生が注意する。
「なに大丈夫だ」
「居ないのかい」
「子供を連れて、さつき出掛けた」
「どうれで靜かだと思つた。どこへ行つたのだい」
「どこだか分らない。勝手に出てあるくのだ」
「さうして勝手に歸つてくるのかい」
「まあさうだ。君は獨身でいゝなあ」と云ふと、東風君は少々不平な顔をする。寒月君はにや〳〵と笑ふ。迷亭君は
「妻を持つとみんなさう云ふ氣になるのさ。ねえ獨仙君、君抔も細君難の方だらう」
「えゝ？一寸待つた。四六二十四、二十五、二十六、二十七と。狹いと思つたら、四十六目あるか。もう少し勝つた積りだつたが、こしらへて見ると、たつた十八目の差か。――何だつて？」
「君も細君難だらうと云ふのさ」

「アハヽヽ、別段難でもないさ。僕の妻は元來僕を愛して居るのだから」

「そいつは少々失敬した。夫でこそ獨仙君だ」

「獨仙君ばかりぢやありません。そんな例はいくらでもありますよ」と寒月君が天下の細君に代つて一寸辯護の勞を取つた。

「僕も寒月君に賛成する。僕の考へでは人間が絶對の域に入るには、只二つの道がある許りで、其二つの道とは藝術と戀だ。夫婦の愛は其一つを代表するものだから、人間は是非結婚をして、此幸福を完うしなければ天意に背く譯だと思ふんだ。――がどうでせう先生」と東風君は相變らず眞面目で迷亭君の方へ向き直つた。

「御名論だ。僕抔は到底絶對の境に這入れさうもない」

「妻を貰へば猶這入れやしない」と主人はむづかしい顔をして云つた。

「とも角も我々未婚の青年は藝術の靈氣にふれて向上の一路を開拓しなければ人生の意義が分らないですから、先づ手始めにヴイオリンでも習はうと思つて寒月君にさつきから經驗譚をきいてゐるのです」

「さう〳〵、エルテル君のヴイオリン物語を拜聽する筈だつたね。さあ話し給へ。もう邪魔はしないから」と迷亭君が漸く鋒鋩を收めると、

「向上の一路はヴイオリン抔で開ける者ではない。そんな遊戲三昧で宇宙の眞理が知れては大變だ。這裡の消息を知らうと思へば矢張り懸崖に手を撒して、絶後に再び蘇る底の氣魄がなければ駄目だ」と獨仙君は勿體振つて東風君に訓戒じみた説教をしたのはよかつたが、東風君は禪宗のぜの字も知らない男だか

ら頓と感心した容子もなく、
「へえ。さうかも知れませんが、矢張り藝術は人間の渇仰の極致を表はしたものだと思ひますから、どうしても之を捨てる譯には參りません」
「捨てる譯に行かなければ、御望み通り僕のヴイオリン談をして聞かせる事にしよう。で今話す通りの次第だから僕もヴイオリンの稽古をはじめる迄には大分苦心をしたよ。第一買ふのに困りましたよ先生」
「さうだらう麻裏草履がない土地にヴイオリンがある筈がない」
「いえ、ある事はあるんです。金も前から用意して溜めたから差し支へないのですが、どうも買へないのです」
「なぜ？」
「狹い土地だから、買つて居ればすぐ見つかります。見附かれば、すぐ生意氣だと云ふので制裁を加へられます」
「天才は昔から迫害を加へられるものだからね」と東風君は大いに同情を表した。
「又天才か、どうか天才呼ばはり丈は御免蒙りたいね。それでね、毎日散歩をしてヴイオリンのある店先を通るたびにあれが買へたら好からう、あれを手に抱へた心持ちはどんなだらう、あゝ欲しい、あゝ欲しいと思はない日は一日もなかつたのです」
「尤もだ」と評したのは迷亭で、「妙に凝つたものだね」と解しかねたのが主人で、「矢張り君、天才だよ」と敬服したのは東風君である。只獨仙君計りは超然として髯を撚してゐる。

「そんな所にどうしてヴイオリンがあるかが第一御不審かも知れないですが、是は考へて見ると當り前の事です。なぜと云ふと此地方でも女學校があつて、女學校の生徒は課業として毎日ヴイオリンを稽古しなければならないのですから、ある筈です。無論いゝのはありません。只ヴイオリンと云ふ名が辛うじてつく位のものであります。だから店でもあまり重きを置いて居ないので、二三挺一所に店頭へ吊して置くのです。夫がね、時々散歩をして前を通るときに風が吹きつけたり、小僧の手が障つたりして、そら音を出す事があります。其音を聞くと急に心臓が破裂しさうな心持ちで、居ても立つても居られなくなるんです」

「危險だね。水癲癇、人癲癇と癲癇にも色々種類があるが君のはエルテル丈あつて、ヴイオリン癲癇だ」と迷亭君が冷やかすと、

「いや其位感覺が鋭敏でなければ眞の藝術家にはなれないですよ。どうしても天才肌だ」と東風君は愈感心する。

「えゝ實際癲癇かも知れませんが、然しあの音色丈は奇體ですよ。其後今日迄隨分ひきましたがあの位美しい音が出た事がありません。さうさ何と形容していゝでせう。到底言ひあらはせないです」

「琳琅璆鏘として鳴るぢやないか」とむづかしい事を持ち出したのは獨仙君であつたが、誰も取り合はなかつたのは氣の毒である。

「私が毎日々々店頭を散歩して居るうちにとう〳〵此の靈異な音を三度きゝました。三度目にどうあつても是は買はなければならないと決心しました。假令國のものから譴責されても、他縣のものから輕蔑さ

れても——よし鐵拳制裁の爲に絶息しても——まかり間違つて退校の處分を受けても、——是計りは買はずに居られないと思ひました」
「夫が天才だよ。天才でなければ、そんなに思ひ込める譯のものぢやない。羨ましい、僕もどうかして、それ程猛烈な感じを起こして見たいと年來心掛けて居るが、どうもいけないね。音樂會抔へ行つて出來る丈熱心に聞いて居るが、どうも夫程に感興が乘らない」と東風君はしきりに羨ましがつてゐる。
「乘らない方が仕合せだよ。今でこそ平氣で話す樣なものゝ其時の苦しみは到底想像が出來る樣な種類のものではなかつた。——それから先生、とう／＼奮發して買ひました」
「ふむ、どうして」
「丁度十一月の天長節の前の晩でした。國のものは揃つて泊りがけに温泉に行きましたから、一人も居ません。私は病氣だと云つて、其日は學校も休んで寐て居ました。今晩こそ一つ出て行つて兼て望みのヴイオリンを手に入れようと、床の中で其事ばかり考へて居ました」
「僞病をつかつて學校迄休んだのかい」
「全くさうです」
「成程少し天才だね、是や」と迷亭君も少々恐れ入つた樣子である。
「夜具の中から首を出して居ると、日暮れが待ち遠でたまりません。仕方がないから頭からもぐり込んで、眼を眠つて待つて見ましたが、矢張り駄目です。首を出すと烈しい秋の日が六尺の障子へ一面にあたつて、かん／＼するには癇癪が起りました。上の方に細長い影がかたまつて、時々秋風にゆすれるのが眼

につきます」

「何だい、其の細長い影と云ふのは」

「澁柹の皮を剝いて、軒へ吊して置いたのです」

「ふん、それから」

「仕方がないから、床を出て障子をあけて緣側へ出て、澁柹の甘干しを一つ取つて食ひました」

「うまかつたかい」と主人は子供見た樣な事を聞く。

「うまいですよ、あの邊の柹は。到底東京抔ぢやあの味はわかりませんね」

「柹はいゝが夫からどうしたい」と今度は東風君がきく。

「夫から又もぐつて眼をふさいで、早く日が暮れゝばいゝがと、ひそかに神佛に念じて見た。約三四時間も立つたと思ふ頃、もうよからうと、首を出すと豈計らんや烈しい秋の日は依然として六尺の障子を照らしてかん／＼する、上の方に細長い影がかたまつてふは／＼する」

「そりや、聞いたよ」

「何返もあるんだよ。夫から床を出て、障子をあけて、甘干しの柹を一つ食つて、又寐床へ這入つて早く日が暮れゝばいゝと、ひそかに神佛に祈念をこらした」

「矢つ張りもとの所ぢやないか」

「まあ先生さう焦かずに聞いて下さい。夫から約三四時間夜具の中で辛抱して、今度こそもうよからうとぬつと首を出して見ると、烈しい秋の日は依然として六尺の障子へ一面にあたつて、上の方に細長い影

がかたまつて、ふは〳〵して居る」
「いつ迄行つても同じ事ぢやないか」
「夫から床を出て障子を開けて、縁側へ出て甘干しの柿を一つ食つて……」
「又柿を食つたのかい。どうもいつ迄行つても柿ばかり食つて際限がないね」
「私もじれつたくつてね」
「君より聞いてる方が餘つ程じれつたいぜ」
「先生はどうも性急だから、話しがしにくくつて困ります」
「聞く方も少しは困るよ」と東風君も暗に不平を洩らした。
「さう諸君が御困りとある以上は仕方がない。大抵にして切り上げませう。要するに私は甘干しの柿を食つてはもぐり、もぐつては食ひ、とう〳〵軒端に吊した奴をみんな食つて仕舞ひました」
「みんな食つたら日も暮れたらう」
「所がさう行かないので、私が最後の甘干しを食つて、もうよからうと首を出して見ると、相變らず烈しい秋の日が六尺の障子へ一面にあたつて……」
「僕あ、もう御免だ。いつ迄行つても果てしがない」
「話す私も飽き〳〵します」
「然し其位根氣があれば大抵の事業は成就するよ。だまつてたら、あしたの朝迄秋の日がかん〳〵するんだらう。全體いつ頃にヴイオリンを買ふ氣なんだい」と流石の迷亭君も少し辛抱し切れなくなつたと見

える。只獨仙君のみは泰然として、あしたの朝迄でも、あさつての朝まででも、いくら秋の日がかん〳〵しても動ずる氣色は更にない。寒月君も落ち附き拂つたもので、

「いつ買ふ氣だと仰しやるが、晩になりさへすれば、すぐ買ひに出掛ける積りなのです。只殘念な事には、いつ頭を出して見ても秋の日がかん〳〵して居るものですから――いえ其時の私の苦しみと云つたら、到底今あなた方の御じれになる所の騷ぎぢやないです。私は最後の甘干しを食つても、まだ日が暮れないのを見て、泫然として思はず泣きました。東風君、僕は實に情なくつて泣いたよ」

「さうだらう、藝術家は本來多情多恨だから、泣いた事には同情するが、話しはもつと早く進行させたいものだね」と東風君は人がいゝから、どこ迄も眞面目で滑稽な挨拶をして居る。

「進行させたいのは山々だが、どうしても日が暮れてくれないものだから困るのさ」

「さう日が暮れなくちや聞く方も困るからやめよう」と主人がとう〳〵我慢がし切れなくなつたと見えて云ひ出した。

「やめちや猶困ります。是からが愈佳境に入る所ですから」

「夫ぢや聞くから、早く日が暮れた事にしたらよからう」

「では、少し御無理な御注文ですが、先生の事ですから、枉げて、こゝは日が暮れた事に致しませう」

「それは好都合だ」と獨仙君が澄まして述べられたので一同は思はずどつと噴き出した。

「愈夜に入つたので、まづ安心とほつと一息ついて鞍懸村の下宿を出ました。私は性來騷々敷い所が嫌ひですから、わざと便利な市內を避けて、人迹の稀な寒村の百姓家にしばらく蝸牛の庵を結んで居た

のです……」

「人迹の稀なはあんまり大袈裟だね」と主人が抗議を申し込むと「蝸牛の庵も仰山だよ。床の間なしの四疊半位にして置く方が寫生的で面白い」と迷亭君も苦情を持ち出した。東風君丈は「事實はどうでも言語が詩的で感じがいゝ」と褒めた。獨仙君は眞面目な顔で「そんな所に住んで居ては學校へ通ふのが大變だらう。何里位あるんですか」と聞いた。

「學校迄はたつた四五丁です。元來學校からして寒村にあるんですから……」

「夫ぢや學生は其邊に大分宿をとつてるんでせう」と獨仙君は中々承知しない。

「えゝ、大抵な百姓家には一人や二人は必ず居ます」

「それで人迹稀なんですか」と正面攻撃を喰らはせる。

「えゝ學校がなかつたら、全く人迹は稀ですよ。……で當夜の服裝を云ふと、手織木綿の綿入の上へ金釦の制服外套を着て、外套の頭巾をすぽりと被つて可成人の目につかない樣な注意をしました。折柄柿落葉の時節で宿から南郷街道へ出る迄は木の葉で路が一杯です。一歩運ぶ毎にがさ／＼するのが氣にかゝります。誰かあとをつけて來さうでたまりません。振り向いて見ると東嶺寺の森がこんもりと黑く、暗い中に暗く寫つて居ます。この東嶺寺と云ふのは松平家の菩提所で、庚申山の麓にあつて、私の宿とは一丁位しか隔たつてゐない、頗る幽邃な梵刹です。森から上はのべつ幕なしの星月夜で、例の天の河が長瀨川を筋違に横切つて末は——末は、さうですね、まづ布哇の方へ流れて居ます……」

「布哇は突飛だね」と迷亭君が云つた。

「南郷街道を遂に二丁來て、鷹臺町から市内に這入つて、古城町を通つて、仙石町を曲がつて、喰代町を横に見て、通町を一丁目、二丁目、三丁目と順に通り越して、夫から尾張町、名古屋町、鯱鉾町、蒲鉾町……」

「そんなに色々な町を通らなくてもいゝ。要するにヴイオリンを買つたのか、買はないのか」

と主人がじれつたさうに聞く。

「樂器のある店は金善卽ち金子善兵衞方ですから、まだ中々です」

「中々でもいゝから早く買ふがいゝ」

「かしこまりました。それで金善方へ來て見ると、店にはランプがかん〳〵ともつて……」

「又かん〳〵か、君のかん〳〵は一度や二度で濟まないんだから難澁するよ」と今度は迷亭が豫防線を張つた。

「いえ、今度のかん〳〵は、ほんの通り一返のかん〳〵ですから、別段御心配には及びません。――灯影にすかして見ると例のヴイオリンが、ほのかに秋の灯を反射して、くり込んだ胴の丸みに冷たい光を帶びて居ます。つよく張つた琴線の一部丈がきら〳〵と白く眼に映ります……」

「中々敍述がうまいや」と東風君がほめた。

「あれだな。あのヴイオリンだなと思ふと、急に動悸がして足がふら〳〵します……」

「ふゝん」と獨仙君が鼻で笑つた。

「思はず馳け込んで、隱袋から蝦蟇口を出して、蝦蟇口の中から五圓札を二枚出して……」

「とう〳〵買つたかい」と主人がきく。
「買はうと思ひましたが、まてしばし、こゝが肝心の所だ。滅多な事をしては失敗する。まあよさうと、際どい所で思ひ留まりました」
「なんだ、まだ買はないのかい。ヴイオリン一梃で中々人を引つ張るぢやないか」
「引つ張る譯ぢやないんですが、どうも、まだ買へないんですから仕方がありません」
「なぜ」
「なぜつて、まだ宵の口で人が大勢通るんですもの」
「構はんぢやないか、人が二百や三百通つたつて、君は餘つ程妙な男だ」と主人はぷん〳〵して居る。
「只の人なら千が二千でも構ひませんがね、學校の生徒が腕まくりをして、大きなステッキを持つて徘徊して居るんだから容易に手は出せませんよ。中には沈澱黨抔と號して、いつまでもクラスの底に溜まつて喜んでるのがありますからね。そんなのに限つて柔道は強いのですよ。滅多にヴイオリン抔に手出しは出來ません。どんな目に逢ふかわかりません。私だつてヴイオリンは欲しいに相違ないですけれども、命は是でも惜しいですからね。ヴイオリンを彈いて殺されるよりも彈かずに生きてる方が樂ですよ」
「それぢや、とう〳〵買はずに已めたんだね」と主人が念を押す。
「いえ、買つたのです」
「じれつたい男だな。買ふなら早く買ふさ、いやならいやでいゝから、早く方をつけたらよささうなものだ」

「エヘ、、、世の中の事はさう、こつちの思ふ樣に埒があくもんぢやありませんよ」と云ひながら寒月君は冷然と「朝日」へ火をつけてふかし出した。

主人は面倒になつたと見えて、ついと立つて書齋へ這入つたと思つたら、何だか古ぼけた洋書を一冊持ち出して來て、ごろりと腹這ひになつて讀み始めた。獨仙君はいつの間にやら、床の間の前へ退去して、獨りで碁石を並べて一人相撲をとつてゐる。折角の逸話もあまり長くかゝるので聽手が一人減り二人減つて、殘るは藝術に忠實なる東風君と、長い事にかつて辟易した事のない迷亭先生のみとなる。

長い烟をふうと世の中へ遠慮なく吹き出した寒月君は、やがて前同樣の速度を以て談話をつゞける。

「東風君、僕は其時かう思つたね。到底こりや宵の口は駄目だ、と云つて眞夜中に來れば金善は寐て仕舞ふから猶駄目だ。何でも學校の生徒が散歩から歸りつくして、さうして金善がまだ寐ない時を見計らつて來なければ、折角の計畫が水泡に歸する。けれども其時間をうまく見計らふのが六づかしい」

「成程こりや六づかしからう」

「で僕は其時間をまあ十時頃と見積つたね。夫で今から十時頃迄どこかで暮らさなければならない。うちへ歸つて出直すのは大變だ。友達のうちへ話しに行くのは何だか氣が咎める樣で面白くなし、仕方がないから相當の時間がくる迄市中を散歩する事にした。所が平生ならば二時間や三時間はぶら／＼あるいて居るうちに、いつの間にか經つてしまふのだが其夜に限つて、時間のたつのが遲いの何のつて、――千秋の思とはあんな事を云ふのだらうと、しみ／＼感じました」と左も感じたらしい風をしてわざと迷亭先生の方を向く。

「古人も待つ身につらき置炬燵と云はれた事があるからね、又待たるゝ身より待つ身はつらいともあつて軒に吊られたヴイオリンもつらかつたらうが、あてのない探偵の樣にうろ〳〵まごついて居る君は猶更つらいだらう。累々として喪家の犬の如し。いや宿のない犬程氣の毒なものは實際ないよ」

「犬は殘酷ですね。犬に比較された事は是でもまだありませんよ」

「僕は何だか君の話をきくと、昔の藝術家の傳を讀む樣な氣持ちがして同情の念に堪へない。犬に比較したのは先生の冗談だから氣に掛けずに話しを進行し玉へ」と東風君は慰藉した。慰藉されなくても寒月君は無論話しをつゞける積りである。

「夫から徒町から百騎町を通つて、兩替町から鷹匠町へ出て、縣廳の前で枯柳の數を勘定して病院の横で窓の灯を計算して、紺屋橋の上で卷煙草を二本ふかして、さうして時計を見た。……」

「十時になつたかい」

「惜しい事にならないね。――紺屋橋を渡り切つて川添ひに東へ上つて行くと、按摩に三人あつた。さうして犬がしきりに吠えましたよ先生……」

「秋の夜長に川端で犬の遠吠をきくのは一寸芝居がゝりだね。君は落人と云ふ格だ」

「何かわるい事でもしたんですか」

「是からしようと云ふ所さ」

「可哀相にヴイオリンを買ふのが惡い事ぢや、音樂學校の生徒はみんな罪人ですよ」

「人が認めない事をすれば、どんないゝ事をしても罪人さ。だから世の中に罪人程あてにならないもの

はない。耶蘇もあんな世に生れゝば罪人さ。好男子寒月君もそんな所でヴイオリンを買へば罪人さ」
「それぢや負けて罪人として置きませう。罪人はいゝですが十時にならないのには弱りました」
「もう一返町の名を勘定するさ。それで足りなければ又秋の日をかん／＼させるさ。夫でも追つ附かなければ又甘干しの澁柹を三ダースも食ふさ。いつ迄でも聞くから十時になる迄やり給へ」
寒月先生はにや／＼と笑つた。
「さう先を越されては降參するより外はありません。それぢや一足飛びに十時にして仕舞ひませう。偖て御約束の十時になつて金善の前へ來て見ると、夜寒の頃ですから、さすが目貫の兩替町も殆ど人通りが絶えて、向うからくる下駄の音さへ淋しい心持ちです。金善ではもう大戸をたてて僅かに潛り戸丈を障子にして居ます。私は何となく犬に尾けられた樣な心持ちで、障子をあけて這入るのに少々薄氣味がわるかつたです……」
此時主人はきたならしい本から一寸眼をはづして「おいもうヴイオリンを買つたかい」と聞いた。「是から買ふ所です」と東風君が答へると「まだ買はないのか、實に永いな」と獨り言の樣に云つて又本を讀み出した。獨仙君は無言の儘、白と黑で碁盤を大半埋めて了つた。
「思ひ切つて飛び込んで、頭巾を被つた儘、ヴイオリンを呉れと云ひますと、火鉢の周圍に四五人小僧や若僧がかたまつて話しをして居たのが驚いて、申し合はせた樣に私の顏を見ました。私は思はず右の手を擧げて頭巾をぐいと前の方に引きました。おいヴイオリンを呉れと二度目に云ふと、一番前に居て、私の顏を覗き込む樣にして居た小僧がへえと覺束ない返事をして立ち上がつて、例の店先に吊してあつたの

を三四挺一度に卸して來ました。いくらかと聞くと五圓二十錢だと云ひます……」
「おいそんな安いヴイオリンがあるのかい。おもちやぢやないか」
「みんな同價かと聞くと、へえ、どれでも變りは御座いません。みんな丈夫に念を入れて拵へて御座いますと云ひますから、蝦蟇口のなかから五圓札と銀貨を二十錢出して用意の大風呂敷を出してヴイオリンを包みました。此間、店のものは話しを中止してぢつと私の顏を見て居ます。顏は頭巾でかくしてあるから分る氣遣ひはないのですけれども、何だか氣がせいて一刻も早く往來へ出たくて堪りません。漸くの事風呂敷包みを外套の下へ入れて、店を出たら、番頭が聲を揃へて難有うと大きな聲を出したのにはひやつとしました。往來へ出て一寸見廻して見ると、幸ひ誰も居ない樣ですが、一丁許り向うから二三人して町内中に響けとばかり詩吟をして來ます。こいつは大變だと金善の角を西へ折れて濠端を藥王師道へ出て、はんの木村から庚申山の裾へ出て漸く下宿へ歸りました。下宿へ歸つて見たらもう二時十分前でした」
「夜通しあるいて居た樣なものだね」と東風君が氣の毒さうに云ふと「やつと上がつた。やれ／＼長い道中雙六だ」と迷亭君はほつと一息ついた。
「是からが聞き所ですよ。今迄は單に序幕です」
「まだあるのかい。こいつは容易な事ぢやない。大抵のものは君に逢つちや根氣負けをするね」
「根氣はとにかく、こゝでやめちや佛作つて魂入れずと一般ですから、もう少し話します」
「話すのは無論隨意さ。聞く事は聞くよ」
「どうです苦沙彌先生も御聞きになつては。もうヴイオリンは買つて仕舞ひましたよ。えゝ先生」

「こん度はヴイオリンを賣る所かい。賣る所なんか聞かなくつてもいゝ」
「まだ賣るどこぢやありません」
「そんなら猶聞かなくてもいゝ」
「どうも困るな。東風君、君丈だね、熱心に聞いてくれるのは。少し張合が拔けるがまあ仕方がない、ざつと話して仕舞はう」
「ざつとでなくてもいゝから緩くり話し玉へ。大變面白い」
「ヴイオリンは漸くの思ひで手に入れたが、まづ第一に困つたのは置き所だね。僕の所へは大分人が遊びにくるから滅多な所へぶらさげたり、立て懸けたりするとすぐ露見して仕舞ふ。穴を掘つて埋めちや掘り出すのが面倒だらう」
「さうさ、天井裏へでも隱したかい」と東風君は氣樂な事を云ふ。
「天井はないさ。百姓家だもの」
「そりや困つたらう。どこへ入れたい」
「どこへ入れたと思ふ」
「わからないね、戸袋のなかか」
「いゝえ」
「夜具にくるんで戸棚へ仕舞つたか」
「いゝえ」

東風君と寒月君はヴイオリンの隠れ家について斯くの如く問答をして居るうちに、主人と迷亭君も何かしきりに話して居る。
「こりや何と讀むのだい」と主人が聞く。
「どれ」
「この二行さ」
「何だつて？ Quid aliud est mulier nisi amiticiæ inimica…… こりや君羅甸語ぢやないか」
「羅甸語は分つてるが、何と讀むのだい」
「だつて君は平生羅甸語が讀めると云つてるぢやないか」と迷亭君も危險だと見て取つて、一寸逃げた。
「無論讀めるさ。讀める事は讀めるが、こりや何だい」
「讀める事は讀めるが、こりや何だは手ひどいね」
「何でもいゝから一寸英語に譯して見ろ」
「見ろは烈しいね。丸で從卒の樣だね」
「從卒でもいゝから何だ」
「まあ羅甸語などはあとにして、一寸寒月君の御高話を拜聽仕らうぢやないか。今大變な所だよ。愈露見するか、しないか危機一髮と云ふ安宅の關へかゝつてるんだ。――ねえ寒月君夫からどうしたい」と急に乘氣になつて、又ヴイオリンの仲間入りをする。主人は情なくも取り殘された。寒月君は之に勢を得て隱し所を説明する。

「とう／＼古つゞらの中へ隱しました。此つゞらは國を出る時御祖母さんが餞別に吳れたものですが、何でも御祖母さんが嫁にくる時持つて來たものださうです」

「そいつは古物だね。ヴイオリンとは少し調和しない樣だ。ねえ東風君」

「えゝ、ちと調和せんです」

「天井裏だつて調和しないぢやないか」と寒月君は東風先生をやり込めた。

「調和はしないが、句にはなるよ、安心し給へ。秋淋しつゞらにかくすヴイオリンはどうだい、兩君」

「先生今日は大分俳句が出來ますね」

「今日に限つた事ぢやない。いつでも腹の中で出來てるのさ。僕の俳句に於ける造詣と云つたら、故子規子も舌を捲いて驚いた位のものさ」

「先生、子規さんとは御つき合ひでしたか」と正直な東風君は眞率な質問をかける。

「なにつき合はなくつても始終無線電信で肝膽相照らして居たもんだ」と無茶苦茶を云ふので、東風先生あきれて默つて仕舞つた。寒月君は笑ひながら又進行する。

「それで置き所丈は出來た譯だが、今度は出すのに困つた。只出す丈なら人目を掠めて眺める位はやれん事はないが、眺めた計りぢや何にもならない。彈かなければ役に立たない。彈けば音が出る。出ればすぐ露見する。丁度木槿垣を一重隔てゝ南隣りには沈澱組の頭領が下宿して居るんだから劍呑だあね」

「困るね」と東風君が氣の毒さうに調子を合はせる。

「なる程、こりや困る。論より證據音が出るんだから、小督の局も全く是でしくじつたんだからね。是

がぬすみ食ひをするとか、贋札を造るとか云ふなら、まだ始末がいゝが、音曲は人に隱しちや出來ないものだからね」
「音さへ出なければどうでも出來るんですが……」
「一寸待つた。音さへ出なけりやと云ふが、音が出なくても隱し了せないのがあるよ。昔僕等が小石川の御寺で自炊をして居る時分に鈴木の藤さんと云ふ人が居てね、此藤さんが大變味淋がすきで、ビールの徳利へ味淋を買つて來ては一人で樂しみに飮んで居たのさ。ある日藤さんが散歩に出たあとで、よせばいいのに苦沙彌君が一寸盜んで飮んだ所が……」
「おれが鈴木の味淋抔をのむものか、飮んだのは君だぜ」と主人は突然大きな聲を出した。
「おや本を讀んでるから大丈夫かと思つたら、矢張り聞いてるね。油斷の出來ない男だ。耳も八丁、目も八丁とは君の事だ。成程云はれて見ると僕も飮んだ。僕も飮んだには相違ないが、發覺したのは君の方だよ。――兩君まあ聞き玉へ。苦沙彌先生元來酒は飮めないのだよ。所を人の味淋だと思つて一生懸命に飮んだものだから、さあ大變、顔中眞赤にはれ上がつてね。いやも二目とは見られない有樣さ……」
「默つて居ろ。羅甸語も讀めない癖に」
「ハヽヽ、夫で藤さんが歸つて來てビールの徳利をふつて見ると、半分以上足りない。何でも誰か飮んだに相違ないと云ふので見廻して見ると、大將隅の方に朱泥を練りかためた人形の樣にかたくなつて居らあね……」
三人は思はず哄然と笑ひ出した。主人も本をよみながら、くす〳〵と笑つた。獨り獨仙君に至つては機

外の機を弄し過ぎて、少々疲労したと見えて、碁盤の上へのしかゝつて、いつの間にやらぐう〳〵寝て居る。

「まだ音がしないもので露見した事がある。僕が昔姥子の温泉に行つて、一人のぢゞいと相宿になつた事がある。何でも東京の呉服屋の隠居か何かだつたがね。まあ相宿だから呉服屋だらうが、古着屋だらうが構ふ事はないが、只困つた事が一つ出來て仕舞つた。と云ふのは僕は姥子へ着いてから三日目に煙草を切らして仕舞つたのさ。諸君も知つてるだらうが、あの姥子と云ふのは山の中の一軒屋で只温泉に這入つて飯を食ふより外にどうもかうも仕様のない不便の所さ。そこで煙草を切らしたのだから御難だね。物はないとなると猶欲しくなるもので、煙草がないなと思ふや否や、いつもそんなでないのが急に呑みたくなり出してね。意地のわるい事に、其ぢゞいが風呂敷に一杯煙草を用意して登山して居るのさ。夫を少し宛出しては、人の前で胡坐をかいて呑みたいだらうと云はない許りに、すぱ〳〵ふかすのだね。只ふかす丈なら勘辨の仕様もあるが、仕舞ひには烟を輪に吹いて見たり、竪に吹いたり、横に吹いたり、乃至は邯鄲夢の枕と逆に吹いたり、又は鼻から獅子の洞入り、洞返りに吹いたり。つまり呑みびらかすんだね……」

「何です、呑みびらかすと云ふのは」

「衣裳道具なら見せびらかすのだが、煙草だから呑みびらかすのさ」

「へえ、そんな苦しい思ひをなさるより貰つたらいゝでせう」

「所が貰はないね。僕も男子だ」

「へえ、貰つちやいけないんですか」

「いけるかも知れないが、貰はないね」
「それでどうしました」
「貰はないで偸んだ」
「おや〳〵」
「奴さん手拭をぶらさげて湯に出掛けたから、呑むならこゝだと思つて一心不亂立てつゞけに呑んで、あゝ愉快だと思ふ間もなく、障子ががらりとあいたから、おやと振り返ると煙草の持ち主さ」
「湯には這入らなかつたのですか」
「這入らうと思つたら巾着を忘れたのに氣がついて、廊下から引き返したんだ。人が巾着でもとりやしまいし、第一それからが失敬さ」
「何とも云へませんね。煙草の御手際ぢや」
「ハヽヽ、ぢゞいも中々眼識があるよ。巾着はとにかくだが、ぢいさんが障子をあけると二日間の溜め呑みをやつた煙草の烟がむつとする程室のなかに籠つてるぢやないか、惡事千里とはよく云つたものだね。忽ち露見して仕舞つた」
「ぢいさん何とかいひましたか」
「さすが年の功だね、何も言はずに卷煙草を五六十本半紙にくるんで、失禮ですが、こんな粗葉でよろしければどうぞ御呑み下さいましと云つて、又湯壺へ下りて行つたよ」
「そんなのが江戸趣味と云ふのでせうか」

江戸趣味だか、呉服屋趣味だか知らないが、夫から僕は爺さんと大いに肝膽相照らして、二週間の間面白く逗留して歸つて來たよ」
「煙草は二週間中爺さんの御馳走になつたんですか」
「まあそんな所だね」
「もうヴイオリンは片附いたかい」と主人は漸く本を伏せて、起き上がりながら遂に降參を申し込んだ。
「まだです。是からが面白い所です、丁度いゝ時ですから聞いて下さい。序にあの碁盤の上で晝寢をして居る先生――何とか云ひましたね、え、獨仙先生、――獨仙先生にも聞いて戴きたいな。どうですあんなに寐ちや、からだに毒ですぜ。もう起こしてもいゝでせう」
「おい、獨仙君、起きた起きた。面白い話がある。起きるんだよ。さう寐ちや毒だとさ。奥さんが心配だとさ」
「え」と云ひながら顔を上げた獨仙君の山羊髯を傳はつて垂涎が一筋長々と流れて、蝸牛の這つた迹の樣に歴然と光つて居る。
「あゝ、眠かつた。山上の白雲わが懶きに似たりか。あゝ、いゝ心持ちに寐たよ」
「寐たのはみんなが認めて居るのだがね。ちつと起きちやどうだい」
「もう起きてもいゝね。何か面白い話があるかい」
「是から愈ヴイオリンを――どうするんだつたかな、苦沙彌君」
「どうするのかな、頓と見當がつかない」

「是から愈弾く所です」

「是から愈ヴイオリンを弾く所だよ。こつちへ出て来て聞き給へ」

「まだヴイオリンかい。困つたな」

「君は無絃の素琴を弾ずる連中だから困らない方なんだが、寒月君のは、きい〳〵ぴい〳〵近所合壁へ聞こえるのだから大いに困つてる所だ」

「そうかい。寒月君、近所へ聞こえない様にヴイオリンを弾く方を知らんですか」

「知りませんね、あるなら伺ひたいもので」

「伺はなくても露地の白牛を見ればすぐ分る筈だが」と何だか通じない事を云ふ。寒月君はねぼけてあんな珍語を弄するのだらうと鑑定したから、わざと相手にならないで話頭を進めた。

「漸くの事で一策を案出しました。あくる日は天長節だから、朝からうちに居て、つゞらの蓋をとつて見たり、かぶせて見たり一日そは〳〵して暮らして仕舞ひましたが愈日が暮れて、つゞらの底で蟋蟀が鳴き出した時思ひ切つて例のヴイオリンと弓を取り出しました」

「愈出たね」と東風君が云ふと「滅多に弾くとあぶないよ」と迷亭君が注意した。

「先づ弓を取つて、切先から鍔元迄しらべて見る……」

「下手な刀屋ぢやあるまいし」と迷亭君が冷評した。

「實際是が自分の魂だと思ふと、侍が研ぎ澄ました名刀を、長夜の灯影で鞘払ひをする時の様な心持がするものですよ。私は弓を持つた儘ぶる〳〵とふるへました」

「全く天才だ」と云ふ東風君について「全く纏綿だ」と迷亭君がつけた。主人は「早く弾いたらよからう」と云ふ。獨仙君は困つたものだと云ふ顔附をする。
「難有い事に今は無難です。今度はヴイオリンを同じくランプの傍へ引き附けて、裏表共よくしらべて見る。此間約五分間、つゞらの底では始終蟀が鳴いて居ると思つて下さい。……」
「何とでも思つてやるから安心して弾くがいゝ」
「まだ弾きやしません。――幸ひヴイオリンも疵がない。是なら大丈夫とぬつくと立ち上がる……」
「どつかへ行くのかい」
「まあ少し黙つて聞いて下さい。さう一句毎に邪魔をされちや話しが出来ない。……」
「おい諸君、だまるんだとさ。シー〳〵」
「しやべるのは君丈だぜ」
「うん、さうか、是は失敬、謹聴々々」
「ヴイオリンを小脇に抱い込んで、草履を突つかけた儘二三歩草の戸を出たが、まてしばし……」
「そら御出でなすつた。何でも、どつかで停電するに違ひないと思つた」
「もう帰つたつて甘干しの柿はないぜ」
「さう諸先生が御まぜ返しになつては、甚だ遺憾の至りだが、東風君一人を相手にするより致し方がない。――いゝかね東風君、二三歩出たが又引き返して、國を出るとき三圓二十銭で買つた赤毛布を頭から被つてね、ふつとランプを消すと君眞暗闇になつて今度は草履の所在地が判然しなくなつた」

「一體どこへ行くんだい」

「まあ聞いてたまひ。漸くの事草履を見つけて、表へ出ると星月夜に柿落葉、赤毛布にヴイオリン。右へ右へと爪先上りに庚申山へ差しかゝつてくると、東嶺寺の鐘がボーンと毛布を通して、耳を通して、頭の中へ響き渡つた。何時だと思ふ、君」

「知らないね」

「九時だよ。是から秋の夜長をたつた一人、山道八丁を大平と云ふ所迄登るのだが、平生なら臆病な僕の事だから、恐ろしくつて堪らない所だけれども、一心不亂となると不思議なもので、怖いにも怖くないにも、毛頭そんな念はてんで心の中に起らないよ。只ヴイオリンが彈きたい許りで胸が一杯になつてるんだから妙なものさ。此の大平と云ふ所は庚申山の南側で天氣のいゝ日に登つて見ると赤松の間から城下が一目に見下ろせる眺望佳絶の平地で――さうさ廣さはまあ百坪もあらうかね、眞中に八疊敷程な一枚岩があつて、北側は鵜の沼と云ふ池つゞきで、池のまはりは三抱へもあらうと云ふ樟ばかりだ。山のなかだから、人の住んでる所には樟腦を採る小屋が一軒ある許り、池の近邊は晝でもあまり心持ちのいゝ場所ぢやない。幸ひ工兵が演習の爲道を切り開いてくれたから、登るのに骨は折れない。漸く一枚岩の上へ來て、毛布を敷いて、ともかくも其上へ坐つた。こんな寒い晩に登つたのは始めてなんだから、岩の上へ坐つて少し落ち着くと、あたりの淋しさが次第々々に腹の底へ沁み渡る。かう云ふ場合に人の心を亂すものは只怖いと云ふ感じ許りだから、此感じさへ引き拔くと、餘る所は皎々冽々たる空靈の氣丈になる。二十分程茫然として居るうちに何だか水晶で造つた御殿のなかに、たつた一人住んでる樣な氣になつた。しかも其の

一人住んでる僕のからだが——いやからだ計りぢやない、心も魂も悉く寒天か何かで製造された如く、不思議に透き徹つて仕舞つて、自分が水晶の御殿の中に居るのだか、自分の腹の中に水晶の御殿があるのだか、わからなくなつて來た……」

「飛んだ事になつて來たね」と迷亭君が眞面目にからかふあとに附いて、獨仙君が「面白い境界だ」と少しく感心した容子に見えた。

「もし此狀態が長くつゞいたら、私はあすの朝迄、折角のヴィオリンも彈かずに、茫やり一枚岩の上に坐つてたかも知れないです……」

「狐でも居る所かい」と東風君がきいた。

「かう云ふ具合で、自他の區別もなくなつて、生きて居るか死んで居るか方角のつかない時に、突然後の古沼の奧でギャーと云ふ聲がした……」

「愈出たね」

「其聲が遠く反響を起こして滿山の秋の梢を、野分と共に渡つたと思つたら、はつと我に歸つた……」

「やつと安心した」と迷亭君が胸を撫で卸す眞似をする。

「大死一番乾坤新たなり」と獨仙君は目くばせをする。寒月君には些とも通じない。

「それから、我に歸つてあたりを見渡すと、庚申山一面はしんとして、雨垂れ程の音もしない。はてな。今の音は何だらうと考へた。人の聲にしては銳すぎるし、鳥の聲にしては大き過ぎるし、猿の聲にしては——此邊によもや猿は居るまい。何だらう？何だらうと云ふ問題が頭のなかに起ると、之を解釋しようと

云ふので今迄靜まり返つて居たやからが、紛然雜然糅然として恰もコンノート殿下歡迎の當時に於ける都人士狂亂の態度を以て腳裏をかけ廻る。其うちに總身の毛穴が急にあいて、燒酎を吹きかけた毛脛の樣に勇氣、膽力、分別、沈着杯と號するお客樣がすう／＼と蒸發して行く。心臟が肋骨の下でステヽコを踊り出す。兩足が紙鳶のうなりの樣に震動をはじめる。これは堪らん。いきなり毛布を頭からかぶつて、ヴイオリンを小脇に搔い込んでひよろ／＼と一枚岩を飛び下りて、一目散に山道八丁を麓の方へかけ下りて、宿へ歸つて蒲團へくるまつて寐て仕舞つた。今考へてもあんな氣味のわるかつた事はないよ、東風君」

「それから」

「それで御仕舞ひさ」

「ヴイオリンは彈かないのかい」

「彈きたくつても、彈かれないぢやないか。ギャーだもの。君だつて乾度彈かれないよ」

「何だか君の話は物足りない樣な氣がする」

「氣がしても事實だよ。どうです先生」と寒月君は一座を見廻して大得意の容子である。

「ハヽヽ、これは上出來。そこ迄持つて行くには大分苦心慘憺たるものがあつたのだらう。僕は男子のサンドラ・ベロニが東方君子の邦に出現する所かと思つて、今が今迄眞面目に拜聽して居たんだよ」と云つた迷亭君は誰かサンドラ・ベロニの講釋でも聞くかと思ひの外、何も質問が出ないので「サンドラ・ベロニが月下に竪琴を彈いて、以太利亞風の歌を森の中でうたつてる所は、君の庚申山へヴイオリンをかゝへて上る所と同曲にして異巧なるものだね。惜しい事に向うは月中の嫦娥を驚かし、君は古沼の怪狸にお

どろかされたので、際どい所で滑稽と崇高の大差を來した。嘸遺憾だらう」と一人で說明すると、

「そんなに遺憾ではありません」と寒月君は存外平氣である。

「全體山の上でヴイオリンを彈かうなんて、ハイカラをやるから、おどかされるんだ」と今度は主人が酷評を加へると、

「好漢この鬼窟裏に向つて生計を營む。惜しい事だ」と獨仙君は嘆息した。凡て獨仙君の云ふ事は決して寒月君にわかつたためしがない。寒月君ばかりではない、恐らく誰にでもわからないだらう。

「そりやさうと寒月君、近頃でも矢張り學校へ行つて球計り磨いてるのかね」と迷亭先生はしばらくして話頭を轉じた。

「いえ、此間中から國へ歸省して居たもんですから、暫時中止の姿です。球ももうあきましたから、實はよさうかと思つてるんです」

「だつて球が磨けないと博士にはなれんぜ」と主人は少しく眉をひそめたが、本人は存外氣樂で、

「博士ですか、エヘヽヽヽ。博士ならもうならなくつてもいゝんです」

「でも結婚が延びて、雙方困るだらう」

「結婚つて誰の結婚です」

「君のさ」

「私が誰と結婚するんです」

「金田の令孃さ」

「へえゝ」
「へえつて、あれ程約束があるぢやないか」
「約束なんかありやしません。そんな事を言ひ觸らすなあ、向うの勝手です」
「こいつは少し亂暴だ。ねえ迷亭、君もあの一件を知つてるだらう」
「あの一件た、鼻事件かい。あの事件なら、君と僕が知つてる計りぢやない、公然の祕密として天下一般に知れ渡つてる。現に萬朝なぞでは花聟花嫁と云ふ表題で兩君の寫眞を紙上に揭ぐるの榮はいつだらう、いつだらうつて、うるさく僕の所へ聞きにくる位だ。東風君抔は既に鴛鴦歌と云ふ一大長篇を作つて、三箇月前から待つてるんだが、寒月君が博士にならない計りで、折角の傑作も寶の持ち腐れになりさうで心配でたまらないさうだ。ねえ、東風君さうだらう」
「まだ心配する程持ちあつかつては居ませんが、とに角滿腹の同情をこめた作を公にする積りです」
「それ見給へ、君が博士になるかならないかで、四方八方へ飛んだ影響が及んでくるよ。少ししつかりして、球を磨いてくれ玉へ」
「へゝゝ、色々御心配をかけて濟みませんが、もう博士にならないでもいゝのです」
「なぜ」
「なぜつて、私にはもう歷然とした女房があるんです」
「いや、こりやえらい。いつの間に祕密結婚をやつたのかね。油斷のならない世の中だ。苦沙彌さん、只今御聞き及びの通り寒月君は既に妻子があるんだとさ」

「子供はまだですよ。さう結婚して一と月もたゝないうちに子供が生れちや事であ」

「元來いつ、どこで結婚したんだ」と主人は豫審判事見た樣な質問をかける。

「いつつて、國へ歸つたら、ちやんと、うちで待つてたのです。今日先生の所へ持つて來た、此鰹節は結婚祝ひに親類から貰つたんです」

「たつた三本祝ふのはけちだな」

「なに澤山のうちを三本丈持つて來たのです」

「ぢや御國の女だね、矢つ張り色が黑いんだね」

「えゝ、眞黑です、丁度私には相當です」

「それで金田の方はどうする氣だい」

「どうする氣でもありません」

「そりや少し義理がわるいだらう。ねえ迷亭」

「わるくもないさ。ほかへ遣りや同じ事だ。どうせ夫婦なんてものは闇の中で鉢合せをする樣なものだ。要するに鉢合せをしないでも濟む所をわざ〳〵鉢合せるんだから餘計な事さ。既に餘計な事なら誰と誰の鉢が合つたつて構ひつこないよ。只氣の毒なのは鴛鴦歌を作つた東風君位なものさ」

「なに鴛鴦歌は都合によつて、こちらへ向け易へてもよろしう御座います。金田家の結婚式には又別に作りますから」

「さすが詩人丈あつて自由自在なものだね」

「金田の方へ斷つたかい」と主人はまだ金田を氣にして居る。
「いゝえ、斷る譯がありません。私の方でくれとも、貰ひたいとも、先方へ申し込んだ事はありませんから、默つて居れば澤山です。――なあに默つてても澤山ですよ。今時分は探偵が十人も二十人もかゝつて一部始終殘らず知れて居ますよ」
探偵と云ふ言語を聞いた主人は、急に苦い顏をして、
「ふん、そんなら默つて居ろ」と申し渡したが、それでも飽き足らなかつたと見えて、猶探偵に就いて下の樣な事をさも大議論の樣に述べられた。
「不用意の際に人の懷中を拔くのがスリで、不用意の際に人の胸中を釣るのが探偵だ。知らぬ間に雨戸をはづして人の所有品を偸むのが泥棒で、知らぬ間に口を滑らして人の心を讀むのが探偵だ。ダンビラを疊の上へ刺して無理に人の金錢を着服するのが強盜で、おどし文句をいやに並べて人の意志を強ふるのが探偵だ。だから探偵と云ふ奴はスリ、泥棒、強盜の一族で到底人の風上に置けるものではない。そんな奴の云ふ事を聞くと癖になる。決して負けるな」
「なに大丈夫です、探偵の千人や二千人、風上に隊伍を整へて襲擊したつて怖くはありません。球磨りの名人理學士水島寒月でさあ」
「ヒヤ〳〵見上げたものだ。さすが新婚學士程あつて元氣旺盛なものだね。然し苦沙彌さん。探偵がスリ、泥棒、強盜の同類なら、其探偵を使ふ金田君の如きものは何の同類だらう」
「熊坂長範位なものだらう」

「熊坂はよかつたね。一つと見えたる長範が二つになつてぞ失せにけりと云ふが、あんな烏金で身代をつくつた向う横丁の長範なんかは業つく張りの、慾張り屋だから、いくつになつても失せる氣遣ひはないぜ。あんな奴につかまつたら因果だよ。生涯たゝるよ。寒月君用心し給へ」

「なあに、いゝですよ。あゝら物々し盜人よ。手並はさきにも知りつらん。それにも懲りず打ち入るかつて、ひどい目に合はせてやりまさあ」と寒月君は自若として寶生流に氣燄を吐いて見せる。

「探偵と云へば二十世紀の人間は大抵探偵の樣になる傾向があるがどう云ふ譯だらう」と獨仙君は獨仙君丈に時局問題には關係のない超然たる質問を呈出した。

「物價が高いせゐでせう」と寒月君が答へる。

「藝術趣味を解しないからでせう」と東風君が答へる。

「人間に文明の角が生えて、金米糖の樣にいら／＼するからさ」と迷亭が答へる。

今度は主人の番である。主人は勿體振つた口調で、こんな議論を始めた。

「夫は僕が大分考へた事だ。僕の解釋によると當世人の探偵的傾向は全く個人の自覺心の強過ぎるのが原因になつて居る。僕の自覺心と名づけるのは獨仙君の方で云ふ、見性成佛とか、自己は天地と同一體だとか云ふ悟道の類ではない。……」

「おや大分六づかしくなつて來た樣だ。苦沙彌君、君にしてそんな大議論を舌頭に弄する以上はかく申す迷亭も憚りながら御あとで現代の文明に對する不平を堂々と云ふよ」

「勝手に云ふがいゝ、云ふ事もない癖に」

「所がある。大いにある。君なぞは先達ては刑事巡査を神の如く敬ひ、又今日は探偵をスリ泥棒に比し、丸で矛盾の變怪だが、僕などは終始一貫父母未生以前から只今に至る迄、かつて自説を變じた事のない男だ」

「刑事は刑事だ。探偵は探偵だ。先達ては先達てで今日は今日だ。自説が變らないのは發達しない證據だ。下愚は移らずと云ふのは君の事だ……」

「是はきびしい。探偵もさうまともにくると可愛い所がある」

「おれが探偵？」

「探偵でないから、正直でいゝと云ふのだよ。喧嘩はおやめおやめ。さあ、其大議論のあとを拜聽しよう」

「今の人の自覺心と云ふのは自己と他人の間に截然たる利害の鴻溝があると云ふ事を知り過ぎて居ると云ふ事だ。さうして此の自覺心なるものは文明が進むに從つて一日々々と鋭敏になつて行くから、仕舞ひには一擧手一投足も自然天然とは出來ない樣になる。ヘンレーと云ふ人がスチーヴンソンを評して、彼は鏡のかゝつた部屋に入つて、鏡の前を通る毎に自己の影を寫して見なければ氣が濟まぬ程瞬時も自己を忘るゝ事の出來ない人だと評したのは、よく今日の趨勢を言ひあらはして居る。寐てもおれ、覺めてもおれ、此おれが至る所につけまつはつて居るから、人間の行爲言動が人工的にコセつく計り、自分で窮屈になる計り、世の中が苦しくなる計り、丁度見合をする若い男女の心持ちで朝から晩迄くらさなければならない。悠々とか從容とか云ふ字は劃があつて意味のない言葉になつてしまふ。此點に於て今代の人は探偵的であ

る。泥棒的である。探偵は人の目を掠めて自分丈うまい事をしようと云ふ商賣だから、勢ひ自覺心が強くならなくては出來ん。泥棒も捕まるか、見附かるかと云ふ心配が念頭を離れる事がないから、勢ひ自覺心が強くならざるを得ない。今の人はどうしたら己の利になるか、損になるかと寐ても覺めても考へつゞけだから、勢ひ探偵泥棒と同じく自覺心が強くならざるを得ない。二六時中キョト／＼、コソ／＼して墓に入る迄一刻の安心も得ないのは今の人の心だ。文明の咒咀だ。馬鹿々々しい」

「成程面白い解釋だ」と獨仙君が云ひ出した。こんな問題になると獨仙君は中々引つ込んで居ない男である。「苦沙彌君の説明はよく我意を得て居る。昔しの人は己を忘れろと敎へたものだ。今の人は己を忘れるなと敎へるから丸で違ふ。二六時中己と云ふ意識を以て充滿して居る。それだから二六時中太平の時はない。いつでも焦熱地獄だ。天下に何が藥だと云つて己を忘れるより藥な事はない。三更月下入無我とは此至境を咏じたものさ。今の人は親切をしても自然をかいて居る。英吉利のナイス抔と自慢する行爲も存外自覺心が張り切れさうになつて居る。英國の天子が印度へ遊びに行つて、印度の王族と食卓を共にした時に、其王族が天子の前とも心づかずに、つい自國の我流を出して馬鈴薯を手攫みで皿へとつて、あとから眞赤になつて愧ぢ入つたら、天子は知らん顏をして矢張り二本指で馬鈴薯を皿へとつたさうだ……」

「それが英吉利趣味ですか」是は寒月君の質問であつた。

「僕はこんな話を聞いた」と主人が後をつける。「矢張り英國のある兵營で聯隊の士官が大勢して一人の下士官を御馳走した事がある。御馳走が濟んで手を洗ふ水を硝子鉢へ入れて出したら、此下士官は宴會になれんと見えて、硝子鉢を口へあてて中の水をぐうと飲んでしまつた。すると聯隊長が突然下士官の健

康を祝すと云ひながら、矢張りフィンガー・ボールの水を一息に飲み干したさうだ。そこで並み居る士官も我劣らじと水盃を擧げて下士官の健康を祝したと云ふぜ」

「こんな噺もあるよ」とだまつてる事の嫌ひな迷亭君が云つた。「カーライルが始めて女皇に謁した時、宮廷の禮に嫻はぬ變物の事だから、先生突然どうですと云ひながら、どさりと椅子へ腰を卸した。所が女皇の後に立つて居た大勢の侍從や官女がみんなくすくす笑ひ出した——出したのではない、出さうとしたのさ。すると女皇が後を向いて、一寸何か相圖をしたら、多勢の侍從官女がいつの間にかみんな椅子へ腰をかけて、カーライルは面目を失はなかつたと云ふんだが、隨分御念の入つた親切もあつたもんだ」

「カーライルの事なら、みんなが立つてても平氣だつたかも知れませんよ」と寒月君が短評を試みた。

「親切の方の自覺心はまあいゝがね」と獨仙君は進行する。「自覺心がある丈親切をするにも骨が折れる譯になる。氣の毒な事さ。文明が進むに從つて殺伐の氣がなくなる、個人と個人の交際がおだやかになる抔と普通云ふが大間違ひさ。こんなに自覺心が強くつて、どうしておだやかになれるものか。成程一寸見ると極しづかで無事な樣だが、御互の間は非常に苦しいのさ。丁度相撲が土俵の眞中で四つに組んで動かない樣なものだらう。傍から見ると平穩至極だが、當人の腹は波を打つて居るぢやないか」

「喧嘩も昔の喧嘩は暴力で壓迫するのだから却て罪はなかつたが、近頃ぢや中々巧妙になつてるから猶猶自覺心が增してくるんだね」と番が迷亭先生の頭の上に廻つて來る。「ベーコンの言葉に自然の力に從つて始めて自然に勝つとあるが、今の喧嘩は正にベーコンの格言通りに出來上がつてるから不思議だ。丁度柔術の樣なものさ。敵の力を利用して敵を斃す事を考へる……」

「又は水力電氣の樣なものですね。水の力に逆らはないで却て之を電力に變化して立派に役に立たせる……」と寒月君が言ひかけると、獨仙君がすぐそのあとを引き取つた。

「だから貧時には貧に縛せられ、富時には富に縛せられ、憂時には憂に縛せられ、喜時には喜に縛せられるのさ。才人は才に斃れ、智者は智に敗れ、苦沙彌君の樣な癇癪持ちは癇癪を利用さへすればすぐに飛び出して敵のぺてんに罹る……」

「ひや／＼」と迷亭君が手をたゝくと、苦沙彌先生はにや／＼笑ひながら「是で中々さう甘くは行かないのだよ」と答へたら、みんな一度に笑ひ出した。

「時に金田の樣なのは何で斃れるだらう」

「女房は鼻で斃れ、主人は因業で斃れ、子分は探偵で斃れか」

「娘は？」

「娘は——娘は見た事がないから何とも云へないが——まづ着倒れか、食ひ倒れ、若しくは呑んだくれの類だらう。よもや戀ひ倒れにはなるまい。ことによると卒塔婆小町の樣に行き倒れになるかも知れない」

「それは少しひどい」と新體詩を捧げた丈に東風君が異議を申し立てた。

「だから應無所住而生其心と云ふのは大事な言葉だ、さう云ふ境界に至らんと人間は苦しくてならん」と獨仙君しきりに獨り悟つた樣な事を云ふ。

「さう威張るもんぢやないよ。君などはことによると電光影裏にさか倒れをやるかも知れないぜ」

「とにかく此勢で文明が進んで行つた日にや僕は生きてるのはいやだ」と主人がいひ出した。

「遠慮は入らないから死ぬさ」と迷亭が言下に道破する。
「死ぬのは猶いやだ」と主人がわからん強情を張る。
「生れる時には誰も熟考して生れるものは有りませんが、死ぬ時には誰も苦にすると見えますね」と寒月君がよそ〳〵しい格言をのべる。
「金を借りるときには何の氣なしに借りるが、返す時にはみんな心配するのと同じ事さ」とこんな時にすぐ返事の出來るのは迷亭君である。
「借りた金を返す事を考へないものは幸福である如く、死ぬ事を苦にせんものは幸福さ」と獨仙君は超然として出世間的である。
「君の樣に云ふとつまり圖太いのが悟つたのだね」
「さうさ、禪語に鐵牛面の鐵牛心、牛鐵面の牛鐵心と云ふのがある」
「さうして君は其標本と云ふ譯かね」
「さうでもない。然し死ぬのを苦にする樣になつたのは神經衰弱と云ふ病氣が發明されてから以後の事だよ」
「成程君などは、どこから見ても神經衰弱以前の民だよ」
迷亭と獨仙が妙な掛合をのべつにやつて居ると、主人は寒月東風二君を相手にしてしきりに文明の不平を述べて居る。
「どうして借りた金を返さずに濟ますかが問題である」

「そんな問題はありませんよ。借りたものは返さなくちやなりませんよ」
「まあさ。議論だから、だまつて聞くがいゝ。どうして借りた金を返さずに濟ますかが問題である如く、どうしたら死なずに濟むかが問題である。否問題であつた。錬金術は是である。凡ての錬金術は失敗した。人間はどうしても死なゝければならん事が分明になつた」
「錬金術以前から分明ですよ」
「まあさ、議論だから、だまつて聞いて居ろ。いゝかい。どうしても死なゝければならん事が分明になつた時に第二の問題が起る」
「へえ」
「どうせ死ぬなら、どうして死んだらよからう。是が第二の問題である。自殺クラブは此の第二の問題と共に起るべき運命を有して居る」
「成程」
「死ぬ事は苦しい、然し死ぬ事が出來なければ猶苦しい。神經衰弱の國民には生きて居る事が死よりも甚しき苦痛である。從つて死を苦にする。死ぬのが厭だから苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よからうと心配するのである。只大抵のものは智慧が足りないから自然の儘に放擲して置くうちに、世間がいぢめ殺してくれる。然し一癖あるものは世間からなし崩しにいぢめ殺されて滿足するものではない。必ずや死に方に就いて種々考究の結果、嶄新な名案を呈出するに違ひない。だからして世界向後の趨勢は自殺者が増加して、其自殺者が皆獨創的な方法を以て此世を去るに違ひない」

「大分物騷な事になりますね」

「なるよ。慥かになるよ。アーサー・ジョーンスと云ふ人のかいた脚本のなかにしきりに自殺を主張する哲學者があつて……」

「自殺するんですか」

「所が惜しい事にしないのだがね。然し今から千年も立てばみんな實行するに相違ないよ。萬年の後には死と云へば自殺より外に存在しないものの樣に考へられる樣になる」

「大變な事になりますね」

「なるよ、屹度なる。さうなると自殺も大分研究が積んで立派な科學になつて、落雲館の樣な中學校で倫理の代りに自殺學を正科として授ける樣になる」

「妙ですな、傍聽に出たい位のものですね。迷亭先生、御聞きになりましたか。苦沙彌先生の御名論を」

「聞いたよ。其時分になると落雲館の倫理の先生はかう云ふね。諸君公德杯と云ふ野蠻の遺風を墨守してはなりません。世界の青年として諸君が第一に注意すべき義務は自殺である。しかして己の好む所は之を人に施して可なる譯だから、自殺を一歩展開して他殺にしてもよろしい。ことに表の窮措大珍野苦沙彌氏の如きものは生きて御座るのが大分苦痛の樣に見受けらるゝから、一刻も早く殺して進ぜるのが諸君の義務である。尤も昔と違つて今日は開明の時節であるから槍、薙刀もしくは飛道具の類を用ひる樣な卑怯な振舞をしてはなりません。只あてこすりの高尚なる技術によつて、からかひ殺すのが本人の爲功德にもなり、又諸君の名譽にもなるのであります。……」

「成程面白い講義をしますね」

「まだ面白い事があるよ。現代では警察が人民の生命財産を保護するのを第一の目的として居る、所が其時分になると巡査が犬殺しの樣な棍棒を以て天下の公民を撲殺してあるく。……」

「なぜです」

「なぜつて今の人間は生命が大事だから警察で保護するんだが、其時分の國民は生きてるのが苦痛だから、巡査が慈悲の爲に打ち殺して呉れるのさ。尤も少し氣の利いたものは大槪自殺して仕舞ふから、巡査に打ち殺される樣な奴はよく／＼の意氣地なしか、自殺の能力のない白痴もしくは不具者に限るのさ。夫で殺されたい人間は門口へ張札をして置くのだね。なに只、殺されたい男ありとか女ありとか、はりつけて置けば巡査が都合のいゝ時に巡つてきて、すぐ志望通り取り計らつてくれるのさ。死骸かね。死骸はやつぱり巡査が車を引いて拾つてあるくのさ。まだ面白い事が出來てくる。……」

「どうも先生の冗談は際限がありませんね」と東風君は大いに感心して居る。すると獨仙君は例の通り山羊髯を氣にしながら、のそ／＼辯じ出した。

「冗談と云へば冗談だが、豫言と云へば豫言かも知れない。眞理に徹底しないものは、とかく眼前の現象世界に束縛せられて泡沫の夢幻を永久の事實と認定したがるものだから、少し飛び離れた事を云ふと、すぐ冗談にしてしまふ」

「燕雀焉ぞ大鵬の志を知らんやですね」と寒月君が恐れ入ると、獨仙君は左樣さと云はぬ許りの顏附で話しを進める。

「昔スペインにコルドヴと云ふ所があつた……」
「今でもありやしないか」
「あるかも知れない。今昔の問題はとにかく、そこの風習として日暮の鐘が御寺で鳴ると、家々の女が悉く出て來て河へ這入つて水泳をやる……」
「冬もやるんですか」
「其邊はたしかに知らんが、とにかく貴賤老若の別なく河へ飛び込む。但し男子は一人も交らない。只遠くから見て居る。遠くから見て居ると暮色蒼然たる波の上に、白い肌が糢糊として動いて居る……」
「詩的ですね。新體詩になりますね。なんと云ふ所ですか」と東風君は裸體が出さへすれば前へ乘り出してくる。
「コルドヴさ。そこで地方の若いものが、女と一所に泳ぐ事も出來ず、さればと云つて遠くから判然其姿を見る事も許されないのを殘念に思つて、一寸いたづらをした……」
「へえ、どんな趣向だい」といたづらと聞いた迷亭君は大いに嬉しがる。
「御寺の鐘つき番に賄賂を使つて、日沒を合圖に撞く鐘を一時間前に鳴らした。すると女抔は淺墓なものだから、そら鐘が鳴つたと云ふので、めいく河岸へあつまつて半襦袢、半股引の服裝でざぶりくと水の中へ飛び込んだ。飛び込みはしたものゝ、いつもと違つて日が暮れない」
「烈しい秋の日がかんくしやしないか」
「橋の上を見ると男が大勢立つて眺めて居る。恥づかしいがどうする事も出來ない。大いに赤面したさ

うだ」

「それで」

「それでさ、人間は只眼前の習慣に迷はされて、根本の原理を忘れるものだから氣をつけないと駄目だと云ふ事さ」

「成程難有い御說教だ。眼前の習慣に迷はされの御話を僕も一つやらうか。此間ある雜誌をよんだら、かう云ふ詐欺師の小說があつた。僕がまあこゝで書畫骨董店を開くとする。で店頭に大家の幅や、名人の道具類を並べて置く。無論贋物ぢやない、正直正銘、うそいつはりのない上等品計り並べて置く。上等品だからみんな高價に極まつてる。そこへ物數奇な御客さんが來て、此の元信の幅はいくらだねと聞く。六百圓なら六百圓と僕が云ふと、其客が欲しい事はほしいが、六百圓では手元に持ち合せがないから、殘念だがまあ見合せよう」

「さう云ふと極まつてるかい」と主人は相變らず芝居氣のない事を云ふ。迷亭君はぬからぬ顏で、

「まあさ、小說だよ。云ふとして置くんだ。そこで僕が、なに代は構ひませんから、御氣に入つたら持つて入らつしやいと云ふ。客はさうも行かないからと躊躇する。それぢや月賦でいたゞきませう、月賦も細く、長く、どうせ是から御贔屓になるんですから——いえ、ちつとも御遠慮には及びません、どうです月に十圓位ぢや。何なら月に五圓でも構ひませんと僕が極きさくに云ふんだ。夫から僕と客の間に二三の問答があつて、とゞ僕が狩野法眼元信の幅を六百圓但し月賦十圓拂込の事で賣渡す」

「タイムスの百科全書見た樣ですね」

「タイムスは慥かだが、僕のは頗る不慥かだよ。是からが愈〻巧妙なる詐僞に取りかゝるのだぜ。よく聞き給へ、月十圓宛で六百圓なら何年で皆濟になると思ふ、寒月君」

「無論五年でせう」

「無論五年。で五年の歳月は長いと思ふか短かいと思ふか、獨仙君」

「一念萬年、萬年一念。短かくもあり、短かくもなしだ」

「何だそりや道歌か、常識のない道歌だね。そこで五年の間毎月十圓宛拂ふのだから、つまり先方では六十回拂へばいゝのだ。然しそこが習慣の恐ろしい所で、六十回も同じ事を毎月繰り返して居ると、六十一回にも矢張り十圓拂ふ氣になる。六十二回にも十圓拂ふ氣になる。六十二回六十三回、回を重ねるに從つてどうしても期日がくれば十圓拂はなくては氣が濟まない樣になる。人間は利口の樣だが、習慣に迷つて、根本を忘れると云ふ大弱點がある。其弱點に乘じて僕が何度でも十圓宛毎月得をするのさ」

「ハヽヽ、まさか、夫程忘れつぽくもならないでせう」と寒月君が笑ふと、主人は聊か眞面目で、

「いやさう云ふ事は全くあるよ。僕は大學の貸費を毎月々々勘定せずに返して、仕舞ひに向うから斷られた事がある」と自分の恥を人間一般の恥の樣に公言した。

「そら、さう云ふ人が現にこゝに居るから慥かなものだ。だから僕の先刻述べた文明の未來記を聞いて冗談だ抔と笑ふものは、六十回でいゝ月賦を生涯拂つて正當だと考へる連中だ。ことに寒月君や、東風君の樣な經驗の乏しい靑年諸君は、よく僕等の云ふ事を聞いて、だまされない樣にしなくつちやいけない」

「かしこまりました。月賦は必ず六十回限りの事に致します」

「いや冗談の樣だが、實際參考になる話ですよ、寒月君」と獨仙君は寒月君に向ひだした。「たとへばですね。今苦沙彌君か迷亭君が、君が無斷で結婚をしたのが穩當でないから、金田とか云ふ人に謝罪しろと忠告したら君どうです。謝罪する了見ですか」

「謝罪は御容赦にあづかりたいですね。向うがあやまるなら特別、私の方ではそんな慾はありません」

「警察が君にあやまれと命じたらどうです」

「猶々御免蒙ります」

「大臣とか華族ならどうです」

「愈以て御免蒙ります」

「それ見玉へ。昔と今とは人間が夫丈變つてる。昔は御上の御威光なら何でも出來た時代です。其次には御上の御威光でも出來ないものが出來てくる時代です。今の世はいかに殿下でも閣下でも、ある程度以上に個人の人格の上にのしかゝる事が出來ない世の中です。はげしく云へば先方に權力があればある程、のしかゝられるものの方では不愉快を感じて反抗する世の中です。だから今の世は昔と違つて、御上の御威光だから出來ないのだと云ふ新現象のあらはれる時代です、昔のものから考へると、殆ど考へられない位な事柄が道理で通る世の中です。世態人情の變遷と云ふものは實に不思議なもので、迷亭君の未來記も冗談だと云へば冗談に過ぎないのだが、其邊の消息を説明したものとすれば、中々味があるぢやないですか」

「さう云ふ知己が出てくると是非未來記の續きが述べたくなるね。獨仙君の御説の如く今の世に御上の

御威光を笠にきたり、竹槍の二三百本を恃みにして無理を押し通さうとするのは、丁度駕籠へ乗つて何でも蚊でも汽車と競爭しようとあせる、時代後れの頑物――まあわからずやの張本、烏金の長範先生位のものだから、默つて御手際を拜見して居ればいゝが、僕の未來記はそんな當座間に合せの小問題ぢやない。人間全體の運命に關する社會的現象だからね。つらつら目下文明の傾向を達觀して、遠き將來の趨勢を卜すると結婚が不可能の事になる。驚くなかれ、結婚の不可能。譯はかうさ。前申す通り今の世は個性中心の世である。一家を主人が代表し、一郡を代官が代表し、一國を領主が代表した時分には、代表者以外の人間には人格はまるでなかつた。あつても認められなかつた。其がからりと變ると、あらゆる生存者が悉く個性を主張し出して、だれを見ても君は君、僕は僕だよと云はぬ許りの風をする樣になる。ふたりの人が途中で逢へば、うぬが人間なら、おれも人間だぞと心の中で喧嘩を買ひながら行き違ふ。それ丈個人が強くなつた。個人が平等に強くなつたから、個人が平等に弱くなつた譯になる。人がおのれを害する事が出來にくくなつた點に於て、慥かに自分は強くなつたのだが、滅多に人の身の上に手出しがならなくなつた點に於ては、明らかに昔より弱くなつたんだらう。強くなるのは嬉しいが、弱くなるのは誰も難有くないから、人から一毫も犯されまいと、強い點をあく迄も固守すると同時に、せめて半毛でも人を侵してやらうと、弱い所は無理にも擴げたくなる。かうなると人と人の間に空間がなくなつて、生きてるのが窮屈になる。出來る丈自分を張りつめて、はち切れる許りにふくれ返つて苦しがつて生存して居る。苦しいから色々の方法で個人と個人との間に餘裕を求める。かくの如く人間が自業自得で苦しんで、其苦し紛れに案出した第一の方案は親子別居の制さ。日本でも山の中へ這入つて見給へ。一家一門悉く一軒のうちにご

ろごろして居る。主張すべき個性もなく、あつても主張しないから、あれで濟むのだが文明の民はたとひ親子の間でも御互に我儘を張れる丈張らなければ損になるから勢ひ兩者の安全を保持する爲には別居しなければならない。歐洲は文明が進んでゐるから日本より早く此制度が行はれて居る。たま／＼親子同居するものがあつても、息子がおやぢから利息のつく金を借りたり、他人の樣に下宿料を拂つたりする。親が息子の個性を認めて之に尊敬を拂へばこそ、こんな美風が成立するのだ。此風は早晩日本へも是非輸入しなければならん。親類はとくに離れ、親子は今日に離れて、やつと我慢してゐる樣なものゝ、個性の發展と、發展につれて此に對する尊敬の念は無制限にのびて行くから、まだ離れなくては樂が出來ない。然し親子兄弟の離れたる今日、もう離れるものはない譯だから、最後の方案として夫婦が分かれる事になる。今の人の考へでは一所に居るから夫婦だと思つてる。夫が大きな了見違ひさ。一所に居る爲には一所に居るに充分なる丈個性が合はなければならないだらう。昔なら文句はないさ。異體同心とか云つて、目には夫婦二人に見えるが、內實は一人前なんだからね。夫だから偕老同穴とか號して、死んでも一つ穴の狸に化ける。野蠻なものさ。今はさうは行かないやね。夫は飽く迄も夫で妻はどうしたつて妻だからね。其妻が女學校で行燈袴を穿いて牢乎たる個性を鍛へ上げて、束髮姿で乘り込んでくるんだから、とても夫の思ふ通りになる譯がない。又夫の思ひ通りになる樣な妻なら妻ぢやない、人形だからね。賢夫人になればなる程個性は凄い程發達する。發達すればする程夫と合はなくなる。合はなければ自然の勢ひ夫と衝突する。だから賢妻と名がつく以上は朝から晩迄夫と衝突して居る。まことに結構な事だが、賢妻を迎へれば迎へる程雙方共苦しみの程度が增してくる。水と油の樣に夫婦の間には截然たるしきりがあつて、それも落ちつ

いて、しきりが水平線を保つて居ればまだしもだが、水と油が雙方から働きかけるのだから家のなかは大地震の樣に上がつたり下がつたりする。是に於て夫婦雜居は御互の損だと云ふ事が次第に人間に分つてくる……」

「それで夫婦がわかれるんですか、心配だな」と寒月君が云つた。

「わかれる。屹度わかれる。天下の夫婦はみんな分かれる。今迄は一所に居たのが夫婦であつたが、是からは同棲して居るものは夫婦の資格がない樣に世間から目されてくる」

「すると私なぞは資格のない組へ編入される譯ですね」と寒月君は際どい所でのろけを云つた。

「明治の御代に生れて幸ひさ。僕などは未來記を作る丈あつて、頭腦が時勢より一二歩づゝ前へ出て居るからちやんと今から獨身で居るんだよ。人は失戀の結果だ抔と騷ぐが、近眼者の視る所は實に憐れな程淺薄なものだ。それはとにかく、未來記の續きを話すとかうさ。其時一人の哲學者が天降つて破天荒の眞理を唱道する。其說に曰くさ。人間は個性の動物である。個性を滅すれば人間を滅すると同結果に陷る。苟も人間の意義を完からしめん爲には、如何なる價を拂ふとも構はないから此個性を保持すると同時に發達せしめなければならん。かの陋習に縛せられて、いや〳〵ながら結婚を執行するのは人間自然の傾向に反した蠻風であつて、個性の發達せざる蒙昧の時代はいざ知らず、文明の今日猶此弊竇に陷つて恬として顧ないのは甚しき謬見である。開化の高潮度に達せる今代に於て二個の個性が普通以上に親密の程度を以て連結され得べき理由のあるべき筈がない。此の覩易き理由あるにも關はらず無教育の青年男女が一時の劣情に驅られて、漫りに合卺の式を擧ぐるは悖德沒倫の甚しき所爲である。吾人は人道の爲、文明の爲

彼等青年男女の個性保護の爲、全力を擧げて此俗風に抵抗せざる可からず……」

「先生私は其說には全然反對です」と東風君は此時思ひ切つた調子でぴたりと平手で膝頭を叩いた。「私の考へでは世の中に何が貴いと云つて愛と美程尊いものはないと思ひます。吾々を慰藉し、吾々を完全にし、吾々を幸福にするのは全く兩者の御蔭であります。吾人の情操を優美にし、品性を高潔にし、同情を洗錬するのは全く兩者の御蔭であります。だから吾人はいつの世いづくに生れても此の二つのものを忘れることが出來ないです。此の二つの者が現實世界にあらはれると、愛は夫婦と云ふ關係になります、美は詩歌、音樂の形式に分かれます。夫だから苟も人類の地球の表面に存在する限りは夫婦と藝術は決して滅する事はなからうと思ひます」

「なければ結構だが、今哲學者が云つた通りちやんと滅して仕舞ふから仕方がないと、あきらめるさ。なに藝術だ？藝術だつて夫婦と同じ運命に歸着するのさ。個性の發展といふのは個性の自由と云ふ意味だらう。個性の自由と云ふ意味はおれはおれ、人は人と云ふ意味だらう。その藝術なんか存在出來る譯がないぢやないか。藝術が繁昌するのは藝術家と享受者の間に個性の一致があるからだらう。君がいくら新體詩家だつて踏ん張つても、君の詩を讀んで面白いと云ふものが一人もなくつちや、君の新體詩も御氣の毒だが君より外に讀み手はなくなる譯だらう。鴛鴦歌をいく篇作つたつて始まらないやね。幸ひに明治の今日に生れたから、天下が擧つて愛讀するのだらうが……」

「いえそれ程でもありません」

「今でさへそれ程でなければ、人文の發達した未來即ち例の一大哲學者が出て非結婚論を主張する時分

には誰もよみ手はなくなるぜ。いや君のだから讀まないのぢやない。人々個々、各々特別の個性をもつてるから、人の作つた詩文抔は一向面白くないのさ。現に今でも英國抔では此傾向がちやんとあらはれて居る。現今英國の小説家中で尤も個性のいちじるしく作品にあらはれた、メレヂスを見給へ、ジェームスを見給へ。讀み手は極めて少いぢやないか。少い譯さ。あんな作品はあんな個性のある人でなければ讀んで面白くないんだから仕方がない。此傾向が段々發達して婚姻が不道徳になる時分には藝術も完く滅亡さ。さうだらう、君のかいたものは僕にわからなくなる、僕のかいたものは君にわからなくなつた日にや、君と僕の間には藝術も糞もないぢやないか」

「そりやさうですけれども私はどうも直覺的にさう思はれないんです」

「君が直覺的にさう思はれなければ、僕は曲覺的にさう思ふ迄さ」

「曲覺的かも知れないが」と今度は獨仙君が口を出す。「とにかく人間に個性の自由を許せば許す程御互の間が窮屈になるに相違ないよ。ニーチェが超人なんか擔ぎ出すのも、全く此窮屈のやり所がなくなつて仕方なしにあんな哲學に變形したものだね。一寸見るとあれがあの男の理想の樣に見えるが、ありや理想ぢやない、不平さ。個性の發展した十九世紀にすんで、隣の人には心置きなく滅多に寢返りも打てないから、大將少しやけになつてあんな亂暴をかき散らしたのだね。あれを讀むと壯快と云ふより寧ろ氣の毒になる。あの聲は勇猛精進の聲ぢやない、どうしても怨恨痛憤の音だ。それも其筈さ。昔は一人えらい人があれば天下翕然として其旗下にあつまるのだから、愉快なものさ。こんな愉快が事實に出てくれば何もニーチェ見た樣に筆と紙の力で之を書物の上にあらはす必要がない。だからホーマーでもチェヴィ・チェー

ズでも同じく超人的な性格を寫しても感じが丸で違ふからね。陽氣ださ。愉快にかいてある。愉快な事實があつて、此の愉快な事實を紙に寫しかへたのだから、苦味はない筈だ。ニーチェの時代はさうは行かないよ。英雄なんか一人も出やしない。出たつて誰も英雄と立てやしない、昔は孔子がたつた一人だつたから、孔子も幅を利かしたのだが、今は孔子が幾人も居る。ことによると天下が悉く孔子かも知れない。だからおれは孔子だよと威張つても壓が利かない。利かないから不平だ。不平だから超人抔を書物の上丈で振り廻すのさ。吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果不自由を感じて困つて居る。夫だから西洋の文明抔は一寸いゝやうでもつまり駄目なものさ。之に反して東洋ぢや昔から心の修行をした。その方が正しいのさ。見給へ、個性發展の結果みんな神經衰弱を起こして、始末がつかなくなつた時、王者の民蕩々たりと云ふ句の價値を始めて發見するから。無爲にして化すと云ふ語の馬鹿に出來ない事を悟るから。然し悟つたつて其時はもう仕樣がない。アルコール中毒に罹つて、あゝ酒を飲まなければよかつたと考へる樣なものさ」

「先生方は大分厭世的な御說の樣だが、私は妙ですね。色々伺つても何とも感じません。どう云ふものでせう」と寒月君が云ふ。

「そりや細君を持ち立てだからさ」と迷亭君がすぐ解釋した。すると主人が突然こんな事を云ひ出した。

「妻を持つて、女はいゝものだ抔と思ふと飛んだ間違ひになる。參考の爲だから、おれが面白い物を讀んで聞かせる。よく聽くがいゝ」と最前書齋から持つて來た古い本を取り上げて「此本は古い本だが、此時代から女のわるい事は歷然と分つてる」と云ふと、寒月君が

「少し驚きましたな。元來いつ頃の本ですか」と聞く。
「ダンテ・ナッシと云つて十六世紀の著書だ」
「愈驚いた。其時分既に私の妻の悪口を云つたものがあるんですか」
「色々女の悪口があるが、其内には是非君の妻も這入る譯だから聞くがいゝ」
「そら聞きますよ。難有い事になりましたね」
「先づ古來の賢哲が女性觀を紹介すべしと書いてある。いゝかね。聞いてるかね」
「みんな聞いてるよ。獨身の僕迄聞いてるよ」
「アリストートル曰く、女はどうせ碌でなしなれば、嫁をとるなら、大きな嫁より小さな嫁をとるべし。大きな碌でなしより、小さな碌でなしの方が災少し……」
「寒月君の細君は大きいかい、小さいかい」
「大きな碌でなしの部ですよ」
「ハヽヽヽ、こりや面白い本だ。さあ、あとを讀んだ」
「或人問ふ、如何なるか是最大奇蹟。賢者答へて曰く、貞婦……」
「賢者つてだれですか」
「名前は書いてない」
「どうせ振られた賢者に相違ないね」
「次にはダイオジニスが出て居る。或人問ふ、妻を娶る何れの時に於てすべきか。ダイオジニス答へて

曰く、青年は未だし、老年は既に遅し。とある」

「先生矢張り甲で考へたね」

「ピタゴラス曰く、天下に三の恐るべきものあり、曰く火、曰く水、曰く女」

「古代の哲学者は存外迂闊な事を云ふものだね。僕に云はせると、天下に恐るべきものなし、火に入つて焼けず、水に入つて溺れず……」丈で獨仙君一寸行き詰まる。

「女に逢つてとろけずだらう」と迷亭先生が援兵に出る。主人はさつさとあとを読む。

「ソクラチスは婦女子を御するは人間の最大難事と云へり。デモスセニス曰く、人若し其敵を苦しめんとせば、わが女を敵に與ふるより策の得たるはあらず。家庭の風波に日となく夜となく彼を困憊起つ能はざるに至らしむるを得ればなりと。セネカは婦女と無學を以て世界に於ける二大厄とし、マーカス・オーレリアスは女子は制御し難き點に於て船舶に似たりと云ひ、プロータスは女子が綺羅を飾るの性癖を以て其天稟の醜を蔽ふの陋策に本づくものとせり。ヴレリアス曾て書を其友某におくつて告げて曰く、天下に何事も女子の忍んで爲し得ざるものあらず、願はくば皇天憐を垂れて、君をして彼等の術中に陥らしむるなかれと。彼又曰く、女子とは何ぞ、友愛の敵にあらずや、避くべからざる苦しみにあらずや、必然の害にあらずや、自然の誘惑にあらずや、蜜に似たる毒にあらずや。もし女子を棄つるが不徳ならば、彼等を棄てざるは一層の呵責と云はざる可からず。……」

「もう澤山です、先生。其位愚妻のわる口を拝聴すれば申し分はありません」

「まだ四五ページあるから、序に聞いたらどうだ」

「もう大抵にするがいゝ。もう奥方の御帰りの刻限だらう」と迷亭先生がからかひ掛けると、茶の間の方で
「清や、清や」と細君が下女を呼ぶ声がする。
「こいつは大変だ。奥方はちやんと居るぜ、君」
「ウフヽヽヽ」と主人は笑ひながら「構ふものか」と云つた。
「奥さん、奥さん。いつの間に御帰りですか」
茶の間ではしんとして答がない。
「奥さん、今のを聞いたんですか。え？」
答はまだない。
「今のはね、御主人の御考へではないですよ。十六世紀のナッシ君の説ですから御安心なさい」
「存じません」と細君は遠くで簡単な返事をした。寒月君はくす／＼と笑つた。
「私も存じませんで失礼しました。アハヽヽヽ」と迷亭君は遠慮なく笑つてると、門口をあらくしくあけて、頼むとも、御免とも云はず、大きな足音がしたと思つたら、座敷の唐紙が乱暴にあいて、多々良三平君の顔が其間からあらはれた。
三平君今日はいつに似ず、真白なシャツに卸し立てのフロックを着て、既に幾分か相場を狂はせてる上へ、右の手へ重さうに下げた四本の麦酒を縄ぐるみ、鰹節の傍へ置くと同時に挨拶もせず、どつかと腰を下ろして、且つ膝を崩したのは目覚ましい武者振りである。

「先生胃病は近來いゝですか。かうやつてうちに計り居なさるから、いかんたい」
「まだ惡いとも何ともいやしない」
「いはんばつてん顔色はよかなかごたる。先生顔色が黄ですばい、近頃は釣がいゝです。品川から舟を一艘雇うて――私は此前の日曜に行きました」
「何か釣れたかい」
「何も釣れません」
「釣れなくつても面白いのかい」
「浩然の氣を養ふたい、あなた。どうですあなたがた。釣に行つた事がありますか。面白いですよ釣は。大きな海の上を小舟で乘り廻してあるくのですからね」と誰彼の容赦なく話しかける。
「僕は小さな海の上を大船で乘り廻してあるきたいんだ」と迷亭君が相手になる。
「どうせ釣るなら、鯨か人魚でも釣らなくつちや、詰まらないです」と寒月君が答へた。
「そんなものが釣れますか。文學者は常識がないですね……」
「僕は文學者ぢやありません」
「さうですか、何ですかあなたは。私の樣なビジネス・マンになると常識が一番大切ですからね。先生私は近來よつぽど常識に富んで來ました。どうしてもあんな所に居ると、傍が傍だから、おのづから、さうなつて仕舞ふです」
「どうなつて仕舞ふのだ」

「煙草でもですね、『朝日』や『敷島』をふかして居ては幅が利かんです」と云ひながら、吸口に金箔のついた埃及煙草を出して、すぱ〳〵吸ひ出した。
「そんな贅澤をする金があるのかい」
「金はなかばつてんが、今にどうかなるたい。此煙草を吸つてると大變信用が違ひます」
「寒月君が球を磨くよりも樂な信用でいゝ、手數がかゝらない。輕便信用だね」と迷亭が寒月にいふと、寒月が何とも答へない間に、三平君は
「あなたが寒月さんですか。博士にや、とう〳〵ならんですか。あなたが博士にならんものだから、私が貰ふ事にしました」
「博士をですか」
「いゝえ、金田家の令孃をです。實は御氣の毒と思うたですたい。然し先方で是非貰うてくれ〳〵と云ふから、とう〳〵貰ふ事に極めました、先生。然し寒月さんに義理がわるいと思うて心配して居ます」
「どうか御遠慮なく」と寒月君が云ふと、主人は
「貰ひたければ貰つたら、いゝだらう」と曖昧な返事をする。
「そいつは御目出度い話だ。だからどんな娘を持つても心配するがものはないんだよ。だれか貰ふと、さつき僕が云つた通り、ちやんとこんな立派な紳士の御聟さんが出來たぢやないか。東風君新體詩の種が出來た。早速とりかゝり玉へ」と迷亭君が例の如く調子づくと三平君は
「あなたが東風君ですか、結婚の時に何か作つてくれませんか。すぐ活版にして方々へくばります。

「大隊」へも出してもらひます」
「ぢや何か作りませう、何時頃御入用ですか」
「いつでもいゝです。今迄作つたうちでもいゝです。其代りにです。披露のとき呼んで御馳走するです。シャンパンを飲ませるです。君シャンパンを飲んだ事がありますか。シャンパンは旨いです。――先生披露会のときに楽隊を呼ぶ積りですが、東風君の作を譜にして奏したらどうでせう」
「勝手にするがいゝ」
「先生譜にして下さらんか」
「馬鹿云へ」
「だれか、このうちに音楽の出来るものは居らんですか」
「落第の候補者寒月君はヴァイオリンの妙手だよ。しつかり頼んで見給へ。然しシャンパン位ぢや承知しさうもない男だ」
「シャンパンもですね。一瓶四円や五円のぢやよくないです。私の御馳走するのはそんな安いのぢやないのですが、君一つ譜を作つてくれませんか」
「えゝ作りますとも、一瓶二十銭のシャンパンでも作ります。なんなら只でも作ります」
「たゞは頼みません、御礼はするです。シャンパンがいやなら、かう云ふ御礼はどうです」と云ひながら上着の隠袋のなかから七八枚の写真を出してばら／＼と畳の上へ落とす。半身がある。全身がある。立つてるのがある。坐つてるのがある。袴を穿いてるがある。振り袖がある。高島田がある。悉く妙齢の女

予計りである。

「此外候補者が是丈あるです。寒月君と東風君に此うちどれか御意に周旋してもいゝです。こりやどうです」と一枚寒月君につき附ける。

「いゝですね。是非周旋を願ひませう」

「是でもいゝですか」と又一枚つきつける。

「それもいゝですね。是非周旋して下さい」

「どれをです」

「どれでもいゝです」

「是は中々多情ですね。先生、これは博士の姪です」

「さうか」

「此方は性質が極いゝです。年も若いです。是で十七です。――是なら持参金が千圓あります。――こつちのは知事の娘です」と一人で辯じ立てる。

「それをみんな貰ふ譯にやいかないでせうか」

「みんなですか、それはあまり欲張りだ。君は一夫多妻主義ですか」

「多妻主義ぢやないですが、肉食論者です」

「何でもいゝから、そんなものは早く仕舞つたらよからう」と主人は叱り附ける様に言ひ放つたので、三平君は

「それぢや、どれも貰はんですね」と念を押しながら、寫眞を一枚々々にポッケットへ收めた。
「何だい其ビールは」
「お見やげで御座ります。前祝ひに角の酒屋で買うて來ました。一つ飲んで下さい」
主人は手を拍つて下女を呼んで栓を拔かせる。主人、迷亭、獨仙、寒月、東風の五君は恭しくコップを捧げて、三平君の艶福を祝した。三平君は大いに愉快な樣子で、
「こゝに居る諸君を披露會に招待しますが、みんな出てくれますか、出てくれるでせうね」と云ふ。
「おれはいやだ」と主人はすぐ答へる。
「なぜですか、私の一生に一度の大禮ですばい。出てくんなさらんか。少し不人情のごたるな」
「不人情ぢやないが、おれは出ないよ」
「着物がないですか。羽織と袴位どうでもしますたい。ちと人中へも出るがよかたい先生。有名な人に紹介して上げます」
「眞平御免だ」
「胃病が癒りますばい」
「癒らんでも差し支へない」
「そげん頑固張りなさるなら已むを得ません。あなたはどうです、來てくれますか」
「僕かね、是非行くよ。出來るなら媒酌人たるの榮を得たい位のものだ。シャンパンの三々九度や春の宵。――なに仲人は鈴木の藤さんだつて？成程そこいらだらうと思つた。これは殘念だが仕方がない。仲

人が二人出來ても多過ぎるだらう、只の人間として正に出席するよ」
「あなたはどうです？」
「僕ですか、一竿風月閑生計。人釣白蘋紅蓼間」
「何ですかそれは、唐詩選ですか」
「何だかわからんです」
「わからんですか、困りますな。寒月君は出てくれるでせうね。今迄の關係もあるから」
「屹度出る事にします、僕の作つた曲を樂隊が奏するのを、きゝ落とすのは殘念ですからね」
「さうですとも。君はどうです東風君」
「さうですね。出て御兩人の前で新體詩を朗讀したいです」
「そりや愉快だ。先生私は生れてから、こんな愉快な事はないです。だからもう一杯ビールを飲みます」と自分で買つて來たビールを一人でぐい／＼飲んで眞赤になつた。

短かい秋の日は漸く暮れて、卷煙草の死骸が算を亂す火鉢のなかを見れば火はとくの昔に消えて居る。さすが呑氣の連中も少しく興が盡きたと見えて、「大分遲くなつた。もう歸らうか」と先づ獨仙君が立ち上がる。つゞいて「僕も歸る」と口々に玄關に出る。寄席がはねたあとの樣に座敷は淋しくなつた。

主人は夕飯を濟まして書齋に入る。細君は肌寒の襦袢の襟をかき合はせて、洗ひ晒しの不斷着を縫ふ。子供は枕を並べて寢る。下女は湯に行つた。

呑氣と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする。悟つた樣でも獨仙君の足は矢張

り地面の外は踏まぬ。氣樂かも知れないが迷亭君の世の中は繪にかいた世の中ではない。寒月君は珠磨りをやめてとう／＼御國から奥さんを連れて來た。是が順當だ。然し順當が永く續くと定めし退屈だらう。東風君も今十年したら、無暗に新體詩を捧げる事の非を悟るだらう。三平君に至つては水に住む人か、山に住む人かちと鑑定が六づかしい。生涯三鞭酒を御馳走して得意と思ふ事が出來れば結構だ。鈴木の藤さんはどこ迄も轉がつて行く。轉がれば泥がつく。泥がついても轉がれぬものよりも幅が利く。猫と生れて人の世に住む事もはや二年越しになる。自分では是程の見識家はまたとあるまいと思うて居たが、先達てカーテル・ムルと云ふ見ず知らずの同族が突然大氣燄を揚げたので、一寸吃驚した。よく／＼聞いて見たら、實は百年前に死んだのだが、不圖した好奇心からわざと幽靈になつて吾輩を驚かせる爲に、遠い冥土から出張したのださうだ。此猫は母と對面をするとき挨拶のしるしとして、一匹の肴を啣へて出掛けた所、途中でとう／＼我慢がし切れなくなつて、自分で食つて仕舞つたと云ふ程の不孝ものだけあつて、才氣も中々人間に負けぬ程で、ある時抔は詩を作つて主人を驚かした事もあるさうだ。こんな豪傑が既に一世紀も前に出現して居るなら、吾輩の樣な碌でなしはとうに御暇を頂戴して無何有郷に歸臥してもいゝ筈であつた。

主人は早晩胃病で死ぬ。金田のぢいさんは慾でもう死んで居る。秋の木の葉は大概落ち盡した。死ぬのが萬物の定業で、生きてゐてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬ丈が賢いかも知れない。諸先生の說に從へば人間の運命は自殺に歸するさうだ。油斷をすると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか氣がくさ／＼して來た。三平君のビールでも飲んでちと景氣を附けてやらう。

勝手へ廻る。秋風にがたつく戸が細目にあいてる間から吹き込んだと見えてランプはいつの間にか消えて居るが、月夜と思はれて窓から影がさす。コップが盆の上に三つ並んで、其二つに茶色の水が半分程たまつて居る。硝子の中のものは湯でも冷たい氣がする。まして夜寒の月影に照らされて靜かに火消壺とならんで居る此液體の事だから、脣をつけぬ先から既に寒くて飲みたくもない。然しものは試しだ。三平などはあれを飲んでから、眞赤になつて、熱苦しい息遣ひをした。猫だつて飲めば陽氣にならん事もあるまい。どうせいつ死ぬか知れぬ命だ。何でも命のあるうちにして置く事だ。死んでからあゝ殘念だと墓場の蔭から悔んでも追つ附かない。思ひ切つて飲んで見ろと、勢よく舌を入れてぴちや／＼やつて見ると驚いた。何だか舌の先を針でさゝれた樣にぴりゝとした。人間は何の醉興でこんな腐つたものを飲むのかわからないが、猫にはとても飲み切れない。どうしても猫とビールは性が合はない。是は大變だと一度は出した舌を引つ込めて見たが、又考へ直した。人間は口癖の樣に良藥口に苦しと言つて風邪抔をひくと、顔をしかめて變なものを飲む。飲むから癒るのか、癒るのに飲むのか、今迄疑問であつたが丁度いゝ幸だ。此問題をビールで解決してやらう。飲んで腹の中迄にがくなつたら夫迄の事、もし三平の樣に前後を忘れる程愉快になれば空前の儲け者で、近所の猫へ教へてやつてもいゝ。まあどうなるか、運を天に任せて、やつつけろと決心して再び舌を出した。眼をあいてゐると飲みにくいから、しつかり眠つて、又ぴちやぴちや始めた。

吾輩は我慢に我慢を重ねて、漸く一杯のビールを飲み干した時、妙な現象が起つた。始めは舌がぴりぴりして、口中が外部から壓迫される樣に苦しかつたのが、飲むに從つて漸く樂になつて、一杯目を片附け

る時分には別段骨も折れなくなつた。もう大丈夫と二杯目は難なく遣つ附けた。序に盆の上にこぼれたのも拭ふが如く腹内に收めた。

夫から暫らくの間は自分で自分の動靜を伺ふ爲、ぢつとすくんで居た。次第にからだが暖かになる。眼のふちがぼうつとする。耳がほてる。歌がうたひ度くなる。猫ぢや猫ぢやが踊り度くなる。主人も迷亭も獨仙もくそを食らへと云ふ氣になる。金田のぢいさんを引つ掻いてやりたくなる。細君の鼻を食ひ缺きたくなる。色々になる。最後にふら〳〵と立ちたくなる。起つたらよた〳〵あるき度くなる。こいつは面白いとそとへ出たくなる。出ると御月樣今晩はと挨拶したくなる。どうも愉快だ。

陶然とはこんな事を云ふのだらうと思ひながら、あてもなく、そこかしこと散歩する樣な、しない樣な心持ちでしまりのない足をいゝ加減に運ばせてゆくと、何だかしきりに眠い。寐てゐるのだか、あるいてるのだか判然しない。眼はあける積りだが重い事夥しい。かうなれば夫迄だ。海だらうが、山だらうが驚かないんだと、前足をぐにやりと前へ出したと思ふ途端ぼちやんと音がして、はつと云ふうち、――やられた。どうやられたのか考へる間がない。只やられたなと氣がつくか、つかないのにあとは滅茶苦茶になつて仕舞つた。

我に歸つたときは水の上に浮いてゐる。苦しいから爪でもつて矢鱈に掻いたが、掻けるものは水ばかりで、掻くとすぐもぐつて仕舞ふ。仕方がないから後足で飛び上がつておいて、前足で掻いたら、がりゝと音がして纔かに手應へがあつた。漸く頭丈浮くからどこだらうと見廻すと、吾輩は大きな甕の中に落ちて居る。此甕は夏迄水葵と稱する水草が茂つて居たが其後烏の勘公が來て葵を食ひ盡した上に行水を使ふ。

行水を使へば水が減る。減れば來なくなる。近來は大分減つて烏が見えないなど先刻思つたが、吾輩自身が烏の代りにこんな所で行水を使はう抔とは思ひも寄らなかつた。

水から緣迄は四寸餘もある。足をのばしても屆かない。飛び上がつても出られない。呑氣にして居れば沈むばかりだ。もがけばがり／＼と甕に爪があたるのみで、あたつた時は少し浮く氣味だが、すべれば忽ちぐうつともぐる。もぐれば苦しいから、すぐがり／＼をやる。其うちからだが疲れてくる。氣は焦るが、足は左程利かなくなる。遂にはもぐる爲に甕を搔くのか、搔く爲にもぐるのか、自分でも分りにくくなつた。

其時苦しいながら、かう考へた。こんな呵責に逢ふのはつまり甕から上へあがりたい計りの願である。あがりたいのは山々であるが上がれないのは知れ切つてゐる。吾輩の足は三寸に足らぬ。よし水の面にからだが浮いて、浮いた所から思ふ存分前足をのばしたつて、五寸にあまる甕の緣に爪のかゝり樣がない。甕のふちに爪のかゝり樣がなければ、いくら搔いても、あせつても、百年の間身を粉にしても出られつこない。出られないと分り切つてゐるものを出ようとするのは無理だ。無理を通さうとするから苦しいのだ。つまらない。自ら求めて苦しんで、自ら好んで拷問に罹つてゐるのは馬鹿氣てゐる。

「もうよさう。勝手にするがいゝ。がり／＼はこれ限り御免蒙るよ」と、前足も、後足も、頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に樂になつてくる。苦しいのだか難有いのだか見當がつかない。水の中に居るのだか、座敷の上に居るのだか、判然しない。どこにどうしてゐても差し支へはない。只樂である。否樂そのものすらも感じ

得ない。日月を切り落とし、天地を粉韲して不可思議の太平に入る。吾輩は死ぬ。死んで此太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。難有い難有い。

昭和三年三月五日印刷
昭和三年三月十五日發行

漱石全集第一卷

著作權者　夏目純一

編輯及發行　東京市神田區南神保町十六番地　漱石全集刊行會

右代表者　岩波茂雄

印刷者　東京市本所區番場町四番地　井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場